

新保遺跡 I

彌生・古墳時代大溝編

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第10集一

〈本文編〉

1986

群馬県教育委員会

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

新保遺跡I 正誤表 群馬県埋蔵文化財調査事業団

誤	正
本文編	
183頁 35行目 篠塚	篠東
184頁 4行目 篠塚	篠東
図版編 図版目次	
(ゴジック数字は遺跡番号)	(ゴジック数字は遺物番号)
図版200(左頁)	
753 → 正 755	755 → 正 753

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-320
	調査事業団保管	27-1
NO. 61-2010	昭和62年 2月 29日	(4)

新保遺跡Ⅰ

弥生・古墳時代大溝編

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第10集一

〈本文編〉

1986

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

昭和48年度に建設工事が始まり昭和58年10月に完成した関越自動車道は太平洋と日本海を結ぶ大動脈として建設されました。この大動脈の完成は列島の内陸部に位置する群馬県に大きな変化をもたらしました。まさに、群馬の新しい夜明けと申しても過言では有りませぬ。

工事にさきがけて実施された埋蔵文化財の調査によって貴重な遺跡地が数多く発見されました。それらの中には弥生時代の集落・水田跡として著名な登呂遺跡に匹敵する大発見である日高遺跡がもっとも顕著であります。本遺跡地は日高遺跡に隣接し、遺跡は榛名山麓より東南流する染谷川を生活基盤とした弥生時代のひとびとの生活の実態を物語っています。

遺跡地内には北東から南西へ貫流する埋没河川がありました。ここに木製品や土器・石器類が大量に発見されました。これらの遺物によっていままで明らかにされなかつた弥生時代の人々の生活状況がいろいろと明らかにされました。大量の木製農具の発見によって榛名山麓における草創期水稻耕作の実態が究明されつつあります。

厳寒から酷暑にさらされながら3年に及ぶ調査を続けた調査研究員を始めとする調査関係者の方々、並びに整理に当たられた職員・補助員及び事業遂行に多大なご尽力をいただきました日本道路公団東京第二建設局、文化財保護課の皆様へ感謝申し上げます。

終りに本報告書が広く県民各位に利用され原始古代社会の究明に役立つところが多少なりとも有りますれば幸甚であります。

昭和60年3月31日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

1. 本書は関越自動車道（新潟線）建設工事に伴い事前調査された新保遺跡の発掘調査報告書第1分冊である。本遺跡は縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中・近世、各時期にわたる複合遺跡であり、本書はこのうち弥生時代から古墳時代前期にかかる大溝（旧河道）及び、その出土遺物の発掘調査結果を掲載している。
2. 本遺跡は群馬県高崎市新保町、新保田中町に所在する。旧地名は、群馬郡新高尾村大字下新保字松之木、同村大字下新保字山神。
3. 事業主体 日本道路公団第二建設局
4. 調査主体 群馬県教育委員会
5. 整理主体 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査期間 昭和52年8月22日～昭和55年3月25日
7. 発掘調査担当者（あいうえお順）

石塚久則 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	巾 隆之 群馬県教育委員会
大江正行 同 上	平野進一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
小野和之 同 上	洞口正史 群馬県教育委員会
佐藤明人 同 上	真下高幸 同 上
8. 発掘調査嘱託員、調査員

荒川 弘 埼玉県妻沼町 教育委員会	黒沢はるみ (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
飯田陽一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	反町公己 高崎市日高町
大塚昌彦 渋川市教育委員会	三浦京子 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
茂木由行 吉井町教育委員会	
9. 発掘調査事務に関わった、群馬県教育委員会事務局文化財保護課職員（昭和52～54年度）

磯貝福七 森田秀策 松本浩一 飯塚キヨ子 女屋 等
白石保三郎 阿久津宗二 山田 始 大井田利興
10. 本書の執筆者（以下あいうえお順）

飯島静男 高崎市中尾町698-40（石材鑑定）	馬淵久夫 東京国立文化財研究所（銅同位体分析）
金子浩昌 早稲田大学（獣骨分析）	山田昌久 筑波大学（木製品、石器観察表・分析）
粉川昭平 大阪市立大学理学部（種子分析）	真下高幸 群馬県教育委員会（側道部、大溝の調査）
佐藤敏也 東京都国分寺市3-8（米粒分析）	平野進一 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団（大溝調査の経過）
鈴木三男 金沢大学教養部（樹種分析）	
能城修一 大阪市立大学理学部（樹種分析）	佐藤明人 同 上(本書の編集その他)
藤下典之 大阪府立大学農学部（ウリ科種子分析）	小林裕二 同 上 (土器観察表)
11. 本書の作成及び資料整理担当者

鈴木幹子(嘱託員) 大友美代子 川原嘉久治 細井敏子 竜崎めぐみ 天田光江	
金子ひろ子 篠原富子 桜井映子 六反田達子 岩淵フミ子 神谷順子	
関 正江 吉田文子	
12. 本書作成事務に関わった(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団役員及び職員

白石保三郎　松本浩一　平野進一　国定均　吉田有光　梅沢重昭
上原啓己　笠原秀樹　柳岡良宏　大沢秋良　定方隆史　須田朋子

13. 本書作成にあたり下記の諸氏の指導を得た。(敬称略)

新井房夫　井上唯雄　内田俊秀　大塚初重　乙益重隆　熊野正也
近藤義雄　田中琢　都丸九一　花岡紘一　藤原宏志　森本岩太郎




14. 木製品の実測については下記の明治大学学生諸氏の協力があった。(昭和54～55年度)

山田昌久　飯島克己　斉藤弘　高村公之　山浦正恵　若狭徹

15. 本遺跡の発掘調査においては、日本道路公団、地元の関係者、及び大勢の発掘調査作業員の協力があった。

16. 出土遺物、図面、写真、その他調査記録は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

凡 例

1. 本書において使用する「大溝」という名称は、今次報告になる弥生・古墳時代大溝を特に呼称するものとする。
2. 本書図版編に掲載している遺物各々には、遺物番号を通番で付している。遺物観察表における“番号”はこれを指している。
3. 遺構図、及び出土状態図において示す北方向は、国家座標（IX系）に基づくものである。
4. 大溝内より完形、半完形土器230点、口縁部破片10000点出土した。この内、完形、半完形土器はすべて図版として掲載し、破片の一部を拓本図にした。木製品は加工材のうち、本来の形が残っているものは遺存が部分的であっても、ほぼすべてを図版として掲載している。
5. 遺構図版に示す表現法、記号は従来のもので基本的には変わらないが、落ち込みマークについて急な場合  とし、緩い場合は  とした。
6. 木器図版中、木取りについては、年輪を模式的に描くことにより表現した。これは実際の年輪の形状・本数を示しているものではない。
7. 遺構図版におけるスクリーントーンは、木器図版  は焦痕を示す。木器、土器等に施された赤色顔料は図版中に彩色により表わした。
8. 遺物観察表において、番号＝遺物番号、地点＝出土地点を表わす。法量の項目中、口＝口縁の直径、頸＝頸部の直径、胴＝胴部の最大径、底＝底部直径、脚＝脚下端部の直径を表わす。
胎土中の砂粒の大きさについては、およそ0.25mm～2.0mmの間を、細砂粒・砂粒・粗砂粒の3段階に表現した。
色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修新版標準土色帳に基づいている。
遺存状態の項中に記された分数は全周遺存を1とした場合の遺存の程度を示している。
木製品、加工木観察表中、寸法の項における数値に付した“隆、は隆起部、“着、は着柄部、“柄、は柄部、“台、は台部、“握、は握部の寸法を示す。
鋳類における⊥マークに付した数字は柄穴の傾きを示す。両側に数字が付された場合は左が刃部側、右が頭部側の計測値である。
9. 土器図版の描写では、櫛描文、ヘラミガキは、施す面に対し一様に行う場合と、暗文的に施す場合があるが、ここでは、後者の場合のみ幅・本数を正確に表現し、前者の場合、それは困難であるため、範囲、方向、ミガキの幅を表わすだけに止め、なるべく実感は似せるように心がけた。
土器図版における断面表示は次のことを表わす。

 = 割れ口が接合面に一致しない。  = 割れ口が接合面に一致する。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
1 新保遺跡・大溝調査の経過	1
2 新保遺跡の立地と地理、歴史的環境	2
3 調査の方法	7
4 標準層序	8
5 発掘調査の概要	8
6 大溝の調査	13
(1) 大溝トレンチ調査	13
(2) 古墳時代後期水田跡と大溝	14
(3) 大溝周辺の弥生時代、古墳時代前期遺構の調査	14
(4) 大溝最南東部B～Gグリッド区の調査	15
(5) 大溝内小流路の変遷	16
(6) 木製遺物の出土状況	20
(7) 木道状遺構	30
(8) 大溝出土土器の時期とその出土状況	31
(9) 大溝出土土器各類型の器形、文様の特徴と時期	32
(10) 側道部、大溝の調査（昭和56年度実施発掘調査）	58
7 新保遺跡出土青銅器の鉛同位体比測定	59
8 新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体	62
9 新保遺跡出土加工木の樹種	71
10 新保遺跡出土米粒、その他	95
11 新保遺跡出土脊椎動物遺存体・骨角牙製品	108
12 新保遺跡出土種子類	149
写真図版 PL. 1～PL. 39	
13 新保遺跡出土木製品、加工材	151
14 くわとすきの来た道	168
15 ま と め	189
16 大溝出土木製品・加工木観察表	191
17 大溝出土土器観察表	225
18 大溝出土ミニチュア土器、土製品観察表	245
19 大溝出土土製品観察表	246
20 大溝出土玉類観察表	247

21 大溝出土銅製品観察表	249
22 大溝出土石器観察表	250

図 版

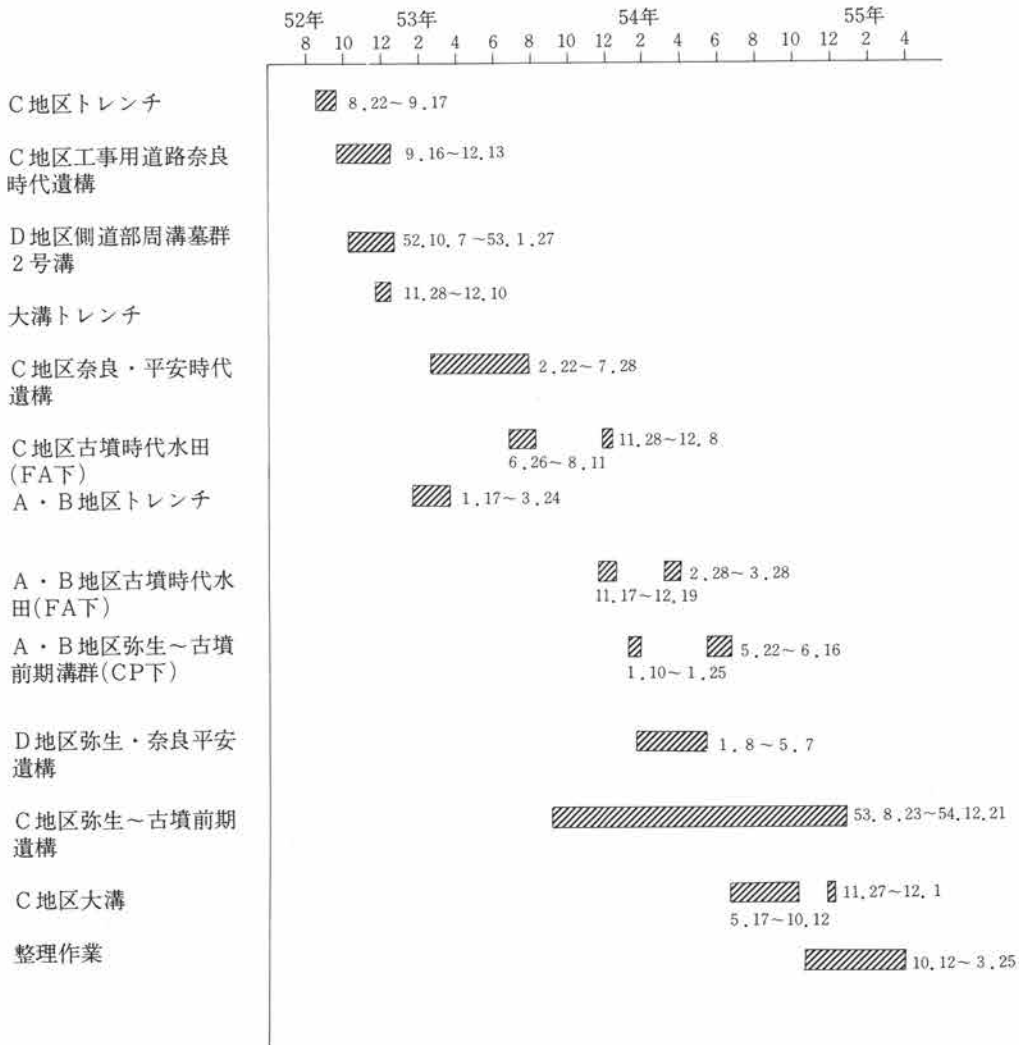
図版 1～図版222

付 図

- (1) 大溝木製品出土状況全図 (1)
- (2) 同 上 (2)
- (3) 大溝土層断面図

1 新保遺跡・大溝調査の経過

新保遺跡の発掘調査は昭和52年8月22日に本格的に開始された。新保遺跡の調査開始は前橋インターチェンジ以南、関越自動車道地域発掘調査予定遺跡では、日高遺跡、中尾遺跡に遅れること1年余り、55年度、道路開通予定をひかえ、建設工事日程は逼迫し始めていた。このため新保遺跡の発掘は終始、道路建設工事と併行しながら進められ、調査区設定及びその進め方は工事日程と小刻みにからみ合わせつつ進められた。なかでもとりわけ調査進行上節となったのは、北側側道工事、染谷川橋脚の工事、県道井野停車線カルパートボックス工事、B地区西側よう壁工事、及びその搬入道工事、染谷川改修工事等々、その節々で工事側ときめ細かな日程調整を重ねながら調査は進められた。しかも、遺跡自体の内容は調査が遺跡内全域へのトレンチ調査、グリッド平面調査へと進むにつれ、文化層は厚く3面以上の重なりを見せ、それぞれの面で著し



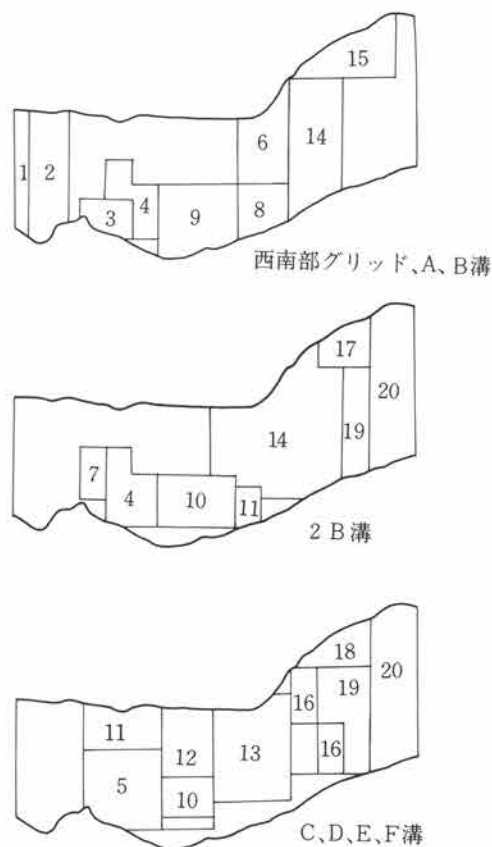
第1図 発掘調査の経過

い数量の遺構、遺物の広がり確認されていくに及び日程調整のむずかしさはさらに深まることとなった。

文化財側では逼迫した日程を乗り切るために日高遺跡の調査終了をまって53年7月よりこの調査班を本遺跡の調査班に合流させ、さらに染谷川右岸、D地区の調査には鳥羽遺跡の調査を一時中断し、54年1月から4ヶ月間この班をD地区の調査に投入し、これを完了させた。大溝の調査も工事日程の逼迫で急を要するところとなり、54年5月17日に着手し、当初1ヶ月は鳥羽遺跡調査班の継続派遣で進められた。第2図1～2の調査区画はこの段階で行われた。大溝の調査過程においても建設側の要請は相次いだ。B地区よう壁工事が一部調査中の大溝内に及ぶこととなり、これは土のうを積み上げて遺構を傷つけないよう大型機械を導入し、工事終了後、早急に調査に入れるようにすることで調整をつけた。期間的要請もきびしく、この時点での道路開通予定、55年7月に間に合わせるには8月いっぱいまでに調査を終了し、土盛工事に取りかからねばならないということであった。この調整は最終的に9月いっぱい大溝調査の期限とするということ折り合いがつけられた。

大溝の調査は関越自動車道が前橋インターチェンジ以南開通をひかえ、建設工事が急ピッチに進められる中で最後にとり残された発掘調査であった。こういった状況の中で5ヶ月半余りにわたった大溝調査も10月12日完掘状態を航空写真におさめて終了となった。

(平野)



第2図 大溝調査進行過程一覧図

2 新保遺跡の立地と地理、歴史的環境

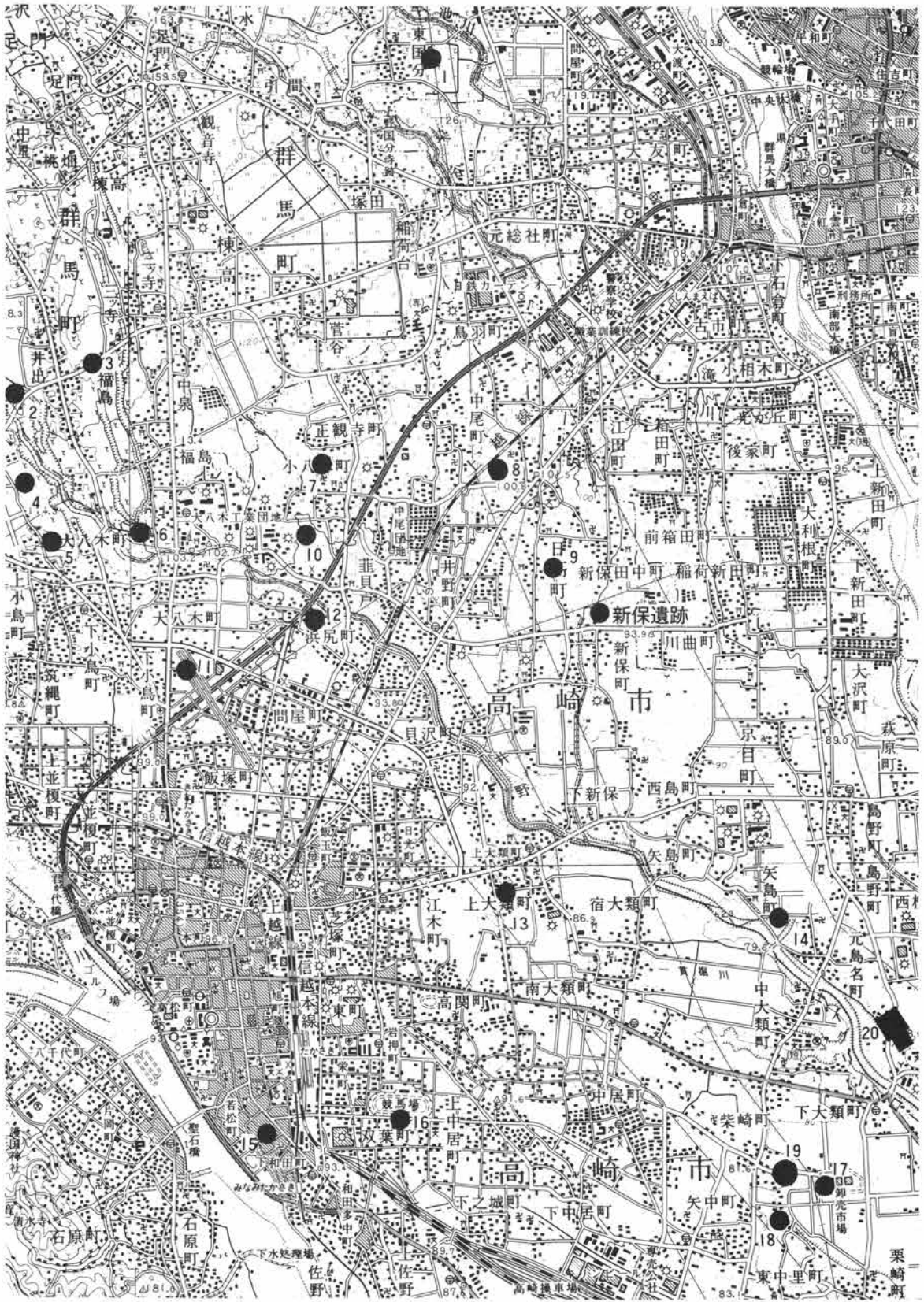
第1表 周辺の遺跡一覧表

遺跡番号は第3図、第4図に対応

遺跡名	調査された遺構(弥生・古墳前期)	立地	関係文献
1 国分寺中間地域遺跡	弥生後期 住居跡7軒、土壇1基、方形周溝墓2基	牛池川、染谷川に南北を狭まれた台地状平坦地に立地	「年報」1～3、1982～1984(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
2 同道遺跡	4世紀に降下した浅間C軽石直下に水田跡を広く検出。	井野川左岸沖積地上に立地する。(見かけの台地地形上)	「同道遺跡」1983(群馬県埋蔵文化財調査事業団)
3 井出村東遺跡	弥生後期 住居跡20軒	井野川左岸、自然堤防上に立地する。	「井出村東遺跡」1983 群馬町井出村東遺跡調査会
4 御布呂遺跡	浅間C軽石に覆われた弥生時代後半から、古墳時代初頭と考えられる水田跡。	井野川右岸段丘上沖積地に立地する。	「御布呂遺跡」1980 高崎市教育委員会
5 芦田貝戸遺跡	浅間C軽石に覆われた水田跡。	井野川右岸段丘上沖積地に立地する。	「矢島遺跡・御布呂遺跡」1979「御布呂遺跡」1980 高崎市教育委員会

2 新保遺跡の立地と地理、歴史的環境

遺 跡 名	調査された遺構(弥生・古墳前期)	立 地	関 係 文 献
6 熊野堂遺跡	弥生後期 住居跡20軒、溝2条、井戸3基、土壇8基、古墳前期 畑跡2面 浅間C軽石に覆われた水田跡	井野川左岸段丘に立地する。井野川に面する沖積地にC軽石下水田跡	「熊野堂遺跡(1)」1984 群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
7 正観寺遺跡	弥生時代 住居跡30軒	榛名山麓傾斜地末端部に立地。南に低平地をひかえる。	「正観寺遺跡群」I～III 1979～1981 高崎市教育委員会
8 日高遺跡	弥生時代 住居跡14軒前後 方形周溝墓3基、溝6条 水田跡を広範囲、良好に検出。	細長い自然堤防状微高地上に住居群、西側、旧河川沖積地には水田跡が立地する。	「関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査概報」1978群馬県教育委員会「日高遺跡(1)」1979高崎市教育委員会
9 蛭沢遺跡	古墳前期 住居跡1軒、井戸1基	新保遺跡の西北500mに隣接し、微高地上に立地する。周囲は低平湿潤地。	「関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査概報 IV」前出
10 小八木遺跡	弥生後期 水田跡、溝	井野川左岸自然堤防状微高地とその後背地にかけて立地。	「小八木遺跡調査報告書」(1)1979高崎市教育委員会
11 下小鳥遺跡	弥生後期 住居跡1軒	井野川右岸自然堤防成因と思われる微高地と沖積低湿地にわたって立地。	「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報I」1973群馬県教育委員会
12 浜尻遺跡	弥生中期 住居跡3軒以上、溝状遺構2条、土壇5基	井野川右岸舌状微高地上に立地、東南に低湿地をひかえている。	「浜尻遺跡」1981高崎市教育委員会
13 上大類北宅地遺跡	弥生後期 住居跡1軒、方形周溝墓1基、古墳前期 方形周溝墓1基	井野川右岸の自然堤防状微高地上に立地し、西は後背湿地となる。	「上大類北宅地遺跡」1983高崎市教育委員会
14 鈴ノ宮遺跡	弥生時代 住居跡26軒、方形周溝墓7基、壺棺1基 古墳前期 住居跡31軒 前方後方形周溝墓1基、方形周溝墓3基	井野川左岸段丘上、自然堤防洪積微高地上に立地する。背後に広く低湿地をひかえる。	「鈴ノ宮遺跡」1978 高崎市教育委員会
15 竜見町遺跡	遺構不明、弥生中期後半、竜見町式土器が数個まとまって出土。	烏川左岸段丘上、洪積地上に立地。周囲に低湿地をひかえる。	杉原荘介、乙益重隆「高崎市附近の弥生式遺跡」考古学10-9 1939
16 鏡馬場遺跡	丘の斜面上に数多くの破片とともに完形土器が3個掘り出された。	洪積平坦地に立地。低湿平坦地を周囲にひかえている。	同 上
17 下大類遺跡	古墳前期 住居跡	井野川右岸後背地、微高地上に立地	「大類村史」1979
18 矢中村東遺跡	古墳前期 方形周溝墓4基	井野川右岸河岸段丘上位面、ローム面上に立地。	「矢中村東遺跡」1984 高崎市教育委員会
19 蟹沢古墳	比較的小規模な円墳。内部構造は粘土郭と推定される。鏡4面、鉄斧他出土。	墳丘は北側に井野川支流の粕川が形成する沖積平野を望む洪積台地上に占地。	「群馬県史」資料編3 原始古代3古墳 1981
20 將軍塚古墳	全長90メートル前方後方墳、主体部は粘土郭。獣形鏡1面 石釧(いしくしろ)、刀、鉈(やりがんな)等出土。	墳丘は井野川左岸、河岸縁辺に占地。南北に広域な低湿平坦地をひかえる。	同 上



第3図 新保遺跡と周辺の遺跡 (弥生・古墳時代前期)

1 : 50,000、国土地理院
高崎、前橋、榛名山、富岡

榛名山は関東平野の西の縁辺部においてその外郭を形成している。その山麓北面は吾妻川へ、東面は利根川へ、南面は烏川へそれぞれ下り降りて、その山麓緩傾斜面や、河川沿いの河岸段丘上には各時期にわたる遺跡が密に分布している。そのうちでも、榛名山東南麓は特に長くすそ野を引き、高崎、前橋等、群馬県の中心都市部の集中する広域な低平地に伸び広がっている。この東南麓一帯は原始、及び古代へ遡り、群馬県地域における、文化の中心地として現代に至っている。一方、広域な山麓帯は場所を変えて地勢条件を異にし、これが強く地域文化の推移に関与するといった興味を引く内容を備えている。

榛名山東南麓を地勢的に概観すると3つの地域に分けることができる。第1は榛東村を中心とする山麓上位帯(標高200m~300m)で勾配は強く湧水池が点在し現況は台地水田が主となっている地域。第2は群馬町、吉岡村を中心とする山麓中位帯(標高150m~200m)で勾配は比較的強く、河岸段丘が形成され、河床は、深く、現況は畑地が主となっている。第3は下位帯(標高は150m以下)高崎北から利根川両岸地帯で、一帯に前橋台地と呼ばれている。この地域では、山麓傾斜が緩くなるに従って中位帯に見られるような、侵蝕作用の進行による河岸段丘形成から、堆積作用、乱流による、自然堤防、後背湿地の形成、旧河道沖積地等、複雑な地形を形成している。以上3地域のうち本遺跡の立地にかかる、下位、及び中位帯の地形面の形成については、新井房夫博士の見解を引くと以下の様である。

中部ローム期から、上部ローム期にかかる時期「過去利根川は、やがて渋川付近を扇頂とし(赤城、榛名)両火山の山麓末端をそれぞれ北東限および西南限として南に開く大規模な扇状地を形成し、……洪積世後期のある時期に至り……前橋砂礫層からなっていた古期扇状地面の一帯は瞬時に厚さ10数メートルもある火山泥流堆積物(前橋泥流)の下に埋没し」、「前橋台地原面」が出現する。「一時的にそれまであった排水系が消失」し、「湿潤地があらわれ」、利根川両岸の「火山灰質シルト」が形成される。ただし「清里地域では、このころ榛名火山から供給された新期の火砕流や土石流などの堆積がひきつづいて行われ、現在見られるような緩傾斜面地形をつくり上げ……湿地的環境からは比較的早く解放^(注1)」される。

新保遺跡は上記、山麓中位帯から下位帯に移る辺り、榛名系小河川染谷川が形成する自然堤防状微高地を中心に立地し、南に広域な湿潤低平地をひかえる。その集落構成は本書、「遺跡の概要」に紹介しているが微高地上に住居群、周溝墓群、その縁辺の湿潤な後背地には10数条の灌漑用水路と思われる溝群が走る。

微高地上面と染谷川河床との比高は1.5m~2mで現在でも著しい降雨があった際には微高地上面に流れがあふれることも時折ある。この微高地の堆積は砂質層をはさむ2次堆積ロームや、二ツ岳丘濫層、砂質旧耕土というように、土層生成は長期にわたって河川堆積作用が介在しながら行われた。又一方、遺跡地周辺には大小の旧河道が、地表下に無数に存在する。本遺跡地内においても、染谷川の西10数mにも2号溝と称する旧河道がある。幅10m、深さ1.8m、河床面から縄文土器、自然木を多量に見ている。調査区の南端にも、15号溝と称する旧河道がある。幅4m、深さ1m、河床から平安期の土器が出土している。さらに本報告書で紹介する弥生、古墳前期の大溝も同様の旧河道である。山麓下位帯、及び周辺地域では、河川の乱流、堆積、地下湧水等により、複雑な微地形が形成され、初期農耕にもとづく、弥生、古墳前期集落の好適地であったと思われる。本遺跡、及び周辺の遺跡について概観すると、弥生、古墳時代前期の集落を比較的多く見ることができる。弥生時代集落については特に限られた区域に集中する傾向を見せている。本遺跡の北西方向1.5kmには弥生時代後期集落、水田跡の発見で注目された日高遺跡がある。この遺跡も山麓中位帯の末端、自然堤防状微高地上にやや小規模な住居群が認められ、この西側には旧河道沖積地に埋積谷地水田を備えている。さらに西方1.5kmに位置する正観寺遺跡は弥生後期の小規模集落である。南に低平な、現況、水田地帯、北に畑地帯が広がる山麓緩傾斜地、中位帯をひかえ、集落は前出の山麓中位帯の基盤、榛名山新时期火砕流(陣場

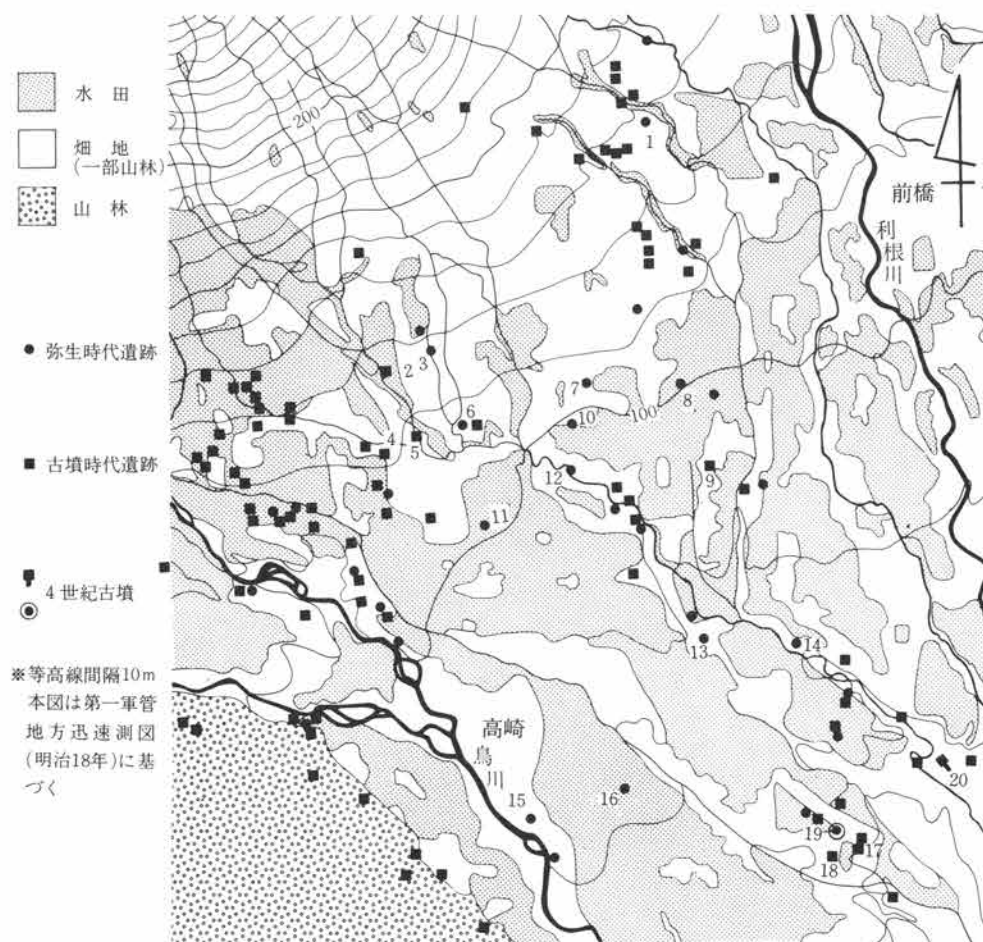
泥流) 末端台地とこれに複雑に入り組む谷地状低湿地にかけて、住居群、水田等が立地する。

正観寺からさらに1.5km、井野川左右両岸段丘上には、熊野堂遺跡、井出村東遺跡、同道遺跡、芦田貝戸遺跡といった弥生時代後期前半から古墳時代にかかる集落跡が近年発掘調査され、住居群、墓跡に伴って水田跡が頻りに検出されている。これら遺跡の立地問題については、水田跡の占地する沖積地の生成について、一連の発掘調査の結果、井野川の河床の降下との関係で説明されている。井野川の河床は、こうした沖積地の生成及び水田化の時期には現在よりもはるかに高かったことが確められている。

弥生、古墳前期の集落分布については、これら一連の遺跡の分布域、山麓中位、下位帯境界域を出るとその分布は著しく希薄になり、遺跡の規模も貧弱なものとなる。山麓中位帯の本格的開発は古墳時代後期後半にまで下らなければならない。転じて南限については、新保遺跡の南方向では井野川両岸沿い、自然堤防状微高地とその后背湿地にかけて弥生から古墳前期の集落が点在する。左岸には鈴ノ宮遺跡、右岸には上大類北宅地遺跡等この時期の集落がある。この両遺跡が弥生時代集落の最南限となっており、南に広く展開する低平、湿潤地では現在までのところ、弥生時代の遺跡は皆無である。この広域低平地の開発をめぐるのは弥生時代と古墳時代前期の間に大きな画期を認めることができる。古墳前期における、広域沖積地への急激な進出は、石田川式土器を始めとする、文化的定形化、巨大古墳の出現など、農耕社会の構造的発展を背景として進められていったものと思われる。

(注1) 新井房夫「地形 地質」『前橋市史』第1巻 1971

(注2) 佐藤明人「有馬遺跡—有馬遺跡周辺の地域性」『研究紀要1』1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



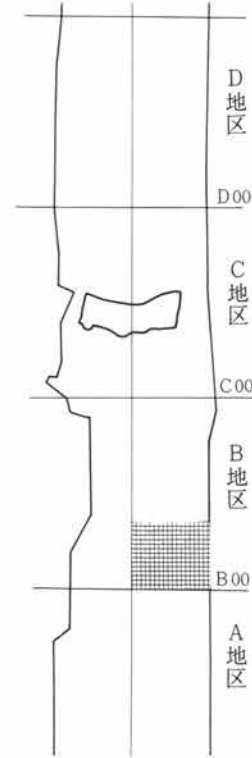
第4図 新保遺跡と周辺弥生、古墳前期遺跡の分布 0 2000m

3 調査の方法 (第5～7図)

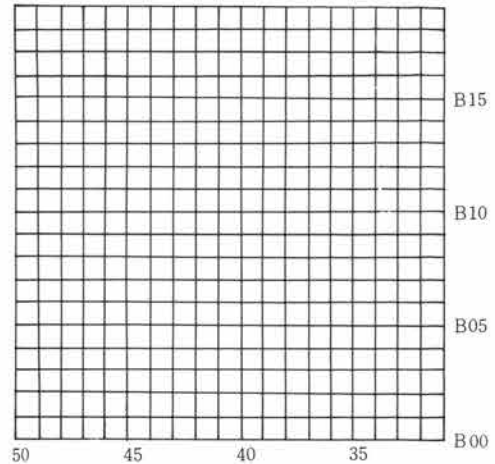
グリッド設定法 関越自動車道の建設予定区域は幅員約80mである。この区域は遺跡をN-44°-Wの方向に貫く、路線内には中央に建設工事用測量杭が設置されている。この杭の内、STA 134+00と STA 135+00を結んでグリッドのx軸の中軸線とした。両杭間の距離100m。次にこれに直行してy軸を設け、グリッドは STA 杭を基点としてx、y軸を2mごとに区切り、遺跡全体に2m方眼の網を行きわたらせた。

グリッド呼称法は、y軸については、x軸中軸線との交点を50として北東から西南に2mごとに数字が増す。x軸方向は STA 134+00杭をA00、100m北西方向の STA 135+00をB00さらに100mの間隔をもってC00、及びD00の点を設定し、それぞれの間をA～D地区とした。各地区間に設定された50グリッドは頭にアルファベットを付して00～49の数字で呼ぶこととした。たとえばあるグリッドを呼ぶには50A29、60B07という具合である。

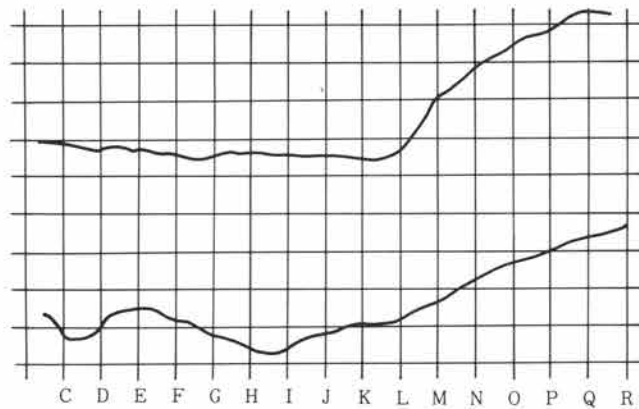
大溝グリッド設定法 上述した2mグリッドは遺跡全体に設定している。しかし大溝については調査を進める上での便宜から4m方眼のグリッドを設定した。グリッドラインは2mグリッドと一致したものであるが呼称法についてはより単純なものとした。大溝に対し縦方向にアルファベット、横方向は数字を配した。たとえば、あるグリッドを呼ぶには、D-6又はJ-7といった具合である。大溝調査においてとくにこの方法でグリッドを設定した理由は木器、自然木を取り上げる上での便宜を図ったものである。木器、自然木は他の遺物に比較し長大であるため、2m方眼では2～3mグリッドにまたがるケースが生じることが予想されたことによる。



第5図 遺跡全体グリッド設定図



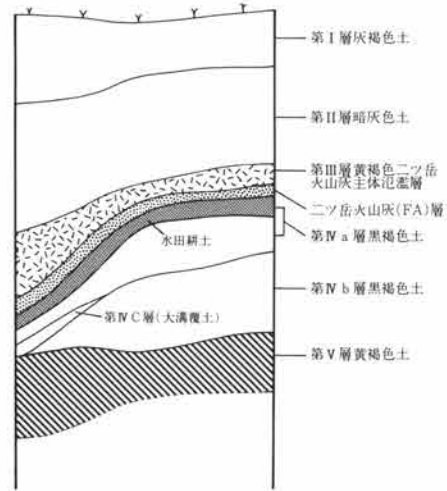
第6図 グリッド設定図(部分) 31～50-B00～19



第7図 大溝グリッド設定図

4 標準層序 (第8図)

本遺跡の標準的な自然堆積層は染谷川の左岸 (C地区) 右岸 (D地区) 両微高地、東南部低湿地区 (A、B地区) の3地区で若干様相を異にする。本報告に係る大溝はC地区を北東-西南に貫いている。ここでは、C地区大溝周辺を中心に説明を加える。



第8図 大溝及び標準土層図

第I層 暗灰褐色で1793年の浅間大噴火による浅間A軽石を含み粘性を欠き、厚さ25cm前後である。現耕作土であり、調査時においては、桑畑と野菜畑となっていた。

第II層 暗灰褐色土層で12世紀降下した浅間B軽石を含み粘性を欠き、厚さ30cm前後である。旧耕作土でありA～D地区を通じて軽石の純層は認められない。

第III層 黄褐色土層で榛名山ニッ岳火山灰を主体とする水性堆積層であり、軽石粒、細砂、小礫層を含む。厚さ10cm無遺物層であるが、A地区においては厚さ30cmで最上部10cm程は灰色の強い耕作土となっており、奈良、平安期の水田耕作土である。

FA層 榛名山ニッ岳火山灰層である。黄褐色で粒子は微細で均一。風性層で、厚さ7cm。

第IV a 層 黒色土、4世紀以降降下した浅間C軽石を多量に含んでいるが、やや粘質である。厚さは10cm。弥生、古墳前期の土器破片を始めとする遺物包含層である。最上層3～4cmは、古墳時代後期水田耕作土である。浅間C軽石はA地区では湿潤であるため、厚さ3～5cmの純層堆積として見ることができる。又、大溝の最上層、A溝はこの軽石層を切っており、溝が後出する。水田耕作土層は大溝上で若干(20cm前後)下降(地盤沈下)するが、一帯にIV a層上面を耕作面とし、認められる。

第IV b 層 黒褐色粘質土、浅間C軽石層は含まれない。弥生時代遺物包含層でA地区では水田耕作土の可能性はあるが判別できない。

第IV c 層 暗褐色土大溝北西側(右岸)縁辺付近の大溝覆土で住居跡がのる黒褐色土の下層であり、土器、獣骨を見る。

第V層 黄褐色土、C地区では2次堆積ローム層である。無遺物層で大溝両辺立ち上り部はこの層よりなる。大溝下床はこの層の上面からの深さ、約1.5m。大溝の河床部では砂礫層がV層の下位層となっている。A地区では、V層上部はシルト層であり、この地区では上部ロームの、標準的層序が確認できる。

5 発掘調査の概要 (第9、10図)

本遺跡においては縄文時代から中世にかかる遺構、遺物が発掘調査された。縄文時代では染谷川の西40mに

沿い旧河道が検出され、旧河道の覆土の最下部より縄文時代中期加曾利E式土器の破片が比較的多量にまとまって出土している。しかし縄文時代の遺構は検出されない。遺構については弥生時代からその存在が明確になり、これ以後、中世、近世まで住居群、墓跡群、水田跡、掘立柱建物跡群などが多様な変遷を見せながら、染谷川に沿う左岸微高地帯を中心に重層的に展開する。

弥生時代中期後半 染谷川左岸微高地帯（C地区）に住居跡8軒、C地区を北東—西南に貫く大溝の北西寄り、最深部において木製品、土器等、この時期の遺物が出土している。

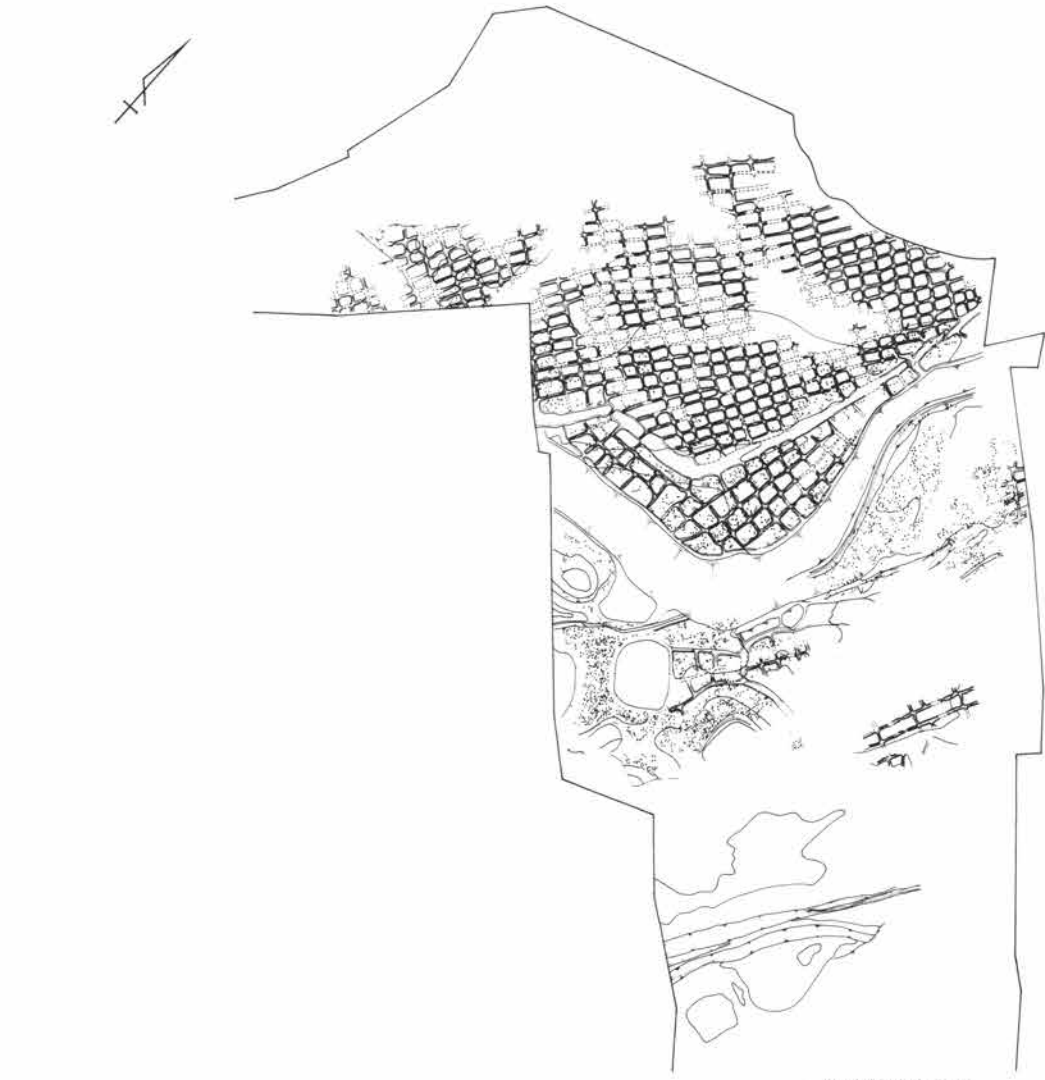
弥生時代中期後半以後、遺構の配置は古墳時代前期まで大きな変化を見せない。

弥生時代後期 住居跡の数は増大し集落の規模は拡大する。住居跡はC地区を中心に107軒以上後期初頭から終末まで断絶なく著しく重り合っで見られる。この時期の墓跡は染谷川の右岸D地区と左岸C地区に群在する。C地区南部には特に大規模な後期後半の1号方形周溝墓が存在する。周溝墓の形状は四隅土橋。規模は12m×11m、封土の存在は後世の削平を受け不明。主体部も不明確である。溝内からは完形、半完形、破片の状態で土器が多量に出土している。住居群の南東部、微高地と、低湿地の境界付近B地区ではやや小規模な、方形あるいは不整形の盛土を持つ周溝墓群が14基存在する。方形周溝墓の規模は一辺が約8～9mで、3隅～2隅に土橋があり、水路と思われる溝等を利用したもので形状は整わないものである。これ等の周溝墓の封土、主体部については不明確であった。不整形の盛土を持つ周溝墓の方は方形周溝墓群より北寄りに群集する。規模は径7m前後、高さ30cm前後の盛土が確認できたが周溝は明確に認められない。主体部は複数の壺棺、小規模な長方形土壇が台上部に設けられている。壺棺は胴径58cm程の大型土器の口辺部を欠き壺胴下半部をこれに合わせた2個体構成よりなるものである。一部の壺の中より人骨が検出された。なおこの周溝墓群の下層から弥生時代後期前半～後半の住居が7基重複した状態で検出されている。

弥生時代後期の墓跡群は上記の外にも染谷川右岸のD地区に9基からなる周溝墓群が見られる。これらは円形を基とした周溝をめぐらす、溝は共有し合い、円形、半円形、ウロコ状を呈し、規模は径7m前後、主体部は壺棺が1基の周溝墓に2～3個検出されている。5号周溝墓では3個の壺棺が検出され、そのうちの1個は高さ67cm、胴径54cm。口辺部を欠かれた大型壺で、胴部の小穴および口の部分に他の大型壺の胴下部をもってこれをふさぎ、フタとしている。このD地区の周溝墓群はC地区の不整形な盛土を持つ周溝墓群より、伴う土器に古い要素が認められ、時期的にC地区の墓跡群に、先行すると考えられる。

住居群、墓跡群の立地する自然堤防状微高地の東南A、B地区の、地形は広く低湿地帯となっている。この区域には、この時期の灌漑に供したと思われる大小の溝が10数条、北→南方向に走っている。それぞれの溝はいくつかの箇所集中しており、同様の機能を持つ溝が改修あるいは、新たに作り改められながら比較的長期に継承されたことが見てとれる。これ等の溝の中でも比較的規模の大きな17号溝は、溝両側立ち上り部におよそ18mにわたって、32本の木杭が認められた。又17号溝にはより小規模な溝が分岐する箇所があり、ここには、17号溝の中央部に矢板が2本打ち込まれた状態で検出されており、用水路の堰の跡であったと思われる。この他、この地区では、畦跡と思われる低い帯状の高まりも認められており、この時期、この区域において、水稻耕作を行っていたことが想定できる。

古墳時代前期 住居跡、周溝墓等が弥生時代とほぼ同様の占地形態をとって見られるが、この時期の遺構は前代に比べ著しく少ない。住居跡は39軒以上、前代の住居群分布区域に散在している。又、周溝墓もC地区、東南部の弥生時代の墓跡群中に2基認められる。さらに東南の低湿地でも、前代の溝群と同様の配置で10数条の溝が、浅間C軽石に直接埋もれた状態で検出されている。これらの溝もやはり前代から灌漑用水路として同様の機能を受け継いだものと思われる。



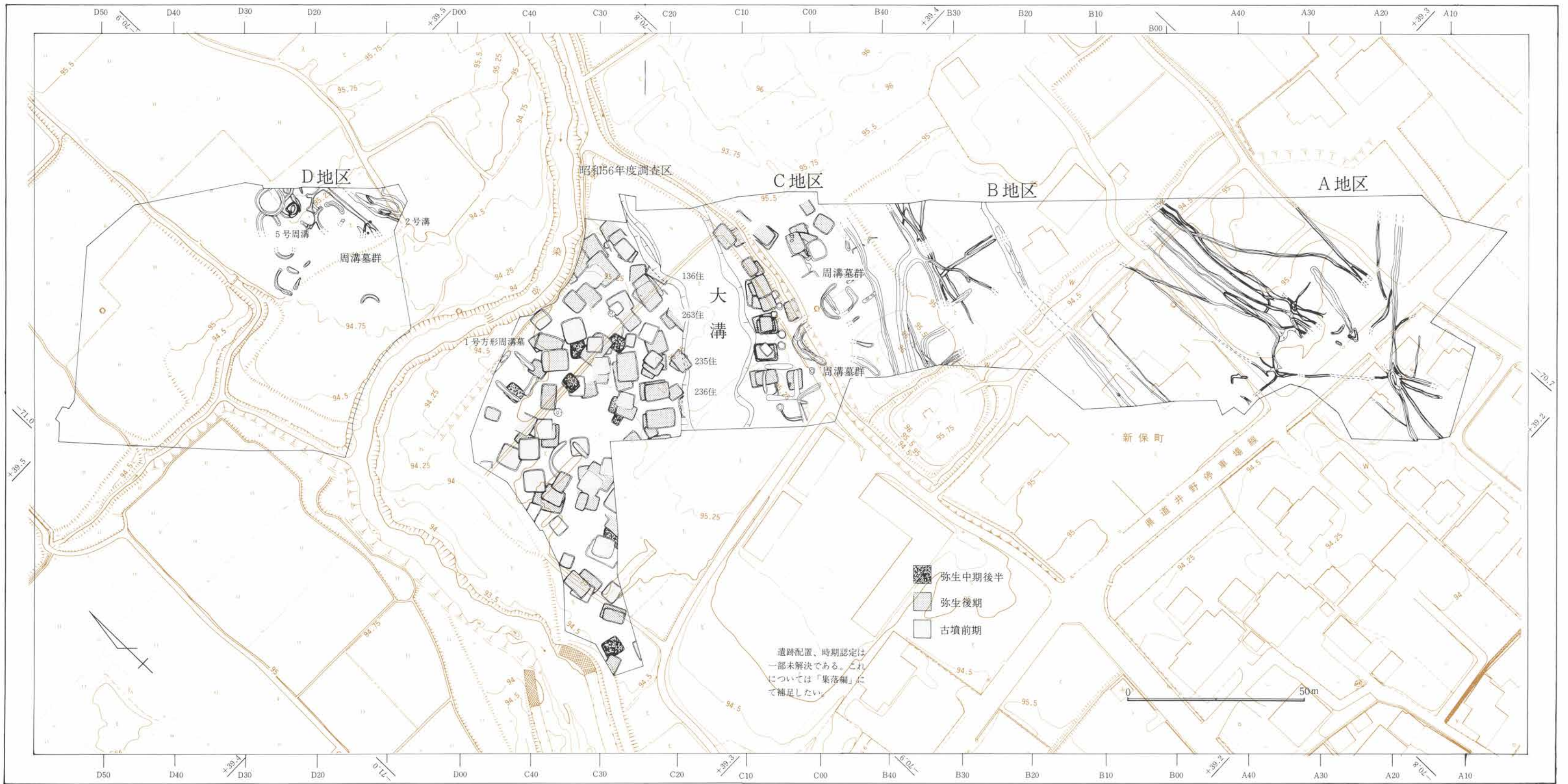
(1)古墳時代水田



(2)奈良、平安時代

0 50 m

第9図 古墳、奈良、平安時代遺構配置図 (C地区、B地区)



第10図 遺跡全体図 (弥生、古墳時代前期)

古墳時代後期 弥生時代から古墳時代前期まで受け継がれてきた集落占地形態は一変する。染谷川左岸の調査区は全面に水田跡が広がる。水田跡は一带に榛名山二ツ岳火山灰層（FA）に直接覆われ、さらに河川氾濫による二ツ岳火山灰を主体とする水性層がその上に厚く堆積する。このため水田跡は後世の攪乱を受けることが少なく、良好な遺存状態で検出された。この水田跡はいわゆる小区画水田と称されるもので水田の一区画は、2m×2.5mの大きさに畦で区画されたものである。この規模、形状において画一的な水田跡は前代に多数の溝が見られたA、B地区からさらに居住区域、墓域であった微高地上にも、一带に広がり及んでいる。

奈良、平安時代 古墳時代水田が厚く火山灰、及び氾濫層に覆われると、その後、遺跡地内には人為の跡は見られず、7世紀後半以後の奈良時代にかかる時期に至って掘立柱建物群やこれに隣接して住居跡群が現われる。これらの遺構は染谷川兩岸の微高地に占地するが、その中心は左岸微高地にあり、掘立柱建物群は10軒から構成され、南側に開くコの字状に配置される。建物は2間×5間、あるいは3間×3間で、柱穴底に扁平川原石を据え、周囲に瓦の破片を多く見ることから、一部の建物には部分的であれ、瓦をのせていたと考えられる。こうしたあり方は、この時期の遺構群にある特別な性格を伺わせるところとなっている。

平安時代では染谷川の左岸C地区微高地を中心に堅穴住居跡を始めとする多数の遺構群が出現する。奈良、平安時代の堅穴住居跡は染谷川左岸（C地区）80軒以上、右岸（D地区）18軒以上、掘立柱建物跡は上記のものも合わせ19軒、その他溝、土壇を多数検出した。

中・近世 C地区で中世火葬墓、用水路と判断される大、小の溝、環濠、井戸等多数見られる。又、中、近世以後も現代まで溝やその他何らかの生活の跡をたどることができる。

なお本遺跡D地区の北方100m付近において、昭和56年度圃場整備事業に伴う発掘調査が高崎市教育委員会により実施されている。調査の行われた場所は「i調査区」と称され、染谷川右岸、関越自動車道の北隣接地を中心に、約16haを対象地とし、トレンチ、及び「全開調査」が行われた。弥生時代遺構は新保遺跡D地区周溝墓群に連なると思われる、大小10基の周溝墓群が染谷川河岸に沿う自然堤防状微高地上にて調査されている。周溝墓の形状は不整形円形を呈しており、主体部には、長方形土壇、壺棺が見られ、新保遺跡に見る周溝墓とおよそ同様な有り方を示している。調査の所見では「ごく一部の調査により確認できた周溝墓であり……同様の墓域が相当広く存在」することを予想している。その他、新保遺跡と同様のFA下、古墳時代後期水田跡、平安時代住居群、又、浅間B軽石下より平安時代水田跡が広域に確認された。^(注1)

(注1) 「日高遺跡 (IV)」1982 高崎市教育委員会

6 大溝の調査

(1) 大溝トレンチ調査

本調査に着手してから、3ヶ月余り、遺跡全体のトレンチ調査に続き道路建設との関係で最優先で調査を進める必要があった工事用道路予定区域、650㎡の奈良、平安時代面の遺構調査が完了した。奈良、平安時代の遺構面の基盤は榛名山二ツ岳火山灰層を主体とする水性堆積層（氾濫層）で厚さはおよそ10cm、最下層は二ツ岳火山灰、FA風性堆積純層（厚さ6～8cm）であった。両層は無遺物層で非常に短時間に堆積したものである。この層を除去し、黒色土層面を表出させると、幅6cm、深さ80cmの北東—西南方向に、溝状の窪地が現れた。そこでこの窪地の性格を把握するため幅1m、長さ12mのトレンチを設定し、これを掘り下げていくと黒色粘質土、黒色細砂層、灰褐色砂層が縞状に互層を見せ、掘り進めるうちに窪地の下層は旧河

道であることが判明した。旧河道の岸壁下河床面は岩盤のように硬い細砂質土で床面は礫層、トレンチの下半部、河床面から20～30cmの間、浅間C軽石混土層下に弥生土器(樽式)、完形、半完形や多くの破片を伴って木製品、加工材、自然木が多量に出土した。木製品は鋤、横鋤、板材など農耕具を中心とし、10数点検出された。このトレンチ調査により以後の旧河道の本格的調査に膨大な量の木製遺物の出土を予想することができた。

(2) 古墳時代後期水田跡と大溝

古墳時代後期水田(F A下水田)跡の調査の結果、C地区関越自動車道路線内においてはF A層は厚さ約7cmで一帯に堆積し、この層の直下には一面に小区画水田が検出された。水田面は大溝範囲内と思われる辺りでは若干他と異った様子を見せていた。全体にやや地盤沈下が見られるとともに、この範囲では水田耕土は湿潤軟粘質で、他との区別は明瞭であった。このため大溝の及ぶ範囲は凡そ幅20m、C地区を北東～西南に貫いていることを予想することができた。さらにこれに対応するように沈下部北西側縁辺には太畦が設けられ、太畦より東南側沈下部では、小畦による小区画の形状をやや異にし、耕土面上に検出された無数の足跡はこの部分ではとくに深く踏み込まれていることが認められた。又、古墳時代水田では大溝上中央部に幅7m、深さ1mの水路がやや弓状に曲線を描いて、大溝と同方向に走っている。水路の底面は水田耕土と同様の黒色軟粘質土でその覆土には強い流れを思わせる砂礫層は認められず、水田経営がなされていた古墳時代後期においては、この水路による著しい侵蝕はなかったと認められる。大溝内小流路の蛇行は古墳時代前期A溝の段階でもっとも著しい。古墳時代小区画水田は、凡そ後期初頭(6世紀前半)この間100有余年の間に住居が群在した居住区は、著しい耕地の拡大整備により一帯に水田地帯となる。前代居住区域の傍には、沼沢地とこの中を流れる自然小河川があった。それが次の代になり土地利用は一変し、そして、小河川(A溝)はその位置をほとんど変えずに、整備され、農耕用水路(給水又は排水)として利用される。このように旧河道は灌漑用水路あるいは、低湿田となる等、榛名山二ツ岳の大噴火に伴う地形の大規模な変容がある、古墳時代後期までその痕跡をとどめ、土地利用のあり方にも大きく関わっていったのである。

(3) 大溝周辺の弥生時代、古墳時代前期遺構群の調査

C地区微高地上には大溝を挟んで、弥生時代中期末から古墳時代前期にかかる住居跡が150軒余り群集している。大溝は幅20m前後に及んで検出されたが、時期を経る間に小規模な細流が侵蝕と埋没をくり返し移動を重ねながら長期間に形成されたものである。大溝の北西縁辺部においては弥生、古墳時代前期竪穴住居跡が縁辺部の埋没土上面に検出されている。しかし対岸の東南側縁辺部ではそうした遺構の重複はない。北西側縁辺部、西南端部、C-9グリッドでは古墳時代初頭の土器群が縁辺傾斜面に検出された。(No.748～755)この有様は、土器群中に完形、半完形土器が目立ったところから何らかの遺構に伴ったものであったか、あるいは単なる投棄によるものかいずれにしても、古墳時代初頭における流路の西北側縁辺部の様子を一断片として伺い見ることができる。西北側中央部において住居跡が、5軒大溝埋没土上に検出されている。住居の南半部が大溝覆土上にある235号住居は弥生時代後期後半の時期に当る住居跡である。236号住居は東南部が大溝覆土上にある。住居の平面形はやや台形状を呈し、弥生後期前半から中頃にかかるもので、住居中央部は焼土、黒色灰が広がり、周壁下は掘方状の落ち込みを巡らす構造をとる。住居の大溝覆土にかかる東南部の壁は明確に検出された。

250号は後期中葉、263号は後期後半、中央部よりやや北東寄りに古墳時代前期の186号住居跡が同様に大溝

埋没土上に見られる。住居跡の基盤層となる大溝覆土中及びその付近の覆土中IVC層には弥生土器片、獣骨、木製品が量的には少ないながらも散見され、とくに河床部に見る土器は弥生中期後半～後期初頭に属するものが目立つ。中期末葉から古墳前期、さらには古墳後期への流路変遷は、堆積作用の進行による河床の上昇をたどり、反面、北西側中央部に凸型砂州を形成し、その対岸及び北西側南西端は凹型水衝部となりそれぞれ堆積と、侵蝕が進行するなかで曲流が一層強まって行き、この間凸型砂州上に上記一連の住居跡は作られていったという理解ができる。古墳前期A溝の場合、兩岸壁の固い褐色砂質層を削り込んでおり特にこの時期には、比較的水量が多く侵蝕作用が増し、蛇行が急激に進行したようである。

(4) 大溝最南東部B～Gグリッド区の調査

大溝の本格的発掘開始 大溝の本格的調査は、昭和54年5月18日に開始された。調査の皮切りは、大溝南東端、Cライン間に溝を横断する形で長さ20m、幅2mにトレンチ状調査坑を設け発掘を始める(第2図1)。掘り下げるに従って、流木を思わせる状態で散乱する木材が調査坑全体に、浅間C軽石下の黒色土、さらに下層の砂層より目立って出土し始める。当初の遺物処理は、上記、上層、下層に分層し、これに従って取り上げ等の処理を行う。さらにDグリッドまで6mの幅で調査坑を拡張し発掘を進めるに従い、出土遺物は自然木、木材に混じって糸巻状木器や、容器の未製品、網代製品等が姿を見せ始める。これら木製遺物の間からは猪、鹿の顎骨や肢骨等が点在して出土した。土器類は目立って多く、完形土器や破片が散在し、上層において、弥生後期後半及び古墳時代前期のものが多く、下層は後期前半のものが多く認められるという傾向があった。又特に古墳時代前期の破片については溝の西北側寄りの上層で目に付いた。北東への調査グリッドの拡張、及び西北岸の確認作業を進める際、覆土上面に弥生期の竪穴住居跡床面が検出される。大溝西岸の検出は住居跡調査の完了を待って進められたが、黄褐色砂質土の壁面の検出は、壁際覆土と見分けが付きにくく困難を伴った。明確に検出されたとは言いがたい。一方大溝東南壁側については黄褐色砂質土の立ち上がり部の壁面は硬く、壁の検出は容易で明確に検出することができた。東南側壁は西北側に比べその形状は複雑で、西南端付近においては壁面は大きく湾入し、しかもその傍には一見防波堤のごとくに木道状遺構が検出された。これは幅30cm、長さ3.5m余り、長大な木材を並列に数本並べ、側辺を木杭でおさえたものである。木製品は農具を中心に、木材、板材等、木道状遺構の周囲に多量に散乱状態で検出された。

A溝の出現 昭和54年6月中旬、E、F-5、6グリッドに拡張区を設け発掘を進める。この辺りでも、溝の立ち上り部左岸の壁は黄褐色砂質土で硬く、検出は明確であった。壁から河床面にかけてテラス状の段が見られ、さらに東方向は幅2～2.5m、断面形状は緩い葉研状を見せる溝が現われた。この溝の両側壁は硬い砂質土であるが、その形状から溝の生成は自然河川の侵蝕によるものと判断できた。溝床部は幅60～70cmに一段葉研状に落ち、断面U字状の溝が形成され、その底部には径30～40cmの不規則なピット状の落ち込みが一連に並んで見られた。溝覆土は小石を含む砂層と粘質土の縞状堆積であり、断続的に比較的強い流れが生じていたことを思わせる様子であった。覆土中にはほとんど木製品は認められなかったが、古墳時代前期に属する土器、S字状口縁甕形土器の破片等が認められた。そこで、この溝に対しA溝という名称を付し、この流路把握に努めることにした。

A溝の流路について、これをグリッドEライン、Hライン及び西南壁において土層断面(セクション)を観察すると、この溝の断面形が特に明瞭にそれぞれの断面壁に現われており、しかも覆土の最上層に位置していた。西南端壁断面では、古墳時代水田跡に伴う農耕用水路の直下に認められ、A溝の西北右岸立ち上り部は西南断面壁辺りでは大溝西北壁に挟れ込んで、大溝河床よりも約40cm高いテラスを作っていた。こういっ

た現われ方によりA溝の流路形状、位置把握はある程度明確になった。この溝は著しく蛇行し、流れの向きは北東→西南で現染谷川と同様であることも確認された。

B溝等流路群の出現 A溝の流路形態が把握されるに伴い、この流路の傍あるいは下位に沿って、著しい木製遺物、多様な遺物が帯状に群集して見られた。C、Dグリッドでは木道状遺構付近の農耕具、木材、板材等が比較的河床面際から一群として見られたが、これと群を別にして、大溝右岸寄りではA溝の南傍に帯状木製遺物群が走り、ややA溝に遡ったE～Gグリッド区、大溝左岸際ではA溝の北傍に、ほぼ直状に東→西方向に加工木を主体とした帯状木製遺物群が伸び広がっていた。そして、それはとりわけE、Fグリッド区では著しく密集して重なり合って見られた。その遺物群の最上位部レベルは比較的浅く、古墳時代水田面下からおよそ30～40cmであった。群集する木製遺物の状態とその構成は、大部分が加工木でその間に自然木が介在し、加工木の内容としては長大な分割材や板材、一部加工材、杭状加工材が全体の83%前後を示め、これに次いで農具が多く、他に生活用品、工具、弓等が加わっていた。長大な流木や、木材は流れ方向に沿った向きをとり、さながら貯木場のごとき観があった。その他この木製遺物群には生活廃棄物である獣骨、土器、石器、ひょうたん、桃の実の他、野生種の種子等が多量に含まれていた。これに伴う土器については、この遺物群の時期を考察する上に重要な意味を備えているので注目しながら発掘は進められた。帯状木製遺物群の土器包含状況については、上層では弥生後期後半の土器片が圧倒的に多く見られるが、その中には古墳時代前期の土器片が多く混ざり、随所に完形土器が点在した。E～Gグリッド区では大溝左岸壁際にA溝が作る葉研状の溝の北外側に外れた辺りにS字状口縁甕形土器の完形品(No.726)が、H-6グリッドでは半完形壺形土器複数個体が、板材(No.486)槽の残欠品(No.230)ほぞ穴を穿つ長大な建築部材と重なり合うように出土し、ずっと下って西南端断面壁には壺形土器(No.822)が、A溝からやや外れた中央寄り下位、壁面から顔をのぞかせていた。こうしたことから、帯状木製遺物群上層は古墳時代前期、土器の型式的様相から、前期でも古いいわば初頭に属するものであるということが判明した。そこで、この木製遺物群をB溝と命名した。

大溝調査に入って約1ヶ月余り、西南部、Gグリッド以南の調査により大溝の生成、流路変遷過程、遺物出土状況等の一端が把握された。以後の発掘調査はこの結果を基にして、大溝内の小流路の変遷過程、その層位的相互関係、時期の把握、遺物の小流路別分離などを調査上の重点目標とする等の調査基本方針を立て、調査はこれに従って進められていった。

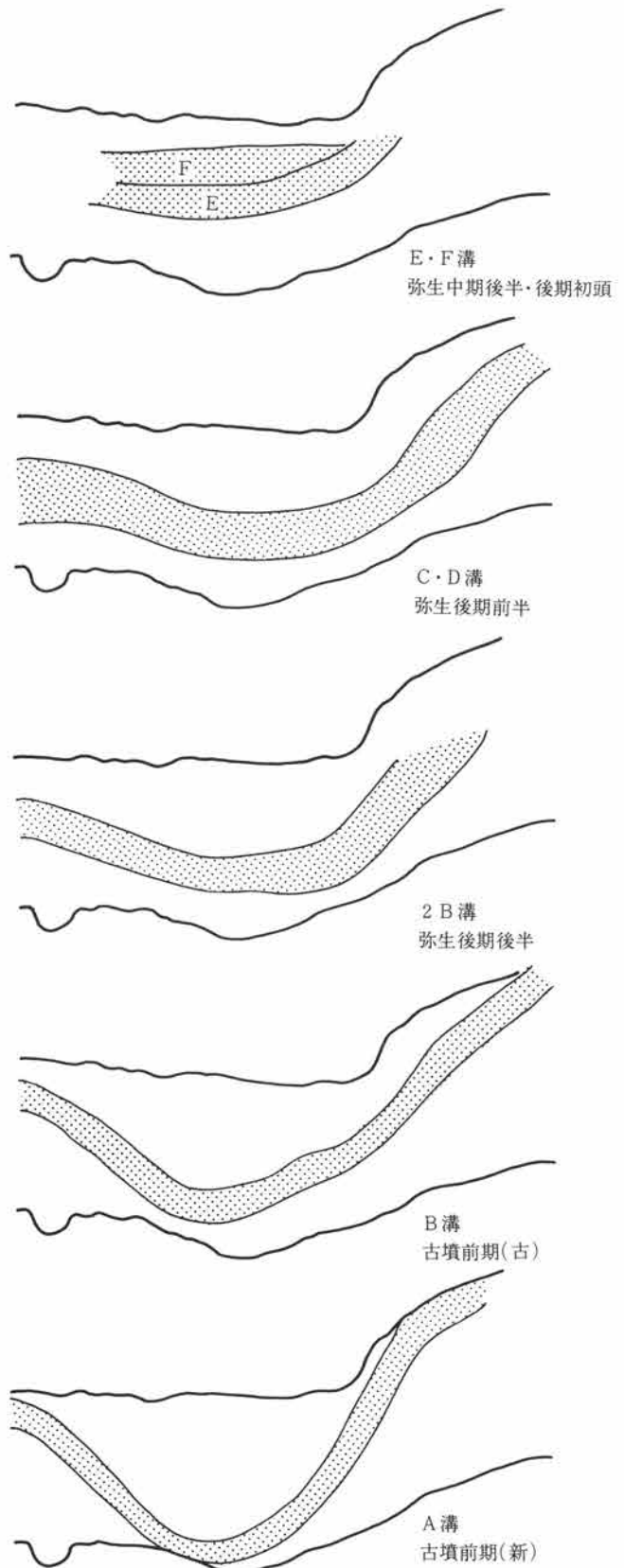
(5) 大溝内小流路の変遷(第11図)

大溝は幅約20m、自然堤防状微高地帯を北東→西南に縦方向に走る旧河道である。その生成は、長期にわたって複雑な経緯を経てなったものである。深さ約1.5m、両岸壁は黄褐色2次堆積砂質土(ローム質)、河床面は、大小の礫を主体とする硬い混土層が大部分を占めている。壁面形状は不規則で、緩い傾斜面、あるいは垂直に近い状態であったり、又、その走行は大きく不規則に緩く曲折している。そこに見る有様は、明らかに自然河川による侵蝕作用により形成されたことを伺わせるものであるが、それは大規模な流れや急流により一気に生成された様子はない。不規則な緩い曲面を見せている両岸壁や溝の埋没過程を示す堆積土層、遺物の出土状況等から大溝の生成は幅4～5m、緩やかで、停滞しがちな小流路が侵蝕と堆積を行いながら流路を不断に変化し続ける過程を経てきたことを示している。

発掘調査では、これらの小流路の各々について、より明確にその分離、摘出、整理を行ない、それに伴う遺物を把握し時期を確定していくことに努めた。しかし人為的な要因が介入していても、自然河川であるゆ

えの複雑さは調査過程において、この作業を相当に難しいものになっている。各流路の分離、摘出は、不断に変化する流れの軌跡としての堆積土層に見る特徴的な現れ、たとえば遺物、土質、砂粒の様子、及びこれらの堆積形状等を以って行っている。それゆえ、任意性の大きい部分もある。たとえば、A溝に見るような、壁面や河床面が把握され、土層断面でも明瞭な現われ方を示す場合や、B溝のように带状木製遺物群が他の遺物群と位置を異にしている場合はA溝に見る条件は備えてないがその分離、摘出は比較的容易で、単位流路として摘出する根拠は明確である。しかしC、D溝のように流路の平面位置がほとんど同じであって、土層断面によって分離、摘出した場合については分離境は明確でなく、各々に伴う遺物の分離も不確かな部分を少なからず伴う。各々の流路の時期は土層に従って分離した各流路の覆土から得られた土器によって示されるが、こうしたケースでは下層の溝の土器が古い傾向を示すものの、それぞれが少なからず混入し合うといった状況が生れやすい。こうした場合、ここから出土した土器以外の遺物、たとえば木製品等も同様の混入が土器と同じ程度に生じていると考えるのが妥当である。現時点では木製品の形態による変化が細かい段階で把握されていないため、時期の判定は共伴土器にたよらなければならない。それゆえに2B、C溝間、C、D溝間にあっては充分この辺りのところを考慮したうえで、相互の分離、摘出された結果を理解しなければならない。

発掘調査は以上の認識の上に行われた。発掘の手順の具体的な進め方については、西南部、及びB～Eグリッド区では、上層、下層に分離し、小範囲内のグリッド区画内で発掘を完結させる方法をとったが、Fグリッドラインより北東上流部の大溝調査は、より新しい溝の発掘を先に進め、しかもそれぞれの溝の延長を追うことに努め、その流路を一つづきに、全様を把握される範囲までできるかぎり同時に掘り広げるという方法をとつ



第11図 大溝内流路変遷

た。土層断面の観察は多くの地点に土層断面壁（セクションベルト）を設け観察記録を行ないながら進めた。横断面方向には4mごとに、西南壁、及びEグリッドラインからPグリッドラインまで13ヶ所、縦断面方向には7グリッドラインから、12グリッドラインまで4ヶ所の土層断面壁を設け、観察記録を行なった。この結果以下に示すような流路を分離、摘出することができた。これらを古い順に要点に従って記す。

F溝

流路の位置・形状 最も右岸寄りに位置する、ほぼ右岸壁に沿っており、曲流は小さい。中流域で把握されているが、上、下流域では不明瞭。中期後半の土器の集中分布域に示される辺りに流路が位置していたであろう。

土層の堆積状況 Fグリッドライン付近では幅3m前後、土層断面で確認される砂礫層で、河床面直上に位置する。

遺物出土状況 他にくらべ遺物は少ないが、加工材、斧柄、鋤等の木製遺物の外、弥生中期後半、(竜見町式)の土器が完形あるいは破片で出土する。

E溝

流路の位置・形状 F溝からおおよそ溝幅分(3m前後)中側に位置する。ほぼ曲流することなく、F溝に沿う。河床面直上に位置するが、河床面にこの流路の侵蝕によって削られたことによる段や溝は認められない。本溝は中流付近で把握されたが、上、下流域では不明瞭。

土層の堆積状況 粗い砂層で、厚さ10~20cm。

遺物出土状況 弥生中期末から後期前半の土器を含み、完形土器も比較的目立つ。木製品はこれに伴うものはきわめて少ない。

D溝

流路の位置・形状 中流部で東南に膨らみを持ち始める。流路幅は比較的広く6~7m。河床面及びE溝上位にかかる。下流部、D、Eグリッド区で河床面に幅2m程、浅い溝状の侵蝕が見られる。

土層の堆積状況 暗褐色砂質土、細かい砂層の薄い層が介在する。土層は比較的厚く、厚いところで20~30cmを測る。

遺物出土状況 土器、木製品、獣骨が著しく目立ってくる。土器は弥生時代後期初頭から前半期のものが主体である。銅釧の一部欠損品が河床面直上より出土。

C溝

流路の位置・形状 D溝とほぼ同じ位置であるが、中流部においてC溝よりさらに東南方向に膨らむ。K、Lグリッド区で強く西南方向に流れを転じる。左岸に沿って木道状遺構の北西傍らの河床に段が見られるが、これが、D、C溝の左岸立上りとなるかもしれない。この付近の河床面及び覆土下層では弥生後期前半の土器がとくに目立って認められる。流路幅は土層堆積幅、後期前半の土器の分布状態から5~6mと比較的幅広であったと思われる。

土層の堆積状況 中流部においてはD溝の上位層として見られる。黒褐色、やや粘質で、場所によっては層中に薄い砂層を縞状に含んでいる。堆積層は比較的厚く、Iグリッドラインでは40cm前後の厚さを見る。

遺物出土状況 溝の上流~下流まで土器、木製品の多量な分布がある。下流部左岸、木道状遺構の西傍に群集する木製品は農具を中心に長い分割材や板材等の加工材を見るが自然木の流木はほとんど認められない。土器は弥生後期前半のものが主体である。獣骨の出土量は多い。

2B溝

流路の位置・形状 帯状木製遺物群を形成する。B溝の帯状遺物群よりも下位、又はやや位置を変えた辺りに見る。上流部では比較的幅広く7m前後、中央部をほぼ、C、D溝に重なる位置に、B溝帯状遺物群と左岸側で一部上下に重なり並行する。中流部ではJ、Kグリッドライン付近でB溝と交差し、強く右曲する。下流部ではB溝帯状遺物群の下位中央寄りを直状に西方向に伸びる。

土層の堆積状況 灰褐色砂質土層で、層中に砂層が介在する。部分的には軟粘質土である。層の堆積の進行は、上流部では左岸側から右岸側へ漸次侵蝕と堆積を併せ進行しながら、B溝の位置まで流路移動を行っていった状況が認められる。中流部、HグリッドラインではC、D溝の上位に位置し、本溝より左岸側に流路をとるB溝に深く侵蝕され、上面には浅間C軽石純層が厚さ約7cmで全体的に覆っている。なお、Eグリッドライン、12グリッドライン土層断面壁でも同様に2 B溝覆土上面に浅間C軽石が覆う状態が認められる。

遺物出土状況 中流部から上流部Pグリッドラインにかけて帯状木製遺物群が密に伸びている。この中には、木製品、土器を多量に認めることができた。ただし、上流部Pグリッドライン以北は帯状木製遺物群は急激に希薄になる。土器は弥生後期後半のものが主体である。銅釧の小片が覆土中より出土。

B溝

流路の位置・形状 上流では2 B溝の西側傍ら、上位に一部重なり幅3m前後で直状に木製遺物群を形成する。上流部右岸はテラスを挟んで2段に落ちるが、下段はB溝の立ち上り部の壁と認められる。中流部J、Kグリッド区では強く右曲するが、この地点で2 B溝の上位になって交差し、2 B溝の外側を壁に沿って右曲し西方向へ直状に下る。この際左岸右曲部、F、Gグリッド区では、A溝の内側にB溝の侵蝕による段ができる。これは、B溝の立ち上り壁となっている。これと同様の状態の壁面はB、Cグリッド区右岸にも見られる。

土層の堆積状況 褐色砂質土、西南土層断面壁、Eグリッドライン、Hグリッドラインでは浅間C軽石層をB溝覆土が切っているが総体に様でない。浅間C軽石の降下はB溝に水流があった時点のことだろうか。

遺物出土状況 帯状木製遺物群を形成する。この遺物群は上流部では密集した状態で、長く伸び調査区域外へ抜けていく。ちなみにこれに対し2 B溝ではPグリッドライン以北は木製遺物の出土状況は希薄になっている。中流部でも、右曲部は密集状態で2 B溝に並走するが、Eグリッド区以西は比較的希薄である。遺物群の中には木製品、土器類は随所に完形品を検出する。完形品のほとんどは古式土師器である。しかし破片では弥生後期後半の土器の方が多い。

A溝

流路の位置・形状 蛇行は最も著しく、上流部O、Pグリッド区、右岸、中流部F、Gグリッド区左岸、下流部右岸B、Cグリッド区は凹形水衝部となり、大溝壁面を侵蝕してテラス状の段、又は薬研状の溝を作っている。

溝幅は比較的狭く3m前後、古墳時代水田跡の中を流れるやや大規模な水路と位置を同じくし、ほぼその直下に沿って認められる。

土層の堆積状況 砂層と黒色粘質土が互層をなす。とくに粗い砂の縞状の堆積が目立つ。浅間C軽石の混入も比較的多い。

遺物出土状況 木製品、土器ともに非常に少ないのが特徴的である。L、Mグリッド区右岸沿いに又鋏、梯子等を見るが、これは発掘時A溝内と判断されたが、B溝に伴う可能性もある。土器も量的には少ないが出土している。古式土師器が主体的であり、小破片のものがほとんどである。S字状口縁甕形土器破片も比較的多く見られる。

(6) 木製遺物の出土状況

大溝から出土した木製遺物は、加工木、自然木を含めその数量は膨大なものである。概数としては加工木は分割材や、削り、切断痕があるというものまで含めると、2千数百点に達する。加工痕の不明瞭な自然木は細枝を除いて3cm以上の径を持つもの数は千点に達する。

加工木の種類については様々である。舟形隆起を作り、そこに角度をつけた円形の柄穴を穿った鋤類、身部は薄く細長いへら状で、基部に緊縛部を設けた着柄鋤、あるいは又鋤、三又鋤、へら状木製品等の農具類や石斧柄、鉄斧柄等の工具類、弭を凸形に拵え、彎曲部に削り調整を加えた丸木弓、赤色塗彩した飾り弓、ボール状の薄手の容器や網代製品など生活用具、薄板を弓状に厚く縁どる緯打具等の織具、方形のホゾ穴や段状の仕口を細工した柱状丸木や梯子、長板材等の建築材、板材や分割材などの用具の原材、その他鋤、鋤の未製品等々、大溝内からは概略40種類に及ぶ各種の木製品が出土した。これらは集落における各分野の、生産から廃棄まで多方面な活動に関わったものであり、この意味では大溝は各時期にわたって隣接縁辺部の集落に多様な関わりを持った「場」であったと言える。

大溝内を時期を追って変遷する流路それぞれに残された痕跡は時期を追って変貌する隣接縁辺遺構群の有様と表裏をなし、集落内に展開した活動の様をより豊かに明らかに内容を持っている。この視点から大溝出土木製品の出土状態についていくつかの角度から追ってみたい。

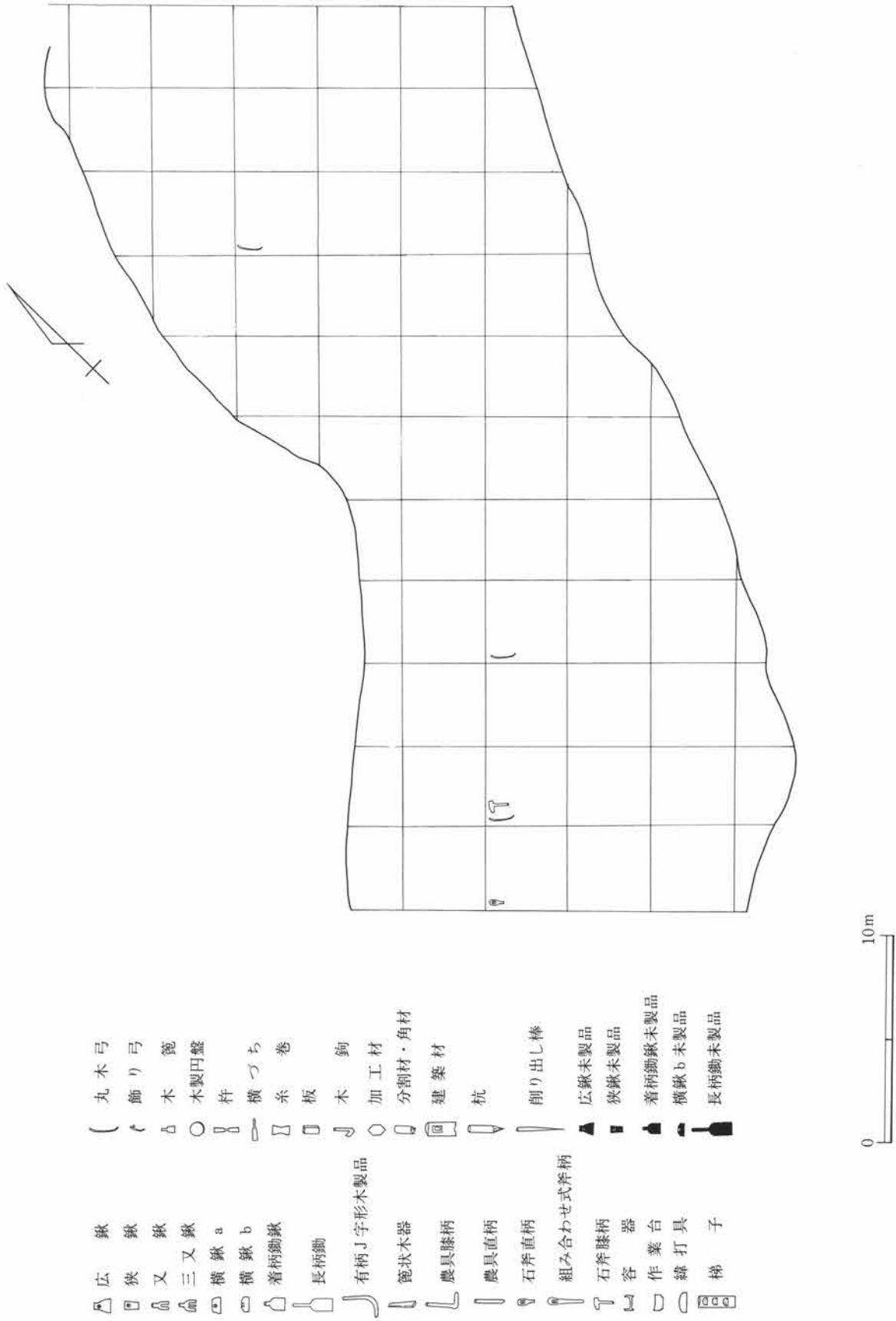
各器種の出土点数比較とその変化（第2表）

下表において、それぞれ一括した流路は第11図に示すように弥生中期後半から古墳前期まで区分された時期をおよそ4段階に表現している。この意味で検討すると時期による器種の出現頻度の変化に注意が向く。各器種の出土点数の動きについて見ると、弥生中期～後期初頭のE溝、F溝を別にすれば、その後、数量に関しては大きな動きはない。しかし器種の消長、出土数量比に比較的目立った動きがある。各溝における器種別総数量、器種間の百分率を2表に示した。これによれば、時期が下るにより出土点数が多くなるという傾向を示すのは又鋤、三又鋤、梯子、建築材でこの中で建築材は古墳前期に激増する。時期を追って少なくなるものは石斧膝柄、石斧直柄、へら状木器、丸木弓であるが中でも石斧柄はとくに衰微が著しく、弥生後期以後は見ない。各時期を通じて変化を見ないものは広鋤、着柄鋤、農具直柄、横づち等の農具、容器、板材、分割材等の加工原材である。又、未製品はそのほとんどが、鋤、鋤において見られる。それゆえ未製品の増減は鋤、鋤の動きにほぼ一致する。

木製品の出土箇所に見る傾向

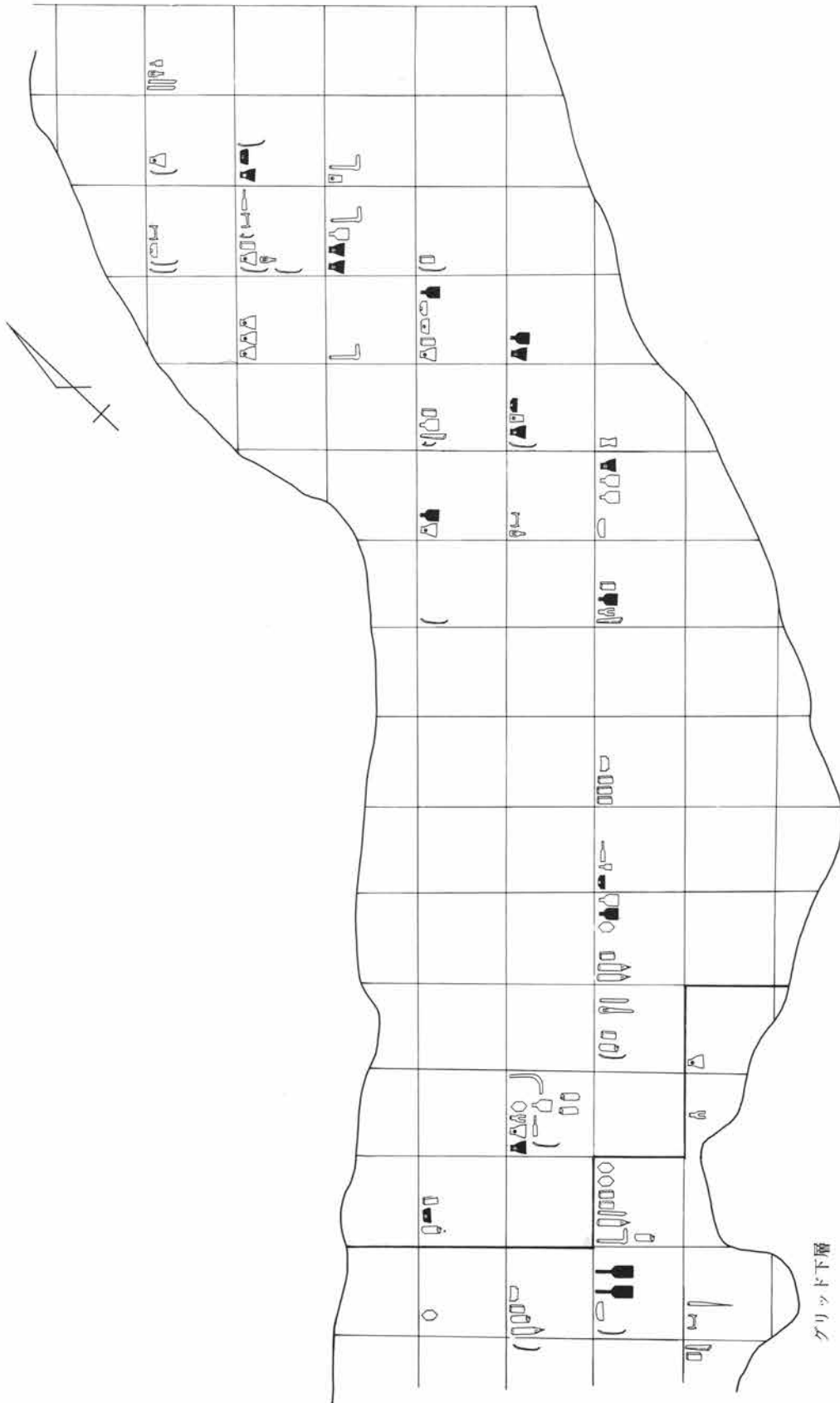
第12図～第15図は木製品が器種によりどういった分布傾向を示すのか、又それが時期を追ってどう変化するのかについて示したものである。各時期の区分は前出第2表と同様である。その現れ方は、出土点数の多いいくつかの器種については偏在性が目につく一方、上流（北東）部から下流（西南）部の間にほとんどの器種が分布に多少の差を見せながらも散在している。ここに見る分布のあり方は、縁辺集落における活動の仕方に起因するものだろうか。このことについてはまず自然的要因、流水による木製品の移動について考慮しなければならない。これはどの程度の水量があったのか、水量は一定した状態であったのか、断続的なものであったのか、これは木製品、自然木の出土状態や、侵蝕と堆積状態の観察、各流路の覆土の状態等の検討を要する。この検討については、これらの事柄の説明の都度ふれていきたい。ここでは、この検討の意味も含め併せて、以下器種分布の状況について見ていきたい。

第12～15図の分布傾向について以下器種別にその現れを指摘する。



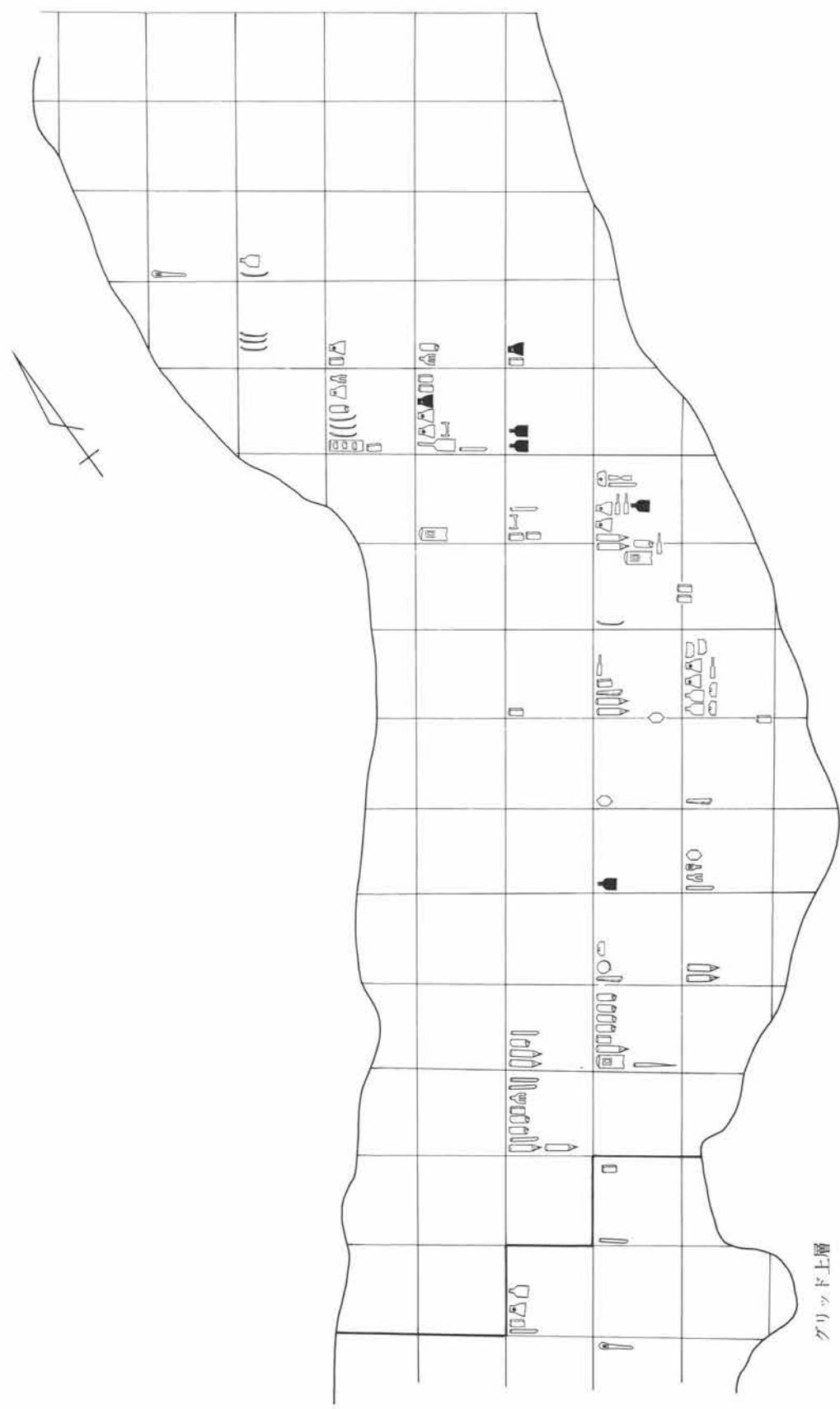
- | | | |
|----|----------|----------|
| △ | 鉞 | 丸木弓 |
| □ | 鉞 | 飾り弓 |
| ◇ | 鉞 | 篋 |
| ○ | 又 | 木製円盤 |
| ◇ | 三 | 杵 |
| ◇ | 横鉞 a | 横づち |
| ◇ | 横鉞 b | 糸巻 |
| ◇ | 着柄鉞 | 板 |
| ◇ | 長柄鋤 | 木鉤 |
| └┘ | 有柄J字形木製品 | 加工材 |
| └┘ | 籠状木器 | 分割材・角材 |
| └┘ | 農具膝柄 | 建築材 |
| └┘ | 農具直柄 | 杭 |
| └┘ | 石斧直柄 | 削り出し棒 |
| └┘ | 組み合わせ式斧柄 | 広鉞未製品 |
| └┘ | 石斧膝柄 | 狭鉞未製品 |
| └┘ | 器 | 着柄鉞未製品 |
| └┘ | 容 | 横鉞 b 未製品 |
| └┘ | 作 | 長柄鉞未製品 |
| └┘ | 業 | |
| └┘ | 打 | |
| └┘ | 具 | |
| └┘ | 梯 | |
| └┘ | 子 | |

第12図 木製品器種別分布図 (1) F溝(弥生中期後半、後期初頭)



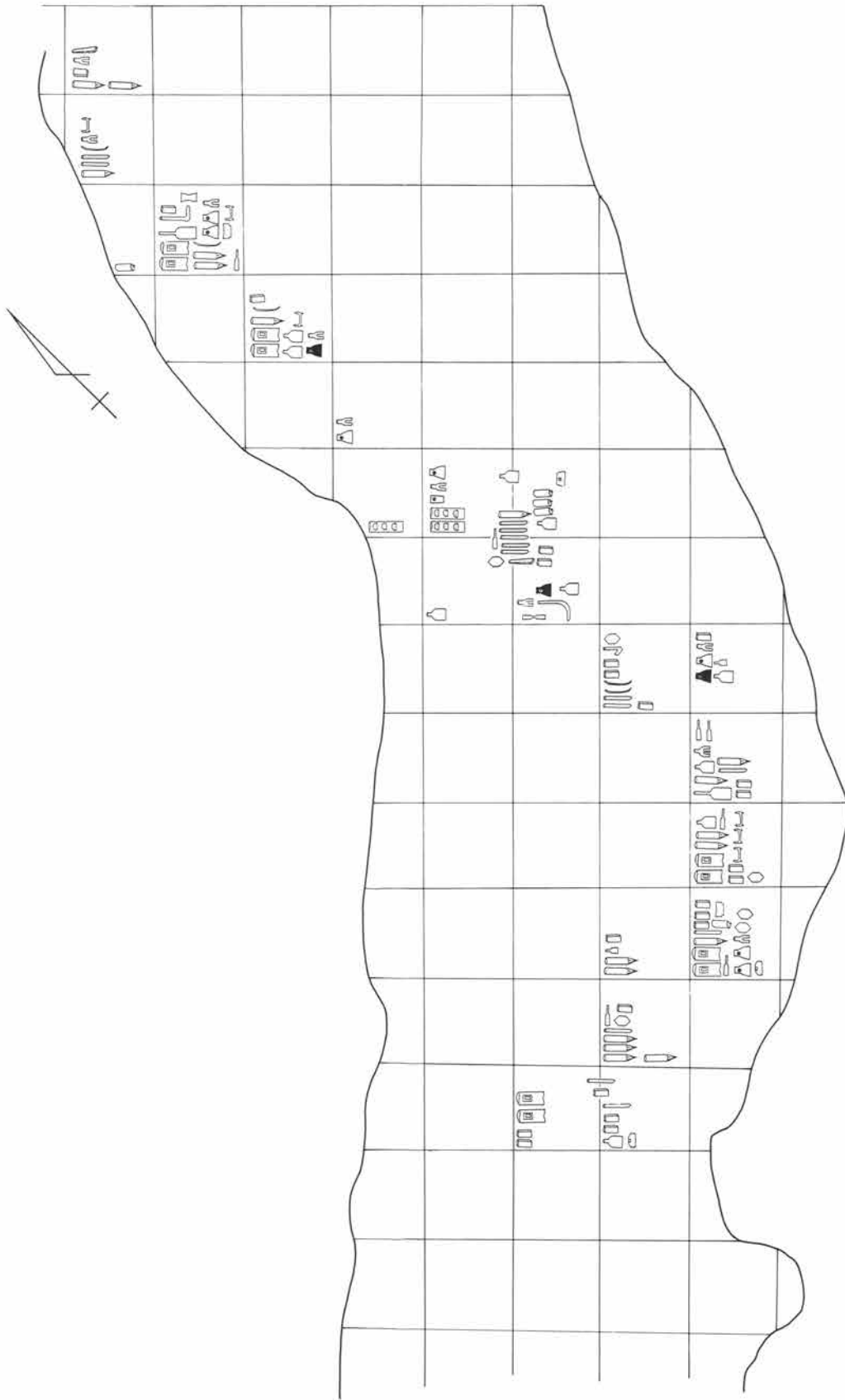
第13図 木製品器種別分布図 (2) C・D溝 (弥生後期前半)、グリッド下層

0 10m



第14図 木製品種別分布図 (3) 2 B溝 (弥生後期後半)、グリッド上層





第15図 木製品器種別分布図 (4) A・B溝(古墳前期)



建築材は古墳前期に上流部から下流部にかけて多出するが狭い範囲に集中を見せない。建築材は他とくらべ著しく長大なものが多く相対的に少ない水量では移動しにくい。これゆえに他のものよりも当初の位置関係を表現していると思われる。見ることができよう。

梯子は弥生後期後半以後に見る。これは後期後半、古墳前期にかけて、合わせて5本見るが、うち4本は8mの範囲に出土している。著しく限られた地点に出土する有り方を見るが、これはこれらの梯子の使われ方が出土地点と直接結びついていたことが想定される。河岸斜面に据え付けた可能性も考えられる。

原材類、板材、分割材、杭状加工木については弥生後期から古墳前期にわたって一様に大溝下流部に集中する傾向を見る。

関連器種の位置関係

これは木製品の製作、使用、廃棄の各過程で相互に密接な関係を持つ器種についてこれらの間にどういった出土傾向が認められるか、ここにそういった関係があると思われるものについて順次取り上げてみたい。

原材と未製品 原材類としては板材、長板材、分割材、角材、杭状丸木材等がある。一方未製品として認められるものはほとんどが鋤、鍬の類であるということから、これらの未製品を出土原材に見るなら、それは板材類ということになる。この製作工程上からの個別に及ぶ対比は別項で取り上げる。図版に示す板材でも鋤、鍬の原材となり得るのは一部である。成形時、切り割られた半端材と思われるものや農具には成り得ない形状、大きさのものもある。なおこの板材より前段階の材については本遺跡でまったく見られない。この種のものとして想定できるのは、原木あるいは数分割された粗加工材であるが、こういう類は見ない。板材はほとんどのものが平面、側面、木口面の3面に一応の面調整がなされている。

まず出土点数比、分布傾向について見る。出土点数比は弥生後期前半で鋤、鍬未製品と板材はほぼ同数に近い状態であるが、時期が下るにつれ未製品の方が顕著な減少を見せる。一方分布状態は弥生後期前半では板材は下流部に、未製品は上流部に対置した状況を見るが、後期後半では分割材などは下流部に集中を見せるが板材については未製品の分布と一致し、上流部に比較的密な分布を示す。古墳前期では板材は中、下流部に濃い分布を見るが鋤、鍬の完成品、未製品ともに分布が分散的である。以上の傾向についてその背景は、原材未製品とも、加工過程のものであるということから、これらが示す出土場所は単なる投棄場所ということだけでなく製作工程上の理由により貯木あるいは水漬けする上に好適な場所と認識されたという理解の仕方もあると思う。こうした理解に立って、相互の分布を見るとするなら時期により大きな動きを見せる事の意味に注目する必要があるだろう。

鋤と鍬の柄 鋤の柄と思われる棒状製品の出土状況は2つのあり方が見られる。一つは鋤の身に装着された状態で出土する場合。もう一つは30cm前後の長さの断片で出土するという2態で見られる。前者の場合、柄穴を残す鋤身部37点に対し4例ある。その柄の状態は長さ5cm前後遺存するのみである。ただし欠損部はほとんどの場合長い年月のうちに強度が衰えて欠けたものだろう。へし折られた時に生じる縦割れやささくられた状態はない。投棄された後長い年月で細かく分断したのも多いと思われる。ただし、接合関係については太さ、木取り等により念入りに調べているのでここに示された点数は実際の個体数と大きな差は生じてはいないと思う。鋤身部との数量的関係については消耗度の違いについても考慮しなければならない。両者材質を異にしており、鋤身部はカシ、クヌギ類を使用し、柄の方はクヌギ、ムクロジ、ヤナギ等を用いている。前者に使用される材は硬いものが選ばれ、カシ等は遠隔地から求めなければ得られなかったという。柄に使用されている材は近隣に自生する比較的柔らかい材質のものが選ばれている。身部と比べどちらが多く消耗したか予想し難いが、いずれにしろ、このことも考慮に入れて相互の比較をしなければならない。

鍬身部と柄の数量的関係については鍬身部は時期を経るに従って減少傾向を見るに對して、柄の方は目立った動きは認められない。出土場所については、弥生期、鍬には前述した偏在性が目立つに對し柄には全時期を通じて分散的傾向が強い。

農具膝柄と着柄鋤鍬、又鍬、三又鍬 農具膝柄は全時期通じて7点見るのみである。これに對し着柄鋤鍬、又鍬、三又鍬の完成品は合わせて46点出土している。両者の出土点数には大きな差が見られる。特に古墳前期（A・B溝）ではこの種の鍬20点に對し農具膝柄は1点見るのみである。こういった事情を理解するためには消耗の問題や両者のセット関係の検討をさらに行っていかなければならないだろう。

木製品の破損状況

大溝に木製品が投入された際、その物が持った本来の機能を少しでも損なうような状態が有ったか、無かったか、あるいは損じているものはそれがどの程度か、といった出土状態は、そこに投入した行為者の意図、たとえば投棄か保存か、その場において何らかの行為に付随して供したのか等々考察する際、とりわけ大きな判断の要素となるだろう。第3表はそうした破損状態の程度を器種別に表わしたものである。これによればその破損状況は器種により大きな差が生じている。その目立ったものについて以下指摘しておく。

- (1) ほとんどのものに破損が見られない。未製品、原材がこれにあたる。この場合投棄は考えにくい。水漬け等を目的とした貯木等についても考慮する必要がある。
- (2) 完成品ではほぼ欠損を見ないものが大半を占める。横植、作業台、緯打具、糸巻状木製品等。これ等は現時点では認識できない重要な損傷あるいは製作ミスがあったか。又は新品交換がたやすいのか。一定期間で交換するのか。大溝の畔で木製用具を用いた作業を行ない置き去ったか。
- (3) 大半が本来の機能を果せないまでに損傷している。この場合機能上重要部分を欠損するか、欠損部が大きいといったケースである。又鍬、着柄鋤鍬、農具膝柄、農具直柄、石斧直柄、組み合せ式斧柄、容器、丸木弓等である。これ等は使用不能なため、廃棄物として大溝に投棄されたと見て誤りはない。

(1)について、分割材では、その加工の施され様は、 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{8}$ ぐらいに割り裂いて、割った面はほとんどの場合、粗く、ささくれたままで、面調整はなされず、両木口面は切断痕が残っている。およそ長さ1m、幅10cm程のものが普通であるが、これに見る欠損はほとんど長い年月経るにより、強度が衰え折損したと判断できるものである。板材は標準的なものでは、横断面がやや芯側に尖るくさび形をなすもので、木口面に切断痕を残し、器面は粗く調整される。中でもそのうちいくつかは大きさ、形も一定に整え面調整も丁寧で、木口面にも割り裂いた後に削調整しているものも見られる。(No.457、No.459)これらに見る欠損箇所は芯側の尖って薄い部分や、角の部分に認められるといった程度である。成形、面調整とも丁寧に整えられた板材では、遺存状態は特に良い。この類の板材にはカシ材等近隣で得られない樹種もあり、たやすく廃棄処分にして投げ棄ててしまう事は考えにくい。ただ、成形、面調整とも整っているが、木口面の切断痕が粗く残っている小板材がある。(No.437)これは横幅に對し縦に特に短いため、板材から必要な長さを切り取った残り、半端材とも思われる。ともあれこれ等の原材を見ると、およそこのような状態から、材としての利用価値が失われてしまったものとは考えにくい。大溝内小流路よりこれが大量に出土することは、これ等は後日の使用に備えて水辺に貯木していたか、後の加工の都合上、水漬けにして置かれたものである可能性を考慮する必要があるだろう。

未製品は鍬、鋤では相当の比率を占めている。(第2表)これが大溝から出土することの意味についても、やはり原材の場合と同様の検討を行う必要がある。広鍬では工程的には2段階のものが見られる。1つは鍬としての加工が進んでいないもので、粗く外郭が作り出され、両側縁部が成形されはじめるが、船形隆起等

は作出されない。さらに進んだ段階のものとしては、外郭、船形隆起、面調整はほぼ仕上げられるが、柄穴の穿孔、刃部を薄く削り出さない段階のものである。このうち前者の段階で、2個、刃部でつながり切り離されていない状態のものや（No.107）、後者の段階で切り離されてそのまま放置され、それぞれ隣接して検出されたもの（No.4、No.5）等がある。これ等は長い年月による腐蝕により、部分的に欠損を見るものがあるが、総体としては、完成品に比べ遺存度はずっと高い。これは他の鍬類、鋤類でも同様である。この他長柄鋤であるが、No.133とNo.135は長大なものでそれぞれが140cm、161cmに及び実用になるものかどうか疑問を覚える。これが2点1mも離れずに近接して出土している。しかも両者まったく欠損はない。刃部の削り出しや握部の細工も行われておらず、器面調整も十分施されていないことから、これも未製品と思われる。出土時点での観察では、製作を断念しなければならない様な、破損や製作ミス等の様子はほとんどのものに認める事はできなかった。これ等未製品についても原材の場合と同様、廃棄以外の背景を検討する必要があると思われる。

上記(2)完成品でほとんど欠損を見ないものが大半を占める器種について、まず横槌であるが、形状は比較的単純な棒状を呈しており、ほとんどのものが成整形が粗く、特に成整形の粗いものには、大きな破損が認められないという傾向があるようである。作業台については、形状は単純な丸木材を若干加工を加えたものが普通であるため、破損しにくいことは確かだろう。しかし工作が行われた面には損耗が進んでいるものが多い。使用痕は、鋭い刃痕、打痕による窪みが見られる。これ以外に総体に使用中の破損と思われる痕跡は見ない。この他、糸巻具ではほとんど欠損を見ない。No.259は出土時点では欠損はなく、半分に破損したのは検出以後である。緯打具も大きな欠損はない。これ等はその性格上、力が加わりながら機能するものではないので、目立った破損は生じにくいといえる。しかし使用不能による廃棄であるならば緯打具等は特に目立たない損耗なども、その機能に大きく影響をもたらすということがあるのかも知れない。

上記(3)欠損の大きい器種についてであるが、これはまず農具では又鍬に著しい。又鍬の場合、その破損の仕方特に目立つのは股のつけ根の部分の木目に沿った縦割れである。しかも、その破損面はさきくれており使用時、大きな力が加わって割れたものと認められる。これはこの部分に使用時に力が集中するところでもあり、又構造上も弱い部分であるためである。この箇所の破損はその本来の機能、形状を決定的に喪失するものであるため、使用不能による廃棄とする判断は確実性が高い。

弓の場合も同じく、すべて折れている。例外はない。その折れ方も破損部は著しくさきくれて、かなり長い縦方向の裂け目が何本も入っている。ほとんどの折れ口がこういった状態になっている。これは明らかによほど特殊行為が伴わない限り、（たとえば祭祀に伴う破壊）使用時の破損である。

着柄鋤の場合も、大半が大きく破損している。破損部は刃部下半が欠損するか基部を欠くものが多い。形状が比較的長く薄いため、そうした場所が破損しやすい。この他注意されるのは本来の形状が変わるまで刃部が磨耗したものであり、No.91はそれで身部が著しく短くなっている。これも効率が悪くなったため廃棄されたのだろうか。ただなかにはNo.123、No.118のように完成品で非常に薄く長い形状であるにもかかわらずほぼ完形に近い。他にもこうしたものが2、3ある。

容器、槽もほとんどのものが大きく欠損している。しかも半欠以上に破損している。ただし作りが粗い小型の丸木状の容器等は欠損が部分的である。No.241はどこにも欠けたところはなく、器壁は厚く器面には削り痕が粗く残っており未製品と思われる。

大溝出土遺物と木製品

以下では木製品の出土状況について、自然木、土器、獣骨、種子類等も含めて概観し、当時の大溝の景観

第3表 木製品器種別遺存状態

	A		B		C		D		E		計		A		B		C		D		E		計
	数	百分率	数	百分率	数	百分率	数	百分率	数	百分率			数	百分率	数	百分率	数	百分率	数	百分率	数	百分率	
広 鋏	9	19.1	4	8.5	6	12.8	13	27.7	15	31.9	47	横 づち	11	55.0	4	20.0	2	10.0	3	15.0			20
狭 鋏	1	25.0	1	25.0	1	25.0	1	25.0			4	容 器	2	13.0					11	70.0	2	13.0	15
又 鋏	1	6.2			1	6.2	14	87.6			16	作 業 台	6	66.7	2	22.2			1	11.1			9
三 又 鋏					2	50.0	2	50.0			4	飾り弓							2	100.0			2
横 鋏	2	11.1	2	11.1	6	33.4	4	22.2	4	22.2	18	丸木弓							44	100.0			44
着柄鋏	1	2.5	2	5.0	6	15.0	17	43.5	13	34.0	39	緯打具	1	50.0	1	50.0							2
長柄鋏	2	25.0			2	25.0			4	50.0	8	糸 巻	2	66.7					1	33.3			3
有柄丁字型木製品	1	25.0					3	75.0			4	木製円盤	1	100.0									1
木 筥	3	23.1			3	23.1	7	53.8			13	木 鈎	1	100.0									1
農具膝柄			1	14.3	1	14.3	5	71.4			7	梯 子	2	40.0			3	60.0					5
農具直柄					6	18.8	21	65.6	5	15.6	32	建 築 材	1	5.9			7	41.2	9	52.9			17
石斧膝柄							1	100.0			1	杭	11	28.2	3	7.7	13	33.3	12	30.8			39
石斧直柄	1	20.0					4	80.0			5	板	21	30.5			33	47.8	15	21.7			69
組み合わせ式斧柄	1	20.0					4	80.0			5	加 工 材	9	56.3			5	31.2	2	12.5			16
杵			1	50.0			1	50.0			2	合 計	90	20.0	21	4.7	97	21.7	197	44.0	43	9.6	448

- 凡例 A. ほぼ完形。
 B. 使用による摩耗著しい。機能はやや低下。
 C. 一部欠損。機能は大きく低下。
 D. 欠損著しい。機能を完全に失う。
 E. 未製品。

を理解する上の検討材料としたい。

加工木、自然木の出土状態は各時期にわたって群在を見るが、特に2 B溝、B溝では、おびただしい量の大小の加工木、自然木がまさに足の踏み場もない程に、密に重なり合い帯状に群集している。それらのなかには枝先の部分やあるいは枝木もとり払われない幹、樹木が横だおしになっているものなど様々である。大きなものではF、Gグリッドに長さ5m、太さ25cm程の幹径をもち、枝の基部を残す幹や、N-8、9グリッドには根こそぎ横だおしに倒れた状態で、立木の時の状態に近い形で枝先までほぼ、原形を残す樹木を見る。これは根元近くで幹径40~50cm、樹高6mを測る。これがB溝流路から、斜横方向、南方向に流路外に枝部をつき出した状態で横たわっていた。自然木の中でもこの2本は特に大きい例である。太さ15cm以下で、長さ2m前後のものが概して大形のものとしては一般的で、こういったものが随所に目につく。この他細枝もいたるところに散乱している。しかし最も多く目立つのは径5~10cm程の棒状の類であり、表面の原形が崩れており、果して加工が加わっていたものか否か判断がつきにくいものである。こういったものが、傾向として流れる方向に沿った向きをとって、おびただしく重なり合って見られる。

第4表は第9表に示されたもの以外で、上記の自然木、木材、2058点を加工の有無、及び加工状態に従って自然木、割材、一部加工材、板材の4種類に分類し、それぞれ出土量を比較したものである。ここで自然木とするものは、加工痕が見られない丸木。割材は、 $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{1}{8}$ に分割した割材。一部加工材は、端部に切断痕や一部に切痕や削痕が認められるもの、板材は板状の割裂材である。これ等は総じて遺存状態が悪く表面も腐朽し、形も崩れている。このため、加工状態の判別には切断面観察も併わせ行なった。

第4表 木製遺物加工状態点数比較

出土地点	自然木	割材	加工材	板材	計
A 溝	21	14	26	—	61
B 溝	117	63	91	5	276
2 B 溝	120	86	65	1	272
C 溝	23	25	15	—	63
D 溝	21	22	25	—	68
E 溝	17	6	16	—	39
グリッド上層	122	39	18	24	203
グリッド下層	534	300	104	56	994
その他	12	14	8	48	82
合計	987 (48%)	569 (28%)	368 (18%)	134 (6%)	2,058 (100%)

※ 図版に示したもの、第9表のものは本表には含まれない。

この表の示すところによれば、明らかに加工が加わっていると思われる割材、一部加工材、板材が全体の約半ばを占めている。さらに、この他、第9表に示す木製品資料、1100点余りを加えるならば、大溝内出土木製遺物のうち明らかに加工木、又は加工過程で生じたと認められるものは70%近くになる。

大溝における木製遺物の群在について、その生成過程は土器や獣骨の散在するに至る過程と同時進行でなつたものであり、その要因は、周囲の集落における生産活動、生活に伴う行為の結果生じたものと認められよう。そこは獣骨や栽培種の種子、食物残渣や破損した土器や木製品等、様々な生活廃棄物の投棄場であった。又一方では、割材や板材等の原材や、加工過程の鋤鎌の未製品等が多量に木材や自然木と混在し、さらに木道状遺構、杭列の存在等、一概に廃棄物の投棄の場としてだけに限定できない、活動に伴う場でもあつたようである。

大溝出土遺物群中比類なく膨大な量の出土を見るのは木製遺物である。この状況は、集落における生産、生活用具等の諸種の器物のある程度大きな部分（土器の場合は総量の約30%）が大溝内に埋没したと仮定すれば集落内における活動に伴い多くの木材が消費されたかということを示している。なかでも製品に比べ加工過程の原材、廃材が圧倒的に多い。このことは木製品の消費にも増して木材加工が盛んに行われたことを示していないだろうか。

(7) 木道状遺構 (図版7、8)

大溝南端部左岸はおよそ4m前後スリ鉢状に湾入する。湾入部の壁面は比較的硬い黄褐色砂質土である。壁面は凹凸はなく滑らかな面をなす。深さ1.7m、底面は中央部が窪む。木道状遺構は湾入部南側壁部より、防波堤を思わせる形をとって突き出している。遺構は長さ3.6m、長割材や枝部を短かく切り残す丸木材を2～3本並列し、両側に杭を打ち込みこれを押え、横木はそれぞれの長さ約1.8mでこれを縦に2本分連ね、長く渡している。この横木は溝底よりおよそ60～70cmの高さに位置し、溝覆土、黒灰色粘質土と、砂層が互層をなす土層上に設けられている。横木の上面は木材の表面が腐蝕し原形が著しく崩れているので、使用時の状況を正確に想定するのはむずかしいところであるが出土時の状態は、北半部は湾側に、上部が鋭い角を持った断面三角形の割材を、大溝側には太さ約16cm、枝を短く切り残した丸木材を根本側を先端方向にして2本、

並列に並べ、湾側では丸木材、割材による杭を溝底面に届く程に打ち込んでいる。杭は湾側では南端部、壁に近いところで1本、北半部で3本打ち込まれている。

木道状遺構の南端部は湾入部南壁のほぼ中位にとりついている。そこは河岸上面から岸壁の斜面を1m程降りた所にあっている。しかし木道状遺構の上位壁面には階段等の施設は認められなかった。本遺構の周囲には長細い割材が遺構とほぼ同じレベルで不規則に散乱していた。これら木材中には自然木がほとんど認められず、しかも、流れにより移動した様子はなく本遺構を中心に集中する様子が見られる。

本遺構の時期については、本遺構から湾入にかかる土層は大溝中心部よりも新しく、湾入部上位層には古墳前期の土器が出土する。又、古墳後期水田面調査時点で、湾入部はスリ鉢状に90cm、周囲より陥没していた。このような状況から、本遺構の時期は弥生後期後半から古墳前期の間にその使用があったと思われる。

(8) 大溝出土土器の時期とその出土状況

大溝より膨大な量の弥生土器、古式土師器が大小の破片、あるいは完形、半完形で出土している。これ等の土器のうち完形、半完形のものはそのすべてを図版に示した。破片についてはその数は口縁部破片でおよそ10,000点にのぼる。その一部を第22～39図にて拓本で示した。本遺跡においては大溝の他、住居群等からも多量の土器が出土している。大溝出土土器の量は本遺跡における出土弥生土器、古式土師器総量の約30%を占めている。土器は各溝覆土中にて、木製遺物や獣骨等と混在した状態で出土している。器種は図に示したように壺、甕、台付甕、鉢、高坏等が各溝ほぼ一律な割合で混じっており、その出土状態は意図的な据え置きや献納と言った様子はなく、破損を受けたものが散乱し、すべて無差別に生活廃棄物として投棄されたと思われる状態であった。

出土土器は弥生中期後半から、古墳時代前期までのものであり、それ以前、あるいは以後のものは2、3の小破片を見るのみである。弥生土器は楕円文が主文様として施されるもので、形式的には竜見町式や樽式におよそ該当するが器形、文様は多様であり、多くの類型に分類することができる。そして各々の類型は同系列上での漸移的变化過程の中で表出したもの、あるいは異った系譜を色濃く感じさせるもの等が認められる。それ等は大溝内小流路出土土器群中に各様の出土量、割合いを見せている。

分類された類型の各々は個有の年代、系譜をその属性として保持しており、各流路より出土した類型各々の出土量比率は各流路の年代、各流路中より出土した木製品等、土器以外の遺物の年代、系譜を表現する。

図版、挿図には大溝内小流路、F溝からA溝まで各溝ごとにその覆土中出土土器を掲載した。ここに図示された土器を概観すると同一溝の出土土器間には同類型の集中あるいは器形、文様要素に、より高い近似性が見られる。小流路はF溝からA溝へ順次変遷したことが調査時における層位等の所見により確認されているが、それぞれの溝の出土土器は古い溝からこれが新しくなるに従って器形、文様に古い特徴、要素を失ない、新しい特徴、要素を備えたものになっている。そこにはほぼ断絶のない連続的な型式組列が各溝の層位的新旧と整合性を持って認められる。しかしその一方、部分的ではあるが、各溝覆土中の、時期的に同じ、又は近似した類型群中にそれらよりも著しく古い要素、特徴が支配的である土器が認められる。このことについては以下に記す理由が考えられる。第1は、それぞれの土器が併存関係にあつて器形、文様に新しい要素が生じながらも一方では古い要素も残存し、これらが使用、廃棄時点で共存していた。第2は小流路の生成、埋没の間が長く、この間に土器に変化が生じた。第3は混入である。これは新しい流路が古い流路を侵蝕すれば必ずあり得ることである。この他発掘調査時各溝覆土の分層、覆土内遺物を取り上げる際の技術的限界による混入も考慮しなければならない。

第17図は大溝全体にわたって出土した完形、口縁部を遺存する半完形土器、口縁部破片のすべて、総数約10,000点を対象資料とし、器形や、一定の施文部位に施された単位文様、あるいはこれ等の間での一定の組み合わせを基に類型分類し、その類型の中でも特に年代幅がより短期に限定でき、なおかつ出土点数が多いものを弥生中期から古墳前期まで8例抽出し、その個体数、破片数の総てをグリッドごとに集計し、これに応じた数の記号をグリッド地点ごとに8類型の出土量を表わすように示した。ここにおいて、この8類型以外の類型土器も多量にあるので不確定要素を含んではいるが、それぞれの時期を表現する類型土器の出土量の差は各時期の投棄量の多少を示し、さらには前記大溝土器の全体の土器量の中で占める多さや無作意な投棄を考慮すれば、各時期の土器消費量を表現するところでもあるだろう。又、一方各種の記号で表わした8類型各々の分布状況は調査時確認した各溝の流路形状、その及ぶ範囲に対照すれば、即ちこれを一定程度検証するところとなる。

第18図～第21図は第17図と同じ資料により各溝ごとに覆土中出土土器の分布を示すことにより、それぞれの流路形状、その及ぶ範囲を表わし、さらに上記8類型の各溝出土総個数、破片数をグリッド単位で示している。各溝の年代については8類型の出土点数傾向より表現されているがやはりここでも、それぞれの溝で同じか、年代的に近い類型が高い頻度で各溝に集中している。しかし一方では大幅に時期が異なる類型の土器の混在が少なからず認められる。この背景は前記のとおりである。

本書では木製品をはじめ土器以外の遺物についても各流路にもとづき整理して掲載している。これは、それ等の遺物の年代が、それぞれが出土した流路の年代におよそ一致することに基づく。しかし、部分的には土器の場合と同様。異った時期に属するものが混入しているということが予想される。ここに取り上げた出土土器の有様はそのまま出土木製品等の場合にも言えることである。以下に第17図において図示した8類型について器形、文様の特徴と年代について記し、さらに拓本図、土器図版と対照させておく。なお、ここに示した8類型の型式的、層位的検討については他の類型も含め本遺跡報告書第2分冊・集落編に掲載を予定している。(佐藤)

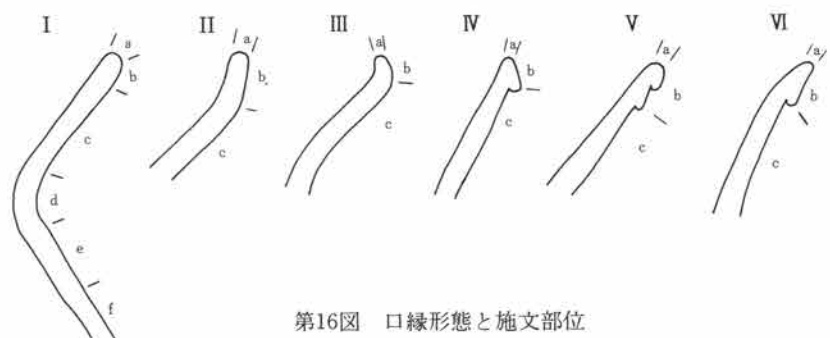
(9) 大溝出土土器各類型の器形、文様の特徴と時期 (第5表)

凡例

文様、施文部位の欄に示す(a)～(f)は右の図のように施文部位を表わす。第22図～第39図の土器説明文中においてもこの記号により施文部位を指している。

表中に使用している類型の名称は弥生土器の属性分析の際使用しているもので、ロー

マ数字、アルファベットは右図のように各々口縁部形状、施文部位を表わしている。数字は単位文様を表わし、類型名中“20、は細かい刻目(一部に無節縄文)文、“30、は単節縄文を意味している。

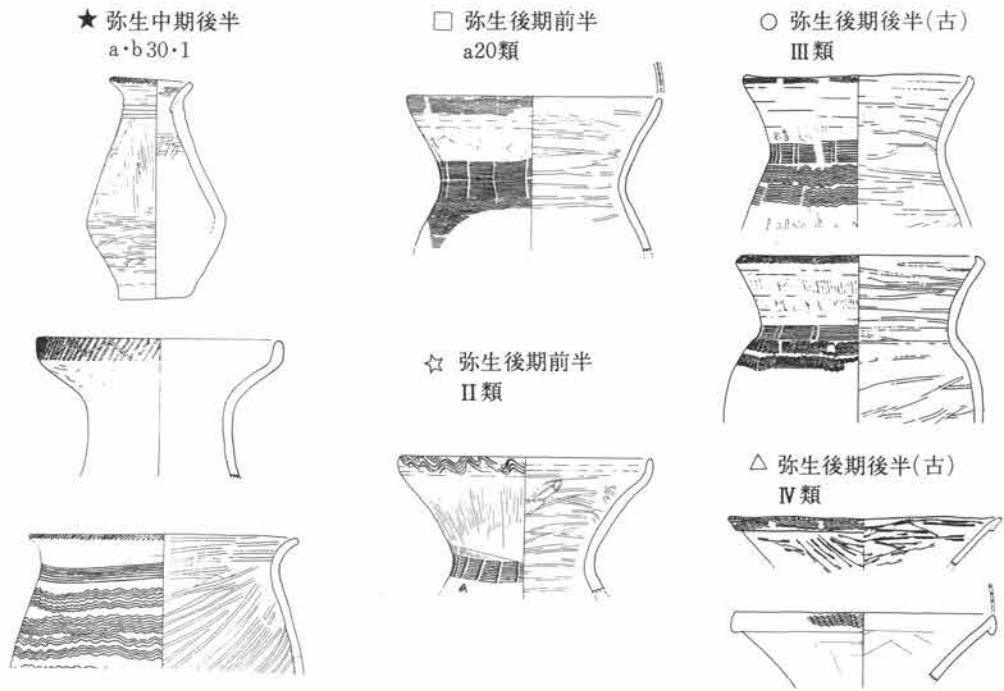


第16図 口縁形態と施文部位

(第5表)

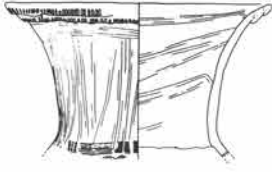
類型、時期	記号	口縁部形状	口縁部文様、部位	頸部(d)文様	挿図、図版中該当土器
a・b30・1 弥生中期 後半	★	平縁口縁 受け口状口縁	a 単節縄文 b 〔沈線波状文 沈線鋸歯文 (地文は単節縄文)〕	沈線平行線文 沈線波状文 沈線鋸歯文 (地文は単節縄文)	第22図1～11 第23図38～40、43 第24図1～17 第26図67～74、82～85 第29図3～10 第30図57、58、61 第34図33 図版遺物番号 601、603、604、609、610、612、638、756、757、758
a 20 弥生後期 前半	□	平縁口縁 受け口状口縁	a 〔細かい刻目 無節縄文(一部)〕	等間隔止め簾状文	第22図12、13 第23図45、51 第24図29 第25図39、40 第27図86、90、97～100 第30図33、62～65 第31図66 第33図6、7 第34図37、45～47 図版遺物番号 637、776、778、779、782
II 弥生後期 前半	☆	受け口状口縁	b 〔櫛描波状文 無文〕	等間隔止め簾状文	第22図14～16、19、20 第23図52、53 第24図31、32 第25図33～38 第26図75～81 第29図22～31 第33図5、8 第34図36、38、39 第38図1、2 図版遺物番号 644、680、777、778、780、793、795、796
III 弥生後期 ～後半 (古)	○	小さく内折する口縁	a・b 〔櫛描波状文 無文〕	等間隔止め簾状文 2連止め簾状文	第23図57～59 第27図108～110、112、113 第28図114～116、132、134 第31図70～78 第32図94～98 第34図50～53 図版遺物番号 639、645、659～661、674、781、794
IV 弥生後期 後半(古)	△	幅狭い断面三角、カマボコ状折り返し口縁	a 〔粗いヘラ刻目 無文〕 b 〔櫛描波状文 無文〕	2連止め簾状文	第23図35、37 第26図64、65 第30図53～56 第32図92 第33図19、21、22 第34図29 第35図66 第36図1、11 第38図15、16、24、25 図版遺物番号 629、666、765
V 弥生後期 後半	●	多段口縁	b 〔粗いヘラ刻目 櫛描波状文+ 粗いヘラ刻目〕	2～3連止め簾状文	第26図66 第30図51、52 第33図15～17 第35図62 第36図2、10 第38図11～14 図版遺物番号 683、735
VI 弥生後期 後半	●	幅広い折り返し口縁	b 〔(※)粗いヘラ刻目 (※)櫛描波状文 無文〕 c 〔(※)櫛描波状文 無文〕	2～3連止め簾状文	第23図60、61 第28図128～131 第32図89～91 第34図30～32 第35図55～61、64、65 第36図8、9 第38図17～22、26、27 図版遺物番号 656、667、668、671、691、692、693、713、736、737、791、801
古墳前期	▲	平縁口縁(甕)	a 無文、(一部刻目) b、c 粗いハケメ	粗いハケメ	第37図26～28 第39図34～44 図版遺物番号 709、720～723、741、742、749～751、824～827
古墳前期	⊗	S字状口縁(甕)	a、b ヨコナデ		第37図29～48 第39図45～56 図版遺物番号 724、726、743、828、830

(佐藤)

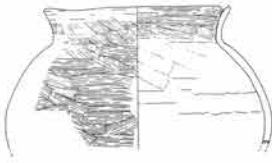


第17図 類型別土器分布図 (1)

● 弥生後期後半
V類



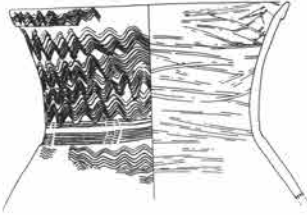
▲ 古墳前期
単口縁甕



⊗ 古墳前期
S字状口縁甕



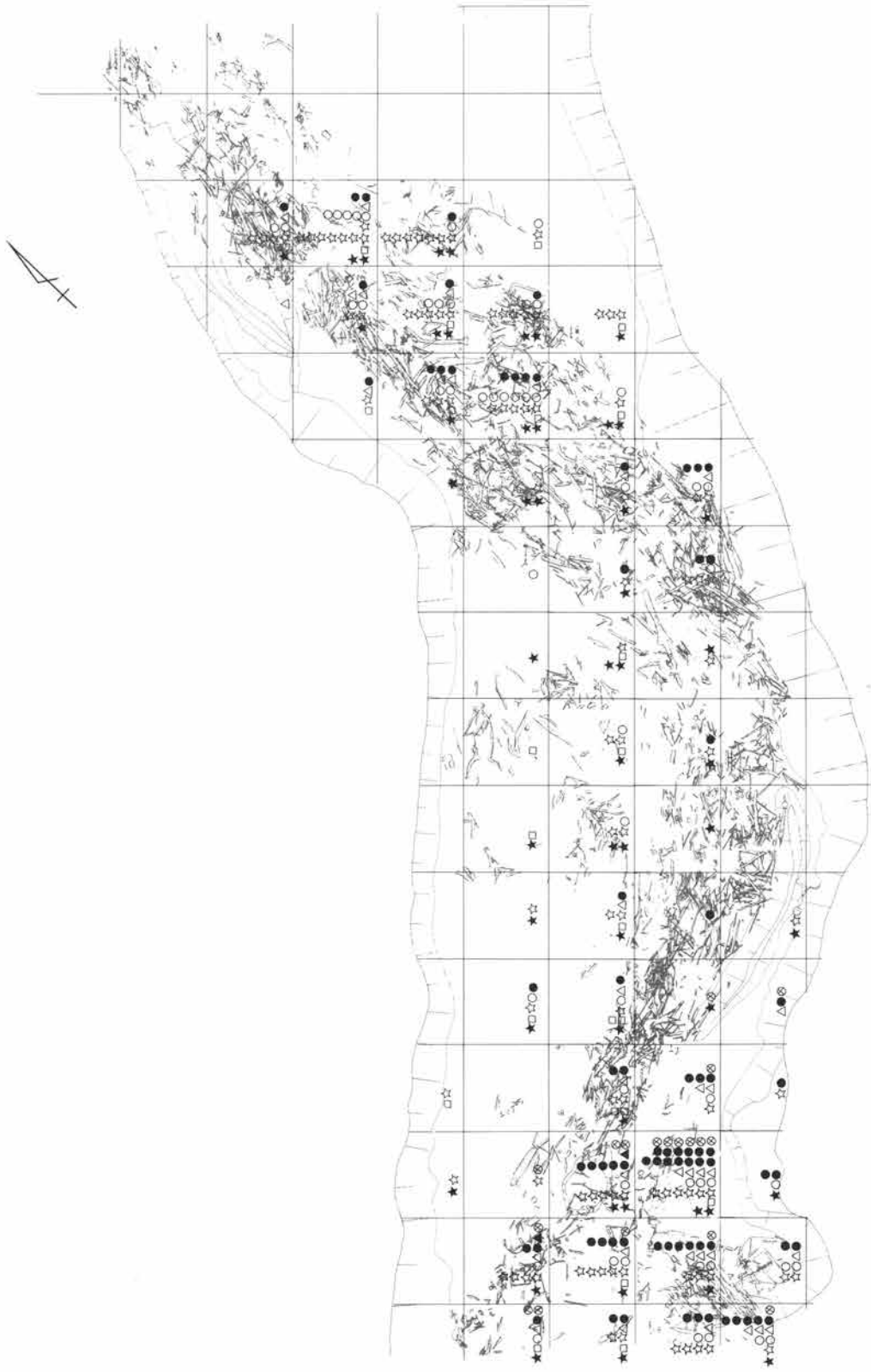
● 弥生後期後半
VI類



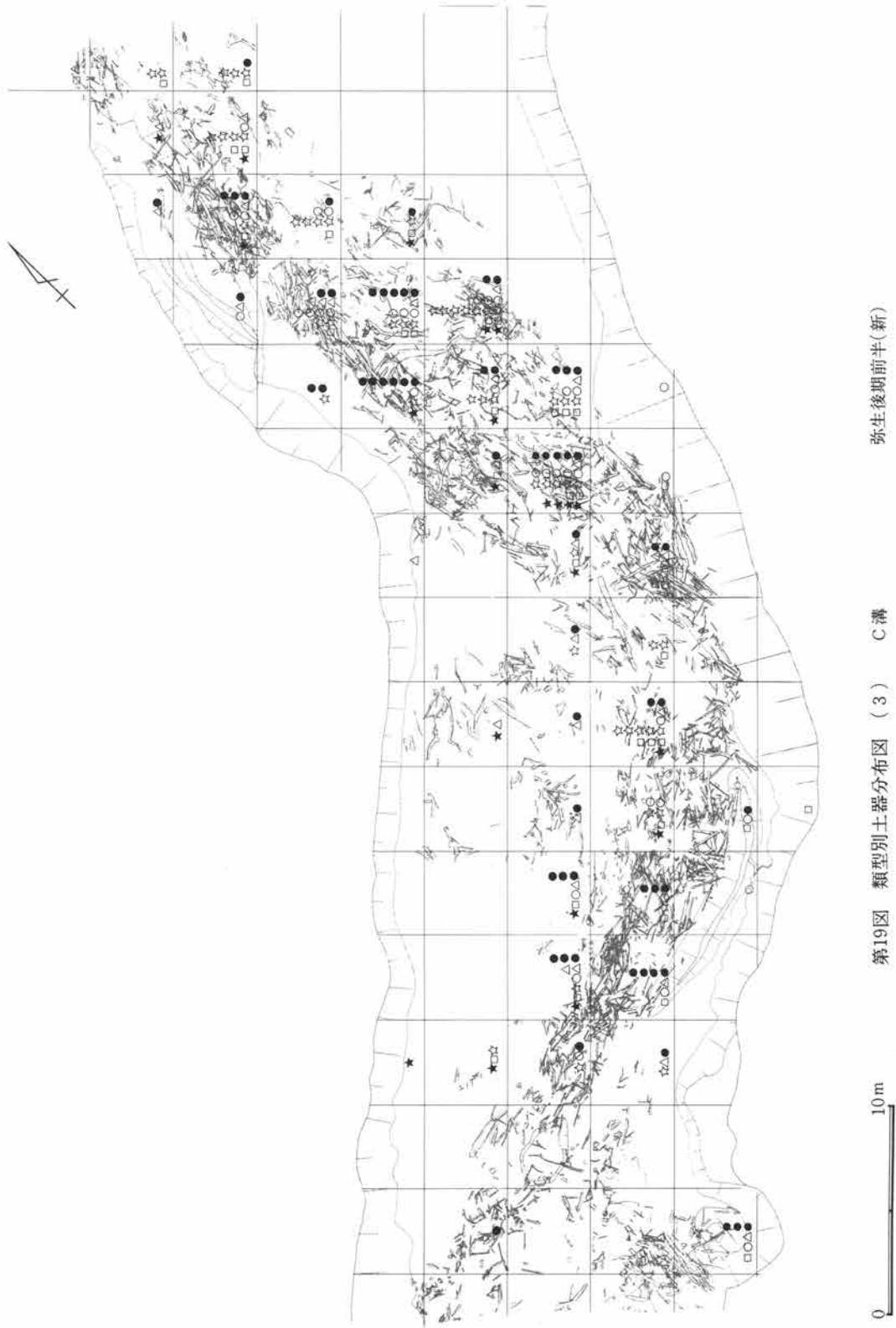
※ 完形・半完形土器は1個体につきマーク1個
破片は5個につきマーク1個 5個に満たないか、5個の倍数を越える端数にもマーク1個付す。

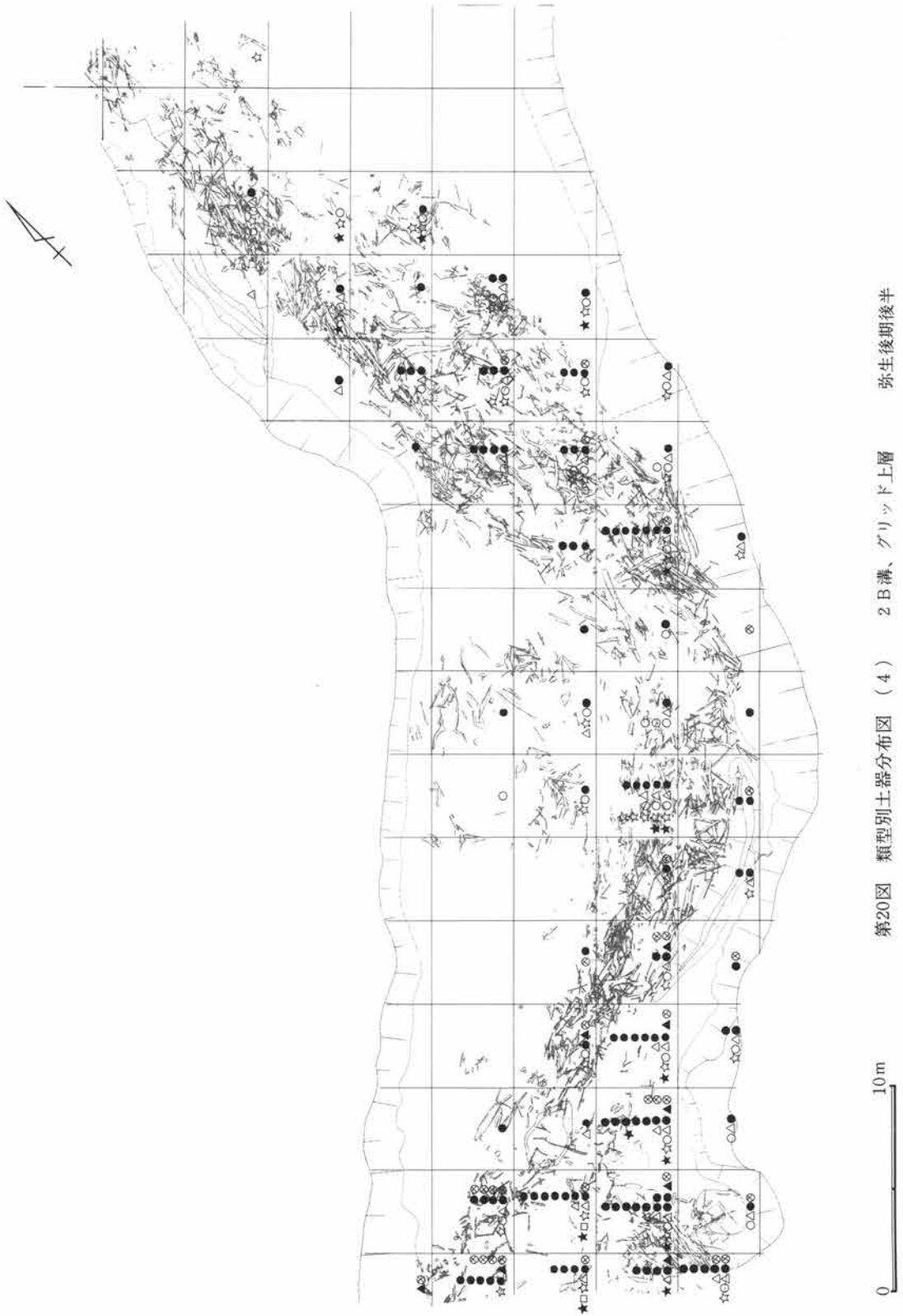


各溝総合（弥生中期後半～古墳前期）

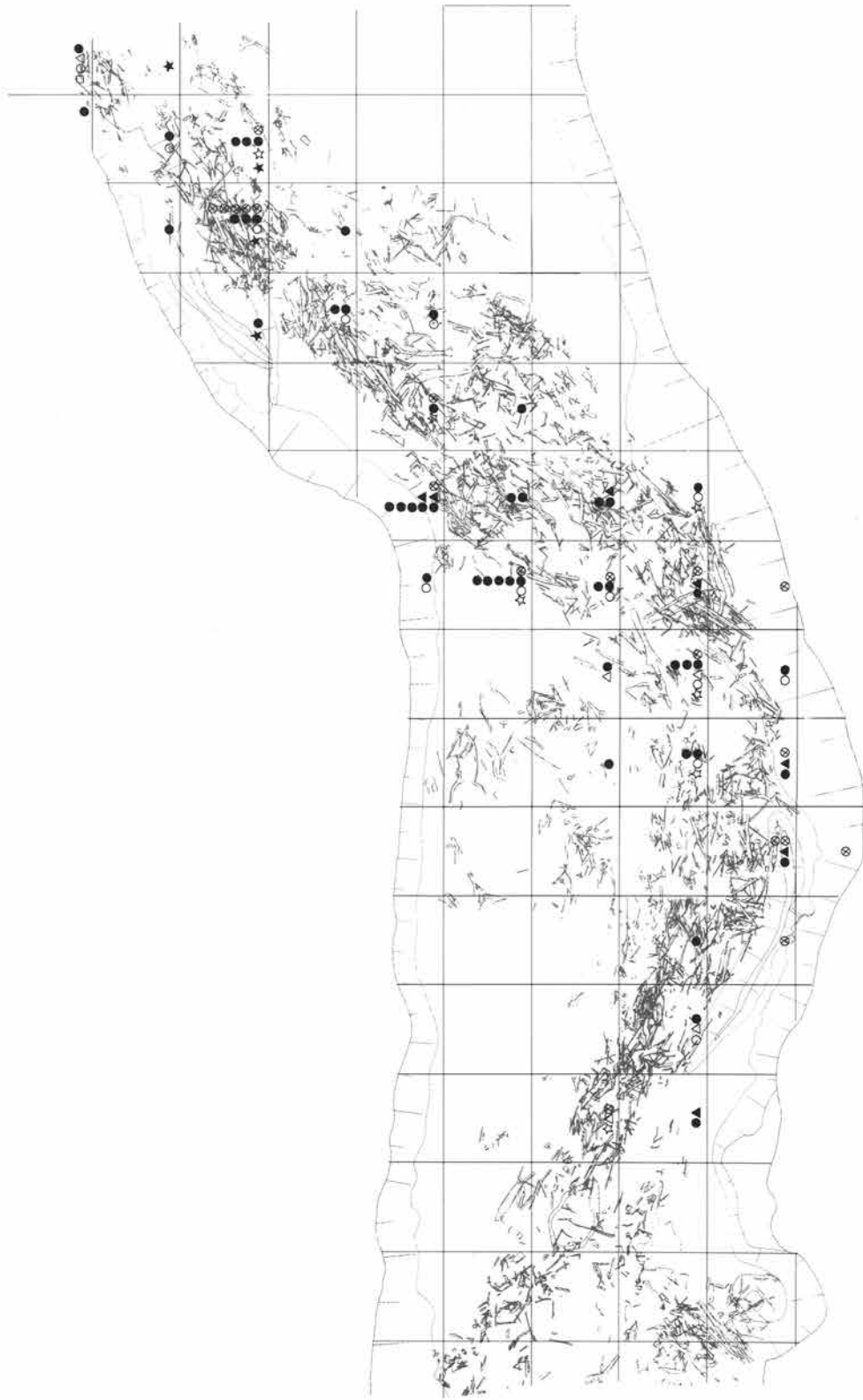


第18図 類型別土器分布図(2) D・E溝、グリッド下層 弥生後期初頭～前半(古)





第20図 類型別土器分布図 (4) 2B溝、グリッド上層 弥生後期後半

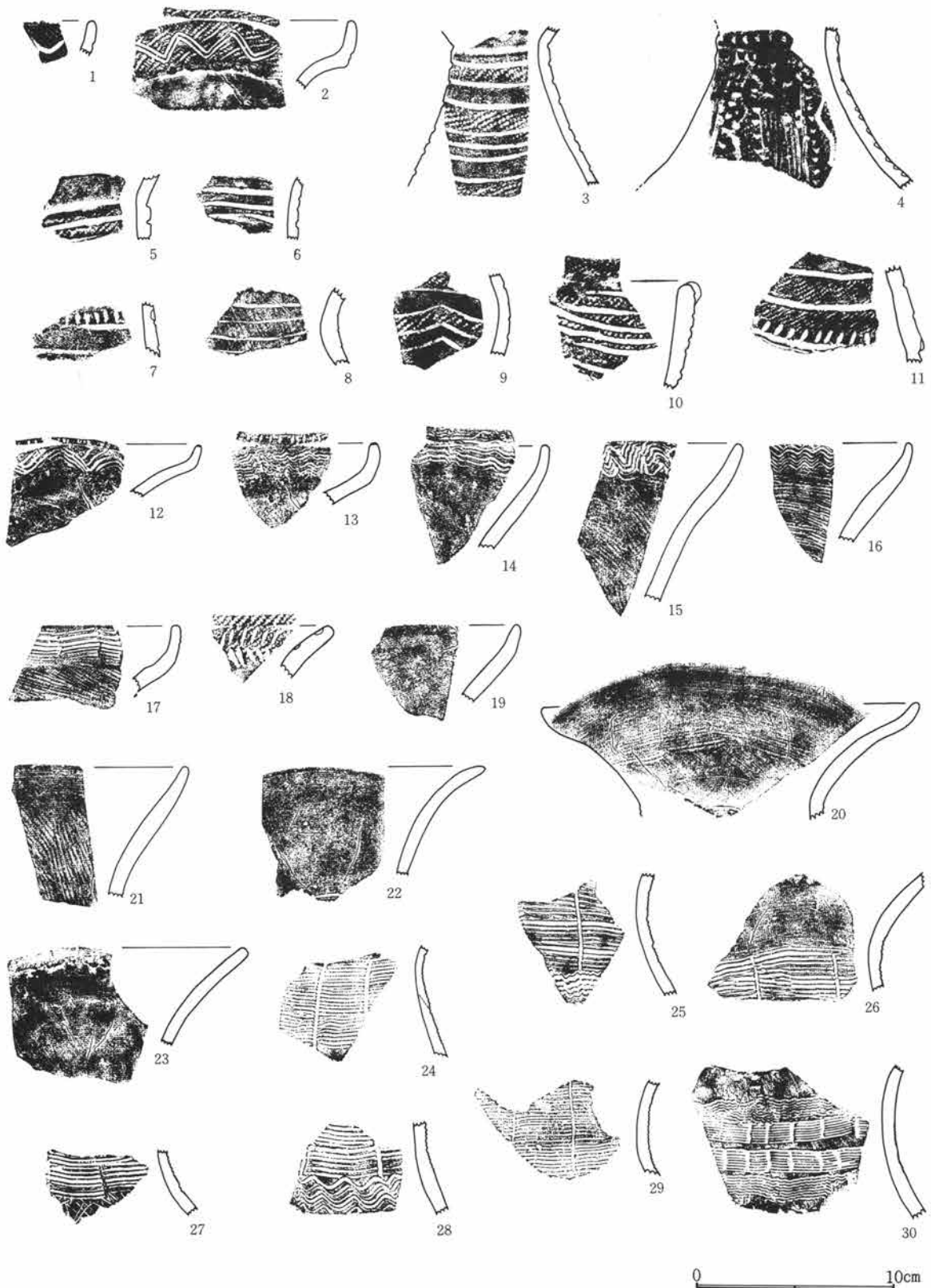


古墳前期

A・B溝

第21図 類型別土器分布図 (5)

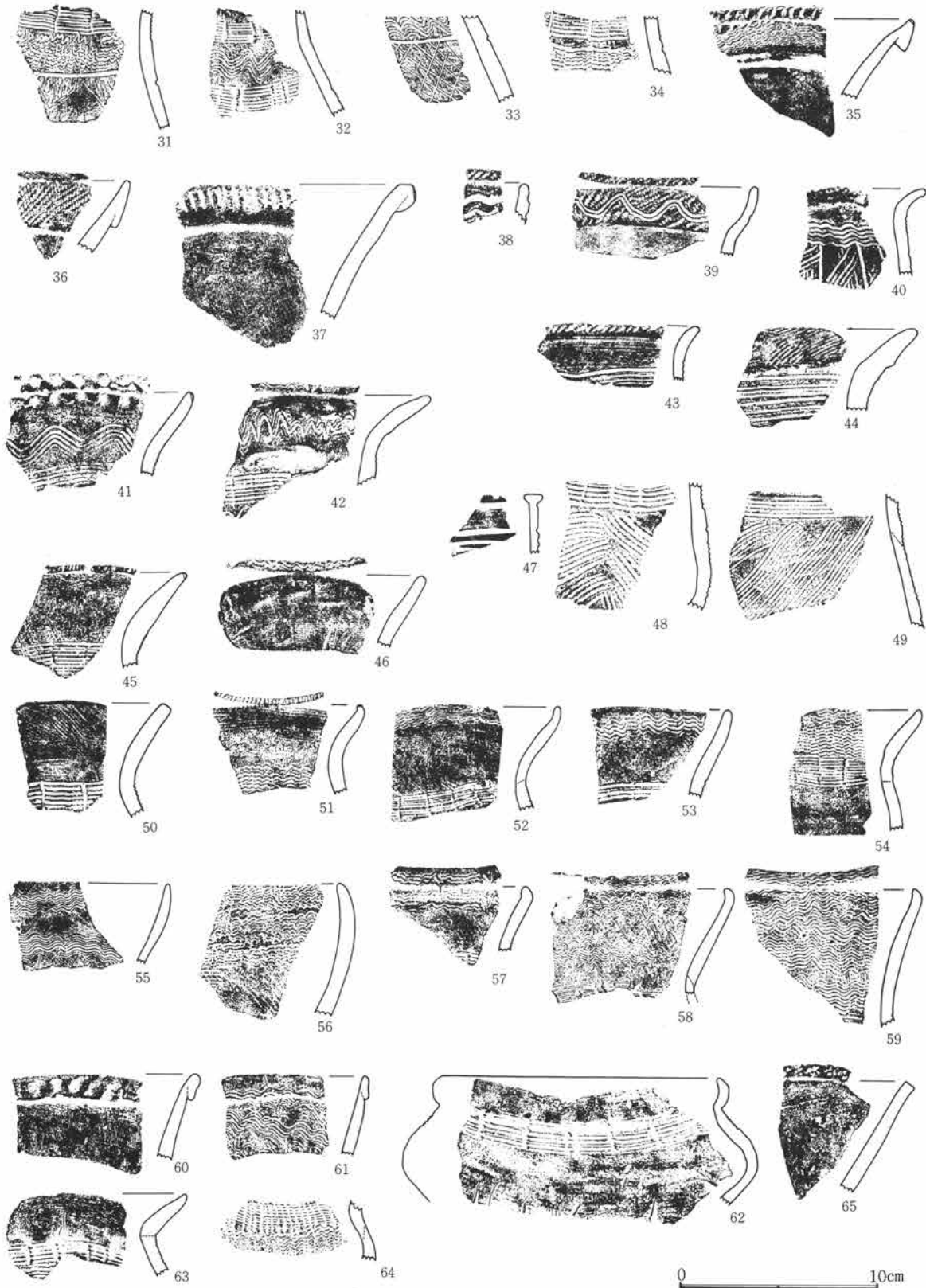
0 10m



E溝 F溝 壺 ①~⑭ 甕 ⑮~⑳ 台付甕 ㉑~㉒ 高坏 ㉓

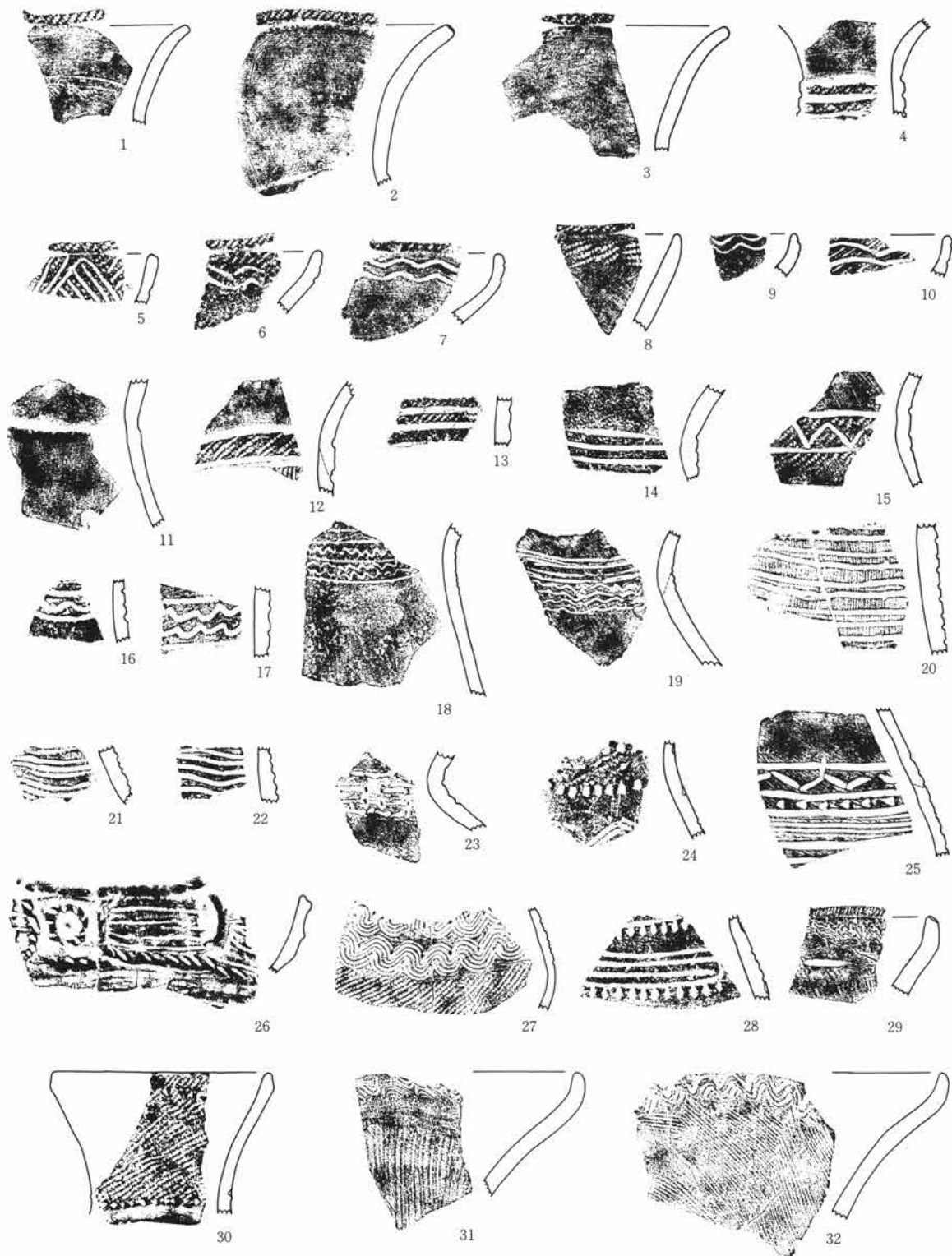
① (b) RL縄文 ② 片口状口縁 (a) LR縄文 ③ LR縄文 沈線 淡赤橙色 ④ (e) 懸垂文 櫛描直線 沈線波状文 くさび状刺突文 灰白色 ⑤ 平行沈線 LR縄文 ⑩ 灰白色 ⑪ (e) 沈線間にLR縄文 丹彩 ⑫~⑬ (a) 細かい刻目文 ⑭ (a) 櫛描波状文 ⑰ (b) 等間隔止め簾状文 ⑱ (a) LR縄文 内側ヘラ先による口縁内側刺突+LR縄文E・F溝 ⑲~㉑ 暗赤灰色~灰白色 ㉒ わずかに金雲母含む 櫛描直線文3段

第22図 大溝出土土器 (1) E・F溝



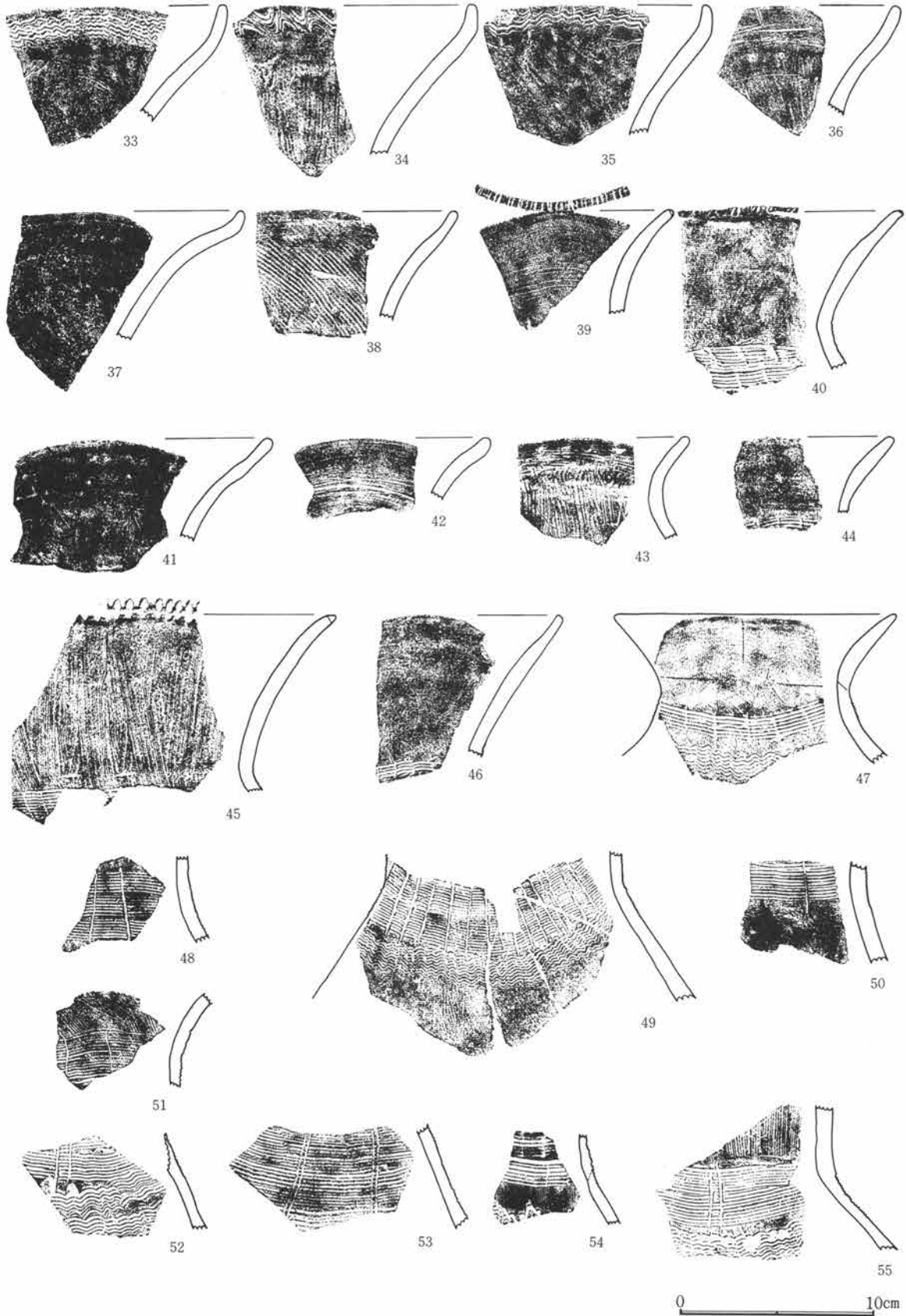
⑤ (a) 櫛描波状+刻目文 ⑥ (a) 無節縄文 (b) LR縄文 ⑦~⑨ (a) LR縄文 ⑩ (a) LR縄文 ⑪ (a) 指頭圧痕文 ⑫ (a) 櫛描波状文 ⑬ (a) LR縄文 一部丹彩 ⑭ (b) 無節縄文 ⑮ (a) 細かい刻目文 ⑯ (a) 櫛描波状文 ⑰ (a) 無節縄文 ⑱~⑳ (b) 櫛描波状文 ㉑ (d) 2連止め簾状文 ㉒ 高坏 (a) 縄文、内外面丹彩

第23図 大溝出土土器 (2) E・F溝



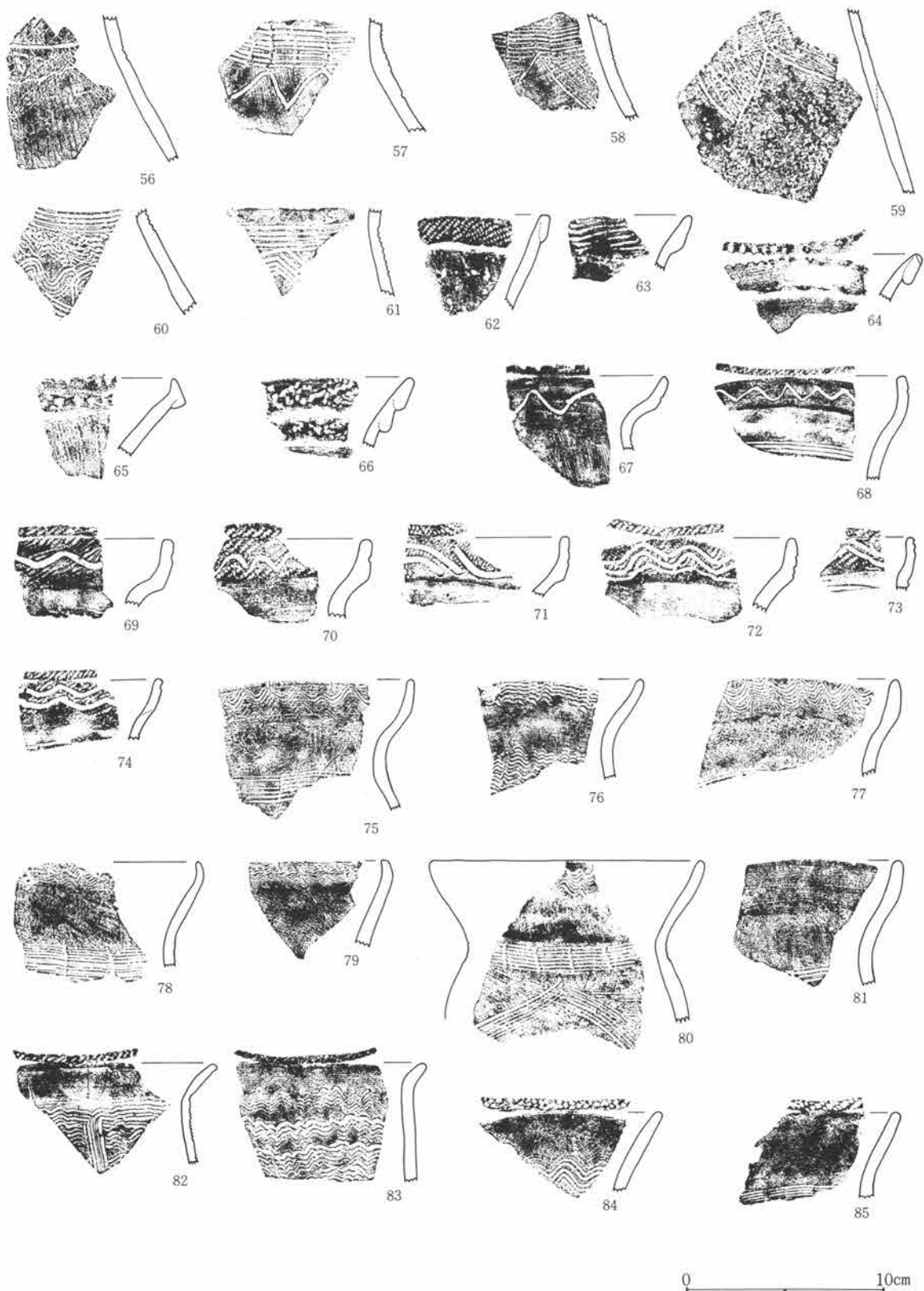
D溝 壺 ①～⑥ 甕 ⑦～⑬ 台付甕 ⑭～⑰ 高坏又は鉢 ⑱
 ①～③ (a) LR縄文 ④ (d) 沈線間LR縄文 ⑤～⑧ (a) LR縄文 ⑤ 内面丹彩 ⑥ ⑦ ⑨ (b) 2条1単位沈線波状文 ⑫
 ⑬ ⑮ 沈線間LR縄文 ⑰ 2条1単位直線、波状文 ⑲ 3条1単位の櫛描文 ⑳ 4条の沈線による押引文 ㉑ 刺突文の間に無節
 縄文 外面淡い丹彩 ㉒ 平行沈線間に山形文 刺突 櫛描直線文 ㉓ 橙色 ㉔ コンパス文 LR縄文 裏面ミガキ 赤黒色 焼成堅
 緻 ㉕ (a) 細かい刻目文 ㉖ LR縄文 赤黒色 外面一部淡い丹彩

第24図 大溝出土土器 (3) D溝



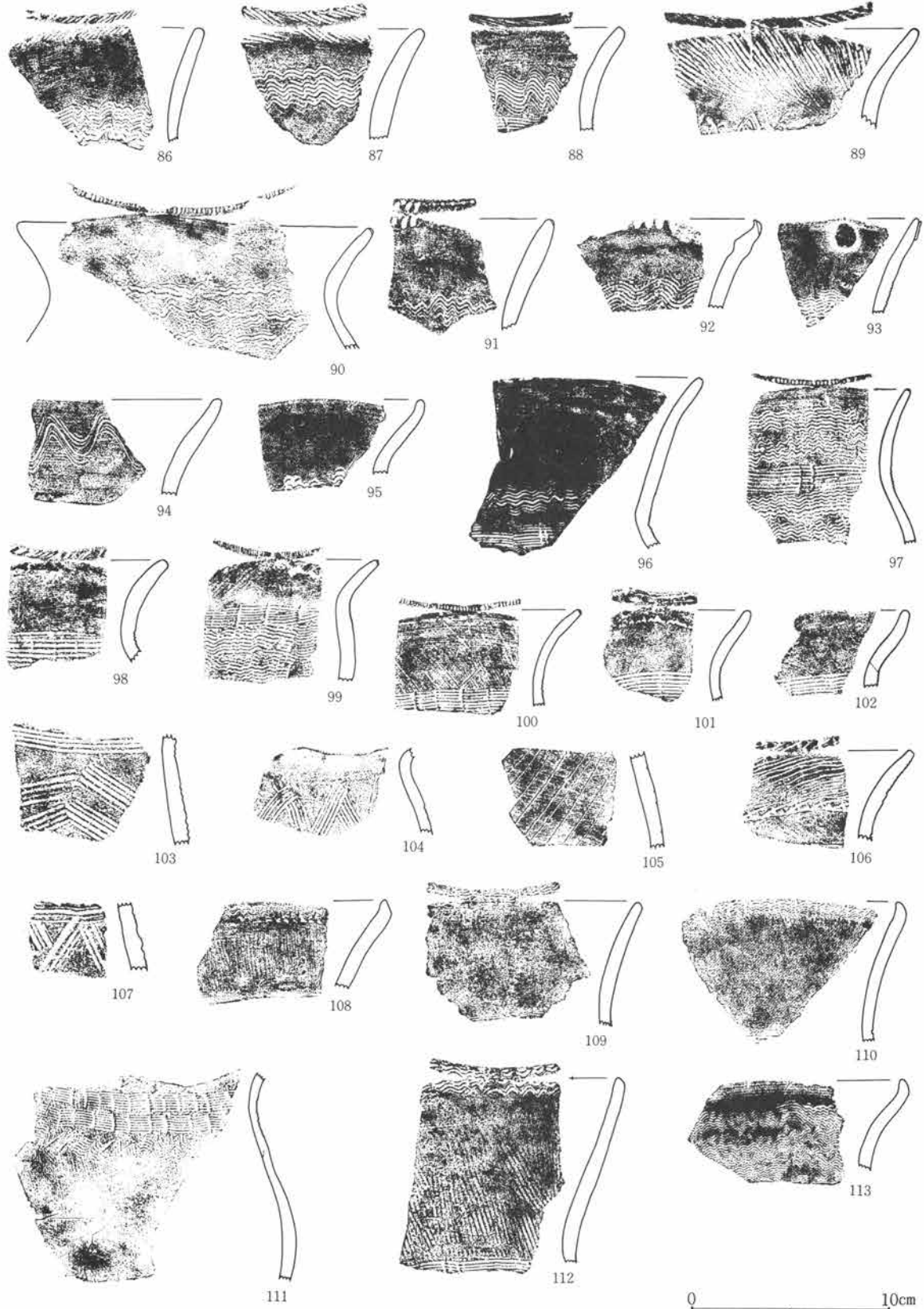
③ (a) 鋭いヘラ先による刻目文 ④ (a) 鋭いヘラ先による刻目文 (d) 等間隔止め簾状文2段に施文 ⑧ 櫛描直線3段構成のT字文
 ⑨ 淡橙色 金雲母混入目立つ ⑩~⑬ 金雲母僅か混入

第25図 大溝出土土器 (4) D溝



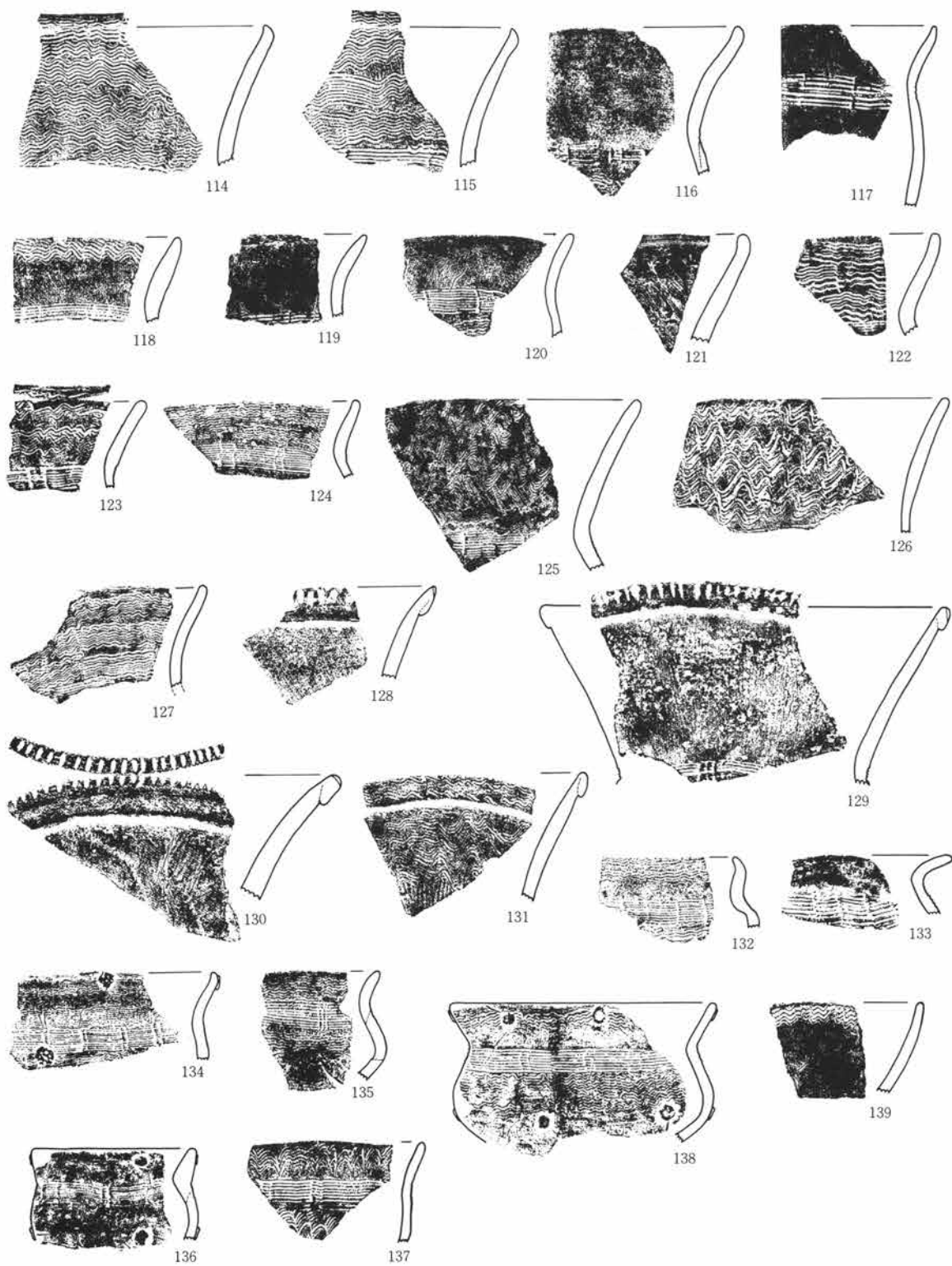
⑤⑥ ヘラ状具による鋸歯文 灰白色 ⑥⑩ 等間隔止め簾状文 細かく乱れた櫛描波状文 下位に大きく乱れた櫛描波状文 ⑥⑪ 金雲母僅か混じる ⑥⑬ (b) 燃糸文 口縁内側指頭圧痕めぐる 淡赤橙色 ⑥⑭ 2段口縁 (b) LR縄文 ⑥⑰ (a) 無節縄文 ⑥⑱ (a) 細かい刻目文 ⑥⑲~⑦④(a) (b) LR縄文 赤黒色~灰褐色 ⑦⑤~⑦⑯ (a) LR縄文

第26図 大溝出土土器 (5) D溝



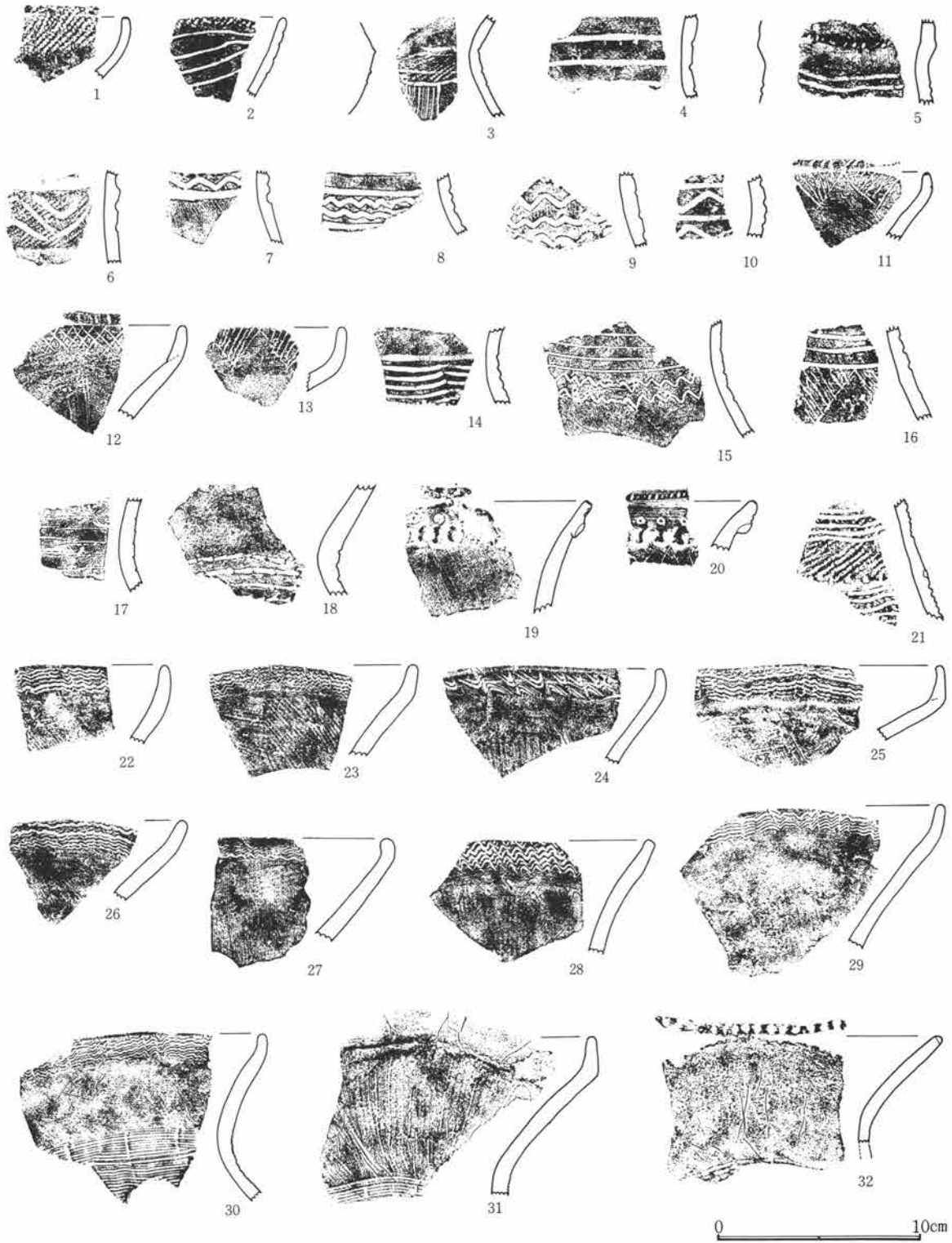
86 (a) 細かい刻目文 87~89 (a) 櫛状具による条線 90 (b) 櫛状具による条線 90 (a) 細かい刻目文 91 92 (a) 棒状具による刻目文 部分的 97~100 (a) 棒状具による細かい刻目文 100 (a) 櫛描直線 105 (a) (b) 撚糸文 (d) 等間隔止め簾状文 109 (a) 櫛描波状文

第27図 大溝出土土器 (6) D溝



①②③ (c) ヘラミガキ ④⑤ (d) 4連止め簾状文

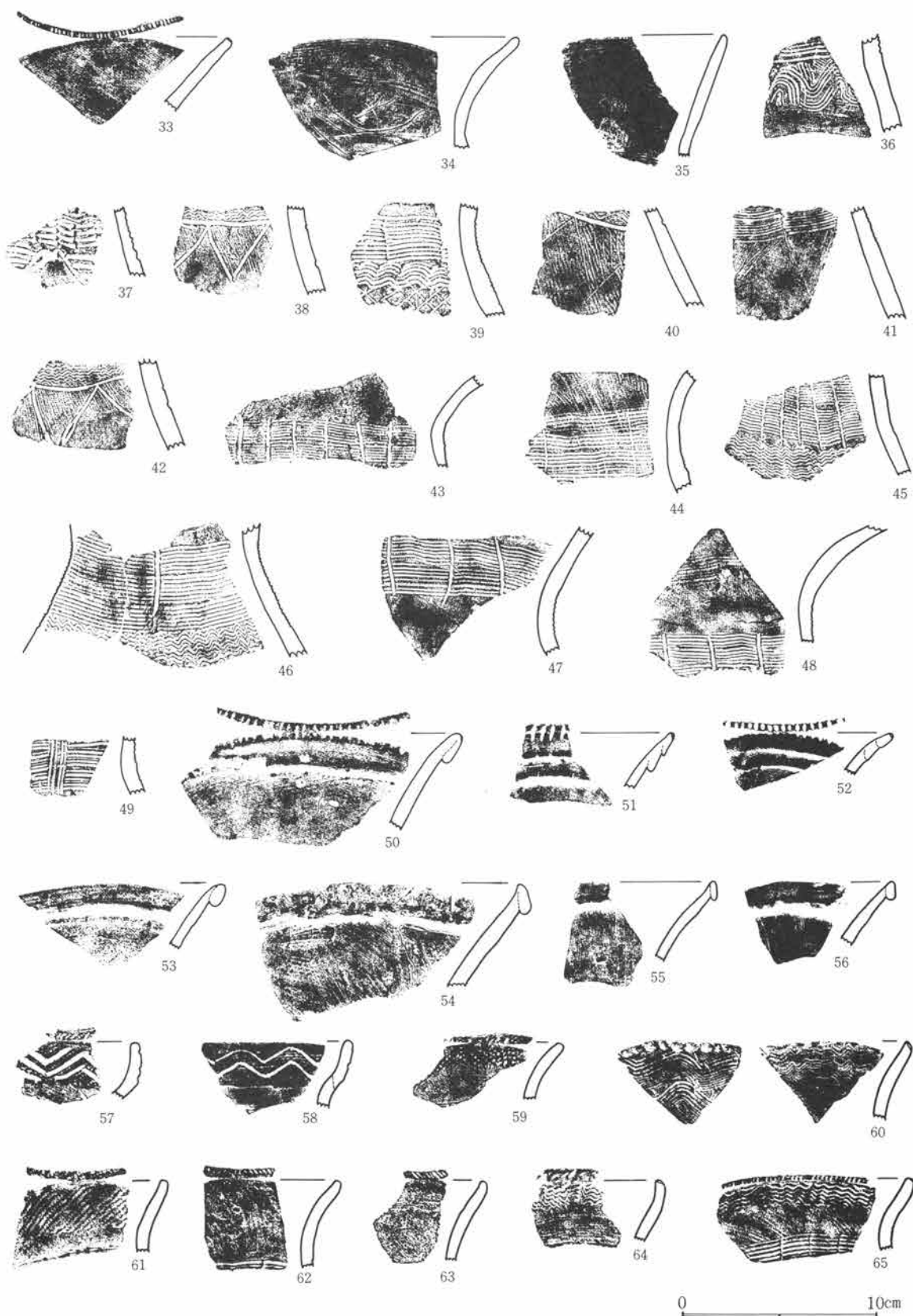
第28図 大溝出土土器 (7) D溝



C溝 壺 ①~⑤⑥ 甕 ⑦~⑨ 台付甕 ⑩~⑫⑬ 鉢 ⑭~⑯ 片口 ⑰

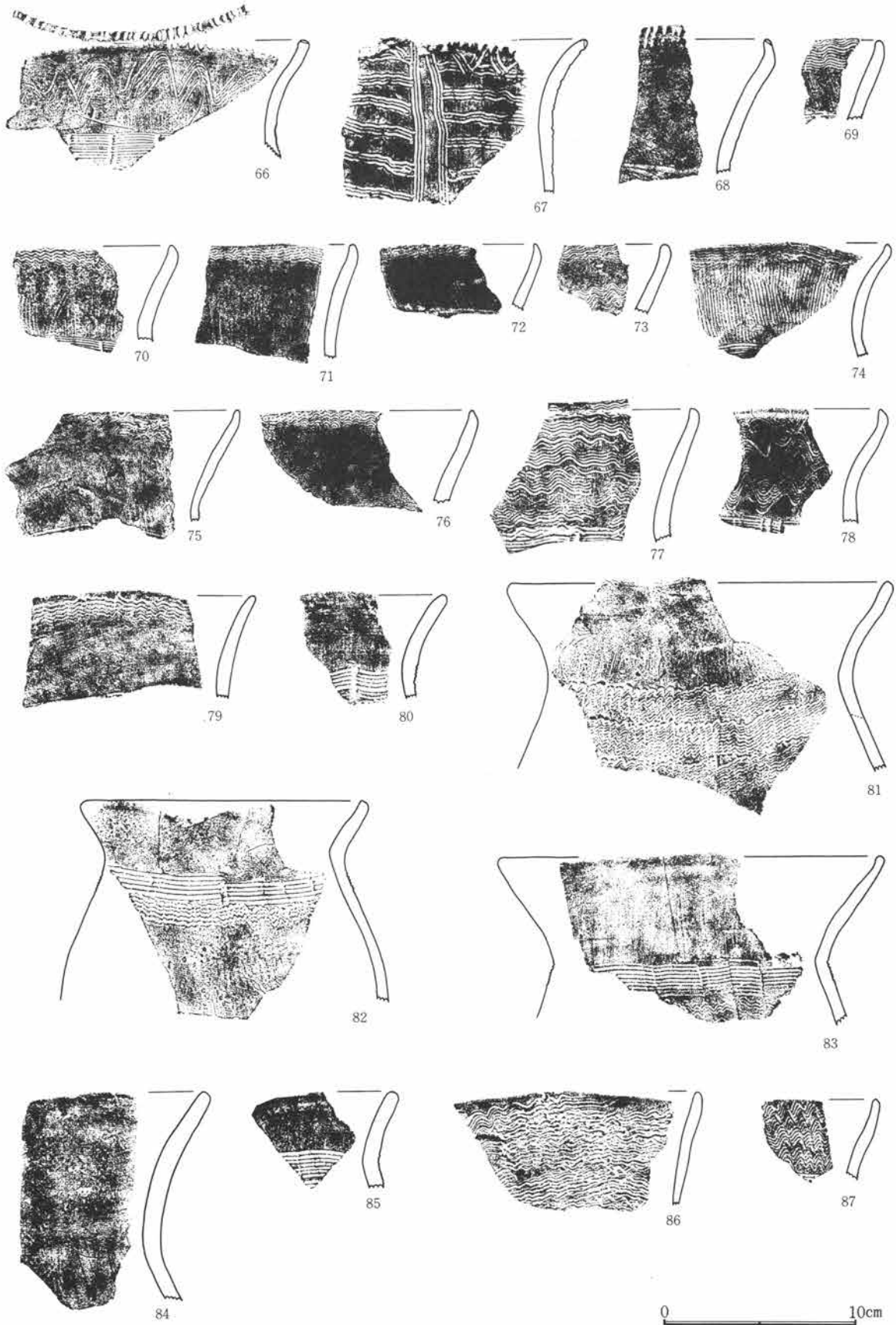
① (a) (b) LR縄文 明赤褐色 ② (b) LR縄文 灰白色 ③ (d) 沈線LR縄文 (e) 懸垂文 沈線区画内櫛描直線文 ④ (d) 沈線重山形文 LR縄文 ⑤~⑥ (d) 沈線山形文 ⑦~⑧ (a) 細かい刻目文 (b) 鋭いヘラによる鋸歯文 金雲母を混入する ⑨ (a) 刻目文 (b) 斜格子文 内側接合痕明瞭 ⑩~⑫ 灰白色~明褐色 ⑬ (d) 2本1単位の沈線による平行直線文 (e) 波状文 ⑭ 沈線による押引平行線文 ⑮~⑯ (a) 細かい刻目文 (b) 竹管による刺突 指頭痕を持つ隆起線 (c) ヘラ描斜格子文 赤黒色 ⑰ 沈線平行直線文、刺突文 地文LR縄文 丹彩痕わずかに見える ⑱~⑳ 灰黄色~赤褐色 ㉑ (d) 等間隔止め簾状文2段 ㉒ 口縁部内側丹彩 (d) 等間隔止め簾状文

第29図 大溝出土土器 (8) C溝



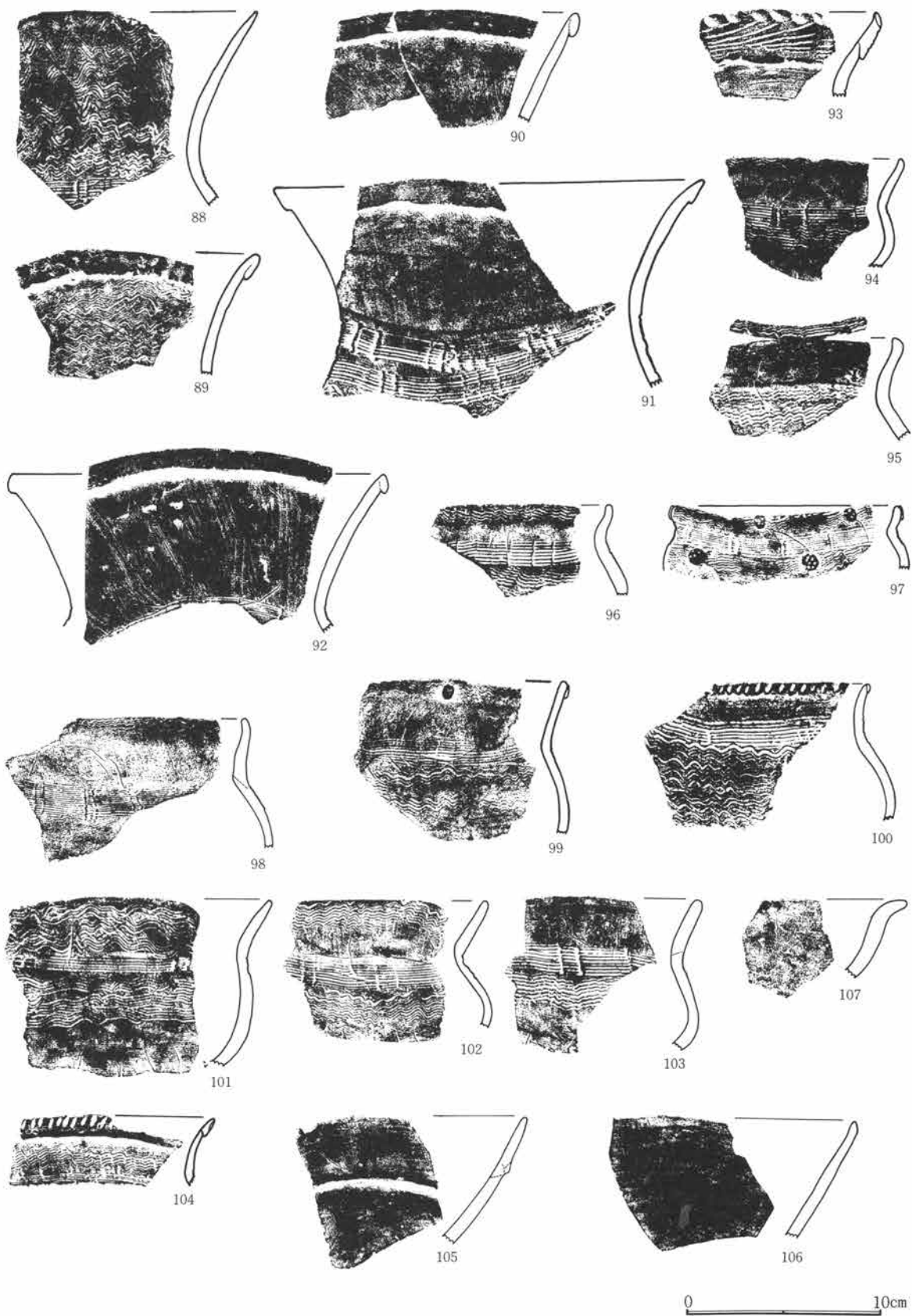
③ 櫛描波状文はコンパス文に近い ④ 太い櫛による多連止め簾状文 太い鋸歯文 ⑬～⑱ 灰白色～淡赤橙色 ⑲ (d) 櫛描直線4段以上 ⑳ ㉑ (a) 細かい刻目文 ㉒ (a) (b) LR縄文 ㉓ 2条1単位沈線波状文 ㉔ (a) (b) 櫛状具による刺突文 ㉕ (a) 太い棒状具による刻目文 内側波状文 ㉖ (a) (b) LR縄文 (d) 等間隔止め簾状文 ㉗～㉙ (a) 細かい刻目文

第30図 大溝出土土器 (9) C溝



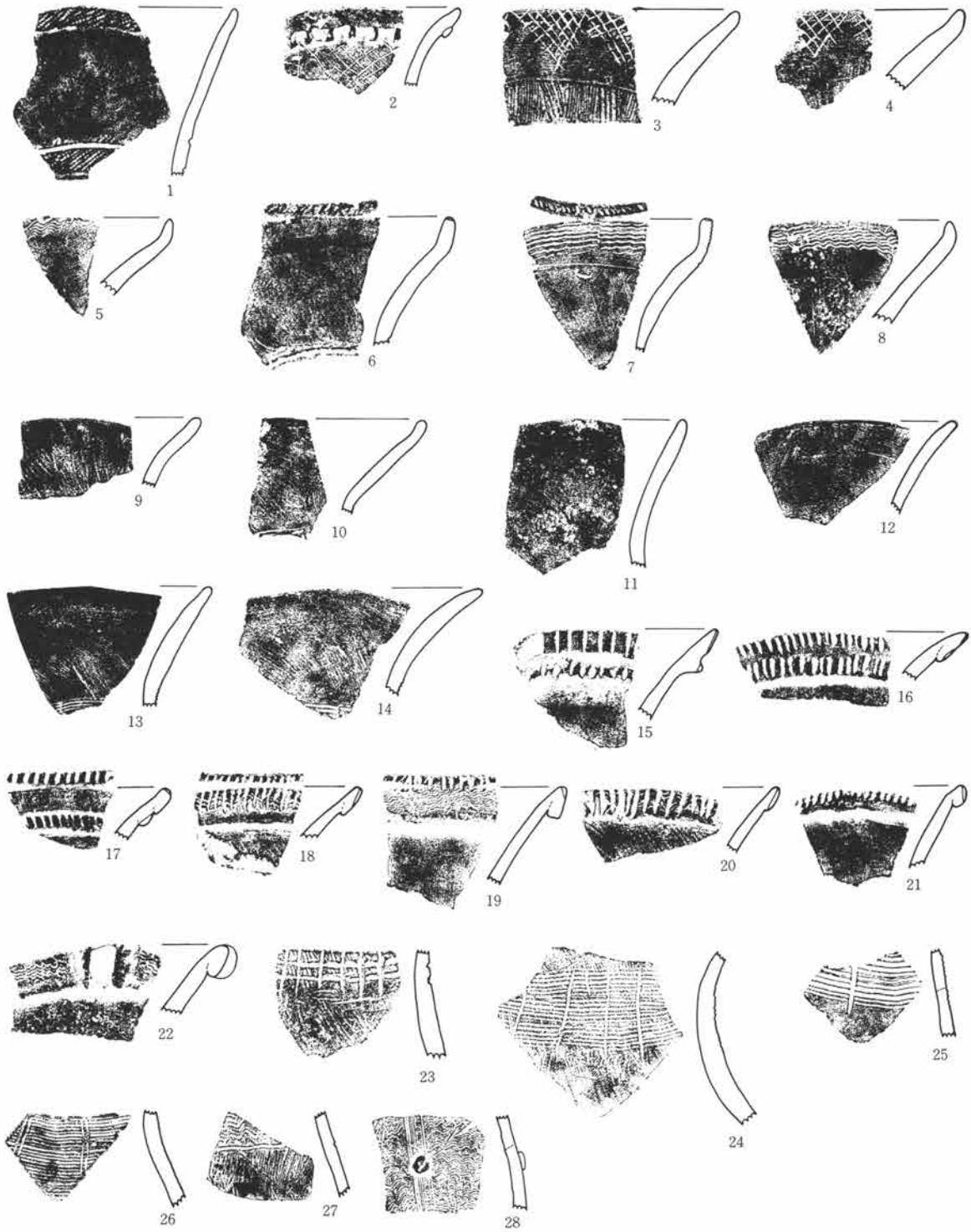
⑦ (a) 櫛描波状文 (d) 2連止め簾状文 ⑧ (d) 3連止め簾状文

第31図 大溝出土土器 (10) C溝



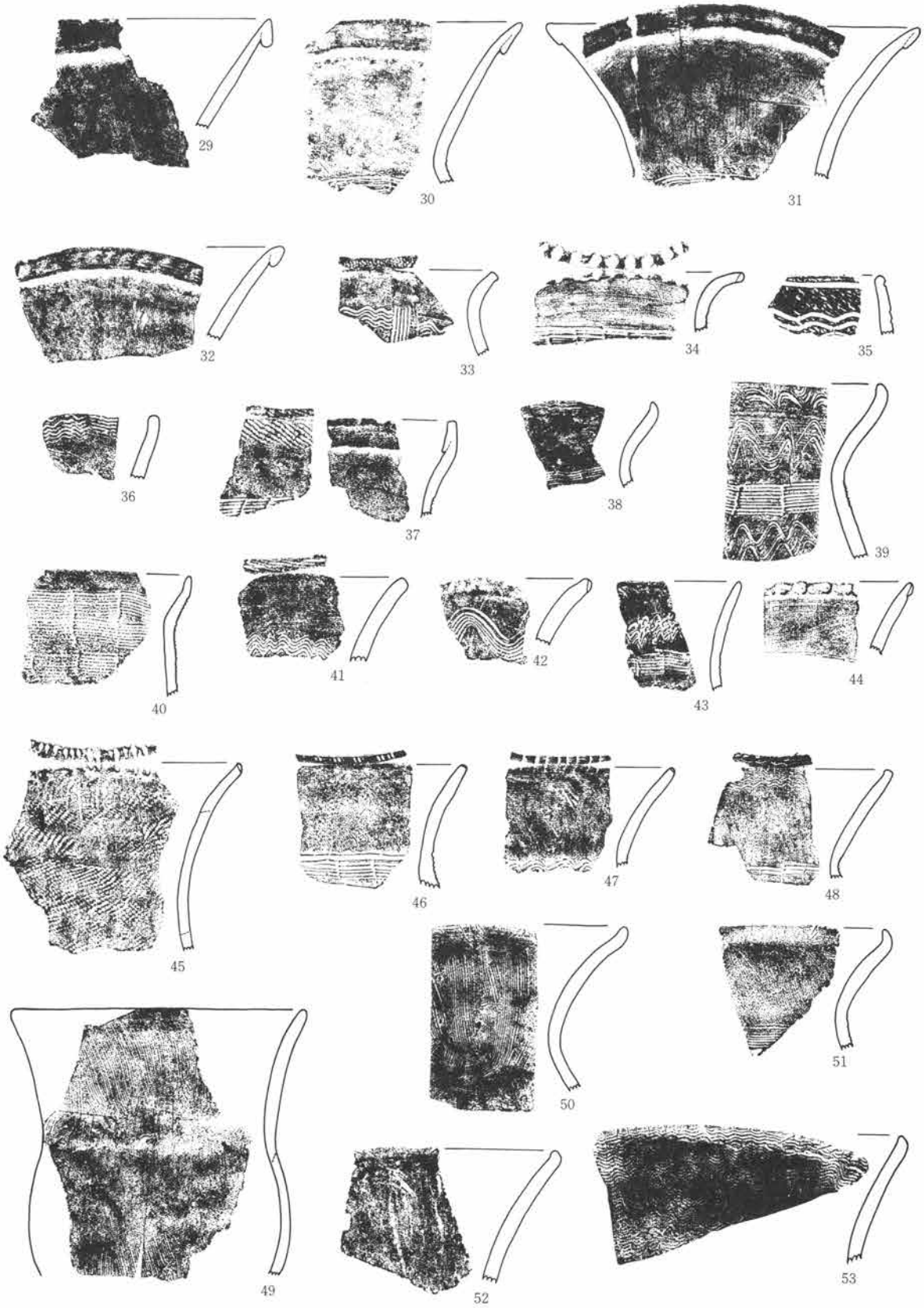
㉓ (a) 指頭圧痕文 (b) 撚糸文 等間隔止め簾状文 (c) ハケメ、赤灰色 ㉔ ㉕ (d) 3連止め簾状文 ㉖ (d) 2連止め簾状文
 ㉗ ㉘ 内外面ヘラミガキ

第32図 大溝出土土器 (II) C溝



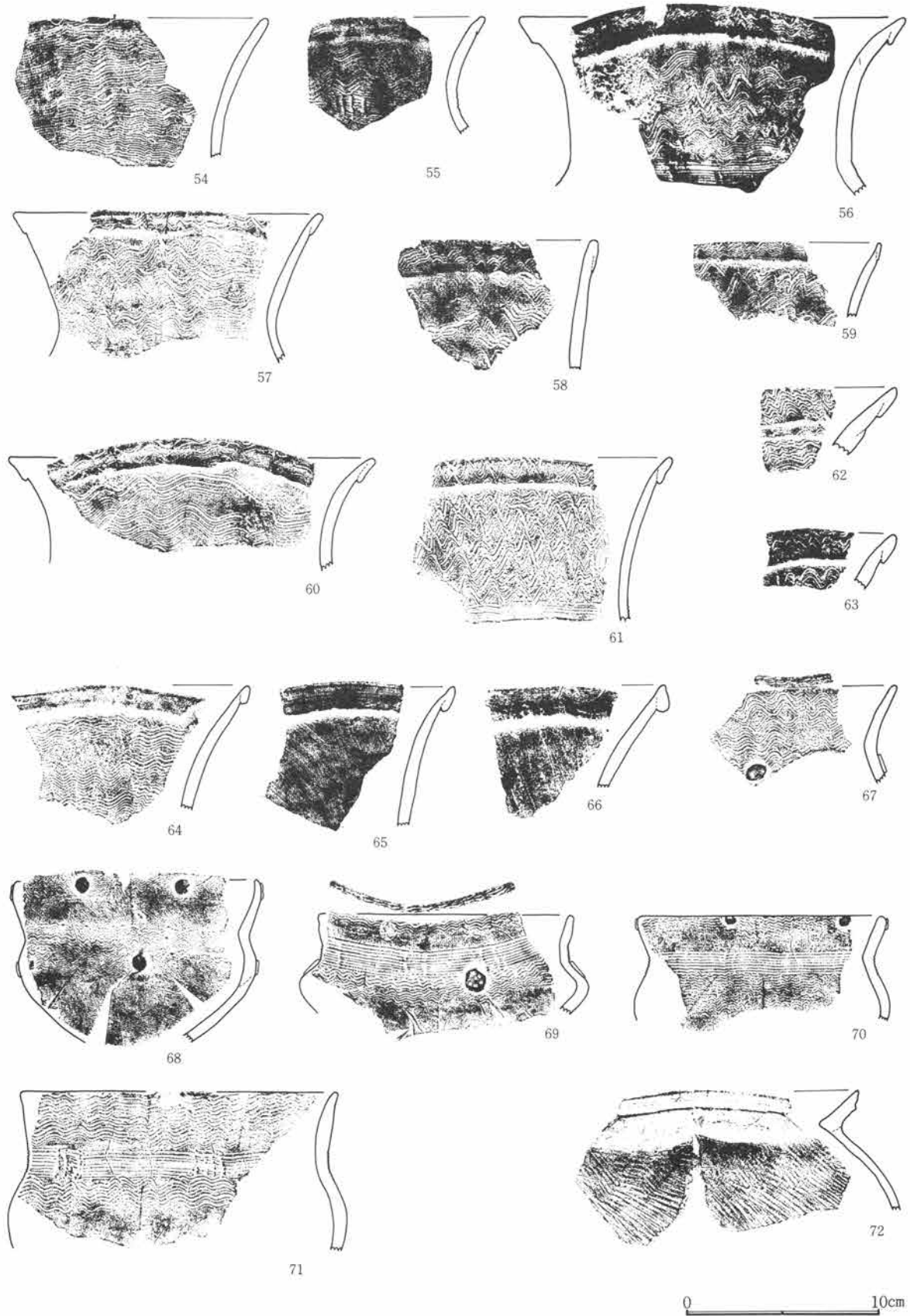
2 B 溝 壺 ①～⑫ 甕 ⑬～⑯ 台付甕 ⑰～⑲ 甕 (土師) ⑳
 ① (b) (d) LR 縄文 外面ヘラミガキ ② 指頭圧痕をめぐらす突帯文 斜格子文 赤橙色 ③ ④ 灰白色 ⑤ 金雲母僅かに含む
 ⑦ (a) 無節縄文 灰白色 金雲母含む ⑧ ⑫ ⑭ 灰白色～淡橙色 金雲母僅かに混入 ⑮～⑲ 赤橙色 ⑳ (b) 櫛描波状文
 刻目文 ㉑ 棒状浮文 2 本付す ㉒ ヘラ描沈線による格子目文 ㉓～㉕ 櫛描直線 3 段にめぐらす 灰白色 ㉖ 鋭いヘラによる鋸歯文

第33図 大溝出土土器 (12) 2 B 溝



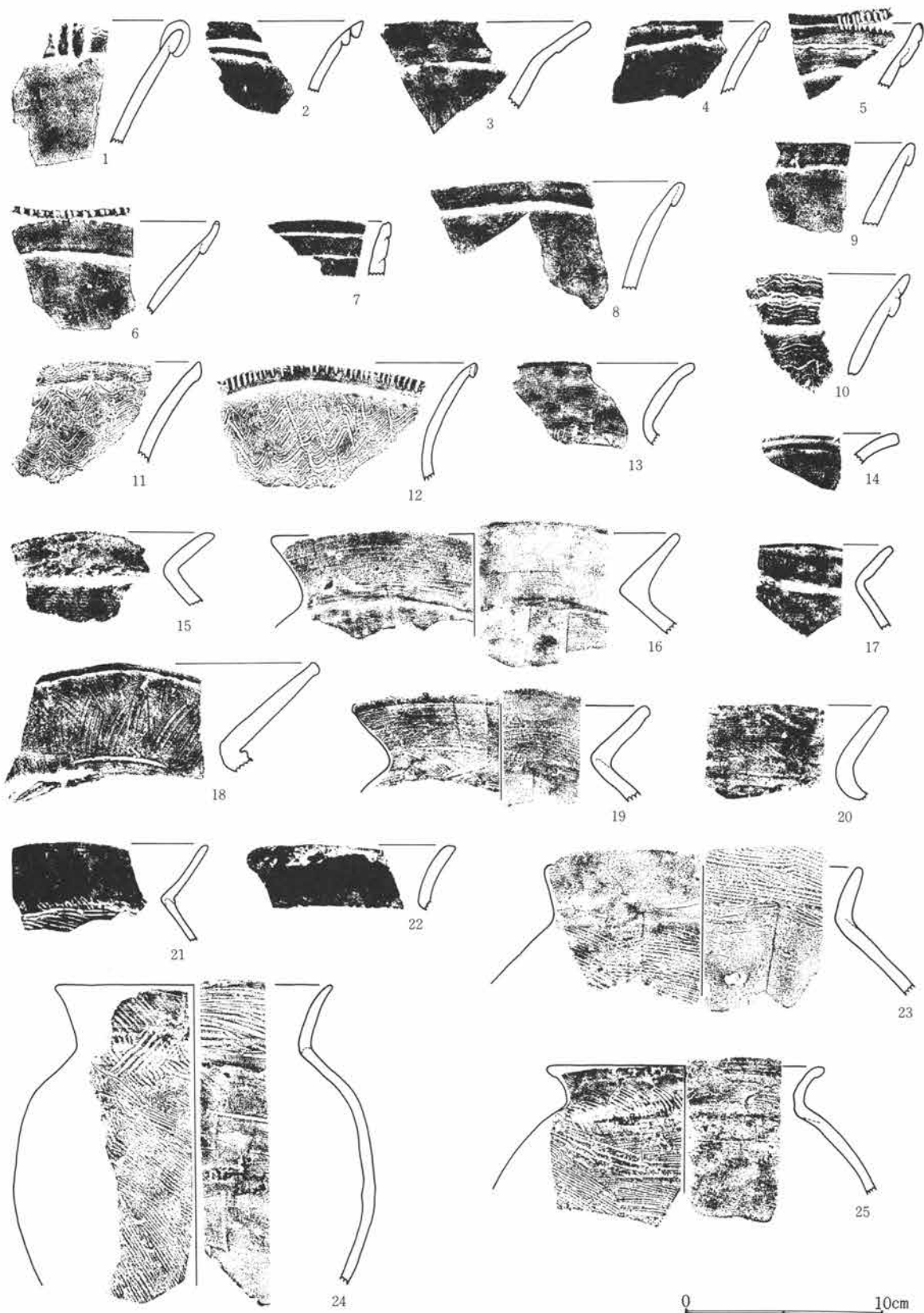
②⑨～③② 内外面ヘラミガキ におい黄橙色～赤橙色 ③⑩～③⑪ (d) 2連止め簾状文 ③⑬ (a) 単節縄文 ③⑭ (d) 等間隔止め簾状文 ③⑮ 無節R縄文 2条1単位の沈線波状文 褐灰色 外面丹彩の痕跡あり ③⑯ (a) 刻目文 外面 LR縄文 ③⑰ (a) (b) 櫛描波状文

第34図 大溝出土土器 (13) 2 B 溝



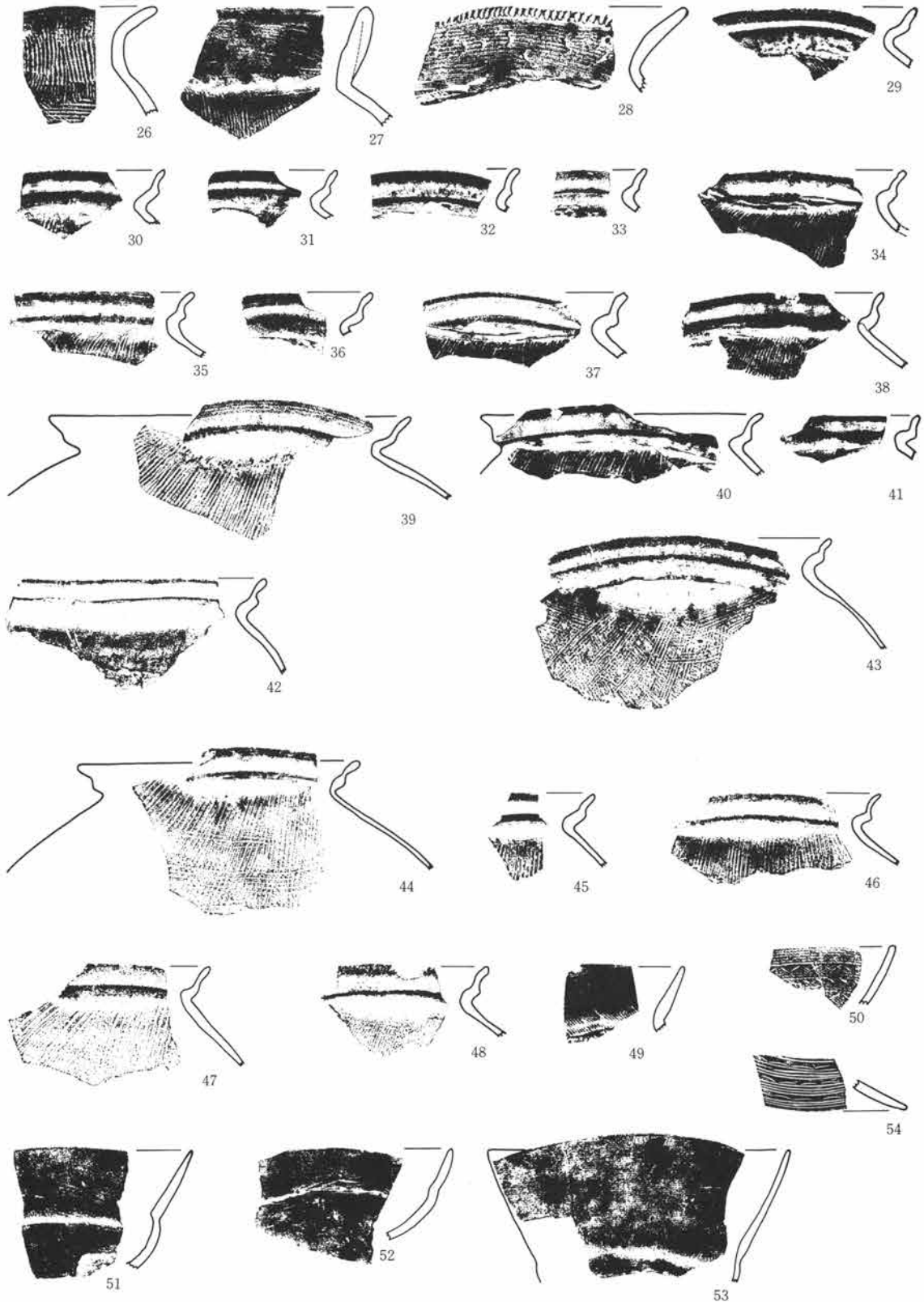
⑤⑤~⑤⑦ (d) 3連止め簾状文 ⑤⑤~⑤⑥ (b) ヨコナデ (c) ハケメ ⑥⑦ ⑥⑧ (a) 櫛描波状文 ⑦① (d) 4連止め簾状文

第35図 大溝出土土器 (14) 2 B 溝



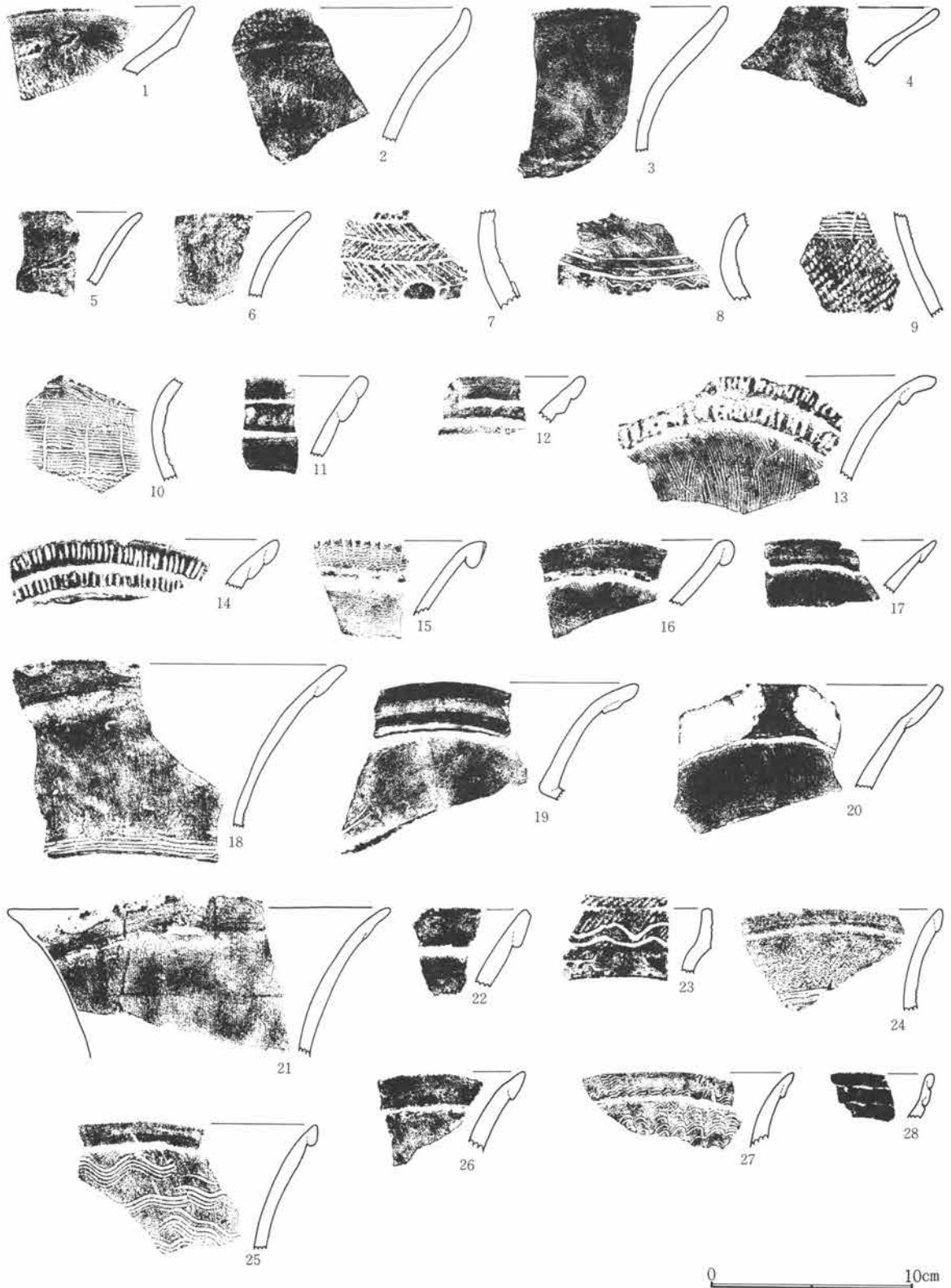
B溝 壺 ①～⑥ 甕 ⑦～⑫ 壺(土師) ⑬～⑭ 甕(土師) ⑮～⑳ S字状口縁甕 ㉑～㉒ 埴 ㉓～㉔ 脚 ㉕
 ① (b) 櫛描波状文 3条の棒状付文を付す ② 赤褐色 内外面ヘラミガキ ⑤ (a) 部分的刻目文 (b) 沈線をめぐらす 褐灰色 ⑥ (a) 刻目文 赤黒色

第36図 大溝出土土器 (15) B溝



④ 橙色 ⑤⑥ 細かい3条の沈線の間に連弧文 ⑦ 口縁部 ヨコナデ ⑧⑨⑩ 内外面ヘラミガキ

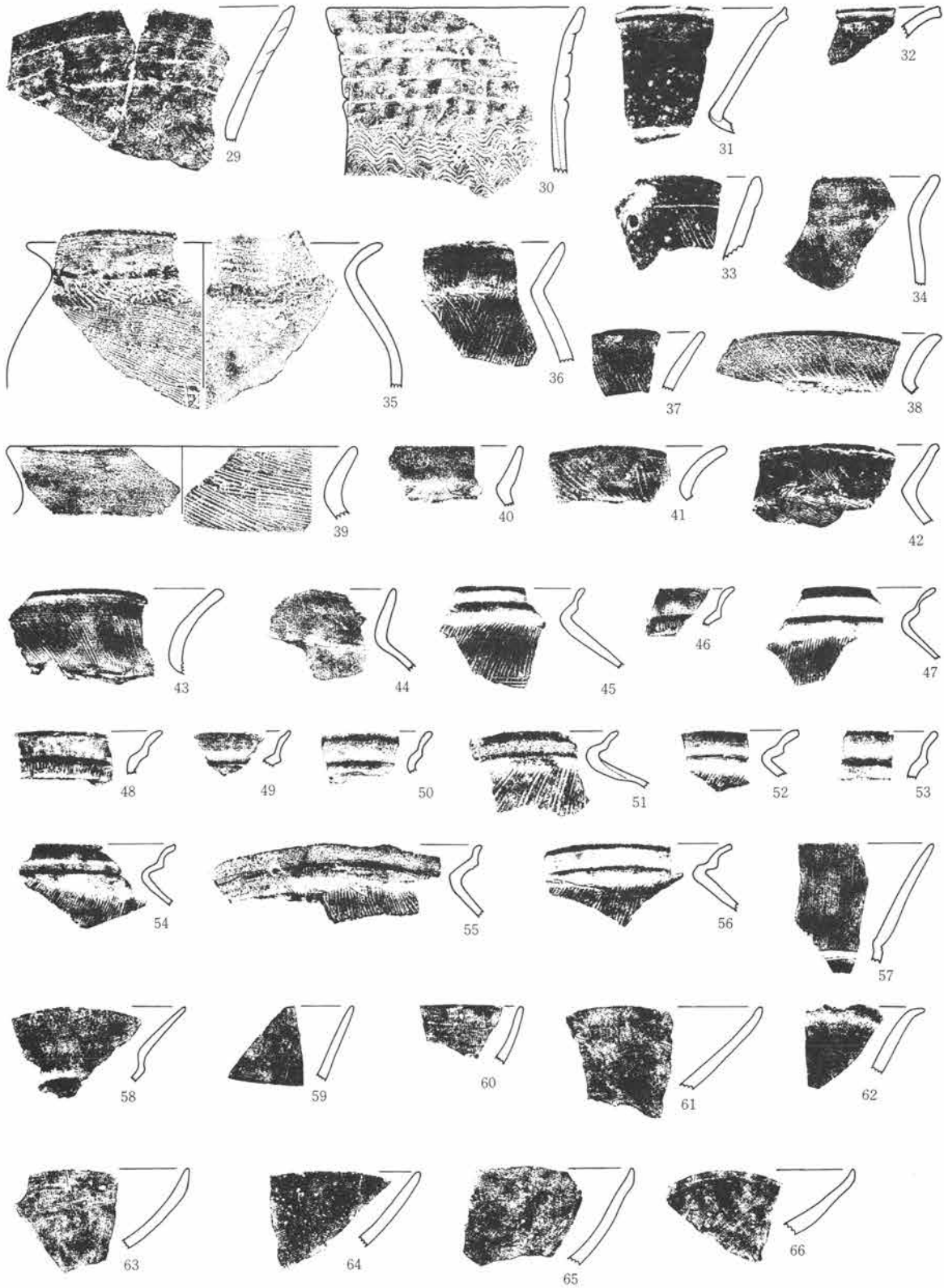
第37図 大溝出土土器 (16) B溝



A溝 壺 ①~② 甕 ②~⑩ 壺(土師) ⑪~⑬ 甕(土師) ⑭~⑯ S字状口縁甕 ⑰~⑱ 埴 ⑲~⑳ 鉢 ㉑~㉒ 高坏 ㉓
 ~㉔ 器台 ㉕

①~⑥ (b) (c) 内外面ヨコナデ におい橙色~赤橙色 ⑧ 3本1単位平行沈線文 灰白色 ⑨ (d) 等間隔止め簾状文 (e) LR縄文
 ⑮ (b) ヘラによる刻目文 櫛描波状文 ⑮~⑲ 褐灰色~暗赤褐色 ⑲~⑳ (b) 内外面ヨコナデ (c) ヘラミガキ ㉑ 内外面棒状具
 によるヘラミガキ ㉓ (a) LR縄文 ㉔ 外面ヨコナデ

第38図 大溝出土土器 (17) A溝



0 10cm

②③④ 外面ヨコナデ 粘土積上げ痕 指おさえ痕顕著 内面ヘラミガキ ⑤ 紫黒色 ⑥ 赤灰色 ⑦ 内外面ヨコナデ 赤橙色 ⑧⑨
 ⑩ 内外面ヘラミガキ ⑪ ヘラミガキ ⑫ ⑬ ⑭ 棒状具によるミガキ

第39図 大溝出土土器 (18) A溝

(10) 側道部、大溝の調査 ——昭和56年度実施発掘調査——

関越道本線の発掘調査を終了し、高速道路建設工事が竣工した後に、側道部は高崎市の管理として移管された。関越道工事中は染谷川に鉄製の仮橋が架けてあったが、この橋は一般道の橋として使用するには危険なため、高崎市の事業として恒久的な橋が建設されることになった。

この付近は、本線の発掘調査の際、多量の木製品を出土する大溝（旧河川）が続いていると予測されているため、工事着工前に橋桁部及び工事に必要となる範囲を中心に調査を実施することにした。調査対象地域は、新保田中町から新保町へ通じる道と側道部の交差点約100㎡である。

調査期間は、昭和56年9月24日から同年10月8日まで延べ15日間であった。

側道は調査対象面まで約2mの砕石が盛土されていた。このため、砕石は重機により排土し、それ以下は大溝の底面まで、人力による調査を行なった。深さは約1mを測る。調査は、軟弱な木製品を念頭においたため、移植ゴテ、及び竹ペラを主力とする方法をとった。

検出した遺構、遺物は、旧河川の西側部の立ち上り（左岸部）と河川内に出土した土器類、木製品、獣骨類、及び自然木が多量に出土している。この結果、本線内の旧河川の続きであることが判明した。遺物量も本線同様、著しいものであった。

右岸部の立ち上りは、水に洗われ、傾斜のきつい崖面が一部に認められた。

土器類の過半数が小破片で占められ、大形片は僅少であった。いずれも水に洗われた様子が認められる。時期は、弥生時代中期末から後期にかけてのものが多く、一部古墳時代初頭の土器も検出した。

木製品類は、河川内に多量の湧水があり、このため保存状態は良好であった。主な出土遺物は、鋤、鋏、丸木弓、石斧直柄の一部、建築材の一部と想定される加工木、その他自然木が多量に出土した。

獣骨類、祭祀具に加工途中と思われる鹿角、骨髄まで食用に供したイノシシの骨、その他多数の獣骨片、歯類が出土した。

自然遺物としてはヒョウタンの完形品、クルミ、モモ等の種子が出土しており、当時の遺跡地周辺の植生の一端をうかがわせている。また、クルミはもちろんのこと、モモの種子を割りその胚乳まで食用としているものも認められた。

主な遺構、遺物は上記のごとくであり、極く小面積の一部のみではあるが発掘の成果をまとめると次のようになる。

河川内の土層堆積状況については、河川面から、礫層、砂層、粘性土、褐色土、浅間山C降下軽石層、榛名山二ツ岳のFA（火山灰）を含む黒色土と大別出来る。遺物は、C軽石層直下から土器片（S字状口縁甕）の出土が始まり、河床面（樽式土器）までである。木製品については、その下の粘性土から礫層面までである。このことから、河川は弥生時代からC軽石降下直前までの流れが認められる。C軽石上面からは、ゆるやかな曲線を描く自然堆積となる。特に木製品については、農工具、狩猟具の実態、加工から製品までの製作技術の過程、獣骨類、自然遺物から見る食生活の一端等貴重な資料が得られた。（真下）

7 新保遺跡出土青銅器の鉛同位体比測定

馬淵久夫

I. はじめに

鉛は質量の異なる4種の同位体 ^{204}Pb , ^{206}Pb , ^{207}Pb , ^{208}Pb の混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床ごとに異なるので、その精密な測定によって原料の産地推定を行なうことができる。筆者らは青銅遺物の原料をこの方法で研究しているが、弥生時代から古墳時代中期までは朝鮮半島産ないし中国産のものであり、日本産の原料の出現は7世紀ごろからと推定している。今回群馬県新保遺跡出土の巴形銅器と銅釧(2点)および同県有馬遺跡出土の銅釧と銅鏃を測定した。

II. 実験法

本法はほとんど非破壊法と言って差し支えない。遺跡出土の青銅器に必ず生じている銹を微量(約1ミリグラム)採取すればよく、外観を損なうことは全くない。古墳時代以前の青銅器は少なくとも数パーセントの鉛を含んでおり、銹もそれに近い鉛を含んでいるので、1ミリグラム中には数十マイクログラムの鉛がある。試料の化学分離によって得られた鉛のうち約1マイクログラムを取って、東京国立文化財研究所に設置されている日本電子社製表面電離型質量分析計で測定した。

III. 結果

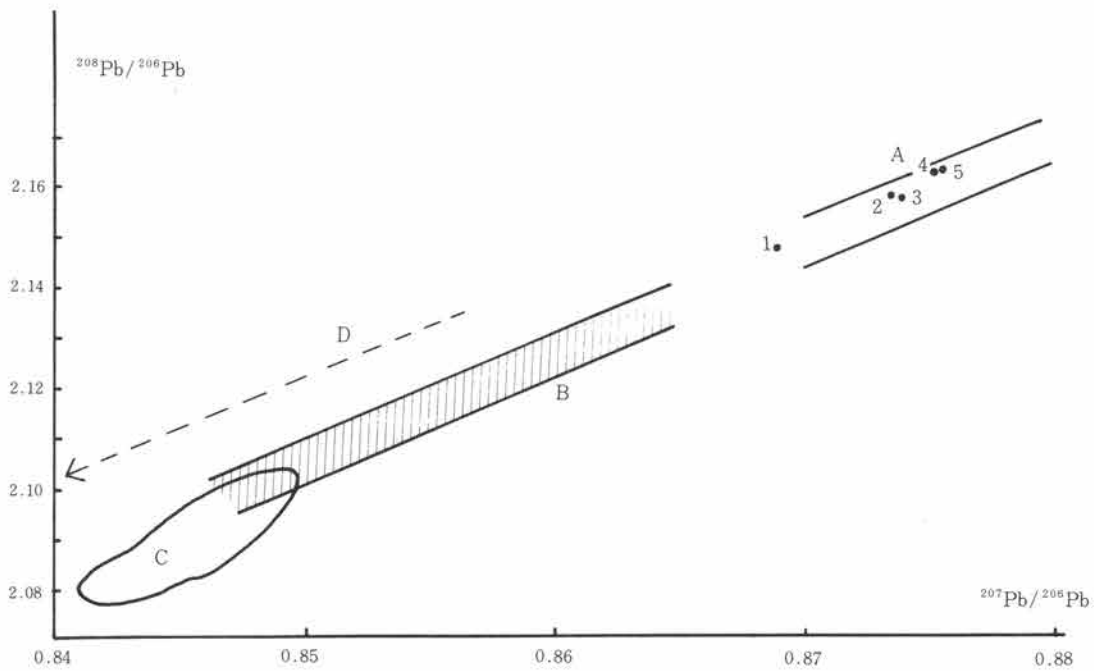
測定値は次のようになった。

No.	資料名	遺跡名	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
1	巴形銅器	新保遺跡	17.933	0.8689	2.1470
2	銅釧	〃 大溝D溝F-7	17.809	0.8736	2.1572
3	銅釧	〃 大溝2 B溝J-6	17.800	0.8739	2.1564
4	銅釧	有馬遺跡	17.773	0.8754	2.1624
5	銅鏃	〃	17.756	0.8755	2.1626
測定誤差			±0.010	±0.0003	±0.0007

IV. 考察

鉛同位体比の測定値から鉛の産地を推定するためには、産地のわかった鉛鉱石と時代別の考古遺物の測定値を基準にしなければならない。筆者らはこのような資料を多数測定し、日本・朝鮮半島・中国の鉛同位体比の分布範囲をほぼ確立した。第40図は縦軸に、 $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、横軸に $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をとってその分布状況を示した模式図である。以下、図の概略を説明する。

まず、Aの範囲は、弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置で華北の鉛である。Bは後漢・三国時代の舶載鏡の占める範囲で、華中・華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分はここにはいる。Cは日本産の鉛鉱石。Dは多鈕細紋鏡や細形銅利器、つまり弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。弥生時代から古墳時代中期までの出土遺物はA、B、Dのいずれかに属し、Cに入るものはないことが今までの測定でわかっている。



第40図 鉛同位体比分布図

さて、今回測定した資料の同位体比を図にプロットしてみると第40図の点のように分布する。点の脇に記した数字は表の資料番号である。一見してわかるように、No 2、3、4、5はAに属する。現在までに測定した弥生時代の国産青銅器の多くがAに属することから考えて、これらの4資料は弥生時代に将来された華北の原料で作られたと推定される。

No 2、3、4、5については注目すべきことがある。すなわち、同じ遺跡出土の2資料ずつが誤差の範囲で一致した同位体比を示すことである。これはそれぞれ同一の素材から作られたことを示唆している。

No 4、5の同位体比は画一的な値をとる近畿式・三遠式銅鐸と一致するので、弥生時代後期または末期に作られた可能性が高い。

No 2、3のような同位体比は中期の銅鐸（扁平鈕式）にもみられるが、弥生時代末期の青銅器にも存在するので断定はできないが、弥生時代後期に作られた可能性が高い。

No 1の巴形銅器は問題である。図ではAとBの中間に位置する。このような値は極めて稀で、弥生時代の原料(A)に古墳時代の原料(B)が混ぜ合わされたという解釈も成り立つ。ちなみに、中国鏡においては前漢鏡から後漢鏡への移行期に制作されたとされる連弧紋鏡および方格規矩鏡に類似の値が見いだされている。混ぜ合わされたにせよ、中国から将来された素材そのものだったにせよ、本資料の製作は弥生時代から古墳時代にかけての時期と推定される。

参 考 文 献

- 1) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究、MUSEUM 370号、1982
- 2) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比からみた銅鐸の原料、考古学雑誌 68巻1号、1982
- 3) 馬淵久夫、平尾良光ほか：古代東アジア銅貨の鉛同位体比、考古学と自然科学 15号、1982
- 4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(2)、MUSEUM 382号、1983

- 5) 馬淵久夫、江本義理ほか：鉛同位体比法による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定、古文化財の科学 28号、1983

(東京国立文化財研究所)

補 註

- 1) 新保遺跡出土巴形銅器は脚部破片で、体部との接続部で切断している。切断部は磨かれて角は丸く滑らかである。円孔を2個穿ち、再利用している。出土場所は浅い溝状の窪みの覆土中であり、時期は弥生後期又は古墳前期に属する。詳細は本遺跡調査報告書第2分冊「集落編」に掲載する。
- 2) 有馬遺跡出土銅釦はほぼ完全な状態で弥生後期の周溝墓主体部より出土した。径5.5cm前後、幅7mm、薄板状の銅環5本一組で構成される。佐藤明人、友廣哲也、大西雅広「群馬県有馬遺跡—弥生時代後期の墓跡を中心に—」日本考古学年報35 1982年度版

8 新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体

藤 下 典 之

メロン仲間 *Cucumis melo* L. とヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. の種子は、イネ、モモ、クルミなどととも本邦各地の古代遺跡から高い頻度で出土し、1986年2月現在、それぞれの出土遺跡数は104と110にも達している。昨今は、ヒョウタン仲間の厚くて硬い組織からできている果皮片や、時には完形果実の出土も各地で見られる。しかし、現在までのところ、両方の栽培植物とも関東以東からの出土例は、西日本に比べると非常に少なく、特に弥生時代のものとなると群馬県の日高遺跡が最北端で、古墳時代のものも両方の植物を合せて7件しかなかった。今回、新保遺跡の弥生後期と古墳前期の溝から出土したウリ科植物の遺体の調査をする機会を得たので、新保遺跡に近隣する日高遺跡の計測結果も併記しながら、この地方における古代のウリ科植物を考察する。

調査材料と方法

種子はいずれも水づけのものを、研究室内の直射日光のあたらない場所でゆっくり自然乾燥させたのち、完形正常（成熟）種子、しいな（未熟または不受精種子）、奇形種子、部分欠損種子（計測不能）に分け、種子ごとの長さと幅を0.1mmまで読みとれる計測用ルーペで、計測した。果実および果皮片は、群馬県埋蔵文化財調査事業団から奈良元興寺文化財研究所へ保存処理に出されていた水づけ材料を借り出し、余分の水が滴り落ちない程度の生乾きの状態になった時点で計測し撮影した。No1206の頭頂部欠損果実内には、種子を含む胎座組織がそのまま内蔵されていたので、欠損部より胎座組織を取りだし、その中から種子を摘出して乾燥後に計測した。

調査結果と考察

1 メロン仲間 *Cucumis melo* L.

新保遺跡から出土した種子は、その100粒の平均長6.56mm、平均幅3.15mm（第6表）が示すように、この仲間の種子^(5,6)としては小型であった。50粒以上を出土した遺跡（遺構）ごとの種子の大きさを、平均値で代表させてまとめたのが第41図であるが、新保と日高両遺跡からの出土種子が全国的にみた場合にも小型であることがよくわかる。新保遺跡からの100粒のなかには、長さが6.0mm以下の雑草メロン型の小粒種子が18粒、6.1～8.0mmのマクワ・シロウリ型の中粒種子が82粒あり、8.1mm以上のモルディカメロン^(5,6,8)型の大粒種子は全く含まれていなかった（第42図）。これからみると、遺構あたりの種子の大きさの変異は少ない（粒揃いが良い）方ではあったが、新保、日高両遺跡からの出土種子は、マクワ・シロウリ型と雑草メロン型のものがまざりあった複数個の果実に由来するものと推察された。この大きさの変異、特に6.0mm以下の小粒種子の含有比は、板付、鬼虎川、池上、瓜生堂など北九州や畿内の代表的な弥生遺跡からの出土種子のそれらと類似^(1,3,4,5)していた（第43図）。種子内容（変異）が大阪の弥生前～中期の鬼虎川や瓜生堂遺跡からの出土種子に酷似していたのは、メロン仲間の同じような種類が、畿内から群馬地方へ時間をかけて伝播していったともうけとれよう。そして、弥生後期では、他の栽培地から果実自体を持ち込むことは無かったであろうから、この地方でもマクワ、シロウリが栽培されていたものと考えてよからう。新保、日高両遺跡からの出土種子のな

第6表 新保遺跡より出土したウリ科植物の遺体
Cucumis melo L., メロン仲間

整理No.	出土箇所	発掘年次	種子が出土した溝の時代	出土遺体					種子の大きさ			参照				
				種			子		果	実	平均長mm	平均幅mm	計測数	図	写	真
				完形正常	しいな	奇	形	部分欠損								
1200	C 溝	1977.6~9	弥生後期前半(新)	123	0	1	15			6.56	3.15	2.08	123	41,42,43	PL,1-1	

Lagenaria siceraria Stand. ヒョウタン仲間

1201	D 溝	1977.6~9	弥生後期前半(古)	12	0	1	1			10.24	5.22	1.96	12	45	PL,1-2左	
1202	C 溝	1977.6~9	弥生後期前半(新)	2	0	0	0			9.3	4.7	1.97	2			
1203	2 B 溝	1977.6~9	弥生後期後半	120	0	4	0			9.93	5.25	1.88	120	44, 45	PL,1-3	
1204	2 B 溝	1977.6~9	弥生後期後半	69	0	3	0			10.13	5.19	1.95	69	44, 45	PL,1-4	
1205	B 溝	1977.6~9	古墳前期	50	1	7	9			10.78	5.56	1.93	50	44, 45	PL,1-2右	
1206	B 溝	1977.6~9	古墳前期	87	0	3	0			12.91	5.94	2.17	87	44, 45	PL,1-5, 6.7	
1207	2 B 溝	1977.6~9	弥生後期後半	—	—	—	—								PL,1-7左	

Benincasa hispida Cogn. トウガン

1208	D 溝	1977.6~9	弥生後期前半(古)	1	0	0	0			10.7	5.8	1.84	1		PL,1-8右上	
1209	B 溝	1977.6~9	古墳前期	2	0	0	0			(9.5)	(5.0)	(1.9)				
										9.85	5.5	1.79	2		PL,1-8右下	
										(8.45)	(4.85)	(1.74)				

Melothria japonica Maxim. スズメウリ

1210	2 B 溝		弥生後期後半	1	0	0	0			5.5	3.6	1.52	1		PL,1-8左	
------	-------	--	--------	---	---	---	---	--	--	-----	-----	------	---	--	---------	--

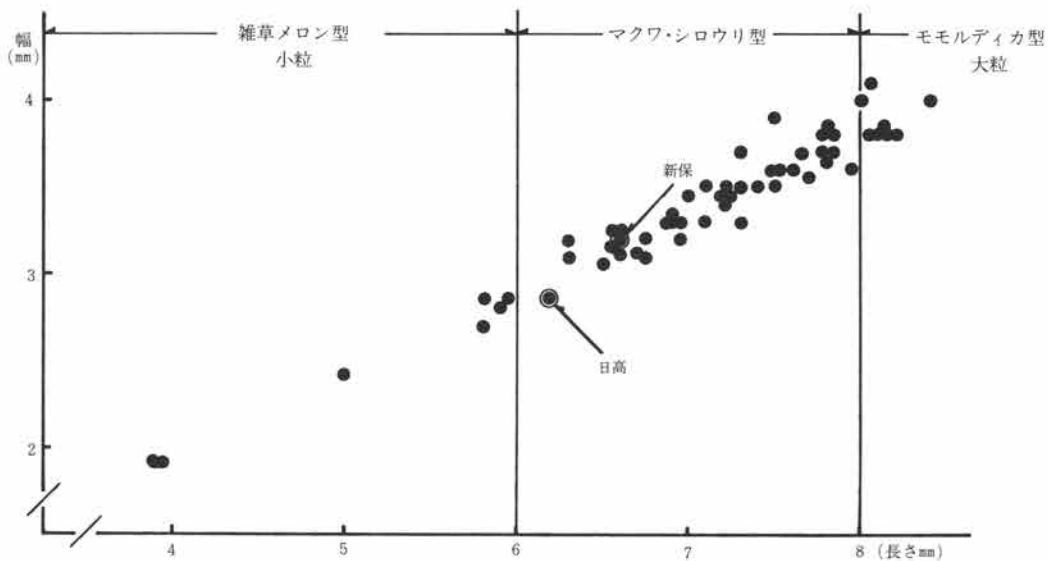
第7表 日高遺跡より出土したウリ科植物の遺体

Cucumis melo L., メロン仲間

整理No.	出土箇所	発掘年次	推定時代	出土遺体					種子の大きさ			参照				
				種			子		果	実	平均長mm	平均幅mm	計測数	図	写	真
				完形正常	しいな	奇	形	部分欠損								
kk14	1号溝	1977.7	弥生後期	221	5	0	34			6.15	2.86	2.15	100	41,42,43		

Lagenaria siceraria Stand. ヒョウタン仲間

kk14	1号溝	1977.6~7	弥生後期前半	30	0	0	18			10.89	5.83	1.86	30	44, 45		
------	-----	----------	--------	----	---	---	----	--	--	-------	------	------	----	--------	--	--



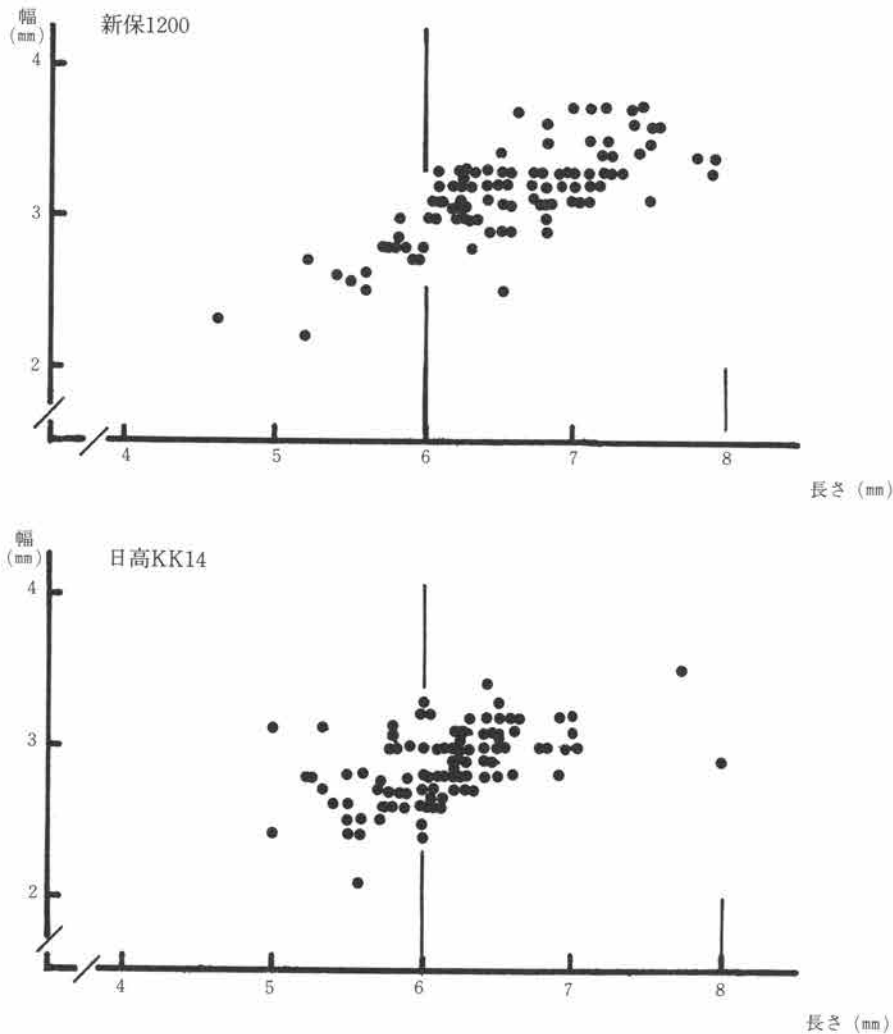
第41図 日本各地の遺跡から出土したメロン仲間の種子の大きさ
50粒以上を出土した遺跡ごとの種子の長さとの幅の平均値均値

かに6.0mm以下の雑草メロン型の小粒種子が、18~36%含まれていた事実は興味深い。種子の小さな雑草メロンは西日本各地、特に離島に現生する野生種に近い種類で、ウズラからアヒルの卵大の未熟時に苦味の強い果実を結ぶ原始的な植物であるが、マクワ、シロウリ、ネットメロンとは自由に交雑する。筆者は現時点では、日本の雑草メロンは有史前に帰化し、それが現在まで西日本各地に生き残ってきたものと推定している。この雑草メロンに符合する種子が、現生地から遠く離れた本州東部の、しかも太平洋や日本海の海岸線から内陸部に深く入った弥生後期の遺跡から出土した事実は、雑草メロン型のものが古代にはこの地方にも自生していたという可能性さえもうかがわせる。一方、平安中期の山形県の後田遺跡からもこの雑草メロン型の小粒種子が出土している⁽⁶⁾ので、あるいは沿海州方面から渡来してきた可能性もある。また、雑草メロンとは別の小粒種子をつける果実の小さいマクワの種子であったかも知れない。種子の大きさ以外の形質、たとえば種子の表面構造から、雑草メロンかマクワかを識別することは現生の種子でも不可能であるが、いずれにしても小粒種子は小さい果実を結ぶ種類のものである⁽³⁾。このような小さい果実をつけるメロン仲間の古代における利用方法としては、現在も日本各地に残っている祭祀儀礼的なものが考えられる。利用方法の解明にあたっては種子と伴出遺物の種類、出土遺構（井戸や溝へ供物を投げ入れたり流す）などを詳細に吟味する必要があり、また今後この地方から出土してくる遺体にも強い関心と期待がよせられよう。

2 ヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl.

(1) 種子

6箇所からの出土種子が計測できたが、古墳前期の1206の平均長12.9mm、平均幅5.9mmの種子は、他の5箇所や日高遺跡の平均長9.3~10.8mmに比べて大きかった（第6表、第44、45図）。50粒以上を出土した遺跡（遺構）ごとの種子の大きさを平均値で代表させてまとめたのが第44図であるが、前述の1206のみが出土種子としては大きい部類に入り、その他の新保遺跡のものや日高遺跡のものは小さく富山県の弥生後期の江上遺跡や古墳時代の若宮B遺跡からの出土種子の大きさに類似していた⁽⁸⁾。新保遺跡内の出土箇所ごとに種子の大きさ（長さとの幅）の変異を示したのが第45図である。種子が最も大きかった古墳前期の1206のもの（第45

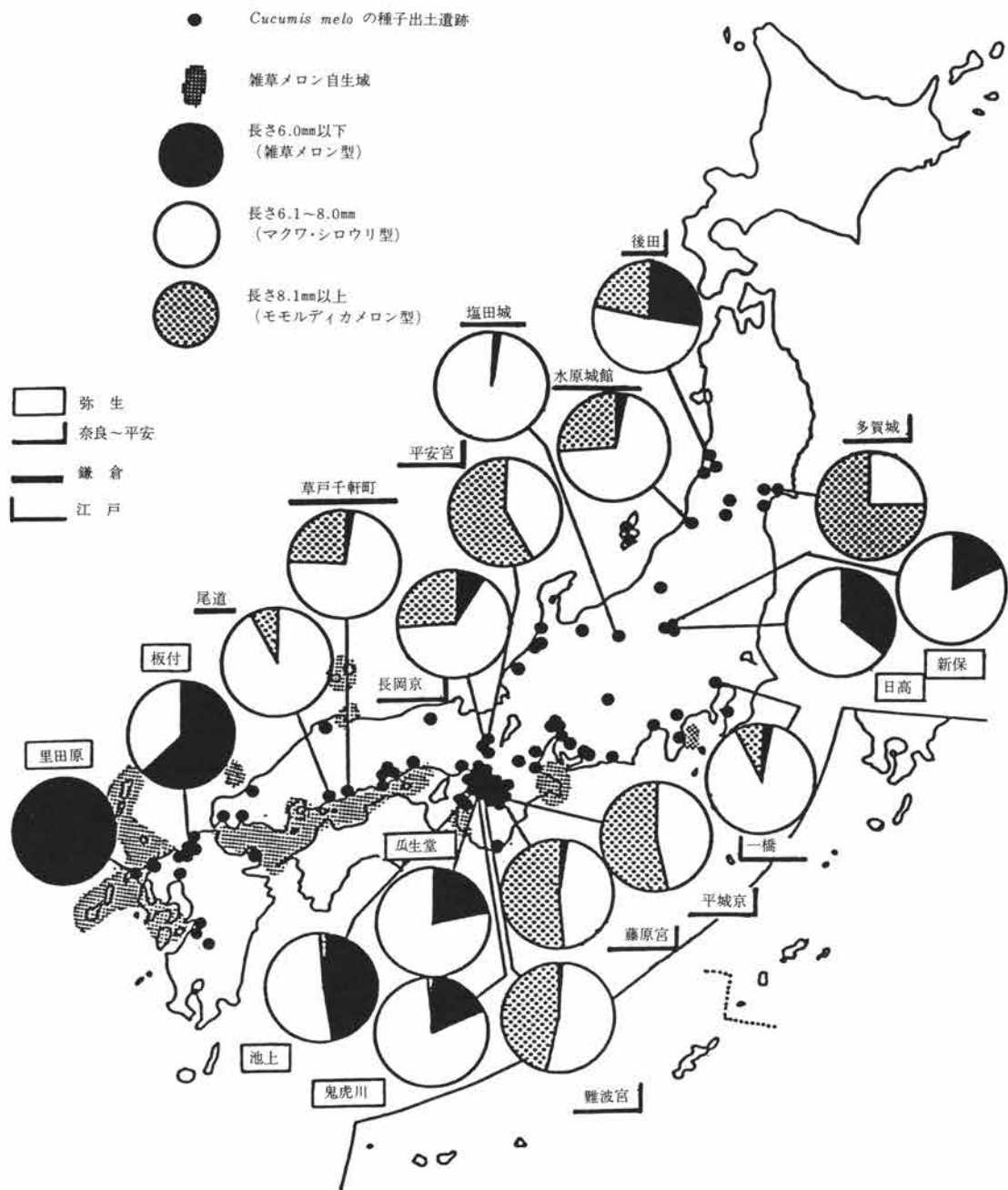


第42図 新保遺跡と日高遺跡から出土したメロン仲間の種子の大きさの変異
長さ6.0mm以下は雑草メロン型、6.1~8.0mmはマクワ・シロウリ型

図中段右)は、1個の果実から摘出した種子であるから、同一果実内での種子間の長さや幅の変異のひろがりがよくつかめる。この果実の種子は大きさ以外に形でも他のものと違って、長さ/幅が2.0以上の細長の種子(斜めの直線の下側に分布)がほとんどを占めていた。弥生後期後半の1203の種子(第45図上段右)は、幅の変異が多く、それからだけでも種類(変種、品種)の違う複数個の果実由来の種子が混ざり合ったものと推定された。現にこれらの種子が出土した箇所からは明らかに3個の果実の頭頂部分とわかる果皮片PL.1-3を伴出していた。弥生後期後半の1204(第45図下段左)の種子は大きさの変異が極めて少ないことから1個の果実からの種子であろう。古墳前期1205(第45図下段右)の種子は、同時期の1206の1果分の種子の変異の広がりや種子数に比べると、種子数が少ないにもかかわらず大きさの変異が著しく、これは種類(変種、品種)の違う複数個の果実由来のものとして推定された。

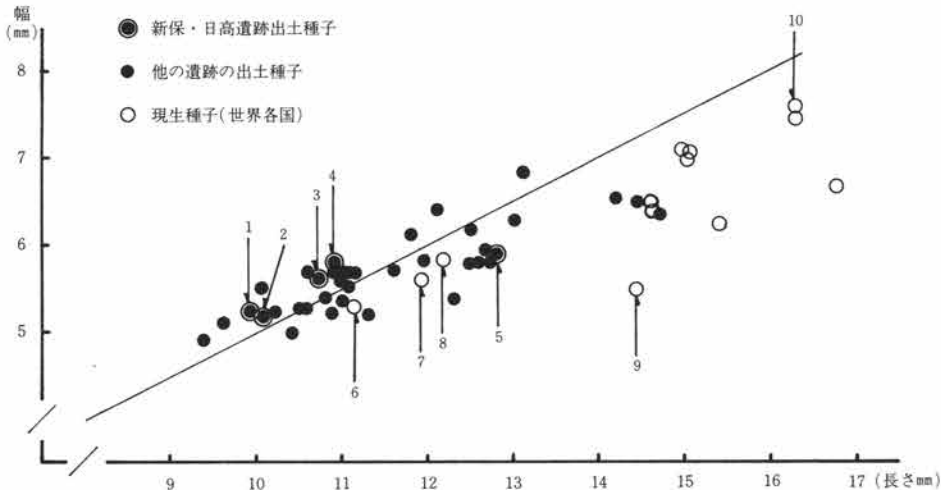
(2) 果皮

ヒョウタン仲間の場合もメロン仲間同様に、あるいはそれ以上に現生、出土種子ともその形態から種類(ヒョウタン、フクベ、ユウガオ、センナリヒョウタンなどの変種)を同定することは難かしい。すでに本



第43図 メロン仲間の種子出土遺跡の分布と出土種子の大きさ
遺跡ごとに無作為抽出した100粒の計測結果(長さ別比率)
を扇形グラフに示した

邦各地の10遺跡から完形果実が出土しているが、球型、ギボシ型、フラスコ型が普通で、果実の腰にあたる中央部が美しくくびれた現今の本邦のヒョウタン型は、奈良県の中世～江戸時代の布留遺跡からの1果だけである。果形と種子の形との関係を求めると、フラスコ型果実の種子は長さ/幅が1.85～1.96であったのに対して、球型果実では2.08～2.18で後者の種子が細長くなる傾向があった。^(6, 8, 9)新保遺跡からの出土種子のなかで最も大きかった1206の長さ/幅は2.17で、既往の数値からすると果実は球型をしていることになる。しかし、この果実は頭頂部が $\frac{1}{3}$ 程度欠損しているが、球型ではなく1207のようなナスビ型(PL. 1-7)をしていた。発掘時の写真をみると、同じような形をしたものが他の遺構からも出土しているので、新保遺跡付近では当時このようなナスビ型の果実をつけるヒョウタン仲間が利用されていたのであろう。同形のものが山形県の平安期の境田遺跡から出土しており、水筒、酒入れなどの容器としての利用も想像できるが、確かな用途については今のところ明かではない。上記1206以外の種子の長さ/幅は1.88～1.97で、フラスコ型に入るが、今回の出土遺体中にはフラスコ型の完形果実や、一見してそれとわかる果皮片は無かった。ただし、弥生後期後半2 B溝出土の1203の3果分の果実頭頂部分(PL. 1-3)の形は、球型でもギボシ型でもなくナスビ型



第44図 日本各地の遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子の大きさ

50粒以上を出土した遺跡ごとの種子の長さとの幅の平均値

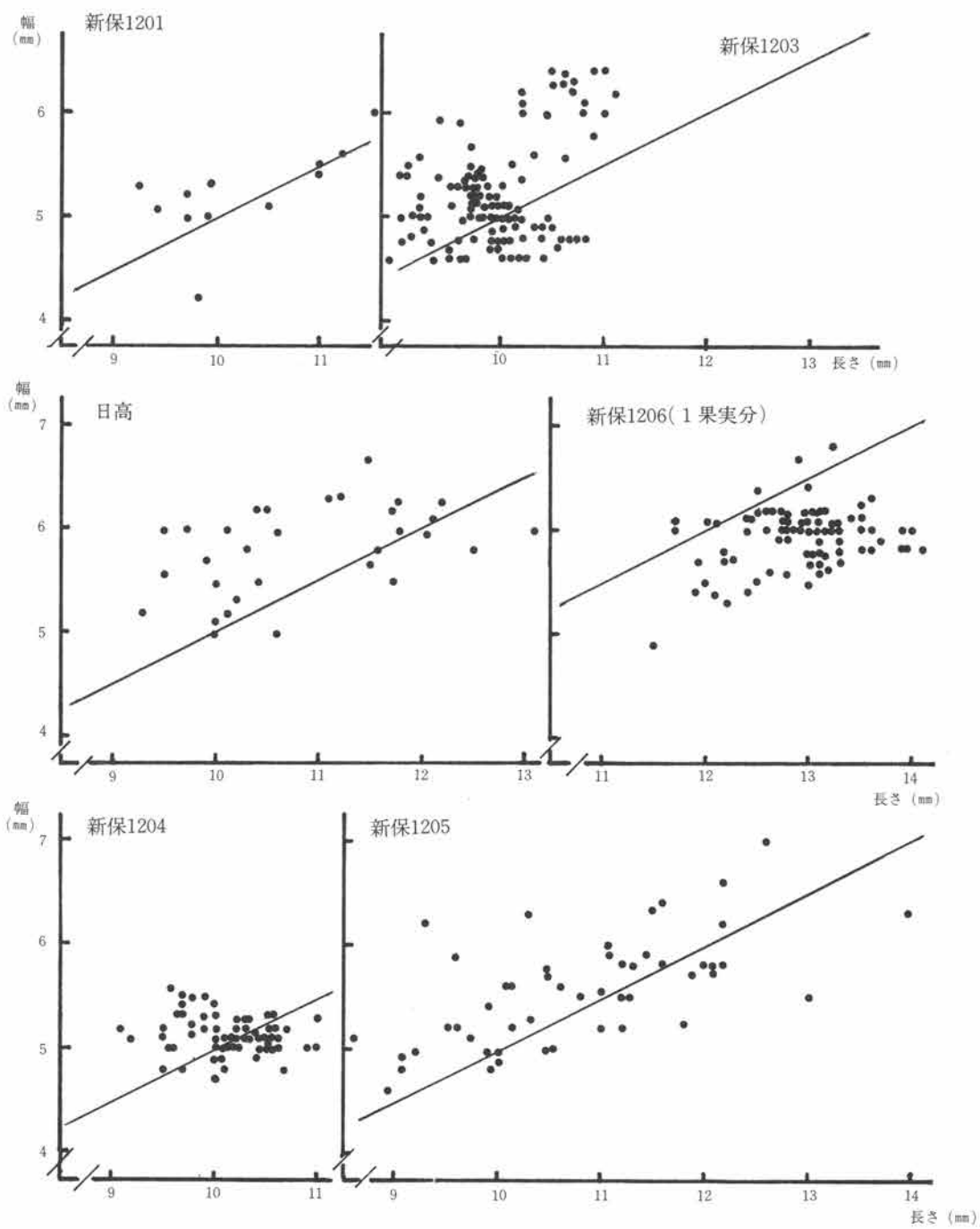
新保遺跡：1(1203)、2(1204)、3(1205)、5(1206)

日高遺跡：4

現生種子：6(タイのアカ族栽培)、7(センナリヒョウタン)、8(ナイジェリアの野生ヒョウタン)、9(朝鮮小ヒョウタン)、10(岡山カンピョウ)

長さ/幅=2.0の種子はグラフ中の斜めの直線上にのり、直線より上側は太身、下側は細身の種子となる

またはフラスコ型に近い形をしていた。上記以外に原形の推定できるような果皮片の出土はなかったが、こなごなに割れた果皮片の中から、比較的果実の特徴を残す頭頂部分が数点あり、ナスビ型と推定されるものに1211、1212、1213が、ギボシ型と推定されるものに1214があった。1206の果実は縦径が推定15～20cm、横径10cmであり、1207の果実も含めてその大きさは既往の出土果実の中では小さい方である。弥生後期から古墳前期にかけての時代に、この地方でヒョウタン仲間の栽培があったかどうかについては、この仲間の成熟果が遠方からでも容易に持ち運びできることと、出土遺体数がおお不十分であることから、軽々には結論で



第45図 新保遺跡と日高遺跡から出土したヒョウタン仲間の遺跡・地点別にみた種子の大きさ変異
 斜めの直線は長さ/幅=2.0の直線

きない。

3 トウガン *Benincasa hispida* Cogn.

トウガンの原産地は熱帯アジアで、果実の貯蔵性が良く（冬まで貯蔵可能なことから冬瓜、それがなまってトウガンになったとも言う）栽培も比較的容易で、沖縄、台湾から東南アジア、中近東にかけては重要な野菜であり、そのうえ種子自体もメロン仲間より遥かに大きいことからすると、遺跡からもっと高頻度で多量に出土してもよさそうに思える栽培植物である。しかし、種子の出土が確認できたものは、いままでのところ奈良・平安5、中世1、江戸2の8箇所しかなく、遺跡当たりの出土数も1～数個と極端に少ない⁽⁶⁾。最近、ようやく大阪の平安後期の佐堂遺跡から69粒⁽⁷⁾の種子が出土した。今回、東日本の新保遺跡の弥生後期前半（古）のD溝から1粒（1208）、古墳前期のB溝から2粒（1209）出土した。出土数がやはり少ないので、この地方での栽培の可能性については言及できないが、弥生後期から古墳前期にかけての時期に、東日本のこの地方でもトウガンが利用されていた事実（現在のところ日本では最も古い）は重要である。なお、遺跡当たりの出土種子が全国的に少ない理由の一つに種子自体の利用も考えられる。

4 スズメウリ *Melothria japonica* Maxim.

弥生後期後半の2 B溝から1粒（1210）出土した。いままでにも弥生2、奈良・平安1、中世1の計4遺跡⁽⁶⁾から出土しているが、いずれも1～数粒で、漢方薬も含めてその利用情報がないことから、溝の付近に生えていた野生のスズメウリの種子がたまたま溝の中に落ちこんだものとみてさしつかえなからう。

結 語

1. 新保遺跡、日高遺跡はともに弥生時代の遺構からメロン仲間、ヒョウタン仲間、トウガンの種子を出土した遺跡としては、現在のところ本邦の最北端のものである。

2. 新保遺跡と日高遺跡から出土したメロン仲間の種子の大きさの変異は、畿内、北九州の弥生時代前中期の遺跡のものに相似し、マクワ・シロウリ型のほかに18～36%の雑草メロン型の種子を包含していた。

弥生後期にすでにこの地方ではマクワやシロウリの栽培の可能性があったと推定したが、雑草メロンの自生の有無も含めて、それらの確証のためにはさらに今後の発掘に期待がかけられる。

3. 新保遺跡から出土したヒョウタン仲間の種子の大きさの変異や果皮（果実）から、弥生後期から古墳前期のころに、この地方では数種類（たとえば果実の大きさや形の違う種類、植物分類学上の変種や品種の違ったもの）のヒョウタン仲間が利用されていたことが裏づけられた。ナスビ型果実の出土例は、現在のところ新保遺跡以外では山形県の平安期の境田遺跡しかない。

4. 新保遺跡の弥生後期と古墳前期の溝からトウガンの種子が合せて3粒出土しているが、このような古い時代から東日本でトウガンの利用されていたことが明らかとなった。出土種子をマクワ、シロウリあるいはヒョウタンと断定せずに、メロン仲間やヒョウタン仲間としたのは、植物分類学上の変種が前者にはマクワ、シロウリ、ネットメロン、モルディカメロン、ヘビメロン、イボメロン、雑草メロン……など40余、後者にはヒョウタン、ユウガオ、フクベ、センナリヒョウタン……などがあるが、現生の種子でも大きさが連続変異を示すので、個々の変種を種子の形態のみから識別し同定することは不可能である。このような理由から、変種が違っていても分類上同属同種のものを仲間の字句をつけて表現した。メロン仲間は *Cucumis melo* 全般を、ヒョウタン仲間は *Lagenaria siceraria* 全般をさす。トウガンも種子の形態には変異

があるが、1種1変種であるのでトウガンとした。

引用文献

- (注1) 藤下典之、1976 *Cucumis melo* (マクワウリ、シロウリなど) の出土種子について、板付、福岡市埋蔵文化財調査報告 35:105-109
- (注2) 藤下典之、1977 草戸千軒町遺跡および尾道中世遺跡より出土した *Cucumis melo* の種子について、草戸千軒町遺跡 1975:55-62
- (注3) 藤下典之、1980 池上遺跡より出土した *Cucumis melo* の種子について、特に現生のメロン仲間の種子および他の遺跡から出土した種子との対比、池上、四ツ池、大阪文化財センター、6:105-124
- (注4) 藤下典之、1980 瓜生堂遺跡出土の *Cucumis melo* および *Lagenaria siceraria* の種子について瓜生堂、大阪文化財センター、441-444
- (注5) 藤下典之、1980 本邦各地の遺跡から出土したウリ科植物の遺体について、考古学、美術史の自然科学的研究、日本学術振興会、東京 223-233
- (注6) 藤下典之、1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」古文化財編集委員会編『考古学、美術史の自然科学的研究』628-644同朋社
- (注7) 藤下典之、1984 佐堂遺跡から出土したウリ科植物の遺体について、佐堂(その1)近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 93-98
- (注8) 藤下典之、1984 江上A遺跡およびB遺跡から出土したヒョウタン仲間 *Lagenaria siceraria* Standl. とメロン仲間 *Cucumis melo* L. の遺体について北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品(本文)・総括編:107-117
- (注9) 藤下典之、1984 翁橋遺跡より出土したウリ科植物の遺体、堺市文化財調査報告第18集:101-108

9 新保遺跡出土加工木の樹種

鈴木 三男
能城 修一

はじめに

群馬県高崎市の新保遺跡より出土した木材の樹種の識別を行った。新保遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡で水田遺構を伴っていることで注目される。遺跡内には幾本もの流路があり、その中からたくさんの自然木に混じって鋤、鍬等の農具や板材などの加工木が多数出土した。今回はこれらの内、流路（溝）から出土した加工木1028点についての樹種の識別結果を報告する。

関東地方では一般に、泥炭層などの堆積層は縄文時代後期以降は、古墳時代前期になるまで、ほとんど残っていない。これはおそらくは気候の寒冷化に伴う海退によってその堆積環境が変化したため、ほとんど堆積を見なかったか、あるいは堆積した後の侵食によって失われたためと考えられる。一方、考古学の資料からみると、縄文晩期から弥生中期にかけては関東平野は人口が極めて希薄であったことが遺跡の数などから考えられている。その結果、現在のところ、関東平野のこの時期の古植生などの自然環境についての情報は極めて少ない。これは低湿地の条件下で始めて遺存することの出来る木材についてはなおさらのことで、今までに関東地方でのこの時期の報告は皆無に近い。その意味で、水田遺構と共に多数の農具を出土した新保遺跡の資料は関東平野での稲作農耕のあり方と自然環境、特に人間の生活環境としての森林を明らかにする上で極めて重要な遺跡と言える。しかし、加工木と自然木ともに試料の量が余りにも多いため、この報告では加工木についてのみ扱い、自然木の結果及びそれと加工材の比較検討はこれに引き続く報告書で試みる。

識別はカミソリ刃で切った切片をガムクロラールで封入し、光学顕微鏡で観察して行った。その結果を識別された樹種毎にその特徴、識別の根拠等について以下に示す。さらにそれらの代表的な標本の顕微鏡写真をPL.3～19に、出土樹種の分類順に配列した全標本のリストを、木製品の種類、遺物番号、出土溝等のデータとともに第9表に一覧表として示した。ここに掲載された加工木は弥生時代中期から古墳時代前期にかけてのものであるが、A～Fの溝にはそれぞれ下記の時期の土器などの遺物が多く見られた。従ってこれらの溝から出土した加工木はおおよそ、それぞれの時期のものであると考えられる。この表では GSF の記号が付いた標本番号と算用数字のみの遺物番号が付いている。標本番号は樹種識別のためにつけられたものであり、遺物番号は遺物整理のために付られた番号である。この表から遺物番号を読み取り、第13章および木製品観察表を参照すれば木製品の形態や大きさ、木どりなどさらに詳細な情報が得られる。さらに第8表には出土樹種の出土溝別の集計表を示した。

- F溝：弥生中期後半
- E溝：弥生中期末葉～後期初頭
- D溝：弥生後期前半（古）
- C溝：弥生後期前半（新）
- 2 B溝：弥生後期後半
- B溝：古墳前期（古）
- A溝：古墳前期（新）

なお、この報告に用いられたプレパラートは全て金沢大学教養部生物学教室に保存されている。

樹種別記載

1. カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 PL.3-1~3 (GSF-1013)

垂直・水平樹脂道および樹脂細胞のいずれをも欠く針葉樹材で、春材の仮道管と夏材のそれとは直径において明確に異なるが、春材から夏材への移行はゆるやかである。仮道管の内壁にはらせん肥厚が2~3本ずつまとまって走っていることよりイチイ科のカヤの材であることがわかる。カヤは樹高25m、幹径2mくらいに達する常緑針葉樹で、東北地方以南の暖帯におもに分布する。木材はやや重硬で弾力性とみ、ち密で均質であり、碁や将棋の盤に賞用されるほか、土台や浴室用材、桶、漆器木地、家具材、仏像などに用いられる。水湿にも強く、遺跡から出土した材はほとんど劣化していない。

本遺跡からは石斧柄や板材などとして18点が出土しているが、他遺跡では樺などの事例が良く知られている。

2. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch. イヌガヤ科 PL.3-4~6 (GSF-190)

カヤに似た針葉樹材で、夏材部がごくわずかであり、年輪がほとんど目立たない。仮道管内壁の螺旋肥厚はカヤより密で長軸に対して直角にちかく寝ている、樹脂細胞を持つなどから区別され、イヌガヤ科イヌガヤの材であることが分かる。イヌガヤは樹高10m、幹径30cmにたつする常緑針葉樹で、東北地方以南の暖帯におもに分布している。木材はやや堅硬で木理ち密であり、器具材や施作材などに用いられる。一方、本州の日本海側にはこれの変種である低木性のハイイヌガヤが多雪地帯を中心に分布している。いずれもカヤ同様水湿に強く、遺跡出土材でも保存状態は良好である。

本遺跡からは丸木弓あるいは弓材として50点、農具の柄として1点出土している。丸木弓はいずれも直径5センチ以下の幹、あるいは枝材で、イヌガヤ、ハイイヌガヤともに用いられる。丸木弓はもっぱら狩猟に用いられたと考えられ、その用材は一般的傾向として、西日本ではカヤ、東海地方を中心としてイヌマキが広く用いられ、イヌガヤは西日本、東海地方などにも見られるものの、関東地方では縄文時代から古墳時代にかけてはイヌガヤの丸木弓の事例が圧倒的である。現在は高崎市付近にはあまりイヌガヤが分布していないにもかかわらず当遺跡において多量の出土をみることは興味深い。当時、イヌガヤが比較的普通に生えていたと思われる関東地方南部やハイイヌガヤの生えていた上越地方からの移動の可能性も考えられる。

さらに第8表に見るように、弥生時代の遺物を多く出土した溝には26点(8.8%)もあったイヌガヤが古墳時代前期のそれには僅か5点(2.4%)に減少している。弥生時代の25点(1点は農具直柄)と古墳時代の5点が丸木弓である。これは鉄器の普及による弓矢の変化か、あるいは弓が狩猟具から武具に変化したことによる選択樹種が変わった事を示唆するのかもしれない。

3. モミ類 *Abies* sp. マツ科 PL.3-7~9 (GSF-538)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材で、春材から夏材への移行はゆるやかであるが年輪は明瞭、放射仮道管をもたず、放射柔組織の壁は厚くたくさんの単壁孔をもち、時として傷害樹脂道をもつなどからマツ科モミ属の材であることがわかる。モミ類は関東地方ではモミ(*Abies firma*)が平野部から山地帯にかけて、ウラジロモミ(*A. homolepis*)が山地帯に、そしてシラビソ(*A. veitchii*)とオオシラビソ(*A. mariesii*)が亜高山帯に分布しているが、材構造はたがいに似ており種の区別はむずかしい。いずれも樹高30m、幹径1mにたつする常緑針葉樹で、木材は木理通直であるが保存性はひくく、建築材や家具材、楽器材、パルプ材など

に用いられる。

当遺跡からは細棒状の木製品や薄い板材として77点が出土している。遺跡出土材はいずれも良く保存されており、木目がはっきりしている。関東地方では縄文時代からは自然木、加工木ともほとんどモミ類の材は知られていないが、古墳時代の遺跡からはこのような細棒、薄板状の木製品の出土が良くある。

4. トウヒ類 *Picea* sp. マツ科 PL.4—10~12 (GSF-884)

垂直・水平樹脂道をとともにもつ針葉樹材で、樹脂道の分泌細胞が厚壁で、水平樹脂道を含む放射組織は接線断面で見たとき、きれいな紡錘形をしていること、放射仮道管の有縁壁孔縁が角ばっていることなどからマツ科トウヒ属の材であることがわかる。トウヒ類は関東地方では亜高山帯から冷温帯にかけてトウヒやハリモミ、イラモミなどが分布しているが、材構造はたがいに似ており種の区別はむずかしい。いずれも樹高30mにたつする常緑針葉樹であり、木材は木理通直で弾力性があり、建築材や器具材、パルプなどに用いられる。

当遺跡からは削り出し棒として1点出土しているが、関東地方ではトウヒ類の加工木としての出土はほとんど知られていない。

5. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. PL.4—13~15 (GSF-498)

垂直・水平樹脂道をとともにもつ針葉樹材で、樹脂道の分泌細胞が薄壁であること、分野壁孔が窓状であること、放射仮道管の内壁が鋸歯状に肥厚していることなどからマツ科マツ属のクロマツかアカマツの材であることがわかる。この両者は保存状態が良い場合には、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚の程度により、それがなだらかなクロマツと甚だしいアカマツに区別でき、本遺跡の出土材2点はいずれもアカマツである。アカマツは本州以南の温帯から暖帯にかけて広く分布する常緑針葉樹で、樹高30m、幹径1mにたつする。木材は重硬で木理通直、樹脂が多くて水湿に強く、柱や梁、土台などの建築材、橋梁や基礎杭などの土木材、農機具や漆器木地などの器具材、船舶材、盆、彫刻材、マッチ軸木などひろく用いられる。

現在では関東地方のみならず広く全国的にアカマツ、クロマツの林がみられ、その木材も良く利用されて来たが、花粉分析の結果などからも分かるように、古くにはこのような広範な分布はしていなかった。木材でも古墳時代以前での出土はむしろ希で、当遺跡でも杭など2点が出土したに過ぎない。

6. 五葉松類 *Pinus* (*Haploxyton*) sp. PL.4—16~18 (GSF-1044)

垂直・水平樹脂道をとともにもつ針葉樹材で、樹脂道の分泌細胞が薄壁であること、分野壁孔が窓状であること、放射仮道管の内壁が平滑であることなどからマツ科マツ属の五葉松類 (Subgen. *Haploxyton*) の材であることがわかる。関東地方に分布する五葉松類のうち高木となるものにはヒメコマツ (*P. parviflora*) とチョウセンゴヨウ (*P. koraiensis*) とがあるが、材構造からは両者を識別するにいたっていない。ともに樹高30mにたつする常緑針葉樹で、木材は木理通直で加工しやすく、板材や家具材、経木、楽器材などに用いられる。

五葉松類の遺跡からの出土は余り知られていなく、当遺跡からは板材として2点が出土している。

7. スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 PL.5—19~21 (GSF-553)

垂直・水平樹脂道をとともにもつ針葉樹材で、春材から夏材への移行はゆるやかであるが春材及び夏材の仮道管は直径と細胞壁の厚さが極端に違うので年輪は極めて明瞭である。仮道管、放射仮道管とも内壁のらせん肥厚をも欠き、分野壁孔はスギ型の大型のものがふつう1分野に2個あるなどからスギ科のスギの材であることがわかる。スギは樹高40m、幹径2mにたつする日本特産の常緑針葉樹で、本州、四国、九州の温帯から暖帯にかけて分布し、林業上もっとも重要な樹種である。木材は比較的軽軟で木理通直、加工は容易で割

裂性は大きく特有の香りをもつ。その用途はきわめて広く、柱や土台、板などの建築材や、障子の枠や棧などの建具材、土木材、電柱、農具や曲げ物などの器具材、箆笥などの家具材、樽桶材、下駄材、彫刻などに用いられる。

当遺跡からは板材などとして6点が出土している。丸木舟をはじめとして様々な木製品が広く全国の遺跡から知られており、とくに静岡県登呂、山木両遺跡では弥生時代の水田遺構に伴い多量のスギ材が出土し、この木が稲作農耕に重要な位置を占めていたことが知られている。しかし、関東地方では弥生時代以前のスギの出土例はむしろ希であり、古墳時代以降、歴史時代になると事例はありますが、登呂遺跡などのような大量の出土は見られない。

8. ヒノキ類 *Chamaecyparis* sp. ヒノキ科 PL.5—22~24 (GSF-841)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材で、春材から夏材への移行はやや急であるが夏材部は極めて狭く、従って年輪は目立たない。仮道管、放射仮道管とも内壁のらせん肥厚を欠き、分野壁孔はスギに比べれば小さなヒノキ型でふつう1分野に2個、樹脂細胞は夏材部に偏在するなどからヒノキ科のヒノキ属の材であることがわかる。ヒノキ属の樹木のうち日本にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) が分布しているが、その材構造はたがいに似ており区別はむずかしい。ヒノキは樹高40m、幹径2mにたつする常緑針葉樹で、本州、四国、九州の温帯に主として分布し、林業上スギについて重要な樹種である。木材は木理通直で特有の芳香と光沢をもち、耐朽性と耐湿性はともに高く、社寺建築をはじめとする建築材、各種の器具材、家具材、建具材、船舶材、仏像など広く用いられる。古墳時代より工具や農具、容器などとしてひろく用いられてきた。サワラは本州、九州に分布する常緑高木で、木材はヒノキより軽軟で保存性は劣るが水湿に耐えるため、水桶やたらい、浴槽のほか、装飾材、器具材、曲げ物などに用いられる。

当遺跡からは柁目板などとして2点が出土している。ヒノキはスギ同様、関東地方では弥生時代以前の出土は知られておらず、またそれ以後も用例は木簡や曲げ物など比較的小さな木製品に限られ、畿内のような建築材に用いられた例は知られていない。これは当時の関東地方にはヒノキはほとんど生えておらず、ここで出土する木製品は畿内方面から持ち込まれたものである可能性が考えられる。

9. オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 PL.5—25~27 (GSF-861)

比較的大型の道管が春材から夏材にかけてわずかづつ径を減じながら散在する散孔材で、道管は単独あるいは2ないし3個が放射方向に複合する。穿孔は単一でらせん肥厚は無く、木部柔組織は接線方向につながった1細胞幅の帯状をなし、放射組織は同性で4細胞幅くらいであるなどよりクルミ科のオニグルミの材であることがわかる。同じクルミ科のサワグルミは放射組織がほとんど2列であることで区別できる。オニグルミは日本全国の温帯から暖帯にかけての湿った沢ぞいなどにひろく分布する落葉広葉樹で、樹高25m、幹径1mにたつする。木材は緻密でねばりづよく狂いがすくなく、造作材などの内装材や、机や椅子などの家具材、箱材、彫刻、旋作材、寄木などに用いられる。

当遺跡からは板材などとして9点が出土している。関東地方では縄文時代から一貫して出土するが、概してその量は多くない。

10. ハコヤナギ類 *Populus* sp. ヤナギ科 PL.6—28~30 (GSF-856)

中型の道管が単独または放射方向に数個複合してななめに連なる傾向のある散孔材で、放射組織は単列同性、道管の穿孔は単一、道管と放射組織との壁孔は比較的大きく蜂巢状になるなどからヤナギ科のハコヤナギ属の材であることがわかる。関東地方にはヤマナラシ (*P. sieboldii*) とドロノキ (*P. maximowiczii*) の2種類が分布しているが、その材構造は良く似ており区別は難しい。これらはいずれも樹高25mにたつする落葉

高木である。木材は軽軟で割裂性がたかいが腐朽しやすく、箱材や楊子、下駄、マッチの軸、旋作材などにもちいられる程度である。

板材などとして3点が出土しているが、関東地方の平野部ではハコヤナギ類の材の出土は余りなく、当遺跡が平野の北辺に近いことのあらわれかも知れない。

11. ヤナギ類 *Salix* sp. ヤナギ科 PL.6-31~33 (GSF-824)

中型の道管が単独または放射方向に数個複合して比較的均一に分布する散孔材で、放射組織は単列異性、道管の穿孔は単一、道管と放射組織との壁孔は比較的大きく蜂巢状になるなどからヤナギ科のヤナギ属の材であることがわかる。日本には約40種のヤナギが生育しており、それらの材構造はたがいに似ていて、今のところ種の区別は出来ていない。いずれも水湿のある陽光地に生育する落葉樹で、樹高15mにたつするバッコヤナギ (*S. bakko*) のような高木から、ネコヤナギ (*S. gracilistyla*) のような灌木まで様々である。木材は軽軟で、製図板やまな板などの板材や箱材、マッチの軸などに用いられる。

低湿地の遺跡ではヤナギ類は自然木として多量のものが出土するが加工木としては余り用いられないのが普通である。当遺跡からは6点の加工木が見つかったが、その内3点はいずれもカシ類の鋏の柄として柄穴に詰まった状態で出土している。これはカシ類のような硬い刃を持つ木鋏の柄に、大変柔軟な、そしておそらくは水田や住居のすぐ周囲に普遍的に生育していたと思われるヤナギ類の枝を用いた事を示している。

12. ハンノキ類 *Alnus* sp. カバノキ科 PL.6-34~36 (GSF-125)

中～小型の道管が単独あるいは数個複合した散孔材で、道管の穿孔は20数本の横棒からなる階段状、放射組織は同性で、単列のもの集合状のものがあり、道管、放射組織相互の壁孔は大変小さく、多数が密に分布しているなどからカバノキ科のハンノキ属の材であることがわかる。ハンノキ属の樹木は関東地方では平野部にハンノキ (*Alnus japonica*) が、平野部から山地にかけてヤマハンノキ (*A. hirsuta*) が、そして山地にはヤシャブシ (*A. firma*) などが分布している。これらはいずれも材構造が良く似ているが、ヤシャブシ節のものはハンノキ節のものにくらべて集合放射組織の出現が少ないので、この試料はハンノキ節のハンノキかヤマハンノキであると思われる。これらは樹高15mにたつする落葉広葉樹で、木材は緻密であるが軟らかく、建築造作材や箱材、漆器木地、挽物類、鉛筆などに用いられる。

当遺跡からは農具の柄として1点見つかった。これもヤナギ類同様、遺跡周辺に普遍的に生えていたものがその柔軟な材質の故に柄に用いられたことを示している。

13. カバノキ類 *Betula* sp. カバノキ科 PL.7-37~39 (GSF-326)

中型の道管が単独あるいは数個複合してまばらに散在する散孔材で、道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状、放射組織は同性で3細胞幅くらいなどからカバノキ科のカバノキ属の材であることがわかる。日本に生育するカバノキ属にはダケカンバ (*B. ermanii*) やシラカンバ (*B. platyphylla* var. *japonica*) など数種類あるが、材構造のうえからそれらを区別するのは困難である。これらは全国の温帯から亜寒帯にかけて分布する樹高20mにたつする落葉広葉樹で、木材は緻密でやかたく割裂困難で、家具材や彫刻、旋作材、曲木などに用いられる。関東地方の平野部では自然木、加工木ともほとんど知られていないが、当遺跡からは着柄鋏鋏未製品と横槌が各1点ずつ出土している。

14. イヌシデ類 *Carpinus* (*Eucarpinus*) sp. カバノキ科 PL.7-40~42 (GSF-493)

丸みを帯びた小道管が放射方向に数個複合して、放射方向にまとまって配列する散孔性放射孔材で、道管の穿孔はほとんど単一だが、ときに小道管で数本の横棒からなる階段状がある。道管の内壁にはかすかな螺旋肥厚があり、木部柔組織は1細胞幅で接線状、放射組織は異性で1~3列、時に集合放射組織を持つなど

からカバノキ科のシデ属のうちイヌシデ (*C. tschonoskii*) かアカシデ (*C. laxiflora*) の材であることがわかる。これらは日本の暖帯から温帯にかけて分布する落葉樹で、関東平野の雑木林に最も普通なもののひとつであり、樹高15mにたつする。木材は緻密でかたく靱性にとみ、床柱をはじめ、家具材、曲木、柄類、挽物、漆器木地などに用いられる。当遺跡からは杭として1点出土している。

15. アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 PL.7-43~45 (GSF-868)

丸みを帯びた中～小型の道管が放射方向に2あるいは数個複合した散孔材で、管孔は均一に分布し、晩材部では直径が小さくなり、密度も低くなる。道管の内壁には微細な螺旋肥厚があり、穿孔は単一、木部柔組織は1細胞幅で接線状に配列し、放射組織はほぼ同性で1～3列、時に結晶を持つなどからカバノキ科のアサダの材であることがわかる。アサダは全国の温帯に分布する落葉広葉樹で、樹高15mにたつする。木材はかたく粘りがあり、耐朽性たかく、杭や柵柱、そり、柄類、木槌などにもちいられる。当遺跡からは建築材などとして2点が出土している。

16. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 PL.8-46~48 (GSF-162)

年輪のはじめに大道管が一行にならび、そこから順次径を減じてゆき、夏材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性などからブナ科のクリの材であることがわかる。クリは全国の暖帯から温帯に分布する落葉広葉樹で、樹高20m、幹径1mにたつする。木材はやや重硬で耐朽性、耐湿性、保存性のいずれにもすぐれ、枕木をはじめ、土台や杭、船材、橋梁、車両、下駄、柄類、曲木細工、挽物、漆器木地、彫刻などとひろく用いられる。

関東地方では縄文時代を中心にクリ材の杭や建築、構造材の出土が多数知られているが、当遺跡からも板材や分割材などとして100点が出土し、広く用いられていたことが分かる。

17. クヌギ類 *Quercus cf. acutissima* Carruth. ブナ科 PL.8-49~51 (GSF-51)

年輪のはじめに大道管がほぼ一行にならび、そこから中～小型の丸い道管が放射方向に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性のものとは大きな複合放射組織を持つなどからブナ科コナラ属のうち、クヌギ (*Quercus acutissima*) かアベマキ (*Q. variabilis*) の材であることがわかる。クヌギは東北地方南部から九州にかけての主に低湿地にごく普通に分布し、アベマキは主に西日本の平地から山地丘陵にかけてのやや湿ったところから乾いた所にかけて分布する。この両者の材構造はよく似ているので、今のところ区別できていないのでクヌギ類としておき、現在の分布や遺跡の立地などを考えるとクヌギである可能性が高い。これらは樹高15m、幹径60cmにたつする落葉広葉樹で、木材は堅硬で割裂容易、耐朽性があり、杭や屋根板、器具材、薪炭材などに用いられる。

埼玉県寿能泥炭層遺跡を始めとする関東地方の低湿地遺跡からはクヌギ類の板材や角材など建築部材として多くの事例が知られている。当遺跡でもそれらの出土は300点をこえるが、それよりも注目すべきはカシ類について98点にもたつする農具としての出土である。当遺跡および本県の日高遺跡が発掘されるまでは弥生時代の水田遺構を伴うような低湿地遺跡は関東地方ではほとんど知られていなかった。その結果として、弥生時代から古墳時代にかけての、稲作に使われた木製の鋤や鍬などの農具の、今までに報告されている事例はそのほとんどが静岡県以西のものであった。それら農具の樹種は調査されたものの範囲ではほとんどがカシ類であり、農具すなわちカシ類のように一般には考えられてきた。当遺跡ではカシ類の農具は102点とクヌギ類より僅かに多いことは事実であるが、それよりもむしろクヌギ類がカシ類に比較されるほど多い点に注目すべきであろう。これはカシ類が当遺跡付近では多少なりとも得にくかったことと、そこに普遍的に生育していたクヌギ類がカシ類同様に鋤や鍬に適した材であることに当時の人々が気付いたことによる結果なの

かも知れない。

18. ナラ類 *Quercus* (*Lepidobalanus*) sp. ブナ科 PL. 8—52~54 (GSF-682)

年輪のはじめに大道管がほぼ一列にならび、そこから火炎状あるいは放射状に薄壁で角張った小道管が配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性のものと複合放射組織とをもつ、などからブナ科コナラ属のコナラ (*Quercus serrata*) かミズナラ (*Q. mongolica*)、カシワ (*Q. dentata*) などの材であることがわかる。これらの材構造はたがいに似ており区別は困難であるのでナラ類としておく。これらは樹高20m、幹径1mをこえる落葉広葉樹で、日本の温帯から暖帯にかけてひろく分布する。木材は重硬で緻密であり、建築造材や家具材、枕木、曲木細工、楽器、樽材、薪炭材などに用いられる。

当遺跡からは農具の10点と板材などで合計30点が出土した。これは性質が多少似ているクヌギ類やカシ類の出土数に比べると遥かに少ない。当遺跡付近の平野部にはコナラ、背後の山地にはミズナラが普遍的に生育していて比較的容易に材を得ることが出来たと考えられることから、当時の人々が近似した樹種間の材質の違いをはっきりと認識していたことの現れであろう。

19. カシ類 *Quercus* (*Cyclobalanopsis*) sp. ブナ科 PL. 9—55~57 (GSF-223)

中〜大型の道管が放射方向に配列する放射孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は1ないし数細胞幅の接線状、放射組織は単列同性のものと複合放射組織とをもつなどからブナ科のコナラ属のうちアカガシ亜属 (*Cyclobalanopsis*) の材であることがわかる。この亜属の樹木のうちアカガシ (*Quercus acuta*) やアラカシ (*Q. glauca*)、シラカシ (*Q. myrsinaefolia*) などが関東平野に分布しているが、材構造はたがいに似ており種の区別はむずかしいのでカシ類としておく。これらは樹高20m、幹径1mにたつする常緑広葉樹で、日本の暖帯の照葉樹林の主要な構成要素である。木材は重硬で強靱であり、弾性にとみ耐湿性があり、船舶材や車両材、機械材、農具、工具、土木用材、柄類、下駄歯、薪炭材などに用いられる。福岡県の菜畑遺跡をはじめとして西日本の弥生時代の遺跡からは多量の農具が出土している。

関東地方の縄文時代から古墳時代にかけての低湿地遺跡では照葉樹林の主要な構成要素であるカシ類の出土は自然木、加工木ともに少なく、当時の関東平野中央部では照葉樹林というよりは、むしろ照葉樹林の要素をいくらか含んだ落葉広葉樹の優占する森林環境にあったことが明らかになりつつある。これに対して当遺跡からは鋤、鍬を始めとして153点もの多数の加工木が出土しているが、その大部分は稲作に伴う農具である。このことは、この時代にも関東平野の中央部では照葉樹林は発達しなかったが、その北辺の山ぞい地域には弥生時代中期にはすでに照葉樹林が成立していて、農具の用材としてたやすく手に入れることが出来たのか、あるいは照葉樹林はなかったが、稲作農耕の伝播が西方からカシ類の農具を伴って行われたかの、いずれかであることをうかがわせる。一方、第8表を見ると弥生時代に相当する溝ではカシ類の占める割合が23.0%と比較的高かったものが、古墳時代の溝では13.1%に減少し、かわってクヌギ類が55.8%と圧倒的多数を占めることに気付く。これは稲作の開始期には農耕技術と共に道具としてカシ類の農具がもたらされたが、稲作が定着するにつれて身近にあつてしかもカシ類に材質が良く似ているクヌギ類をだんだん使うようになって行ったことを示しているのかもしれない。いずれにしても現在の資料ではどちらとも言えず、関東地方での初期稲作農耕の農具がもっと広範囲に発見され、そこで復原された古植生との比較を行うことによって明らかになって来るだろう。

20. ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch. ニレ科 PL. 9—58~60 (GSF-936)

単独あるいは2個複合した中型の丸い道管が少数散在する散孔材で、道管の壁は厚く、穿孔は単一である。木部柔組織は夏材部で数細胞幅の帯状となり、放射組織は異性で4細胞幅位、比較的整った紡錐形をしてお

り、結晶細胞をふくむなどからニレ科のムクノキの材であることがわかる。ムクノキは樹高20m、幹径1mにたつる落葉広葉樹で、関東地方以西の暖帯から亜熱帯に分布する。木材はやや重硬で割裂困難であり、強靱で、床柱や天秤棒、馬鞍、柄類、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは分割材2点が出土している。

21. エノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai ニレ科 PL.9-61~63 (GSF-330)

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた小道管が夏材部では多数集合して接線方向に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁にあるらせん肥厚はあまり明瞭ではない。放射組織は異性で1~10細胞幅くらい、鞘細胞をもち、しばしば結晶を含むなどからニレ科のエノキの材であることがわかる。エノキは樹高20m、幹径1mにたつる落葉広葉樹で、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布する。木材はややかたく割裂困難で、建築材や家具材、運動具材、柄類、薪炭材などに用いられる。

エノキは関東地方の二次林に普遍的な木で、よく屋敷林などに生育している。その材は古くから利用されて来ており、縄文時代から弥生時代にかけて板材などの用例が知られている。当遺跡からは板材、分割材など24点が出土しているが、特徴的なのは成長の良い比較的大径の幹から作られたいわゆるミカン割材や柾目板である。これは鋭利な金属利器を用いなくてもかなり大きな板を製材しうる合理的な加工方法で、エノキをはじめクヌギ類、ナラ類、カシ類など、大きな放射組織をもつ材に適用できる。

22. ニレ類 *Ulmus* sp. ニレ科 PL.10-64~66 (GSF-853)

年輪の始めに大道管が1ないし数列並び、夏材部では小道管が集合して接線方向に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、内壁には明瞭な螺旋肥厚があり、放射組織は同性で5細胞幅くらい、木部柔組織は周囲状で縦に鎖状に繋がった結晶細胞をもつなどからニレ科のニレ属の材であることがわかる。ニレ属にはハルニレとオヒョウ、アキニレがあるが、互いによく似ていて区別が難しいのでニレ類としておく。これらは全国の温帯から暖帯におもに分布する落葉広葉樹で、樹高30m、幹径1mにたつるものもある。木材は重硬で弾性にとみ割裂困難で、建築や家具などの板材、車両材、枕木、柄類、旋作材、薪炭材などに用いられる。また樹皮の繊維をもちいて布を織るのにも使われた。これは温帯に分布の中心がある木で、関東平野の遺跡からの出土例は少ない。当遺跡からは杭など5点が出土している。

23. ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 PL.10-67~69 (GSF-489)

年輪のはじめに大道管が1列にならび、夏材部では小道管が多数集合して接線方向につながる環孔材で、時としてエノキやニレ類によく似る。道管の穿孔は単一、小道管の内壁に明瞭ならせん肥厚があり、放射組織は1~8細胞幅くらいで異性、しばしば大型の結晶細胞がとくに上下端にみられるなどからニレ科のケヤキの材であることがわかる。ケヤキは樹高35m、幹径2mにたつる落葉広葉樹で、本州以南の暖帯から温帯に分布する。木材は強靱で狂いがすくなく、光沢があり、木理が美しく、耐朽性もあり、また通直な大材がえられるため、社寺建築などの柱や桁、扉、門などをはじめとして、橋梁、船舶材、車両材、家具指物、曲木、太鼓、杵、臼、彫刻、寄木細工など多方面に用いられる。縄文時代から現在まで一貫して用材として良く使われて来ており、当遺跡からも鋏、糸巻、容器、弓、板材などとして15点が出土していて、その用い方は現在とあまり違っていないと言えよう。

24. ヒメコウゾ *Broussonetia kazinoki* Sieb. クワ科 PL.10-70~72 (GSF-1001)

年輪のはじめにやや大型の道管がならび、夏材部では小道管が塊状に集合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁には螺旋肥厚があり、放射組織は同性で6細胞幅くらいであるなどからクワ科のヒメコウゾの材であることがわかる。ヒメコウゾは樹高5mくらいになる落葉低木で、本州以南の暖帯に分布する。当年生の枝の皮から繊維をとり日本紙の原料とする。当遺跡からは加工痕のある材が1点出土した。

25. ヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. クワ科 PL.11-73~75 (GSF-651)

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた小道管が夏材部で斜め接線方向に数個つながる傾向をもつ環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁には顕著な螺旋肥厚があり、木部柔組織は周囲状で、放射組織は異性で1~7細胞幅くらいなどからクワ科のヤマグワの材であることがわかる。ヤマグワは樹高12m、幹径60cmくらいになる落葉広葉樹で、全国の温帯から亜熱帯までひろく分布する。木材は重硬で光沢があり、狂いが少なく強靱で水湿に良く耐え、床柱や床板などの建築材、箆筒や鏡台、火鉢などの家具材、楽器材、彫刻材、盆などの旋作材、櫛、寄木などひろく用いられる。関東地方の遺跡からは加工木、自然木共に良く出土し、当遺跡からは農具の柄、梯子、杭、用材などとして7点が出土している。

26. クスノキ科一種 Lauraceae sp. PL.11-76~78 (GSF-690)

多少角ばった中型の道管が単独あるいはまれに2個複合して散在する散孔材で、道管の穿孔は単一あるいは数本の横棒からなる階段状、木部柔組織は周囲状で道管のほぼ全周を囲み、しばしば大きく膨らんだ油細胞を持つ、放射組織は2ないし3細胞幅で異性であるなどからクスノキ科の材であることがわかる。しかしクスノキ科の材は互いに良く似ており属の区別は微妙な形質の観察を要する。当遺跡出土材は保存がわるく道管放射組織間壁孔などもはっきりしないため科内の同定はここではさしひかえる。当遺跡からカシ類の鋏の柄として1点出土しているが、ヤナギ類の柄と同じように柔軟な樹種が選択された結果であると考えられる。

27. ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 PL.11-79~81 (GSF-704)

小型でややまるい道管が春材部ではまばらに散在し、夏材部では繊維細胞とおなじほどに径を減じた角ばった道管が散在する散孔材で、道管の穿孔は階段状、木部柔組織は短接線状、放射組織は異性で3細胞幅くらい、単列部に大型の結晶細胞がいちじるしいなどからツバキ科のヤブツバキの材であることがわかる。ヤブツバキは本州以南の暖帯の主として海岸ぞいに分布する常緑広葉樹で、照葉樹林の主要構成要素であり、樹高18mにたつするものもある。木材は重硬で均質であり、粘りづよく、折尺や木槌、柄類、挽物、将棋駒、櫛、版木、細工物、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは作業台、杭など3点が出土している。

28. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 PL.12-82~84 (GSF-160)

小型で角張った道管が単独または2個複合して均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は横棒が20本位の階段状、木部柔組織は散在して多少短接線状となる、放射組織ははっきりとした異性で単列または一部2列である。などからツバキ科のサカキの材であることがわかる。サカキは樹高12mにたつする常緑広葉樹で、ヤブツバキ同様本州以南の暖帯から亜熱帯に分布する。木材は重硬で緻密であり、割裂困難で、農具や柄類、杵、櫛、細工物、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは農具の膝柄と木篋が1点ずつ出土している。

29. ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz. バラ科 PL.12-85~87 (GSF-386)

中型の丸い道管が春材部で2ないし数個複合して密度高く分布し、そこから夏材部にむかってわずかな径を減じる散孔材で、時に傷害ゴム道を持ち、道管の穿孔は単一、内壁に明瞭な螺旋肥厚を持ち、放射組織は同性に近い異性で5細胞幅くらい、時に結晶をもつなどからバラ科のヤマザクラの材であることがわかる。ヤマザクラは樹高25m、幹径1mにたつする落葉広葉樹で、関東地方以西の暖帯から温帯に分布する。木材はやや堅く均質で狂いがすくなく、加工容易で光沢があり、天井板や腰板などの建築材、家具材、細工物、船舶材、版木、薪炭材などに用いられる。

関東地方では大宮市の寿能泥炭層遺跡から縄文時代の漆器として多数見つかっているが、時代が新しくなるにつれて加工木としての出土は少なくなる。当遺跡からは糸巻1点が見つかっているにすぎない。

30. モモ *Prunus persica* Batsch バラ科 PL.12—88~90 (GSF-451)

中型の丸い道管が年輪界にならび、そこからやや急に径を減じた小道管が夏材部では数個放射方向に複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一で明瞭な螺旋肥厚を持ち、放射組織は同性に近い異性で6細胞幅くらい、時に結晶を持つなどからバラ科のモモの材であることがわかる。モモは中国北部原産の落葉広葉樹で、日本では弥生時代以降の遺跡から核が産出している。木材はヤマザクラに似るがやや軟らかく、器具材や細工物、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは杭と分割材として2点が見つまっている。核に比べて材の出土は希で、当遺跡の古墳時代前期層からの出土は、今までに知られているかぎりでは少なくとも関東地方での最も古い材の出土記録である。

31. ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 PL.13—91~93 (GSF-19)

年輪のはじめに大道管がならび、そこから順次径を減じた小道管が夏材部では単独または数個放射方向に複合して少数散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は連合翼状でときに結晶細胞をもち、放射組織は同性で3細胞幅くらい、接線断面でみると不整な紡錘形をしている、などからマメ科のネムノキの材であることがわかる。ネムノキは本州以南の暖帯から熱帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高10m、幹径30cmにたつする。木材は軟らかくて粘りづよく、屋根板や火鉢、桶、箱類、柄類、旋作材、下駄、薪炭材などに用いられる。当遺跡からはただ1点鋤未製品として出土しているが、実測図にあるように他の多くのカシ類やクヌギ類の鋤、鋤類とは形が異なっている。

32. アカメガシワ *Mallotus japonicus* Muell. Arg. トウダイグサ科 PL.13—94~96 (GSF-982)

年輪のはじめにやや厚壁の大道管が単独または放射方向に数個複合して配列し、そこから順次径を減じた小道管が夏材部でも放射方向に複合する傾向をもって配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列で異性であるなどからトウダイグサ科のアカメガシワの材であることがわかる。アカメガシワは本州以南の暖帯の陽光地に分布する落葉広葉樹で、樹高10mにたつする。木材は粗くて軟らかく、箱材や器具材、車両材、下駄材、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは柁目板が1点出土している。

33. コクサギ *Orixa japonica* Thunb. ミカン科 PL.13—97~99 (GSF-855)

微小な道管が斜めに集合して雲紋状を呈する散孔材で、道管の穿孔は単一、微細で間隔の開いた螺旋肥厚があり、放射組織は単列または部分的2列で異性であるなどからミカン科のコクサギの材であることがわかる。コクサギは樹高2mほどの落葉低木で、本州以南の暖帯から温帯にかけての山間の湿った所に生える。木材は強靱で割りやすく、細工物などに用いられる。当遺跡からは分割材など2点が出土している。

34. キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 PL.14—100~102 (GSF-149)

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた小道管が夏材部では多数複合して斜め接線方向につながる環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁には螺旋肥厚があり、放射組織は同性で4細胞幅くらいなどからミカン科のキハダの材であることがわかる。キハダは樹高25m、幹径1mにたつする落葉広葉樹で、全国の温帯の沢ぞいの地域に分布している。木材は堅硬で狂いがすくなく、工作容易で光沢があり、机や箆笥などの家具材や床柱などの建築装飾材、細工物、寄木細工、薪炭材などに用いられる。樹皮は胃腸薬の黄ばくとして古くから用いられる。関東地方の遺跡からは量はけっして多くないものの良く知られている。当遺跡からは着柄鋤、容器、角材の3点が出土している。

35. ニガキ *Picrasma quassioides* Benn. ニガキ科 PL.14—103~105 (GSF-24)

年輪のはじめに大道管がならび、夏材部では厚壁の丸い小道管が散在する環孔材で、木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状、放射組織は同性で4細胞幅くらいであるなどからミガキ科のニガキの材であることがわ

かる。ニガキは樹高12mほどになる落葉広葉樹で、日本の温帯から暖帯に分布する。木材はやや堅く緻密で粘りづよく、箱材や荷車、天秤棒、農具、下駄、曲物、寄木、細工ものなどに用いられる。当遺跡からは農具膝柄、分割材など3点が出土している。

36. ヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ウルシ科 PL.14-106~108 (GSF-1079)

年輪のはじめに大道管が並び、夏材部では小道管が放射方向に数個複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁には弱い螺旋肥厚があり、放射組織は異性で2~3細胞幅くらいであるなどからウルシ科のヤマウルシの材であることがわかる。ヤマウルシは樹高8mくらいになる落葉広葉樹で、全国の温帯から暖帯にかけての陽光地に分布している。木材はやや重硬で、小細工物や杭、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは分割材などが3点出土している。

37. カエデ類 *Acer* sp. カエデ科 PL.15-109~111 (GSF-922)

中型の道管が均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、内壁には螺旋肥厚があり、木部柔組織はしばしば年輪界付近で結晶をもち、放射組織は同性で5~8細胞幅であるなどからカエデ科のカエデ属の材であることがわかる。日本には20種以上のカエデ属の樹木が分布しており材構造は少しずつ異なっているが、種の区別は必ずしも明確ではないためここではカエデ類として扱う。カエデ類は温帯を中心に暖帯から亜寒帯まで広く分布する落葉広葉樹で、樹高4mほどの低木から樹高20m、幹径1mにたつする高木まで様々である。木材は重硬で緻密であり、粘りづよく加工容易で光沢があり、床柱や床板などの建築装飾材や、机や椅子などの家具材、箱材、楽器材、彫刻材、農具柄、旋作材、漆器木地、薪炭材などとひろく用いられる。当遺跡からは農具直柄、杭、分割材など4点が出土している。

38. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 PL.15-112~114 (GSF-1053)

年輪の始めに大道管が1から3列ほどならび、そこから順次径を減じて、夏材部では小道管が集合する環孔材で、道管の穿孔は単一、内壁には微細な螺旋肥厚があり、木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状で量おおく、放射組織は3から5細胞幅で同性であるなどからムクロジ科のムクロジの材であることがわかる。ムクロジは樹高18m、幹径60cmにたつする落葉広葉樹で、本州中部以南の暖帯から亜熱帯に分布する。木材は軟らかく、机や箱、器具材、下駄などに用いられる程度である。

当遺跡からは長柄鋤1点、農具直柄7点など計10点が出土している。現在は、群馬県をふくむ関東地方内陸部にはムクロジは全くと言って良いほど分布していないし、また寒さのため植栽もむずかしい。ムクロジは中尾佐助の言う照葉樹林文化のインディケイターのひとつに数えられている。事実、これらの材は縄文時代以降の低湿地遺跡では量はけっして多くないものの必ずと言って良いほど普遍的に見いだされる。当遺跡でムクロジが稲作の農具の柄として良く用いられていたことは興味深い。

39. トチノキ *Aesculus turbinata* Bl. トチノキ科 PL.15-115~117 (GSF-609)

やや小型の道管が単独または放射方向に数個複合して散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、道管内壁に螺旋肥厚があり、放射組織は単列同性で層階状に配列するなどからトチノキ科のトチノキの材であることがわかる。トチノキは全国の温帯の沢ぞいに分布する落葉広葉樹で、樹高30m、幹径2mにたつする。木材は緻密でやわらかく加工容易であり、耐朽性はおとるが光沢があり、床板や天井板、扉などの建築装飾材や、家具材、割物、漆器木地、彫刻材、細工物などに用いられる。種子にはサポニンやアロインなどを含んでおりアク抜きには複雑な工程が必要であるが、多量のデンプンがふくまれているため古くから食用とされてきた。一方、木材は漆器など容器としての利用が古くから計られ、当遺跡でも容器として1点が出土している。

40. ニシキギ類 *Euonymus* sp. ニシキギ科 PL.16-118~120 (GSF-113)

小型の道管が均一に密に散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は異性にちかい同性で単列であるなどからニシキギ科のニシキギ属の材であることがわかる。ニシキギ類には樹高15m、幹径40cmにたつするマユミ (*Euonymus sieboldianus*) から樹高2mほどのコマユミ (*E. alatus* f. *ciliatodentatus*) まで様々ある。木材は堅くて均質緻密で粘りづよく、版木や小箱、旋作材、櫛、杖、木釘、玩具、彫刻、寄木などに用いられる。

ニシキギ類の出土例は少ないが、そのいずれもが飾り弓など、非実用的な弓とみなされる。当遺跡でも飾り弓として2点が出土している。実用的な白木の弓がイヌガヤなどで丸木に僅かな加工をほどこして作られる一方、桜皮を巻いたり漆塗装などの装飾を施した弓がニシキギ類、いわゆる「真弓」を用いて、削り込んで作られている。

41. ケンボナシ類 *Hovenia* sp. クロウメモドキ科 PL.16—121~123 (GSF-96)

年輪のはじめに大道管がならび、そこから順次径を減じた厚壁の小道管が夏材部では単独あるいは放射方向に数個複合して散在する環孔材で、木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状、放射組織は異性で6細胞幅くらいであるなどからケンボナシ属の材であることがわかる。日本に自生するケンボナシ類にはケンボナシ (*Hovenia tomentella*) とケンボナシ (*H. dulcis*) の2種があり、いずれも樹高20m、幹径1mにたつする落葉広葉樹である。木材は粗軟で加工容易であり、木目がうつくしく、建築装飾材や家具材、指物、盆、櫛、彫刻材、下駄などに用いられる。当遺跡からは杭、板など3点が出土している。

42. グミ類 *Elaeagnus* sp. グミ科 PL.16—124~126 (GSF-67)

中型の道管が年輪のはじめに並び、そこからやや急に径を減じた小道管が夏材部では単独で散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、道管の内壁には螺旋肥厚があること、放射組織は1~8細胞幅で同性であり、ときに傷害ゴム道が出来るなどからグミ科のグミ属の材であることがわかる。日本には同属の樹木は十数種自生しているが、材構造はたがいに似ており種の区別はむずかしい。関東地方に分布するものにはアキグミ (*Elaeagnus umbellata*)、マメグミ (*E. montana*)、ナツグミ (*E. multiflora*) などがあるが、それらはいずれも樹高2~3mの落葉低木で、木材はねばり強く割裂困難なため、炬の自在、杖、農具や工具の柄などに用いられる。当遺跡では農具膝柄1点が見つかった。

43. ウコギ類 *Acanthopanax* sp. ウコギ科 PL.17—127~129 (GSF-209)

小道管が接線方向から斜め接線方向にきれいに配列した散孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は異性で8細胞幅くらい、背がたかくて構成細胞はやや大きく、多少粗雑な鞘状を呈するなどからウコギ科のウコギ属のうち高木となるコシアブラをのぞいたウコギ類の材であることがわかる。これらにはオカウコギ (*Acanthopanax nipponicus*)、ヤマウコギ (*A. spinosus*) などがあるが、いずれも材構造が似ており、現在のところ区別できていない。ウコギ類はいずれも樹高2mほどの灌木であるため木材はほとんど用いられない。当遺跡からは杭など2点が出土している。

44. エゴノキ類 *Styrax* sp. エゴノキ科 PL.17—130~132 (GSF-692)

放射方向に2~3個複合する小型の道管が散在する散孔材で、夏材部では道管は少なくなり、木繊維とおなじくらいまで径を減じ、道管の穿孔は10本くらいの横棒からなる階段状、木部柔組織は夏材部で1細胞幅の接線状に配列し、放射組織は異性で3細胞幅くらいであるなどからエゴノキ科エゴノキ属のエゴノキ (*Styrax japonica*) またはハクウンボク (*S. obassia*) の材であることがわかる。これらの材はよく似ており区別は困難である。これらは樹高10m前後の落葉広葉樹で、木材は緻密で粘りづよく、ろくろ細工や柄類、櫛、彫刻材、薪炭材などに用いられる。当遺跡からは農具直柄1点が見つかった。

45. トネリコ類 *Fraxinus* sp. モクセイ科 PL.17-133~135 (GSF-439)

年輪の始めに大道管がならび、そこから順次径を減じて、夏材部では厚壁で単独あるいは放射方向に数個複合した小道管が散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、柔組織は周囲状あるいは連合翼状、放射組織は2列がほとんどで同性であるなどからモクセイ科のトネリコ属の材であることがわかる。トネリコ属にはシオジ (*Fraxinus spaethiana*)、ヤチダモ (*F. mandshurica*)、トネリコ (*F. japonica*) など多数の種があるが、いずれも材構造が似ていて区別は難しい。これらはいずれも樹高15mをこえる落葉高木で、おもに全国の温帯に分布する。木材は弾力があり、加工容易で耐朽性もたかく、床や腰板などの建築材や、机や椅子などの家具材、農具などの柄類、漆器木地、楽器、バットなどの運動具材、ろくろ細工、彫刻材、薪炭材などひろく用いられる。当遺跡からは農具の柄2点が見つかった。

46. ムラサキシキブ *Callicarpa japonica* Thunb. クマツヅラ科 PL.18-136~138 (GSF-248)

やや厚壁の丸いやや大型の道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は異性で2細胞幅くらいであるなどからクマツヅラ科のムラサキシキブの材であることがわかる。ムラサキシキブは樹高3mほどの落葉広葉樹で全国の温帯から暖帯にかけてひろく分布する。木材は緻密でねばり強く、柄類や箸、木炭などに用いられる。当遺跡からは農具直柄2点、木篋1点他が出土している。

47. キリ *Paulownia tomentosa* Steud. ゴマノハグサ科 PL.18-139~141 (GSF-1045)

年輪のはじめに大道管がならび、そこから順次径を減じた丸い小道管が夏材部では単独あるいは数個放射方向に複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状、放射組織は同性で4細胞幅くらいであるなどからゴマノハグサ科のキリの材であることがわかる。キリは樹高10m、幹径60cmにたつする落葉広葉樹で、その原産地ははっきりしていない。木材は軽軟で加工容易であり、木理と光沢がうつくしく、天井板や腰板などの建築装飾材や、箆笥や長持、火鉢などの家具材、琴などの楽器材、下駄材、玩具、彫刻、寄木細工、木炭などに用いられる。当遺跡からは槽? 1点が見つかったが、キリ材の出土は畿内の歴史時代以降を除いては極めて希なことである。

48. ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Blume スイカズラ科 PL.18-142~144 (GSF-423)

小道管が年輪の始めからごくわずかつづ径を減じながら接線方向に集合して紋様をなしている散孔材で、年輪界付近では平べったくなった小道管がきちんと配列して年輪界をきわだたせており、道管の穿孔は単一、放射組織は異性で4細胞幅くらいで鞘状となり、比較的整った紡錘形をしているなどからスイカズラ科のニワトコの材であることがわかる。ニワトコは樹高5mほどの落葉広葉樹で全国の温帯から暖帯にかけてひろく分布する。木材は軽軟で、小細工物や寄木などに用いられる程度である。当遺跡からは農具直柄1点が見つかった。

49. ガマズミ類 Aタイプ *Viburnum* sp.A スイカズラ科 PL.19-145~147 (GSF-813)

小型の道管がほぼ均一に散在する散孔材で、道管の穿孔は階段数のおおい階段状、木部柔組織は短接線状、放射組織は異性で2あるいは3細胞幅くらいであるなどからスイカズラ科のガマズミ属の材であることがわかる。このうちガマズミ類Aタイプとしたものは放射組織が2細胞幅で、道管放射組織間の壁孔は階段状であり、ガマズミ類Bタイプとしたものは放射組織が3細胞幅で、道管放射組織間の壁孔は対列状である。日本に自生するガマズミ類には常緑性のサンゴジュやハクサンボクなどや、落葉性のガマズミやムシカリなど10数種類があるが、その材構造は互いに良く似ておりほんの少しづつ異なっているに過ぎない。AタイプとBタイプでは種が違うと言えるが、現段階ではこれらがどの種にあたるのかは明らかではない。木材は堅硬で緻密であるが径が細いため、楊子やろくろ細工、薪炭材などに用いられる程度である。A、Bタイプ共に

棒状の木製品で、用途は不明である。

50. ガマズミ Bタイプ *Viburnum* sp.B スイカズラ科 PL.19-148~150 (GSF-955)

第8表 出土木材の出土溝別一覧

樹種	出土溝	弥生中期～後期			弥生後期				弥生時代 合計(%)	古墳前期				弥生後期 ～古墳前期			総計(%)				
		F	E	D・E	D	C・D	C	2B・C		2B	B	A・B	A	合計(%)	B・2B	グリッド			合計		
カヤ	1						1	3	5	1.6	2	1	2	5	2.4		8	8	18	1.7	
イヌガヤ			3	3	4	1	4	1	10	26	8.5	3	2	5	2.4		21	21	52	5.0	
モミ類					2	4	1	15	22	7.2	6		5	11	5.3		44	44	77	7.5	
トウヒ類									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
アカマツ									0	0.0				0	0.0		2	2	2	0.2	
五葉松類							1		1	0.3				0	0.0		1	1	2	0.2	
スギ									2	0.7				0	0.0		4	4	6	0.6	
ヒノキ類									0	0.0				0	0.0		2	2	2	0.2	
オニグルミ						1			1	0.3				0	0.0	1	7	8	9	0.9	
ハコヤナギ類					1				1	0.3				0	0.0		2	2	3	0.3	
ヤナギ類							1		2	3	1.0		1	1	0.5		2	2	6	0.6	
ハンノキ類					1				1	0.3				0	0.0		0	0	1	0.1	
カバノキ類					1				2	0.7				0	0.0		0	0	2	0.2	
イヌシダ									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
アサダ					1				1	0.3				0	0.0		1	1	2	0.2	
クサリ					2		5	2	16	25	8.2	5	1	3	9	4.3	1	65	66	100	9.7
クスギ類	1			4	18	1	21	1	54	104	34.0	82		33	115	55.8	18	211	229	448	43.6
ナラ類					1		2		2	5	1.6	2		4	6	2.9		19	19	30	2.9
カシ類					5	2	25	1	34	70	23.0	18	1	8	27	13.1	5	54	59	156	15.1
クノキ									0	0.0				0	0.0		2	2	2	0.2	
エノキ							3	1	2	6	2.0	3		4	7	3.4		11	11	24	2.3
ニレ類								1	1	0.3		1		1	0.5		3	3	5	0.5	
ケヤキ						1	3		5	1.6	3			3	1.5		7	7	15	1.4	
ヒメコウゾ									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
ヤマグワ					1				1	0.3	1		1	2	1.0		4	4	7	0.7	
クスノキ科									1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
ヤブツバキ					1				1	0.7				0	0.0		1	1	3	0.3	
サカキ							1		1	0.7				0	0.0			0	2	0.2	
ヤマザクラ							1		1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
モモ								1	1	0.3				0	0.0		1	1	2	0.2	
ネムノキ				1					1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
アカメガシ									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
コクサギ							1		1	0.3				0	0.0		1	1	2	0.2	
キハダ									0	0.0	1		1	2	1.0		1	1	3	0.3	
ニガキ									0	0.0	2		1	3	1.5			0	3	0.3	
ヤマウルシ									0	0.0				0	0.0		3	3	3	0.3	
カエデ類						1			1	0.3	1			1	0.5		2	2	4	0.4	
ムクロジ									2	0.7	3		1	4	1.9		4	4	10	1.0	
トチノキ									0	0.0	1			1	0.5			0	1	0.1	
ニシキギ類					1		1		2	0.7				0	0.0			0	2	0.2	
ケンボナシ					1				1	0.7				0	0.0		1	1	3	0.3	
グミ類									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
ウコギ類									1	0.3		1		1	0.5			0	2	0.2	
エゴノキ類					1				1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
トネリコ類									0	0.0	1			1	0.5		1	1	2	0.2	
ムラサキシキブ							1		3	1.3				0	0.0			0	4	0.4	
キ									0	0.0				0	0.0		1	1	1	0.1	
ニワトコ							1		1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
ガマズミ類A									1	0.3				0	0.0			0	1	0.1	
ガマズミ類B									0	0.0	1			1	0.5			0	1	0.1	
合計		2	3	8	41	6	77	7	162	306	100.0	136	4	66	206	100.0	25	491	516	1028	100.0

注：記入してある時代はそれぞれの溝がその時代の遺物を多く出した事を示し、出土木材が必ずその時期のものである事を示すものではない。

：グリッドとあるのは溝毎にでなくグリッドとして取り上げられたもので、時期は弥生後期から古墳前期のものが混在している。

第9表

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 63	カヤ	用途不明品	345		GSF- 390	イヌガヤ	丸木弓	291	2 B溝
GSF- 70	カヤ	石斧膝柄	212	F溝	GSF- 391	イヌガヤ	弓材		2 B溝
GSF- 93	カヤ	分割材	496		GSF- 392	イヌガヤ	丸木弓	290	B溝
GSF- 116	カヤ	容器	231	B溝	GSF- 393	イヌガヤ	丸木弓	276	C・D溝
GSF- 118	カヤ	用途不明品	320	2 B溝	GSF- 404	イヌガヤ	弓材		B溝
GSF- 170	カヤ	用途不明品	319	2 B溝	GSF- 406	イヌガヤ	丸木弓	301	
GSF- 373	カヤ	用途不明品	349		GSF- 434	イヌガヤ	農具直柄	169	2 B溝
GSF- 395	カヤ	分割材		A・B溝	GSF- 618	イヌガヤ	丸木弓	303	
GSF- 403	カヤ	分割材			GSF- 619	イヌガヤ	丸木弓	302	
GSF- 542	カヤ	杭	402	B溝	GSF- 620	イヌガヤ	丸木弓	304	
GSF- 578	カヤ	桁目板	478	A溝	GSF- 621	イヌガヤ	丸木弓	306	
GSF- 780	カヤ	板目板			GSF- 622	イヌガヤ	丸木弓	305	
GSF- 847	カヤ	桁目板		C溝	GSF- 59	モミ類	削り出し棒	187	
GSF- 871	カヤ	桁目板			GSF- 105	モミ類	用途不明品	351	C溝
GSF- 953	カヤ	角棒			GSF- 126	モミ類	削り出し棒	163	2 B・C溝
GSF- 969	カヤ	分割材			GSF- 167	モミ類	木鈎	263	A溝
GSF- 1013	カヤ	角材		A溝	GSF- 245	モミ類	用途不明品	343	
GSF- 1071	カヤ	桁目板		2 B溝	GSF- 250	モミ類	用途不明品	318	2 B溝
GSF- 25	イヌガヤ	丸木弓	298		GSF- 252	モミ類	削り出し棒		2 B溝
GSF- 32	イヌガヤ	丸木弓	274	D溝	GSF- 324	モミ類	用途不明品	341	
GSF- 35	イヌガヤ	丸木弓	296		GSF- 328	モミ類	桁目板	432	2 B溝
GSF- 57	イヌガヤ	丸木弓	294		GSF- 333	モミ類	桁目板	528	2 B溝
GSF- 80	イヌガヤ	丸木弓	277	C溝	GSF- 342	モミ類	桁目板		A溝
GSF- 81	イヌガヤ	丸木弓	292	A溝	GSF- 380	モミ類	分割材		
GSF- 84	イヌガヤ	丸木弓	273	D溝	GSF- 394	モミ類	削り出し棒		2 B溝
GSF- 88	イヌガヤ	丸木弓	284	2 B溝	GSF- 396	モミ類	角材	527	2 B溝
GSF- 90	イヌガヤ	丸木弓	272	D溝	GSF- 397	モミ類	板目板		C溝
GSF- 92	イヌガヤ	丸木弓	293	A溝	GSF- 398	モミ類	角材	526	D溝
GSF- 176	イヌガヤ	丸木弓	265	D溝	GSF- 399	モミ類	杭	395	B溝
GSF- 177	イヌガヤ	丸木弓	270	D・E溝	GSF- 401	モミ類	分割材		
GSF- 178	イヌガヤ	丸木弓	279	C溝	GSF- 405	モミ類	角棒		2 B溝
GSF- 183	イヌガヤ	丸木弓	266	E溝	GSF- 413	モミ類	分割材		B溝
GSF- 189	イヌガヤ	丸木弓	271	D・E溝	GSF- 414	モミ類	角材		2 B溝
GSF- 190	イヌガヤ	丸木弓	281	2 B・C溝	GSF- 440	モミ類	分割材		A溝
GSF- 191	イヌガヤ	丸木弓	282	2 B溝	GSF- 448	モミ類	用途不明品	329	B溝
GSF- 196	イヌガヤ	丸木弓	278	C溝	GSF- 453	モミ類	板目板		
GSF- 200	イヌガヤ	丸木弓	269	D・E溝	GSF- 463	モミ類	桁目板		
GSF- 222	イヌガヤ	丸木弓	295		GSF- 464	モミ類	削り出し棒	535	
GSF- 242	イヌガヤ	用途不明品			GSF- 534	モミ類	板目板	531	
GSF- 355	イヌガヤ	丸木弓	299		GSF- 538	モミ類	桁目板	429	2 B溝
GSF- 356	イヌガヤ	丸木弓	300		GSF- 541	モミ類	用途不明品	340	
GSF- 357	イヌガヤ	丸木弓	285	2 B溝	GSF- 551	モミ類	横ぶち	198	2 B溝
GSF- 358	イヌガヤ	丸木弓	309		GSF- 552	モミ類	削り出し棒	533	
GSF- 359	イヌガヤ	弓材			GSF- 561	モミ類	板目板		A溝
GSF- 360	イヌガヤ	弓材		C溝	GSF- 562	モミ類	角材	525	D溝
GSF- 361	イヌガヤ	丸木弓	307		GSF- 564	モミ類	削り出し棒	534	
GSF- 362	イヌガヤ	弓材			GSF- 567	モミ類	桁目板	529	2 B溝
GSF- 363	イヌガヤ	丸木弓	286	2 B溝	GSF- 648	モミ類	建築材	370	B溝
GSF- 365	イヌガヤ	丸木弓	283	2 B溝	GSF- 714	モミ類	板		
GSF- 366	イヌガヤ	丸木弓	308		GSF- 732	モミ類	板目板		
GSF- 367	イヌガヤ	弓材			GSF- 734	モミ類	桁目板		
GSF- 368	イヌガヤ	丸木弓	288	B溝	GSF- 740	モミ類	削り出し棒		
GSF- 369	イヌガヤ	弓材		2 B溝	GSF- 745	モミ類	桁目板		
GSF- 370	イヌガヤ	丸木弓	268	E溝	GSF- 746	モミ類	桁目板		
GSF- 371	イヌガヤ	丸木弓	297		GSF- 747	モミ類	桁目板		
GSF- 372	イヌガヤ	丸木弓	287	2 B溝	GSF- 770	モミ類	板目板		
GSF- 374	イヌガヤ	丸木弓	267	E溝	GSF- 784	モミ類	角材		
GSF- 389	イヌガヤ	弓材			GSF- 822	モミ類	板目板		

9 新保遺跡出土加工木の樹種

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 842	モミ類	加工材		
GSF- 844	モミ類	桁目板		
GSF- 857	モミ類	角棒		B溝
GSF- 880	モミ類	桁目板		
GSF- 887	モミ類	板目板		C溝
GSF- 892	モミ類	板目板		
GSF- 896	モミ類	角棒		
GSF- 902	モミ類	削り出し棒		
GSF- 915	モミ類	角棒		
GSF- 926	モミ類	分割材		
GSF- 930	モミ類	板目板		
GSF- 935	モミ類	角棒		
GSF- 957	モミ類	角棒		
GSF- 960	モミ類	角棒		B溝
GSF- 965	モミ類	分割材		C溝
GSF- 967	モミ類	板目板		
GSF- 968	モミ類	板目板		2 B溝
GSF- 973	モミ類	角棒		
GSF- 986	モミ類	桁目板		
GSF- 998	モミ類	削り出し棒		2 B溝
GSF- 1011	モミ類	角棒		
GSF- 1014	モミ類	板目板		
GSF- 1015	モミ類	角材		
GSF- 1020	モミ類	板目板		2 B溝
GSF- 1024	モミ類	角棒		A溝
GSF- 1025	モミ類	桁目板		2 B溝
GSF- 1027	モミ類	削り出し棒		
GSF- 1051	モミ類	角材		
GSF- 1052	モミ類	桁目板		
GSF- 1086	モミ類	桁目板		
GSF- 1107	モミ類	板目板		
GSF- 884	トウヒ類	削り出し棒		
GSF- 498	アカマツ	杭	411	
GSF- 927	アカマツ	角材		
GSF- 1044	五葉松類	桁目板		C溝
GSF- 1078	五葉松類	板目板		
GSF- 169	スギ	用途不明品	344	
GSF- 350	スギ	板目板	530	
GSF- 400	スギ	削り出し棒		
GSF- 431	スギ	桁目板		2 B溝
GSF- 553	スギ	用途不明品	317	2 B溝
GSF- 683	スギ	杭	406	
GSF- 402	ヒノキ類	分割材		
GSF- 841	ヒノキ類	桁目板		
GSF- 155	オニグルミ	分割材		C・D溝
GSF- 259	オニグルミ	分割材	490	B・2 B溝?
GSF- 756	オニグルミ	板目板		
GSF- 861	オニグルミ	板目板		
GSF- 916	オニグルミ	板目板		
GSF- 919	オニグルミ	分割材		
GSF- 958	オニグルミ	板目板		
GSF- 1018	オニグルミ	分割材		
GSF- 1067	オニグルミ	板目板		
GSF- 649	ハコヤナギ類	容器	240	
GSF- 856	ハコヤナギ類	分割材		D溝
GSF- 898	ハコヤナギ類	桁目板		
GSF- 14	ヤナギ類	木製円盤	262	2 B溝
GSF- 688	ヤナギ類	農具直柄?		2 B溝
GSF- 689	ヤナギ類	農具直柄?		C溝
GSF- 693	ヤナギ類	農具直柄?		A溝

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 824	ヤナギ類	棒		
GSF- 1033	ヤナギ類	加工材		
GSF- 125	ハンノキ類	農具膝柄	151	D溝
GSF- 326	カバノキ類	横づち	192	D溝
GSF- 493	イヌシデ類	杭	409	
GSF- 231	アサダ	加工材		D溝
GSF- 868	アサダ	建築材?		
GSF- 38	クリ	容器	238	
GSF- 123	クリ	農具膝柄	150	D溝
GSF- 162	クリ	容器	223	C溝
GSF- 214	クリ	木篋?		
GSF- 216	クリ	杭	359	2 B溝
GSF- 224	クリ	角材		D溝
GSF- 233	クリ	杭	399	B溝
GSF- 263	クリ	杭	412	
GSF- 311	クリ	加工材	522	
GSF- 313	クリ	加工材		
GSF- 321	クリ	分割材		
GSF- 336	クリ	桁目板		2 B溝
GSF- 343	クリ	桁目板	467	A溝
GSF- 345	クリ	板目板	425	A溝
GSF- 353	クリ	桁目板	436	B・2 B溝
GSF- 377	クリ	梯子	355	A・B溝
GSF- 379	クリ	梯子	354	2 B溝
GSF- 408	クリ	板目板		2 B溝
GSF- 461	クリ	桁目板		2 B溝
GSF- 476	クリ	杭	410	
GSF- 501	クリ	桁目板		
GSF- 505	クリ	桁目板		
GSF- 506	クリ	容器	226	2 B溝
GSF- 510	クリ	桁目板	460	2 B溝
GSF- 521	クリ	桁目板	430	2 B溝
GSF- 569	クリ	桁目板	455	2 B溝
GSF- 580	クリ	分割材	504	2 B溝
GSF- 587	クリ	分割材	506	2 B溝
GSF- 590	クリ	桁目板	475	B溝
GSF- 595	クリ	杭	379	2 B・C溝
GSF- 601	クリ	分割材	511	
GSF- 602	クリ	分割材	499	2 B・C溝
GSF- 610	クリ	分割材	498	C溝
GSF- 611	クリ	分割材	505	2 B溝
GSF- 615	クリ	杭	400	B溝
GSF- 617	クリ	分割材		
GSF- 646	クリ	分割材	502	2 B溝
GSF- 654	クリ	分割材		
GSF- 662	クリ	容器	227	2 B溝
GSF- 663	クリ	作業台	243	
GSF- 710	クリ	分割材		
GSF- 711	クリ	加工材		
GSF- 715	クリ	分割材		
GSF- 719	クリ	桁目板		
GSF- 726	クリ	分割材		
GSF- 758	クリ	板目板		
GSF- 760	クリ	杭		
GSF- 766	クリ	分割材		
GSF- 774	クリ	桁目板		
GSF- 785	クリ	板目板		
GSF- 786	クリ	分割材		
GSF- 787	クリ	板目板		
GSF- 792	クリ	分割棒		

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 802	クリ	柱目板		2 B溝	GSF- 40	クスギ類	横づち	202	B溝
GSF- 804	クリ	柱目板		C溝	GSF- 41	クスギ類	着柄鋤	119	A溝
GSF- 806	クリ	分割材		2 B溝	GSF- 44	クスギ類	木篋	255	A溝
GSF- 812	クリ	分割材			GSF- 47	クスギ類	広鋤	38	A溝
GSF- 839	クリ	角材			GSF- 50	クスギ類	用途不明品(鋤柄頭)	346	
GSF- 843	クリ	建築材?		B溝	GSF- 51	クスギ類	着柄鋤	122	A溝
GSF- 851	クリ	加工材			GSF- 54	クスギ類	着柄鋤	103	2 B溝
GSF- 852	クリ	柱目板			GSF- 65	クスギ類	組み合わせ式斧柄	222	
GSF- 859	クリ	杭		C溝	GSF- 66	クスギ類	用途不明品	348	
GSF- 860	クリ	分割材			GSF- 77	クスギ類	広鋤未製品	32	B溝
GSF- 874	クリ	角棒			GSF- 82	クスギ類	広鋤	8	C溝
GSF- 888	クリ	加工材		B溝	GSF- 83	クスギ類	広鋤	30	B溝
GSF- 889	クリ	杭			GSF- 85	クスギ類	広鋤	29	B溝
GSF- 893	クリ	削り出し棒			GSF- 87	クスギ類	着柄鋤	104	2 B溝
GSF- 900	クリ	削り出し棒			GSF- 91	クスギ類	狭鋤	3	D溝
GSF- 907	クリ	加工材			GSF- 98	クスギ類	柱目板	443	
GSF- 910	クリ	角材			GSF- 104	クスギ類	広鋤	2	D溝
GSF- 912	クリ	分割材			GSF- 107	クスギ類	農具直柄	185	
GSF- 942	クリ	角材			GSF- 108	クスギ類	又鋤	58	B溝
GSF- 945	クリ	板目板			GSF- 111	クスギ類	狭鋤	12	C溝
GSF- 949	クリ	角棒		C溝	GSF- 121	クスギ類	有柄J字形木製品	139	B溝
GSF- 976	クリ	加工材			GSF- 122	クスギ類	石斧直柄	213	D溝
GSF- 978	クリ	加工材			GSF- 128	クスギ類	長柄鋤b	132	A溝
GSF- 983	クリ	分割材			GSF- 131	クスギ類	農具直柄	165	2 B溝
GSF- 989	クリ	角棒		A溝	GSF- 134	クスギ類	組み合わせ式斧柄	219	2 B溝
GSF- 992	クリ	加工材			GSF- 135	クスギ類	糸巻	260	B溝
GSF- 1004	クリ	分割材			GSF- 137	クスギ類	石斧直柄	215	D・E溝
GSF- 1006	クリ	棒			GSF- 138	クスギ類	横づち	201	
GSF- 1007	クリ	柱目板			GSF- 139	クスギ類	ヘラ状木製品	146	B溝
GSF- 1010	クリ	柱目板			GSF- 141	クスギ類	又鋤	60	B溝
GSF- 1016	クリ	柱目板			GSF- 142	クスギ類	石斧直柄	216	C溝
GSF- 1022	クリ	板目板			GSF- 143	クスギ類	又鋤	57	B溝
GSF- 1032	クリ	柱目板			GSF- 144	クスギ類	又鋤	54	B溝
GSF- 1038	クリ	角棒			GSF- 147	クスギ類	用途不明品	332	B溝
GSF- 1039	クリ	削り出し棒			GSF- 151	クスギ類	分割材		C溝
GSF- 1047	クリ	分割材			GSF- 152	クスギ類	又鋤	56	B溝
GSF- 1061	クリ	板目板			GSF- 156	クスギ類	容器	232	B溝
GSF- 1066	クリ	削り出し棒			GSF- 157	クスギ類	用途不明品(糸巻)	331	B溝
GSF- 1080	クリ	削り薄板			GSF- 158	クスギ類	石斧直柄?	217	2 B溝
GSF- 1082	クリ	削り出し棒			GSF- 159	クスギ類	用途不明品	325	B・2 B溝
GSF- 1088	クリ	板目板			GSF- 161	クスギ類	用途不明品	415	2 B溝
GSF- 1092	クリ	板目板			GSF- 163	クスギ類	作業台	247	2 B溝
GSF- 1094	クリ	加工材			GSF- 165	クスギ類	板	439	A溝
GSF- 1098	クリ	分割材			GSF- 166	クスギ類	ヘラ状木製品	143	2 B溝
GSF- 1105	クリ	板目板			GSF- 174	クスギ類	杭	387	B溝
GSF- 1106	クリ	分割材			GSF- 181	クスギ類	杭	387	B溝
GSF- 1108	クリ	加工材			GSF- 182	クスギ類	長柄鋤b	131	B溝
GSF- 6	クスギ類	着柄鋤	113	B溝	GSF- 185	クスギ類	分割材	508	B溝
GSF- 7	クスギ類	広鋤	22	B溝	GSF- 186	クスギ類	杭	396	B溝
GSF- 12	クスギ類	組み合わせ式斧柄	218	C溝	GSF- 195	クスギ類	杭	397	B溝
GSF- 13	クスギ類	木篋	254	B溝	GSF- 197	クスギ類	杭	393	B溝
GSF- 15	クスギ類	横鋤b	81	2 B溝	GSF- 198	クスギ類	杭	382	2 B溝
GSF- 18	クスギ類	又鋤	49	D溝	GSF- 201	クスギ類	作業台	248	B溝
GSF- 21	クスギ類	用途不明品	336	A溝	GSF- 203	クスギ類	着柄鋤未製品	96	C溝
GSF- 22	クスギ類	石斧直柄	214	F溝	GSF- 205	クスギ類	加工材	518	B溝
GSF- 27	クスギ類	有柄J字形木製品	137	D溝	GSF- 206	クスギ類	杭	360	B溝
GSF- 29	クスギ類	又鋤	61	A溝					
GSF- 39	クスギ類	又鋤	64	A溝					

9 新保遺跡出土加工木の樹種

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 207	クスギ類	杭	358	B溝	GSF- 378	クスギ類	分割材		
GSF- 208	クスギ類	加工材	512	C溝	GSF- 382	クスギ類	横づち	204	B溝
GSF- 218	クスギ類	有柄J字形木製品	140		GSF- 384	クスギ類	作業台	245	D溝
GSF- 220	クスギ類	横づち	209		GSF- 387	クスギ類	柱目板	473	
GSF- 221	クスギ類	板	481		GSF- 409	クスギ類	分割材	489	B・2 B溝?
GSF- 225	クスギ類	横づち	200	2 B溝	GSF- 412	クスギ類	用途不明品	339	A溝
GSF- 226	クスギ類	加工材	513	2 B溝	GSF- 417	クスギ類	加工材		
GSF- 227	クスギ類	加工材	514	2 B溝	GSF- 420	クスギ類	柱目板	469	
GSF- 228	クスギ類	板	419	B溝	GSF- 422	クスギ類	農具直柄	181	A溝
GSF- 230	クスギ類	分割材	494	B溝	GSF- 424	クスギ類	農具直柄	171	B・2 B溝
GSF- 236	クスギ類	角材			GSF- 425	クスギ類	農具直柄	186	
GSF- 240	クスギ類	杭	398	B溝	GSF- 426	クスギ類	用途不明品(糸巻)	314	2 B溝
GSF- 241	クスギ類	杭	401	B溝	GSF- 429	クスギ類	用途不明品	313	C溝
GSF- 246	クスギ類	加工材	519	A溝	GSF- 430	クスギ類	農具直柄	182	A溝
GSF- 249	クスギ類	横づち	194	D溝	GSF- 432	クスギ類	横づち	211	
GSF- 253	クスギ類	作業台	249	B溝	GSF- 433	クスギ類	農具直柄	176	A溝
GSF- 256	クスギ類	広鋏	14	C溝	GSF- 442	クスギ類	用途不明品	311	D溝
GSF- 261	クスギ類	梯子	353	B・2 B溝?	GSF- 445	クスギ類	農具直柄	170	B・2 B溝
GSF- 264	クスギ類	用途不明品	326	B溝	GSF- 446	クスギ類	分割材		
GSF- 265	クスギ類	柱目板			GSF- 452	クスギ類	分割材		
GSF- 273	クスギ類	広鋏未製品	6	D溝	GSF- 454	クスギ類	角材		
GSF- 279	クスギ類	広鋏未製品	26	2 B溝	GSF- 455	クスギ類	分割材		
GSF- 280	クスギ類	又鋏	53	2 B溝	GSF- 456	クスギ類	柱目板	444	
GSF- 282	クスギ類	横鋏未製品	69	D・E溝	GSF- 462	クスギ類	分割材		
GSF- 283	クスギ類	広鋏未製品	16	C溝	GSF- 465	クスギ類	建築材?		
GSF- 286	クスギ類	農具膝柄	155	C溝	GSF- 467	クスギ類	組み合わせ式斧柄	220	
GSF- 288	クスギ類	建築材	369	B溝	GSF- 468	クスギ類	加工材	517	B溝
GSF- 294	クスギ類	三又鋏	68	B・2 B溝	GSF- 469	クスギ類	建築材	374	B・2 B溝
GSF- 298	クスギ類	着柄鋏未製品	98	C溝	GSF- 473	クスギ類	柱目板	464	B溝
GSF- 300	クスギ類	横鋏未製品	70	D溝	GSF- 474	クスギ類	建築材	376	2 B溝
GSF- 302	クスギ類	分割材		2 B溝	GSF- 475	クスギ類	作業台?	251	
GSF- 303	クスギ類	分割材	488	B・2 B溝?	GSF- 478	クスギ類	建築材	375	B・2 B溝
GSF- 304	クスギ類	狭鋏	36	B・2 B溝?	GSF- 479	クスギ類	加工材		
GSF- 307	クスギ類	分割材			GSF- 480	クスギ類	加工材		B溝
GSF- 308	クスギ類	分割材			GSF- 481	クスギ類	用途不明品	330	B・2 B溝?
GSF- 310	クスギ類	横づち?			GSF- 483	クスギ類	加工材	516	B溝
GSF- 312	クスギ類	柱目板			GSF- 484	クスギ類	柱目板	446	D・E溝
GSF- 314	クスギ類	加工材			GSF- 486	クスギ類	又鋏	52	2 B溝
GSF- 315	クスギ類	分割材			GSF- 487	クスギ類	柱目板	434	B・2 B溝
GSF- 316	クスギ類	柱目板			GSF- 488	クスギ類	柱目板	449	D溝
GSF- 317	クスギ類	柱目板			GSF- 490	クスギ類	柱目板	435	B・2 B溝
GSF- 319	クスギ類	柱目板			GSF- 491	クスギ類	柱目板	427	C・D溝
GSF- 320	クスギ類	柱目板	442		GSF- 492	クスギ類	柱目板	466	B溝
GSF- 322	クスギ類	柱目板			GSF- 502	クスギ類	横づち	203	B溝
GSF- 323	クスギ類	木篋?			GSF- 503	クスギ類	加工材	420	A溝
GSF- 327	クスギ類	用途不明品	337		GSF- 504	クスギ類	用途不明品	312	D溝
GSF- 329	クスギ類	容器?		B溝	GSF- 507	クスギ類	長柄鋏b	130	2 B溝
GSF- 332	クスギ類	横づち	206	A溝	GSF- 508	クスギ類	柱目板	462	B溝
GSF- 334	クスギ類	柱目板		C溝	GSF- 509	クスギ類	用途不明品(糸巻)	315	2 B溝
GSF- 335	クスギ類	柱目板		B溝	GSF- 511	クスギ類	杭	404	A溝
GSF- 337	クスギ類	角材		B溝	GSF- 513	クスギ類	杭	391	B溝
GSF- 338	クスギ類	柱目板	440	A溝	GSF- 514	クスギ類	杭	390	2 B溝
GSF- 339	クスギ類	杭	392	B溝	GSF- 516	クスギ類	柱目板		A溝
GSF- 340	クスギ類	板目板	428	2 B・C溝	GSF- 523	クスギ類	柱目板	463	B溝
GSF- 341	クスギ類	柱目板		2 B溝	GSF- 524	クスギ類	又鋏	55	B・2 B溝
GSF- 344	クスギ類	柱目板	438	B溝	GSF- 526	クスギ類	分割材		
GSF- 348	クスギ類	着柄鋏	116	A溝	GSF- 529	クスギ類	柱目板		
GSF- 349	クスギ類	柱目板		B溝					

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF-530	クスギ類	柱目板			GSF-695	クスギ類	角材		
GSF-532	クスギ類	農具直柄	160	C溝	GSF-701	クスギ類	柱目板		B溝
GSF-535	クスギ類	用途不明品(建築材)	352	B溝	GSF-702	クスギ類	柱目板		B溝
GSF-536	クスギ類	建築材	368	B溝	GSF-703	クスギ類	柱目板		B溝
GSF-537	クスギ類	組み合わせ式斧柄	221		GSF-705	クスギ類	分割材		2 B溝
GSF-540	クスギ類	分割材	491	A溝	GSF-709	クスギ類	分割材		
GSF-543	クスギ類	建築材	366	B溝	GSF-712	クスギ類	柱目板		2 B溝
GSF-545	クスギ類	用途不明品	335	A溝	GSF-713	クスギ類	分割材		
GSF-547	クスギ類	農具直柄	180	A溝	GSF-716	クスギ類	柱目板		
GSF-549	クスギ類	柱目板	472		GSF-717	クスギ類	柱目板		
GSF-550	クスギ類	建築材	367	B溝	GSF-718	クスギ類	分割材		
GSF-554	クスギ類	農具直柄	183	A溝	GSF-720	クスギ類	柱目板		
GSF-556	クスギ類	農具直柄	164	C溝	GSF-724	クスギ類	柱目板		
GSF-558	クスギ類	加工材	417	B・2 B溝?	GSF-728	クスギ類	分割材		
GSF-559	クスギ類	分割材	507	2 B溝	GSF-729	クスギ類	加工材		2 B溝
GSF-560	クスギ類	農具直柄	188		GSF-733	クスギ類	角材		
GSF-563	クスギ類	用途不明品	347		GSF-735	クスギ類	柱目板		
GSF-565	クスギ類	柱目板	483		GSF-737	クスギ類	柱目板		
GSF-568	クスギ類	柱目板	447	D溝	GSF-738	クスギ類	削り出し棒		
GSF-570	クスギ類	板目板	484	B・2 B溝?	GSF-739	クスギ類	削り出し棒		2 B溝
GSF-571	クスギ類	柱目板	477	2 B溝	GSF-742	クスギ類	柱目板		
GSF-572	クスギ類	加工材			GSF-743	クスギ類	削り出し棒		
GSF-575	クスギ類	横づち	193	D溝	GSF-744	クスギ類	柱目板		
GSF-576	クスギ類	板目板	487	A溝	GSF-748	クスギ類	柱目板		D溝
GSF-579	クスギ類	分割材	503	2 B溝	GSF-750	クスギ類	分割材		
GSF-582	クスギ類	分割材			GSF-751	クスギ類	柱目板(農具?)		
GSF-584	クスギ類	柱目板	476	C溝	GSF-752	クスギ類	柱目板(農具?)		2 B溝
GSF-585	クスギ類	分割材	501	2 B溝	GSF-754	クスギ類	柱目板		
GSF-586	クスギ類	建築材	364	B溝	GSF-757	クスギ類	板目板		
GSF-588	クスギ類	柱目板	485	B溝	GSF-759	クスギ類	削り出し棒		B溝
GSF-589	クスギ類	柱目板	474	B溝	GSF-761	クスギ類	柱目板		2 B溝
GSF-592	クスギ類	分割材	500	2 B溝	GSF-762	クスギ類	杭		B溝
GSF-593	クスギ類	建築材	372		GSF-763	クスギ類	柱目板(農具?)		2 B溝
GSF-594	クスギ類	分割材	497	D・E溝	GSF-764	クスギ類	分割材		C溝
GSF-597	クスギ類	加工材(建築材)	416	2 B溝	GSF-767	クスギ類	削り出し棒		
GSF-599	クスギ類	柱目板	465	B溝	GSF-768	クスギ類	削り出し棒		
GSF-603	クスギ類	柱目板	451	C溝	GSF-769	クスギ類	削り出し棒		2 B溝
GSF-606	クスギ類	柱目板	457	2 B溝	GSF-771	クスギ類	削り出し棒		
GSF-608	クスギ類	柱目板	448	D溝	GSF-775	クスギ類	角材		
GSF-612	クスギ類	柱目板	450	C溝	GSF-776	クスギ類	柱目板(農具?)		A溝
GSF-614	クスギ類	分割材			GSF-777	クスギ類	柱目板(農具?)		
GSF-616	クスギ類	柱目板	459	2 B溝	GSF-778	クスギ類	柱目板		2 B溝
GSF-638	クスギ類	柱目板			GSF-781	クスギ類	柱目板(農具?)		2 B溝
GSF-639	クスギ類	建築材	373		GSF-782	クスギ類	分割材		
GSF-640	クスギ類	板目板	479		GSF-783	クスギ類	角材		
GSF-641	クスギ類	杭	381	C溝	GSF-788	クスギ類	柱目板(農具?)		
GSF-644	クスギ類	柱目板	470		GSF-789	クスギ類	分割材		
GSF-645	クスギ類	杭	389	2 B溝	GSF-790	クスギ類	削り出し棒		
GSF-647	クスギ類	杭	413		GSF-791	クスギ類	角棒		
GSF-650	クスギ類	建築材	377		GSF-794	クスギ類	角棒		
GSF-652	クスギ類	農具直柄	189		GSF-795	クスギ類	分割材		
GSF-653	クスギ類	分割材	524		GSF-796	クスギ類	分割材		
GSF-655	クスギ類	分割材	493		GSF-797	クスギ類	柱目板(農具?)		
GSF-658	クスギ類	広鋏	34	B・2 B溝?	GSF-798	クスギ類	分割材		
GSF-666	クスギ類	広鋏未製品	28	2 B溝	GSF-800	クスギ類	分割材		
GSF-686	クスギ類	着柄鋏?		A溝	GSF-803	クスギ類	柱目板		C溝
GSF-687	クスギ類	ヘラ状木製品?			GSF-805	クスギ類	分割材		
					GSF-807	クスギ類	分割材		A溝
					GSF-809	クスギ類	分割材		B溝
					GSF-811	クスギ類	角材		

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 814	クスギ類	角材		B溝	GSF- 941	クスギ類	角棒		
GSF- 815	クスギ類	桁目板			GSF- 943	クスギ類	角材		
GSF- 817	クスギ類	分割材			GSF- 944	クスギ類	分割材		
GSF- 818	クスギ類	桁目板			GSF- 946	クスギ類	桁目板		
GSF- 820	クスギ類	角材			GSF- 947	クスギ類	角材		
GSF- 821	クスギ類	棒			GSF- 948	クスギ類	分割材		
GSF- 823	クスギ類	分割材			GSF- 950	クスギ類	桁目板(農具の柄?)		2 B溝
GSF- 825	クスギ類	板目板			GSF- 951	クスギ類	角材		B溝
GSF- 828	クスギ類	分割材			GSF- 952	クスギ類	角棒		
GSF- 830	クスギ類	角材		2 B溝	GSF- 954	クスギ類	角棒		B溝
GSF- 831	クスギ類	桁目板			GSF- 956	クスギ類	桁目板		
GSF- 832	クスギ類	角材			GSF- 959	クスギ類	桁目板		
GSF- 833	クスギ類	桁目板(先端丸味)		B溝	GSF- 961	クスギ類	角材		
GSF- 834	クスギ類	角棒			GSF- 962	クスギ類	桁目板		
GSF- 835	クスギ類	角棒			GSF- 963	クスギ類	桁目板(農具?)		
GSF- 836	クスギ類	桁目板			GSF- 964	クスギ類	板目板		2 B溝
GSF- 837	クスギ類	桁目板		2 B溝	GSF- 966	クスギ類	角材		
GSF- 838	クスギ類	板目板		A溝	GSF- 970	クスギ類	棒		
GSF- 840	クスギ類	桁目板			GSF- 971	クスギ類	角材		
GSF- 846	クスギ類	桁目板		D溝	GSF- 972	クスギ類	角材		
GSF- 849	クスギ類	桁目板		B溝	GSF- 974	クスギ類	板目板		
GSF- 854	クスギ類	桁目板(農具?)			GSF- 975	クスギ類	削り出し棒		
GSF- 858	クスギ類	桁目板			GSF- 977	クスギ類	桁目板		B溝
GSF- 863	クスギ類	桁目板(農具?)		2 B溝	GSF- 979	クスギ類	分割材		2 B溝
GSF- 864	クスギ類	桁目板			GSF- 980	クスギ類	角棒		B溝
GSF- 866	クスギ類	桁目板			GSF- 984	クスギ類	加工材		
GSF- 867	クスギ類	分割材			GSF- 987	クスギ類	分割材		
GSF- 869	クスギ類	杭		B溝	GSF- 990	クスギ類	棒		
GSF- 876	クスギ類	桁目板			GSF- 991	クスギ類	桁目板		
GSF- 878	クスギ類	角棒			GSF- 993	クスギ類	桁目板		
GSF- 879	クスギ類	板目板			GSF- 994	クスギ類	角棒		A溝
GSF- 881	クスギ類	角材			GSF- 995	クスギ類	桁目板(農具の破片?)		
GSF- 882	クスギ類	分割材			GSF- 996	クスギ類	桁目板		
GSF- 885	クスギ類	角材		2 B溝	GSF- 997	クスギ類	角棒		B溝
GSF- 886	クスギ類	角棒			GSF- 999	クスギ類	桁目板		
GSF- 890	クスギ類	分割材			GSF- 1000	クスギ類	桁目板		
GSF- 891	クスギ類	分割材			GSF- 1002	クスギ類	角棒		
GSF- 894	クスギ類	桁目板(農具?)			GSF- 1003	クスギ類	桁目板		B・2 B溝
GSF- 895	クスギ類	分割材			GSF- 1005	クスギ類	桁目板		2 B溝
GSF- 897	クスギ類	桁目板			GSF- 1009	クスギ類	角棒		
GSF- 903	クスギ類	削り出し棒			GSF- 1017	クスギ類	角材		2 B溝
GSF- 904	クスギ類	角材		B溝	GSF- 1019	クスギ類	角棒		
GSF- 905	クスギ類	角材			GSF- 1021	クスギ類	削り出し棒		
GSF- 906	クスギ類	桁目板			GSF- 1023	クスギ類	削り出し棒		B溝
GSF- 908	クスギ類	角材			GSF- 1026	クスギ類	桁目板		
GSF- 911	クスギ類	桁目板		D溝	GSF- 1028	クスギ類	桁目板		
GSF- 913	クスギ類	削り出し棒			GSF- 1029	クスギ類	削り出し棒		
GSF- 914	クスギ類	加工材			GSF- 1030	クスギ類	桁目板		
GSF- 918	クスギ類	加工材		B溝	GSF- 1031	クスギ類	分割材		
GSF- 920	クスギ類	角材			GSF- 1034	クスギ類	桁目板		
GSF- 923	クスギ類	桁目板			GSF- 1035	クスギ類	分割材		
GSF- 924	クスギ類	角材			GSF- 1037	クスギ類	角棒		A溝
GSF- 929	クスギ類	角棒			GSF- 1046	クスギ類	農具直柄?		
GSF- 931	クスギ類	角材			GSF- 1048	クスギ類	分割材		
GSF- 933	クスギ類	桁目板			GSF- 1049	クスギ類	角棒		
GSF- 934	クスギ類	角棒(柄?)			GSF- 1050	クスギ類	桁目板		
GSF- 937	クスギ類	加工材		2 B溝	GSF- 1054	クスギ類	角材		
GSF- 939	クスギ類	角棒			GSF- 1059	クスギ類	桁目板		B溝
GSF- 940	クスギ類	角棒							

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF-1062	クスギ類	分割材			GSF-2	カシ類	用途不明品	323	2 B溝
GSF-1063	クスギ類	角棒		B溝	GSF-3	カシ類	横鋸 a	76	B溝
GSF-1064	クスギ類	板目板		B溝	GSF-4	カシ類	横鋸 a	72	2 B溝
GSF-1065	クスギ類	分割材			GSF-5	カシ類	横鋸 b	82	2 B溝
GSF-1068	クスギ類	削り出し棒			GSF-8	カシ類	広鋸	33	B溝
GSF-1069	クスギ類	柱目板		A溝	GSF-9	カシ類	広鋸	20	2 B溝
GSF-1070	クスギ類	分割材			GSF-11	カシ類	着柄鋸鋸?		B溝
GSF-1072	クスギ類	柱目板			GSF-16	カシ類	横鋸 b	86	B・2 B溝
GSF-1073	クスギ類	分割材			GSF-17	カシ類	又鋸	62	A溝
GSF-1075	クスギ類	加工材			GSF-20	カシ類	広鋸	39	
GSF-1076	クスギ類	分割材			GSF-23	カシ類	用途不明品	310	D溝
GSF-1077	クスギ類	分割材			GSF-26	カシ類	広鋸	44	
GSF-1081	クスギ類	角棒			GSF-28	カシ類	横鋸 a	75	A溝
GSF-1083	クスギ類	削り出し棒		B溝	GSF-30	カシ類	着柄鋸鋸未製品	124	
GSF-1085	クスギ類	角棒		B溝					
GSF-1087	クスギ類	分割材		2 B溝	GSF-31	カシ類	又鋸	59	B溝
GSF-1089	クスギ類	加工材			GSF-33	カシ類	用途不明品		
GSF-1091	クスギ類	分割材		A溝	GSF-34	カシ類	三又鋸	67	2 B溝
GSF-1093	クスギ類	分割材			GSF-36	カシ類	広鋸	41	
GSF-1096	クスギ類	分割材			GSF-37	カシ類	着柄鋸鋸	126	
GSF-1097	クスギ類	分割材			GSF-43	カシ類	杵	191	2 B溝
GSF-1100	クスギ類	板目板			GSF-45	カシ類	広鋸未製品	37	A溝
GSF-1101	クスギ類	分割材			GSF-46	カシ類	横づち	196	2 B溝
GSF-1102	クスギ類	角材			GSF-48	カシ類	三又鋸	65	A溝
GSF-1103	クスギ類	柱目板			GSF-49	カシ類	広鋸	27	2 B溝
GSF-1104	クスギ類	柱目板			GSF-55	カシ類	着柄鋸鋸?		
GSF-1109	クスギ類	分割材			GSF-58	カシ類	広鋸	40	
GSF-1110	クスギ類	柱目板			GSF-60	カシ類	広鋸	45	
GSF-1111	クスギ類	板目板			GSF-61	カシ類	広鋸未製品	48	
GSF-52	ナラ類	木篋	256		GSF-62	カシ類	へら状木製品	148	
GSF-78	ナラ類	着柄鋸鋸	114	B溝	GSF-69	カシ類	三又鋸	66	2 B溝
GSF-192	ナラ類	梯子	357	A溝	GSF-71	カシ類	着柄鋸鋸	87	C・D溝
GSF-217	ナラ類	横づち	207	A溝	GSF-72	カシ類	広鋸	18	2 B溝
GSF-289	ナラ類	分割材	492	A溝	GSF-73	カシ類	広鋸	7	C・D溝
GSF-297	ナラ類	長柄鋸?		C溝	GSF-75	カシ類	着柄鋸鋸	111	B溝
GSF-299	ナラ類	横鋸未製品	80	C溝	GSF-86	カシ類	着柄鋸鋸	88	D溝
GSF-309	ナラ類	分割材			GSF-94	カシ類	着柄鋸鋸	118	A溝
GSF-325	ナラ類	加工材	414	D溝	GSF-99	カシ類	着柄鋸鋸	100	2 B溝
GSF-375	ナラ類	横づち	210		GSF-100	カシ類	着柄鋸鋸	90	C溝
GSF-447	ナラ類	分割材			GSF-101	カシ類	広鋸	21	2 B溝
GSF-450	ナラ類	分割材			GSF-102	カシ類	広鋸	31	B溝
GSF-470	ナラ類	柱目板	426		GSF-109	カシ類	狭鋸	35	B溝
GSF-477	ナラ類	着柄鋸鋸	125		GSF-110	カシ類	横鋸 a	71	C溝
GSF-496	ナラ類	作業台?	250		GSF-112	カシ類	広鋸	9	C溝
GSF-527	ナラ類	横づち	205	A溝	GSF-115	カシ類	着柄鋸鋸未製品	99	C溝
GSF-539	ナラ類	建築材	365	B溝					
GSF-555	ナラ類	柱目板	480		GSF-117	カシ類	緯打具	257	C溝
GSF-566	ナラ類	柱目板	482		GSF-119	カシ類	着柄鋸鋸	91	C溝
GSF-591	ナラ類	建築材	361	2 B溝	GSF-120	カシ類	横鋸 b	77	C溝
GSF-657	ナラ類	着柄鋸鋸	121		GSF-124	カシ類	杵	190	B溝
GSF-682	ナラ類	用途不明品	338		GSF-132	カシ類	広鋸	13	C溝
GSF-723	ナラ類	柱目板			GSF-133	カシ類	広鋸	17	2 B溝
GSF-727	ナラ類	加工材		2 B溝	GSF-140	カシ類	広鋸	11	C溝
GSF-753	ナラ類	柱目板			GSF-145	カシ類	用途不明品		2 B溝
GSF-799	ナラ類	杭			GSF-146	カシ類	へら状木製品	144	2 B溝
GSF-810	ナラ類	加工材			GSF-150	カシ類	横鋸 b	78	C溝
GSF-827	ナラ類	柱目板			GSF-153	カシ類	広鋸	10	C溝
GSF-1036	ナラ類	分割材			GSF-164	カシ類	横鋸 b	83	2 B溝
GSF-1095	ナラ類	角材			GSF-168	カシ類	着柄鋸鋸	123	
GSF-1	カシ類	広鋸	19	2 B溝	GSF-171	カシ類	着柄鋸鋸	95	C溝

9 新保遺跡出土加工木の樹種

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 172	カシ類	広鋏未製品	47		GSF- 485	カシ類	柱目板	431	2 B溝
GSF- 175	カシ類	横鋏 b	84		GSF- 515	カシ類	横づち(握部)	197	2 B溝
GSF- 180	カシ類	長柄鋏 a未製品	135		GSF- 517	カシ類	柱目板		2 B溝
GSF- 188	カシ類	又鋏	63		GSF- 518	カシ類	柱目板	452	C溝
GSF- 211	カシ類	長柄鋏 a未製品	133		GSF- 525	カシ類	柱目板	468	
GSF- 215	カシ類	又鋏	50		GSF- 528	カシ類	柱目板		
GSF- 223	カシ類	緯打具	258		GSF- 544	カシ類	柱目板	486	B溝
GSF- 232	カシ類	へら状木製品	142	C溝	GSF- 577	カシ類	建築材	371	
GSF- 235	カシ類	板目板			GSF- 598	カシ類	長柄鋏 C	136	
GSF- 238	カシ類	用途不明品	327	B溝	GSF- 604	カシ類	柱目板	461	B・2 B溝
GSF- 239	カシ類	加工材		B溝	GSF- 607	カシ類	作業台	244	
GSF- 243	カシ類	横づち	195	2 B溝	GSF- 643	カシ類	杭	407	B溝
GSF- 247	カシ類	用途不明品	418	B・2 B溝	GSF- 659	カシ類	広鋏	23	2 B溝
GSF- 251	カシ類	着柄鋏未製品	127		GSF- 708	カシ類	削り出し棒		B・2 B溝
GSF- 254	カシ類	農具直柄	156	2 B溝	GSF- 721	カシ類	柱目板		
GSF- 255	カシ類	へら状木製品	141	C溝	GSF- 730	カシ類	分割材		
GSF- 260	カシ類	横鋏 b未製品	79	C溝	GSF- 731	カシ類	柱目板		2 B溝
GSF- 262	カシ類	着柄鋏未製品	92	C溝	GSF- 793	カシ類	柱目板(農具?)		
GSF- 267	カシ類	着柄鋏未製品	108	2 B溝	GSF- 801	カシ類	柱目板		C溝
GSF- 268	カシ類	農具直柄	157	2 B・C溝	GSF- 808	カシ類	柱目板		2 B溝
GSF- 269	カシ類	広鋏未製品	4	D溝	GSF- 816	カシ類	角材		
GSF- 270	カシ類	着柄鋏未製品	105	2 B溝	GSF- 829	カシ類	柱目板		B溝
GSF- 271	カシ類	長柄鋏 a未製品	110	2 B溝	GSF- 845	カシ類	柱目板		C溝
GSF- 272	カシ類	鋏未製品	89	D溝	GSF- 848	カシ類	柱目板		
GSF- 274	カシ類	着柄鋏未製品	102	2 B溝	GSF- 862	カシ類	角棒		
GSF- 275	カシ類	鋏未製品	107	2 B溝	GSF- 872	カシ類	棒		B溝
GSF- 276	カシ類	着柄鋏未製品	97	C溝	GSF- 872	カシ類	板目板		C溝
GSF- 277	カシ類	広鋏未製品	5	D溝	GSF- 883	カシ類	柱目板		
GSF- 278	カシ類	広鋏	422	B溝	GSF- 899	カシ類	柱目板		B・2 B溝
GSF- 281	カシ類	柱目板			GSF- 917	カシ類	角材		
GSF- 284	カシ類	用途不明品	324	2 B溝	GSF- 921	カシ類	柱目板		
GSF- 285	カシ類	又鋏	51	C溝	GSF- 932	カシ類	柱目板		
GSF- 295	カシ類	広鋏	421	2 B溝	GSF- 988	カシ類	柱目板		
GSF- 296	カシ類	鋏未製品	115	A・B溝	GSF- 1008	カシ類	柱目板		
GSF- 301	カシ類	又鋏(刃先)?		B溝	GSF- 1012	カシ類	柱目板		
GSF- 318	カシ類	角材			GSF- 1040	カシ類	柱目板		
GSF- 346	カシ類	柱目板			GSF- 1041	カシ類	柱目板		
GSF- 352	カシ類	着柄鋏	112	B溝	GSF- 1084	カシ類	柱目板		
GSF- 354	カシ類	柱目板		B溝	GSF- 1090	カシ類	柱目板		C溝
GSF- 364	カシ類	柱目板			GSF- 1112	カシ類	角棒		
GSF- 383	カシ類	着柄鋏	120		GSF- 936	ムクノキ	分割材		
GSF- 415	カシ類	着柄鋏未製品	94	C溝	GSF- 981	ムクノキ	分割材		
GSF- 416	カシ類	へら状木製品	147	A溝	GSF- 53	エノキ	横づち	208	B溝
GSF- 418	カシ類	広鋏	43		GSF- 204	エノキ	杭	384	2 B溝
GSF- 419	カシ類	板		C溝	GSF- 306	エノキ	杭	405	
GSF- 421	カシ類	柱目板	445		GSF- 330	エノキ	容器	228	B溝
GSF- 427	カシ類	農具直柄	168	2 B溝	GSF- 331	エノキ	角材	582	A溝
GSF- 428	カシ類	用途不明品	316	2 B溝	GSF- 347	エノキ	柱目板	424	A溝
GSF- 435	カシ類	農具直柄	179	A溝	GSF- 410	エノキ	柱目板	458	2 B溝
GSF- 437	カシ類	農具直柄	178	A溝	GSF- 411	エノキ	柱目板	454	C溝
GSF- 457	カシ類	横鋏 b	85		GSF- 512	エノキ	杭	380	2 B・C溝
GSF- 458	カシ類	広鋏	42		GSF- 520	エノキ	柱目板	453	C溝
GSF- 460	カシ類	着柄鋏	128		GSF- 581	エノキ	建築材	363	B溝
GSF- 466	カシ類	着柄鋏	129		GSF- 722	エノキ	柱目板		
GSF- 482	カシ類	柱目板	471		GSF- 736	エノキ	柱目板		A溝
					GSF- 772	エノキ	分割材		
					GSF- 773	エノキ	杭		
					GSF- 850	エノキ	棒(先端に焦げ)		
					GSF- 865	エノキ	角材		
					GSF- 870	エノキ	削り出し棒		C溝

標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝	標本番号	樹種名	加工木の種類	番号	出土溝
GSF- 873	エノキ	柁目板			GSF- 826	キハダ	角材		
GSF- 909	エノキ	柁目板			GSF- 24	ニガキ	用途不明品	532	B溝
GSF- 925	エノキ	板目板		A溝	GSF- 148	ニガキ	農具膝柄	149	B溝
GSF- 1043	エノキ	加工材			GSF- 583	ニガキ	分割材	509	A溝
GSF- 1074	エノキ	分割材			GSF- 938	ヤマウルシ	削り出し棒		
GSF- 1099	エノキ	角材			GSF- 985	ヤマウルシ	分割材		
GSF- 193	ニレ類	加工材	521		GSF- 1079	ヤマウルシ	分割材		
GSF- 213	ニレ類	杭	385	2 B溝	GSF- 194	カエデ類	杭	394	B溝
GSF- 749	ニレ類	加工材		B溝	GSF- 351	カエデ類	加工材		C溝
GSF- 765	ニレ類	棒(先端に焦げ)			GSF- 684	カエデ類	農具直柄		
GSF- 853	ニレ類	加工材			GSF- 922	カエデ類	分割材		
GSF- 64	ケヤキ	容器未製品	242		GSF- 79	ムクロジ	長柄鋤c	134	
GSF- 68	ケヤキ	糸巻	261		GSF- 436	ムクロジ	農具直柄	174	B溝
GSF- 74	ケヤキ	広鋤	46		GSF- 443	ムクロジ	農具直柄	177	A溝
GSF- 95	ケヤキ	容器	224	C・D溝	GSF- 444	ムクロジ	農具直柄	175	B溝
GSF- 97	ケヤキ	容器	230	B溝	GSF- 546	ムクロジ	農具直柄	173	B溝
GSF- 103	ケヤキ	広鋤未製品	15	C溝	GSF- 557	ムクロジ	農具直柄	167	2 B溝
GSF- 136	ケヤキ	容器	225	C溝	GSF- 691	ムクロジ	農具直柄?		
GSF- 184	ケヤキ	丸木弓	275	C溝	GSF- 694	ムクロジ	農具直柄?		2 B溝
GSF- 234	ケヤキ	容器未製品	241		GSF- 779	ムクロジ	削り出し棒		
GSF- 472	ケヤキ	加工材			GSF- 1053	ムクロジ	棒		
GSF- 489	ケヤキ	柁目板	437	B溝	GSF- 609	トチノキ	容器	229	B溝
GSF- 548	ケヤキ	丸木弓(榑入り)	289	B溝	GSF- 89	ニシキギ類	飾り弓	280	C溝
GSF- 725	ケヤキ	柁目板			GSF- 113	ニシキギ類	飾り弓	264	D溝
GSF- 877	ケヤキ	角材			GSF- 42	ケンボナシ類	板	441	
GSF- 1001	ヒメコウゾ	加工材			GSF- 96	ケンボナシ類	用途不明品	350	D溝
GSF- 219	ヤマグワ	杭	378	D溝	GSF- 210	ケンボナシ類	杭	383	2 B溝
GSF- 229	ヤマグワ	杭	403	B溝	GSF- 67	グミ類	農具膝柄	153	
GSF- 376	ヤマグワ	梯子	356	A溝	GSF- 209	ウコギ類	杭	388	2 B溝
GSF- 651	ヤマグワ	加工材	520		GSF- 438	ウコギ類	用途不明品	334	A・B溝
GSF- 685	ヤマグワ	農具直柄	184		GSF- 692	エゴノキ類	農具直柄?		D溝
GSF- 819	ヤマグワ	棒			GSF- 56	トネリコ類	農具膝柄	152	
GSF- 1042	ヤマグワ	分割材			GSF- 439	トネリコ類	農具直柄	172	B溝
GSF- 690	クスノキ科	農具直柄		2 B溝	GSF- 130	ムラサキシキブ	農具直柄	162	2 B溝
GSF- 179	ヤブツバキ	作業台	246	2 B溝	GSF- 248	ムラサキシキブ	農具直柄	166	2 B溝
GSF- 574	ヤブツバキ	杭	408		GSF- 257	ムラサキシキブ	木篋	252	C溝
GSF- 704	ヤブツバキ	分割材		D溝	GSF- 407	ムラサキシキブ	用途不明品	342	2 B溝
GSF- 160	サカキ	木篋	253	C溝	GSF- 1045	キリ	容器?		
GSF- 596	サカキ	農具膝柄	154	2 B・C・D溝	GSF- 423	ニワトコ	農具直柄	161	C溝
GSF- 386	ヤマザクラ	糸巻	259	C溝	GSF- 813	ガマズミ類A	削り出し棒		2 B溝
GSF- 199	モモ	杭	386	2 B溝	GSF- 955	ガマズミ類B	棒		B溝
GSF- 451	モモ	分割材	495		GSF- 1156	クスギ類	用途不明品	322	2 B溝?
GSF- 19	ネムノキ	広鋤未製品	1	D・E溝	GSF- 1152	クスギ類	分割材		2 B溝?
GSF- 982	アカメガシワ	柁目板			GSF- 1151	クスギ類	着柄鋤未製品	109	2 B溝?
GSF- 855	コクサギ	分割材		C溝	GSF- 1153	クスギ類	横づち	199	2 B溝?
GSF- 928	コクサギ	加工材			GSF- 1150	カシ類	横鋤a	73	2 B溝?
GSF- 149	キハダ	容器	239	B溝	GSF- 1149	カシ類	農具直柄	159	2 B溝?
GSF- 173	キハダ	着柄鋤	117	A溝	GSF- 1154	カシ類	着柄鋤	101	2 B溝?
					GSE- 1157	ケヤキ	横鋤a	74	2 B溝?
					GSF- 1155	カバノキ類	着柄鋤未製品	106	2 B溝?

10 新保遺跡の出土米粒、その他

佐藤 敏也

1 資料一覧

No.	出土場所	計測粒数	時期	出土年月	備考	No.	出土場所	計測粒数	時期	出土年月	備考
1	B 溝	167	古墳前期	'79.7～ 9月	他に破片約 200粒	8	E 溝	29	弥生中期末 後期初頭		
2	2 B 溝 E-7 G	2	弥生後期後 半	'790719		9	F 溝	1	弥生中期後 半	'790707	
3	B・2 B 溝	15	弥生後期～ 古墳前期	同上	F-7.8 G	10	11号方形周 溝墓	1	弥生後期		方形周溝墓 第3主体部
4	2 B 溝	39	弥生後期後 半	'79.7～ 9月	他に破片12 粒	11	同 上	2	同 上		方形周溝墓 第4主体部
5	C 溝	100	弥生後期前 半(新)	同 上		12	蛭沢 2号井戸	10	古墳前期		他に籾2、 米6、茎1
6	C～F- 7.8 G	20	弥生後期	'790719		13	有馬条里 347号住居 跡	60	弥生後期		No.347住 壺 中出土米塊
7	D 溝	33	弥生後期前 半(古)	同 上		合計		479			

※ 時期の項は、出土遺構、溝の時期を表わす。米粒の時期はおよそこれに一致する。

2 米粒の形態

すべての米粒は焼けている。焼け残った数粒の籾は極めて良く稔実した姿を呈し、斉一性を保っていて、ゆきとどいた管理栽培を思わせる。籾にはPL.20のNo.1、No.2に認められるように無芒のもの、No.3のように長芒（付根から折れている）且つ長護穎（この例では外護穎のみ長穎で、図に向って左側の内穎は短護穎）のものがある。

長穎は気候不順、特に日照不足に伴って形成されることがあり、特に赤米において、その発生する頻度が高いようであるが、品種差を示すのではない。

粒長の最大5.6mm（B溝No.1、PL.21-1）、その最小3.5mm（B溝No.167、2 B溝No.39）平均値では最大4.66mm（C溝、E溝）、最小4.24mm（2 B溝F7、8 G）である。

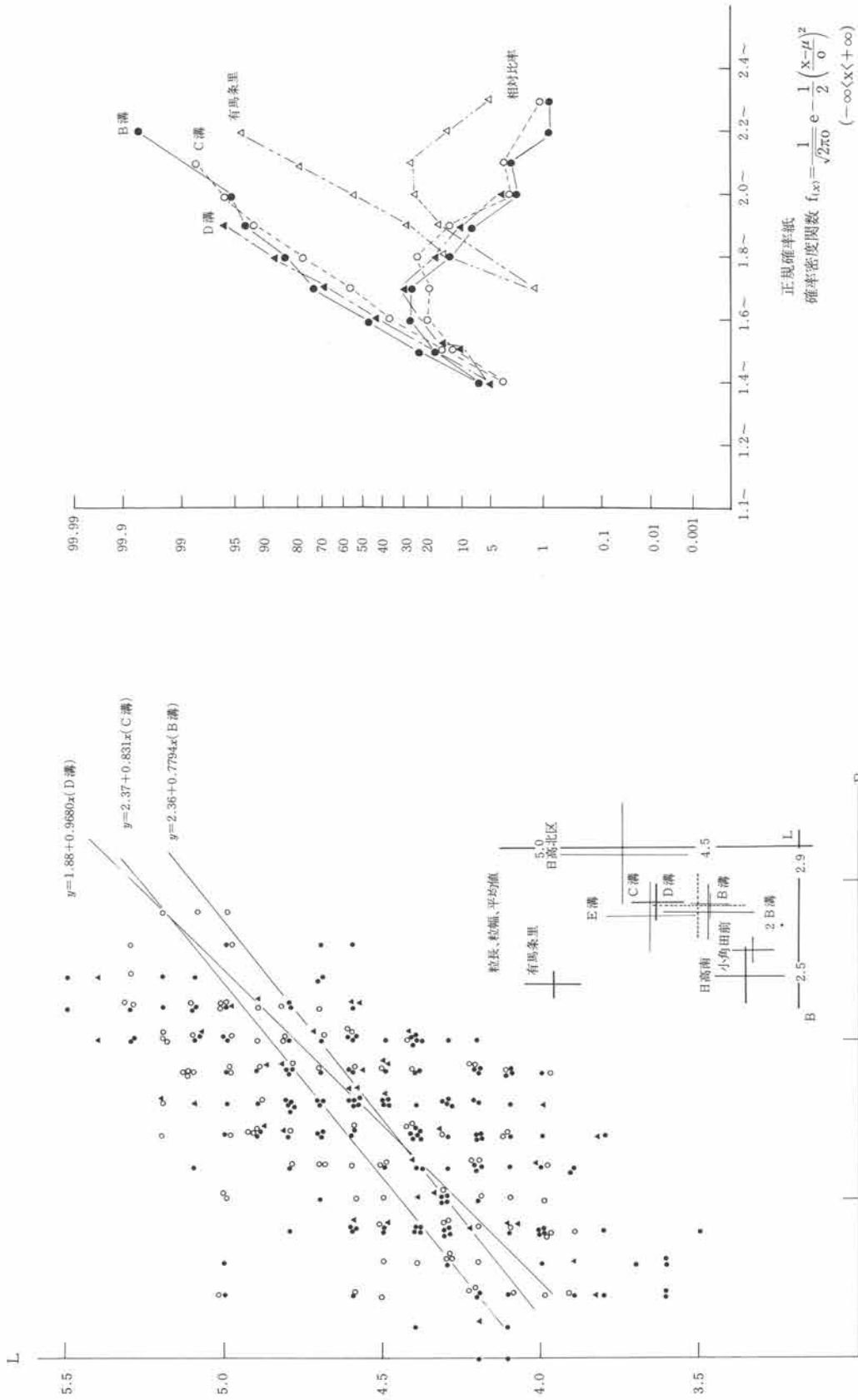
粒幅の最大3.4mm（2 B溝No.3、PL.21-3及びC溝No.5）、最小2.0mm（B溝No.147但し未熟粒ながら形容が整っている）平均値の最大2.80mm（B・2 B溝E-7 G 790719）、最小2.39mm（B・2 B溝F-7、8 G）を示す。

粒厚の最大2.5mm（C溝No.22、C溝F-7、8 G 790719 No.8）、最小1.1mm（B・2 B溝F-7、8 G No.3 未熟粒）、平均値最大2.04mm（2 B溝）、最小1.80mm（B・2 B溝）である。

粒型を示すための粒長粒幅比での最大2.27mm（B溝No.19、C溝No.30）で二つ共に未熟粒である。平均値最大1.80（C溝F-7、8 G）、最小1.64mm（B・2 B溝、E-7 G）である。

第10表 新保出土粒の型態

出土地	計測 粒数	粒 長 (L)			粒 幅 (B)			粒 厚 (Th)			粒 長/粒 幅 (L/B)			粒 長×粒 幅 (L×B)			備 考
		最大	最小	平均±S	最大	最小	平均±S	最大	最小	平均±S	最大	最小	平均±S	最大	最小	平均±S	
B・2B溝 E-7G	2	5.00	4.20	4.60 ± 0.56	3.00	2.60	2.80 ± 0.86	2.10	1.80	1.95 ± 0.21	1.66	1.61	1.64 ± 0.04	15.00	10.92	12.96 ± 2.88	下、母平均の信頼 限界 (95%)
B・2B溝 F-7,8G	12	4.80	3.90	4.24 ± 0.26 4.08 < μ < 4.40	2.70	2.20	2.39 ± 0.22 2.26 < μ < 2.52	2.10	1.10	1.80 ± 0.30 1.61 < μ < 1.99	1.91	1.64	1.77 ± 0.08 1.72 < μ < 1.82	12.96	8.80	10.17 ± 1.11 9.47 < μ < 10.87	
B溝	167	5.60	3.50	4.48 ± 0.40 4.42 < μ < 4.54	3.30	2.00	2.72 ± 0.29 2.68 < μ < 2.76	2.40	1.20	1.98 ± 0.23 1.95 < μ < 2.01	2.27	1.40	1.66 ± 0.16 1.63 < μ < 1.69	17.60	7.92	12.24 ± 2.11 11.92 < μ < 12.56	
2B溝	39	5.50	3.50	4.48 ± 0.42 4.34 < μ < 4.62	3.40	2.10	2.70 ± 0.29 2.61 < μ < 2.79	2.40	1.60	2.04 ± 0.18 1.98 < μ < 2.10	2.11	1.39	1.66 ± 0.16 1.61 < μ < 1.71	17.00	7.35	12.16 ± 2.01 11.51 < μ < 12.81	
C溝	100	5.30	3.90	4.64 ± 0.40 4.56 < μ < 4.72	3.40	2.20	2.73 ± 0.31 2.67 < μ < 2.79	2.50	1.30	2.00 ± 0.24 1.95 < μ < 2.05	2.27	1.37	1.70 ± 0.15 1.67 < μ < 1.73	17.68	8.58	12.75 ± 2.29 12.30 < μ < 13.20	
C溝 F-7,8G	18	5.40	3.60	4.66 ± 0.52 4.40 < μ < 4.92	3.20	2.10	2.59 ± 0.30 2.24 < μ < 2.74	2.50	1.40	1.94 ± 0.26 1.81 < μ < 2.07	2.16	1.50	1.80 ± 0.19 1.71 < μ < 1.89	15.68	7.92	12.13 ± 2.33 10.97 < μ < 13.29	
D溝	33	5.40	3.80	4.51 ± 0.42 4.36 < μ < 4.66	3.20	2.10	2.72 ± 0.29 2.62 < μ < 2.82	2.40	1.50	1.96 ± 0.27 1.86 < μ < 2.06	2.00	1.40	1.66 ± 0.14 1.61 < μ < 1.71	17.28	8.36	12.36 ± 2.22 11.57 < μ < 13.15	
E溝	29	5.40	4.00	4.66 ± 0.38 4.52 < μ < 4.80	3.30	2.10	2.69 ± 0.29 2.58 < μ < 2.80	2.40	1.50	1.94 ± 0.20 1.86 < μ < 2.02	1.92	1.48	1.74 ± 0.17 1.68 < μ < 1.80	17.82	9.45	12.59 ± 2.09 11.86 < μ < 13.32	
11号方形周溝墓 第3主体部	1			4.20		2.40			1.85						10.08		弥生時代後期
11号方形周溝墓 第4主体部	1			4.30 3.70		2.40 2.20			1.75 2.00						10.32 8.14		弥生時代後期
F溝	1			5.00		2.50			2.00						12.50		790707
有馬糸里 住居跡内	60	5.80	4.20	4.97 ± 0.36 4.88 < μ < 5.06	2.90	2.20	2.47 ± 0.17 2.43 < μ < 2.51	2.10	1.10	1.75 ± 0.17 1.71 < μ < 1.79	2.29	1.67	2.01 ± 0.15 1.97 < μ < 2.05	16.24	9.89	12.32 ± 1.47 11.94 < μ < 12.70	弥生時代後期
蛭沢 2号井戸	6	5.10	4.40	4.75 ± 0.26 4.49 < μ < 5.01	3.10	2.70	2.97 ± 0.16 2.81 < μ < 3.13	2.30	2.00	2.10 ± 0.13 1.97 < μ < 2.23	1.74	1.46	1.60 ± 0.11 1.49 < μ < 1.71	15.81	12.69	14.10 ± 1.31 12.79 < μ < 15.41	古墳時代前期
参 小角田前 考 住居跡内	182	5.20	3.00	4.34 ± 0.44 4.28 < μ < 4.40	3.20	2.00	2.58 ± 0.29 2.54 < μ < 2.62	2.20	1.30	1.77 ± 0.21 1.74 < μ < 1.80	2.04	1.41	1.69 ± 0.13 1.67 < μ < 1.71	16.12	6.00	11.30 ± 2.23 10.98 < μ < 11.62	古墳時代前期



第47図 新保遺跡大溝出土粒の粒型変異

第46図 新保遺跡大溝出土粒長幅相関

第11表 大溝 出土粒の粒型とその大きさ

粒の大きさ (L×B) 粒型(L/B)		粒の大きさ (L×B)				合 計
		極々小粒 (VVS)	極小粒 8.00mm (VS)	小 粒 12.00mm (S)	中 粒 16.00mm (M)	
長 粒	2.0以上	—	B-6 2 B-1 C-3 D-1 E-2 グリッド-1 有馬-15	2 B-1 C-2 E-1 グリッド-2 有馬-24	—	B—6 (3.59) 2 B—2 (5.13) C—5 (65.00) D—1 (3.03) E—3 (10.34) グリッド—3 (16.67) 有馬—39 (65.00)
短 粒	1.8~2.0未満	—	B-16 2 B-2 C-13 D-2 E-2 グリッド-2 有馬-4	B-6 2 B-3 C-10 D-2 E-5 グリッド-3 有馬-9	B-1 D-1 E-1 有馬-1	B—159 (95.21) 2 B—36 (92.31) C—94 (94.00) D—32 (96.97) E—26 (89.66) グリッド—15 (83.33) 有馬—21 (35.00)
	1.6~1.8未満	B-2 グリッド-1	B-31 2 B-11 C-19 D-8 E-4 グリッド-5 有馬-5	B-40 2 B-8 C-28 D-6 E-6 グリッド-2 有馬-2	B-5 C-2 D-1 E-1	
	1.4~1.6未満	—	B-23 2 B-5 C-5 D-4 E-4	B-33 2 B-4 C-13 D-8 E-2 グリッド-2	B-2 2 B-3 C-4 E-1	
円 粒	1.0~1.4未満	—	B-1 2 B-1 C-1	B-1	—	B—2 (1.20) 2 B—1 (2.56) C—1 (1.00)
合 計		B-2 (1.20) グリッド-1 (5.56)	B-77 (46.11) 2 B-20 (51.28) C-41 (41.00) D-15 (45.45) E-12 (41.38) グリッド-8 (44.44) 有馬-24 (40.00)	B-80 (47.90) 2 B-16 (41.03) C-53 (53.00) D-16 (48.49) E-14 (48.28) グリッド-9 (50.00) 有馬-35 (58.33)	B-8 (4.79) 2 B-3 (7.69) C-6 (6.00) D-2 (6.06) E-3 (10.34) 有馬-1 (1.67)	B—167 (100) 2 B—39 (100) C—100 (100) D—33 (100) E—29 (100) グリッド—18 (100) 有馬—60 (100)

備注：アルファベットは溝、有馬は、有馬条里遺跡出土、数字は、その欄にプロットされた粒数を示す。

米の大きさを示すための粒長粒幅積最大17.82mm (E溝No.1、PL. 22-1)、最小7.35mm (2 B溝No.39)、その平均値最大12.96mm、最小10.17mm、(共にB・2 B溝)を示す。

粒型(L/B)の変動係数(C・V) $(\frac{s}{\bar{x}}) \cdot 100$ B=9.64; 2 B=9.64; C=8.82; D=8.43; E=9.77; 粒長と粒幅の相関係数rでB溝0.5614、C溝0.6385、D溝0.6548(第46図)、また粒長y軸と粒幅x軸の平均値(第46図下端)で(十字交点)x、yの線は母平均の95%、信頼限界範囲を示した。

3 米粒の粒型とその大きさ

(1) 粒型表示基準は第11表左欄に示すようにL/B:2.00以上を長粒、その1.40以上2.00未満を短粒、1.40未

満を円粒とし、粒の大きさを示す基準は第11表のようにL×B：8.00mm未満に入るものを極々小粒、その8.00mm以上12.00mm未満に入るものを極小粒、12.00mm以上16.00mm未満に入るものを小粒、16.00mm以上20.00mm未満に入るものを中粒と分類した。

粒 型	B～E 溝		有馬条里	
	数	割合	数	割合
長 粒	20	5.18%	39	65.00%
短 粒	362	93.78%	21	35.00%
円 粒	4	1.04%	—	—
合 計	386	100 %	60	100 %

粒の大きさ	B～E 溝		有馬条里	
	数	割合	数	割合
中 粒	22	5.70%	1	1.67%
小 粒	188	48.70%	35	58.33%
極 小 粒	173	44.82%	24	40.00%
極々小粒	3	0.78%	—	—
合 計	386	100 %	60	100 %

第12表 大溝出土粒の構成

出土層	長 粒 (L)				短 粒 (S)					円 粒 (R)			合計
	中 粒	小 粒	極 小	小 計	中 粒	小 粒	極 小	極々小	小 計	小 粒	極 小	小 計	
B 溝	—	—	6	6 (3.59%)	8	79	70	2	159 (95.21%)	1	1	2 (1.20%)	167
2 B 溝	—	1	1	2 (5.13%)	3	15	18	—	36 (92.31%)	—	1	1 (2.56%)	39
C 溝	—	2	3	5 (5.00%)	6	51	37	—	94 (94.00%)	—	1	1 (1.00%)	100
D 溝	—	—	1	1 (3.03%)	2	16	14	—	32 (96.97%)	—	—	—	33
E 溝	—	1	2	3 (10.34%)	3	13	10	—	26 (89.66%)	—	—	—	29
グリッド	—	2	1	3 (16.67%)	—	7	7	1	15 (83.33%)	—	—	—	18
有馬条里	—	24	15	39 (65.00%)	1	11	9	—	21 (35.00%)	—	—	—	60

(2) 出土粒の構成

長粒、短粒および円粒から構成されている。長粒に分類されたB—6粒は、No.19、20、72、101、137、147であるが共に未熟粒である。2 B—2粒はNo.1、No.10であるがNo.1は胚部欠落(PL, 21—2 B—1)しているが長粒であろう。C—5、No.30、58、65は未熟粒No.28、29は L/B 指数2.00を示すが長粒ではない。D—1、No.26は未熟粒、E—3粒のNo.5、No.16は未熟粒、No.18は変形粒で長粒ではない。

小数ながら円粒に区分されたB—2粒のNo.56、148、2 B—1粒No.36、及びC—1粒No.93などがある。

従って本遺跡の出土粒は、粒型の上からは短粒、その大きさの点からは小粒ならびに極小粒のものから構成されている。

但し、2 B群に長粒稻と目されるもの (No.1) が混入 (1粒なので断定は差し控えたい) している疑いが

存ずることを附言して置きたい。

(3) 有馬条里遺跡347住の壺中から長粒に区分された粒が39、65%も含まれているのは、この壺中の米塊がPL.22の写真にも認められるように脱稈した米粒が壺中に貯蔵されている間に、壺と共に焼熱に遭遇して炭化したものらしく、蒸し伸びなどの変容が著しく、長粒と断定できないが、新保遺跡各群の米粒とは品種的に異なるものであろう。

4 各群米粒の比較

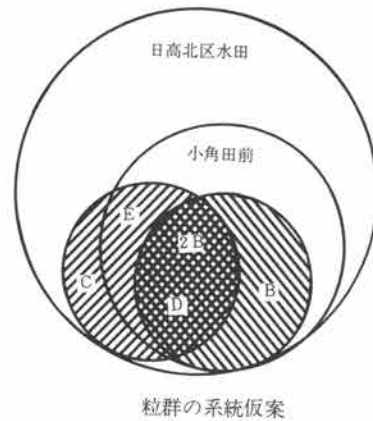
米粒の外観からの所見では、各群の米粒にたいした差は感得できなかったので、群の長幅比 (l/b) 平均値による有意差を検定した。チェックには次の式によった。

$$t_0 = (\bar{x}_a - \bar{x}_b) / \sqrt{\frac{v_a}{n_a} + \frac{v_b}{n_b}} \quad t \text{表} (\phi 0.05) \quad t_0 > t \quad \text{有意差ありとした。但し } \phi = n_a + n_b - 2$$

その結果

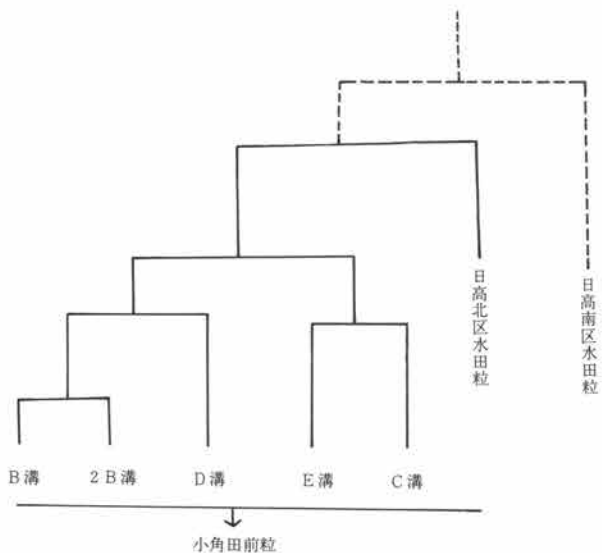
2 B、D、E、C、相互間には有意差は認められない。Bと2 B、D相互間にも有意差は認められない。BとEおよびCとは相互に有意差がある。

同様の方法で小角田前出土粒の l/b 平均値との比較では B、2 B、D、E群とは相互に有意差が認められないが、C群とは有意差を示した。



5 要 約

- (1) 大溝の各時期別米粒はすべて焼けて炭化している。
- (2) 米粒の籾状態では、無芒のもの、長芒のもの二種存在する。
- (3) 有芒の籾に長穎の在るものがある。
- (4) 粒型は短粒を主とし、小粒および極小粒から構成されている。
- (5) 円粒が極めて少ない点から考えると大部分稈稲と解され、CV データーから斉一性を保持しているところを重くみれば水稻であろう。
- (6) 有馬条里 347住壺中出土粒は特殊状態における変形粒なので、それと焼化条件の異なる新保出土粒群との比較は行わなかった。比較するまでもなく外観もデーターも異っていたからである。



第48図 出土粒群の相互関係

補 註

有馬条里遺跡は渋川市八木原に所在する。関越自動車道建設に伴い弥生～平安時代の集落跡が発掘調査された。米粒は豆類とともに炭化した状態で多量に、焼失した竪穴住居跡出土壺内から出土した。

参考文献 「有馬条里遺跡」年報3 1984 (財群馬県埋蔵文化財調査事業団)

中隆之、小林裕二「地下からのメッセージー災害と人々のくらし」上州路 No.124 1984、8

「蛭沢遺跡ー関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査概報VI」1978 群馬県教育委員会

「小角田前遺跡ー上武国道地域埋蔵文化財発掘調査概報IV」1976 群馬県教育委員会

第13表 計測表

新保遺跡 大溝 0-1
B、2B溝 E-7G 弥生後期-古墳前期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.00	3.00	2.10	1.66	15.00	
2	4.20	2.60	1.80	1.61	10.92	
平均	4.60	2.80	1.95	1.64	12.88	

新保遺跡 大溝 0-2
2B、B溝 F-7、8G 弥生後期-古墳前期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	4.80	2.70	1.40	1.77	12.96	
2	4.60	2.40	1.80	1.91	11.04	
3	4.40	2.40	1.10	1.83	10.56	未熟粒
4	4.30	2.40	2.10	1.79	10.32	
5	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
6	4.20	2.40	1.90	1.75	10.08	
7	4.20	—	1.80	—	—	幅一部欠損
8	4.10	2.40	2.00	1.70	9.84	
9	4.10	2.50	2.00	1.64	10.25	
10	4.10	2.40	1.60	1.70	9.84	
11	4.10	2.20	1.70	1.86	9.02	
12	4.00	2.20	2.10	1.81	8.80	
13	3.90	2.30	1.90	1.69	8.97	
合計	50.90	28.70	21.60	21.24	122.00	

14	—	2.30	1.60	—	—	
15	—	2.40	—	—	—	
平均	4.24	2.39	1.80	1.77	10.13	12粒平均

注：90×60×30mmの Block 中から抜き出したものである。
Block は穂の焼け塊で、小枝稈、長芒などを備えているものもある。

蛭沢遺跡 2号井戸 0-3
古墳前期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	4.70	2.70	2.30	1.74	12.69	
2	4.70	2.80	2.20	1.67	13.16	
3	4.60	3.10	2.00	1.48	14.26	
4	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
5	5.10	3.10	2.00	1.64	15.81	
6	5.00	3.10	2.10	1.61	15.50	
合計	28.50	17.80	12.60	9.60	84.62	
平均	4.75	2.97	2.10	1.60	14.11	
8	5.20	3.20	2.40	1.62	16.64	粳
9	5.10	3.10	2.40	1.64	15.81	粳
10	5.10	3.40	3.50	1.50	17.34	小豆
粒平均	5.15	3.15	2.40	1.63	16.22	

新保遺跡 大溝
B 溝 古墳前期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.60	3.00	2.30	1.86	16.80	稔実した粒
2	5.50	3.10	2.20	1.77	17.05	
3	5.50	3.20	2.20	1.71	17.60	
4	5.30	3.00	2.10	1.76	15.90	
5	5.30	3.10	2.20	1.70	16.43	
6	5.30	3.00	2.30	1.76	15.90	
7	5.20	3.10	2.30	1.67	16.12	
8	5.20	3.20	2.20	1.62	16.64	
9	5.10	3.10	2.20	1.64	15.81	
10	5.10	3.20	2.30	1.59	16.32	
小計	53.10	31.00	22.30	17.08	164.57	
11	5.10	3.00	2.20	1.70	15.30	
12	5.10	3.10	2.30	1.64	15.81	厚さ焼け太り
13	5.10	3.00	2.20	1.70	15.30	
14	5.10	2.60	2.00	1.96	13.26	横焼けぶくれ
15	5.00	3.30	2.20	1.51	16.50	
16	5.00	3.00	2.00	1.66	15.00	
17	5.00	3.10	2.20	1.61	15.50	
18	5.00	2.80	1.40	1.78	14.00	未熟粒
19	5.00	2.20	2.00	2.27	11.00	同上
20	5.00	2.30	1.80	2.17	11.50	同上
小計	50.40	28.40	20.30	18.00	143.17	
21	5.00	3.00	2.10	1.66	15.00	
22	5.00	2.70	1.90	1.85	13.50	
23	5.00	2.90	2.10	1.72	14.50	
24	4.90	2.70	2.20	1.81	13.23	
25	4.90	2.90	2.00	1.68	14.21	
26	4.90	2.80	1.90	1.75	13.72	
27	4.90	2.70	1.80	1.81	13.23	
28	4.80	3.10	2.20	1.54	14.88	
29	4.80	3.10	2.00	1.54	14.88	
30	4.80	2.90	2.20	1.65	13.92	
小計	49.00	28.80	20.40	17.01	141.07	
31	4.80	2.80	2.20	1.71	13.44	
32	4.80	2.80	2.10	1.71	13.44	
33	4.80	2.90	1.80	1.65	13.92	
34	4.80	2.80	1.70	1.71	13.44	
35	4.80	2.70	2.00	1.77	12.96	
36	4.80	3.10	2.00	1.54	14.88	
37	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44	
38	4.80	2.90	2.10	1.65	13.92	
39	4.80	2.80	1.90	1.71	13.44	
40	4.80	2.80	2.10	1.71	13.44	
小計	48.00	28.40	19.90	16.87	136.32	
41	4.80	3.00	1.90	1.60	14.40	横一部欠損
42	4.80	2.60	2.00	1.84	12.48	
43	4.80	2.40	1.80	2.00	11.52	横焼けぶくれ
44	4.70	3.30	2.40	1.42	15.51	厚さ焼け太り
45	4.70	3.20	2.00	1.46	15.04	

10 新保遺跡出土米粒、その他

46	4.70	3.20	2.20	1.46	15.04	
47	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
48	4.70	2.90	2.00	1.62	13.63	
49	4.70	2.80	2.30	1.67	13.16	厚さ焼け太り
50	4.70	2.80	2.30	1.67	13.16	同上
小計	47.30	29.20	20.90	16.30	138.04	
51	4.70	2.80	2.10	1.67	13.16	
52	4.70	2.70	2.10	1.74	12.69	
53	4.70	2.70	2.20	1.74	12.69	
54	4.70	2.70	1.80	1.74	12.69	
55	4.70	2.50	2.20	1.88	11.75	
56	4.60	3.30	2.30	1.39	15.18	横焼け太り
57	4.60	3.10	2.10	1.48	14.26	
58	4.60	3.00	2.30	1.53	13.80	
59	4.60	3.00	2.10	1.53	13.80	
60	4.60	3.00	1.80	1.53	13.80	
小計	46.50	28.80	21.00	16.23	133.82	
61	4.60	2.90	2.00	1.58	13.34	
62	4.60	2.90	2.00	1.58	13.34	
63	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	
64	4.60	2.80	1.80	1.64	12.88	
65	4.60	2.80	1.90	1.64	12.88	
66	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	
67	4.60	2.70	2.10	1.70	12.42	
68	4.60	2.70	2.10	1.70	12.42	
69	4.60	2.40	2.10	1.91	11.04	
70	4.60	2.40	2.10	1.91	11.04	
小計	46.00	27.20	20.10	16.94	125.12	
71	4.60	2.40	2.10	1.91	11.04	
72	4.60	2.20	1.90	2.09	10.12	
73	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
74	4.50	2.90	1.70	1.55	13.05	
75	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
76	4.50	2.80	2.10	1.60	12.60	
77	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
78	4.50	2.80	1.50	1.60	12.60	不稔粒
79	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	
80	4.50	2.40	1.90	1.87	10.80	未熟粒
小計	45.20	26.70	19.20	17.05	120.61	
81	4.50	2.40	1.20	1.87	10.80	未熟粒
82	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
83	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
84	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
85	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
86	4.40	3.00	2.20	1.46	13.20	
87	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	
88	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	
89	4.40	2.80	2.20	1.57	12.32	
90	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	胴切れ
小計	44.10	28.70	20.00	15.38	126.52	
91	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	
92	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	同上
93	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	同上

94	4.40	2.70	2.20	1.62	11.88	
95	4.40	2.70	1.90	1.62	11.88	
96	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	
97	4.40	2.60	2.10	1.69	11.44	
98	4.40	2.40	1.90	1.83	10.56	
99	4.40	2.40	2.00	1.83	10.56	
100	4.40	2.40	1.90	1.83	10.56	
小計	44.00	25.90	20.00	16.97	113.96	
101	4.40	2.10	1.90	2.09	9.24	未熟粒
102	4.40	2.40	1.90	1.83	10.56	同上
103	4.30	3.00	2.20	1.43	12.90	
104	4.30	2.80	1.90	1.53	12.04	
105	4.30	2.80	2.20	1.53	12.04	
106	4.30	2.80	1.80	1.53	12.04	
107	4.30	2.80	2.00	1.53	12.04	焼け太り
108	4.30	2.70	1.90	1.59	11.61	
109	4.30	2.60	2.00	1.65	11.18	
110	4.30	2.50	1.50	1.72	10.75	未熟粒
小計	43.20	26.50	19.50	16.43	114.40	
111	4.30	2.50	1.70	1.72	10.75	未熟粒
112	4.30	2.50	1.60	1.72	10.75	同上
113	4.30	2.50	1.70	1.72	10.75	同上
114	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
115	4.30	2.40	1.90	1.79	10.32	
116	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
117	4.30	2.40	1.90	1.79	10.32	
118	4.30	2.30	2.00	1.86	9.89	
119	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	
120	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
小計	42.80	25.30	18.80	17.02	108.20	
121	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
122	4.20	2.90	2.10	1.44	12.18	
123	4.20	2.90	1.90	1.44	12.18	
124	4.20	2.80	2.00	1.50	11.76	
125	4.20	2.80	2.00	1.50	11.76	
126	4.20	2.80	2.10	1.50	11.76	
127	4.20	2.70	2.20	1.55	11.34	
128	4.20	2.70	2.20	1.55	11.34	
129	4.20	2.70	2.30	1.55	11.34	
130	4.20	2.70	1.80	1.55	11.34	
小計	42.00	27.90	20.60	15.02	117.18	
131	4.20	2.60	2.00	1.61	10.92	
132	4.20	2.60	1.60	1.61	10.92	未熟粒
133	4.20	2.60	2.00	1.61	10.92	
134	4.20	2.50	2.00	1.68	10.50	
135	4.20	2.20	1.60	1.90	9.24	未熟粒
136	4.20	2.20	1.70	1.90	9.24	同上
137	4.20	2.00	1.60	2.10	8.40	同上
138	4.10	2.90	2.20	1.41	11.89	
139	4.10	2.90	1.70	1.41	11.89	
140	4.10	2.90	2.20	1.41	11.89	厚さ焼け太り
小計	41.70	25.40	18.60	16.64	105.81	
141	4.10	2.80	2.30	1.46	11.48	厚さ焼け太り

142	4.10	2.70	2.00	1.51	11.07	
143	4.10	2.60	2.00	1.57	10.66	
144	4.10	2.40	1.70	1.70	9.84	
145	4.10	2.20	1.50	1.86	9.02	未熟粒
146	4.10	2.10	1.40	1.95	8.61	同上
147	4.10	2.00	1.40	2.05	8.20	同上
148	4.00	2.90	2.10	1.37	11.60	
149	4.00	2.70	2.00	1.48	10.80	
150	4.00	2.60	1.70	1.53	10.40	
小計	40.70	25.00	18.10	16.48	101.68	
151	4.00	2.40	1.60	1.66	9.60	
152	4.00	2.40	2.00	1.66	9.60	
153	4.00	2.40	1.80	1.66	9.60	
154	4.00	2.40	1.70	1.66	9.60	
155	4.00	2.30	1.70	1.73	9.20	
156	3.90	2.60	1.90	1.50	10.14	
157	3.90	2.60	1.40	1.50	10.14	未熟粒
158	3.90	2.20	1.40	1.77	8.58	同上
159	3.80	2.70	2.10	1.40	10.26	胴切れ
160	3.80	2.20	2.10	1.72	8.36	厚さ焼け太り
小計	39.30	24.20	17.70	16.26	95.08	
161	3.80	2.40	2.00	1.58	9.12	
162	3.70	2.30	1.30	1.61	8.51	未熟粒
163	3.60	2.30	2.00	1.57	8.28	
164	3.60	2.20	2.00	1.64	7.92	厚さ焼け太り
165	3.60	2.30	1.40	1.57	8.28	
166	3.60	2.20	2.00	1.64	7.92	
167	3.50	2.40	1.80	1.46	8.40	未熟粒
小計	25.40	16.10	12.50	11.07	58.43	
合計	748.70	453.50	329.90	276.75	2,043.98	
平均	4.48	2.72	1.98	1.65	12.19	

14	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80	
15	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	幅焼けぶくれ
16	4.50	2.80	2.10	1.60	12.60	
17	4.50	2.80	2.20	1.60	12.60	
18	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	胴切れ
19	4.50	2.60	1.90	1.73	11.70	
20	4.50	2.70	2.10	1.66	12.15	
小計	45.90	28.20	21.20	16.29	129.54	
21	4.40	2.70	2.10	1.62	11.88	
22	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	
23	4.40	2.60	2.10	1.69	11.44	
24	4.40	2.40	2.00	1.83	10.56	
25	4.30	2.80	2.10	1.53	12.04	
26	4.30	2.60	2.10	1.65	11.18	
27	4.30	2.70	1.70	1.59	11.61	
28	4.30	2.40	1.60	1.79	10.32	やや未熟
29	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
30	4.20	2.50	1.80	1.68	10.50	
小計	43.30	26.00	19.70	16.68	112.61	
31	4.20	2.70	1.90	1.55	11.34	
32	4.10	2.40	2.20	1.70	9.84	幅焼けぶくれ
33	4.10	2.40	1.80	1.70	9.84	
34	4.00	2.60	2.00	1.53	10.40	
35	4.00	2.20	1.80	1.81	8.80	未熟粒
36	3.90	2.80	2.00	1.39	10.92	
37	3.80	2.70	2.20	1.40	10.26	
38	3.80	2.40	2.00	1.58	9.12	
39	3.50	2.10	1.70	1.66	7.35	
小計	35.40	22.30	17.60	14.32	87.87	
合計	174.70	105.30	79.70	64.87	474.34	
平均	4.48	2.70	2.04	1.66	12.10	

新保遺跡 大溝
2 B 溝

弥生後期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.50	2.60	2.20	2.11	14.30	長粒、胚部欠
2	5.10	2.90	2.00	1.75	14.79	
3	5.00	3.40	2.40	1.47	17.00	
4	5.00	3.30	2.20	1.51	16.50	
5	5.00	3.10	2.20	1.61	15.50	
6	5.00	3.20	2.20	1.56	16.00	
7	5.00	2.60	2.20	1.92	13.00	
8	4.90	2.70	2.00	1.81	13.23	
9	4.80	2.60	1.80	1.84	12.48	
10	4.80	2.40	2.00	2.00	11.52	
小計	50.10	28.80	21.20	17.58	144.32	
11	4.80	3.00	2.20	1.60	14.40	
12	4.80	3.00	2.40	1.60	14.40	
13	4.70	2.70	2.10	1.74	12.69	

新保遺跡 大溝
C 溝

弥生後期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.30	3.20	2.20	1.65	16.96	
2	5.30	3.10	2.40	1.70	16.43	胴切れ
3	5.30	3.00	2.00	1.76	15.90	胚残る
4	5.30	3.00	2.10	1.76	15.90	
5	5.20	3.40	2.00	1.53	17.68	
6	5.20	3.00	2.10	1.73	15.60	
7	5.20	3.00	2.30	1.73	15.60	
8	5.20	3.00	2.10	1.73	15.60	
9	5.20	3.00	2.00	1.73	15.60	幅焼けぶくれ
10	5.20	2.80	2.20	1.85	14.56	
小計	52.40	30.50	21.40	17.17	159.83	
11	5.20	2.70	2.20	1.92	14.04	
12	5.10	3.40	1.80	1.50	17.34	やや未熟
13	5.10	3.10	2.30	1.64	15.81	
14	5.10	3.00	2.10	1.70	15.30	幅焼けぶくれ

10 新保遺跡出土米粒、その他

15	5.10	2.90	2.20	1.75	14.79	
16	5.10	2.90	2.20	1.75	14.79	
17	5.10	2.90	2.00	1.75	14.79	
18	5.10	2.90	2.00	1.75	14.79	
19	5.00	3.40	2.40	1.47	17.00	
20	5.00	3.30	2.10	1.51	16.50	
小計	50.90	30.50	21.30	16.74	155.15	
21	5.00	3.10	2.10	1.61	15.50	厚さ焼け太り
22	5.00	3.10	2.50	1.61	15.50	
23	5.00	3.10	2.20	1.61	15.50	
24	5.00	3.00	1.80	1.66	15.00	
25	5.00	2.90	2.00	1.72	14.50	
26	5.00	2.90	2.20	1.72	14.50	
27	5.00	2.70	2.20	1.85	13.50	
28	5.00	2.50	2.10	2.00	12.50	厚さ焼け太り
29	5.00	2.50	2.40	2.00	12.50	
30	5.00	2.20	1.70	2.27	11.00	未熟粒
小計	50.00	28.00	21.20	18.05	140.00	
31	4.90	3.10	2.00	1.58	15.19	
32	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	
33	4.90	2.80	2.20	1.75	13.72	
34	4.90	2.80	2.00	1.75	13.72	
35	4.90	2.70	2.00	1.81	13.23	
36	4.90	2.70	2.00	1.81	13.23	胚部焼けふくれ
37	4.80	3.10	2.20	1.54	14.88	
38	4.80	3.00	2.10	1.60	14.40	
39	4.80	3.00	2.40	1.60	14.40	
40	4.80	2.90	2.10	1.65	13.92	
小計	48.60	29.10	21.00	16.72	141.39	
41	4.80	2.70	2.20	1.77	12.96	胴切れ
42	4.80	2.60	2.10	1.84	12.48	
43	4.70	3.10	2.30	1.51	14.57	厚さ焼け太り
44	4.70	3.00	1.90	1.56	14.10	
45	4.70	2.90	1.80	1.62	13.63	
46	4.70	2.80	2.10	1.67	13.16	
47	4.70	2.60	1.90	1.80	12.22	
48	4.70	2.60	2.20	1.80	12.22	厚さ焼け太り
49	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80	
50	4.60	3.00	1.90	1.53	13.80	
小計	47.00	28.30	20.60	16.63	132.94	
51	4.60	2.90	2.00	1.58	13.34	
52	4.60	2.90	1.90	1.58	13.34	
53	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	
54	4.60	2.80	1.90	1.64	12.88	
55	4.60	2.70	2.00	1.70	12.42	
56	4.60	2.60	1.80	1.76	11.96	未熟粒
57	4.60	2.50	1.90	1.84	11.50	
58	4.60	2.20	1.30	2.09	10.12	未熟粒
59	4.50	2.90	2.10	1.55	13.05	厚さ焼け太り
60	4.50	2.60	1.70	1.73	11.70	
小計	45.80	26.90	18.60	17.11	123.19	
61	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	
62	4.50	2.50	2.00	1.80	11.25	

63	4.50	2.40	2.10	1.87	10.80	肌面剥落
64	4.50	2.30	2.10	1.95	10.35	同上
65	4.50	2.20	1.30	2.04	9.90	未熟粒
66	4.40	3.00	2.10	1.46	13.20	
67	4.40	2.90	2.20	1.51	12.76	
68	4.40	2.70	2.20	1.62	11.88	
69	4.40	2.70	2.20	1.62	11.88	
70	4.40	2.30	1.90	1.91	10.12	
小計	44.50	25.60	20.10	17.51	113.84	
71	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61	表面剥落穴
72	4.30	2.50	2.00	1.72	10.75	同上
73	4.30	2.40	1.90	1.79	10.32	同上
74	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
75	4.30	2.30	2.20	1.86	9.89	
76	4.30	2.30	1.50	1.86	9.89	
77	4.30	2.30	1.90	1.86	9.89	
78	4.20	2.90	2.20	1.44	12.18	
79	4.20	2.90	2.00	1.44	12.18	
80	4.20	2.60	2.20	1.61	10.92	
小計	42.70	25.30	19.90	16.96	107.95	
81	4.20	2.60	2.30	1.61	10.92	厚さ焼け太り
82	4.20	2.50	1.80	1.68	10.50	
83	4.20	2.40	2.00	1.75	10.08	
84	4.20	2.30	1.80	1.82	9.66	
85	4.20	2.20	1.50	1.90	9.24	未熟粒
86	4.20	2.20	1.80	1.90	9.24	同上
87	4.10	2.90	2.10	1.41	11.89	腹部焼け太り
88	4.10	2.70	1.90	1.51	11.07	
89	4.10	2.70	2.00	1.51	11.07	
90	4.10	2.50	1.70	1.64	10.25	
小計	41.60	25.00	18.90	16.73	103.92	
91	4.10	2.40	1.60	1.70	9.84	
92	4.10	2.20	1.50	1.86	9.02	未熟粒
93	4.00	2.90	2.20	1.37	11.60	
94	4.00	2.60	1.80	1.53	10.40	
95	4.00	2.50	1.40	1.60	10.00	未熟粒
96	4.00	2.40	1.70	1.66	9.60	
97	4.00	2.40	1.50	1.66	9.60	未熟粒
98	4.00	2.20	2.00	1.81	8.80	
99	3.90	2.40	1.70	1.62	9.36	
100	3.90	2.20	1.60	1.77	8.58	未熟粒
小計	40.00	24.20	17.00	16.58	96.80	
合計	463.50	273.40	200.00	170.20	1,275.01	
平均	4.64	2.73	2.00	1.70	12.67	

新 保 遺 跡 大溝
C溝 F-7、8G 弥生後期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.40	2.50	2.00	2.16	13.50	菱形
2	5.30	2.90	2.30	1.82	15.37	
3	5.30	2.70	2.00	1.96	14.31	

4	5.20	2.60	2.10	2.00	13.52	変形	
5	5.10	2.60	2.10	1.96	13.26		
6	5.10	2.90	2.10	1.75	14.79		
7	4.30	2.30	2.00	1.86	9.89		
8	4.90	3.20	2.50	1.53	15.68		
9	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44		
10	4.60	2.60	1.80	1.76	11.96		
小計	50.00	27.10	20.90	18.51	135.72		
平均	5.00	2.71	2.09	1.85	13.55		
11	4.60	2.40	2.00	1.91	11.04		未熟粒
12	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50		
13	4.50	2.10	1.40	2.14	9.45		
14	4.40	2.60	1.80	1.69	11.44		
15	4.30	2.40	1.80	1.79	10.32		
16	4.00	2.40	1.70	1.66	9.60		
17	3.90	2.40	1.70	1.62	9.36		
18	3.60	2.20	1.60	1.63	7.92		
19	(3.90)	2.40	2.00	—	—	断片	
20	(3.80)	2.80	1.80	—	—	断片	
小計	33.80	19.50	14.10	13.94	82.63		
平均	4.23	2.44	1.76	1.73	10.32	18粒平均	
合計	83.80	46.60	35.00	32.45	218.35		
平均	4.66	2.59	1.94	1.80	12.07		

新保遺跡 大溝
D 溝

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.40	3.00	2.20	1.80	16.20	焼け太り
2	5.40	3.20	2.20	1.68	17.28	
3	5.20	2.80	2.20	1.85	14.56	
4	5.10	5.00	1.80	1.70	15.30	
5	5.10	2.80	2.40	1.82	14.28	
6	4.90	3.10	2.30	1.58	15.19	
7	4.80	2.90	2.00	1.65	13.92	
8	4.80	2.70	1.80	1.77	12.96	
9	4.70	3.00	2.10	1.56	14.10	
10	4.60	3.10	2.30	1.48	14.26	
小計	50.00	29.60	21.30	16.89	148.05	
11	4.60	3.10	2.30	1.48	14.26	厚さ焼け太り 同上 未熟粒
12	4.60	2.90	2.20	1.58	13.34	
13	4.60	2.80	2.40	1.64	12.88	
14	4.60	2.80	2.40	1.64	12.88	
15	4.60	2.40	1.50	1.91	11.04	
16	4.50	2.90	2.00	1.55	13.05	
17	4.50	2.90	1.90	1.55	13.05	
18	4.50	2.80	2.00	1.60	12.60	
19	4.50	2.40	1.60	1.87	10.80	
20	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	
小計	45.40	28.00	20.30	16.28	127.10	未熟粒

21	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	未熟粒 胚部焼けぶくれ 胴切れ 未熟粒焼け太り
22	4.40	2.50	1.50	1.76	11.00	
23	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61	
24	4.30	2.50	1.80	1.72	10.75	
25	4.20	2.40	1.90	1.75	10.08	
26	4.20	2.10	1.70	2.00	8.82	
27	4.10	2.40	2.00	1.70	9.84	
28	4.10	2.40	1.80	1.70	9.84	
29	4.00	2.80	1.90	1.42	11.20	
30	4.00	2.60	1.80	1.53	10.40	
小計	42.00	25.00	18.40	16.86	104.98	
31	3.90	2.30	1.60	1.69	8.97	未熟粒
32	3.80	2.70	1.60	1.40	10.26	
33	3.80	2.20	1.50	1.72	8.36	
小計	11.50	7.20	4.70	4.81	27.59	
合計	148.90	89.80	64.70	54.84	407.72	
平均	4.51	2.72	1.96	1.66	12.27	

新保遺跡 大溝
E 溝

弥生後期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.40	3.30	2.20	1.63	17.82	
2	5.40	3.00	2.20	1.80	16.20	
3	5.10	3.20	2.40	1.59	16.32	
4	5.10	3.00	2.10	1.70	15.30	
5	5.00	2.50	2.00	2.00	12.50	
6	5.00	2.90	2.20	1.72	14.50	
7	5.00	2.70	2.00	1.85	13.50	
8	5.00	2.60	2.00	1.92	13.00	
9	4.90	3.10	1.60	1.58	15.19	
10	4.80	2.50	2.00	1.92	12.00	
小計	50.70	28.80	20.70	17.71	146.33	
11	4.80	2.60	1.70	1.84	12.48	未熟粒 焼け太り変形
12	4.80	2.70	2.00	1.77	12.96	
13	4.70	2.80	2.00	1.67	13.16	
14	4.60	2.70	2.20	1.70	12.42	
15	4.60	2.80	1.80	1.64	12.88	
16	4.60	2.20	1.50	2.09	10.12	
17	4.50	2.60	2.00	1.73	11.70	
18	4.50	2.10	2.00	2.14	9.45	
19	4.40	2.30	1.70	1.91	10.12	
20	4.40	2.70	1.90	1.62	11.88	
小計	45.90	25.50	18.80	18.11	117.17	
21	4.40	2.50	1.90	1.76	11.00	
22	4.30	2.40	2.00	1.79	10.32	
23	4.30	2.90	1.80	1.48	12.47	
24	4.20	2.80	1.90	1.50	11.76	
25	4.20	2.70	1.80	1.55	11.34	
26	4.20	2.70	1.70	1.55	11.34	
27	4.10	2.60	1.70	1.57	10.66	

10 新保遺跡出土米粒、その他

28	4.00	2.40	2.00	1.66	9.60	幅焼けぶくれ
29	4.90	2.70	2.00	1.81	13.23	
小計	38.60	23.70	16.80	14.67	101.72	
合計	135.20	78.00	56.30	50.49	365.22	
平均	4.66	2.69	1.94	1.73	12.54	

新保遺跡 11号方形周溝墓 弥生後期
第3主体部

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	4.20	2.40	1.85	1.75	10.08	

新保遺跡 11号方形周溝墓 弥生後期
第4主体部

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	4.30	2.40	1.75	1.79	10.32	縦割れ粒
2	(3.70)	2.20	2.00	1.68	8.14	

新保遺跡 大溝
F 溝

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.00	2.50	2.00	2.00	12.50	

有馬条里遺跡 S J 347 弥生後期

No	L	B	Th	L/B	L×B	Remarks
1	5.80	2.60	1.90	2.23	15.08	
2	5.80	2.60	1.70	2.23	15.08	
3	5.60	2.90	1.70	1.93	16.24	
4	5.50	2.40	2.00	2.29	13.20	
5	5.40	2.40	1.80	2.25	12.96	
6	5.40	2.60	1.90	2.07	14.04	
7	5.40	2.50	1.80	2.16	13.50	
8	5.40	2.50	1.80	2.16	13.50	
9	5.30	2.50	2.00	2.12	13.25	
10	5.30	2.60	1.80	2.03	13.78	
小計	54.90	25.60	18.40	21.47	140.63	
11	5.30	2.70	1.80	1.96	14.31	
12	5.20	2.60	1.80	2.00	13.52	
13	5.20	2.50	1.80	2.08	13.00	
14	5.20	2.80	1.80	1.85	14.56	
15	5.20	2.50	1.70	2.08	13.00	
16	5.20	2.70	1.70	1.92	14.04	
17	5.10	2.70	1.70	1.88	13.77	
18	5.10	2.40	1.80	2.12	12.24	
19	5.10	2.40	2.00	2.12	12.24	
20	5.10	2.40	1.60	2.12	12.24	

小計	51.70	25.70	17.70	20.13	132.92	
21	5.10	2.30	1.60	2.21	11.73	
22	5.00	2.80	2.00	1.78	14.00	
23	5.00	2.70	2.00	1.85	13.50	
24	5.00	2.60	1.60	1.92	13.00	
25	5.00	2.60	1.70	1.92	13.00	
26	5.00	2.50	1.70	2.00	12.50	
27	5.00	2.50	1.70	2.00	12.50	
28	5.00	2.50	1.80	2.00	12.50	
29	5.00	2.40	1.60	2.08	12.00	
30	5.00	2.40	1.70	2.08	12.00	
小計	50.10	25.30	17.40	19.84	126.73	
31	5.00	2.40	1.70	2.08	12.00	破損
32	5.00	2.40	1.80	2.08	12.00	
33	5.00	2.40	1.50	2.08	12.00	
34	5.00	2.20	2.10	2.27	11.00	
35	4.90	2.50	1.90	1.96	12.25	
36	4.90	2.40	1.60	2.04	11.76	
37	4.90	2.40	1.70	2.04	11.76	
38	4.90	2.40	1.80	2.04	11.76	
39	4.80	2.60	1.80	1.84	12.48	
40	4.80	2.40	1.70	2.00	11.52	
小計	49.20	24.10	17.60	20.43	118.53	
41	4.80	2.40	1.50	2.00	11.52	破損
42	4.80	2.30	1.60	2.08	11.04	
43	4.80	2.20	1.40	2.18	10.56	
44	4.80	2.20	1.60	2.18	10.56	
45	4.70	2.80	1.70	1.67	13.16	
46	4.70	2.50	1.80	1.88	11.75	
47	4.60	2.60	1.60	1.76	11.96	
48	4.60	2.60	2.00	1.76	11.96	
49	4.60	2.60	1.70	1.76	11.96	
50	4.60	2.20	2.00	2.09	10.12	
小計	47.00	24.40	16.90	19.36	114.59	
51	4.60	2.20	2.00	2.09	10.12	
52	4.50	2.20	1.80	2.04	9.90	
53	4.50	2.20	2.00	2.04	9.90	
54	4.50	2.30	1.80	1.95	10.35	
55	4.40	2.30	1.70	1.91	10.12	
56	4.40	2.40	1.10	1.83	10.56	
57	4.30	2.30	1.70	1.86	9.89	
58	4.30	2.40	1.70	1.79	10.32	
59	4.20	2.40	1.70	1.75	10.08	
60	5.50	2.60	1.70	2.11	14.30	
小計	45.20	23.30	17.20	19.37	105.54	
合計	298.10	148.40	105.20	120.60	738.94	
平均	4.97	2.47	1.75	2.01	12.28	

註 L/B欄平均はL欄の平均をB欄の平均で除した数、L×B欄平均は同様にL欄平均×B欄平均である。L/B欄合計の平均、L×B欄合計の平均は第10表の平均欄を参照されたい。

11 新保遺跡出土の脊椎動物遺存体・骨角牙製品

金子 浩 昌

新保遺跡出土の脊椎動物遺存体

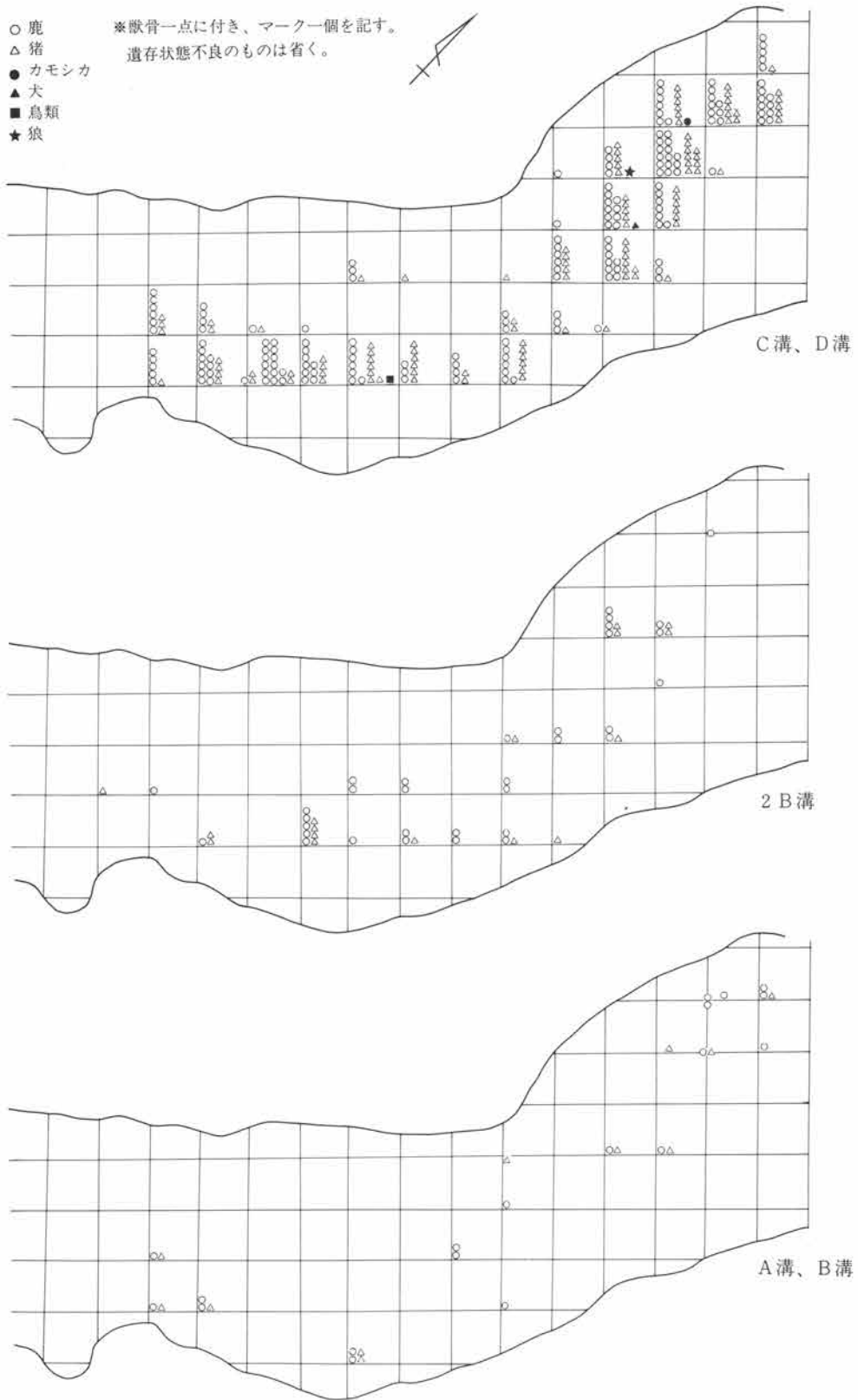
はじめに——遺跡におけるイノシシ、シカの出土状況——

すでに述べられているように、本遺跡における動物の骨の出土は、AからEに至るまでの名称を付けられた大溝からのものであって、それぞれの時期に属する骨が採集されている。ただ、その大部分はC・D溝とされる弥生時代後期の前半期（D溝：古期、C溝：新期に分けられる）に形成された溝からの出土であって、それ以後の弥生後期後半期の2B溝、古墳時代前期のA・B溝からの出土は極めて少ないものであった。

溝内の骨の出土状況は、別図に示した分布図によってよく示されるように、溝のほぼ全域にわたって出土し、その様相は木質部、木製品の出土する様子と変わりなかったようである。このことからみると、出土した動物骨あるいは骨角牙製品などの生活用具も、この大溝中にすてられたものと考えられる。動物骨はもちろん、骨角器類など完存するものが極めて少ないのはそのためであろう。そして、それらに水磨などの痕跡をあまりみることがないところから、捨てられた以後水中に没し、流されるということは殆どなかったのではないかと考えられる。しかし、イノシシ、シカなどの頭蓋、下顎骨の破損は著しく、原形を保つものは極めて少なかった。頭蓋の例では、かろうじて上顎部を保つ一例が出土しているが、土塊から摘取することは不可能な状態であった。この点、筆者がかつて調査した大阪府四ツ池遺跡の骨では、かなり保存の良い頭蓋、下顎骨などが出土していた。おそらくこれは溝の規模、骨の扱い方の違いによるのであろう。この地域のイノシシの遺骸には、これを解体したのちに、これを集めて竿などにかける風習があった。このために下顎骨などが完全な形で出土することが少なくない。本遺跡の場合は、同じ弥生期の遺跡であったが、こうしたことを推測させるような骨の保存状態を確認することができなかった。しかし、残された骨の部位から、特定の骨が特別に扱われたことは確かであり注目される場所であった。これについては本文中で述べている。また、有角把頭などの興味ある製品の出土も多い。本遺跡出土の動物関係諸遺物が、この時期の文化の研究に果す役割は極めて大きいものがあるといわねばならないであろう。動物整理に当っては丹羽百合子氏の協力があり、また集計作業には野崎哲令君の協力を得た。記して御礼を申し上げたい。

新保遺跡出土の脊椎動物遺存体種名表（第14表）

脊椎動物部門	Phylum VERTEBRATE
鳥綱	Class Aves
ガンカモ目	Order Anseriformes
ガンカモ科	Family Anatidae
ガン類	<i>Anser sp.</i>
哺乳綱	Class Mammalia
食肉目	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
オオカミ	<i>Canis lupus</i>



第49図 溝別獣骨分布図

キツネ
 タヌキ
 クマ科
 ツキノワグマ
 偶蹄目
 イノシシ科
 イノシシ
 シカ科
 ニホンジカ

Vulpes vulpes
Nyctereutes procyonoides
 Family Ursidae
Selenarctos thibetanus
 Order Artiodactyla
 Family Suidae
Sus scrofa
 Family Cervidae
Cervus nippon

以下、動物骨の特徴となる点について述べておきたい。本文中の動物骨の計測値は特に記していない限り、すべてmmで表わされるものである。

I 鳥 類

ガン類

右上腕骨の骨幹部分をのこすのみのものである。断片的な骨のみであるが、形態、大きさからガン類とみられる。

鳥類とされた骨はこの1点のみで、獣骨の多い割には如何にも少ない出土である。骨質の脆弱な鳥骨のために骨が採集されなかったとみるべきなのであろう。

II 哺 乳 類

第15表 イヌ下顎骨計測表

下 顎 骨	下顎骨 (1)	下顎骨 (2)	右	下顎骨 (3)
C {	近遠心径	7.9		
	頬舌径	5.8		
M ₁ {	近遠心径	18.6	20.7	17.4
	頬舌径	7.2	8.5	7.2
M ₂ {	近遠心径	8.5	8.5	
	頬舌径	6.2	6.4	
下顎体高(M ₁ 後部)	21.0	18.6		18.0
下顎体高(P ₂ ~3間)	17.0	—		14.3
下顎体厚(M ₁ 中央)	9.8	11.3		9.2
咬筋窩深	6.2			4.0
四肢骨				
脛骨(中央 前後径×左右径)		10.2×11.3		

1 イヌ

右下顎骨1 (PL.25上4) 下顎枝部分のみを欠損する。C・P₁~P₄・M₁・M₂を残す。

左下顎骨2 (PL.25上5) P₄, M₁のみを残し、下顎骨体もその近域をのこすのみの破片。

左M₂ (PL.25上6) このM₂は下顎骨(PL.25上5)とは別個体のものであり、下顎骨(PL.25上4)とも違う個体である。

右下顎骨3 (PL.25上3) 骨体は下顎枝部を欠く他はほぼこのもの、破損部分も大きい。おそらく別記のどの下顎骨とも組み合わせられない標本である。

右上腕骨(PL.25上9) 骨体の中間部以下、遠位端は欠損。

左脛骨(PL.25上10) 骨体部分のみで、遠、近位両端を欠く。

イヌとされた骨は、以上の下顎骨と四肢骨の断片であった。しかし、下顎骨からみる限り、4点とも別の個体のものであり、比較的多くの骨をのこしていたということがいえるのであろう。下顎骨の大きさも、大・中・小の3段階の大きさがあり、歯の咬耗の状態も、強・弱その中間と個体差がみられた。

下顎骨(PL.25上4)は、犬歯とM₁、M₂にかなりの咬耗のみられる標本でもっとも保存がよい。咬筋窩が深く雄らしい形質をもつが、臼歯、骨体はやや小さい。同(PL.25上5)は、M₁の原丘頂部に僅かに咬耗のみるもの、M₁は大きく、骨体ももっとも大きい、おそらく雄の個体のものであろう。同(PL.25上6)はM₂のみをのこす小断片であるが、M₂の咬耗はほとんどみられない。同(PL.25上3)はもっとも小さい標本で、M₁の咬耗もみられない、おそらく雌の個体のものであろう。

以上の下顎骨は縄文時代に飼われていた小型犬の下顎骨形質をよく受け継いでいるものと言ってよい。本遺跡において多数出土したイノシシ、シカなどを中心とする狩猟活動が、縄文的な伝統の下に行われていたこともまた推定することができよう。なお、こうした犬の歯牙、骨格が、かなり断片的なものとなって出土することに関しては、何らかの意味があるのか、例えばイヌを食べる風習があったということが問題になる。この点に関しては、出土した標本にみる限り、これらの骨格に食用に供するための解体痕跡をみることはできない。弥生期におけるイヌの埋葬例も知られており、やはりここでも死後埋葬などの処置がとられたものではなかろうか。それが、二次的な攪乱によって埋葬骨格がくずされ、一般の骨格中に混在するに至ったものと思われる。

オオカミ

右下顎犬歯(PL.25上2) ほぼ完存する標本

犬歯 最大長12.3 同幅径8.3 同高(先端より冠部外側中央) 23.4 全高47.5

右脛骨骨幹部、後面の外側、中央よりやや上にあく神経孔位置で幅19.5

犬歯歯根末端はほとんど閉鎖しているが、歯冠には咬耗を認めることができない。上述したイヌの歯牙に比べてはるかに大きく、オオカミの犬歯であることは疑いない。関東地方での縄文、弥生期の遺跡から出土するオオカミ犬歯の出土例は少なく、かつて東京都板橋区小豆沢貝塚(縄文後期)から出土した左下顎犬歯がある位である。本標本はこれとほぼ同程度の大きさのものであり、直良(1942)によると小豆沢例は歯冠長11.2+、歯冠幅8.0+、純歯冠高22.0+、また国立科学博物館蔵の福井県産ニホンオオカミ例とも近似する。直良(1965)によると、歯冠長(右)12.2(左)11.7、歯冠幅(右8.0、左8.1)、頬側歯冠高(左21.9:尖端磨耗)。その他に断片的な標本であったが脛骨片が出土している。大形になるもので復元すれば全長19.0以上になるものであろう。大型犬を上廻る大きさのものであり、オオカミの脛骨とみている。

縄文時代の他の例では、上記の標本よりもさらに大形の犬歯が知られているが、おそらくそれらは明治初年まで日本の各地に棲息したニホンオオカミと同じ仲間にはいる種類であったとみてよいであろう。本標本は、弥生時代の数少ない一例である。

キツネ

右下顎骨(PL.25上7) 歯はM₂のみをのこし、吻端、下顎枝などを欠損する。

大きさは既知のものと大差はないようである。骨体はやや薄く、きゃしゃな感じのする標本である。M₂も少し小さい。

タヌキ

左寛骨(PL.25上11)

腸骨上端を欠損する。骨質からみてやや若い個体のものであろうか。

ツキノワグマ

右上顎M¹ (PL.25上12) 上顎骨に残植するが、上顎骨ののこるのは歯の部分のみである。断片的な標本1個を得たのみであるが、この歯の前後にのこるP⁴とM²の歯槽の内面は比較的きれいで、埋没時にはこれらの歯がのこっていたのではないかと推測されるのである。

歯冠長18.0 歯冠幅13.5

歯牙咬耗はほとんどみられない。

イノシシ

本遺跡における代表的な獣類はイノシシとシカであって、ほぼ同じような数の歯牙、骨格を出土している。イノシシの歯牙・骨格は、ほぼ全域から同じ位の割合で出土している。

頭蓋：頭蓋としてまとまるような形で出土したものは一つもなく、側頭部が僅かに1点と他に破片1点を得たにすぎない。上顎部は、左右併せて11点が出土しており(歯牙の出土状態から推定されるものも含む)、その他に単独で出土するM³が17個あることから、総数28個の左右上顎部、10数個の頭蓋のあったことが推定されよう。頭蓋部分の少ないことはシカの場合についてもいえるが、低地性の遺跡であるために保存の条件の良くないことも理由の一つにあげられよう。しかし、それにしても比較的骨質の丈夫な側頭部などの数も少ないので、あるいは上顎骨、頭蓋底部をはずして脳髄を摘出した後の頭蓋部は別に処理されていた可能性もあろう。

脊椎骨：環椎7点を検出した他には、椎体片を得たのみで限られた出土である。

前肢

肩甲骨：3個を検出したのみである。これはシカの場合についてもいえることであって、特別な処理のあったことを推定しなければならないであろう。

上腕骨：遠位端の出土を主体として最小数17個があり、よく保存されている部位である。近位部の少ないのは、骨質の弱いこと、並びにこわされる率の高いことによるのであろう。

橈骨・尺骨：これも比較的保存の良い骨で、橈骨は近・遠位两部分を、尺骨は近位部をよく残していた。上腕骨の遠位部に比べると半数位である。

後肢

大腿骨・脛骨：骨体部の破損度が高いので、両端の残る数も少なくなる。本遺跡でもそうした傾向がみられた。

距骨・踵骨：出土率は低かったようである。

歯牙

出土した上・下顎骨の歯牙からみて、推定される最少個体数は16であり、その中で乳臼歯をもつものが2、M₃の未萌出例が1(いずれも最少個体数として)である。乳臼歯をもつものは、M₁の萌出後、M₂が未萌出の段階で生後0.5歳から1.5歳位の間のものである。またM₃の未萌出というと2.5歳位である。この位の年歳のものは、縄文時代の貝塚ではかなり出土するもので、晩期の例でM₂未萌出段階は全体の10%、M₂未萌出は30%位になる(千葉県市原市西広貝塚の例)。縄文期のものと比べて若い個体が少ないわけである。おそらくこれは、狩猟時の捕獲の条件を現わしているものであって、幼・若獣を狙うよりも、成獣を狙うといった方法があったのであろう。技術的にはそれだけ進歩したものがあったのではなかろうか。この点については、幾つかの遺跡で比較検討する必要があるであろう。

ニホンジカ

ニホンジカの骨格歯牙は調査区のほぼ全面にわたって出土しているが、特にB、2B、C溝のN～Q、D、D・E、E溝のN～Qに多く出土した。層的には、部分的に上～下層にそれぞれわけて採集されたが、その中に目立った量的な差違はなかったようである。次に骨格主要部位の出土状況についてのべる。

頭蓋：頭蓋として原形を保つような出土は一つもなかった。数片の破片と角座部分がやはり数点、そして上顎骨片が4点あり、さらに左右に分けたM³と上顎骨片を合わせて左10、右7が推定される最少の頭蓋数である。一般に頭蓋の保存は決して良好ではないが、本遺跡のように骨に残されていない例も珍しい。前頭部から頭頂、後頭部がはずされ、別に運ばれているのではないだろうか。

下顎骨：頭蓋に比べると下顎骨の方が左右ともはるかに多い。下顎骨の中には、特殊な穿孔などの行われたものもあったが、その他の特別の加工のないものは、四肢骨とともに処理されていたようである。顎骨にのこる歯牙はすべて永久歯萌出後のものであって、乳歯及び乳歯をのこす顎骨はなかった。

椎体：残される率は低かった。環椎は4個であったが、軸椎は僅かに2個であった。人手による破壊よりもイヌなどによって運び去られることが多かったのではなかろうか。

前肢

肩甲骨の遺存は極めて少なく、C溝O・Pにおいて3個があったに止まる。これに対して上腕骨は残存率が高く、特に遠位端は多くがのこされていた。橈骨・尺骨は上腕骨の半数程の出土である。ほぼ同程度ののこり方であるので、この部分は一緒に処理されたのであろう。

中手骨がまた少なくなる。骨器への利用を考えねばならないであろう。

後肢

大腿骨の遺存は少ない。これは破壊度の高いこと、つまり管状骨であり、骨髓の摘出により、壊される率が高かったといつてよい。同様に脛骨も壊されているが、遠位端の骨質が保存性の高かったことと関連しよう。

踵骨、距骨が脛骨の出土の割に多くなかったことは意外である。このことは中足骨の少ないことと関連があるかもしれない。中足骨は近・遠位端骨ともに少ない。中足骨全体が少なかったのであろう。これは中手骨と共通することで、骨器の材料となったのであろう。そして、その際に脛骨の遠位端から切られることが多かったのではないだろうか。

指・趾骨は前・後肢ともに少ない。中手・中足骨とともに別の場所に運ばれているのではないだろうか。

新保遺跡出土の脊椎動物遺存体の特徴

新保遺跡から出土した脊椎動物は、上記したように鳥綱1目1科1種、哺乳綱2目5科8種に及ぶものであった。魚類の遺存体を全く欠いた。鳥類も僅か1種であるというのは、当時の生業の活動を考えて納得し難い遺存状況であると思われる。しかし、これには低地性の遺跡であるための骨の保存条件、発掘時の微小骨の見逃しということもあろう。これらについては今後の機会に、これを補うべき調査が行われなければならないであろう。そうした問題があるにせよ、今回知られた動物遺存体の内容は、この時代の狩猟活動の様相を知る上で貴重な資料をもたらしたものといえよう。この地域において幾つもの弥生時代遺跡が調査されながら、こうした動物骨を出土した例は無く、広く関東地方の例をみても、南部の三浦半島に洞穴遺跡をみる位である。そして、東海地方の弥生諸遺跡でも量的に多かったのは沼津市丸山遺跡の例がある位で、中央山地帯の洞穴遺跡で動物骨を多量に出土する例があり（長野県唐沢岩陰）新保遺跡の場合もその立地の条件

から考えて、中央山地帯における狩猟の文化が、伝統的に伝えられていた地域であったと考えられる。ただクマ、カモシカといった種類はごく少ないので、むしろ高原性の性格を強めていた狩猟なのであろう。

狩猟対象の主体となったのは、イノシシとシカであって、出土量の量差は多少あるもののほぼ同程度に出土し、その他の獣は極めて少なかった。この傾向は獣骨を多量に出土する近畿地方の弥生遺跡の場合と共通するが、実はこれは、縄文晩期からの特徴である。縄文晩期から弥生文化の狩猟については、その方法や獲物の扱い方に変化の生じていること、狩猟の意味を別に考えなければならないことなど筆者は別に論じたことがある。それとは別にイノシシについては、特に幼若の個体の多いことを大阪府池上遺跡において知り、これについても飼育の問題として論じたことがあったが、本遺跡の場合は特にそうした様相がうかがえる程のイノシシ幼若個体を検出することはなかった。シカもまた、成獣が主に捕獲されており、骨角は生活の用具として様々に使われていた。それらが遺物として出土する場合もあるが、肩甲骨のように骨のほとんど出土しない場合がある。おそらくト骨としてそれが用いられていた証拠であろう。そして、そのトするところは、おそらく農耕に関わるところの事柄であったろうから、この時代の狩猟も単なる縄文時代の残りというのではなく、それなりに大きな意義をもっていたといえることができるのであろう。

なお、最後になったが、本遺跡から出土した家畜関係の動物骨については、イヌがあった他には全く出土することがなかった。この時期において、例えばウマ・ウシの類がいたであろうことは、他の遺跡の確かな出土例から推測することが出来、この地の人々も飼育していた可能性はある。このような家畜遺骸の乏しい例は、筆者が前に報告した大阪府四ツ池遺跡の場合でも同じであり、ウマ・ウシに対する扱い方に特別なものがあつたのではないかと考えている。ただ、こうした家畜の飼育が数の上で決して多いものではなかったということは言えるのではなからうか。

参考文献

- 金子浩昌、牛沢百合子：池上遺跡出土の動物遺存体 池上、四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編 大阪文化財センター 1980, 1
- 金子浩昌：弥生時代の貝塚と動物遺存体、三世紀の考古学上巻、1980, 5
- 剣持輝久、西本豊弘：弥生時代の食料、狩猟、漁撈対象物、季刊 考古学 No.14 1986, 2

新保遺跡出土の骨角牙製品

本遺跡からは多くの動物諸骨に混じって少なからぬ骨角牙製品が出土した。それらの大部分はここに生活した人々によって捕獲された動物の骨角を材料としてつくられたものである。本遺跡の示す年代である弥生時代の後期にも種々の骨角製品のつくられたことは各地の遺跡においてみる通りであり、それらの内容もまた遺跡の年代、立地条件を反映させて地域による特殊な骨角器文化をつくり出している。例えば関東地方にあっては、神奈川県三浦半島方面での洞穴遺跡にみる漁撈関係の遺物を主体とするもの、同様の例は東海地方の縄文晩期から弥生時代の貝塚においてもみることができる。あるいはまた中央山地帯の例では、長野県善光寺平の弥生遺跡のように呪術具を主とした出土例もある。新保遺跡の場合は出土点数の上で必ずしもこれらの遺跡と比べて多いわけではなかったが、特徴のある骨角器文化があつたとみてよいであろう。今後新保遺跡の出土品が様々な角度から研究されていくものと思われる。

本稿の執筆に当り国立歴史民俗博物館の春成秀爾氏より関連資料の実測図をみせていただく便宜を得た。氏の御厚意に深く感謝するものである。

鏃

イノシシ犬歯製の鏃 現存長38.0 幅21.4 厚4.0 (第50図1、PL.24上8)

右側の下顎犬歯の咬合部分近い位置の舌側面をえらんでつくられたものである。やや長めの五角形で、先は三角状にはなるが2辺は直線的ではなく、凹みあるいはやや凸るような線である。底辺にあたる線はほぼ直線的のびていたものらしい。裏面にはエナメル質につづく象牙質がみえる。エナメル質面には全く研磨あるいは切断の痕をとどめないが、象牙質面には周囲をうすくし、刃部および基部には刃をつけるための研磨、あるいは矢柄にはさむための研磨が行われ、その際についた細擦痕が主として横方向につく。幅21mmに達する下顎犬歯は大形のものである。鏃をつくるに当っては、特に大形のもが使われたようである。

いわゆる牙製の鏃と呼称される製品は1点を得るに止まったが、本遺跡からは他にもイノシシの下顎犬歯の加工品があり、牙製品がかなり使用されていたことがうかがえる。イノシシ下顎犬歯で鏃をつくることは縄文時代より行われており、形態的にも幾つかの形がある。本遺跡におけるような五角形を呈する形のものもあるが多くの場合固定用の穿孔があり、また五角形あるいは三角形の底辺部に抉入がみられる。その方が固定を確実にするからである。こうした基本形態からみると、本製品はかなり簡素なつくりのものといえるのではなかろうか。あるいは未製品と言う事も考えたが、エナメル質部分を除いては研磨、摩滅のあともあり、製作途次という感も少ない。弥生時代の牙製鏃の類品が無く、形態上の特徴をこれ以上論ずることができない。とりあえず報告して後考にゆずりたい。

骨製鏃 現存長58.0 幅10.0 厚6.3 (第50図2、PL.24上10)

シカの中手骨後面の骨稜部分を使ってつくられたものである。先端の一部分を欠損している他は全形をのこす。欠損部分は一部分だけなので、全体の形をうかがうのに支障はない。長楕円形を呈し、断面の三角形になる鏃身部と細まる茎部とからなり、茎部への移行は漸移的ではあるが明瞭な茎部を認めるので「鏃」として扱った。製作は比較的単純で、シカの中手骨の後面に縦に走る骨稜部があり、その部分を縦方向に裂き、その裂き割った面を平らに整形するのが、主要な製作の工程であったろう。鏃身の先端は八状に尖らせるが、稜に当る部分は面どりをする程度の加工である。茎の部分も側面からの研磨で整形する程度の加工である。従って、鏃の中心部は、一方には骨表面がそのまま残り、一方では髓腔面がそのままV状に凹んでみられるのである。以上にみた骨製鏃は、別にのべるようなシカの中手・中足骨の加工品中に製作工程を示す遺物があり、一定の工程でつくられていたことがわかる。おそらく、実際にはこのような骨鏃がかなりの量つくられていたのであろう。

ヤス状刺突具 1 長さ63.0 幅8.0 厚3.4 (第50図3、PL.24上9)

完存品である。全体は柳葉型につくられ、きゃしゃではあるが均整のとれた形になっている。表裏ともに骨の原形をとどめる事は無く、うすい凸レンズ状に整形されている。両面には横もしくは斜め方向に細擦痕がかなりはっきりとつくが、器体の全面に一樣につくのではなく、中央部分とその左右両側に三つの面をつくりながらつけられる。この擦痕は骨器を粗い砥石の上にかすりつける時についたもので、全体の整形はおそらくこうした砥石を使って表面を研磨するといった加工で行われたものであろう。そして擦痕の方向がある程度一定性を持っているところから、ほぼ同じ方向に動かされていたことがわかる。

ヤス状刺突具 2 現存長76.8 幅9.5 厚4.7 (第50図4、PL.24上11)

全体に器体表面の荒れが目立ち、原形をうかがうのがやや困難な状態になっている製品である。しかし元の大きさはほぼこのさされているものなのであろう。シカの中手もしくは中足骨を縦に割ったものが材料となっているが、両端のいずれにも関節端をみることがないから、骨端のはずれた中間部分が使われているのであろう。全体の仕上げが薄いのも、そうした材質によるのであろう。既述のように本品は表面の腐蝕がひどく、加工面をみるのは側面部などの一部である。そのために研磨の状態、さらにそれから推定される先端・基部の区別などを明らかにすることができなかった。

中足骨の縦割加工品 現存長155.8 幅12.0 (第50図5、PL.24下6)

中足骨の内側、後方の骨稜部分を縦に割ったもので、それ以上の特別な加工痕をみることはできない。また縦割りに当って、前もって溝をつけるとか、擦り切りの痕跡をみるといったこともできなかった。そのために自然の割れではないかという疑いももたれるのであるが、とりあえずここでは加工品として扱っておく。しかし、上述した如きヤス状の加工品は、明らかにこのような骨片よりつくられたものであって、製作の第一段階を示すものとみることが可能であろう。

シカの中手・中足骨から骨器の素材をとる実例は、例えば奈良県唐古遺跡でも知られており、遠位端をきれいに輪切りにして切り取っている。その後で縦に幾つかに割っていくのである。この方法は基本的には縄文期に行われていたものであり、そのまま踏襲されているのである。本遺跡ではこうした骨端の輪切り法を示す資料を得ることはできなかったが、ここでも行われていた可能性は充分にある。

イノシシ下顎犬歯製の錐 現存長70.6 基部の幅18.8 先端現存部幅6.0 (第50図6、PL.24下3)

右側の下顎犬歯の舌側が使われる。錐の先端とみられる部分は折れ、どの程度の長さがさらにあつたものが明らかでないが、歯根の現存状態からすれば、さらに10~20mmの長さはあつたものと思われる。ただ使用によって磨滅することは考えられるので確かなことは明らかでない。基部は犬歯の末端に近いことが茶褐色を呈したエナメル質から推定することができ、イノシシの下顎犬歯のほとんど全体を使用したことが推察される。この基の部分は浅く挟り込むように切られ、その部分は手づれによる磨滅で滑らかになっている。この部分が常ににぎられ、こすられていたのであろう。この基の部分から、先端の前縁にかけて斜めに細まりながら尖っていく。全体はよく研磨され、その際の擦痕がよく残る。おそらく、その加工の工程は、先ず下顎犬歯を舌側と頬側で縦に割ることからはじまったのであろうが、生の犬歯を割るにはかなりの技術が必要としたことであろう。さらに板状になった舌側の内側を咬面部分に沿うように切り込みを入れ尖らせていったと思われる。この切り込みは犬歯の幅の $\frac{1}{2}$ 位までになったのである。

イノシシ下顎犬歯製のへら状加工品 現存長83.0 最大幅20.5 厚4.2 (第50図7、PL.24下2)

イノシシの右側下顎犬歯の舌側を使う。上記した加工品と同様に犬歯を頬、舌両面の境から分断したものの舌側が使われる。犬歯の根元の部分はほとんど使われており、従って、犬歯の先をかなりの長さで切っていることになる。切り口の幅がひろく、この部分が磨滅しているので、へら状のものとして使われていた可能性があるが、その部分が完全にこのこっていないので確かなことはいえない。研磨の痕跡は横方向(犬歯の弧に対して直行する方向)に細かい擦痕になってつき、砥石と犬歯の方向をよく示している。以上のイノシシ犬歯の加工品は原形をある程度このすものであるが、保存状態は必ずしも良くない。エナメル質部分が分

離し亀裂を生じているのである。発掘後の処置が充分でなかったことによる。加工品であるだけにこうした変形が惜まれる。

溝付け加工のあるシカ中足骨 現存長79.0 幅27.8 (第50図8、PL.24下5)

シカの左中足骨遠位部をのこすもので、骨端は欠けている。この骨端欠損がどのようにして行われたか残部のみでは明らかにし難いが、打ち割ったような痕跡もみられる。中足骨の前面と後面には、顕著な擦り切り溝が縦方向につけられ、特に前面部の3溝が著しい。中央につくのは、中足骨に元からあるIII、IV中足骨を分ける縦溝であるが、その溝はさらに深くU字状にえぐれる。溝の内側には、この溝をこすった石器の擦痕がみられ、溝底部は僅かに0.6mmの厚さをのこすのみである。その両側の溝も深いV字状のものであって、ほとんど擦り切れる状態になっていた。この標本が中足骨の下端部ほぼ $\frac{1}{2}$ 位に当る長さであるから、この中足骨の上部あるいは中央部分ではすでに擦り切れていたかも知れない。後面にも中央に走る溝があるが、この溝は浅く分断するまでには至らなかったであろう。しかし、すでに溝もつけられているので簡単に割ることはできたであろう。このような加工の方法をもってすれば、1本の中手骨あるいは中足骨から、4本の骨器素材を得ることができたはずである。そして、この標本のように規格化された加工法があったことは、このような加工法の行われた中手・中足骨は別にもあったであろうことを推測できるのである。

シカ尺骨製のへら状骨器 (第50図12、PL.24下4)

シカ尺骨の骨幹部が使われたものであるが、加工痕は明瞭でない。

紡錘車

鹿角製の紡錘車3点が出土している。ほぼ同大のもので3つとも焼けている。

1 (第50図9、PL.24上4)、2 (第50図10、PL.24上5)

径50mm程の紡錘車になる。一面は平らで、他の面は凸レンズ状にふくらむ。このふくらみ部分は角の落ちた側の面であって、多少研磨などの加工はされたと思われるが、大体落角の自然面がのこされているものと思われる。片側の平滑面は切断ののち研磨したもので、切断時の凹凸面が僅かにのこる。周囲はほとんど平滑化しているが、鹿角の凹凸の一部がのこる。

3 (第50図11、PL.24上6)

径50mm程になる大きさの紡錘車片である。上例と全く同様に片面は平滑で、他の面に角の落角面がのこる。この面は凸レンズ状に膨らむ。この膨らみ面上2箇所、周辺域から中心に向かって2箇所短かい切り込み痕がある。切り口の位置からみて、円盤を4等分するように切り込み線があったと思われる。紡錘車を鹿角の基部つまり角座部分を利用してつくる方法は弥生時代にさかに行われている。ただし、その量は多いものではなく、石製、土製にまじり、1ないし2点出土する程であり、今回の新保遺跡例も不完全品ながら3点を得た。関西方面の弥生時代遺跡の例とほぼ同程度の出土率といえよう。

鹿角製の紡錘車は鹿角の角座部分を利用することで共通しているが、細部の加工では違いがみられるようである。例えば、両面の形が、新保例のように片面が平らで、片面がふくらむ形と、両面とも扁平な加工をみせるものがある。関西方面の例は両面扁平例が多いらしく、この場合は角座骨から角を切断し、さらに骨座部分を切りとる。そして、その切り口をよく研磨する。両面扁平なものはこのように切断角からつくられたものであろう。これに対して、落角使用の場合は角座骨とすでに分離しており、そこに自然の凸面ができ

ているので、そのまま使ったのである。

穿孔と研磨面をもつシカ下顎骨（第50図13、PL.24下7）

ニホンジカの右側下顎骨を使ったものである。歯のP₂、P₄が欠けること、吻端が折れていることなどを除けば他はほとんど完存する下顎骨である。破損し易い下顎枝部分の筋突起などもよくのこされているのは、この下顎骨が特別の用に当てられたためであろう。吻端は意識的に折られたものであり、歯のP₂も抜かれたものと思われる。P₂の歯槽部分に刻みがつけられており、V字状に凹む。この刻みは舌側でみた方が明瞭である。下顎枝の中央に穿孔があり径約5mmである。その部分は下顎枝のもっとも薄くなっている場所で、穿孔に容易なことが予め考えられたのであろう。下顎骨の全体で注意されるのは、下顎骨の部分を除いて平滑な面がみられ、特に骨体部、それに下顎枝の部分にも軽度ではあるがみられるようである。おそらくこれは下顎骨体の部分を手に持つといったことが長期にわたって行われていたためではないか。特に外側に平滑面が強いので、外側を手のひらに当てるといった動作が長かったのではないかと思われる。

有角把頭1（第51図14、PL.23下1）

鹿角の分岐部分が使われているもので、分岐する枝のかたち、大きさからして最上端部が使われているものと思われる。残念なことに保存が悪く、先端部を大きく欠損し、また角幹の反面は角の緻密部分を欠損している。また亀裂が入り変形している部分もある。しかし、角幹は全体を整形されて真直ぐにのび、ほぼ中程に穿孔部があり、基部に近く二つの目釘穴があく。基端は斜行する形で切断され、切断面は平らで、そこに茎が挿入できるような深い切り込みがある。目釘穴はここを貫通する。枝の部分は緻密質が内外両面をおおうが亀裂が生じていて原形を確かめ難いが、角の原形はかなり変えられているような断面形である。製品の表面には、金属刃の押し加工による細切痕が縦に付き、全面の整形と特殊な面の感じをつくり出している。この製品に対して「有角把頭」の名称をつけようと思う。この名称は本製品にもっとも近い形のものである静岡県登呂その他のものが「Y形把頭」と命名されているのに対して、本製品ではY字形の如き左右対称を意識するものではなく、むしろ主軸把手に対して角状の突起を付すというのが基本型となっているからである。

有角把頭2（第51図15、PL.23下2）

鹿角の分岐部が使われているが、枝と幹部の分岐状態からみて角座に近い場所に当ると思われ、またその部分とすると角はかなり小さいものであったと思われる。また、角の原形をかなり削り込む加工もあったようである。おそらく、素材は左側の鹿角の基部で、角座の直上で切断し、さらに鹿角の表面を削って平滑な面を出し、一部は削り込んで必要とする形をつくり出したと思われる。遺物は角幹、枝に当たる部分の先端を欠くので如何なる形になっていたものかを推定できないのは残念である。また反対面、つまり鹿角でいうと外側面が欠けるが、そのために下からくり貫いた状態はうかがうことが出来、内径19~21mm、幅5mm以内、長さ4cm位の挟入部分があったと思われる。製品の下端は鹿角自然の末端線で切られ、平らに削られている。この面と挟入内部には漆と思われるものが付着する。

有角把頭3（第51図17、PL.23上1）

鹿角の分岐部分の内側のみをのこすものであるが、枝の分岐の状態からみて第1枝であろうと思われる。

全面は研磨されて平滑となり、枝部は現存する長さで切られる。角幹部は切断位置より18mm程下に1条の浅い溝をつけ、さらに一方の面では深い切り込みを入れて穿孔される。穿孔は角幹の頂部に貫ける。

有角把頭4 (第51図16、PL.23上2)

上記のものと同様の加工をもつものであるが、鹿角はさらに細く薄い。枝の部分は先端が切断され、さらに削り込まれ、根元の方が少し細くなる程である。角幹の頂部がやや太くのこされ、先端からの貫通孔が通ずる。この孔は角の片側にぬけるが、その開口部分は角幹を1段切り込んだ薄くなった部分に溝をつくっている。

有角把頭5 未製品 (第51図18、PL.23下3)

右側の鹿角第2枝の分岐部で、分岐基部より切断、枝の部分も先端を切断、角幹部分は折れている。角表面は角の凹凸がほとんどみえない位に削って平滑にしているが、他の一面（ここでは内側）は全体を研磨して平らな面をつくる。この平らにするための削り込みは緻密質を削って海綿体が露呈するまで行なわれている。本製品の加工は以上の段階までのものであるが、これが如何なるものであるかを確かめることができていない。上述してきた目釘穴をもつ鹿角、あるいはその他のものの未製品かとも考えられたが残念ながら確証はない。

有角把頭6 未製品 (第51図19、PL.24上7)

右側の鹿角第1枝の分岐部分である。保存の状態が悪く、基部の切断部分は緻密質が剥離して原形を失う。また角幹先端部分も緻密質部分を失うが、かろうじて一部に加工痕がある部分をのこす。枝の部分は先端の切断部までの原形をのこす。全面は表面を削りつつある状態のものであるが、すでに鹿角表面は自然面をみせない程にまで削られている。その一面の角幹頂部に1段の切り込みがあるのは、すでにのべた鹿角分岐部の加工品にみた共通の加工である。表面の研磨をさらに仕上げ、その後で穿孔その他の重要な加工が行なわれるのであろう。

有角把頭7 (第51図20、PL.24上3)

分岐部分の利用製品であるが、そのごく一部がのこるものである。図に示すように分岐部から枝の方にかけてのものであり、目釘穴がのこり、その位置も場所的に他の加工品とよく一致する。これまでにみた同種製品と異なるのは、分岐部に小点列文があることで、形の変ったものがまたあったことになる。ただ全体の大きさはこれまでに知られたものとほとんど変るところがなかったであろう。

有角把頭8 (第52図22、PL.23上3)

中央にやや幅広い亀裂がはいっているが、ほぼ全体のかたちをうかがうに足る好資料である。中央の亀裂はひび割れが大きくなったもので、若し割れ目が接合すれば完存するものになる。全長123.0mm、基部幅現存40.0mm（修復できたとして35.0mm）

鹿角左側角座部角幹と第1枝とからなる。角座部分より切断、その切断面を平らに研磨すると同時に第1枝を中心として左右方向より削り、18.0mm（現存するこの部分は亀裂のためにさらに幅広い）の扁平なものにしている。角幹の全体はかなり風化して原状を推し難いが、おそらく表面は削られ平滑になっていたと思われる。

角の上部外面に16.0×8.5mm位の一孔があき、さらにその周囲が削られて一段低くなっている。角幹の内部はくり抜かれ貫通する。角坐に当る部分は特に幅広く23.0×7.0mmの長方形にくりぬかれ、さらに枝の分岐する部分までの23.0×27.0mmの範囲が平らにされ、ここに鉄器の茎部がさし込まれていたと思われる。角坐部より約17.0mmに径5.0mmの目釘穴があくのはそれを固定するためのものである。第1枝の部分は、周囲が研磨され、先端は平らに切断されている。角表面の風化が著しく原表面の残る部分は一部のみであるが、その部分に点列文の一部がのこされているようである。

点列加工をもつ鹿角加工品 有角把手部分（第51図21、PL.23下4）

鹿角角幹をある長さで切断、その一端に幅10mm程のこして、その他の部分を厚さ5～6mm、幅17mmのうすさのへら状のものにする。その際角の全面が研磨されて自然面は全くみられなくなる迄研磨される。一部にのこされた角幹部分には角幹に沿う方向で穿孔される。この孔には何かを通したもののよう考えられ、内側が磨滅している。この骨製品で特徴的なのは、上下2段にわたって、点列文様がみられることで、径1mmあるいはそれ未満の小円が5～6列をつくって刻まれ、その内に漆が充められているらしい。また側縁の一部に刻みがつく。点列文は特殊な文様効果をあげるものであったと考えられる。ただ、本品は完存するものでなく、これだけでは原形をうかがい知り得ることはできない。しかし、特殊なくりぬき部分を中心に考えるとすれば、これはやはり有角把手の一部であったとみることができよう。そして、これだけが切り込みをもつ把手であるとすると、具体的にどのようにその部分が使われたのか問題になるであろう。

弭型角製品（第52図23、PL.24上1）

鹿角の角幹の上方部あるいは枝の部分を輪切りにし、その海綿体部分をえぐってソケットをつくり、外側の形は中央よりやや上部に1段くびれを入れて弭状の形をつくる。表のくびれは摩滅が顕著で、ここに何かを巻きつけていたらしい。痕跡は明らかである。内部にあくソケットは深く、全高の8割には達するのであろう。また円錐形にあいている。以上のことから本品が、何かの先端にはめられ、そのくびれ部分に何かを巻きつけていたのは明らかである。

玉状加工品 全長13.6 径10.5×12.8（第52図24、PL.24上2）

鹿角の枝の部分を輪切りにして、その中央に孔を貫通させたものである。切断面および表面を特別に研磨する加工は行われなかったようである。垂飾品とするには表面の研磨などの加工が乏しいのではないかとと思われる。穿孔部の壁もひもなどを常に通していた状態ではない。あるいは未製品であろうか。

新保遺跡出土の骨角牙製品の特徴

1 骨角牙製品について

新保遺跡からは骨角牙製品計30点が出土した。それらは次のような種類からなるものであった。

A 生産用具

1) 刺突具類

鏃：イノシシ下顎犬歯製の鏃：1、骨製の鏃：1、ヤス状刺突具：2、シカ中足骨の縦割加工品：1、溝付け加工のある中足骨：1

イノシシ下顎犬歯製の鏃：1、イノシシ下顎犬歯製のへら状加工品：1

骨針：1

2) 弭型角製品：1

3) 紡錘車：3

B 武器

1) 有角把頭：8

C 装飾、呪術具

1) 穿孔と研磨面をもつシカ下顎骨：1

2) 玉状加工品：1

D 不明品：8

生産用具として使用された骨角牙製品は9点で他の製品と比べて多い。またその素材にシカの角、中手・中足骨などが使われ、またイノシシの犬歯も使われていることは、縄文時代の技法を色濃く残している点として注目されるのである。特にイノシシの下顎犬歯を素材としてつくられた鏃は、その形態において縄文期と変るところがないといってよく、無穿孔である点のみ縄文期のもものと異なる点であるといえよう。既にふれたように弥生期の製品としては他に類品がないが、縄文期の類品の多い関東地方での伝統的な所産であったのかも知れない。鏃には骨製の有茎の製品があるが、これも縄文期にみる形態のもものと大きく変わるところはない。ただ、やや繊細な感じのするものであって、青銅製鏃の形が、製作にイメージとしてあったことも考えられるのである。このことは、ヤス状の刺突具についても言えそうである。ヤス状の刺突具は僅かに2点があっただけであって、本来であれば、製作も簡単であって、出土量も多いものである。ところで、本遺跡で出土した製品のうち、1点はシカの中手・中足骨を縦割りにした扁平なつくりのものであり、他の1点も同様の形態のものであるが、表面の加工ははるかに入念で、体部は断面が凸レンズ状になるように整形され加工痕も細かくつけられている。こうした形状の骨器は縄文期にみることはなく、青銅製品を意識してつくられているのではないかと考えられるのである。

イノシシの下顎犬歯を素材とした製品に錐とへら状の形をしたものがある。イノシシの犬歯を縦割りにしたただけのもので、先端の尖頭部あるいはへら先の部分こそ入念に研磨しているが、その他の柄になる方は、ほとんど犬歯を割ったままである。これも縄文期からのつくりそのままのものであって、細部では縄文期のもとの違いがあるにせよ、素材の扱い方に大きな違いはないようである。錐状加工品の類品は、早期の例長野県栃原岩陰（南佐久郡北相木村）の出土の製品と、ほとんど変わるところのない形態のものであったとみてよい。栃原遺跡のイノシシ下顎犬歯利用の錐状の加工品は、早期の例としては独特の形態で他に類品がない。新保遺跡の出土例が、これと変わるところがないとすると、錐の基本的な形として縄文早期以来伝えられてきたものであろう。縄文後期の例が関東、東海地方の貝塚で知られるが、弥生期のものをみることはない。へら状のものも縄文期のものは関東から、東海以西に出土例があり、弥生期のものでは奈良県唐古遺跡に類品をみるが、その他ではみない。イノシシの下顎犬歯は、唐古の出土例があるように、弥生期においても穿孔して垂飾品として用いられることが多いのである。新保遺跡ではそうした垂飾品を出土していない。

骨針とされる1例がある（第52図23、PL.24上12）。しかし、先端部は尖らず、針穴あるいはひもを止める加工痕もない。針といっても装飾用のものと思われる。髪飾り的なものの出土例は縄文期からの伝統としてつくられることが多い。本例のように装飾加工のないものよりも、頂部に何らかの加工をもつものが多い。

弭型角製品としたものは、単純なソケット状の加工をもつ鹿角製品である。この時期の弭型角製品といわれているものには神奈川県三浦市大浦山洞穴からの出土例にみるように、高い頂部をもち、そこに様々な彫

刻を加える製品が多い。これらは有栓鹿角製品とよばれたもので、新保例のように全く装飾部をもたない製品は少ない。弭型角製品は縄文時代の角製品においてみることができ、本製品もそれとの関連が考えられるが、類品が少なく系統的なつながりを十分に論ずるまでには至っていない。

鹿角製紡錘車3点が出土している。一方この他に角座部分を切断しようとしている鹿角があり、おそらく紡錘車を製作するための加工であったと思われる。紡錘車として鹿角角座の使われる率はかなり高かったのであろう。

刀剣の柄と考えられる製品が7点出土している。有角把頭と名付けたが、これにはA、B、Cの類型がある。

A類：Y状の形で突起部は幅広く、短かく、突起部と主軸部がV状に開く。3例

B類：角状突起部が尖らず截断型。器体部は短かく特殊な溝加工をもつ。2例

C類：角状の尖った突起部をもち、真直ぐにのびる主軸部をもつ。1例

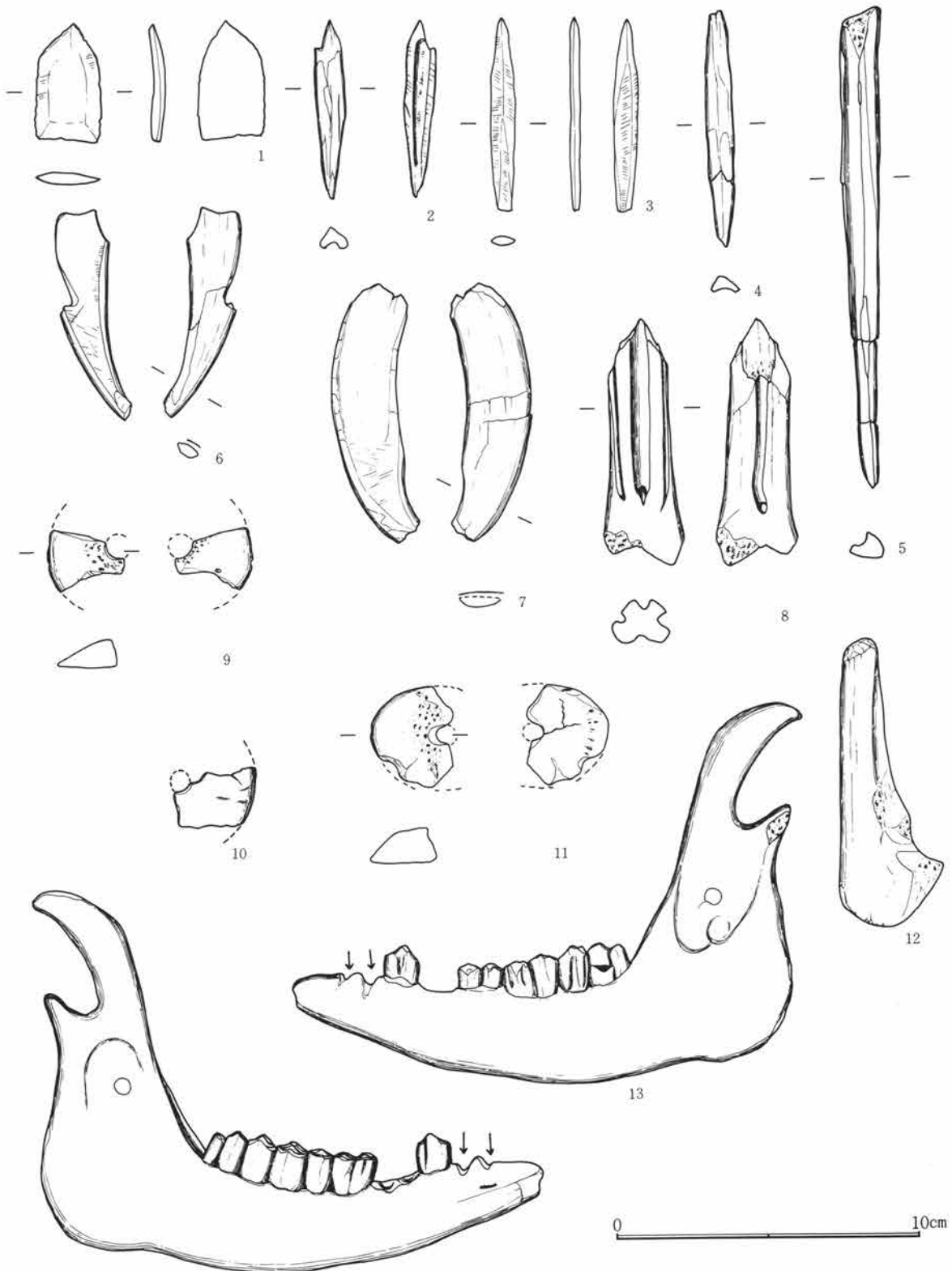
このうちA類とした形態のものは、静岡県登呂遺跡において2点出土しているものともっともよく似ており、春成秀爾氏により「Y状把頭」と名付けられている。新保出土例のA類は破損品のみで十分に原形をうかがい難いが、おそらく登呂の出土例のような形になったのであろう。B類としたものは、A類とC類との中間的なもので、Y状部の分岐する短い方が、さらに短縮している。鹿角の使用部位も第51図16は角座部に近い位置の製品であるが、第51図15は角冠部で、C類と共通する。上述のA類の主軸部頂部にみられる特異な穿孔は、縄文期の棒状角製品の中にしばしばみることができ、その単なる工作具とは異なることに注目していた。春成氏もまた愛知県保美貝塚の例をあげている。そして、C類としたものが、A・B類よりもはるかに把頭としての形態を整え、その中央に垂飾品をさげるために穿孔されたかと思われる孔があく。突起の形もA・Bと異なり鋭く研かれ、全体の形も剣の把頭にふさわしい形である。なお、上述した登呂出土例には、刺文点が配列されて装飾効果を高めているが、本遺跡の場合には断片的な形でみるのみである。しかし、類似した加工がないわけではなく、おそらく登呂例に近い文様をもつものもあったのではなかろうか。なお、こうした刺突具を顕著につけたものの破片が1例ある(第52図20)。把頭の主軸部であろうと思われるが著しく薄い。筆者はこれに木質部がはめ込まれていたのではないかと推定している。かなり手のこんだ製品ではなかったかと考えられる。

2 新保遺跡出土の骨角器の特徴

弥生時代の骨角器については、これまでその多くが東海以西において知られ、関東地方では三浦半島方面において知られるのみであった。この地域での骨角器は、その立地する自然的条件を反映して漁具関係の遺物が多く、それにト骨など呪術的な遺物を含むものであった。これに対して新保遺跡においては鏃、ヤス状刺突具など、山地、河川での狩猟あるいは漁撈の用具を出土、さらに剣の把頭と考える遺物が多かった。このことから金属製武器類の普及を推測させる。同時にこれらを所持した人々の身分、社会的な位置付が問題になって来よう。また、この類品が近隣国に求められるかどうかも問題であろう。これらについては今後の課題であり、探究したいと考えている。

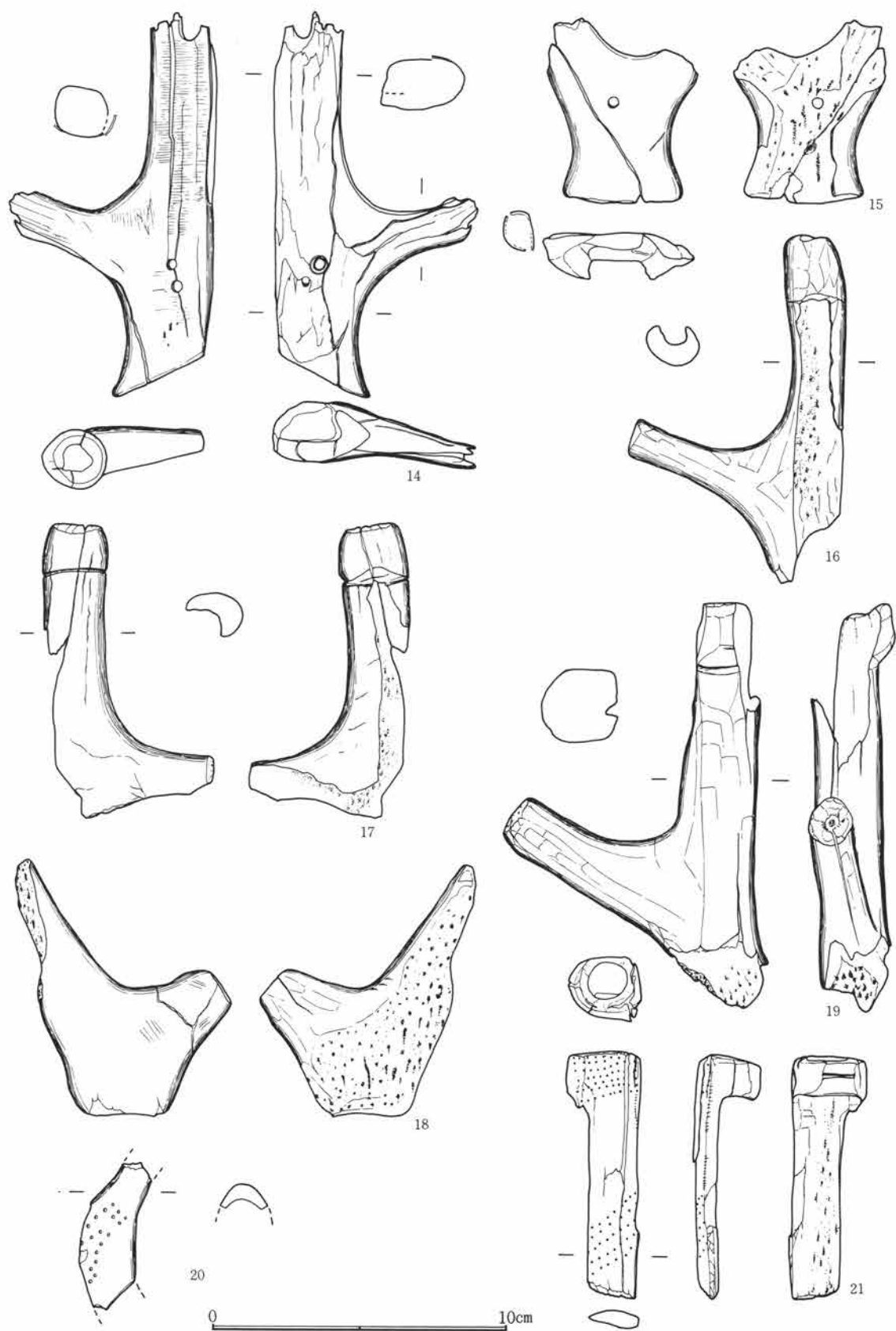
参考文献

春成秀爾：鈎と盃—有鈎短剣の研究—国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 1985, 3

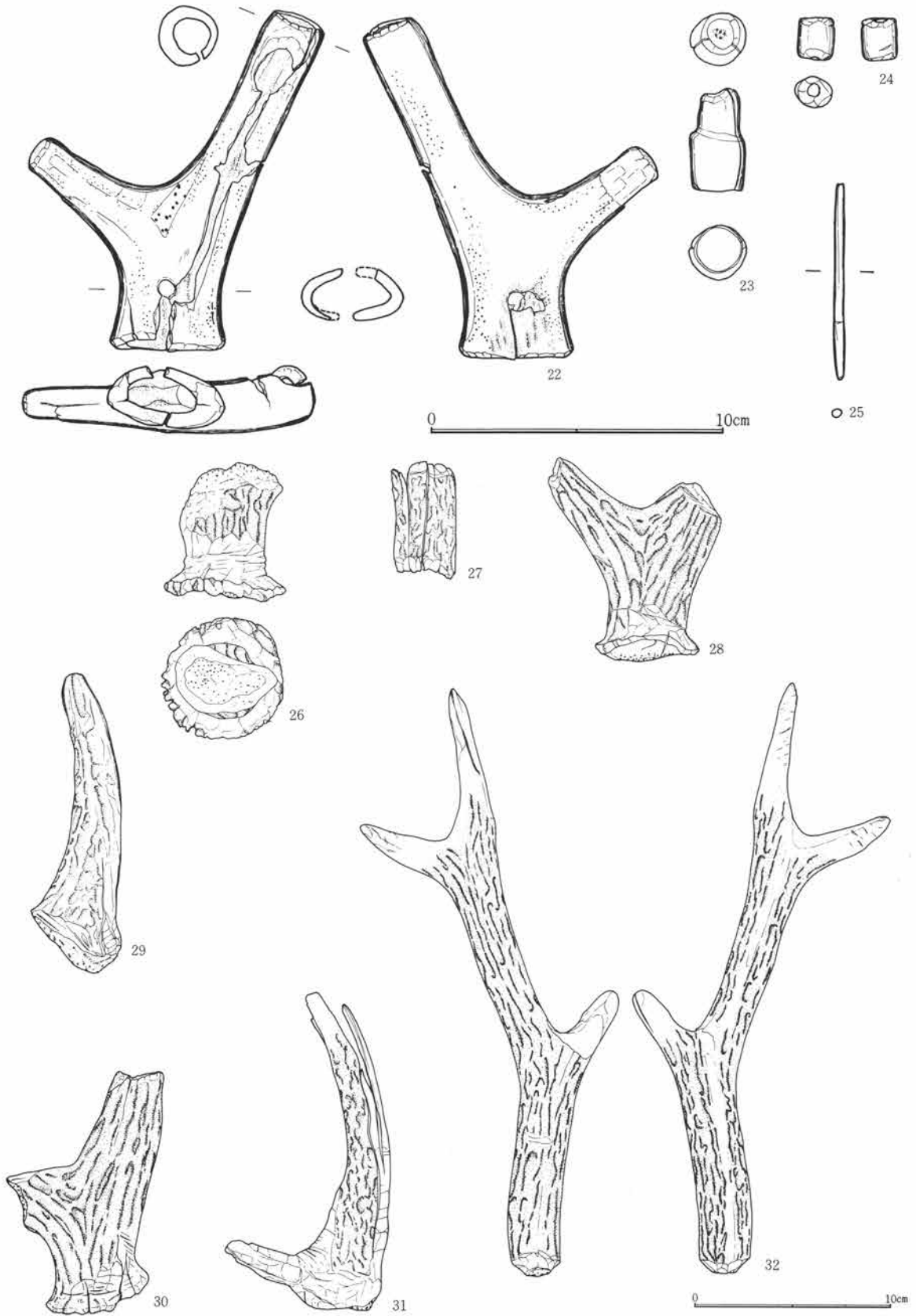


1、イノシシ犬歯製の鎌 2、骨製鎌 3・4、ヤス状刺突具 5、シカ中足骨縦割り加工品 6、錐（イノシシ下顎犬歯） 7、へら状製品（イノシシ犬歯） 8、溝付け加工をもつシカ中足骨 9・10・11、紡錘車（鹿角製） 12、へら状製品（シカ尺骨） 13、シカ下顎骨穿孔研磨加工品

第50図 大溝出土骨角牙製品（1）



14、C類 15·18、B類 16·17 A類 19、未製品 20、破片 21、把手部分
 第51圖 大溝出土骨角牙製品 (2) 有角把頭



22、有角把頭（A類）23、弾状加工品 24、玉状加工品 25、骨針 26・28・30、左角座部（落角）いずれも角座の直上に刻み、切痕がつく。 27、鹿角半截品 29、角枝部分の切断面 31、左角第三枝分岐部の切断品 32、左2・3枝

第52図 大溝出土骨角牙製品（3）

下類

番号	溝名	地	L										R										(備考)		
			I_1	I_2	I_3	\bar{C}	P_2 m_1	P_3 m_2	P_4 m_3	M_1	M_2	M_3	I_1	I_2	I_3	\bar{C}	P_2 m_1	P_3 m_2	P_4 m_3	M_1	M_2	M_3			
55	C	I-7																							
56	C	N-11																							
57	C	O-12			I_3																				
58	C	O-12																							(PL31, F11)
59	C	O-12	I_1																						M_2^{***}
60	C	O-12																							(PL31, F8)
61	C	P-12			\hat{I}_2																				($P_2 P_3 P_4$)
62	C	P-12			($I_1 I_2$)																				(I_1) (PL31, F10) (PL31, F12)
63	C	Q-12																							$m_1 m_2 m_3 M_1^{**}$ (PL31, F4)
64	C	-			I_2																				$\bar{C} \hat{\delta}$ (PL24, F1)
	C	-			I_3																				$M_3^{\hat{\delta}}$ $\bar{C}(\hat{\delta})$ $M_2 M_3$
	C	-																							M_2^{**}
65	C · D	K-7																							$M_2 M_3$
66	C · D	K-7																							M_2
67	C · D	N-9																							$\bar{C} \hat{\delta}$
68	C · D	N-10			I_1																				(PL24, F2)
	C · D	-																							$\bar{C}(\hat{\delta})$ $M_2 M_3$
	C · D	-																							M_2
69	D	D-11																							P_2^{**}
70	D	E-8																							\bar{C} m_3^{***}
71	D	F-8																							M_2^{**}
72	D	G-7																							$M_1^{\hat{\delta}}$ (PL28, F8 a) (PL31, F14)
73	D	H-7																							($P_1 M_1^{***} M_2^{***} M_3^{***}$) ($P_2 P_3 P_4 M_1^{***} M_2^{***}$) (PL31, F2)
74	D	H-7																							M_3^{***}
75	D	I-7																							M_3^{***}
76	D	I-7			$I_2 I_3$																				
77	D	J-7																							P_4
78	D	K-7																							(M_3^{***}) (PL31, F6)
79	D	L-7																							($M_1^{***} M_2^{**} M_3^{\hat{\delta}}$)
80	D	L-7																							($M_1^{***} M_2^{***} M_3^{***}$) $\bar{C} \hat{\delta}$

下顎

番号	溝名	地点	L										R										(備考)
			I ₁	I ₂	I ₃	\bar{C}	P ₁ m ₁	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	M ₁	M ₂	M ₃	I ₁	I ₂	I ₃	\bar{C}	P ₁ m ₁	P ₂ m ₂	P ₃ m ₃	M ₁	M ₂	M ₃	
81	D	L-7	ㄟ																				
82	D	L-8																					↑↑ M ₃ (PL28, 上9)
83	D	M-9																					↑↑ M ₃ I ₁ I ₂
84	D	O-11																					↑↑ (M ₂ M ₃)
85	D	O-11																					↑↑ M ₂
86	D	O-11																					↑↑ M ₃
87	D	Q-12																					M ₃ (PL28, 上13)
88	D	-																					M ₃
89	D・E	O-10																					(P ₂ P ₃ P ₄ M ₂ M ₃)
90	D・E	O-10	(I ₁)	同																(M ₂ M ₃)	(I ₁ I ₂)		
91	グリッド	B-8	I ₁ I ₂																	I ₁			
92	グリッド	C-7																					↑↑ M ₃
93	グリッド	C-8	ㄟ																				(PL31, 下20)
94	グリッド	D-7																					I ₁ I ₂ ㄟ
95	グリッド	D-7																					↑↑ M ₂
96	グリッド	D-8																					M ₂ M ₃
97	グリッド	D-8																					M ₂
98	グリッド	F-7																					↑↑ M ₃
99	グリッド	7~8	I ₁																	M ₃			
100	グリッド	I~N	I ₁																				
101	一括																						M ₃
102	一括																						↑↑↑↑ M ₂ M ₃
103	一括																						I ₁ I ₂ ↑↑↑↑ M ₃
104	一括																						I ₂ M ₃

シカ上顎

番号	溝名	地点	L										R										(備考)			
			前頭骨 その他 I	前頭~ 角坐骨 I	落 断 角	I ¹	P ¹	P ²	\bar{C}	P ² m ¹	P ³ m ²	P ⁴ m ³	M ¹	M ²	M ³	前頭骨 その他 I	前頭~ 角坐骨 I	落 断 角	I ¹	P ¹	P ²	P ³		P ⁴	m ¹	m ²
105	B	F-7																					M ¹			
106	B	E-8																					M ¹			
																							△ M ¹			

シ カ下顎

番号	溝名	地	L									R									(備考)					
			I ₁	I ₂	I ₃	\bar{C}	P ₂ m ₁	P ₃ m ₂	P ₄ m ₃	M ₁	M ₂	M ₃	I ₁	I ₂	I ₃	\bar{C}	P ₂ m ₁	P ₃ m ₂	P ₄ m ₃	M ₁		M ₂	M ₃			
135	B	F-7																								
136	B	E-8																								
137	2	B J-8																								
138	2	B N-11																								(PL28、上7 a)
139	2	B N-11																								
140	2	B N-11																								
141	C	E-7																								加工品 (PL24、下7)
142	C	E-7																								
143	C	E-7																								
144	C	E-8																								
145	C	F-7																								
146	C	F-7																								
147	C	F-8																								
148	C	G-7																								
149	C	G-7																								
150	C	I-7																								
151	C	N-10																								
152	C	O-12																								
153	C	O-12																								
154	C	O-12																								
155	C	O-12																								
156	C	P-11																								
157	C	P-12																								
158	C	P-12																								
159	C	Q-12																								
160	C	Q-12																								
	C	—																								
	C	—																								
161	C・D	L-7																								
	C・D	—																								

番号	グリッド	溝名	
187	G-6	(上層)	シカ ul R
188	D-7	(下層)	イノシシ R I _{1,2} 、C♀
189	D-7	(下層)	シカ L (P ₄ ~M ₃)、LM ₂ 、LM ³ 、イノシシ L M ₂ ⁺
190	D-7	(下層)	シカ tib R pro、イノシシ digi (焼)
191	D-7		シカ? Cal R
192	E-7	(下層)	イノシシ tib L dis
193	B-6	(上層)	シカ hu L dis (焦げる) fr
194	B-7	(下層)	シカ tal R、cox R 下
195	B-8	(下層)	シカかイノシシか不明 fr 2
196	B-9	(上層)	シカ hum L dis
197	O-7	(中層)	シカ? Fe fr
198	Q-13		? fr
199	大溝内		イノシシ ⁺⁺⁺⁺ RM ³ 、RM ₃ 、RI ₂
200	大溝内		シカ RM ³
201	大溝内		シカ Cer、cox L、手根 ul R
202	大溝内		イノシシ ul L fr 4
203	大溝内		シカ hu dis R、L (大きき似るが別)、イノシシ hu R dis、シカ Fe R dis、ep はずれ、イノシシ Cal L
204	大溝内		シカ Cal L 2、tib R dis、hu L dis、イノシシ cox R 上、シカ、rad R pro、fr、
205	大溝内		シカ tal R 2、L 1 (すべて別)、イノシシ L Temp
206	大溝内		シカ hu dis L、mt R pro、イノシシ md (連合♀ C あり)、シカ rad R pro fr
207	大溝内		シカ ul R fr、ant 加工品
208	大溝内		イノシシ Fe fr、fr 5
209	大溝内		シカ 末 fr 7 (他 1)
210	大溝内		イノシシ md (連合 fr 焼ける) 角 fr 1、fr 13
211	V-11	B 溝	シカ hum、fr 4
212	大溝内		シカ ul R、イノシシ ul R (焦げる)
213	大溝内		シカ hum Cal R、イノシシ tib R、L dis (別)
214	大溝内		シカ rad R
215	大溝内		イノシシ L ul (大)
216	大溝内		シカ atlas、fr 3
217	M-7		シカ L 角座部 (落角) fr 1
218	F-7		シカ RM ³
219	F-7		シカ tib L dis、イノシシ 末
220	M-10	C・D溝	シカ 角 (加工)
221	E-8	D溝 (床)	シカ psim
222	M-10	E 溝	シカ Fe fr
223	Q-13		角 fr 1、fr 2
224	C-8	(下層)	シカ、or イノシシ 手根 1
225	大溝内		シカ tal L、Cal R 末、ul L (焦げる)、イノシシ tal L fr 2
226	K-7	D 溝	fr 2

第17表 大溝出土イノシシ・シカ遺存体出土量表
イノシシ

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 **	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨**	scap 肩甲骨 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I④III	破片		
A	I	r					~1													
		l																		
	K L	r				1														Pr
		l																		
	計	r				1		~1												Pr
		l																		
B	E	r																		
		l										1								
	N	r					1													
		l					1													
	O	r			vert2															di
		l		fr			1													
	O P	r	tem																	
		l																		
	P	r		1										1						
		l																		
	Q	r							①											
		l																		
計	r	tem	1					①					1						di	
	l		fr	vert2		2							1							
2B	D	r	1			1														
		l					1													
	F	r	fr																	
		l		1(♀)																
	H (上)	r										①								
l																				
H (中)	r														1					
	l																			
J	r										1									
	l																			

イノシシ

遺名	地点・層	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I④III	破片
2B	N	r	1(♀)															
		l	1			1												
	O	r																
		l				1												
?	r																	
	l	1				1					①							
計	r	fr	2			1					1							
	l		3			4					②			1				
C	C	r													1			
		l			1		1											
	E	r				1					ep							
		l																
	F	r					1										pr	
		l		1(幼)														
	G	r			vert									1	1			
	(上)	l																
	E	r						①						1				
	G	l					1					1						
	H	r													1			
		l					2					1						
(中)	r						1	1			①							
	l										1(ep欠)							
I	r						1											
	l																	
(下)	r		角 1 (枝若)	rib2 At2		1	1	2 ①				①			1			
	l		角															
K	r																	
	l																	
N	r						1	1										
	l										①				1			

イノシシ

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 *2 p(S)d	hum 上腕骨 p(S)d	rad 橈骨 p(S)d	ul 尺骨 p(S)d	mc 中手骨 p(S)d	pel 寛骨 p(S)d	fe 大腿骨 p(S)d	tib 胫骨 p(S)d	fib 腓骨 p(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p(S)d	dig 指骨 I①III	破片	
C	O r			At		1	1 1												
	l		2						1			1							
	P r		1(♂) 角			1	① 1					1							
	l					2						①							
Q	r		1			1 ② 1	3			1	1 2								
	l			At		2 1				1	①	1							
計	r		2 角			2 ② 3	1 ② 2	8	2 1	1	① ep	3 ①		2	3				Pr
	l		4	vert rib2 At 4	1	8 1	1 1	①	1	1	1 ②	1 ① 3		1	1				
CD	H r																		
	l					1													
	I r					1													
	l																		
	L r					1													
	l																		
	I L	r			T		2												
l					fr1	①							1						
N	r					①													
	l																		
	O r				1	2													
l							1				1								
計	r			T	1	① 6													
	l					fr 2	①	1				1		1					
D	D r									fr									
	l																		
	E r								fr		①								
	l					1						①							
F	r																		
	l										1								
(床)	r									1									
	l						1 1												

イノシシ

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨**	scap 肩甲骨 * ² p(S)d	hum 上腕骨 p(S)d	rad 橈骨 p(S)d	ul 尺骨 p(S)d	mc 中手骨 p(S)d	pel 寛骨 p(S)d	fe 大腿骨 p(S)d	tib 脛骨 p(S)d	fib 腓骨 p(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p(S)d	dig 指骨 I①III	破片		
D	G	r																		
	(下)	l										1								
		r										1								
	(床)	l																		
	H	r					2													
		l								1										
		r																		
	(下)	l						①												
	I	r						1												
		l					①													
		r																		
	(下)	l						1												
		r			T		fr													
	(底)	l																		
	J	r			At								4							
		l	1										1	1						
	r					1														
(下)	l																			
L	r																			
	l	1																		
M	r					1														
	l					1														
N	r					2								1	1					
	l					1								1	1					
O	r						①							2		mct				
	l	1	1		1			1				①			1				16	
計	r			T・At		4	3	②	fr	1	fr	①	1	4	3	1	mct		16	
	l	3			1	①	2	1	1	1	1	1	②	2	2	2				
DE	N	r	ant		1	1	1													
		l				1		1			1	2	1							

イノシシ

講名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I①III	破片
DE	O	r		At								2					mct	
	l					1					2							
計	r	ant		At	1	1	1					2						mct
	l					2		1			3	2	1					
E	G	r																
	l							1										
	N	r								1								
	l																	
	O	r	l			1		1				1						mct
	l								1				1					
P	r					1												
	l																	
計	r	1			1	1		1			1	1						mct
	l							2					1					
グリッド	B	r										①						
	l						1											
	D	r			max													
	l			max														
	(下)	r			At													
	l		1															
	(下砂)	r					1											
	l			vert														
E	r																	
	l											1						
F	r					1												di
	l																	
G	r							1										
	l																	
I N	r											1						
	l																	

イノシシ

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I①III	破片	
グリッド	N	r				1													
	l																		
計	r					3	1					1 ①							
	l		1	vert1,At1 max2			1					1					di		
一括	r	fro(fr) l ^{tem}	連(♀) 1			1		3		1		2							
	l						2(うち fr1)					1		1	1				

シカ

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I①III	破片	
A	I	r																	
	l					1													
	J	r ant																	
	l ant																		
	(中)	r												1					
	(下)	r																	1
K L	r																		
	l ant					~1													
	r																		
	l										~①			1				4	
計	r ant																		
	l ant2					1 1					①			2				5	
B	E	r																	
	(上)	l ant																	
(下)	r																		
	l																		12
F	r																		
	l																		5

漢名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I①III	破片
B	K r											1~						2
	l																	
	L r																me	1
	l					1												
	N r																	
	ant(fr)燒																	1
	l																	
	O r											1(幼)			1		(C+4)	
	l							1				1	2			fr		38
	O P	r l			T								1					
P r																		
ant(fr)2												1						
l																		
Q r			1															
ant(fr)2																	fr	1
l										1								
V r																		
l				L														4
計 r		1		T・L							1	1 1		1		(C+4)		
ant(fr)5												1 1 2				fr2	me	71
l ant					1		1		1									
2B	D r																	
	l																	6
	E r					1												
	l																	
	F r												1					
l												1					3	
H r ant							1				1	2						
ant(fr)																		
l ant														1		①		
(ped)																		
I r						1				1								
l								1						1	1	(C+4)		12

11 新保遺跡出土脊椎動物遺存體・骨角牙製品

講名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I④III	破片
2B	I (下)	r l														mct(fr)		1
	J (上)	r antfr2 l				3								1	1			27
	K (中)	r l								fr	fr							4
	L (中)	r l																8
	L	r l									fr							3
	M	r l										1						
	N	r lant		1			2	1	1				1	1			2	24
	O	r ant(fr)3 l		1							1	1						5
	?	r l				1	1							1				7
	計	r ant1 ant(fr)6 ant2 Ped1	1			1	6	1		1	fr	1	2	5	3	1	met、fr (C+4) ①	111
C	C	r ant l													1			21
	(下)	r l					1				①	1						
	E	r l	2						1									
	(下)	r l													1			1
F	r ant(fr) l	1(枝)	T、Cer						1	1								9

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 *3 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I①III	破片
C	F (中)	r l	1															
	(下)	r l									1 1							
G	r l ant		fr2	vert(fr)2 rib		1		fr	1		①	1 1		1		mct ① 3	Pr2.me	42
	(上) r l		fr			2		1			①	1				(mct mct2	pr.me	5
(中)	r ant ant(fr) l ant																	
E G	r l ant					fr						1		1				21
	H r l					1		①			1 ①							27
(中)	r l																	1
(下)	r l																	3
I	r ant(fr) l					1	1						1					1
	(下) r ant(fr)4 l					①	1			1(♀)		1		1				
J	r ant(fr)6 l			L									fr			1		
	K r l																	2
(下)	r ant(fr) l						1											3
L	r l													1				

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨	scap 肩甲骨 *3 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I④III	破片
CD	I	r ant				1		1			①1				1	①		9
	L	l				2				1	①							
	計	r ant 2 ant(fr)3 l ant 2				5 2	1 1	1		2 3	1①3 ②1			2 1	4 1	2 1		23
D	D	r ant (Ped)						1										
		l																
	(床)	r ant l																
	E	r ant2 l																
	(床)	r l				1 1	2 fr 1				1					1	pr	12
	F	r l	1				1	fr			1	1						21
	(床)	r l ant落						2				1	1					1
	G	r l										1						
(下)	r l			S			fr				1	1					26	
(床)	r ant l ant																me	
H	r l			Cer							1						4	
(下)	r l ant					1	1			①	2						6	
(庭)	r l												1					
I	r l		1				1				1							10

11 新保遺跡出土脊椎動物遺存体・骨角牙製品

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 *3 p⑤d	hum 上腕骨 p⑤d	rad 橈骨 p⑤d	ul 尺骨 p⑤d	mc 中手骨 p⑤d	pel 寛骨 p⑤d	fe 大腿骨 p⑤d	tib 脛骨 p⑤d	fib 腓骨 p⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 p⑤d	dig 指骨 I④III	破片	
D	I (上)	r fr2 l	fr2	fr3						fr	fr							17	
	(下)	r ant l				1		1		1	①					fr	Pr	18	
	(底)	r l						①											
	(床)	r l	1(老)																
	J	r l					3												4
K	r l																	1	
L	r ant ant(fr)5 l	1 1										fr				1			
	(上) l						fr			1						mct		2	
M	r l ant(落)			Cer.L						fr	1							28	
N	r l ant						2			1							mct	11	
	l						1	1	1	1	2								
O	r fr3 l	1(幼) 1		rib.At		2①1 ①1	1 1 1	1 fr	1			2 1 1	2 1 1	2 1 1				pr	20
	l									fr	1 1	1							
Q	r l									1(ep欠)								9	
計	r ant 3 ant 4 fr 5 l ant 5 ant(fr)5	5 fr 2 3		Cer 2 L rib. At fr 3 S		3④2 ①6	2 2 5 1 3 2 ①	1 fr 2 fr 2 1	1	2 fr 3 3 1	2 1 fr 3 ①1	2 7 fr 2 6		2 1 1			mct 2, fr pr 3, me	190	
	l															2			
DE	D l						1					1							

漢名	地点・層	cra 頭蓋骨*	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I,II,III	破片	
DE	L r																	1	
	l																		
	N r ant2 ant2(うち fr1) l ant		fr			1		1						2				pr	21
	l ant	1				1			1					1	1				
O r ant(落) ant l	1			At	fr	②	1	1			①	1	1				fr	1	
	l					2						1							
計 r ant3 ant3 l ant	1	fr		At	fr	1 ②	1	2			①	1	2	2			fr	pr	23
	l ant	1				3	1		1			1		1	1				
E	D r																	pr	
	l																		
	G r						1												
	l																		
	M r ant(fr) l																	2	
	N r							fr(焼)										2	
	l																		
O r ant(落) ant l						fr	1	1				1	1	1			fr	1	28
	l		Cer			2	2					fr	① 1		1				
	l																		
P r ant(fr) l						1	fr											11	
	l								1										
計 r ant ant(fr) l						1	1	1	1			1	1	1			fr	pr	43
	l			Cer		2	2	fr		1		fr	① 1		1				
グリン ド	B r (E) ant(ped) l					1												2	
	l					1						1	1						
	r (T) l		1				1				1				1			6	
	l																		
C r (T) l																		1	
	l																		
r (T) ant3 l ant						1								1				3	
	l ant				1	1		1						2					

11 新保遺跡出土脊椎動物遺存体・骨角牙製品

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*	scap 肩甲骨 P(S)d	hum 上腕骨 P(S)d	rad 橈骨 P(S)d	ul 尺骨 P(S)d	mc 中手骨 P(S)d	pel 寛骨 P(S)d	fe 大腿骨 P(S)d	tib 脛骨 P(S)d	fib 腓骨 P(S)d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P(S)d	dig 指骨 I(II)III	破片
グリッド	D r													1				
	l																	
	r ant														1			
	(上) l			AX														
	(下) r ant											1①						
(下) r ant(剥片)																		
(下) l ant(落)		1	Cer3	1										1		1		6
E r ant2						1								①	fr			
l																1		5
F r																		
l																		4 (汚損1)
G r																		
l																		
I N	r																1	
l									1									4
M r																		
l ant2 (ped)																		
N r																		
l						1												
O r	ant(fr)																	
l																		
R r	ant(fr)																	
l ant																		
Q r																		
l																		3
旧河川	r																	
l ant																		

溝名	地点・層	cra 頭蓋骨 *1	md 下顎骨	vert rib 脊椎骨 肋骨*2	scap 肩甲骨 *3 P⑤d	hum 上腕骨 P⑤d	rad 橈骨 P⑤d	ul 尺骨 P⑤d	mc 中手骨 P⑤d	pel 寛骨 P⑤d	fe 大腿骨 P⑤d	tib 脛骨 P⑤d	fib 腓骨 P⑤d	ca 踵骨	ta 距骨	mt 中足骨 P⑤d	dig 指骨 I①III	破片
グリッド計	r ant ant 8	1	Cer3 AX L	1	3						2	1 ① 1	①	3 fr	3	1		34
	l ant(fr)2 ant6	1		1	4	1	1			2	2	1 ② 7		2	1	2		
一括	r ant (ped)	1	At		8	3 (うち fr2)	3 (うち fr2)				2	3		4	3	1	pr.di	107
	l ant2	1	Cer		6		2		3			fr 3		2	4	1		

凡 例

上顎
 $\overline{I^1 \ I^2 \ I^3}$ 切歯
 \overline{C} 犬歯
 $\overline{P^2 \ P^3 \ P^4}$ 前臼歯
 $\overline{M^1 \ M^2 \ M^3}$ 臼歯
 $\overline{m^1 \ m^2 \ m^3}$ 乳臼歯

下顎
 $\overline{I_1 \ I_2 \ I_3}$ 切歯
 \overline{C} 犬歯
 $\overline{P_2 \ P_3 \ P_4}$ 前臼歯
 $\overline{M_1 \ M_2 \ M_3}$ 臼歯
 $\overline{m_1 \ m_2 \ m_3}$ 乳臼歯

<M³> ……未萌出歯
I ……咬耗が著しい
I ……咬耗なし
+ ……エナメル質のみ交耗
- ……咬耗がみられない
++ エナメル質小窩
+- ……咬頭の一部に-の部分がある
(j) ……若獣歯
角連 (♀) ……下顎角・連合部 (♀) 雌
fr ……破片
vert ……脊椎骨
ep ……骨端

l (幼) ……幼体
at₂ ……環椎
l (枝・若) ……鹿角枝・若獣
max ……上顎骨
mct ……中手・中足骨
ant ……角
ant(落) ……落角した鹿角
(c+4) ……中心足根骨・第4足骨
ped ……角座
pro ……近位端
dis ……遠位端
At ……第1頸椎
Ax ……第2頸椎
Cer ……頸椎
T ……胸椎
L ……腰椎
S ……仙椎
Cau ……尾椎
rib ……肋骨
焼 ……焼け骨
Pr ……基節骨
me ……中節骨
di ……末節骨

12 新保遺跡出土種子類

粉川 昭平

1. 出土種子類の名称及び数量

F溝 (弥生中期後半)

アサダ (15個)、カナムグラ (23個)、ガマズミ (多数)、ナラ類 (4個)、ナラ類の冬芽 (28個)、ヒョウタン (4個)、ミズキ (2個)、フジ属の芽 (28個)、虫瘻 (13個)

E溝 (弥生中期末～後期初頭)

アサ (10個)、アサダ (31個)、イヌガヤ (4個)、イヌシデ (32個)、イタヤカエデ (6個)、ウリ類 (24個)、エゴノキ (8個)、カヤ (1個)、カエデ類 (4個)、カナムグラ (63個)、カラスザンショウ (1個)、キハダ (8個)、クサギ (18個)、クマヤナギ (2個)、クマノミズキ (6個)、クマシデ (1個)、クワ (3個)、クルミ (多数)、ケヤキ (4個)、サクラ (4個)、サワシバ (2個)、サンショウ (2個)、シソ類 (5個)、タデ属 (6個)、トチノキ (多数)、ナラ類 (多数)、ナラ類の冬芽 (多数)、ハクウンボク (3個)、ヒョウタン (23個)、ノブドウ (15個)、フジ属の芽 (多数)、ミズキ (54個)、ムクノキ (1個)

D溝 (弥生後期前半・古)

アサダ (20個)、ウリ (7個)、エゴノキ (3個)、オニグルミ (多数)、カナムグラ (多数)、ガマズミ (16個)、クマヤナギ (1個)、タデ類 (多数)、トチノキ (7個)、ノブドウ (11個)、フジ属の芽 (7個)、ブドウ類 (13個)、モモ (25個)、虫瘻 (多数)

C溝 (弥生後期前半・新)

アサダ (多数)、アカメガシワ (1個)、アカシデ (12個)、イヌガヤ (1個)、イヌタデ (多数)、イネ科の地下茎 (2個)、ウリ (多数)、エゴノキ (14個)、ガマズミ (20個)、カナムグラ (多数)、クサギ (12個)、クマヤナギ (多数)、クマノミズキ (1個)、オニグルミ (多数)、サクラ属 (2個)、サンショウ (2個)、トチノキ (15個)、トゲ (1個)、ナラガシワ (22個)、ノブドウ (多数)、ハゼ (1個)、ヒョウタン (多数)、フジ属の芽 (多数)、ブドウ類 (多数)、ミズキ (18個)、モモ (6個)、虫瘻 (5個)、材片 (1個)、コクサギ (1個)

2 B溝 (弥生後期後半)

アサ (16個)、アサダ (15個)、イヌガヤ (2個)、イタヤカエデ (2個)、ウリ類 (多数)、エノキ (1個)、エゴノキ (19個)、カナムグラ (110個)、ガマズミ (3個)、カラスザンショウ (1個)、キハダ (3個)、クサギ (16個)、クマヤナギ (62個)、オニグルミ (27個)、クマノミズキ (1個)、ケヤキ (2個)、コウゾ (1個)、サンショウ (11個)、サワシバ (1個)、シソ類 (6個)、タデ類 (32個)、トチノキ幼果 (3個)、ナラ類 (20個)、ナラ類の冬芽 (21個)、ハクウンボク (3個)、ヒョウタン (多数)、フジ属の芽 (42個)、ノブドウ (26個)、ブドウ属 (42個)、マタタビ (1個)、マクワウリ (小) (1個)、ミズキ (15個)、ミツバウツギ (1個)、モモ (39個)、炭化マメ (アズキ?) (3個)、ウキヤガラ (2個)

B溝 (古墳前期・古)

アズキ (1個)、ウリ類 (多数)、エゴノキ (13個)、カナムグラ (多数)、クサギ (14個)、オニグルミ (50個)、クマヤナギ (多数)、サクラ属 (3個)、タデ (多数)、ナラ類の冬芽 (多数)、ナラガシワ (多数)、

ノブドウ (多数)、ハクウンボク (2個)、ヒョウタン (4個)、フジ属の芽 (多数)、ブドウ類 (多数)、ミズキ (30個)、モモ (30個)、虫瘻 (多数)

A溝 (古墳前期・新)

カナムグラ (1個)、トチノキ (2個)、ナラ類の冬芽 (2個)、モモ (6個)、虫瘻 (2個)

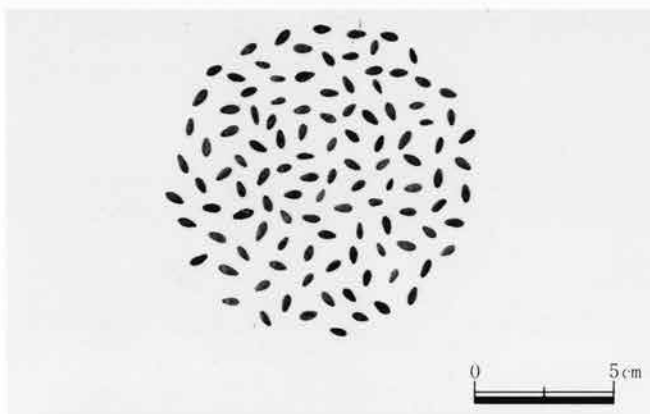
C-9 浅間C軽石層下砂層 (弥生後期後半)

クリ (3個)

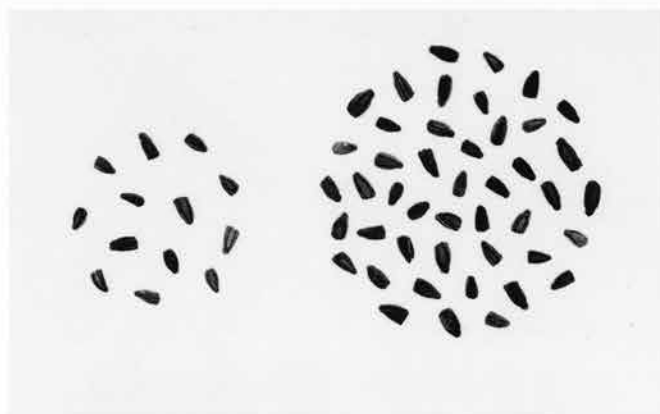
2. ま と め

- 1) 針葉樹は、カヤとイヌガヤだけであるが、この2種だけが常緑樹であり、他はすべて落葉樹である。北関東という地理的位置とも、又最近えられている関東地方中・南部の遺跡の植生史的研究の結果とも一致している。武蔵野の落葉樹林のルーツがこのへんにあるのかもしれない、それは又、多量のロームの地域という事と何らかの関係があるのかもしれない。
- 2) 特に大型のナラガシワや、大型のクリの多量の出土は注目される。これらに伴い、多数の虫こぶがえられているが、くわしい研究は将来にまつとして、これはナラ属の葉に寄生する寄生蜂によるものではないかと思われる。当時落葉のドングリの林が、これらの昆虫によって大害をうけていたのかもしれない。
- 3) 栽培植物は、炭化米やモモ・ヒョウタン類の他アサがE溝に10個、2B溝に16個えられている。又、2B溝のアズキに似たマメ類、マクワウリ類がある。浅間C軽石層下砂層の大型のクリも栽培品かもしれない。あらい網目をもったシソ科のものはあるいは栽培品かもしれないが、これについては確言しうだけの知識がないのを遺憾とする。
- 4) カナムグラやタデ属など所謂史前帰化植物とされるものも若干出土している。その他にも多くある筈であるが、この試料は、さらに微小の種子類を逸しているようである。
- 5) 古植物学的に興味のあるのは大型のクリやオニグルミ・ナラガシワ・3稜の目立つトチノキの幼果 (これは故三木茂教授が、新絶滅変種として発表された)・縦に長いミズキなどがある。これらの性質はすべて未解決である。C溝のコクサギの果皮は出土の甚だまれなものである。

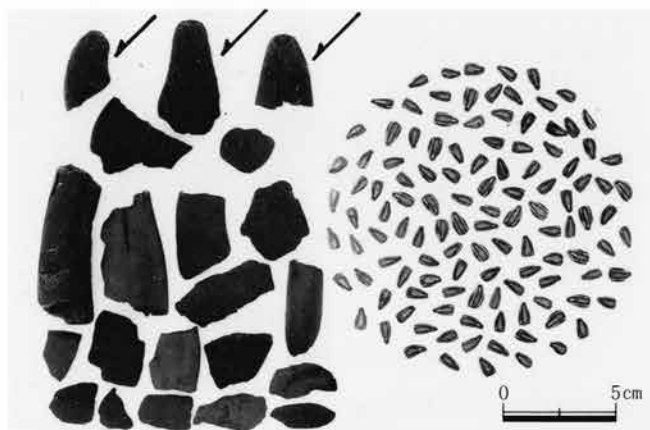
写 真 图 版



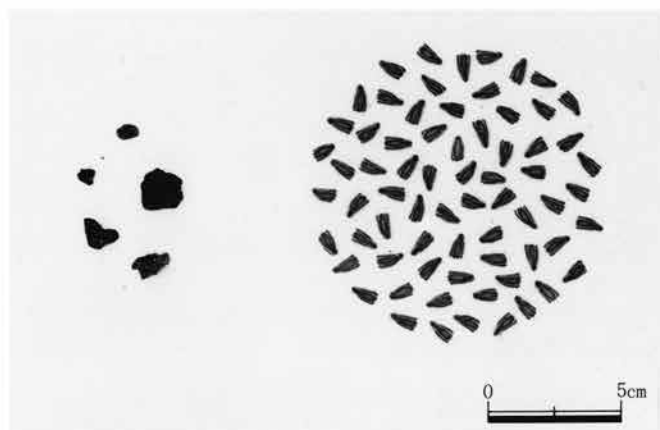
1200 1



1201 1205 2



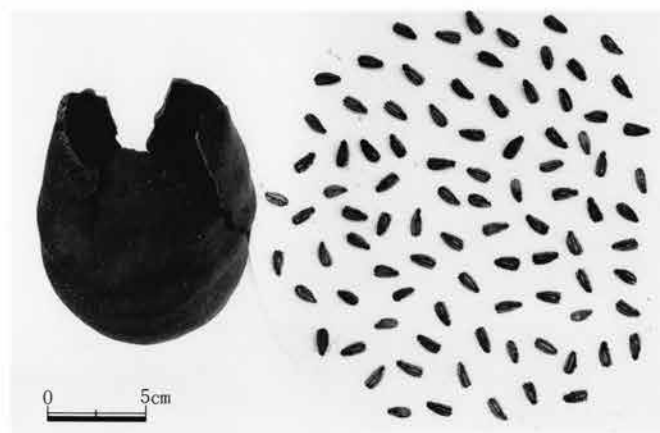
1203 3



1204 4



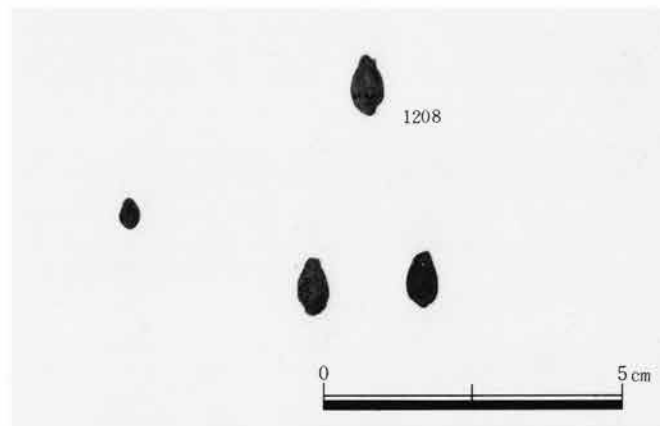
1206 5



1206 6



1207 1206 7



1210 1208 1209 8



1215 1



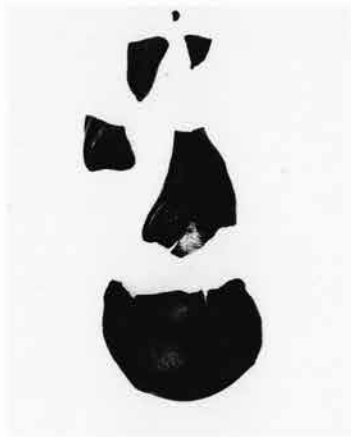
1214 2



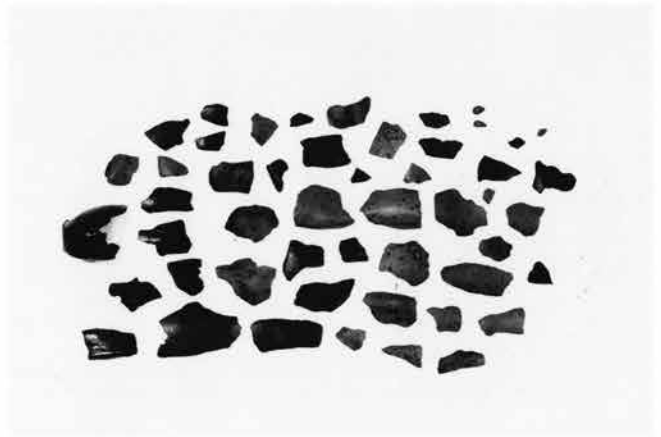
1216 3



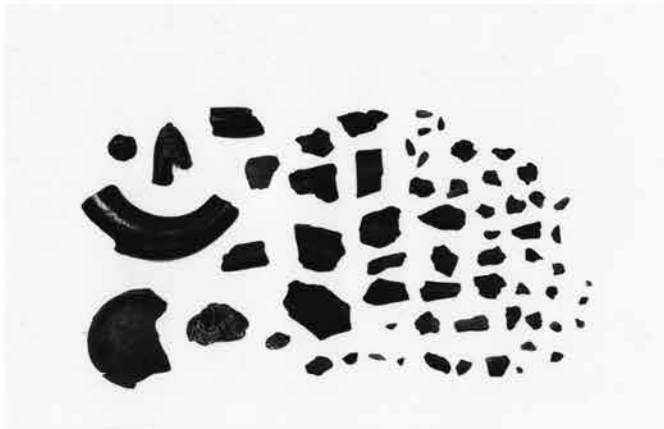
1217 4



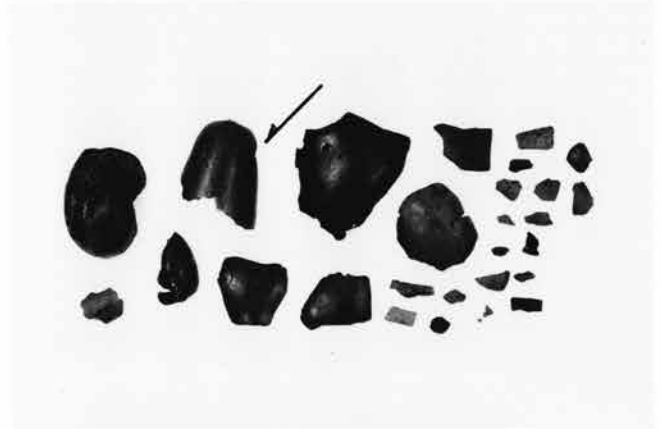
1213 5



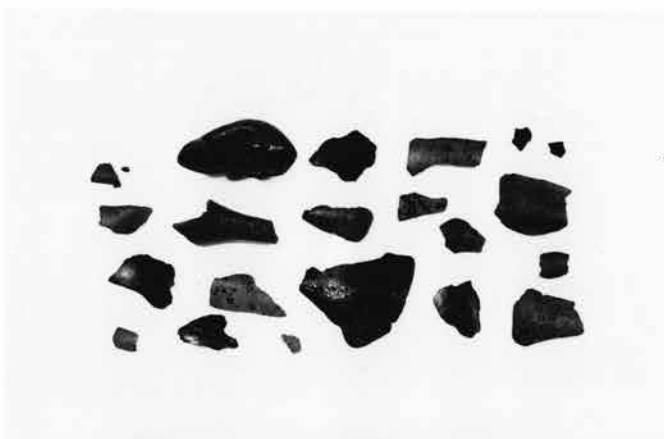
1218 6



1219 7



1212 8



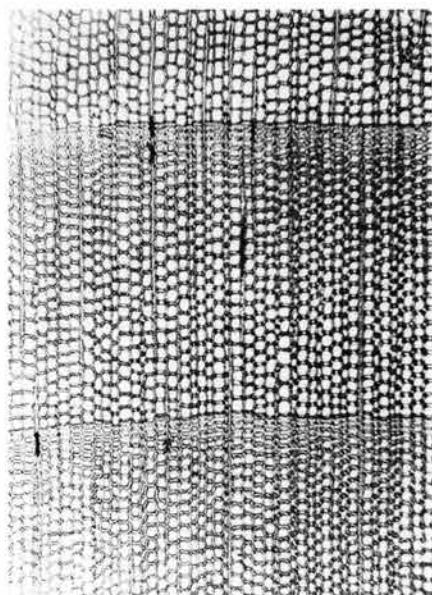
1220 9

PL. 1

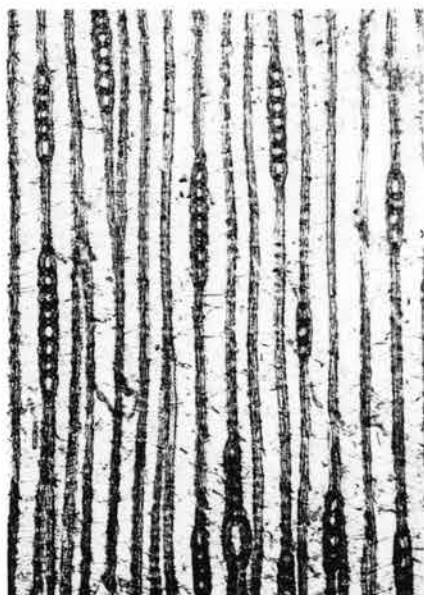
1. メロン仲間の種子、2~7. ヒョウタン仲間の種子と果皮。5の右側は種子を含む胎座部分で左側の果皮の中に含まれていた。(↙は果実の頭頂部)、8. スズメウリ(左)とトウガン(右の上、下)

PL. 2

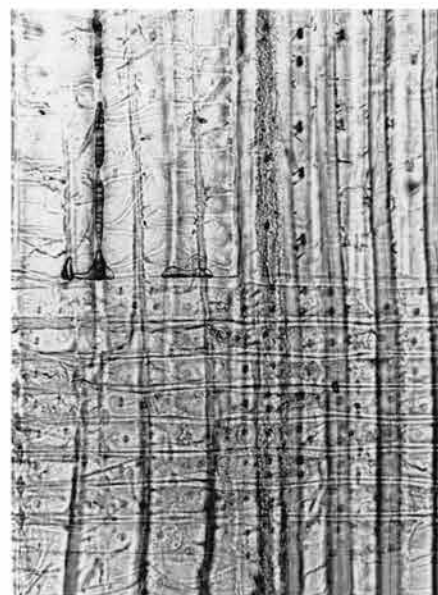
1~9. ヒョウタン仲間の果皮片(↙は果実の頭頂部)



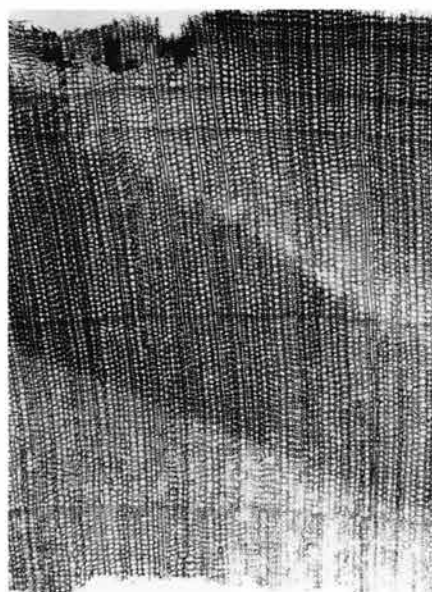
1 カヤ (GSF-1013) C×40



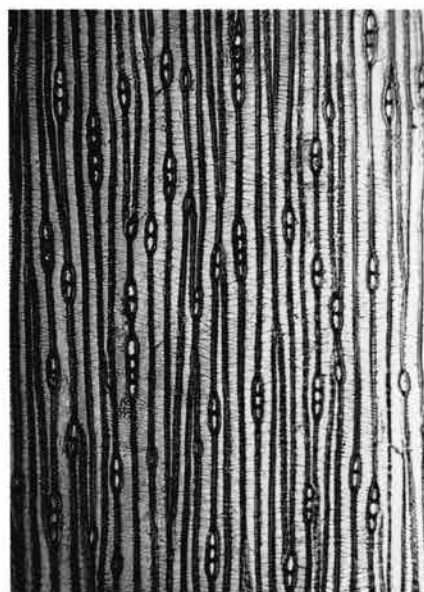
2 同 T×100



3 同 R×200



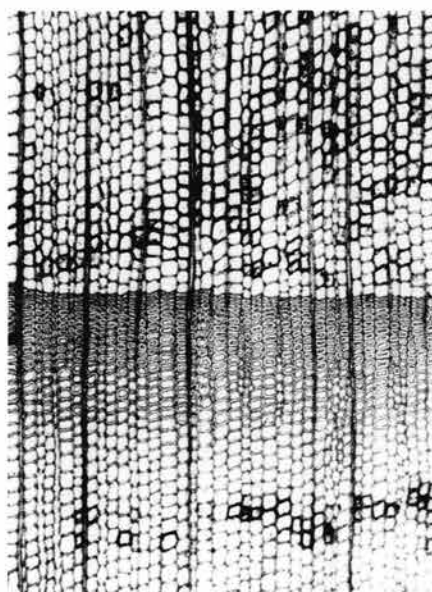
4 イヌガヤ (GSF-190) C×40



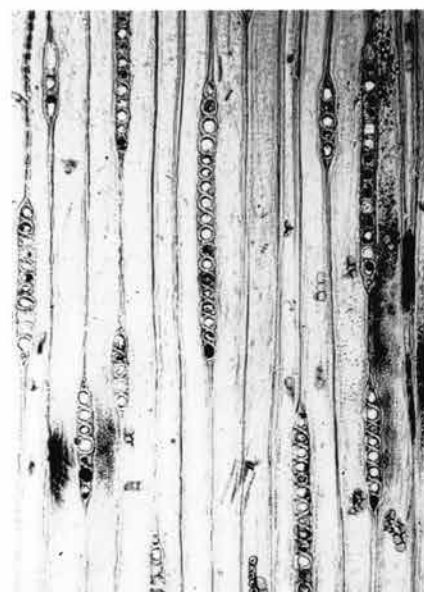
5 同 T×100



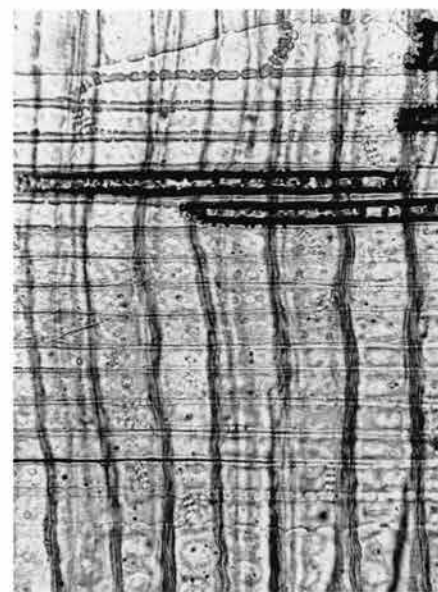
6 同 R×200



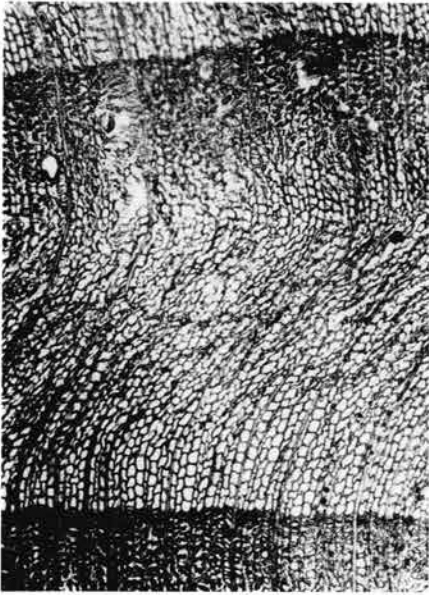
7 モミ類 (GSF-538) C×40



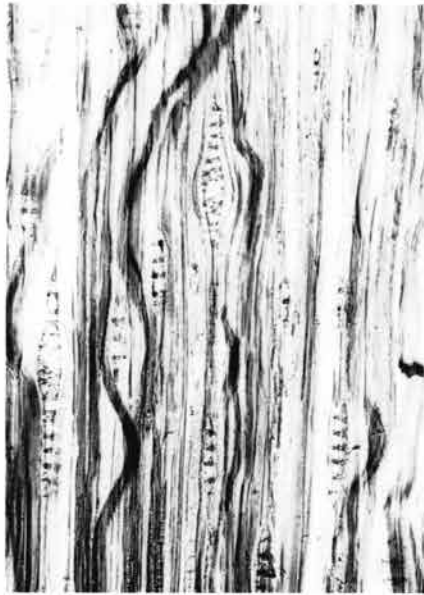
8 同 T×100



9 同 R×200



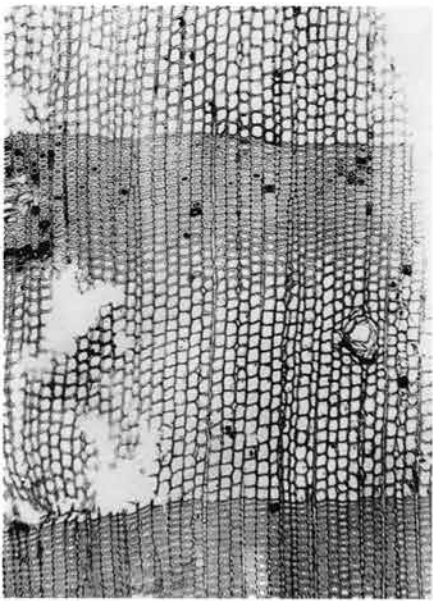
10 トウヒ類 (GSF-884) C×40



11 同 T×100



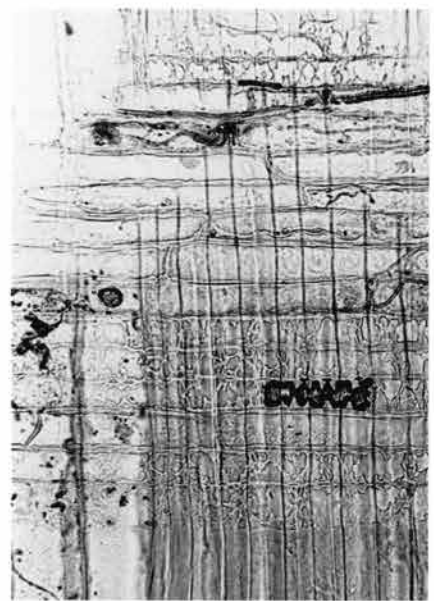
12 同 R×200



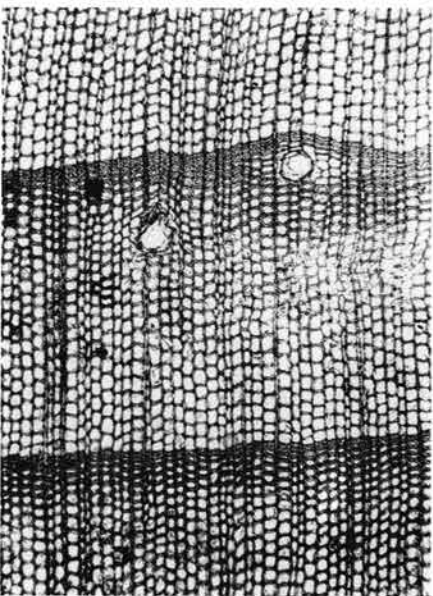
13 アカマツ (GSF-498) C×40



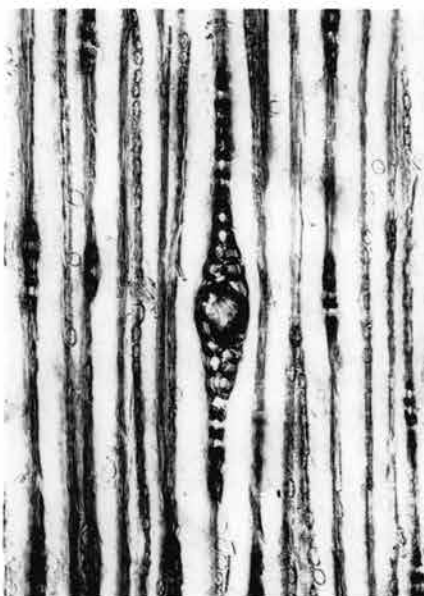
14 同 T×100



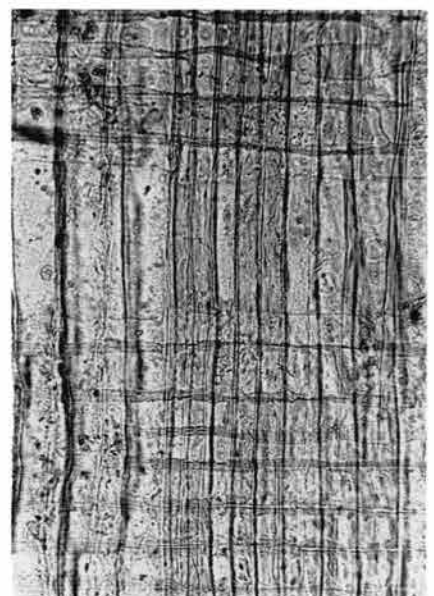
15 同 R×200



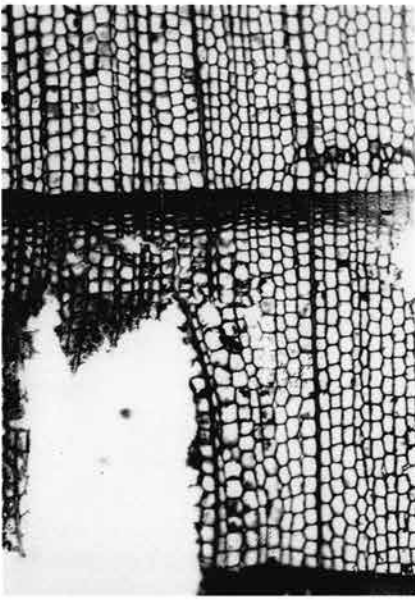
16 五葉松類 (GSF-1044) C×40



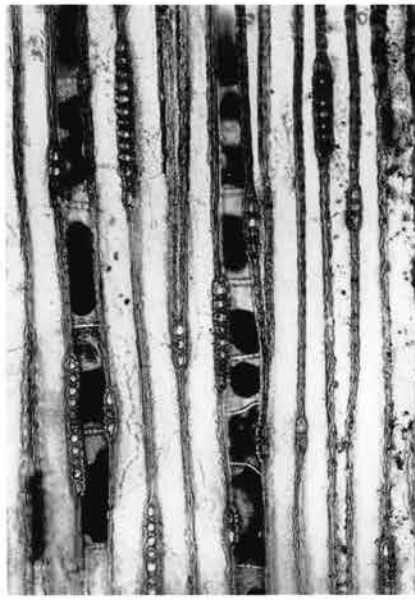
17 同 T×100



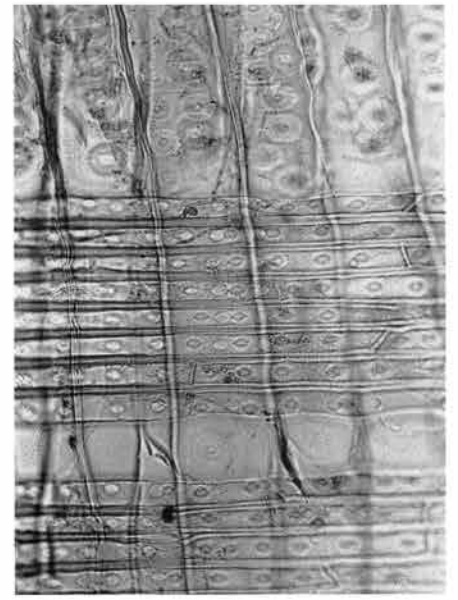
18 同 R×200



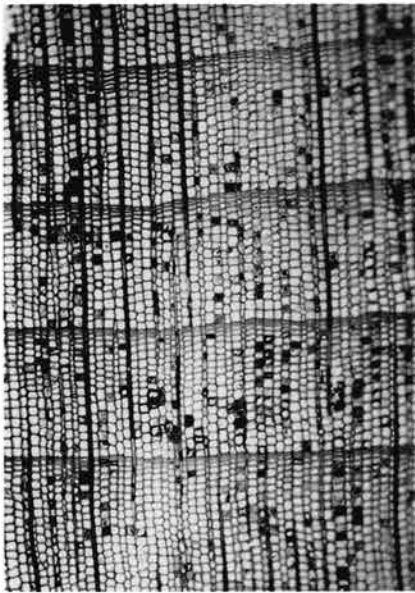
19 スギ(GSF-553) C×40



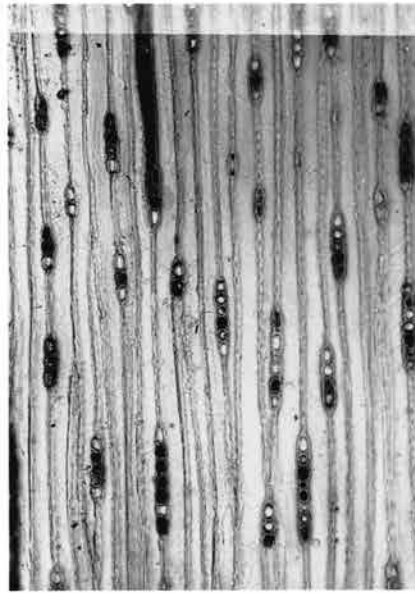
20 同 T×100



21 同 R×200



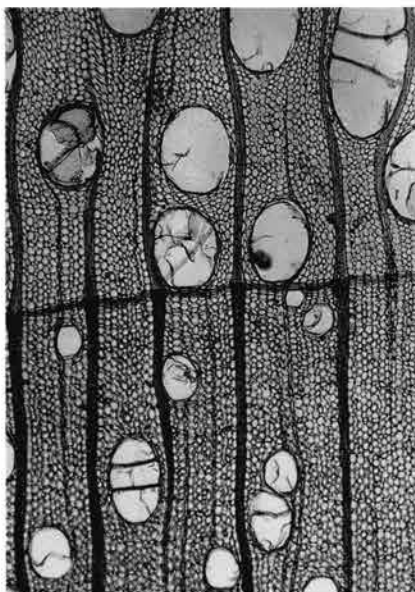
22 ヒノキ類(GSF-841) C×40



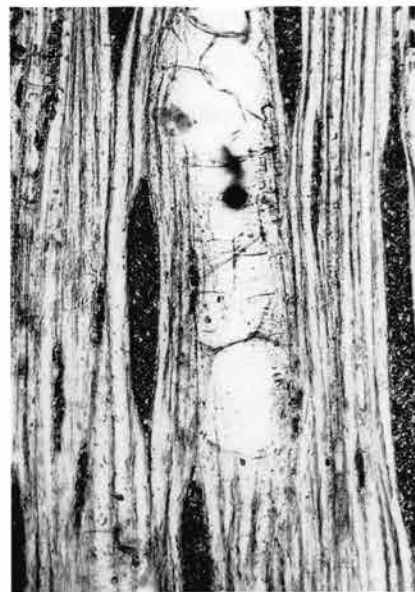
23 同 T×100



24 同 R×200



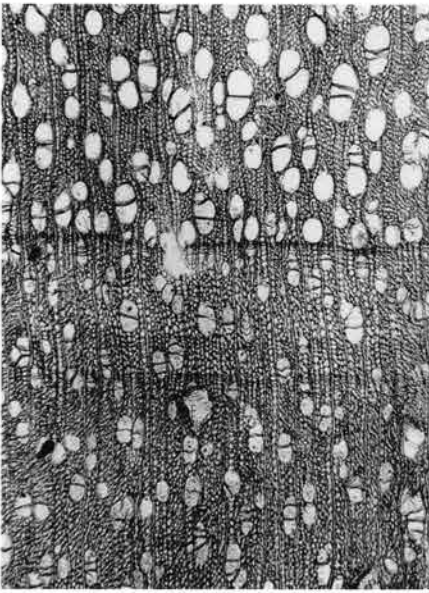
25 オニグルミ(GSF-861) C×40



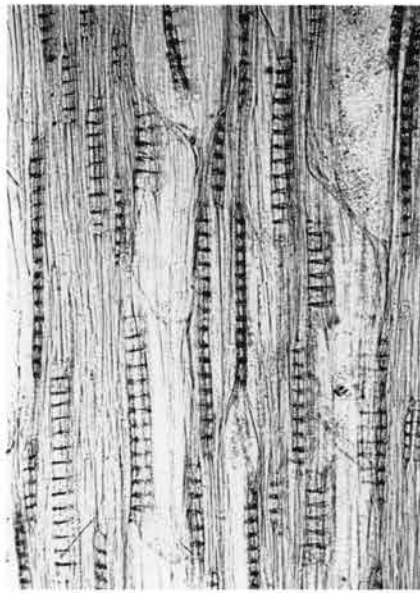
26 同 T×100



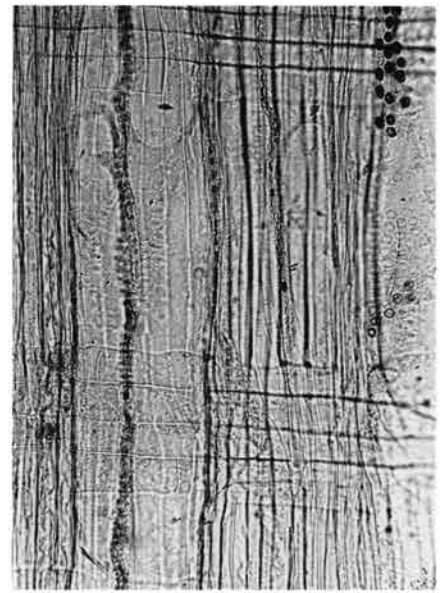
27 同 R×200



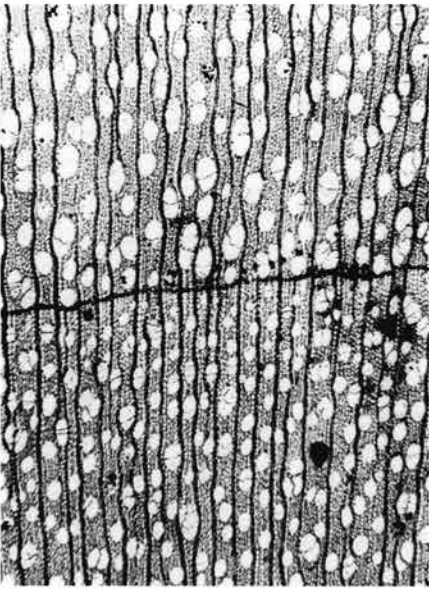
28 ハコヤナギ類(GSF-856) C×40



29 同 T×100



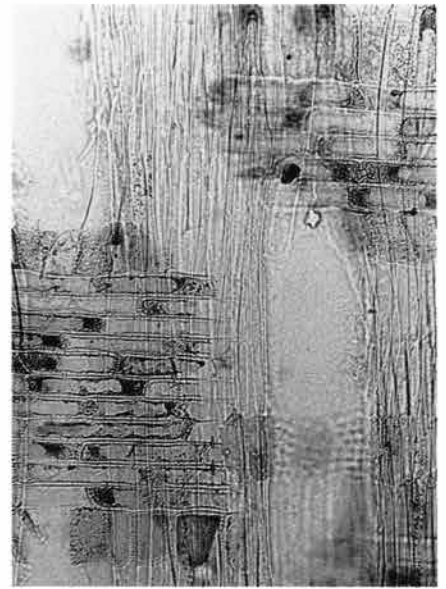
30 同 R×200



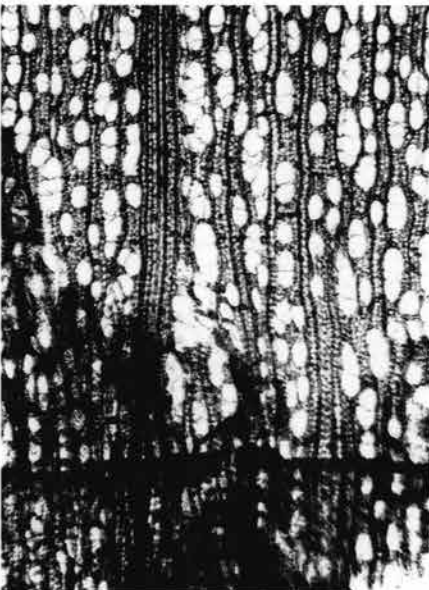
31 ヤナギ類(GSF-824) C×40



32 同 T×100



33 同 R×200



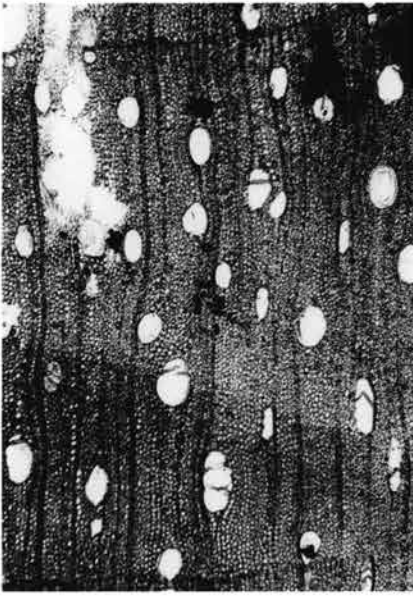
34 ハンノキ類(GSF-125) C×40



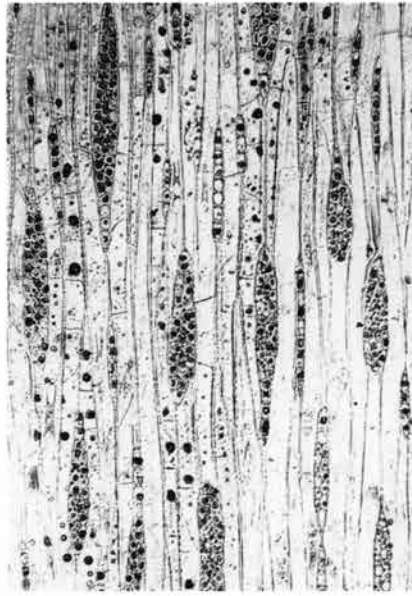
35 同 T×100



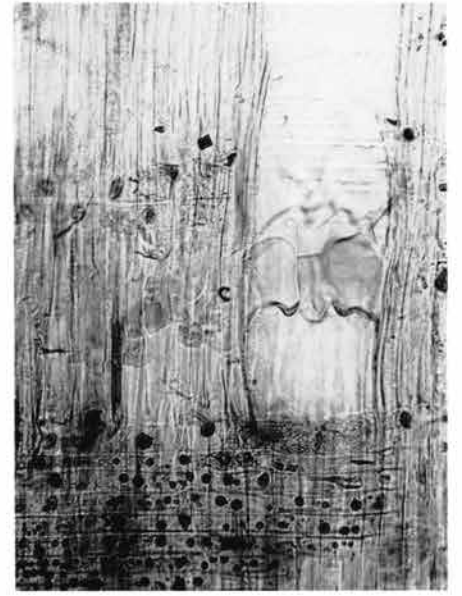
36 同 R×200



37 カバノキ類(GSF-326) C×40



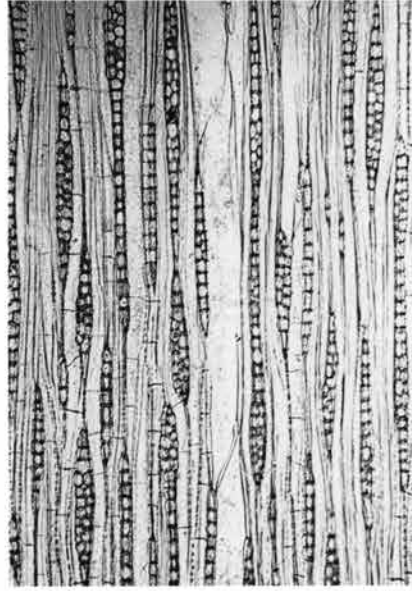
38 同 T×100



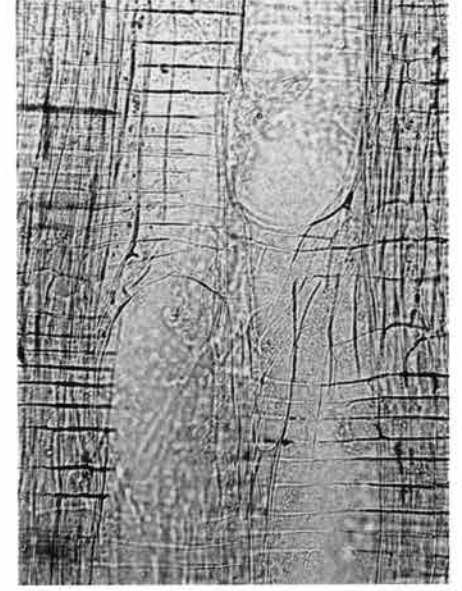
39 同 R×200



40 イヌシデ類(GSF-493) C×40



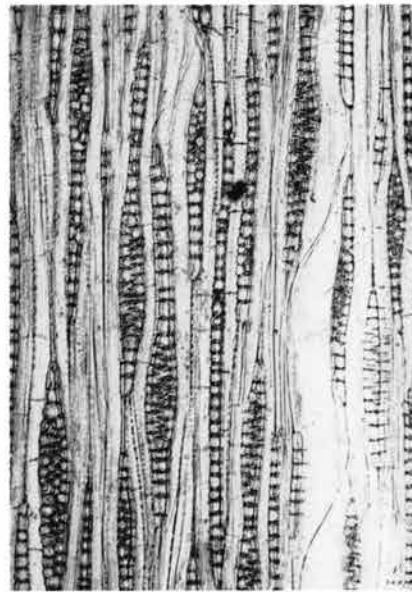
41 同 T×100



42 同 R×200



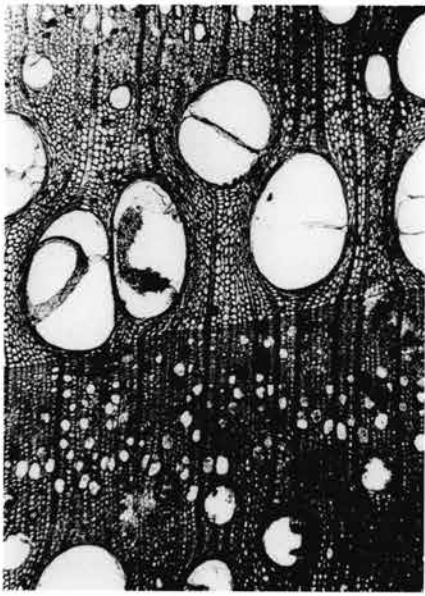
43 アサダ(GSF-868) C×40



44 同 T×100



45 同 R×200



46 クリ(GSF-162) C×40



47 同 T×100



48 同 R×200



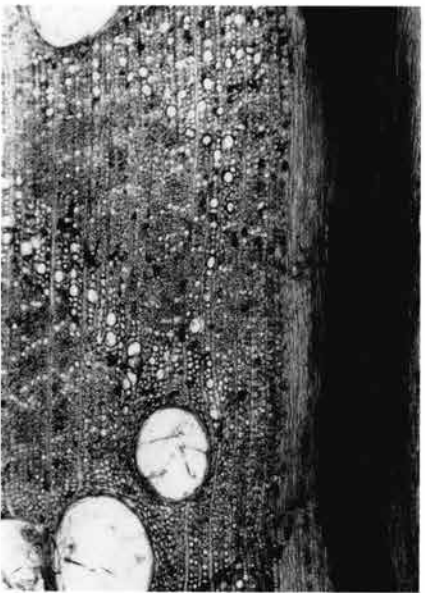
49 クヌギ類(GSF-51) C×40



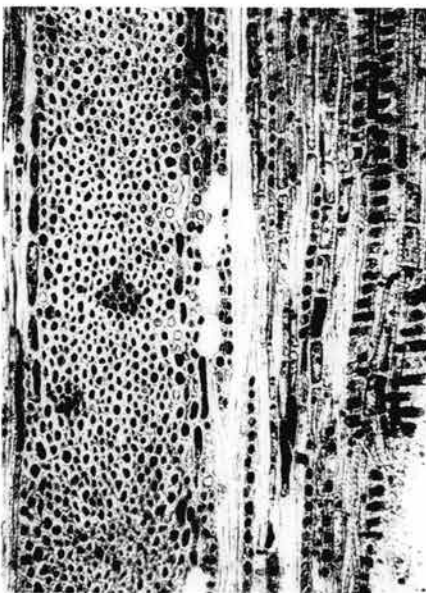
50 同 T×100



51 同 R×200



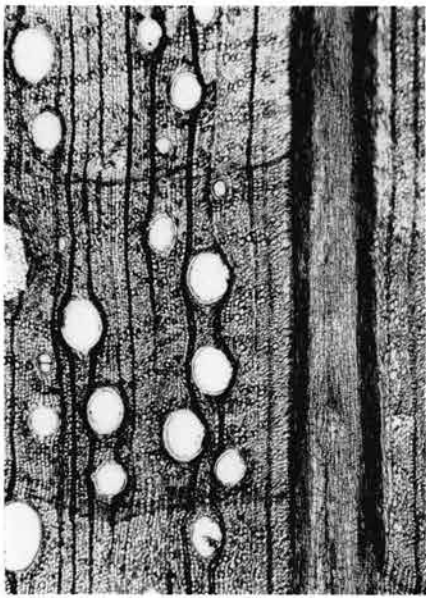
52 ナラ類(GSF-682) C×40



53 同 T×100



54 同 R×200



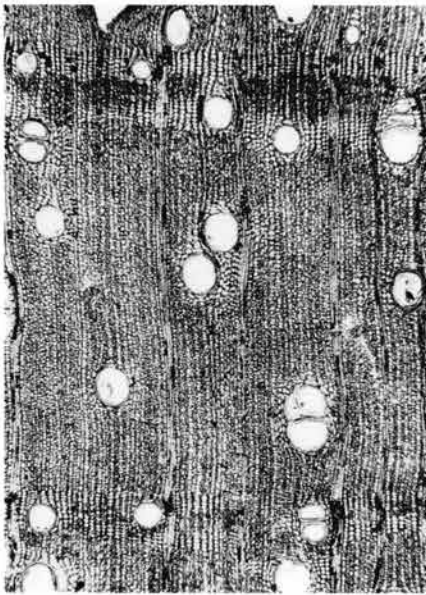
55 カシ類(GSF-223) C×40



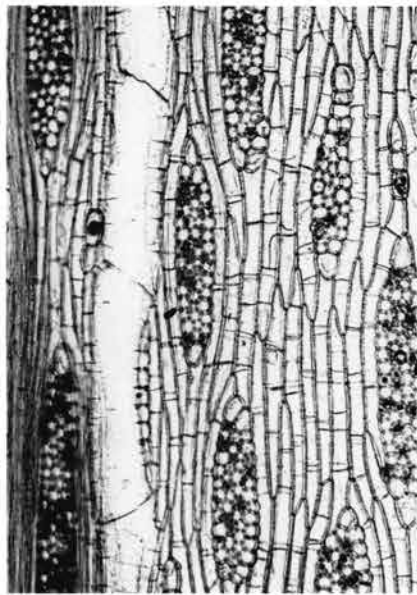
56 同 T×100



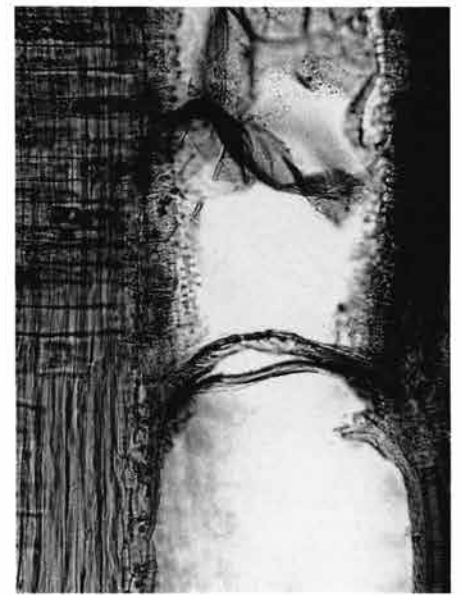
57 同 R×200



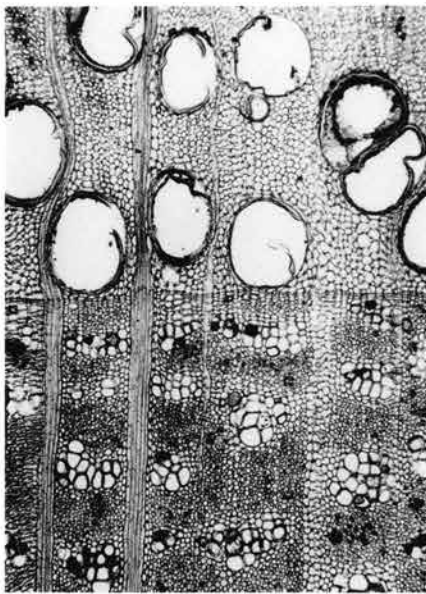
58 ムクノキ(GSF-936) C×40



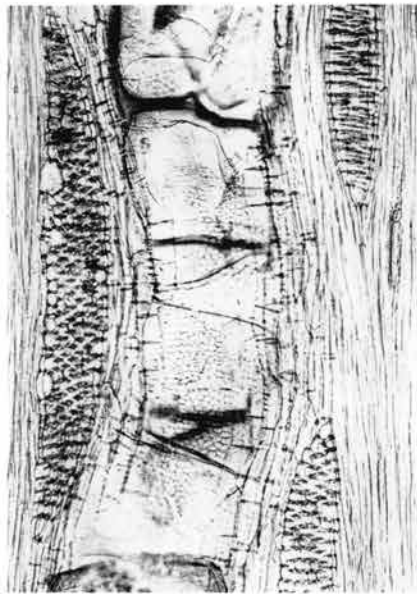
59 同 T×100



60 同 R×200



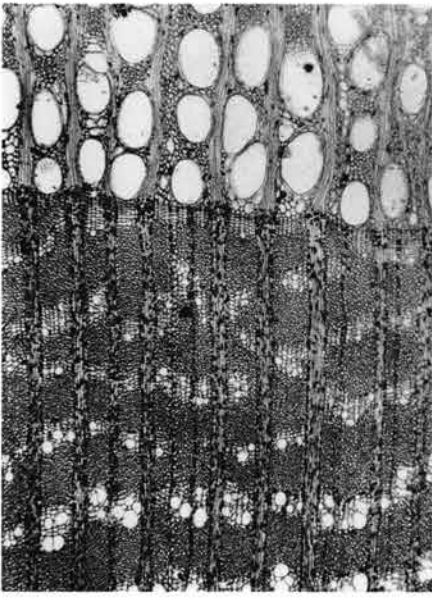
61 エノキ(GSF-330) C×40



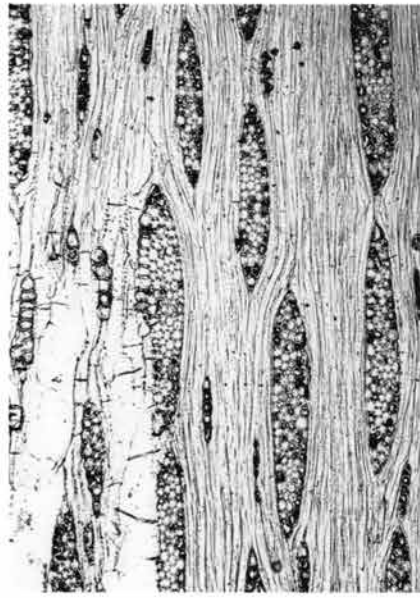
62 同 T×100



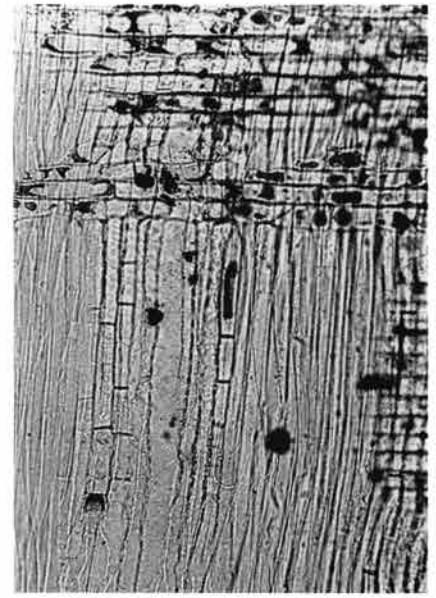
63 同 R×200



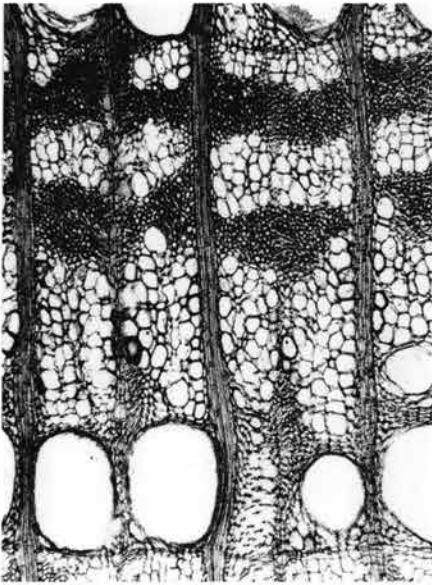
64 ニレ類(GSF-853) C×40



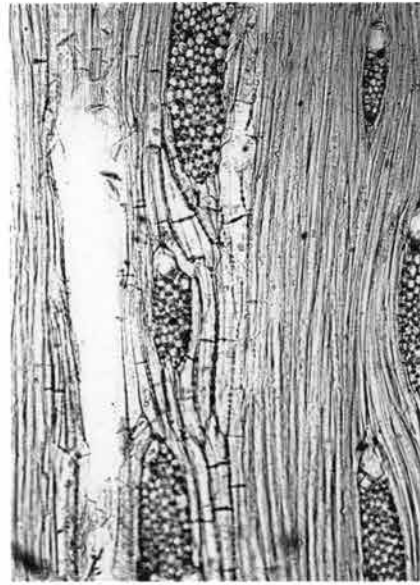
65 同 T×100



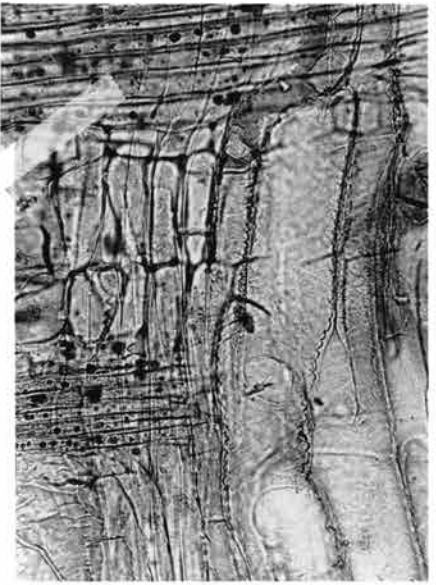
66 同 R×200



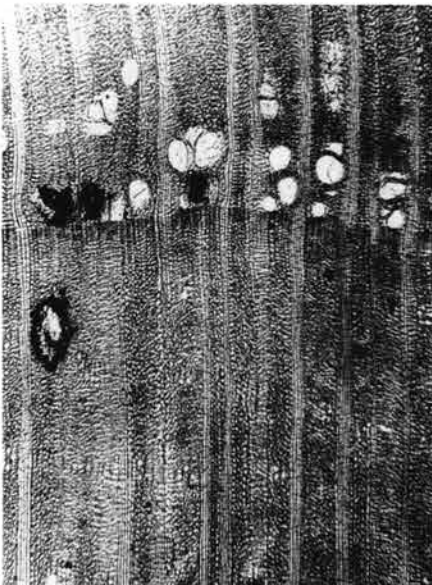
67 ケヤキ(GSF-489) C×40



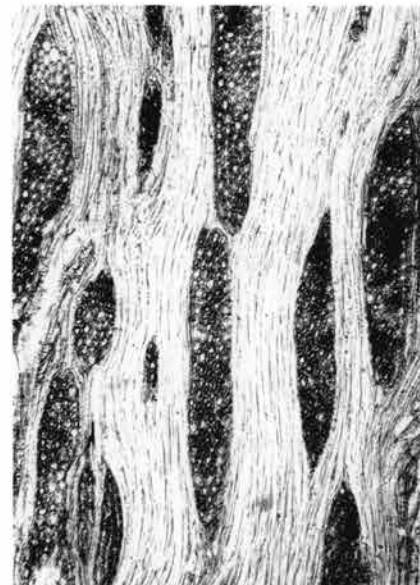
68 同 T×100



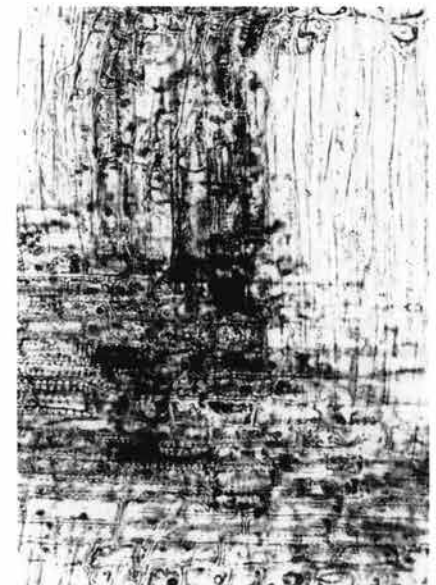
69 同 R×200



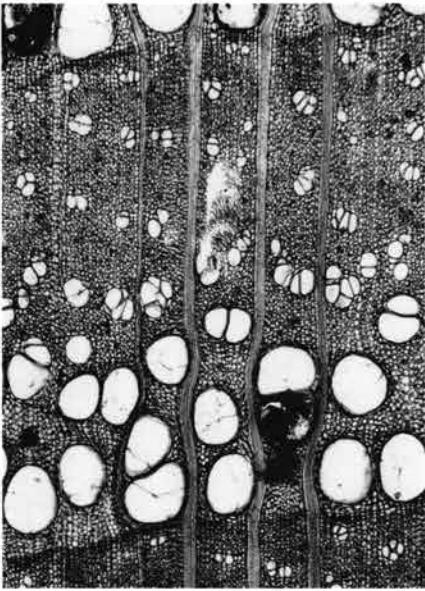
70 ヒメコウゾ(GSF-100) C×40



71 同 T×100



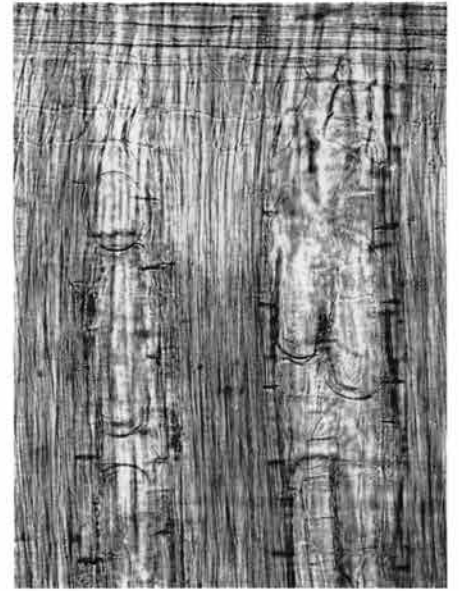
72 同 R×200



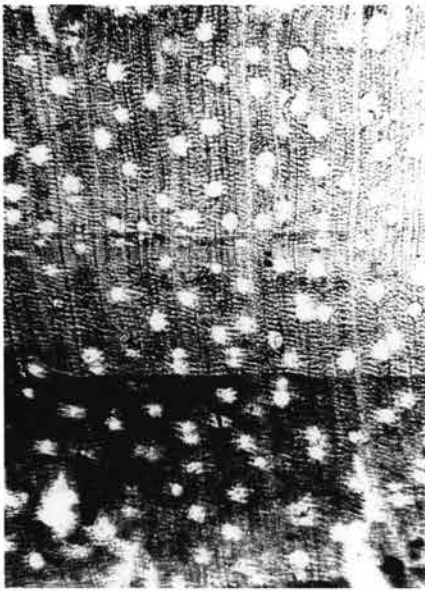
73 ヤマグワ(GSF-651) C×40



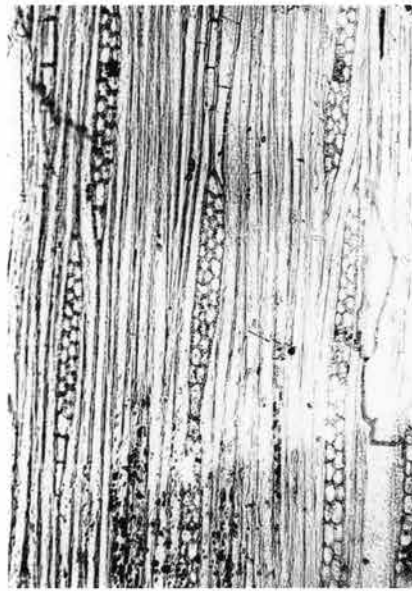
74 同 T×100



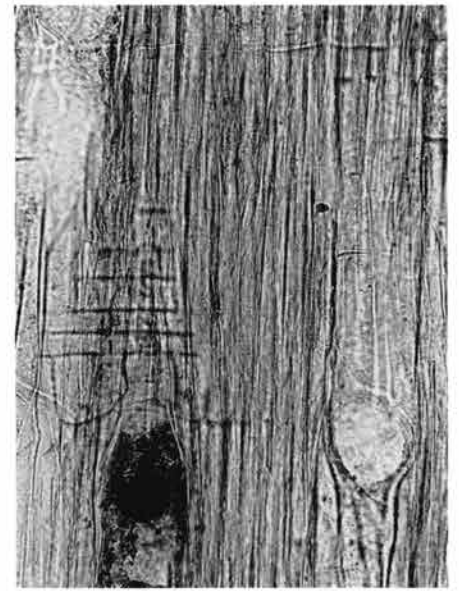
75 同 R×200



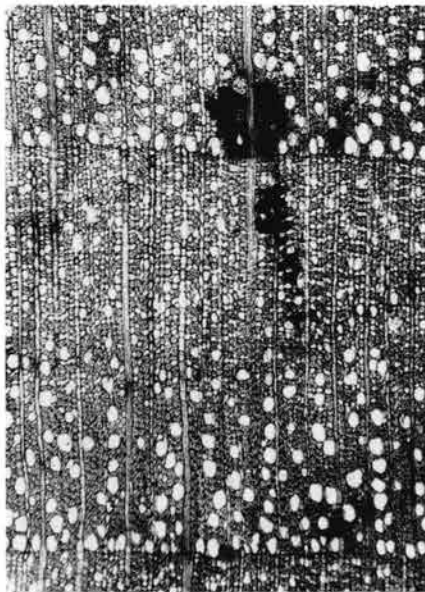
76 クスノキ科(GSF-690) C×40



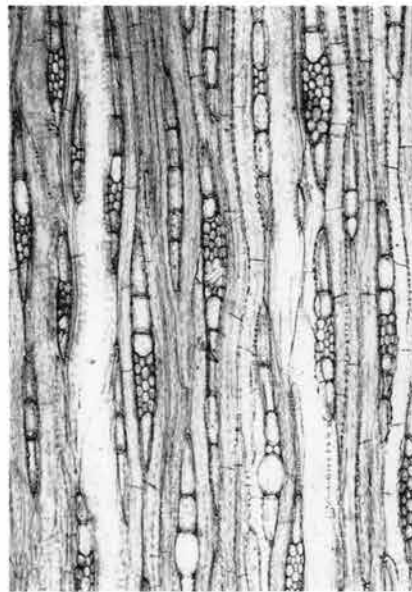
77 同 T×100



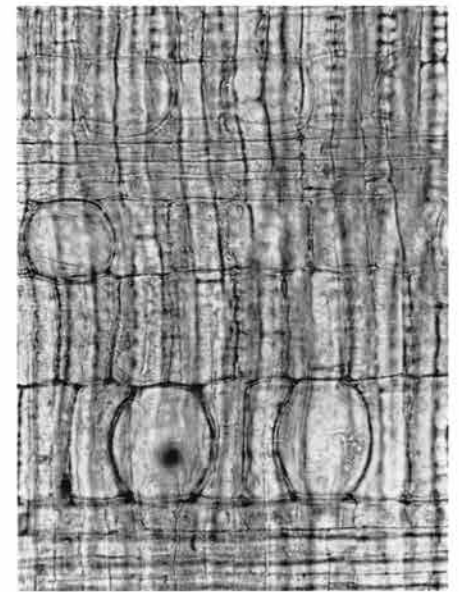
78 同 R×200



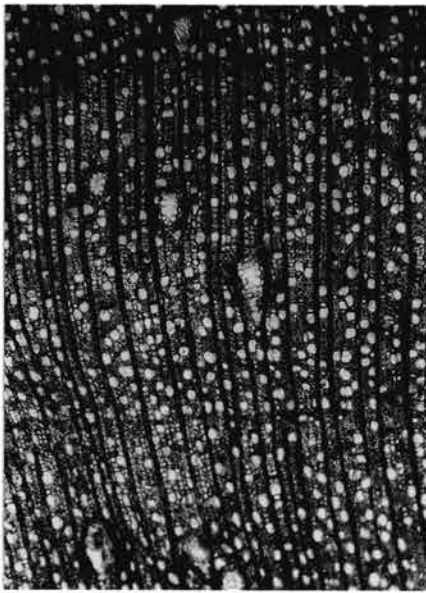
79 ヤブツバキ(GSF-704) C×40



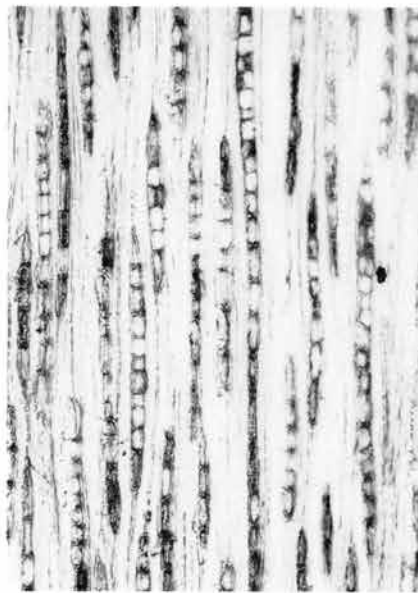
80 同 T×100



81 同 R×200



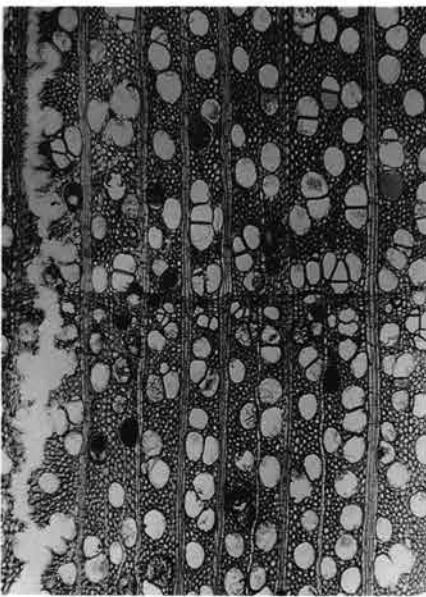
82 サカキ(GSF-160) C×40



83 同 T×100



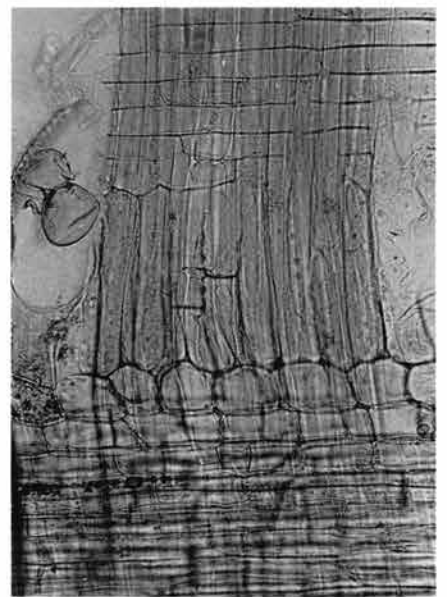
84 同 R×200



85 ヤマザクラ(GSF-386) C×40



86 同 T×100



87 同 R×200



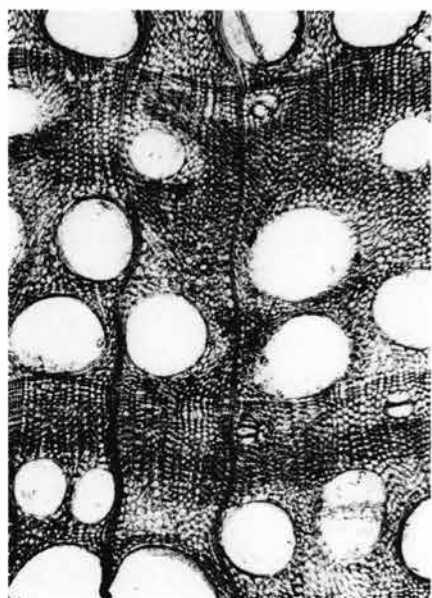
88 モモ(GSF-451) C×40



89 同 T×100



90 同 R×200



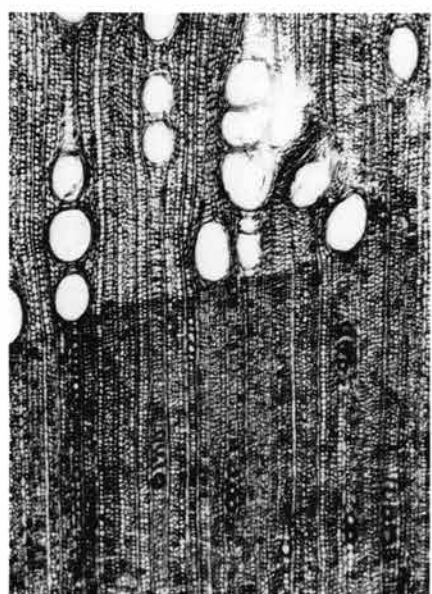
91 ネムノキ(GSF-19) C×40



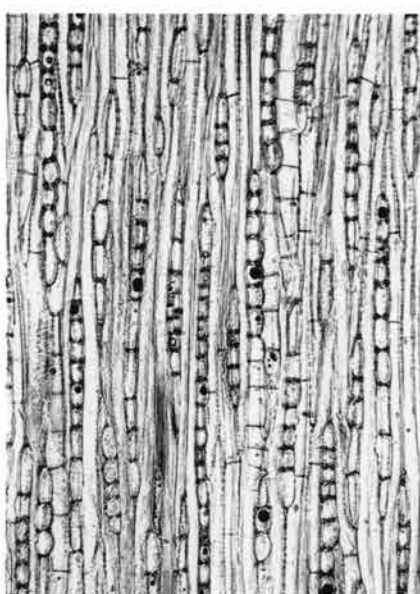
92 同 T×100



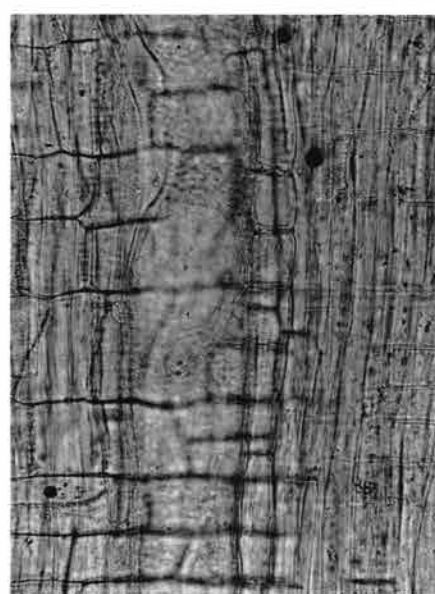
93 同 R×200



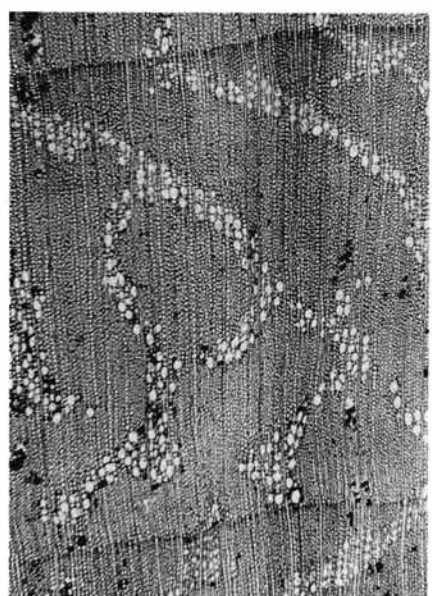
94 アカメガシワ(GSF-982) C×40



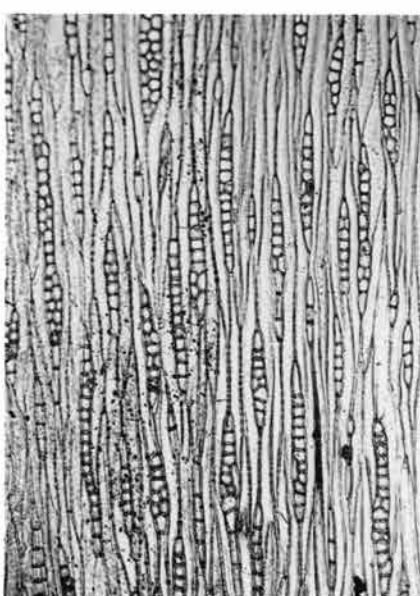
95 同 T×100



96 同 R×200



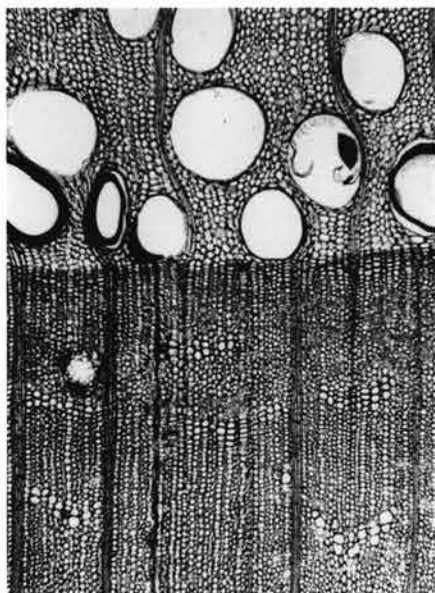
97 コクサギ(GSF-855) C×40



98 同 T×100



99 同 R×200



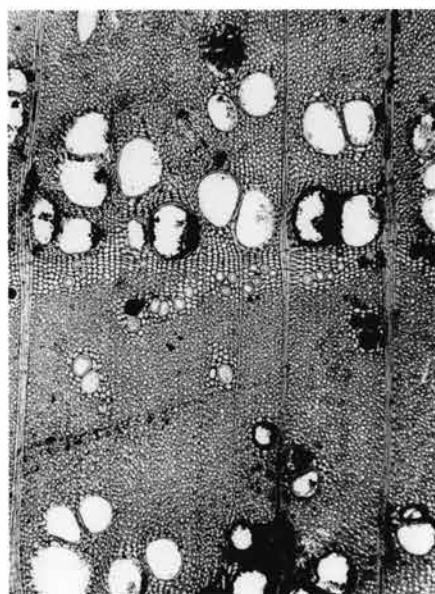
100 キハダ(GSF-149) C×40



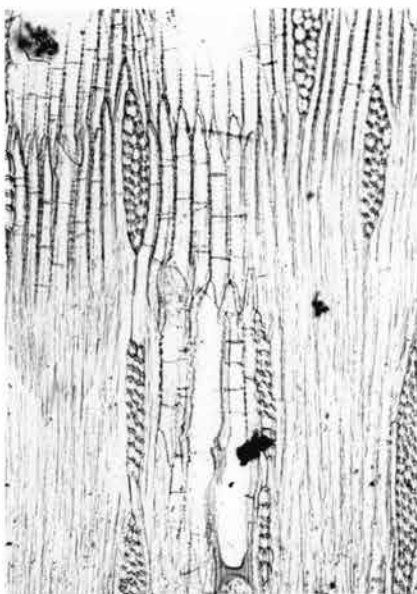
101 同 T×100



102 同 R×200



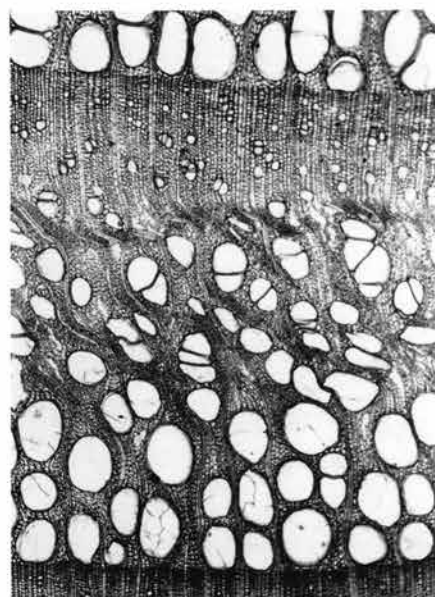
103 ニガキ(GSF-24) C×40



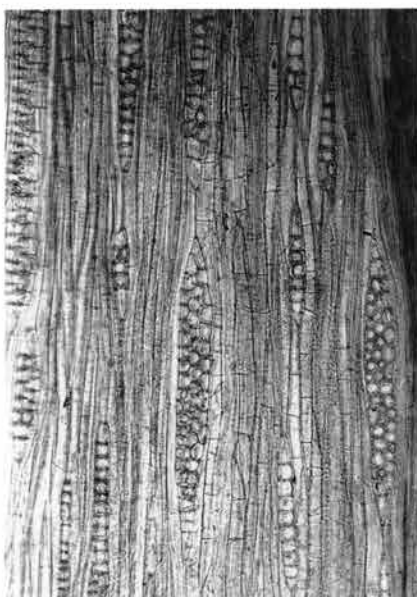
104 同 T×100



105 同 R×200



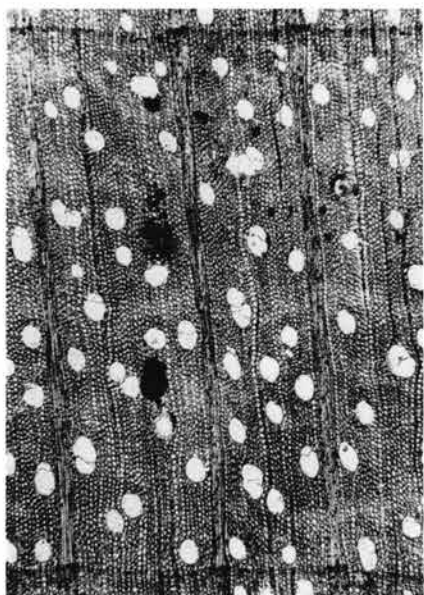
106 ヤマウルシ(GSF-1079) C×40



107 同 T×100



108 同 R×200



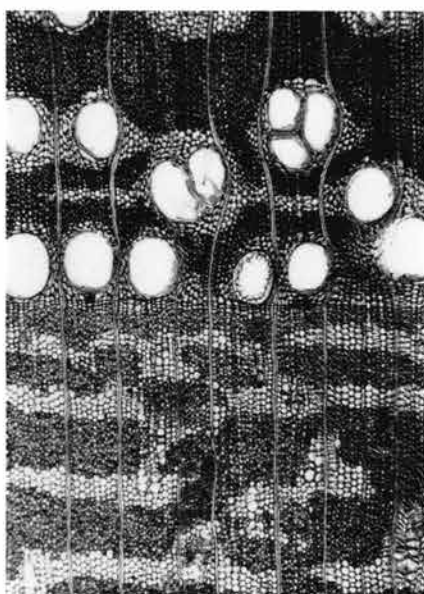
109 カエデ類(GSF-922) C×40



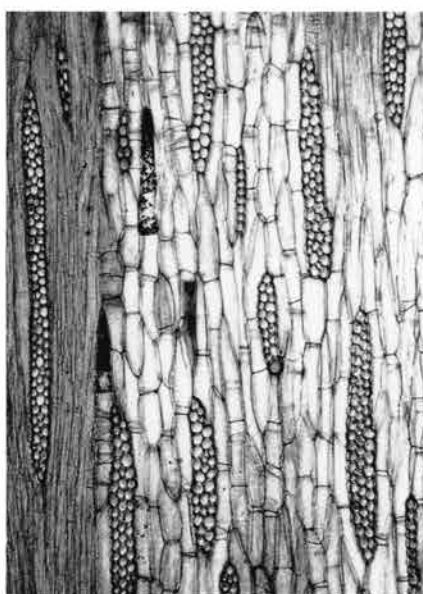
110 同 T×100



111 同 R×200



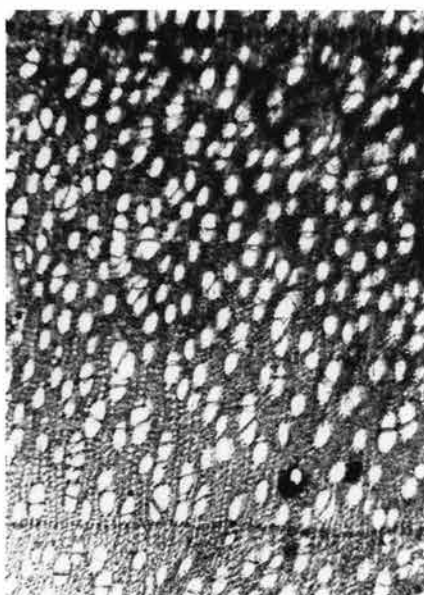
112 ムクロジ(GSF-1053) C×40



113 同 T×100



114 同 R×200



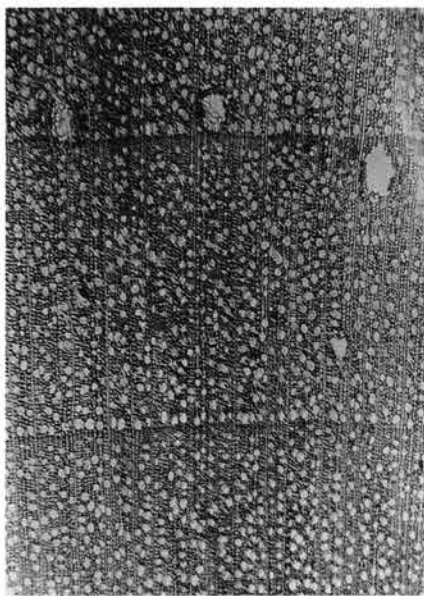
115 トチノキ(GSF-609) C×40



116 同 T×100



117 同 R×200



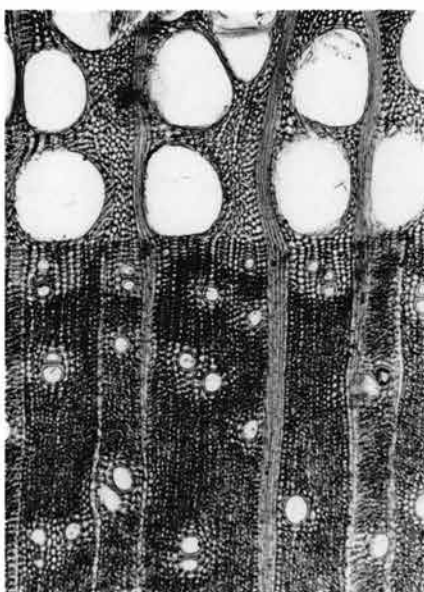
118 ニシキギ類(GSF-113) C×40



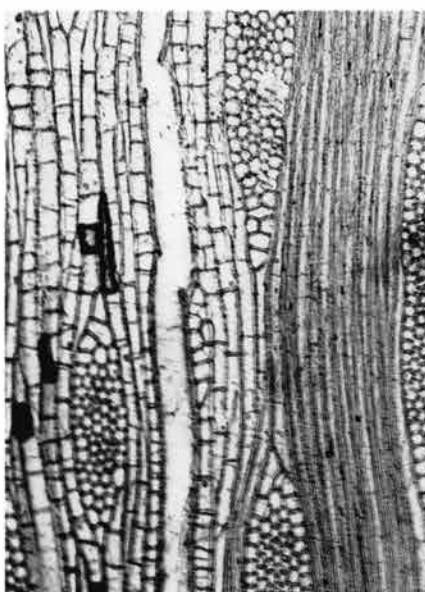
119 同 T×100



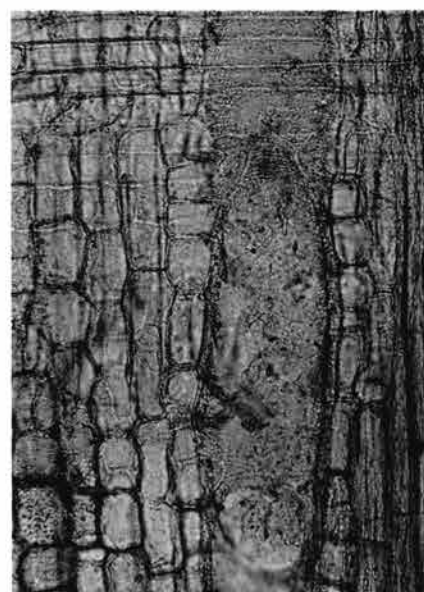
120 同 R×200



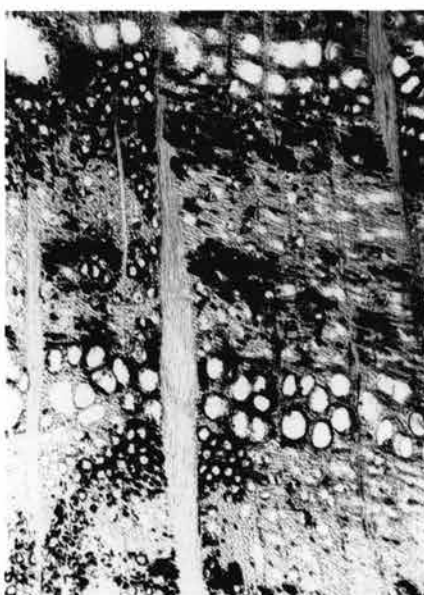
121 ケンボナシ類(GSF-96) C×40



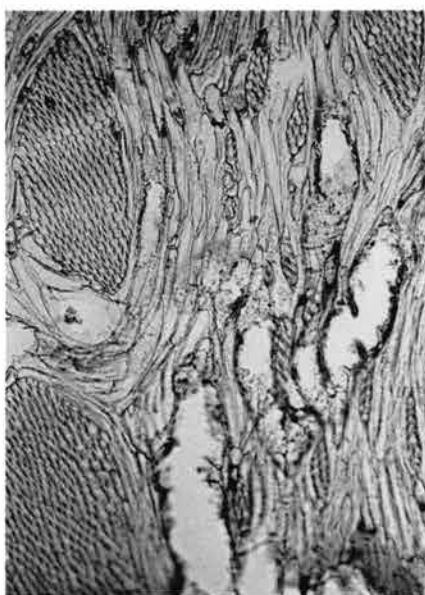
122 同 T×100



123 同 R×200



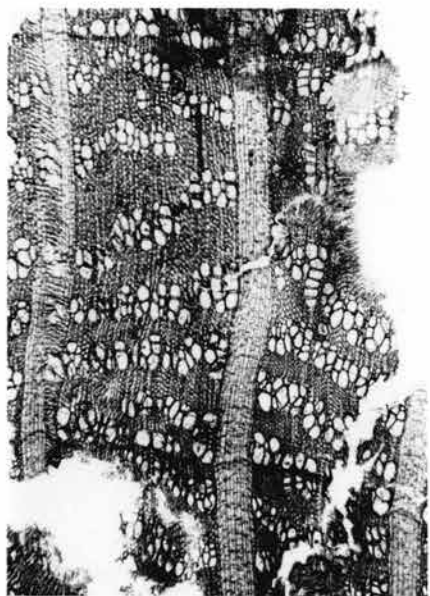
124 グミ類(GSF-67) C×40



125 同 T×100



126 同 R×200



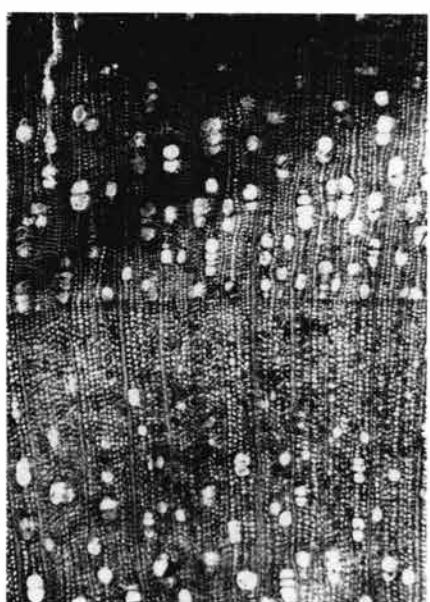
127 ウコギ類(GSF-209) C×40



128 同 T×100



129 同 R×200



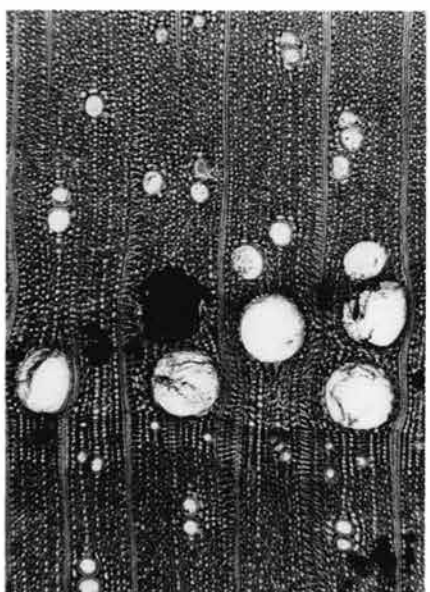
130 エゴノキ類(GSF-692) C×40



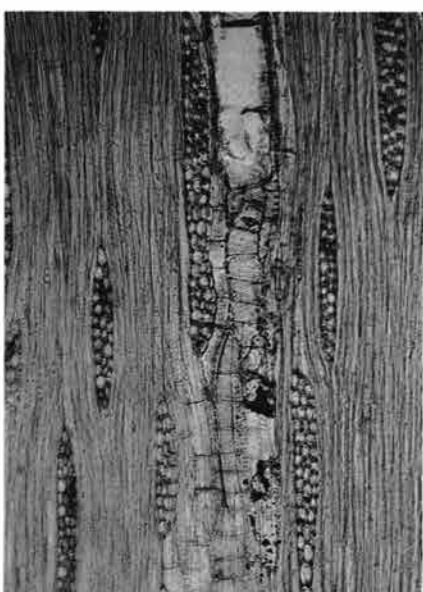
T×100



R×200



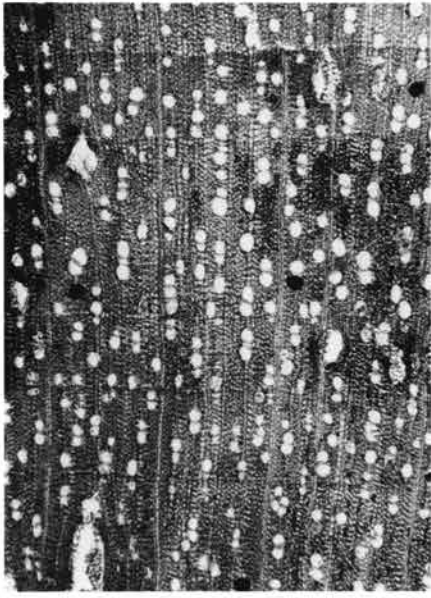
133 トネリコ類(GSF-439) C×40



134 同 T×100



135 同 R×200



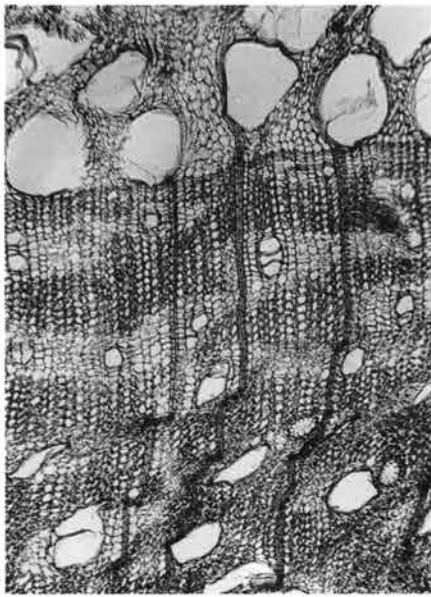
136 ムラサキシキブ(GSF-248) C×40



137 同 T×100



138 同 R×200



139 キリ(GSF-1045) C×40



140 同 T×100



141 同 R×200



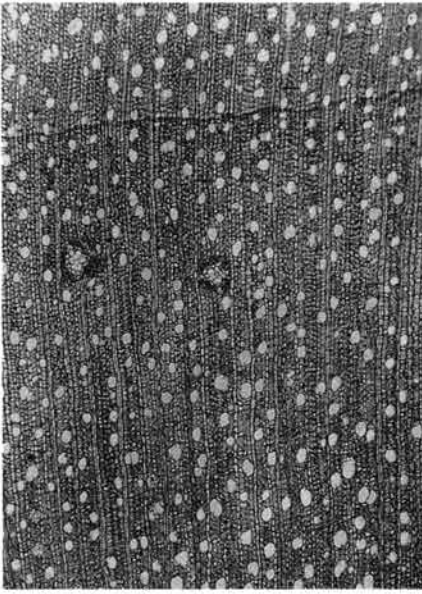
142 ニワトコ(GSF-423) C×40



143 同 T×100



144 同 R×200



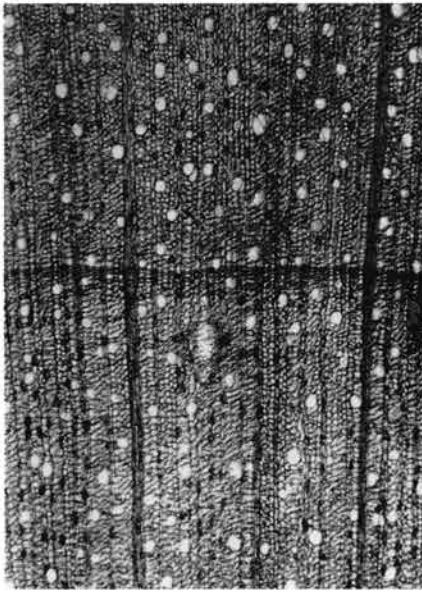
145 ガマズミ類A (GSF-813) C×40



146 同 T×100



147 同 R×200



148 ガマズミ類B (GSF-955) C×40

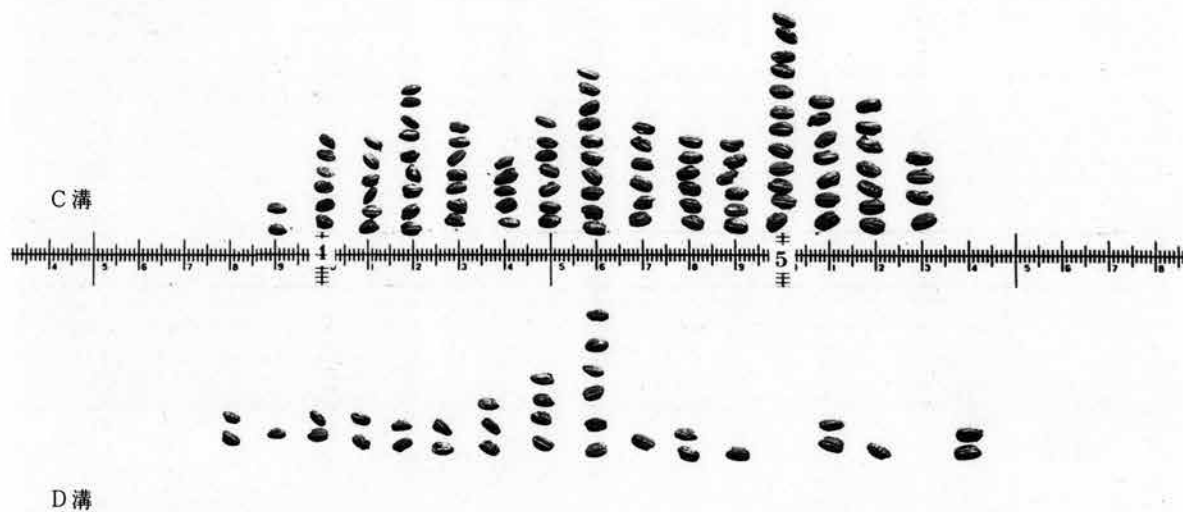


149 同 T×100

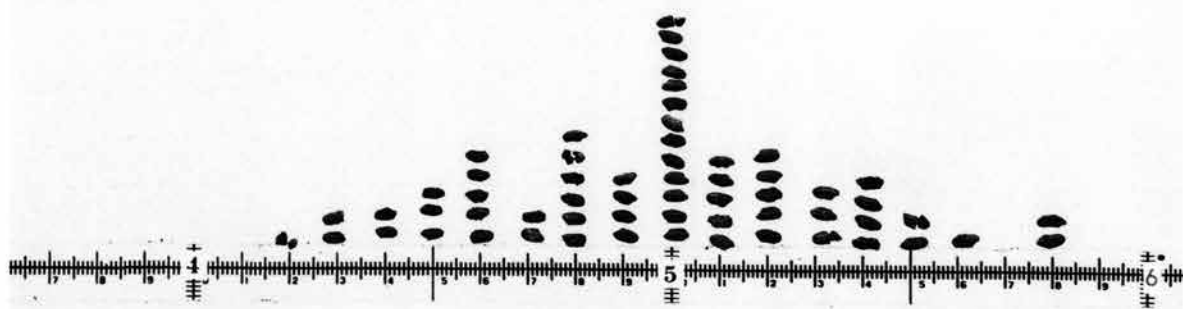


150 同 R×200

KK13-C大溝 出土粒の粒長のヒストグラム



有馬条里 No.347住壺中米粒



No. 1 C溝粳



No. 2 2B溝粳2粒



No. 3



B-1



2



7



5



15



14



42



28



56



43



73



75



89



104



121



131



138



144



2 B-1



2



3



6



17



21



C-1



3



10



15



21



38



C-51

60

67

75

81

89

96



E-1

3

12

13

28

24

26



有-4

1



有馬条里 No.347住壺中米塊



有-7

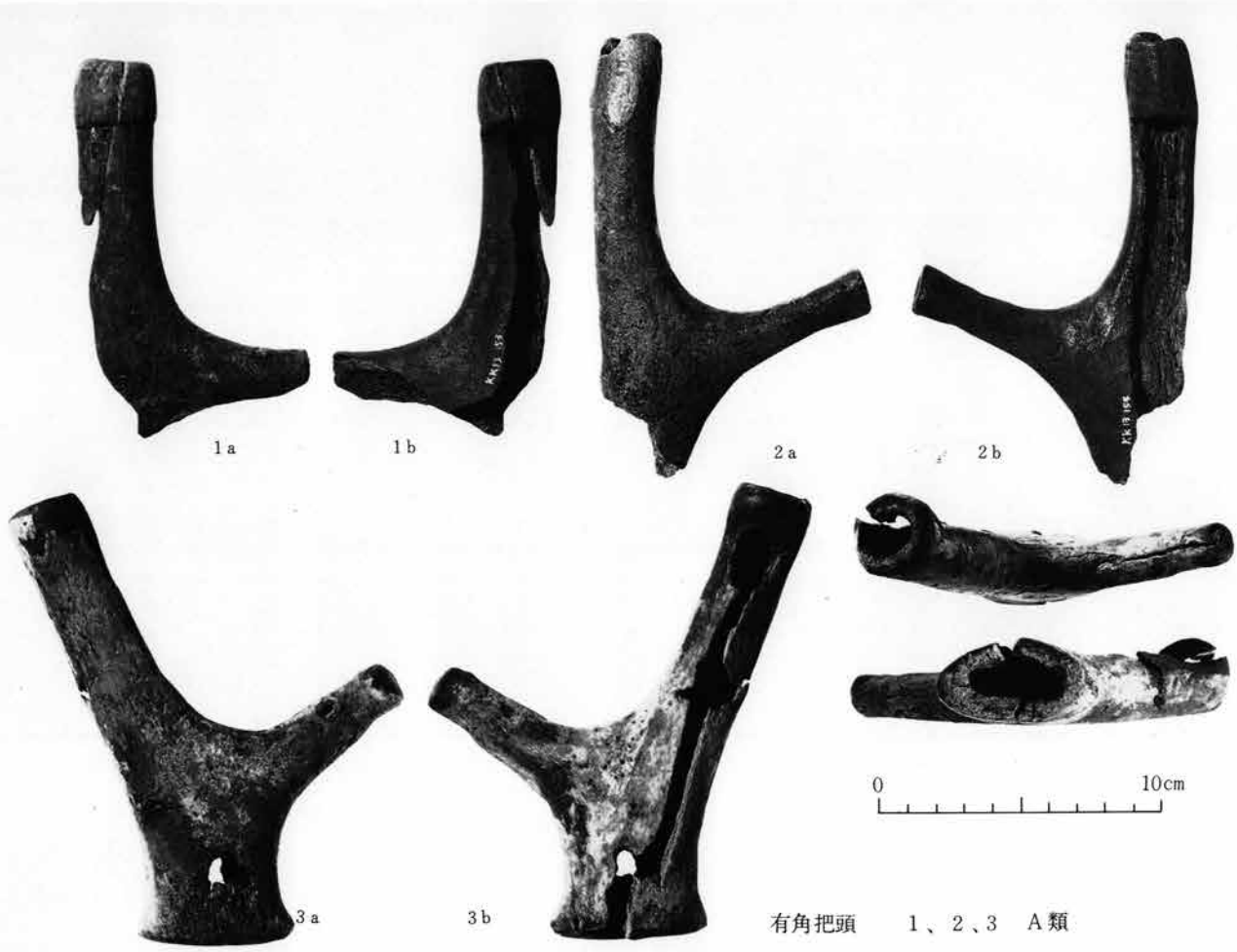
22

35

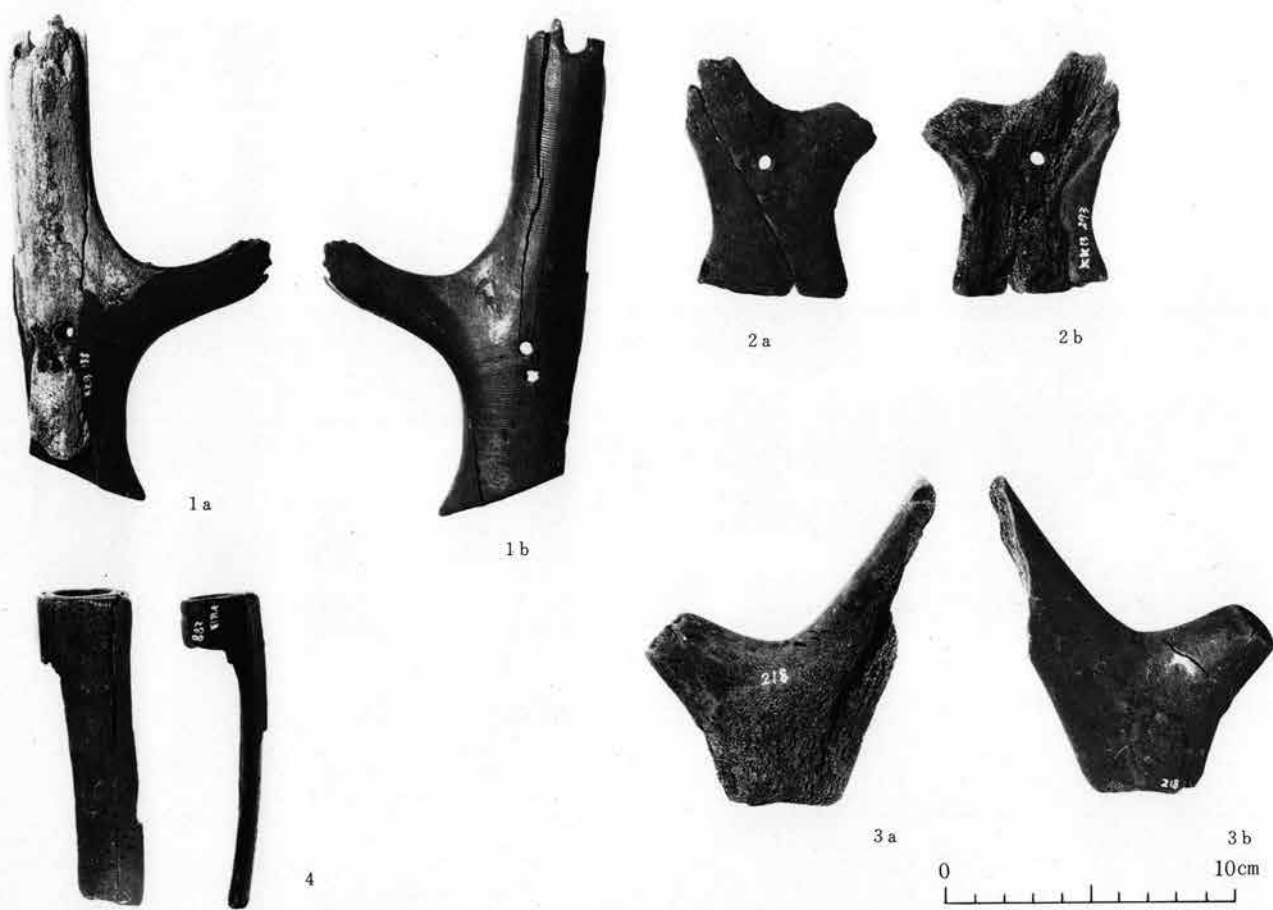
47

57

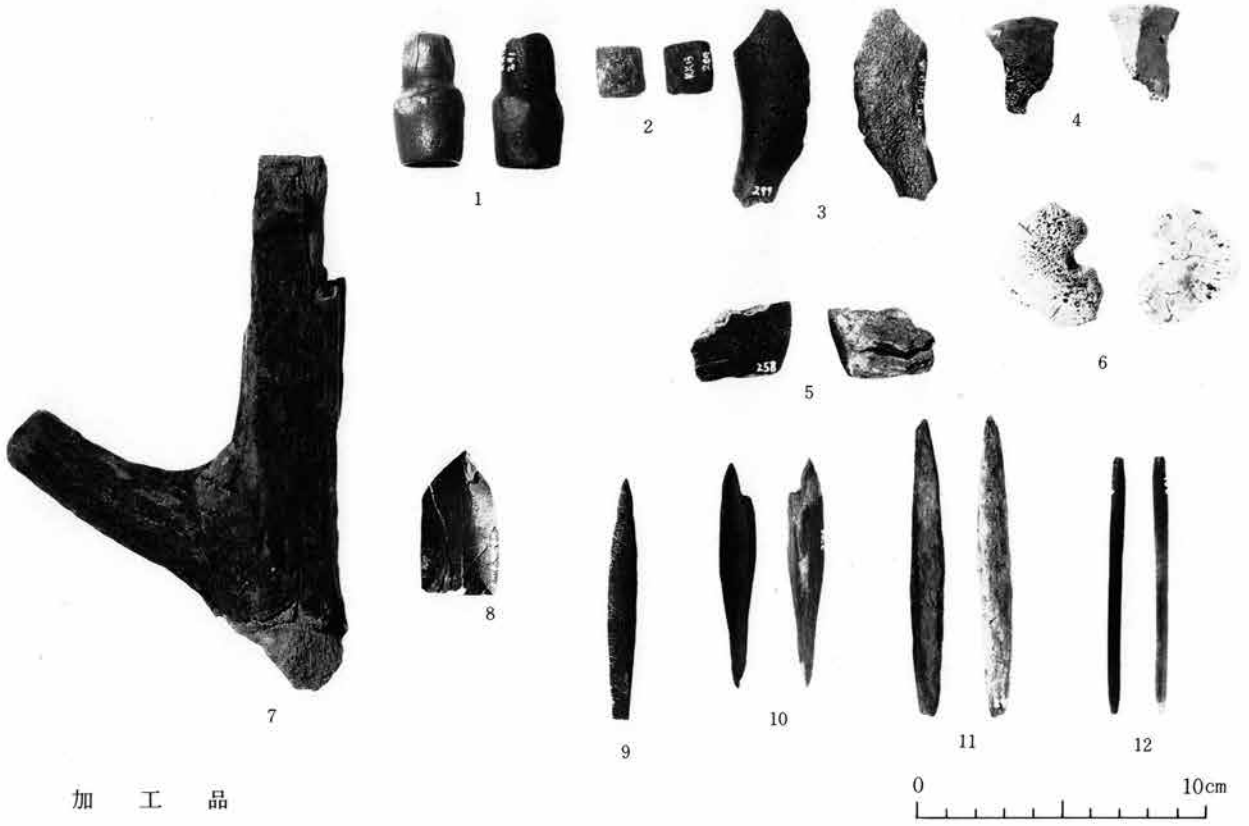
52



有角把頭 1、2、3 A類

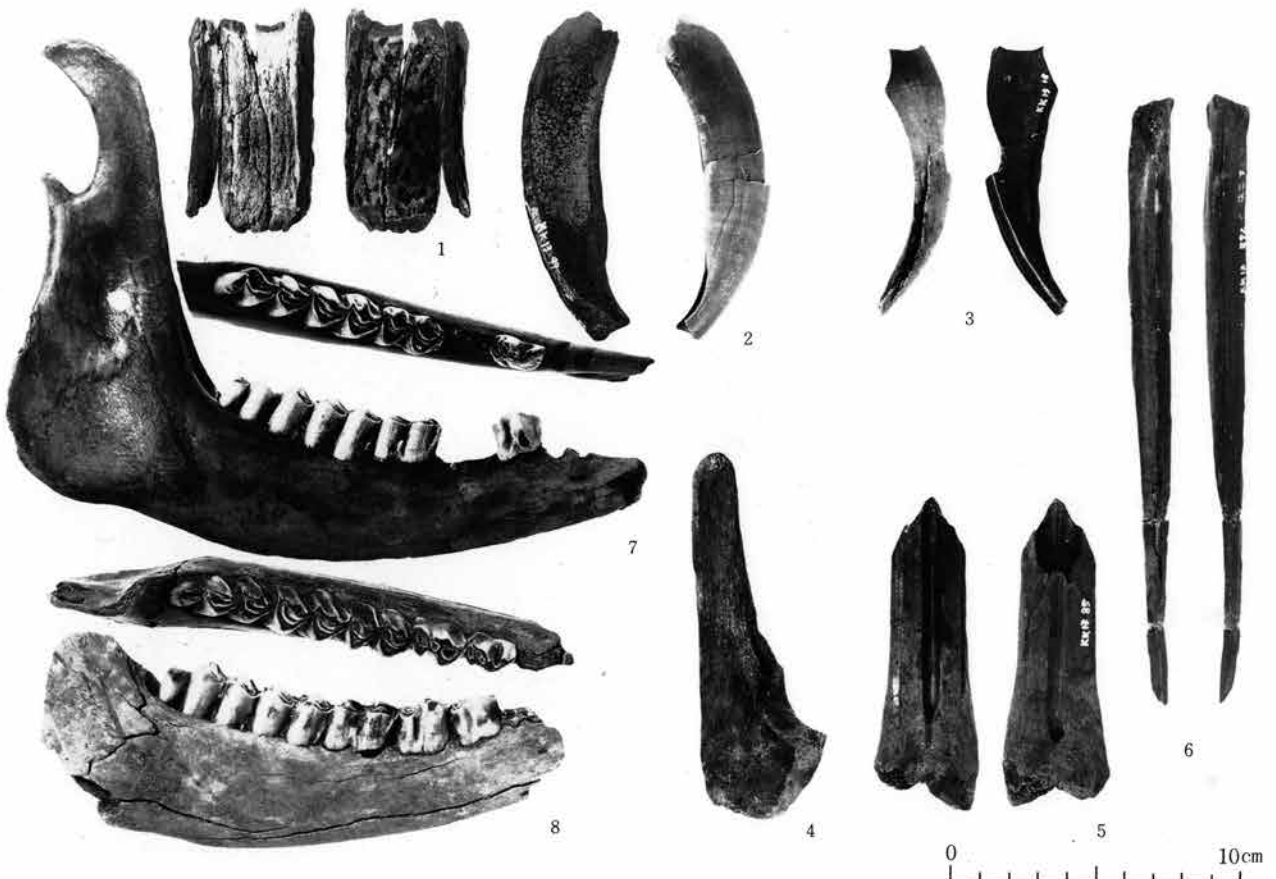


有角把頭 1 C類 2、3 B類 4 有角把頭部分

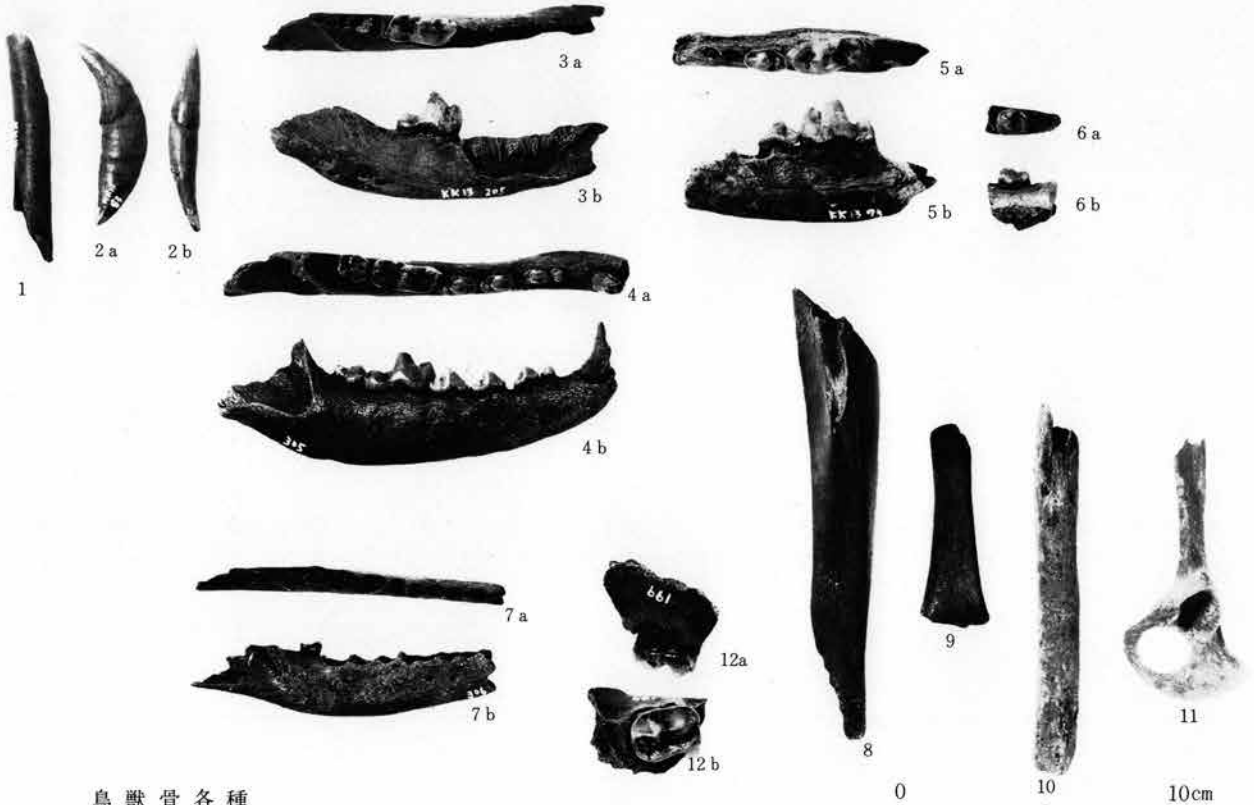


加工品

1. 頸状加工品 2. 玉状加工品 3. 有角把頭破片 4~6. 紡錘車 7. 有角把頭未製品 8. イノシシ犬歯製の鎌
9. ヤス状刺突具 10. 骨製鎌 11. ヤス状刺突具 12. 骨針



加工品 1. 鹿角半截品 2. へら状製品(イノシシ下顎犬歯) 3. 錐(イノシシ下顎犬歯) 4. へら状製品(シカ尺骨)
5. 溝付け加工をもつシカ中足骨 6. シカ中足骨縦割り加工品 7. シカ下顎骨穿孔研磨加工品 8.



鳥 獸 骨 各 種

1. ガン類右上腕骨片 2. オオカミ右下顎犬歯 3・4. イヌ右下顎骨 5・6. イヌ左下顎骨 7ab, キツネ右下顎骨 8. オオカミ右脛骨片 9. イヌ右上腕骨 10. イヌ左脛骨 11. タヌキ左寛骨 12ab, ツキノワグマ右上顎骨M²



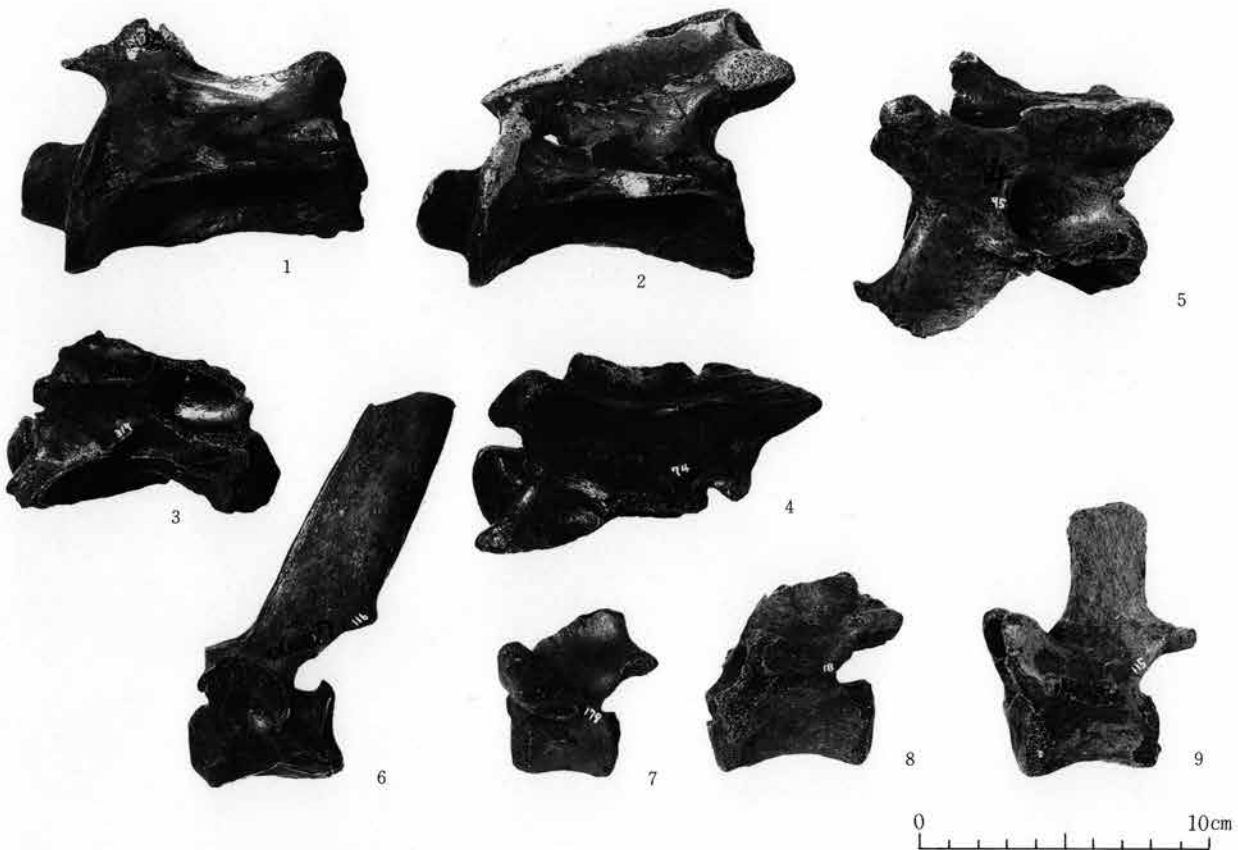
ニホンジカ角と肋骨片

1～4. 左角座部(落角)、いずれも角坐の直上に刻み、切痕がみられる。5・6. 左角第三枝分岐部を切断 7・8. 角枝部分の切断品 9. 肋骨近位端、切痕がつく。



ニホンジカ角

1～3. 左角座骨と角座部 4. 左角座骨 5. 右角座骨(内側)、5、6は角を角座直下で切断 6. 左角座骨で落角

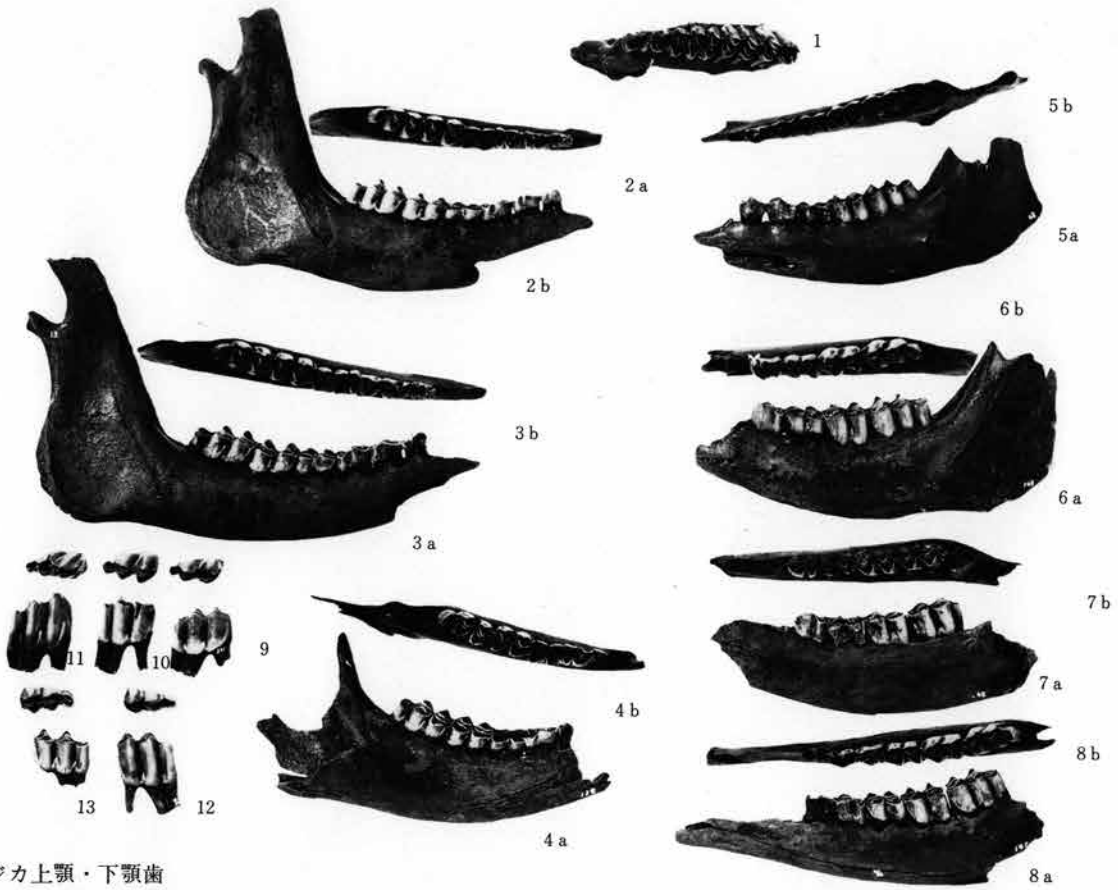


ニホンジカ脊椎骨

1、2. 軸椎 3、4. 第3頸椎 5. 第4頸椎 6、7. 胸椎 8、9. 腰椎

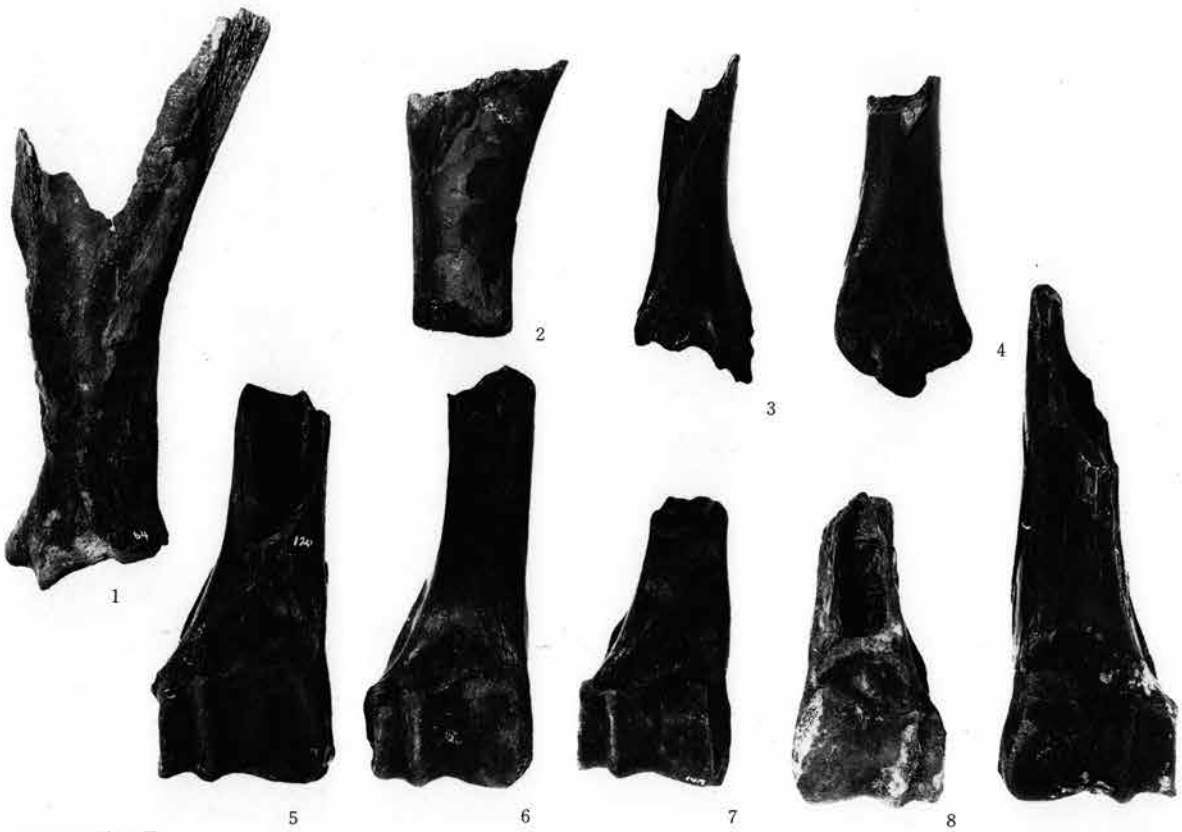


1. 右第2枝 2. 左第2·3枝 3. 左落角 4. 左角(第1·2枝)



ニホンジカ上顎・下顎歯

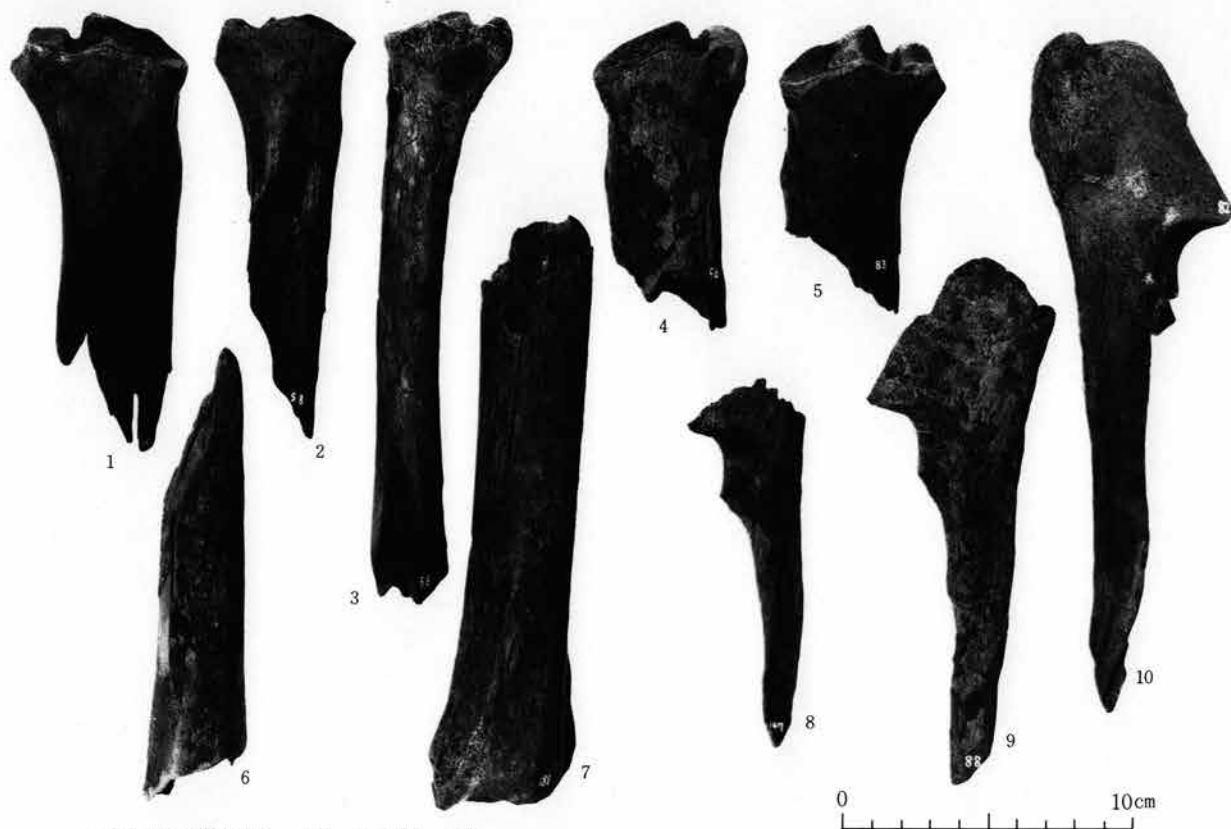
1. 左上顎骨 2ab~4ab, 右下顎骨 5ab~8ab, 左下顎骨(a:側面, b:咬面) 9~11, 右M₃ 12, 13, 左M₃



ニホンジカ前肢骨

1. 左肩甲骨 2~4, 8, 9. 左上腕骨遠位部 5~7. 右上腕骨遠位部
(5~9は大小の差を示す。2~4の両端にはかじり痕、5~9の上には螺線状割れ口が種々なかたちでみられる。)

0 10cm



ニホンジカ橈骨(1~7)、尺骨(8~10)

1、2. 右近位部 3~5. 左近位部 6、7. 遠位部 8、9. 左 10. 右 1~7の骨幹部に螺線状割れ口がきれいにみえる(1・3を除く。)また雌雄差を示す大きさがみられる。



ニホンジカ中手骨(1~5)、中足骨(6~9)、基節骨(11・12)、末節骨(13)

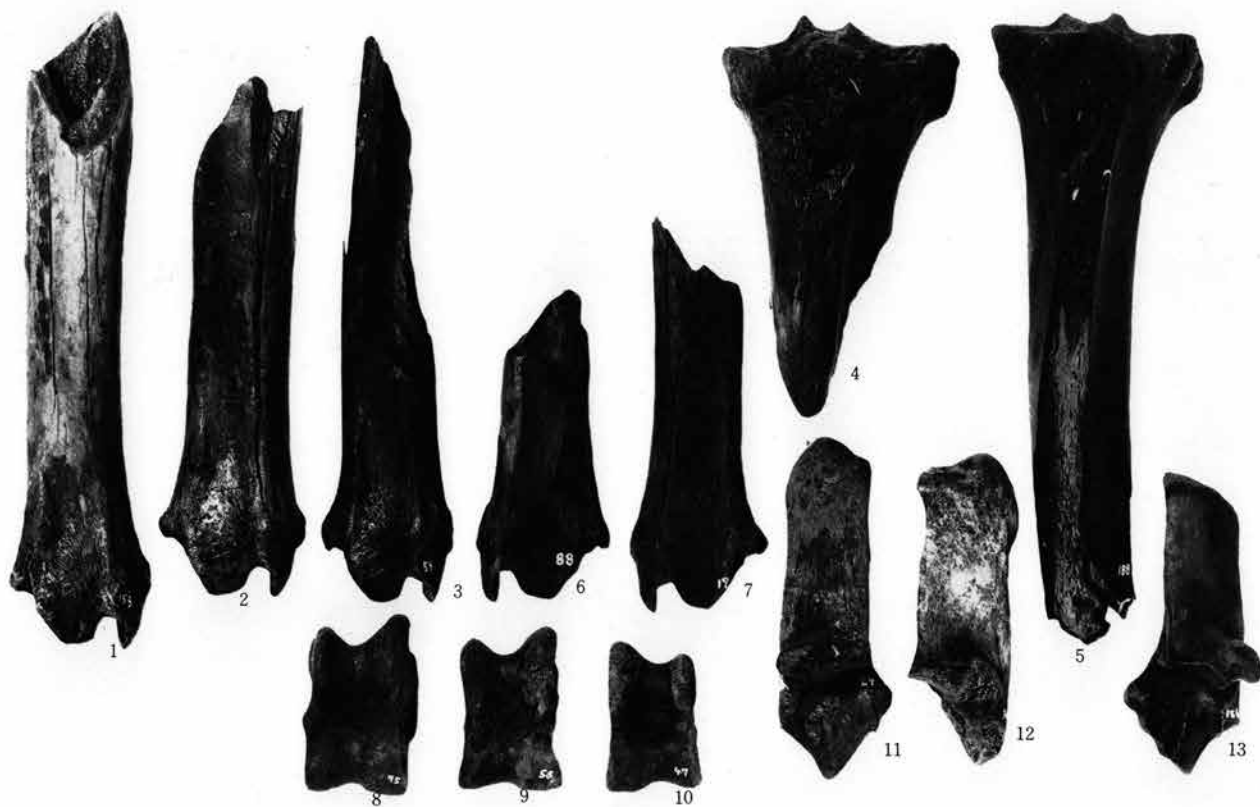
1~5. 左中手骨 6、7. 右中足骨 8. 左中足骨
中足骨の方がこわされている率が高いのは、骨器に使われることが多いからである。



ニホンジカ後肢骨1・2(寛骨)、

3~8(大腿骨)

1、2のように寛骨臼部付近のみをのこす場合が大部分である。3~5、右、3は関節端を欠く 6、左遠位骨端 7、8、遠位(骨端は欠)後面



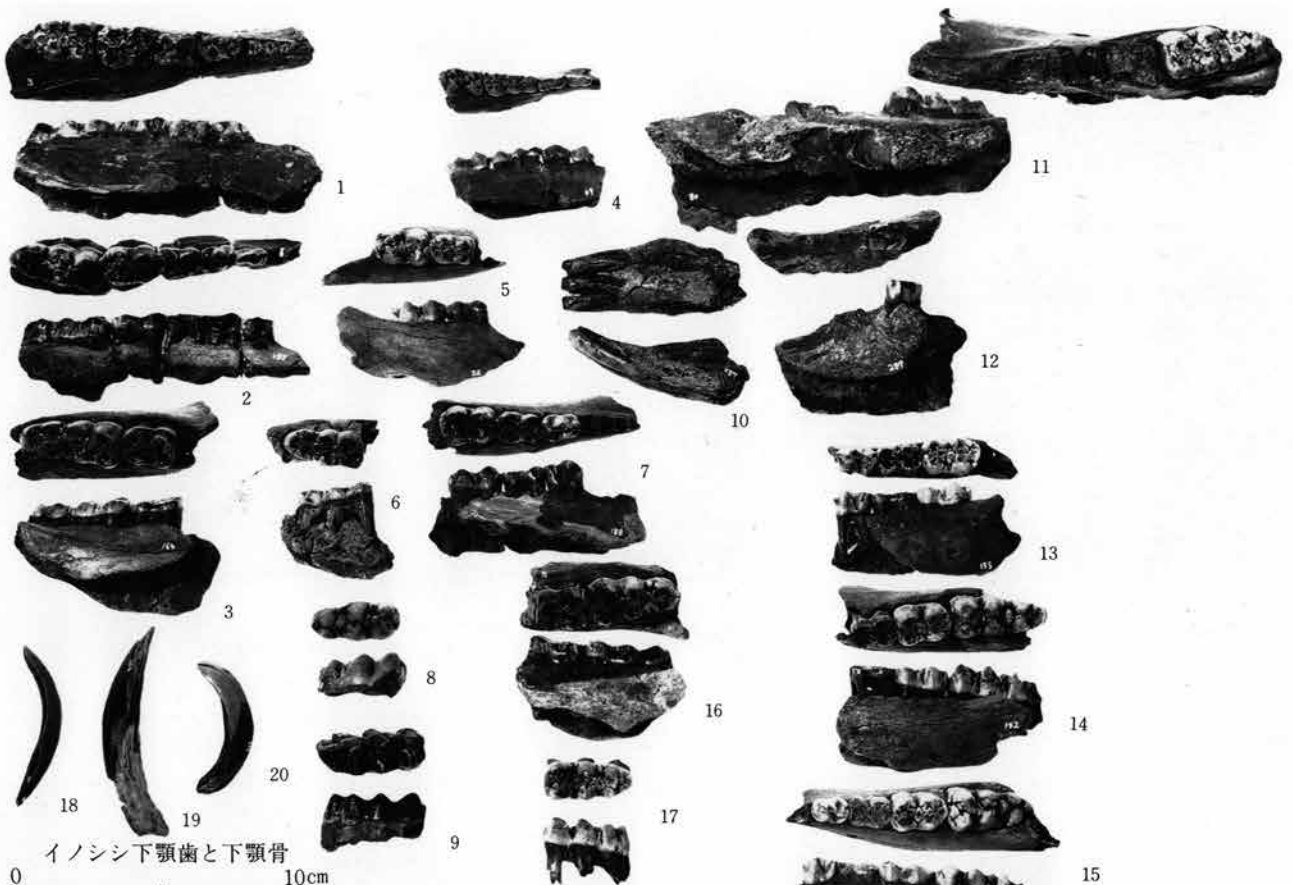
ニホンジカ脛骨(1~7)、距骨(8~10)、踵骨(11~13)

1~3、右遠位部 4、5、左近位部 6、7、左遠位部 8、9、右 10、左距骨 11、左 12、13、右距骨
脛骨には螺旋状割れ口がよくみられる。雌雄差の大小がみられる。



イノシシ上顎歯と上顎骨片(1~11)とシカ上顎骨片(12)

1~3. 右上顎犬歯♂ 4ab. 右左上顎骨 5. 右上顎骨 6. 左上顎骨 7. 右M¹ 8. 左M² 9~11. 右M³ 12. 右M²⁻³

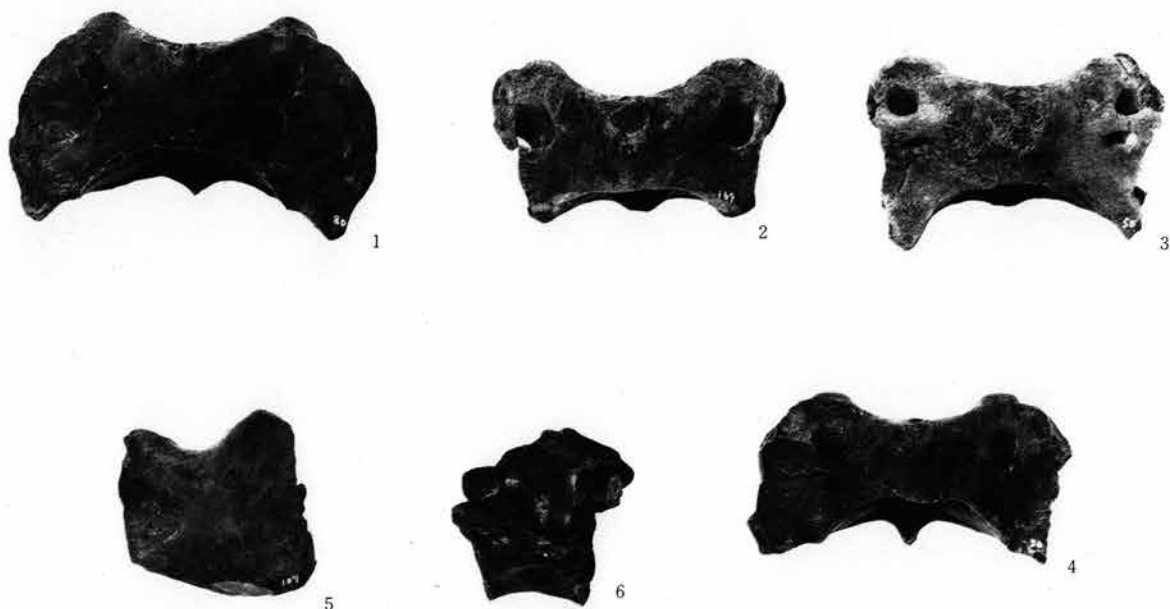


イノシシ下顎歯と下顎骨

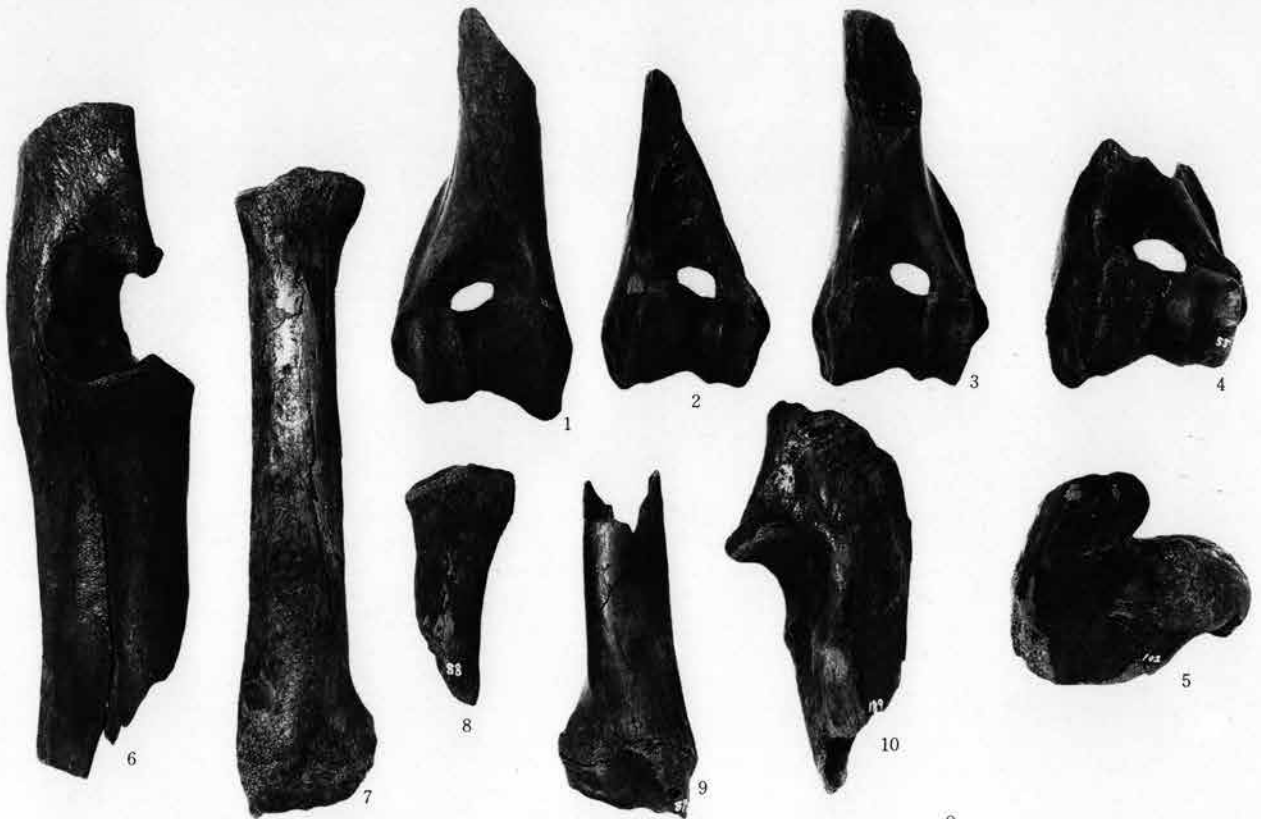
1~10. 右下顎骨と白歯(M₃) 10~17. 左下顎骨と白歯(M₃)
18. 左下顎犬歯♂ 19. 右下顎犬歯♂ 20. 左下顎犬歯♀



イノシシ上顎骨(ほぼ完存して出土したものであるがその後の破損が著しい)

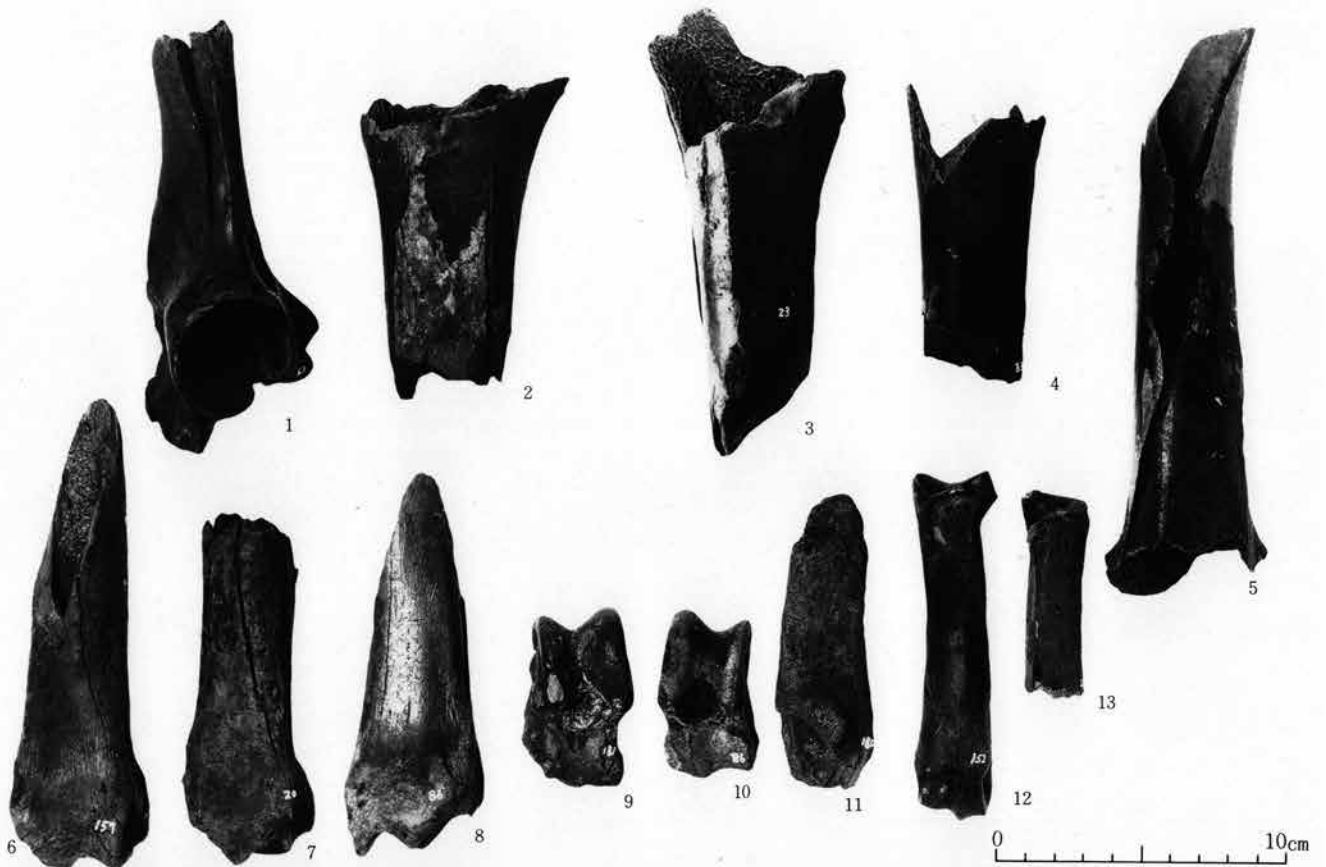


イノシシ環椎(1~4)、胸椎(6)



イノシシ前肢骨

1. 右上腕骨遠位部 2~4. 同左 5. 近位部 6. 左橈尺骨 7. 左橈骨 8. 左同近位部 9. 同遠位部 10. 左尺骨 1~3に螺旋状割れ口がよくみえる。10の上端はかじり痕。



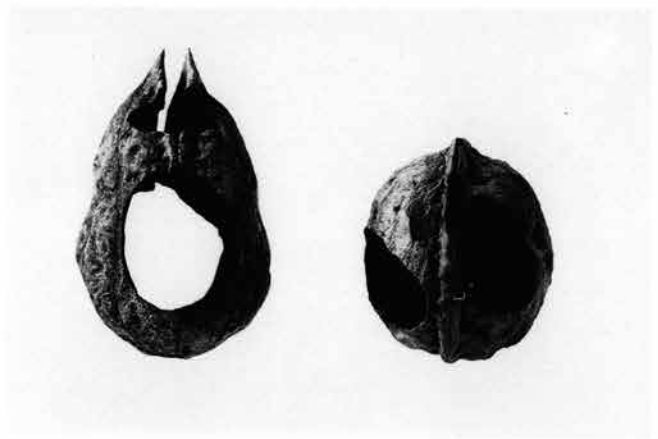
イノシシ後肢骨

1. 右寛骨 2. 6、7. 右脛骨遠位部 8. 左脛骨遠位部 9. 左距骨 10. 右距骨 11. 右踵骨 12. 左第3中手骨 13. 左第4中手骨



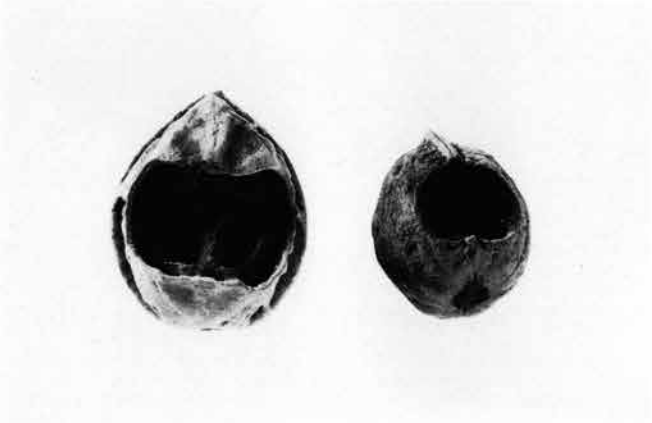
B-8 オニグルミ

×1



C溝 オニグルミ

×1



オニグルミ

×1



C溝 オニグルミ

×1



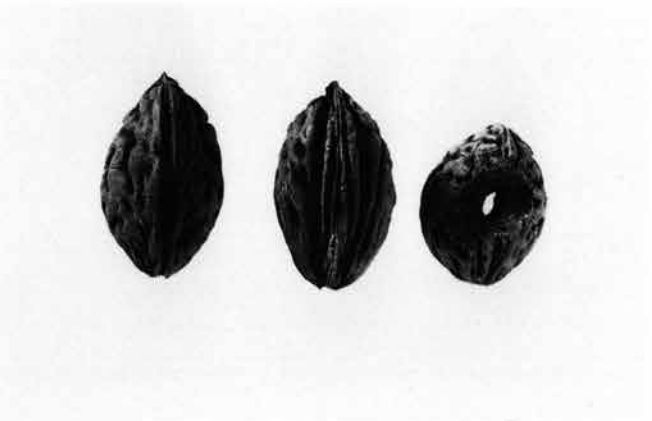
B-8 オニグルミ

×1



D溝 モモ

×1



D溝 モモ

×1



2B溝 モモ

×1



2 B 溝N-9 トチノキ

×1



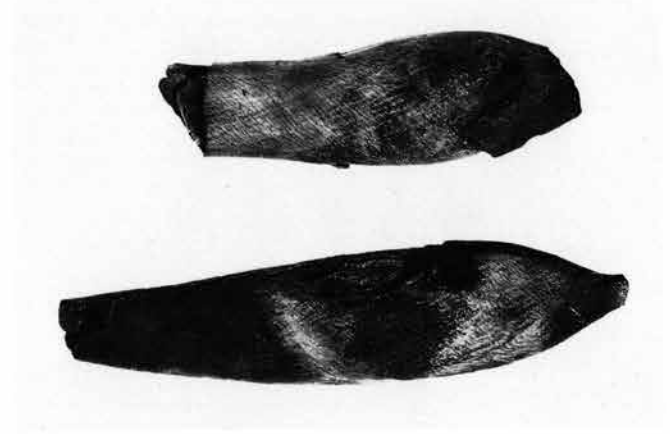
トチの幼果

×1



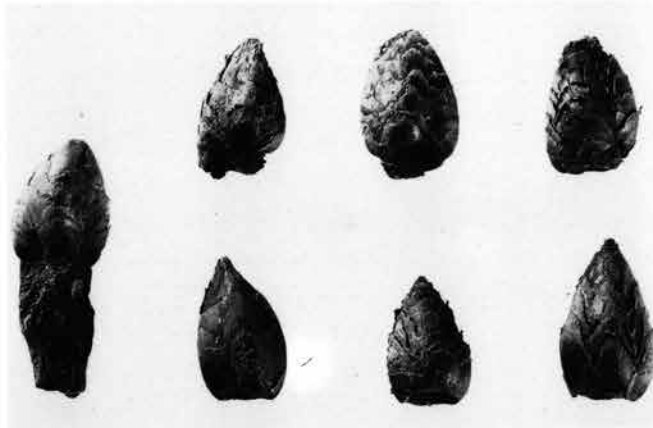
B 溝 フジの冬芽

×2



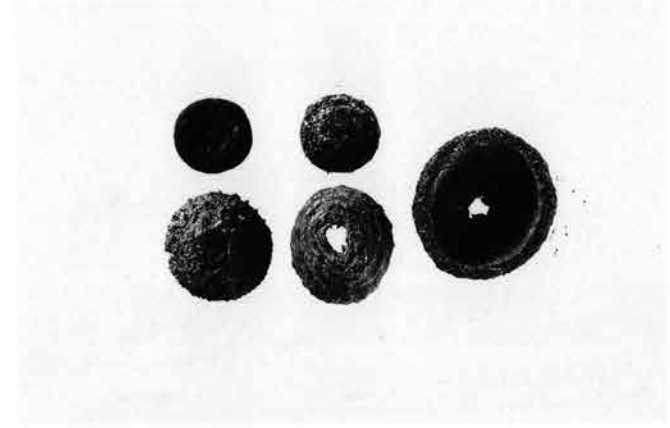
B 溝G-6 フジの実

×1



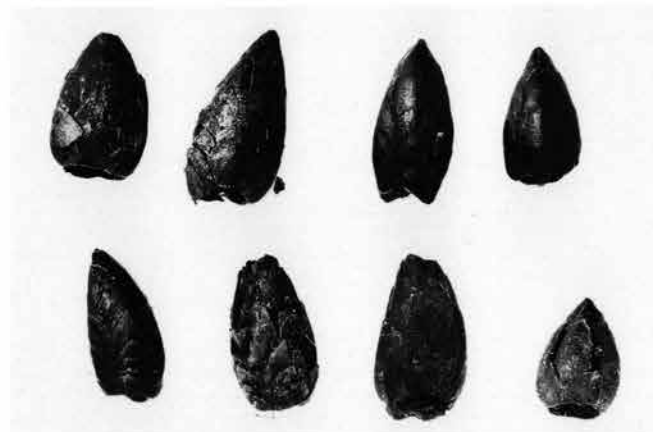
B 溝 ナラガシワの冬芽

×2



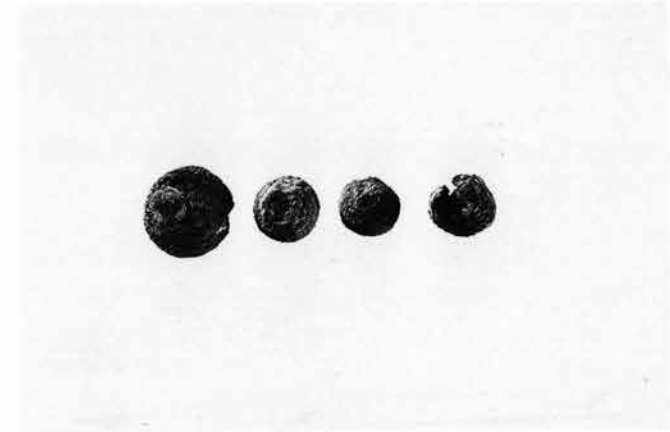
B 溝 ナラガシワの殻斗

×1



C 溝 ドングリ類の冬芽

×2



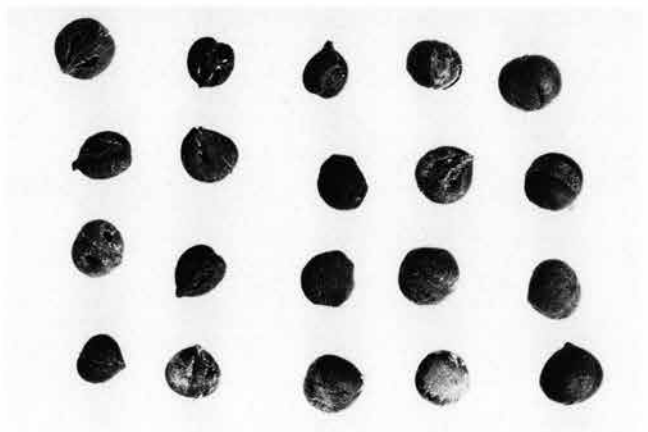
2 B 溝 ドングリ類の殻斗

×1



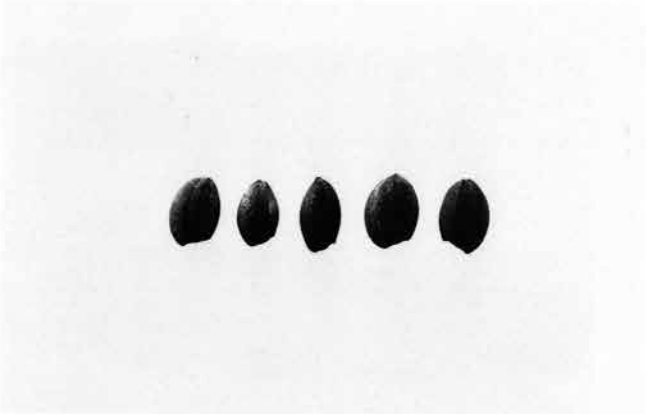
B溝 ブドウ類

×2



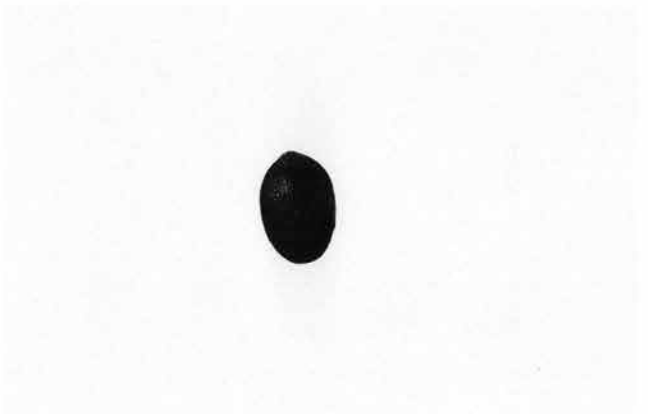
B溝 ノブドウ

×2



C溝 エゴノキ

×1



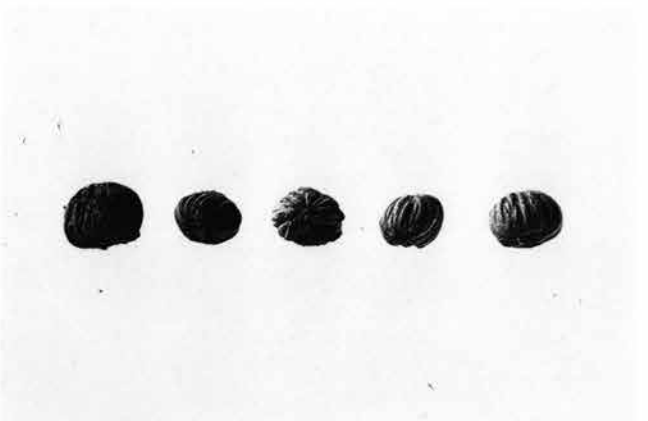
C溝 イヌガヤ

×1



E溝 カエデ類

×2



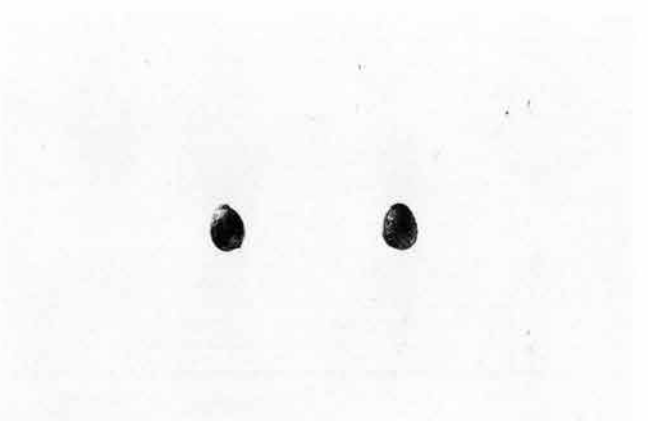
D溝 ミズキ

×2



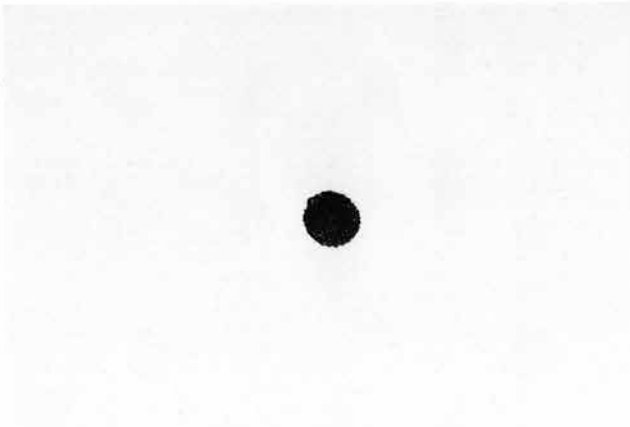
D溝 サクラ類

×2



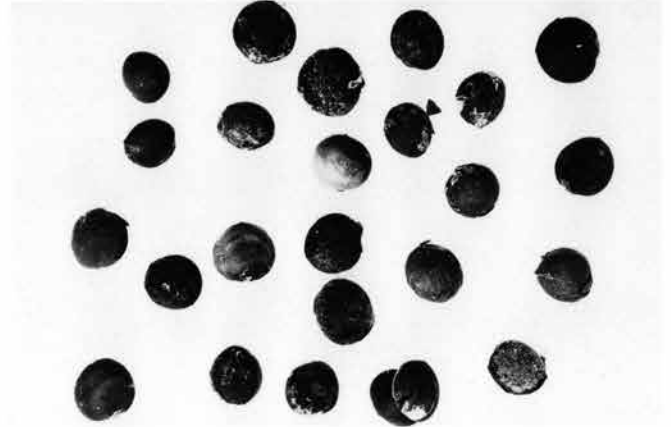
E溝 クワ?

×2



C溝 アカメガシワ

×2



B溝 カナムグラ

×2



2B溝 アズキ

×2



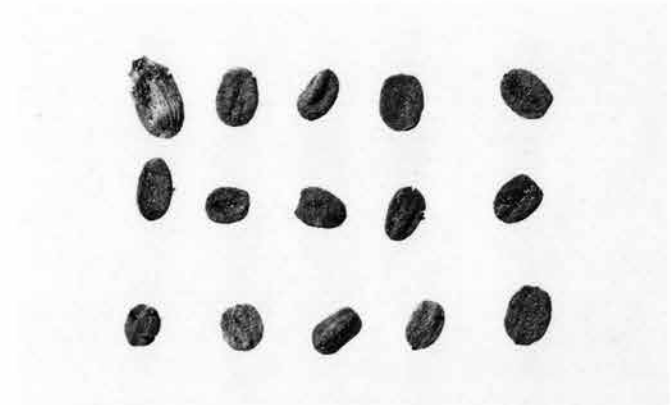
2B溝 サンショウ

×2



D溝 トウガン

×2



D溝 ガマズミ類

×2



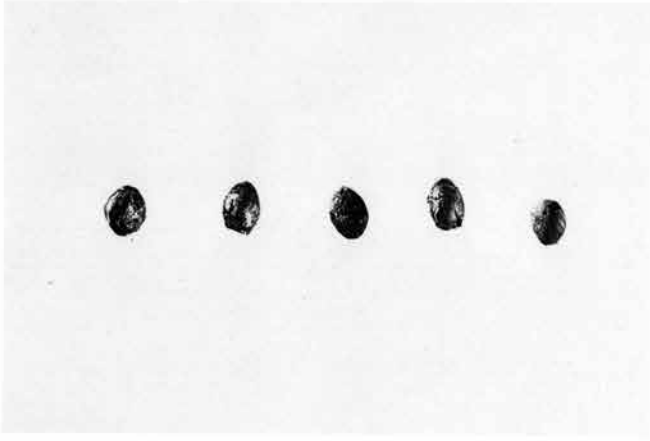
C溝 ウリ類

×2



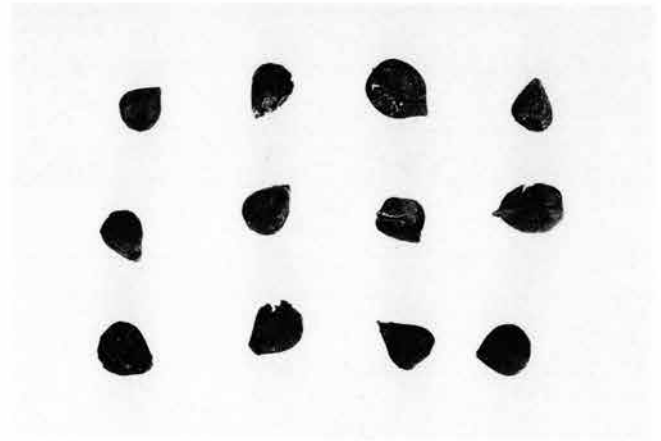
B溝 ガマズミ類

×2



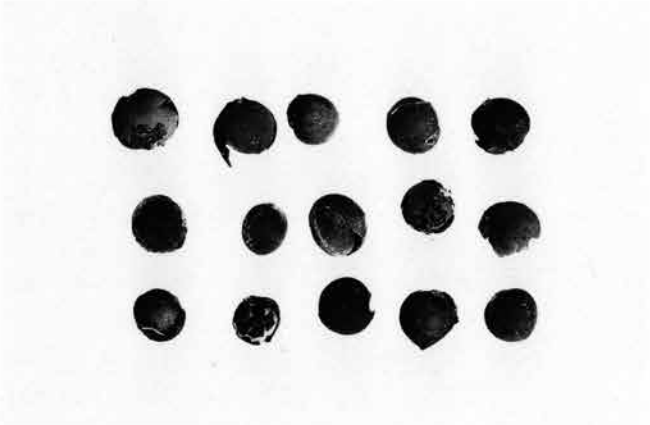
2 B 溝 アサ

× 2



C 溝 ガマズミ類・アカシデ

× 2



D 溝 カナムグラ

× 2



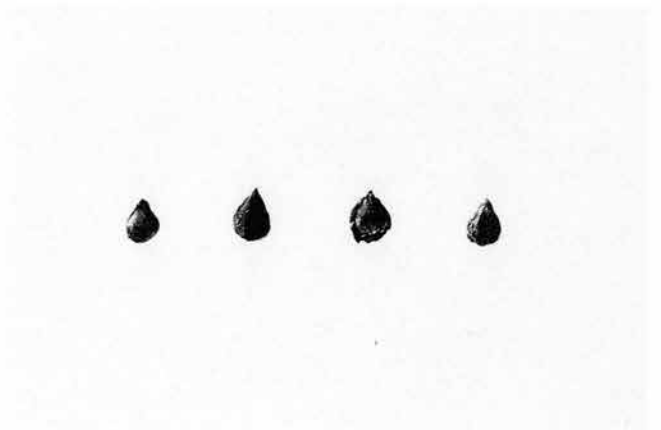
D 溝 タデ類

× 2



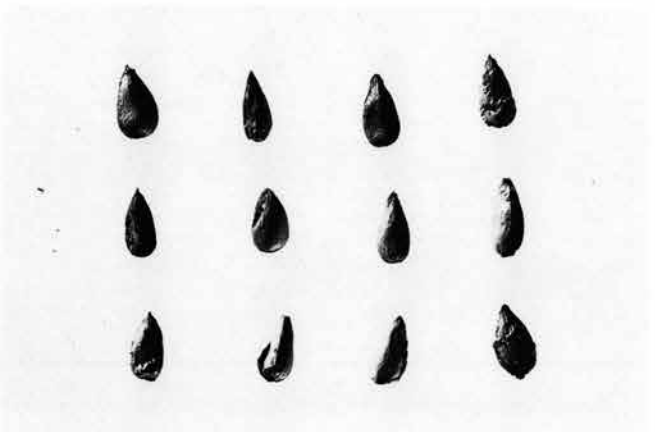
B 溝 ヤナギ・タデ

× 2



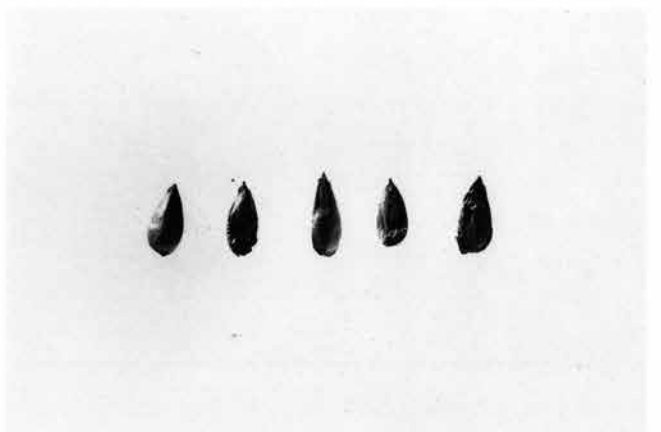
E 溝 イヌシデ

× 2



D 溝 アサダ

× 2



2 B 溝 アサダ

× 2



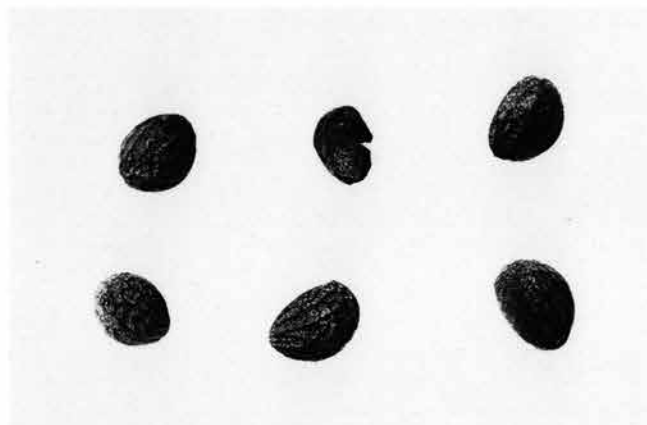
B溝 クマヤナギ

×2



E溝 キハダ

×2



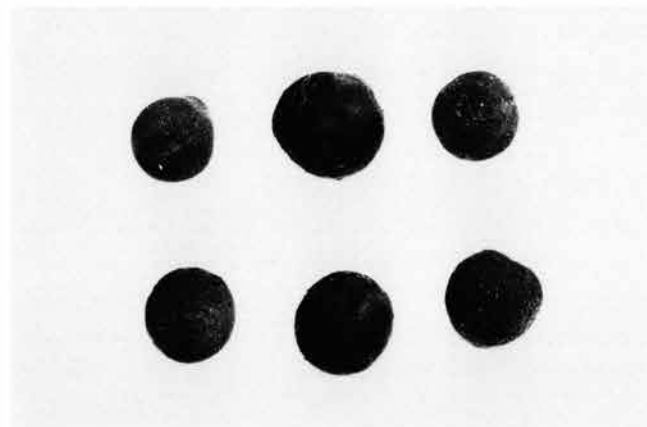
C溝 クサギ

×2



B溝 カンガレイ・ヒルムシロ・コウゾ
タデ類・シソ類・クワ・ニワトコ

×2



C溝 虫こぶ

×2



C溝 イネ科の地下茎

×1

A溝 イネ科の地下茎

×1



B溝 昆虫の鞘翅目・翅など

×2



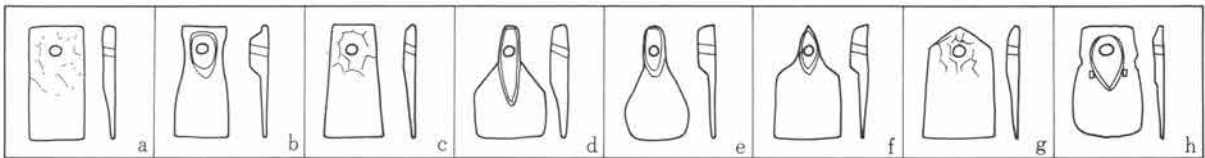
65C-16 ヒョウタン類の中よりえられたもの
不明

13 新保遺跡出土木製品・加工材

山田昌久

新保遺跡出土の木製品・加工材は1056点を資料として記録した。そのうちわけは、農耕具としては、広鋤47点、狭鋤4点、横鋤18点、又鋤17点、三又鋤4点、長柄鋤9点、着柄鋤42点、農具膝柄7点、農具直柄42点の合計190点であった。さらに工具・生活用具としては、木篋類16点、杵2点、横づち21点、有柄J字形木製品4点、作業台9点、糸巻3点、緯打具2点、石斧柄6点、組み合せ式斧柄5点、容器17点の85点がある。弓には飾り弓2点、樋入り弓1点、丸木弓・弓材51点の54点が上げられた。建築関係の材では、建築物の部材20点、梯子5点の25点がある。その他の製品としては、棒状品92点、用途不明品49点。製材段階での例として、分割材132点、柾目板207点、板目板54点、板7点、角材55点の455点。そして、加工材57点、杭46点、その他3点の106点がある。本報告では527点を図示した。以下説明を加える。

1 広 鋤 広鋤は、柾目の板を縦にとって、着柄孔をあけるもので、縦と横の長さがほぼ2:1の比率より少ない鋤身をもつものをいうこととする。カシ類・クヌギ類がその主たる用材でケヤキ・ネムノキを用いている。その形状は大きく8種に分けることができる。



第53図 新保遺跡出土の広鋤形状分類模式図

a類は上端も下端（刃部）もほぼ平坦に形づくられるもので、両側縁も直線的な仕上がりとなる。着柄孔の周辺は厚味を増すが、隆起帯として段になるものはない。なかには鋤身全体が平坦な板状となるものもある。完成品には13、421、422があり、未製品には6がある。

b類は刃部は直線的につくられるが、鋤身上半はくびれが入ったり、両側から斜めに切られて幅狭になったりするもの。舟形隆起のつく位置は上端近くの場合が多い。完成品としては22、未製品には15、32、47、48がある。くびれの位置や傾きの差などから本類はさらに細別されるかも知れない。

c類刃部が直線的で幅広になるもので、平面形は台形となるつくりである。着柄部はゆるやかに盛り上がって厚くなる。20がその例である。

d類は着柄部分を上部に舌状に突き出す形で作る鋤身をもつ。上半から鋤身への移行部はゆるやかに段をもつ。着柄隆起を高く有し、身の中位くらいまで隆起が延びることが通例である。完成品の例としては2、33、39、45、46がある。未製品としては、舟形隆起をもつ1、4、5があるが、e・f類との分類不能。

e類はほぼd類と似た形状を呈するが、着柄突出部から鋤身への移行部がなだらかで、着柄隆起が比較的低い短かい。完成品の例として8、30、31、38がある。

f類は着柄部分が上部に突き出す形になり、その上端が尖がるものである。舟形の着柄隆起は低く、また短かい点の特徴である。隆起はすべて鋤表に作られる。例として7、9、21、34、40が出土している。

g類の鋤は平坦な刃部と山形の頭部をもつ、平面五角形のものである。着柄隆起は高く段を作るものと、低いのが、ゆるやかに盛り上がって厚味を増すのみのものの二者がある。出土例として10、17、19、29、44がある。

h類は円味をもった刃部と舟形隆起の脇に、あて板どめの穴をもつ鋤である。隆起は低く鋤身は薄手であ

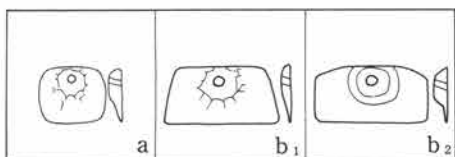
る。本遺跡では18の1例のみが出土している。

こうした製品に加えて、広鋏の未製品も出土している。多くの未製品は大まかな形を斧によって打ち削って作ったものであるが、なかには107のように柁目板の中心に刻みをもつ、二連の未製品も出土している。完成品、欠損品・未製品の数は、13点、19点、15点で、百分率では28%、40%、32%を各々示す。この他にカシ類とクヌギ類の柁目板の資料も、鋤鋏類に仕上げることができるだろう。ここでは、形づくりの終わった段階以降の遺物のみを広鋏として記録した。柄が右にのびるもの9点、左のもの10点があった。

2 横 鋏 横鋏として分類したものは、柁目の板を横にとって、着柄孔を中央上位にもつものである。着柄孔周辺は厚味を増すつくりだが、はっきりした段をもつものと、ゆるやかに盛り上がるものがある。カシ類を主たる用材とするが、クヌギ類、ナラ類を使うこともある。横鋏は大きく3種に分けることができる。横鋏の形状は縦と横の比率が約1:1のものから1:3くらいのもまで変化に富む。

a 類は縦横の長さがほぼ同じもので、平面形は円味をもっている。着柄部分は低い隆起帯があるがその稜線はあまりはっきりしない。しかし、隆起部が鋏刃の縁辺にかけて細く続いて作出されることがかすかにかがえる。完成品の例として72、73、76があり、69、70はおそらく本類の未製品であろう。平面形から本類は、これまで丸鋏、円鋏などと報告されていたものである。

b₁ 類上端も下端も平行するようにつくられ、両側は斜めに広がりながら刃部へ続く。着柄のための隆起は、段をもたずに厚味をもつ仕上がり。刃の部分は薄く作られる。出土例として77、81、83、84がある。



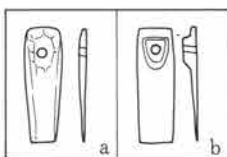
第54図 新保遺跡出土横鋏形状分類模式図

b₂ 類は横長の度合いが高いもので、両側は直交するように切られた形、もしくはゆるやかな円味をもつ形。着柄のための隆起はしっかりと稜をもったつくりで高まりも強くなる。刃の部分はやや厚手で、円味のある断面形をもつつくりである。完成品の例として82、85、86があり、未製品例として80がある。刃部が鋭くないことと、横に長い平面

形から従来、ならし具のえぶりとして報告されたものであるが、大きく木取りの類似性などから本類としておくこととする。

この様に、本報告で横鋏としたもののなかには明らかに用途が異なるものが含まれている。また、86は鋏身の手前の面に着柄隆起が作られており、また平面形も特異なものである。刃部（作業縁部）は浅く山形に切り込まれており、本例をならし具とすれば平坦な面を造成することはできない。柄穴は横にややずれてあけられており、柄が身を横においた際に右へのびるようになる。土を山形に造成するのに都合がよい道具であろうか。横鋏は完全品・欠損品・未製品の数は6点、8点、4点で、百分率では33%、45%、22%を各々占める。また、柄穴に柄が残っている例は3例ある。着柄は特別な補助具はみられない。また、72、73、77、81、82、83、85、86は柄が右にのび、76は左にのびる。

3 狭 鋏 柁目板を縦に用い上位に着柄孔をあけるもので、縦と横の長さの比が3:1~4:1の鋏を狭鋏とした。クヌギ類材のもの3点、カシ類材のもの1点の合計4点が出土している。その形状は次の2つに分類できる。



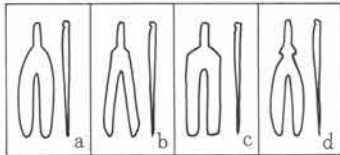
第55図 新保遺跡出土の狭鋏形状分類模式図

a 類は上位が広く刃部へ進むにしたがって幅狭になるもの。着柄部はやや厚味をます程度で隆起部の境は明瞭でない。刃部は薄くまた両側に沿って稜線ができておりその部分から縁辺部にかけても厚味が減ぜられている。3、12、35が出土例である。

b 類は幅、厚味が一定の狭身をもち、着柄隆起を高く明確に有するものである。

隆起部は鍬身の上半部のみで作出され、着柄部は方形の穴があげられている。刃部は平面形が円味をもつようになっているが、a類の直刃のものと対照的である。36例が本類に属する。

狭鍬は完全品3点・欠損品1点の出土で、百分率では75%・25%となる。広鍬の中に含めた11、37の仕上げが狭鍬のそれと類似しており、37がb類の未製品と考えられないこともないが、下半部を欠いており、明確な狭鍬の資料では未製品は見られなかったとしておく。



第56図 新保遺跡出土又鍬の形状分類模式図

4 又 鍬 又鍬は柱目板を縦に用い、身上部に着柄のための固定部を舌状に作出したものである。舌状固定部は、鍬裏の着柄面は平坦に仕上げられ、反対側の面は円味をもった作りとなっており、断面形は鎌鉾状となっている。鍬表側の固定部には、段、刻みが設けられており、緊縛時の助けとなっているらしい。鍬身の部分には下端から深い切り込みがあり、身が二つに分かれている。二つの身幅はほぼ同じになっているが、刃先の部分は一方が小さくなる。利手との関係であろうが、製作時にすでに強

弱を持った刃先を考えてあったものか、使用によって強弱ができたものかは判断できない。厚さは固定部に最大厚があり下に向かってしだいに薄くなるつくり、鍬身の部分は極めて薄手に加工されている。クヌギ類を利用したもの11点、カシ類を素材としたもの6点である。平面形から以下の3類に分類された。

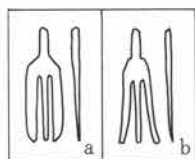
a類は鍬身の両側縁の形が円味をもって作出されたもので、又部は細目になっており、二つの鍬身部は幅広となっている。着柄部から鍬身への移行は、段をもって移行するものと全くないものとの二者があるが、段ははっきりとしない作りである。50、54、56、58、61が本類に属する。

b類は鍬身の側縁が開き気味に作られ、外側は直線的に加工されている。又部の切り込みは幅広になっている。二つの鍬身から刃先にかけての部分は幅狭となっている。刃が開いている分だけ又部も広くなる。本類は完形のものはないので、その平面形は不明である。53、55、57、62が本類の例である。

c類は着柄部から一度斜め下方にのびる肩部をもち、その後には鍬身の部分が真直に下方の刃部までのびる仕上がりで、又部の切り込みも直線的である。この作りも鍬身の部分は幅広となる。49、51が本類に属する。

d類はいわゆる「ナスビ形木製品」である。着柄部と身部の途中に小さな張り出しや突起をもつもので刃は開き気味になっている。59、60、64が本類となるが、A溝・B溝の出土で、新しい段階のものと考えられる。64は着柄部が幅広につくられており柄穴が見られる。直柄を通して用いたものであろう。

又鍬の未製品は、着柄鋤鍬のそれと区別することはできない。おそらくこれらの未製品は又鍬に仕上げられたり、着柄鋤類の未製品となったりと変化するものであったことだろう。したがって遺存は完全品は1点のみ、欠損品が16点となり、未製品は不明とする他はない。百分率では6%・94%となり又鍬は極めて遺存度の低い遺物といえよう。これは又鍬が思いの外薄い鍬身をもつものであることにも原因を求めることができるだろう。また欠損品の状態は刃部が欠けるよりも、又分かれの部分から割れることが多かったことがわかる。ついで棒状の着柄部が欠けることも多かったらしい。



第57図 新保遺跡出土三又鍬分類模式図

5 三 又 鍬 柱目板を縦に用い、上部に着柄のために舌状固定部をつくり出したもの。固定部のつくりは又鍬と同じで、平坦な緊縛面を鍬裏の面に設けている。クヌギ類を素材に作られたもの1点、カシ類のもの3点となっており、カシ類のものの方が多。平面形からは大きく二つに分けることができる。

a類は三つの刃部が平行して作られるもので、固定部から鍬身へと移行する際は小さな段のあと、斜め下方にのびる肩部をもつ。身の部分は三本ともに平行して直に作られ

ており、先端は外側から湾曲して切れるようになっている。66、68が類例としてある。

b類は両側縁が外側へ開くように作られており、固定部から鋤身の部分へは斜めに切られた形の肩部がある。刃部は薄手で幅狭の作りとなる。65、67が類例となる。

三又鋤はすべて欠損品である。又鋤同様、未製品については確定的な資料はみられない。

6 長柄鋤 柁目の長板を用いて、柁と鋤身を一木で作る鋤である。

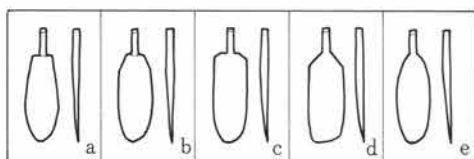
握りの部分に指入れの穴を有するものと、棒状のままおわるものがあり、別木で端部にグリップエンドをつくるものも想定される。カシ類とクヌギ類、そしてムクロジを用いた長柄鋤は、その形状ごとに樹種も分かれており、**a類**にはカシ類が使われ、**b類**にはクヌギ類があげられている。そして**c類**にはムクロジ材も見られるのである。以下3類について説明する。

a類は幅広な鋤身と指入れ穴のある握り部に特徴があるもので、大形の鋤である。110、133、135は、その形をほぼそのまま残す例であるが未製品であり、157も握り部未製品の断欠品である。156、159は完成品であろうが、欠損後に捨てられたものであろう。指入れ穴の形が異なっている。

b類は幅狭の鋤身と、細い円棒状の握り部とからなるもので、長さはほぼ完形で残っている132からすれば、1m内外のものである。130、131などがあるが、鋤身の部分が、片側から削りこんで厚さを減じており、先端は薄く尖がらせてある。平面形は尖がり気味の円頭状先端となっている。

c類は鋤身が細長い方形になり、粗く削った柁がつくものである。134は鋤身の両側縁はなめらかに仕上げられているが、先端部はかえて厚くなっている。136は鋤身の部分のみの資料であるが、割り取って大まかな形づくりをしただけのもの。この類の資料は身の部分の平らな面が作業面となるものかも知れない。

長柄鋤**a類**としたものの資料は完成品のものではなく、未製品が3点、**b類**としたものは完成品が1点、欠損品が3点、**c類**には完成品が1点、未製品が1点となる。柁頭の部分は完成品が3点ある。156、159、346で、157、158は未製品といえるが農具直柁の項目のなかに入れて先が不明と考えておきたい。**a類**に未製品が多く、完成品の鋤身部分の遺物が出土していないのは、柁の部分で折れた長柄鋤の鋤身の部分を再加工して、着柄鋤、あるいは鋤として使ったことによるものであろう。

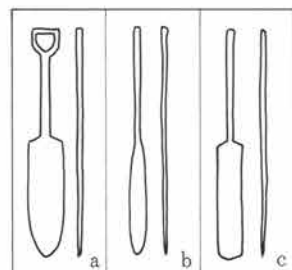


第59図 新保遺跡出土の着柄鋤・鋤形状分類模式図

7 着柄鋤・鋤 着柄のための固定部を身の上部に作出したもの。身の部分の長さは幅の3倍以上ある例が多く、また薄いつくりである。上部が厚く刃部へかけて一面は直にのび、他の面（外側の面）は斜めに作られて厚味が減っていく仕上がり。固定部外面には刻みまたは段が設けられて、緊縛の助けとなっている。樹種が固定されたものの内訳は、カシ類27点、クヌギ類10点、ナラ類3点、キハダ1点、カバノキ類1点となっている。カシが卓越している器種である反面、ナラ類のようなやわらかい材もあてられるという点も見逃せない。その形状から、大きく5つに分類される。

a類は固定部と身部との境に段ができ、そこから広がりながら直線的に、両側縁がつづく作りで、刃部は円刃となる、やや下ぶくれの形。113、114、123が本類に属する。

b類も固定部と身の境に段があるが、つづいて斜めに開きながら身の最大幅の部分に移行して、刃部へとつづくもの。刃部は欠損している例がほとんどで、形は不明であるが、円刃であろう。119、122、125、126、そして断片的な資料であるが、103も本類に入るものと考えておきたい。



第58図 新保遺跡出土の長柄鋤形状分類模式図

c類はやはり固定部と身との境に段をもつもので、身の肩部を切りおとした様になった平面形となる。身の両側縁は平行に直線的にのびている。刃部までのこるものがないが、他例と同様に円刃となるものだろう。この類に含まれる資料は、87、88、104である。

d類は固定部と身の境に段をもたないもので、斜めに直線的に開いて身の最大幅となる肩部へとつづくものである。刃部は扁刃となるが、製作時のものか使用の結果かは不明である。しかし、他類の刃部が残っている例と比較して、本類のみが扁刃となることは、類別したこの遺物の用途を固定して考えることが可能であろう。本類は先の3つの類に比して幅広でもある。90、91、111が本類の例である。

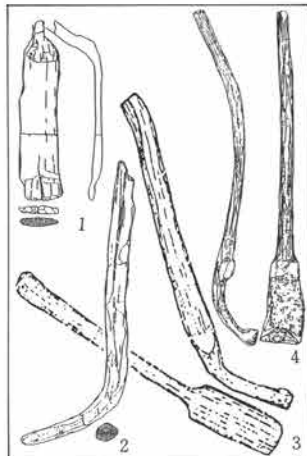
e類は固定部と身の境に段をもたないもので、円味をもった肩部を経て、やはりなだらかなカーブで刃部へと移行していくもの。刃部は円刃となる。100、118が本類の例である。

この固定のための舌状突起をもつ農具は、膝柄をつければ鋤に、直柄を接続させれば鋤になる。出土例では又鋤となったものであるが静岡県潮遺跡例が著名である。しかし、すべての身に膝柄がつくとは断定できないであろう。ここで着柄鋤としたのは漸定的な仮称であるが、今後はその形状や刃部の変化などから用途を細分することが必要となる。a類・d類・e類に多く完全品が残されており、複数の用途も想定されるが、着柄鋤全体の完全品9点・欠損品17点であり、百分率では35%・65%となる。また未製品は又鋤と共用のものであろうが、一応本群に入れると21点みられる。

8 有柄J字形木製品

一木で柄と作用部をつくったもので、太くやや反り気味の柄と、J字の曲がる部分にあたる側面形をなす作用部とからなる木製品である。作用部は柄の反りとは反対側にカーブするが、湾曲の内側の面は、平坦につくられており、外面は円味をもった横断面をなす。また先端部は薄く尖らせることなく、かえって厚いまま端部を切り落としているようである。器面は削ったままで粗いが作用部の内湾する面はややなめらかになっている。樹種が判明したものは、すべてクスギ類を用いていた。

類例は、奈良県唐古遺跡の第97号地点竪穴から出土しており、第一様式の土器を包含層の上位に伴っていた。また福岡県拾六町ツイジ遺跡出土例も前期初頭の例として、土壌から出土している。群馬県内では高崎市日高遺跡にも出土例があり、弥生時代の初めから存在する遺物で、しかも全国的な分布を有するものとなることが出来そうである。柄の部分まで残り、ほぼ全形をうかがい知れるものとしては、138例があり、137、139、140は棒状にのびる柄の部分が基部から折れてなくなったものである。単独で用いられるものか、組み合わせて使うものかは明らかでない。有柄J字形木製品は縄文時代の木製遺物のなかには全くみることができないもので、鋤類や斧柄組み合わせ、そして弥生型の容器類などと共に、弥生時代の木製品組成の一部を構成するものと考えられる。

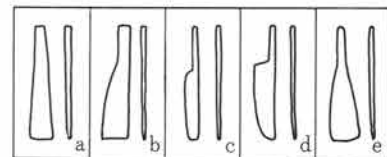


第60図 各地出土の有柄J字形木製品実測図
1・2. 新保遺跡 3. 奈良唐古遺跡
4. 福岡拾六町ツイジ遺跡

9 木 筥 類

扁平な板に握りと筥身の部分とをつくったもので、大きさや形は多様である。木筥に使われる木は、やはりカシ類やクスギ類であり、これまでのべてきた農具と同様な傾向を示す。形状は大きく次の様に5種に類別することができる。

a類はやや厚手の細板を用いる。平面形は一端が幅狭で、一端は広



第61図 新保遺跡出土の木筥形状分類模式図

くなるが、上下端や両側縁の厚さに極端な差がないもの。255が本類に属する。

b類は細い握りの部分と幅広の身の部分からなるもので、一側は厚くなっており直線的にのびる。他の側縁は途中で屈曲して身と握りの部分が区別される。この側縁の身の部分は、やや薄くなっている。114が本類の例である。従来ふぐしと呼ばれていたもので、用途も同様に考えられる。

c類は小形で細身のつくりの木篋で、一側縁は直線的につくられ、他側縁には段を設けて握り・身の区別がつくられる。254、256が出土例である。厚さは両側とも厚手で変らない。141、142、252は欠損品である。

d類は大形で幅広の仕上がりの木篋で、握りと身の境の段は直角に近いかたちにつくられる。143は握りの部分が欠けた例であるが、張り出した方の縁辺部は薄く仕上げられ、刃部となっている。先端も尖がる。

e類は細い握りの部分から身への移行が、両側縁にかけて広がっているもの。断面形は両凸レンズ状になる両刃のつくり。253はサカキで作られたもので、本類に属するものである。

木篋類は完全品3点、欠損品10点であり未製品として認定できるものはなかった。百分率では33%と77%となる。木篋類として一括したものは、切る・すくう・混ぜる・掘るといった多様な役割を果たしたものが含まれていると想定されるが、一点づつの機能は断定できない。

10 農具柄 鋤・鋤の柄と考えられるものとして直径3cm内外の丸木を使ったもの、削り出した円棒を用いたものがある。長さは162の102cmの例が最も長い。他例はいずれも折れていて元の長さは想定できない。カシ・クヌギ・トネリコ・ムクロジ・ニワトコ・ムラサキシキブなどが用材としてあてられる。膝柄は枝分れの部分を利用したもので、ニガキ・ハンノキ・トネリコ・グミ・サカキ・クリ・クスギ類が用材となっている。鋤・鋤の材がカシ・クヌギ類に限定されている事実と柄の用材は対照的である。

a類を直柄のものとする、156~189がこれにあたる。鋤身に装着されて出土したものもあるが、多くの鋤は柄を伴わずに出土している。丸木材を用いたものも6例ほどあるが、1m以上の長さを必要とし、一定の太さを求められる柄材としては、適当な枝材は少なく、削り出した断面円形の棒を作ることが一般的であったらしい。用材が一定でないことや年輪の方向など、柄としての弾力性にどのくらい注意が払われたかは不明であるが、鋤身材に比べて柄材に対しての材質の要求は精度が低かったと考えられる。

b類は膝柄をあてることにした。膝柄には緊縛部が小さいもの149、153と大きいもの150、151、154があり、着柄面の反対側に段を設けて固定しやすくしたもの151、152もある。155は未製品と考えられようか。本類は又鋤や鋤身の上部に着柄部をもつ平鋤の柄として使用されたものであろう。

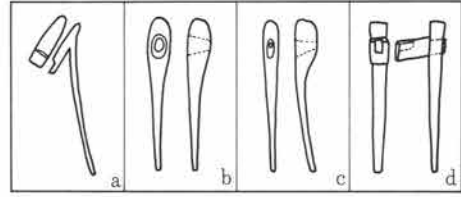
農具柄はa類について見ると、完全品はなく32点すべて欠損品である。直柄は未製品を識別しにくい、角材等の類を考慮しなければならないかも知れないが、そうした材が柄の用材としてのみ確保されていたかという、疑わしいものである。むしろ用材の多様さを考えれば、その都度必要な柄を農具に合わせて作ったものとしておきたい。完全品がないことは直柄の特徴であろうが、百分率で見ると、3.5%と96.5%という残存率となる。一方b類は155のような未製品もみられ、おそらく150も未製品であるかも知れない。膝柄には直柄とは異なった製作工程が存在するようである。完全品はなく、欠損品は5点未製品は2点となる。膝柄の場合もほとんどが欠損品である。

この様に柄は折れて出土する例が多く、鋤鋤類の強度より弱い材を用い、使用に際して柄を折れやすくしておき、順次交換して使用した様子がうかがえる。柄材には当時集落近辺で入手できる樹種が多くあてられていて、鋤鋤の身とは用材や工程等の差があったことも想定される。

11 斧柄 斧柄は各溝から出土しており、時期幅がある割には出土点数が少ないといえるかも知れない。一木で作られた膝柄は1点で、雇い柄が5点他は直柄である。斧柄にあてられる材は、カヤが1点、

他はクヌギ類であり、他の材はみられない。大きく4類に分類される。

a類は一木でつくられたもので枝分れの部分を利用した膝柄になっている。斧台の先端部の上面に段をつくり、扁平片刃石斧を着装する様になっている。212は本類の例であるが、柄が途中で折れている。台頭部は石斧で大きく形づくりがされたい。



第62図 新保遺跡出土斧柄の形状分類模式図

b類は一木でつくられた直柄で、頭部近くは太くなり、大きな着装孔が開けられている。斧頭の出る方が穴は小さく、その部分がやや張り出し気味になっている。214は本類の例であるが、柄が途中で折れている。太形蛤刃石斧の柄と考えられる。

c類も一木でつくられた直柄で、頭部近くは大きくなるつくりである。着装部は幅がやや大きくなり、特に後方に大きくなるように仕上げられている。石斧頭が出る穴は円形で、刃部の方の穴は長円形である。全体的に扁平な頭部で後方に出っ張る形状となる。小形磨製石斧の柄であろう。213、216が本類の例で、少々形は異なるが、215も小形の磨製石斧の柄としてよいであろう。

d類は斧台と柄を別の木でつくり、組み合わせて柄とするもので、雇柄と呼ばれている膝柄である。斧台の部分が、形のわかる様に残っていないので、どういった斧の柄になるかは不明である。218、219、220、221そして222がd類に属する。220には組み穴に台部の継ぎ手部分が残っている。長方形の組み穴となる。

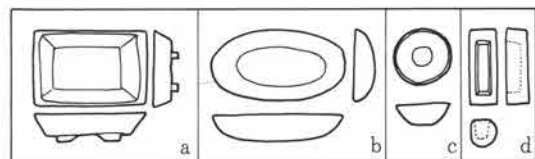
斧柄として形が残っているものは213のみで、他はすべて欠損品となっている。220は斧台部を変えれば再使用が可能で、完全品の中に入れる。完全品2点、欠損品9点で未製品はみられない。百分率では18%と82%となる。本遺跡出土の斧柄は未製品がなく、欠損品がほとんどという特徴をみせている。

12 容器 容器は大きく4つに分類できる。すべて割り物であり、器面は平滑に仕上げられるものと、削り痕を残すものがある。新保遺跡出土品には塗彩されたものはない。ケヤキ・クリ・クヌギ類が主として使用されるが、カヤ・ヒノキ類・ハコヤナギ類・エノキ・キハダ・トチノキ・キリなども素材となっており、用材に幅があったことがわかる。ケヤキが5点と最も多かったことは、関東平野の縄文時代の容器素材の選択とは大きく異なる点で、工具の変化と活用木材の変化とが重なっていたことを示す。

a類は平面長方形で周縁に5mm~15mmの平らな縁帯をもつ皿形の容器で、2つずつ対になって4つの脚をもつものである。新保遺跡の方形脚付大皿は、底面も平坦になっている。228、229、230、231が本類の例である。脚の仕上がりは異なる部分も見られ、229のように内側が切られたものと、230例の外側が斜めになるものとの2つがある。a類は弥生時代の各時期・各地域を通してみられる容器で、縄文時代にはついぞ見ることのできなかつたものである。弥生時代の調理具・食事文化の指標となる遺物として考えられ、おそらく大陸よりの伝来品とすることができよう。耳つきの有蓋容器とともに、東アジアに広く分布する物である。

b類は平面形が、楕円もしくは長円形の容器で、大皿・浅鉢と考えられる。底部は平底になるものと、ゆるやかな丸底となるものがある。長径60cmを越えるこの容器の形状は、縄文時代以来のものであるが、使用樹種が多様であり、かえて規制がゆるやかになってきたことがわかる。223、227、238、239、240が本類にはいる。

c類は平面形が円形の容器で、浅鉢・椀と想定される小形のものである。直径20cm内外で、底部は平底と円底がある。224、225が欠損品であり241、242は未製品と考えられるが、241は削りが浅く削りもよく残っている例



第63図 新保遺跡出土の容器形状分類模式図

で、あるいは別の製品とできるかも知れない。

d類は丸木を削りぬいて四角い穴をあけたもので、深さはあまりない。底部の細工はないため、置くには不向きであろう。両端は切断したあと平坦に加工してある。物をつめて移動する際に用いられるのか。226、232が本類にあたる。こうしたつくりも、弥生時代以降の木製品に特徴的なものである。

出土容器の状態は、大形品は**b類**の223の1点のみが完全品であり、小形品は完全品1点、欠損品は3点、未製品は2点となる。容器全体での百分率は、完全品14%、欠損品73%、未製品13%となる。

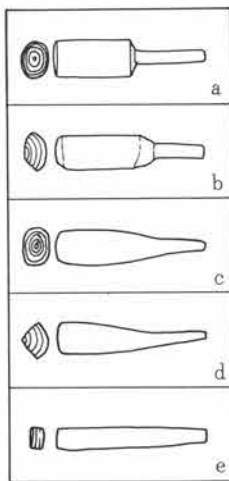
13 杵 杵は2点の出土である。カシ類を素材とし丸木材を用いたもの。

搗部端は丸味をもって突出した形になっており、握部は中央部に突出がある。搗部から握部にかけての境は、削り込みを始めたところが稜線となって一周している。基本的な形は出土例が少ないこともあるが握部に突出をもたない例がなく九州地方の杵は弥生時代前期の例がこうした形態をとり、新しい時期の例には突出がないことが多いことと対照的なことから、大きくひとつの形にまとめておくことにする。190は一方の搗部が途中から折れたもので握部中央には大きな算盤球状の突出部がある。191は搗部が短かく、握部中央の突起は幅狭で低い仕上がりである。そして搗部の握部に近い部分に浅い沈線が一周させて刻み込まれている。

杵はすべて欠損品であり、完全品、未製品は出土していない。搗部端には打ちつけてついた痕があるが、他は製品面は平滑である。

14 横づち 横づちは21点出土している。掘り部と槌身の部分の作り

の特徴から、横づちは大きく5つに分類できる。槌身の部分には打痕があり、先端部や槌身腹部が使用されていたことがわかる。横づちに用いられる樹種は、クヌギ類が12点と最も多く、ナラ類・カシ類が3点づつ、そしてモミ類・カバノキ類・エノキが1点づつみられる。クヌギの多い点が農耕具と違っており、多種の材が使われている点と合せてみると、用材の選定はクヌギなどの入手が楽なものに求められていたことが明らかになっている。



第65図 新保遺跡出土の横づち形状分類模式図

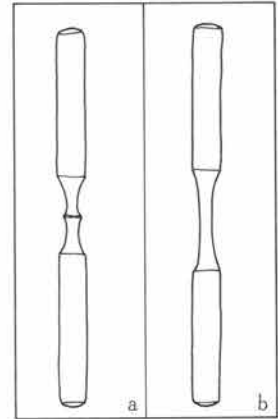
a類は丸木の芯持材を用い、槌身と握りの部分が段によって区別されたもので、身と握りの長さが同じくらいになる。202、208があるが、202は半分に割れている。槌身が四つに面取りされており、それぞれの面に窪みが残る208は、杭打ちなどの作業にあてられたものであろう。表面はあまり手が加えられていない。

b類は割材を素材とし槌身と握りの部分はやはり段によって分けられているものをまとめた。やや小振りして断面が長楕円形となり、短い握りが一つの面にかたよってつけられ側面形はゆるやかな反りをもつ。打面は腹にあたる面の一つに固定される。本類の例として192、196、201がある。形づくりが丁寧で表面は滑らかである。

c類は丸木・芯持材を用いて、太い槌身から細くなる握りの部分へとしだいに移行するものである。195、204、207、210、211が本類に属するが、大小様々でひとつの用途にあてられたものとは限らないらしい。側面形に反りの有無の差がある。

d類は割材を素材とし、槌身と握りがなだらかに移行して明確な区別がないものである。側面形には反りがあり腹背の別があり打面は一面に固定されている。193、194、199、203、205などが本類に属する。器面の加工は粗く、割ったままの面が多い。

e類は割材で太さが一定のもので打痕があることによって横づちとして使われた



第64図 新保遺跡出土杵 a と同時期の西日本の杵 b

ことが分かるもの。197、198が本類に属する。器面の仕上げはこれと違ってない。

横づちは完全品が15点握りの部分が欠けるものが4点その他の欠損品1点で、使用できるものとできないものの百分率比は75%：25%となる。使用可能なものが、多く溝内に捨てられている点特徴的である。

15 作業台 薄手・厚手の板を適切な大きさに切断して、加工作業時の台としたものを作業台として一括する。クヌギ類が最も多くあてられて、クリ・ナラ類・カシ類・そしてヤブツバキが用材となっている。平面形は様々で一定しない。表面に残る傷は刃線痕と敲打痕の二つがありそれによって二つに分けた。

a類は刃物による引き傷であり、長いものでは5cm位、短いもので、2～3cm程の線状痕が残されたものをまとめておく。244、247、249があり、244、247は薄板を用い、249は厚手の半割材を使っているので、仕事の違いもあったと思われる。249は形づくりも丁寧で、重量感もある。

b類は敲打痕が浅く所々にみられるものと、円形に窪みがつくられるほど集中して敲かれた部分が残るものの二者がある。前者は芯持材を分断したのみのもので、後者は厚手の板目材を使っている。250、251が前者例、243、245が後者例となる。

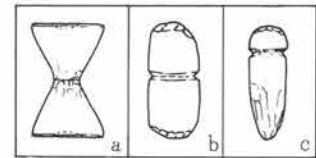
作業台は形が大きいくずれたものがなくすべて使用可能な状態で出土している。また使用痕のないものは器種の認定ができないため製品化以前の姿は分からない。随時板材から製品化していったものと考えられる。

16 緯打具 機を織る際の器具類は本遺跡からはあまり出土していない。二点の緯打具がみられるのみであり、両者ともカシ類を素材としている。背は厚く帯状に隆起部が作り出され、刃部は薄く直線的に仕上げられている。器面は平滑で、糸による擦痕等はみることができない。

257、258は形がほとんどそのまま出土している。257は刃部がより薄手に作られており、背の部分も丸味をもったなだらかなものである。器面も平滑で、丁寧な作りになっている。一方、258はやや厚手で大振り、背の部分も直線的に作られ、がっしりとした作りである。器面は平坦であるが、滑らかさはない。

17 糸巻 筒状の木に刻みをつけて糸を巻きつけるようにしたものをここにまとめた。総計6点が出土しているが、樹種はクヌギ類・ケヤキ・ヤマザクラが確認されている。形状から大きく3つに分類されるが、芯持材・分割材の両方が使用されている。

a類は13cm程の円筒状の木胴部に浅くV字状に削り込みを入れたもので、中央部が深く両端部に最大径がくる形をとる。259、261が本類の出土例となるが、259は中央部より欠失している。また本類の木口面には両面ともに窪みが設けられている。器面には削り痕がのこり、粗い仕上がりとなっている。



第66図 新保遺跡出土の糸巻分類模式図

b類は芯持材・割材の両者が使用され、適当な長さに切断した材の両端を整えたものの中位に刻みを施したものである。260、314、315が本類の例となるが、器面の仕上げは粗く、加工面は少ない。

c類は全面を削り丁寧に形づくりをした円筒状の材に一端に片寄って刻みをつけたもので、331がその例である。小さく丸味をもった部分は削りが集中し、長くのびた部分は縦位に細長い削りがある。

糸巻の完全品は4点、欠損品は2点で、百分率では67%、33%となる。**a類**は巻きつける部分が多いが**b・c類**は刻目に糸を結びつけて幅を変えないでのびる胴部に交互巻きしたものであろう。編みおもりとして使用したものであろう。**a類**と**b・c類**は本来別の役割を果たしたものと考えられる。

18 木製円盤 柾目板を円形に形どったもので、周縁は細かく縁どりされている。表面は平滑に仕上げられているが、削り痕はみあたらない。一面は平坦なつくりであるが、もう一面は中央部がほんの少し盛り上がりしており、断面形は片凸レンズ状となる。12cmほどの直径を持つこの木製の円盤は、蓋などの用途が

考えられるが、つまみもなく確定することはできない。262一例のみが出土しているだけである。

19 木 鈎 枝分かれの部分を利用して作ったもので、太い幹は削りを加え、枝の太さと同じ太さにしたもの。263はモミ類を用材としている。カギ状に仕上げられてあるが、両端を欠くため本来の形は想定できない。現状では表面がなめらかで、削り痕等は不明である。

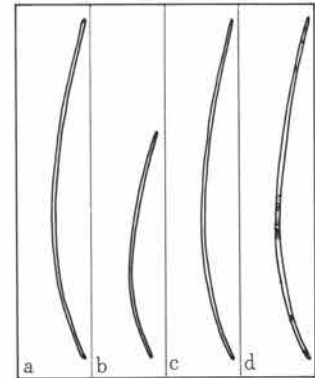
20 弓 弓は丸木弓と飾り弓が出土している。丸木弓は43点中42点がイヌガヤ製で1点がケヤキ製とされている。樋入りの弓が1点出土しているが、これもケヤキ製と同定されている。このケヤキ製の184は実用品ではないかも知れない。また飾り弓は2点ともニシキギ製であった。丸木弓は上長下短の弓形をとると考えられる。それは全体形が分かる出土例がないが、^{はず} 弭付近の湾曲度が直線的で弱いものと強く曲がっているものがあることから想定した。これらから弓は大きく4つに分類される。

a 類は丸木弓で、弓幹部の径が2cm強のもの。長さは完全品がないため、正確には不明とするしかないが、1.3~1.4mもしくはそれ以上の比較的長い弓であろう。276、281、290がa類弓の出土例であるが、弭部が残っているのは281のみであり、他例は弓幹部の断欠品である。281は弓裏の部分に削りが見られるが、これは弭付近のみのものであろう。弓幹は枝払いをした以外には形を変える加工は施されていない。

b 類は弓幹部の太さが1cm台か、それ以下のもので、長さは1m以下の小形丸木弓である。266~274、277~279、282~288、291~300、307~309が出土例で、272、277、282、308のように欠損品の側面形から、小形の弓も湾曲の度合が上下で異なっていることが分かった。また282、298など湾曲が強いことから弓の下半部片であることが明らかな例の弭は、端部を両側から削り込んで凸状にしたつくりで、上下弭の加工に差がないことが分かった。b類の弓幹も枝払い以外の削りは少なく、弭付近の弓裏側に厚味を整える削りが集中していて、その部分の断面形は半円となっている。

c 類は全体の形はa類とほぼ同じであるが、現在湾曲している外側の部分に浅く細い樋が切られている。その出土例としては289がある。この弓は削り出したケヤキ製の材が素材となっている。木目と樋の部分との関係から、実際に引くことはできないものと想定される。

d 類は糸巻や赤塗りの飾り弓で、264は丸木を用い、樋を入れ、幅のある糸を巻きつけた上に漆塗りしたものである。糸巻の状態や弓形から、握りの部分から上にかけてが残存しているものらしい。巻きつけた糸は樋を利用してくりつけてあることが所々巻きの部分から分かる。280は細い材をさらに削って全体を半円形にした弓片面を赤塗りしたものである。264は大形の弓、280は小形の弓で、飾り弓の中にも大小の別があったことがわかる。用材としてニシキギ類をあてていることも飾り弓の特徴である。新保遺跡出土の弓はすべて欠損品であり完全品はみられない。丸木弓・飾り弓に共通してみられるこの現象は弓の廃棄の姿が反映しているものかも知れない。使用による欠損品を捨てたという単純な姿を想定することも可能であるが、後代の古墳出土の鉄鏃が矢柄部全体を残すことがない点を考えると、弓矢の廃棄に際して意図的に折るような行為が伴ったと考えることもできようか。100%欠損品である事実は、他の弥生遺跡出土例にもほぼ共通することで、弥生時代の弓の完全な出土例は、長崎県里田原遺跡・大阪府池上遺跡・瓜生堂遺跡など5点しか見ることができない。出土例の少ない縄文時代の弓の完全品よりもさらに少数しか見られないことと、弥生時代の弓に小形のものが多いこともあわせて考えていかねばならない問題であろう。弭は、上下とも同じつくりで糸かけによる弦張という弥生時代特有のものである。265は両側からの刻み入れ例である。



第67図 新保遺跡出土の弓形状分類模式図

21 用途不明品 形づくりや削りの様子から製品であることは分かるが、他の出土例に類品を求めることができないものを一括して用途不明品とした。318、325は丁寧な面取りされた角形で組み穴があり、方形の組み物となるらしい。織機材か大足の材とも考えられるが用途は確定できない。350は表面を平滑に仕上げた柵目板利用の製品で、現状では三角の窓が二つ確認できる。窓の左右には細い沈線が4～5本づつ引かれている。折れている側縁以外の縁辺部は円味のある仕上がりとなっている。323、327はカシ類の柵目板を素材としているもので、農耕具の部分であるかも知れない。323の段は削りによって丁寧な仕上がりを見せている。344は柵目の薄板を木札の様に両端を尖らせてつくったものである。表面は割ったままの平坦な面で、縁辺部は削りを加えて面取りがなされる。319、320、345はいずれもカヤの柵目薄板を素材としているもので、一面は平坦もう一面は円味をもたせた作りで、丁度竹のものさしのような形である。長さは20cmをこえることが多く、幅は3cm程度である。平坦な面同士を重ね合わせて二つで一組として使用するものであろうか。弥生時代以降の類品には、三浦半島の海蝕洞穴出土の骨製筭があるが、大きさが異なりやや大きい。他には鉄製刃器の柄、あるいは鞘として考えられるかも知れない。

22 梯子 梯子の5点の同定結果はクリ2点、クヌギ類・ナラ類ヤマグワが各1点で生活用具との間に用材の差があり、特にクリ・ナラ類といった軽軟な材を使っている点が注目される。手斧により段と斜面を作出して足かけ部とする。梯子の上下は直角に段をつけた側を踏み面とするか、斜傾面を踏むのかは個々の出土例からは速断できない。地面への差し込み部を尖らせた例では簡単に区別できるが、尖端部は必ずしも一定していない。

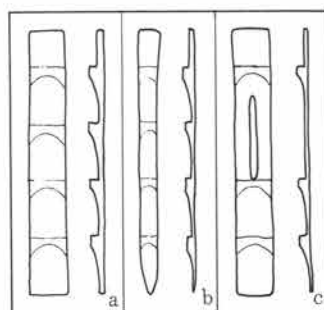
a類は半割材の外側の部分に手斧を入れ、段を作出したもので幅広な作りである。353の段は3つあり両端ともに原形をとどめるが、図下端の部分はやや幅狭となっており、また表面が荒れている。この端部が地中に埋められたものであろう。段と段のピッチは33cmと36cmでやや間隔があいている。器面は摩滅しており、削り痕はあまり明瞭には残っていない。

b類は¼分割材を利用した幅の狭いもので、その分段の部分が厚くなっていて足かけが楽になるようになっている。354は下半部の先端と2つの段が残る欠損品であり、段と段のピッチは26cmである。355も2段分の断欠品であるが、上下ともに残っていない。段と段のピッチは22cmであった。414は段部のみの破片か。

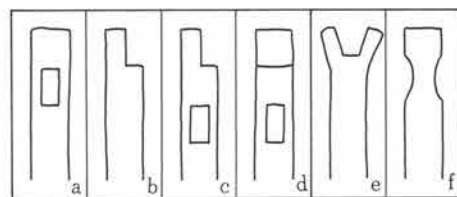
c類はあまり類例のない梯子で、分割材を使った3つの段をもつ透しのある例として357をこれにあてた。段と段のピッチは31cmと63cmで、二・三段の間の透しの部分が倍の間隔をもつことから、この箇所には支柱が入り、それを利用して一段分にする別の木が組まれたものと考えられる。

以上のように仮に3つに大別したが、356の様に比較的細い芯持材に段をつけた例もあり、ここでは段の高さや仕上げからB類として考えた。完全品2点、欠損品は3点、百分率では40%、60%となるが残存の状態を考えるには点数が少ない。

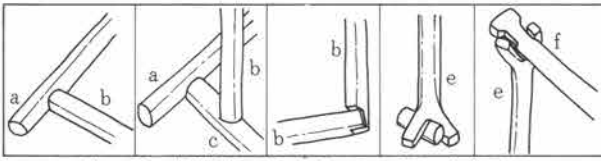
23 建築材 建築材とした遺物は太さ8cm内外の芯持材が多く、また丸木のままで面取りをしない仕上がりとなっている。接合部分にまれに面調整を少し施すことはあるようだが、材そのものの変形は意図的に図られてはいない。用材としてはクヌギが13点と最も多くアサダ・クリ・ナラ類・カシ類・エノキなどが確認されている。組み手の種類は6例に分類された。



第68図 新保遺跡出土の梯子形状分類模式図



第69図 新保遺跡出土建築材分類図



第70図 新保遺跡出土材からの組み方復原図

a類は丸木の端部近くに組み穴を持つもので出土例としては364、368がある。

b類は丸木の端部に段をつけて組み手とし、組穴に納めたり、組み手同士で材を直交させたと考えられるもので、出土例として416がある。

c類はa類とb類の組み細工を合わせたもので

出土例としては367を図示した。そして良好な状態のものがなく資料を掲載できなかったが、d類として組み穴が90度ずれたものがあげられる。

e類としては、枝分かれの部分を利用して端部に又を作出したもので、363、366、374～377があるが、この材は一方の耳が欠けることが多い。枝の方の耳が欠けやすいようである。

f類は丸木の端部近くの側縁をえぐって、固定の助けとしたもので、365がその例である。

こうした丸木材の他に371の様な割り材の面調整をしたものや、351、352、372の様に組み穴を開けた板材などがあるが、a～f類の建築材を組むと第70図の様に建築物のコーナーや棟木の乗せかた、掘立柱の固定などの各技法が復元できる。木材の立体構築を助けるこれらの組み細工については考察の項で再検討する。

24 分割材 製材作業を物語る資料としてまず分割材を見ると、 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ さらに薄く分割した材が出土している。493～511は長さや幅、厚さなど様々なものであるが、断面が扇形の打割面で限られた材として一括して考えておくことにした。なかには断欠品もあるが、497、501、503などは木口面に丸木を切断した時の斧痕が残っている。分割はその後に行われており、加撃は側縁と木口面の両方からなされているらしい。用材としては、クヌギ類が66点と最も多く、クリが23点とそれに次ぐ。その他にカヤ・モミ類・ヒノキ類・オニグルミ・ハコヤナギ類・ナラ類・カシ類・ムクノキ・エノキ・ヤマグワ・ヤブツバキ・モモ・コクサギ・ニガキ・ヤマウルシ・カエデ類などがある。

25 柾目板 分割の際に薄く幅広に製材した柾目の板が数多く出土している。木の外側に近い方が厚く芯の側が薄い板で、長いものから短いものまでであるが40cm前後のものが多いようである。柾目板は両側に切断時の斧痕がある他には加工痕はなく、両面ともに打ち割ったままの姿が一般的である。424～473、485、486が出土例であり、両端に切断痕がある448～461、471、473などは、鋤・鍬類の素材として形づくりをするまえの最初の段階のものとして意図されていたものかも知れない。用材の点でも注目すべき事実がある。最も多いものはクヌギ類で112点であるが、カシ類が30点あり、製材段階のどのものにも見られない出土量である。農具その他の製品と、この柾目板を加えたカシを用いた遺物は143点で、他でカシと同定された材の93.5%を占めている。用材の問題については別稿にゆずるが、柾目板にはカヤ・モミ類・五葉松類・スギ・ヒノキ類・ハコヤナギ類・クリ・ナラ類・エノキ・ケヤキ・アカメガシワも用いられていた。

26 板目板 分割して作り出すことが困難なこともあってか、板目板で大きなものは少ない。図示したものは、474、487など極めて少数であり、多くは小片である。柾目板に比して割断面が平坦でないし、大形品については、どうしても木理の具合で板目の強さを必要とする際以外には、通常作ることがなかったものと思われる。用材としてはモミ類の15点という例が最も多いが、これらは小片である。次いでクリ・クヌギ類が24点出土しあとはカヤ・五葉松類・スギ・オニグルミ・カシ類・エノキなどが確認できた。

27 角材 分割材の樹芯側の部分を取り去って、四つの面をもつ材を作り出すこともあり、これを角材として分類した。525～527がある。長い材が多く用材としてはクヌギ類の31点が最も多い。他はカヤ・モミ類・クリ・ナラ類・カシ類・エノキ・ケヤキ・キハダがあるがモミ類のそれは細身のもので、クヌ

ギ類の大形のものとは明らかに用途を変えたものであったと思われる。

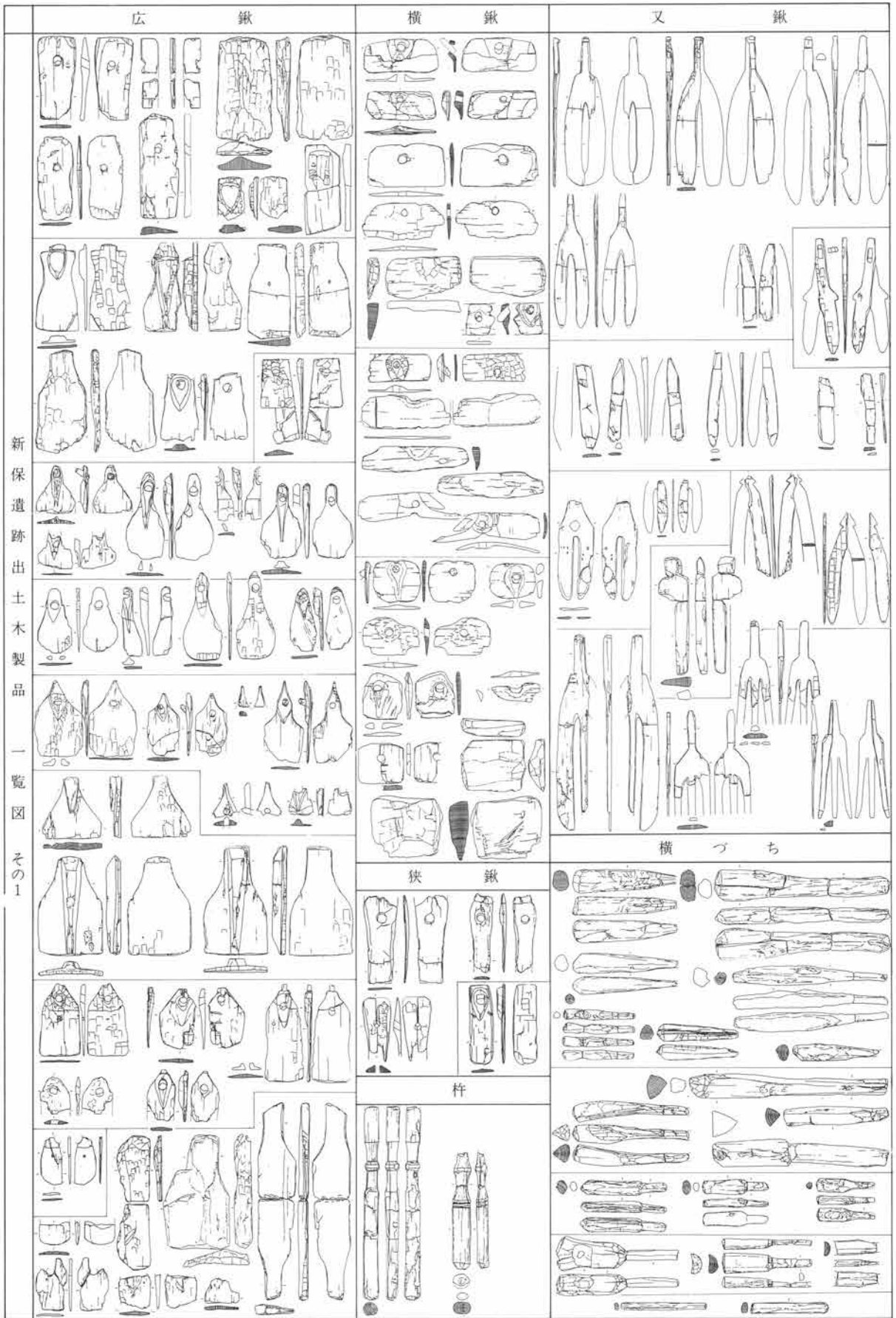
28 杭 先端部を尖らせた丸木、もしくは割材が直立して出土したものがある。8～9 cmの径のものと4 cmくらいのものであり、太さには大きく2種類があったと思われる。太い材として379、381、383～385、407～410があり、細い材には378、386～406がある。芯持材・割材・太材・細材による区別は明らかではない。先端部の加工は全周に施されるもの、2面に主として限定されるもの、一方向からのものなどがある。切断技術については日高遺跡での分析があるので、ここでは触れない。クヌギ類が18点、クリが9点あり、その他にも13種の材が同定されている。クヌギ材が自由に使えていること、クリの水に対しての強さが考えられていたことなど、杭の用材は供給量と材質によって決められていたことがわかる。46点が出土している。

29 加工材 出土木材のなかで、加工痕がどこかに残っていたり、変形したことが確実である資料を加工材とした。57点が見られる。クヌギ材22点、クリ材が11点、ナラ類が4点、ニレ類が3点出土しているが、他は1点づつが同定されている。製品ではなく製材段階での加工と思われるもので、用途不明品との区別をつけた。端部を切断したものとして512、515～521、523があり、側面に刻み・えぐりがあるものとしては513、522がある。多くの切断痕が平坦な加工面を残しており、鉄斧の使用が考えられるが、521などは石斧による加工痕と考えられる。

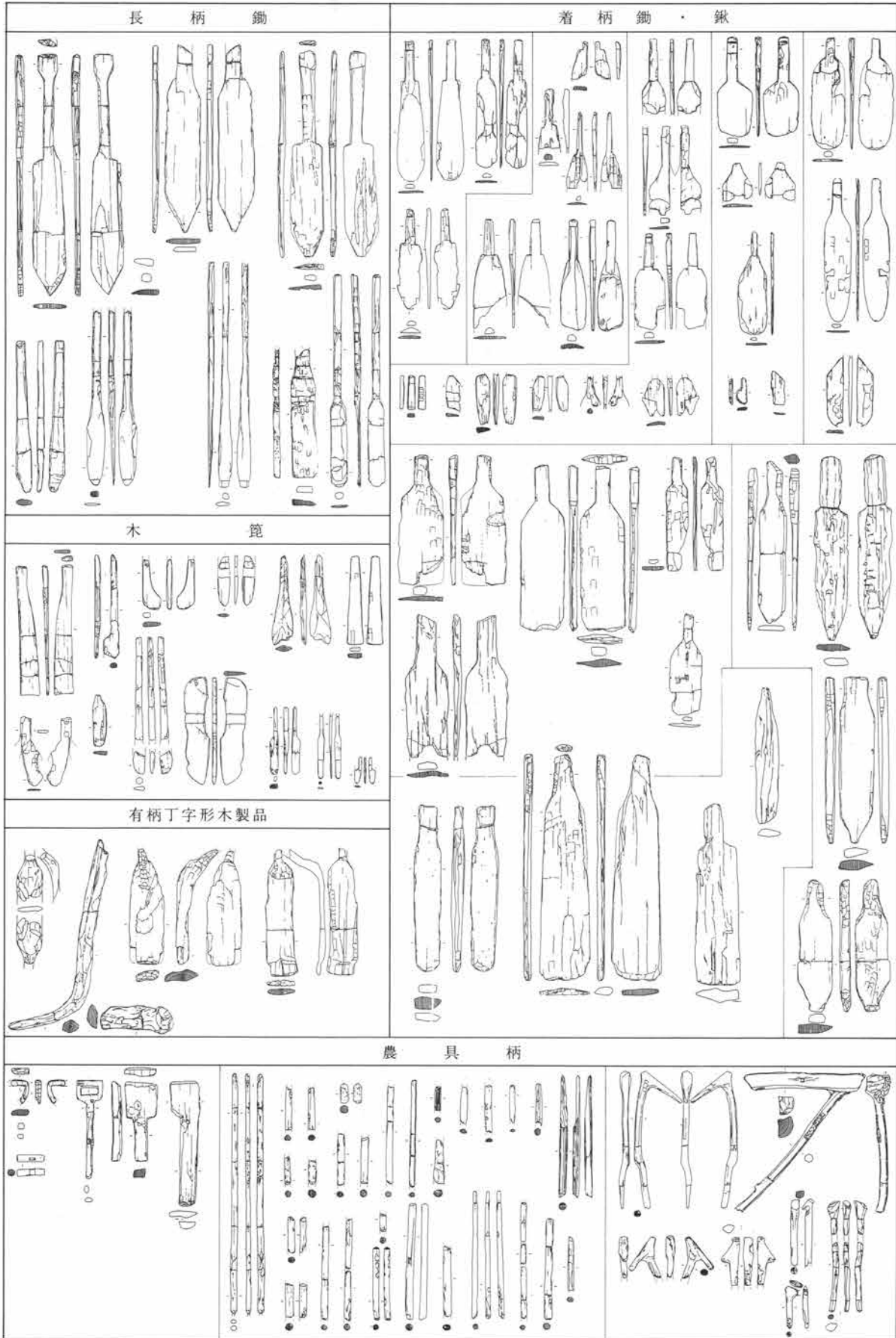
以上の様に新保遺跡出土の木製品・加工材を見てきたが、この豊富で多量に発掘された遺物を第71、72図に集成した。縮尺は一定でないし、形状の明らかでないものは省略したので、正確な量がそれぞれの器種に出された訳でないがおおよその姿はとらえることができる。第71図は農具類を集成したもので、鋤・鍬の特徴を一覧できるようにした。第72図は狩猟具・工具・生活用具・建築材などが一覧できる。

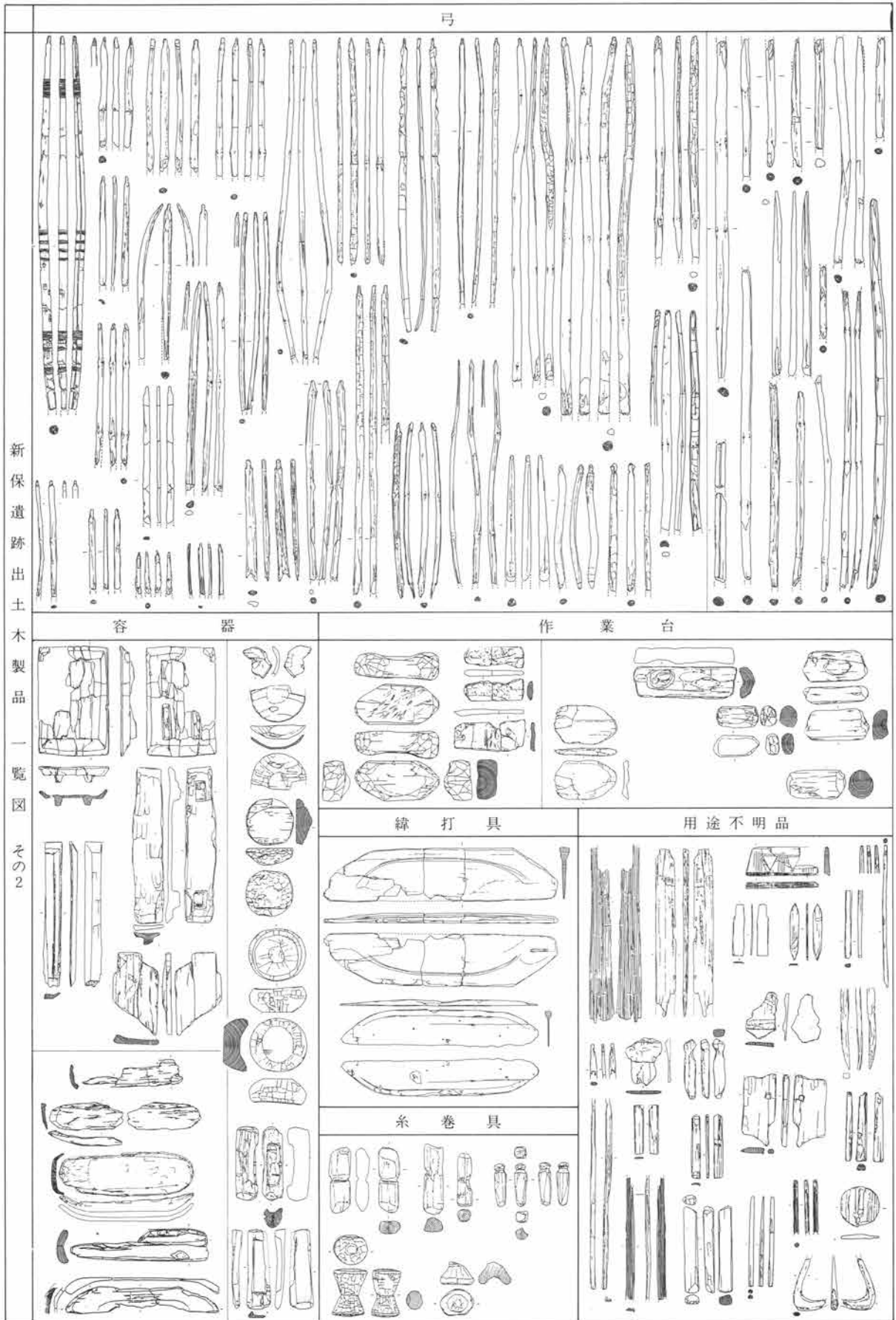
別稿の考察の部での検討の前に、まとめとして新保遺跡全体の木製品の姿を見ると弥生時代から古墳時代の生業の生産から消費にかかわる道具類が均等に出土していることがわかる。その内容は、

- 農耕に関連しての道具がセットとして捉えられた。そしてその組み合わせの量的関係の手がかりを示せた。
- 弓の出土量が多く、狩猟活動も活発であったことが分かった。弓は小形のものが多く、縄文時代のそれとは異なったものとなっている。弥生期に入って長弓主流から短弓主流への移行があったことは、猟法の変化も反映しているかも知れない。
- 直接的な生活用具の他に間接的な用具→調理具の出土も多かった。杵・横づちの出土や容器類の出土からは、弥生文化のなかでの調理技術の独自性がうかがえる。縄文時代にも横づちは存在するが、その量は少なく用途も単純であったことが想定される。容器には新しい形態のものが見られ、弥生時代の生業活動の内容は、生産様式の変化が、生産→調理の一括した過程のものであったことが分かった。
- 織機関係の遺物出土量が少なかったが、これは調査地点の個性なのか新保遺跡の個性なのかは不明である。
- 建築材の出土から、弥生時代から古墳時代初めの建築材が芯持材の面調整があまりなされずにあること、立体構造を組み仕口で行うようになっていたことがわかった。
- 斧柄は、西日本の弥生遺跡出土のものと形態を同じくする。農耕具が地域性をもつものに対して、農具づくりの道具立ては伝えられており、縄文時代の工具との完全な切り変えが想定される。
- 製材段階の資料からは、集落周辺で入手したクヌギ類の材は豊富に残されているのに対して、カシ類の材はほとんど見られず、柾目材をしっかりと製材した後製品化されたと考えられるものであり、遺跡内で製材したとは考えられないことがわかった。今後、木材の流通について検討する手がかりとなる。

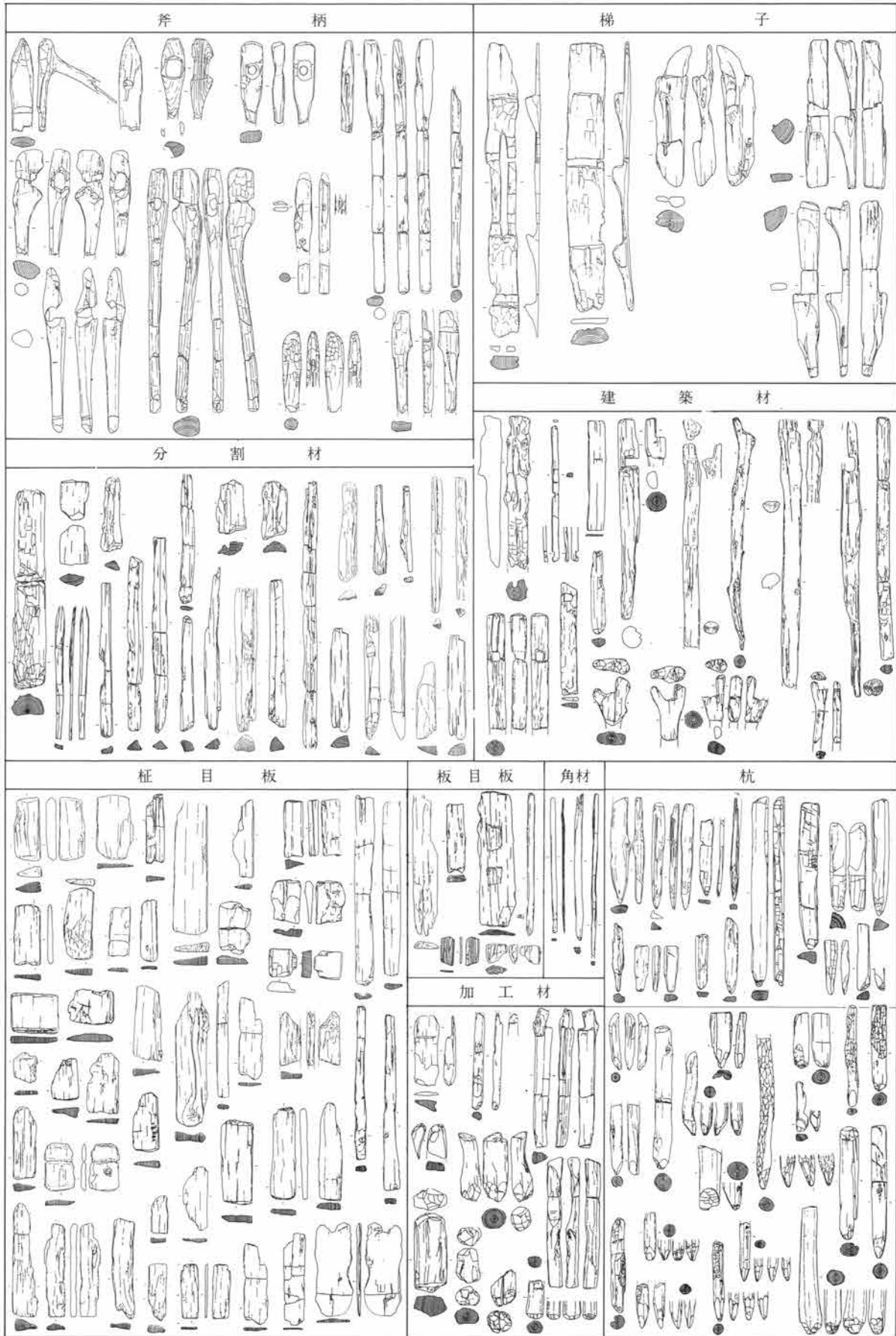


第71図 新保遺跡出土木製品一覧図 その1





第72図 新保遺跡出土木製品一覽図 その2



14 くわとすきの来た道

山田昌久

日本列島へ米作りの暮らしが伝えられたのは、北部九州の地であり、中国大陸・朝鮮半島からの外来要素として、稲作・大陸系磨製石器・支石墓などが対象となって、弥生文化の成立の研究が進められている。近年、福岡県板付遺跡・曲り田遺跡、佐賀県丸山遺跡・菜畑遺跡の発掘成果から、この地では、今まで縄文時代晩期に位置付けていた山ノ寺式土器・夜臼式土器などの刻目突帯文土器の時期に、大陸系磨製石器群や木製農耕具が伝えられ、稲作が行われていた事実が明らかになってきた。

そして、稲作技術が、日本列島にどの様に受け入れられて、弥生文化の基礎として確立されたのかといった研究が、そうした新発見の遺跡・遺物の評価とともに重要な研究課題となってきた。九州・瀬戸内・近畿・東海・北陸・関東さらに東北へと、どの様に農耕社会への切り替えがなされて行ったのか、そこに我が弥生文化の個性を示し、歴史形相を明らかにする事が弥生時代像の理解に必要である。今回、新保遺跡の多量な木製農耕具が明らかになり、関東地方での手がかりが得られ、それぞれの地域のくわとすきの姿を追ってみる事ができるようになった。そこで、現時点の資料からくわとすきのきた道をたどり、ひとつの弥生時代像をスケッチしてみることにしたい。

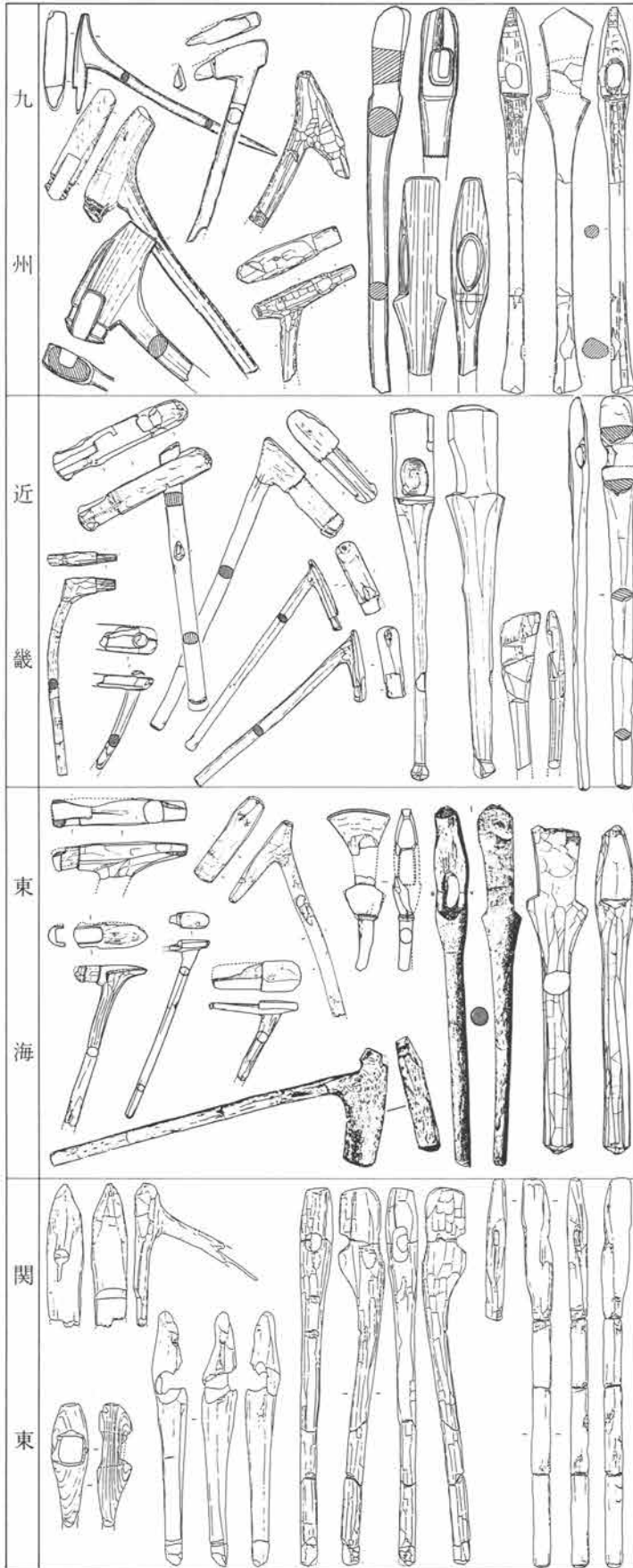
1 縄文時代の斧柄と弥生時代の斧柄の地域別出土例から

縄文時代の斧柄は、福井県鳥浜貝塚から膝柄の縦斧柄が数多く出土し、横斧柄も近年確認された。また、滋賀県滋賀里遺跡からは、直柄の縦斧柄が報告されている。縄文時代例は、縦斧2種類、横斧1種類が分かっているが、地域性を知る手がかりは少なく、現時点では、ひとつのものとして考えておく他はない。

大陸系磨製石器は、それに対応する木製斧柄とともに北九州地方に伝えられた。時期はそれぞれ異なるが、菜畑遺跡の縦斧柄（太型始刃石斧用）・福岡県瑞穂遺跡の横斧柄（柱状片刃石斧用）・長崎県里田原遺跡の縦斧柄、横斧柄（柱状片刃石斧用）・横斧柄（扁平片刃石斧用）などが、その実例である。石斧自体は夜臼式期に全種類が確認されている。大陸系磨製石器群は、新たな木工技術をささえる労働手段であり、農耕の基礎技術のひとつとして、もたらされたものといえる。この斧は、縄文時代の丸木材活用の木工技術（木製品への技術工程として、板材を作ることに力点をおかないで製作する方法）を改変し、弥生時代の板材活用の木工技術（大量の板を作り出し、それからくわやすき等の木製品をつくる工程に、対応しての道具立てを保持しているもの）を示すメルクマールにもなっている。

言葉をかえていえば、木工技術の時代的な個性として、磨製石斧の縦斧を主とした丸木材活用のそれを縄文木工技法、大陸系磨製石斧群の縦斧横斧各種を主とし鉄斧をも有した板材活用のそれを弥生木工技法と位置付けられる。

さて、弥生時代の斧・斧柄の出土例をみると、九州地方から関東地方にかけて、大陸系磨製石斧群が伝わったことは明らかで、さらに後出する鉄斧の出土例からは、九州・関西各地毎にその形態を異にして分布圏がみられることも分かっている。注目すべきことは、石斧の実例からは、九州地方と瀬戸内・関西地方の前期段階の資料に大きな差は認められないという事実である。木製農耕具に地域により形態差があるという指摘があるが、工具からでは、そうした差をどの様に説明することができるだろうか。九州地方にもたらされた稲作技術と近畿地方のそれとは、その伝達集団が異なるのだと考えるべきか、同一集団のなかでの変異と考えるべきか、難しい問題であるが、現時点では大陸側にその資料は求められないので、結論を出すことは控



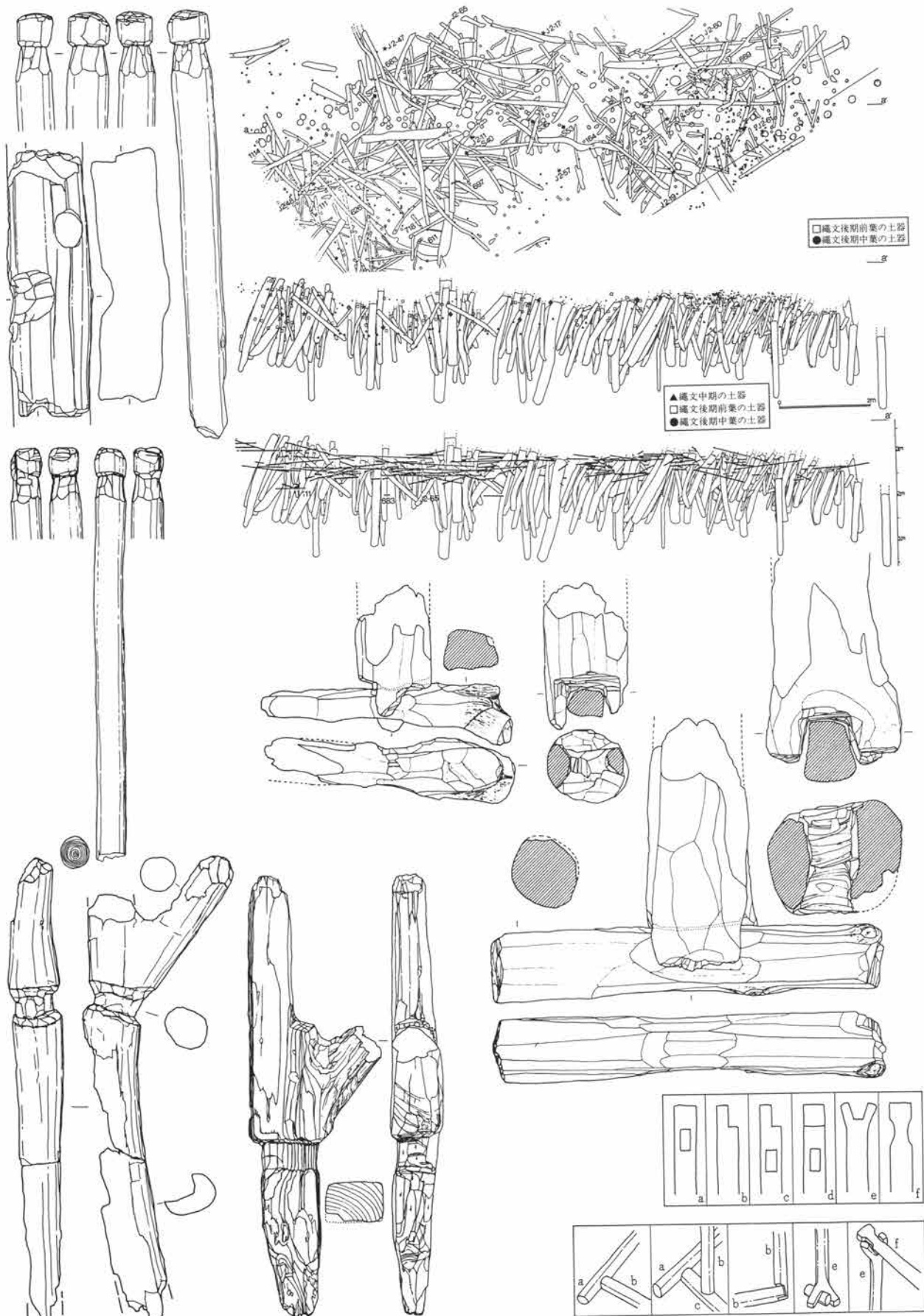
第73図 弥生時代斧柄の地域別出土例

えたい。

第73図は、九州・近畿・東海・関東各地域ごとに分けて図示したものである。興味深い点は、太型蛤刃石斧用・扁平片刃石斧用、柱状片刃石斧用のそれぞれの斧柄の形態が、その細部の作りにいたるまで、同じであるということである。新しい木工技術の道具立ては、日本列島を東進するあいだ、大きな変化をみせずに伝えられていたと想定される。斧柄の変化は、むしろ時間差として考えられるらしい。組み合わせ式の斧柄(雇い柄)の出現や、小形石斧用斧柄が近畿地方と関東地方でやはり同一の規格性を持っている点など、後出の諸要素も同じ様に伝えられ、また、受け入れられている様である。こうした工具の確認例からは、巨視的には技術基盤はひとつであるとしてよいのかもしれない。しかし、中期以降の後の鉄斧などの工具差や土器様式差は、北部九州圏・近畿圏・北陸圏……といった独自の文化圏を形成しながら弥生文化が展開していった事を示していることは記憶しておきたい。

2 弥生時代建築材の特色

木の枝分れの部分を利用して股部とし、窪みをつけた材と組ませてふたつの木を固定する方法は、縄文時代からみることができる。青森県是川遺跡出土例が古くから知られていたし、岩手県葦内遺跡の例には、第74図のように股部の下位に切込みがつけられ、縄や紐で固定部を補強する際の助けとなっているものがある。埼玉県寿納遺跡の木道の材のなかには、胴部にえぐりを入れて木組みをやすくしてある例も



第74図 縄文時代・弥生時代の構造村と木組み

あった。このように「股」「切込み」「えぐり」を利用し、縄や紐で固定する方法が、縄文時代の木組みの技法と考えられる。

弥生時代の遺跡からは、数多くの建築物部材が出土している。第74図右下のようにその端部の形状は大きく6通りに分けられる。この時代になると、縄文時代には見られなかった組仕口で、木材を使った立体構造物が作られるようになる。このような組仕口からは、次のようないくつかの状況が想定される。たとえば、aとbの材で直角部分が、aとbとcの材では3方向に直角を作ったのびる部分が、bとbからは、材の延長や直角部の作出が可能となる。もっとも、最後の例は組みが弱く、組穴が作れなかった縄文時代でも用いられていたようである。

弥生時代の建築材のもうひとつの特徴として、丸木材が多く、面どりをした柱材はほとんど見られないことが指摘できる。ここには、弥生時代の建築技術の革新と限界が示されているらしい。建築材にみられる変化は、板材にも表れている。組穴を持つもの、端部を半分取り去ったもの、斜めに切り落としたものなどがあげられる。倉庫や竪穴住居の木組み法が変わったことが予想される。

縄文時代の竪穴住居の柱穴配置は、例えば、関東地方の加曾利B式期のものでは、円形に7～10本の柱を有したものが一般的な姿である。上部構造は、出土例こそないが、桁を順に繋いで行き垂木をかけたもの様らしい。平面方形の住居は棟木をもち、垂木を平行に配する構造となろう。その固定は縄で結んでのものであり、縄文時代の木組の技術を端的に表現すれば、結縄による固定術の段階とすることができよう。石川県チカモリ遺跡と同じく真脇遺跡の円形に配置された柱根例は、柱材が半円の断面形であったことを示している。結縄固定の段階では、柱材が太くなればなるほど上部で横木を渡す際に接触面・固定面が確保しにくくなる。平坦面を作りその面を内側（あるいは外側）に揃えて柱を埋める手法は、上部で渡す横材をしっかりと固定するための接線を確保するためのものと考えられる。

弥生時代になっても竪穴住居は、平面円形の形式をとることが多い。これは、東アジア全体のなかでもあまり類例のない、日本列島における個性的な姿を示しているといえる。その原因は、組手の技術があるにもかかわらず、材の表面の面どりが行われていない弥生時代の建築材での住居の立体構成からは、立方形を組みたしていく構造は作出しにくいということによるらしい。しかし、この組み手技術の出現という技術革新は、材をしっかりと固定して直角に組むという作業を弥生人達にもたらしたとともに、古墳時代以降の立方形の居住空間を生み出す原点のものとして位置付けることを忘れてはならない。

弥生時代の家形土器の例として、神奈川県子ノ神遺跡・岡山県女男岩遺跡・鳥取県東伯郡本郷町出土例の3例があり、いずれも方形プランで柱・横木が形作られ、入母屋造・寄棟造が表現されている。しかし、南関東の地では、角円方形プランの竪穴住居址を弥生時代の後期後半例に見ることができるが、日本列島全体を大きく捉らえるならば、前述の様に平面円形の形式が一般的な住居の姿であったとすることが許されよう。家形土器に示された建築技術は、弥生時代の特別な建物におけるものと考えられ、次の古墳時代に普及する住居の先駆的なものであったと考えておきたい。

住居の入口に戸を設けることは、奈良県佐味田宝塚古墳出土の家屋文鏡のはねあげ戸の表現からも想定できる。実際の遺物として示せる例としては、静岡県山木遺跡出土の一側縁の両端に耳をもつ平板と三重県納所遺跡出土の戸受け横材、千葉県菅生遺跡出土の耳受け穴をもった材が報告されている。多くは古墳時代に属するものであり、弥生時代後期と報告される例が菅見では最古のものであった。今後の資料の増加で変更の余地もあろうが、弥生—古墳期における角材組の出現の様相と係わるものと考えられるかもしれない。この角材作出は、建築技術史の画期を示す指標となる。なぜならば、群馬県赤堀茶臼山古墳・三重県石山古墳・

宮崎県西都原古墳群などからは、梁、束、斗を表現した切妻屋根の家形埴輪が出土しているが、角材資料は古墳時代に入るやいなや、いや、少なくとも5世紀の確認埴輪例以前の段階での技術革新を物語る資料として、鉄製工具の変化とともに、それによって作り出された建築材の確かなあかしとされるのである。

一木造りの梯子の検出例は縄文時代にはなく、弥生時代にはいつてからの木製品と考えられる。入り口部の施設に関連するものとして、梯子穴の存在が指摘されて久しい。梯子は高床式の倉庫のみでなく、竪穴式住居の入口にも渡されたものらしい。もっとも、弥生時代の大型住居址には、神奈川県赤坂遺跡・千葉県大厩遺跡例のように木組みによる入口施設を想定させる入口部小穴群を有するものがあり、一木造りの梯子のない縄文時代の竪穴式住居にもしかるべき施設があったと考える事もできる。

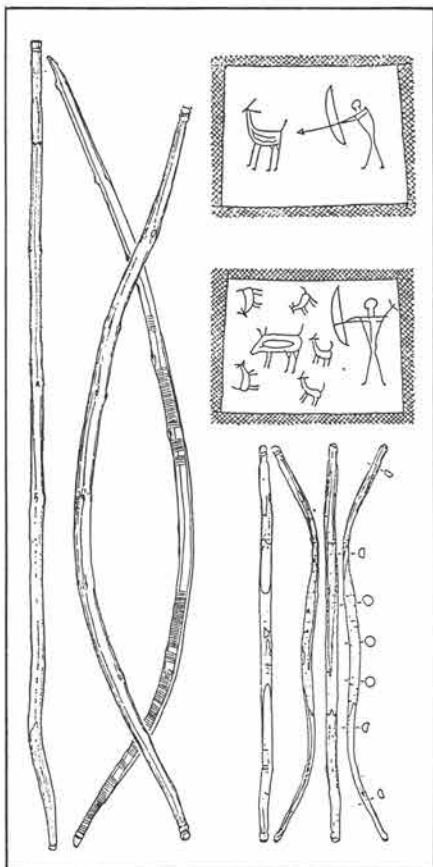
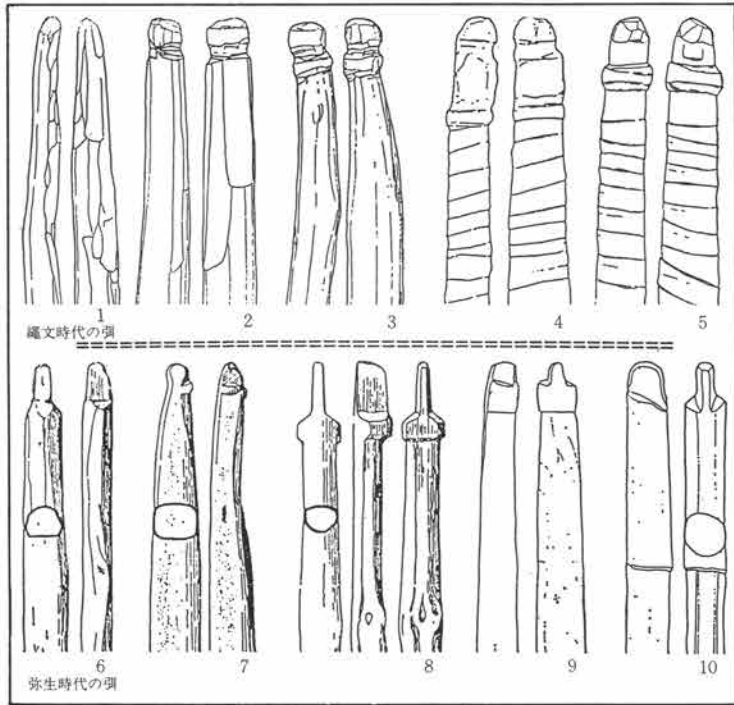
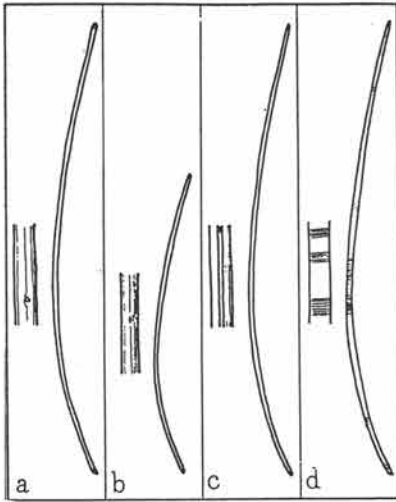
3 縄文の弓・弥生の弓

新保遺跡から出土した木製品の中で、次に注目すべき資料として丸木弓がある。奈良県唐古遺跡の報告で明らかにされた弥生時代の丸木弓は、殆どが小形で、弓筈の形は両側から削りをいれた凸形になっていることが多い。赤塗り黒塗りの飾り弓も出土しているが、それらの弓は大形で太いものであることが多い。

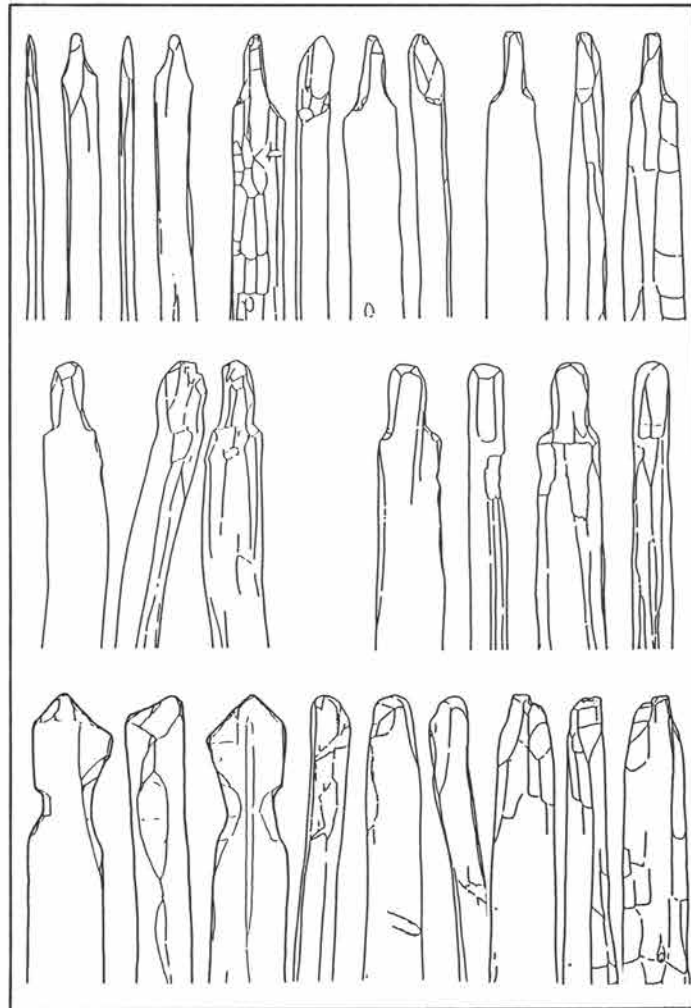
ここでは丸木弓にしばって話しを進めていこう。縄文時代の弓に長弓と短弓があることは、近年の発掘で明らかになってきた。長弓の例として、荇内遺跡・寿納遺跡などの例があり、短弓の例として、埼玉県伊奈氏屋敷遺跡例などがある。さらに「小型弓」と呼んでいる、発火弓・穿孔弓と考えられる木製品も確認されているが、これは、仕掛け弓としても用いられたのかもしれない。弓の全体形は上長下短で、握りの部分は弓幹の下よりくるものが多い。出土例は多く湾曲しており、弦が張られた姿が想像されるが、これは、後述の縄文時代特有の弦かけ法によって生じたものと考えられる。縄文時代の丸木弓出土例は、現段階では長弓が多く短弓は少ない。そして、その遺存状態は良好で、完全な形もしくは全体形が想像できる形であることが多い。

一方、弥生時代の丸木弓にも両者があるが、奈良県唐古遺跡の報告例からも明らかであった様に、短弓が多いことが注目されていた。今回新保遺跡の丸木弓が纏まった形で報告できたが、これまでに明らかになっている関東地方の縄文時代の丸木弓とは、大きさが全く異なっていることは、注目すべき事実である。弥生時代の弓は、縄文時代のそれとは大きさをえて、関東の地でも新しい姿を見せているものと考えられる。しかし、その形態は、ほぼ変わらないことも重要である。佐賀県菜畑遺跡で確認されたような左右対象の弩とされるような横弓は、弥生文化には根付かなかつたらしい。また、弥生時代の丸木弓には、大きな変化が認められる。弓筈の作りが弦かけを可能にした凸形になり、この事から、新しい弦かけ法の存在が想定されている。この事から、弥生時代の弓の特徴を述べるならば次の様になろう。すなわち、その形態は、先行する縄文時代から受け継がれたもので、縦弓となっている。弓を射る動作は、弓幹の中位より少し下がった部分を持って行われるものと想像され、現代の和弓へと続く基本形は、縄文時代からのものとする事ができそうである。しかし、大きさと弓筈のつくりの点では、弥生文化の弓は日本列島を東進する際に、すべて新形式のものに置き換わっていったとすることができよう。

以前筆者は弥生時代の弓が、その形態を変えずにいることから、弥生時代の狩猟技術が縄文時代からそう変化なく受け継がれたものと考えたことがあった。しかし、今回新保遺跡の弓を手にして、小形の弓が数多く出土するという、唐古遺跡と類似した様相を見逃すわけにはいかないという印象を強くもった。縄文時代の弓が少数の大形のそれを引き絞って、待ち構えて対象に放つ個人的な狩猟具で、弥生時代の弓は多数の小形のそれを軽快に駆使して、共同して対象にあたる集団的な狩猟具であったと考えることもできるが、その



第75図



変化の時期は確定しえない。もちろん、弥生時代の弓が武器としても用いられたことを忘れることはできないが、狩猟技術の変化に注目した時、この変化は、重要な事象と思われるのである。

さらに、弓の出土時の残存状態にも触れておかねばならない。弥生時代の弓は、完全な形で発見されることが極めて少ない。この事実は、縄文時代の弓の残存状態とは、やはりかなり異なったものである。使われなくなった弓を捨てたと考えるだけでなく、縄文時代・弥生時代の狩猟習俗のなかに、その原因を求めてみる必要があるのかも知れない。

4 弥生時代の木材選択と流通をめぐって

木の性質を理解し製品ごとに使用する材を変えることは、縄文時代の木材加工にも見られることであった。鳥浜貝塚・寿納遺跡の報告で述べてきたので、ここでは多くは触れる必要はあるまい。弥生時代の木材加工では、唐古遺跡の調査報告で農具にカシ類があげられることが指摘され、近年では、両者の関係は密接に結びついたものと考えられるようになった。朝鮮半島からくわとすきが伝えられた際に、工具・製作法とともに

	耕作用具	斧柄	弓	木製品	柱目材	製材・廃材	合計 (比率)	総計	製品率
クヌギ類	60	10	0	60	114(34)	204	164(36.6%) 274(63.4%)	448	36.6%
カシ類	89	0	0	19	31(25)	14	133(86.9%) 20(13.1%)	153	86.9%
イヌガヤ	0	0	42	2	0	8	44(84.6%) 8(15.4%)	52	84.6%
クマリ	0	0	0	15	19(16)	66	31(31.0%) 69(69.0%)	100	31.0%
ナラ類	5	0	0	6	5(0)	14	11(36.6%) 19(63.4%)	30	36.6%

第76図

に適材の選択も組合わさった形でもたらされたものであったと思われる。それ以外の木製品では、各地の植生の違いによって用材を変えているものもあることも分かってきた。

新保遺跡出土の木製品・加工材の樹種の同定結果から、弥生時代の木工技術を理解する上で、興味深い事実が明らかになった。

第76図によって示されるように、新保遺跡のくわとすきに充てられている木は、東海地方以西の弥生時代木製くわ・すきの95%近くがカシ類を素材としているのに反して、40%程がクヌギ類に依っていたことが分かった。そして、残りの60%程がカシ類を素材としたものであったのである。関東地方北部の地では、この頃（弥生時代後期）にはクヌギ類は自生するが、カシ類は認められないという花粉分析・大形植物遺体の分析結果がある。加えて製品率に注目すると、クヌギ類は、36.6%と製材段階の材や加工材の比率が高いのに対

し、カシ類は、86.9%と製品化されたものの出土が殆どであったことも、重要な事実である。

新保遺跡では、クヌギ類の材とカシ類の材の活用法が異なっていたことが明らかである。本来、カシ類材の使用は、稲作技術の伝達時にくわ・すきの適材として既に技術系のなかに組み込まれていたものと考えられる。自生しない常緑のカシ類が、製品もしくは、板材として製品化された姿で出土するという現象からは、南関東以西の地から随時製材した状態で供給されていたことが予想される。しかし、新保ムラのくわ・すきの使用量は、移入したカシ類の板材では賄いきれないものであったらしい。集落近くで入手できるクヌギ類を、集落内で製材してくわ・すきの素材を作り、その不足分を補っていたことも、想定されるのである。

製品率の高さでは、イヌガヤを用いた丸木弓も84.6%となり、他の木が30%台以下であるなかでは、目立った数値を示している。この場合は、必要に応じた素材の採集・使用が考えられる。

この様に木製品とその使用樹種との相関は、単に適材の認識の深まりをしめすのみではなく、生産関係を探る手がかりとしても注目されることとなってきた。遺跡出土の総ての木の同定を行った訳ではないので、この製品率は、必ずしも正確な数値を表してはいないかも知れない。しかし、取り上げた資料の全点の同定結果であるから、おおまかな傾向としては誤りないと思われる。

5 横づちの出土状態と機能

渡辺誠は、1983年に福島県御山千軒遺跡の報告書において、横づちの用途と形態についての研究を表している。時代の下る遺跡の例ではあるが、多くの示唆に富むものであった。

新保遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の横づちは、形態にいくつかの変化が見られる点と、継続して同じ場所に捨てられている点が特徴として挙げられる。

横づちの用途を民具例からみて、渡辺は6類に大別している。藁打ち具、豆打ち具、綿打ち具、砧、工具の5つと人形などの首にみだてる転用例を加えた6類の内、最後の例は遺物からの実証方法は実例の発見を待つしかないが、他の機能は、形の違いからでも判断のつく場合がある。例えば、本報告のa類としたものなどは、かけやとして使用されたものであろう。また槌身の幅・長さ・握りとの関係などの点で変化に富むこの道具は、弥生時代に開始されたと考えられる生業と深く係わりあっている木製品として、今後注目されていくものであろう。新保遺跡では、21点の出土を見たが、弥生時代後期の遺跡からの出土量が多いという、これまでの調査結果と矛盾しない。

近年、弥生時代の植物食の研究に米以外の作物の存在を重要視する見解がだされたり、水稻栽培と収穫についての方法を模索する研究が進められたりしている。横づちの量的増加と形式の変化を生みだす、後期段階のこの様相は、豆打ち具、藁打ち具の初現期の姿を解くひとつの鍵となると考えられる。

縄文時代の遺跡から横づちの出土を報告したのは、萩内遺跡の後期例が最初であった。その折、朝鮮半島の資料を例にして、出現時期として早すぎるとの指摘を受けた。しかしその後、鳥浜貝塚の前期例も確認され、横づちが遙かに古く遡る道具であったことが明らかになった。植物繊維を叩き潰して縄を撚った証拠が、草創期の多縄文系土器に残されているのだから、それにかかわる道具の出現も当然のことというべきかも知れない。物を打ち潰す道具が、縄文時代から存在するという事実と、弥生時代に入ってから、その用途にあわせた横づちの機能分化が認められることとの背景には、日本列島内部での発展としてよりも、新たな労働手段の移入を考える必要があるらしい。

さて、もうひとつ重要なことは、横づちの出土地点が弥生時代後期から古墳時代前期にかけて同一であるという点であろう。この事実からは、かなりの広がりをもつ新保のムラの一角に、長期に渡って横づちを使

う作業場が確保されていたと考えることができる。他のいくつかの木製品にもあてはまる出土状態の固定的な姿は、弥生時代の集落が、仕事毎に場を限って維持されていたこと、北関東のちの弥生—古墳継続集落にあっては、仕事の間は変更されずに集落が維持された部分もあることの2点を想定させる。

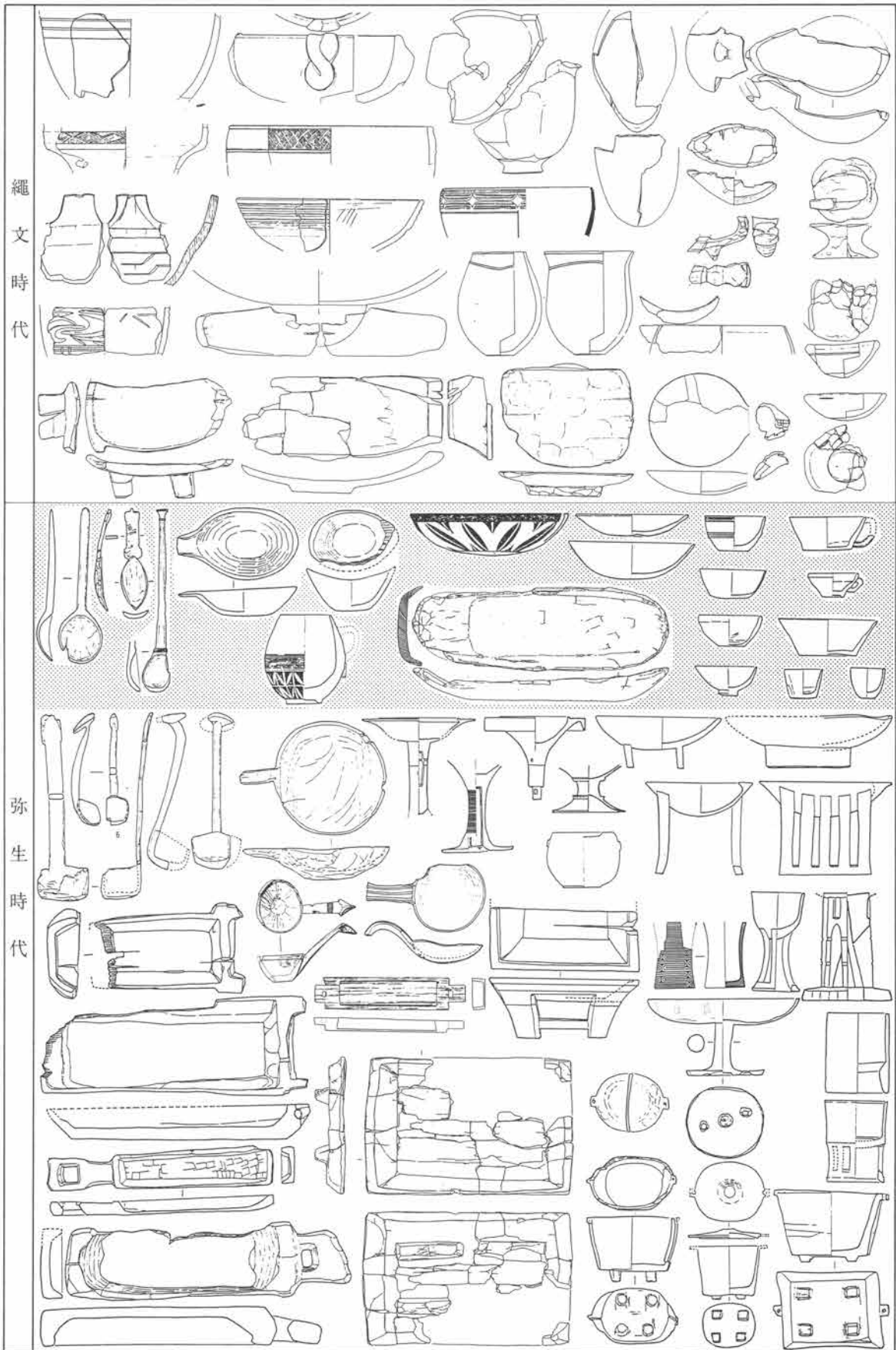
6 縄文時代と弥生時代の木製容器

木製容器が土器とはかなり形態の異なった物であることが分かり、縄文時代・弥生時代の「うつわ」を考える場合、見逃すわけにはいかないものとなりつつある。土製の容器は煮沸という役割を果たしたり、密封性が高い「いれもの」とすることもできる。縄文時代の深鉢形土器・弥生時代の甕形土器は、煮炊きする容器であり、弥生時代の壺形土器は貯蔵する容器となる。それに比べ木製の容器は、軽量であり、衝撃に対する強さが特徴となり、作業皿・浅鉢・椀・掬い具などが中心器種となっている。縄文時代の木製容器は、鉢・浅鉢・注ぎ具・皿・壺・杓子・椀があり、時期・地域によって形を変化させている。縄文時代の鉢・浅鉢には、文様を彫刻することがあり、それは土器のモチーフと類似したものとなっている。一方、器面に描いた文様は、全くべつ文様構成を有することが明らかとなっている。

赤あるいは黒の漆が塗られていることが多い縄文時代の木製容器に比して、弥生時代のそれは、木肌そのままの仕上りになっている。かつて、小林行雄は、『古代の技術』において、弥生時代から古墳時代の漆の手法を纏め、木製容器についても興味深い見解を示している。それは、「弥生式時代の漆器には縄文式時代晩期の漆器と同系統のものがあるらしい」「朱漆が、古墳時代から奈良時代につづいて、日本ではほとんど使用された形跡がないということは、大いに注目すべき事実である」という記述である。木製品の出土が少なかった当時のことで、弥生時代中期から古墳時代の資料のなかにも、赤い漆様の塗り物が報告されている現在、すべてを認める必要はないと思う。しかし、大筋の流れは小林の指摘の通りとすることができよう。とするならば、この事実の背景を探らなくては片手落ちの誹りをまぬがれまい。縄文時代に盛んに赤く塗り塗られた木製容器は、弥生時代前期には引き継がれたものの、それ以降は数も減り「黒漆優勢の時代」となる事実を指摘することにより、なにを意味付けられるのであろうか。

技術的に漆工にかかわるものを喪失したと考えることは、不自然である。なぜならば、縄文時代から続いた道具立てを消し去った様子は見られないからである。そして、特に関東の地では労働主体＝弥生人が、縄文人から系譜をたどれる人間であると考えられるのであるから、この点でも保持していた技法・技能を捨て去る必然性はないと考えられる。それならば、器面を塗る必要がなくなったということか、赤い色（朱）に対して別の意味合いが社会的に持たれるようになったということか、といった技術的なもの以外にその原因が求められなければならぬ。

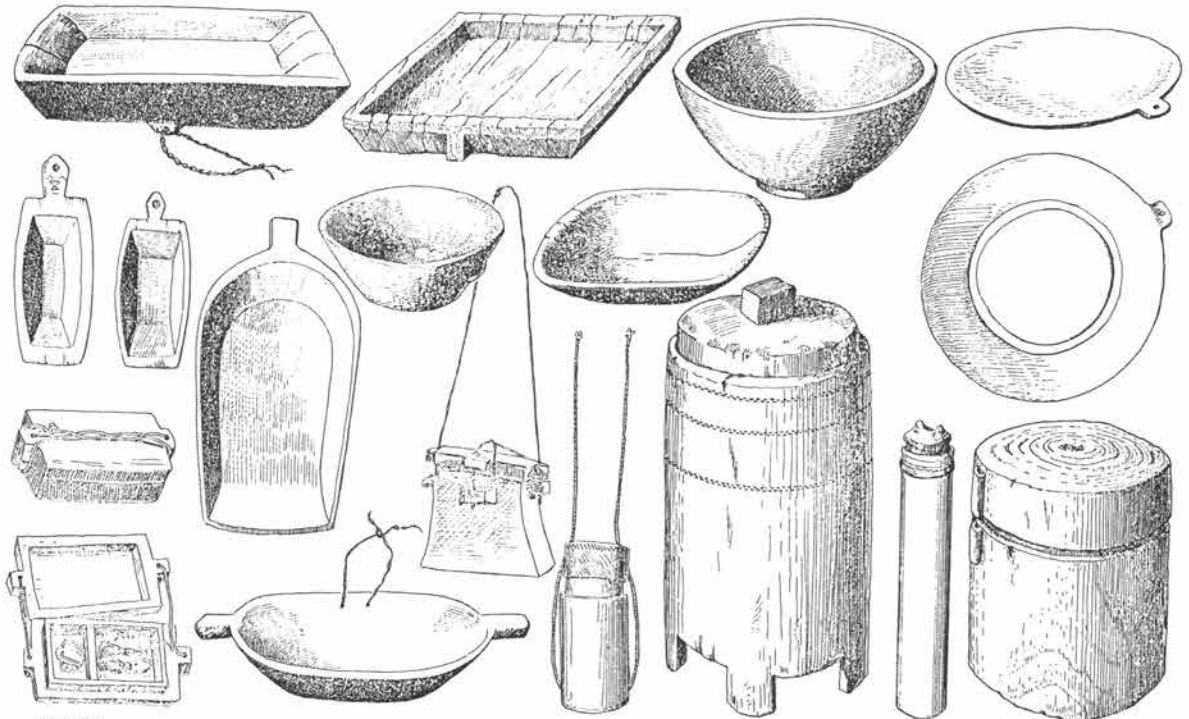
今回は、報告書という紙面上の制約もあり、深く掘り下げることは、別稿の用意があるので、それに譲りたい。ただ、木製容器に見られる赤塗り手法の衰退期と、市毛勲の『朱の考古学』に纏められている「施朱の風習の盛衰（葬墓総数に対する施朱葬墓の割合の変化概略）」グラフに示された最盛期とが、見事に重なっていることは、指摘しておきたい。ここには、朱の利用に関する社会的な約束が、成立していたことを引出す手がかりがあるのかも知れない。中国大陸においては、秦から漢代への移行は鉄器の普及や製鉄技法の革新などととも、漆器も黒漆となることが分かっている。日本の弥生文化が、東アジアの歴史の中で孤立したものではなかった事は十分注意すべきであるが、現在のところ、この一見並行して移り変わるように見える変化の背景は、十分な資料的裏付けをもって説明することはできない。そこには、「技術の発展」の問題に加え、「社会の仕組み」の問題が含まれており、その説明の手続きが必要とされるからである。



第77図

さて、第77図は縄文時代と弥生時代の木製容器を集めたものである。確かに縄文時代の木製容器と類似したものが、弥生時代の遺物の中にもあることが分かる。また、仕上げの塗りの具合も前期段階のものには、縄文時代以来からのものとされる漆器もみられる。そして、弥生時代の木製容器のなかの高杯や鉢のモチーフが、縄文時代の刻線のものと同じ発想によってか、土器と同じ様に施された例が唐古遺跡の例にもある。このことから、弥生時代の木製容器に、縄文時代からの流れを汲む部分があることが想定できる。

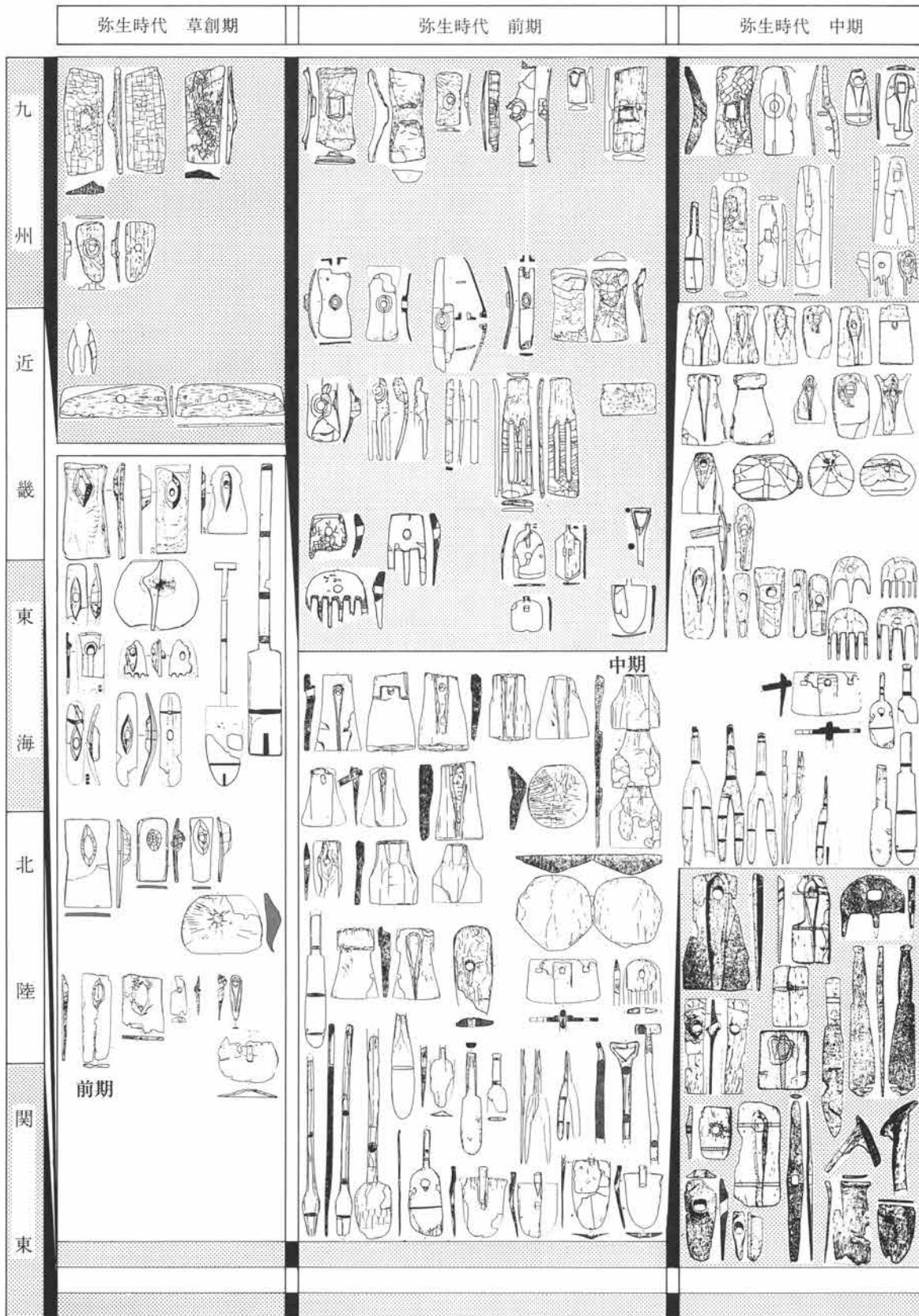
しかし、弥生時代の木製容器は、方形四脚皿・蓋止め用外耳付き容器・長脚杯・縦型杓子などの新しいものがあることこそが特徴であり、これらの容器には、塗彩が少ないことも合わせて指摘できるのである。第77図下段の木製容器類は、北九州地方から近畿地方そして関東地方の弥生時代遺跡から共通して出土するものである。新しい食事文化の指標となるこれらの容器類は、木製農耕具とともに日本列島を東進していったものと考えられる。この事実は、弥生時代が食料生産技術だけでなく、調理技術の面でも大きな変化を遂げた時代であったことを示している。第78図は、陳奇禄が『國立臺灣大学考古人類学刊』に連載した民俗資料を小集したものである。弥生時代の木製容器と類似したこのような木製容器が、東アジア地域に共通してみられる形態を取り、一部は、現在も使用されているものがあることは興味深い。



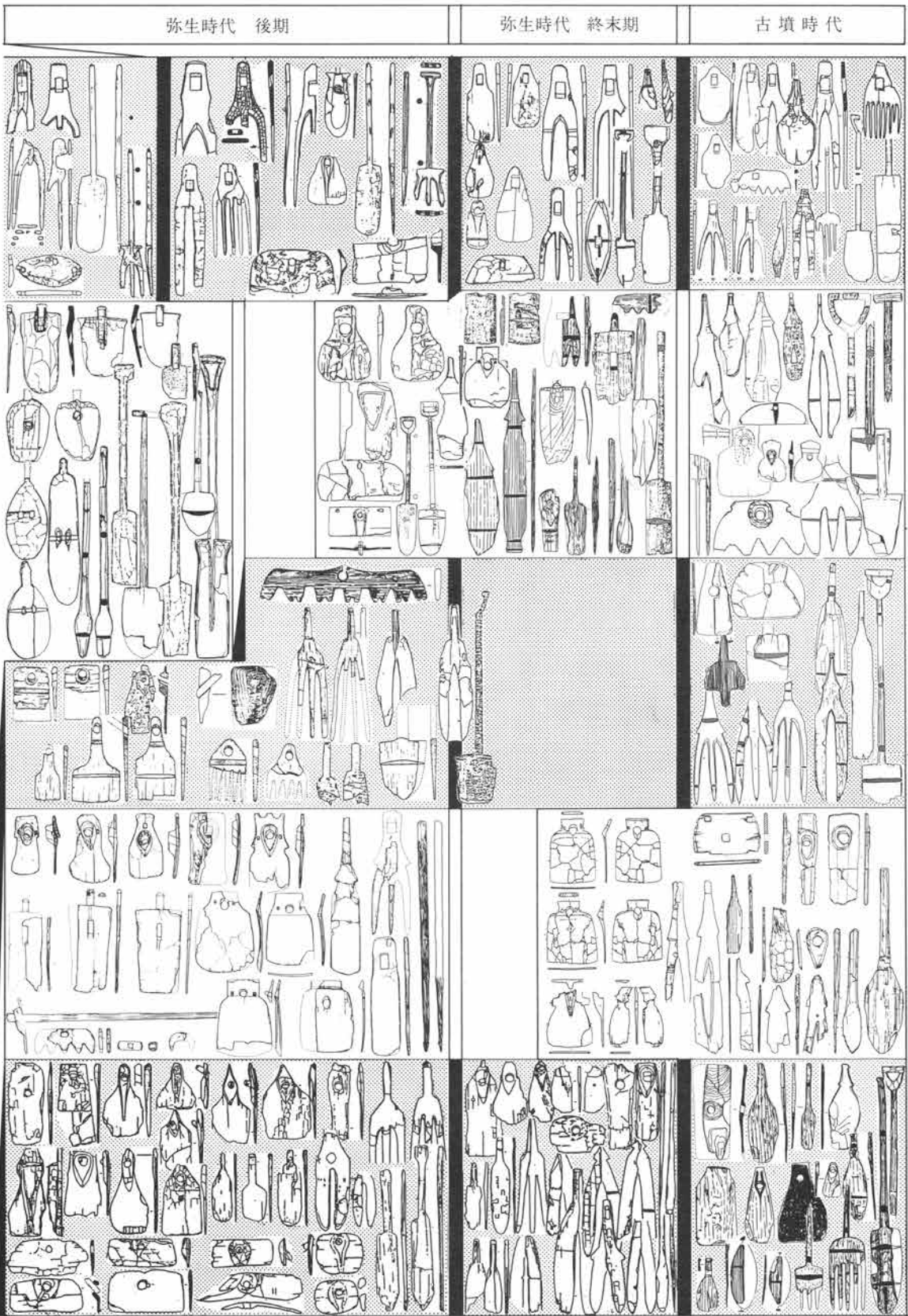
第78図

7 くわとすきのきた道

新保遺跡出土の弥生時代後期を中心とするくわとすきは、これまで明らかにされてきた北九州地方・近畿地方・北陸地方・東海地方といった各地の農具とは、その趣を異にしている。この事実から、稲作技術が日本列島を東進するうちに、くわやすきが形状を変化させていたことが想定される。これまで述べてきた木製品からは、弥生時代にはいつて切り替えられていく姿と、縄文時代から続く姿とが見て取れた。木工具の組織化の様相には、一部地域差が指摘されており、また、町田章の研究成果によれば広くわ・又ぐわの形状や柄穴の開けかたの特徴、フォーク状木器・又すきの一木作り組み木作りの違いなど、北九州地方と近畿地方の木製農耕具の形状差も、明らかになっている。ここで、新保遺跡の多量な木製農耕具の系譜をたどり、関東北部の地へのくわとすきのきた道をたどってみることにしたい。



第79図



I-a 弥生時代「草創期」の北九州地方の鍬鋤類

現在、日本列島の地から出土している最も古い木製農耕具は、これまで縄文時代晩期に位置付けられていた刻目凸帯文土器に伴うものである。佐賀県菜畑遺跡や福岡県板付遺跡例が報告されて、稲作技術が伝えられた時期が、それまで考えられていた時期よりもやや遡ることが明らかにされた。この弥生時代前期に先行する稲作技術の伝来の時期を、ここでは、弥生時代「草創期」と呼ぶことにする。もちろん、弥生文化はその後にも大陸からの影響を受け、内部展開をしながら確立していく訳だが、米作りの技術がまず伝えられた時期として「草創期」を考えておきたい。この時期の鍬・鋤の類は、北九州の地でのみ確認されている。その特徴は、加工技術の面では、刃の痕が粗く残された大胆な形づくりの大形品であることが挙げられる。出土例からは、広鍬（諸手鍬）と横鍬（えぶり）の存在が明らかになっているが、この時期の農耕具は、本来、こうした単純な組み合わせを持つものと考えられる。稲作技術の導入時期をめぐる議論のなかに、縄文時代の更に古い段階にまで遡らせようとする意見があるが、こうした組成の単純さは、農耕具が北九州の地において独自の活用へと展開していく前段階の姿を示している裏づけとすることができるかもしれない。

II-a 弥生時代前期の北九州地方の鍬鋤類

弥生時代前期の資料は、九州から近畿にかけての地域に出土例がある。九州では、福岡県板付遺跡・拾六町ツイジ遺跡・鶴町遺跡・瑞穂遺跡・佐賀県菜畑遺跡・柏崎田島遺跡などの遺物にこの時期のものがある。しかし、板付式土器に伴うものと前期後半のそれとは、木製農耕具の作りや組成が異なるようである。前期前半の資料は、基本的には「弥生時代草創期」のものと同じつくりといえる。例えば、拾六町ツイジ遺跡の諸手鍬未製品は、加工や形状ともに、板付遺跡の出土例と極めて類似している。諸手鍬の完成品は、菜畑遺跡例と鶴町遺跡例などがあり、一見、形が異なる様にも思われるが、菜畑遺跡はおなじ形態の鍬が、使い込まれていると見ることもできる。それは、着柄隆起部の仕上げが、全く同じといえるからである。

前期後半の鍬には、平面形や着柄隆起に変化が見られる。瑞穂遺跡の例には、細身のものと側縁に浅いえぐりが入るものがあり、広鍬と狭鍬の区別があったことが想定される。また、着柄隆起に突起が付くものも見られる。拾六町ツイジ遺跡例には、平面形は「草創期」・「前期前半」のものに類似しているものの、着柄隆起の部分が低くなった資料も確認されている。さらに、この時期には又鍬が検出されている。拾六町ツイジ遺跡では、3本の歯をもった角頭ののものや、6本の歯をもった円頭の又鍬が出土しており、三筑遺跡では、時期の限定が確実ではないものの、細身の三本歯の鍬が報告されている。横鍬（えぶり）は、拾六町ツイジ遺跡より出土したものに、この時期と考えられる例があるが、後期に属する可能性もあるらしい。

鋤はこの時期から確実な報告例がある。拾六町ツイジ遺跡からは、一木で作られた長柄鋤と着柄鋤の両者が出土している。長柄鋤の柄頭は、偏平で逆三角形になっており、手を入れて握るための穴が開けられている。鋤身は、肩が横にまっすぐにのびて、さらに側縁部への移行も直角になっているつくりで、刃部の平面形は半円もしくは尖りぎみの先端部をもつ放物線を描くような仕上りになっている。着柄鋤は、刃部平面形が直刃に近く、肩部は円味をもち、着柄を助ける突出部が鋤身の上部に張出して作られている。さらに、鋤身部の上位に柄の先端を差込む穴が設けられており、この鋤は、突出部と穴との二箇所て柄と鋤身が繋げられるつくりとなっている。

II-b 弥生時代前期の近畿地方の鍬鋤類

近畿地方で木製農耕具が確認されるのは、畿内第I様式期のものからである。現在、日本列島を農耕技術が東進していく過程がこれまで考えられていたよりもずっと速く、第I様式期には東北地方にも伝えられた可能性があるのではないかという、伊東信雄の説が、新資料とともに再び注目され始めている。しかし、近畿

地方より東の地域では、この時期の木製農耕具は、発見されていない。

さて、近畿地方の鋤鋤類は、北九州地方で発見されているものとは、やや異なった形状と組成をもっているようである。奈良県唐古遺跡の調査によって、古くからその姿が明らかになっていた資料に加え、近年の低地部の調査は、この時期の木製農耕具を豊富に示すことを可能にしてくれた。大阪府池上遺跡・瓜生堂遺跡・瓜破遺跡・東奈良遺跡・若江北遺跡・安満遺跡・山賀遺跡、兵庫県上ノ島遺跡・東神吉遺跡例などがこの時期のものである。鋤鋤類の組成は、広鋤・諸手鋤・又鋤・横鋤（円鋤）・長柄鋤・着柄鋤などである。それぞれの資料からは、北九州地方のものとその形状を異にする部分あげられるし、現在のところ近畿地方にしか見ることができない機種も指摘できる。なかでも興味深いのは、横鋤（円鋤）の存在である。「引き鋤」として用いられたと考えられる横鋤は、北九州の地では、横に長い「えぶり」と呼んでいるものが確認されているのと同様に、近畿地方では、「円鋤」と名付けられた遺物が出土している。両者ともに木目が鋤身を横に走る木どりである点では共通している箇所もあるといえるが、平面形がまったくことなる鋤が、ふたつの地域に存在することになる。（時期が限定できないものとして、福岡県長行遺跡例に円鋤と類似したものがある。これは、柄穴が鋤とは逆方向に開けられているので鋤のようにつかわれたらしい。そして、側面形も後出のものと考えられるもので、円鋤は、近畿地方にそのはじまりを求められよう。）

こうした農耕具の地域差が、稲作技術の導入過程を明らかにする鍵になることは、今後の課題として注目しておきたいが、これをもってただちに二元的な系譜を辿ることは短絡かもしれない。土器の流れからは、凸帯文土器の広がりも面的にも近畿地方の中心部に及んでいたことが、明らかになりつつある。現時点では、そこからは大きなひとつの流れとしか、この弥生時代前期の西日本の動きは捉えられない。稲作技術の伝達と受容の研究は、両者のおりなす歴史形相を明確にしていくことこそが重要である。そのためには、まだまだ多くの手続きが必要である。

III-a 弥生時代中期の北九州地方の鋤鋤類

弥生時代中期に入ると、北九州地方の木製農耕具は、その機種も整い、また前期とは異なった特徴をもつようになる。この時期の鋤鋤類は、福岡県板付遺跡・比恵遺跡・北牟田遺跡・鹿部東町遺跡、佐賀県土生遺跡・巡見道遺跡・長崎県里田原遺跡などから出土している。その組成は、広鋤・諸手鋤・又鋤・長柄鋤・着柄鋤・フォーク状木製品であり、最近の報告書を総てあたることができなかつたが、横鋤も存在することが想定される。

長柄鋤・フォーク状木製品の身の部分に、この時期の特徴として肩部の作り出しが見られるようになる。また、鋤の着柄の穴が円形から方形へと変るのも、この時期からの事らしい。従来、北九州地方の鋤の着柄穴が方形優勢で、近畿地方の鋤の円形優勢の着柄と対照的に捉えられてきたが、その差が現れるのは弥生時代中期のことであり、前期段階ではともに円形着柄であつたらしい。

広鋤（平鋤）は、近畿地方のそれとは異なり、肩部を斜めに切り落とした様な平面形のはすくない。そして、着柄隆起が身の下部にまで延びている例が多い。比恵遺跡出土の資料には、着柄部の両側の鋤身に小孔があり、固定時の助けとしたようである。又鋤は2本歯のものも、3本歯のものも、歯の部分の上に着柄部を細く作出し、肩を持たせて身部と明確に区別した作りとなっている。さらに、前期段階の又鋤は、着柄部が厚みを増すか隆起部がはっきりと設けられるかのどちらかであつたのに対し、中期段階のそれは、身の部分とほぼ同じ厚さに作られている。

又鋤の検出例がこの時期以降増加することも北九州地方の特徴といえる。

III-b 弥生時代中期の近畿地方の鋤鋤類

近畿地方のこの時期の資料は豊富であるが、中期のなかでも前半と後半で鋤鋤類の組成に変化が見られる。前半期には、広鋤・狭鋤・諸手鋤・又鋤・円鋤が存在することが分かっている。木製農耕具出土遺跡としては、大阪府東奈良遺跡・瓜生堂遺跡・美園遺跡・恩智遺跡・四ッ池遺跡・池上遺跡、奈良県唐古遺跡、京都府太田遺跡・深草遺跡、滋賀県大中の湖南遺跡などがある。前期前半の特徴としては、まず、狭鋤がいくつかの形状に分れる事実を挙げられ、頭部が円形に仕上げられるものと、角頭のものに大きく二分される。円頭の狭鋤の側面形は大中ノ湖南遺跡例ではやや湾曲している。この鋤は、前期に見られた諸手鋤と前後して出現すること、側面形の類似していることなどから、「打ち鋤」の系譜のなかで時期的に変化したものとして捉えられそうである。

又鋤には、頭部円形で幅広・多本歯の資料が池上遺跡・大中ノ湖南遺跡などから出土している。北九州地方では、前期段階に既に確認例があるが、近畿地方ではやや遅れて出現するものであろうか。また、後者の例には方形の着柄穴が見られ、さらに狭鋤の角頭の例にも同じ方形着柄が認められるなど、この地でも第II様式期には、着柄法に変化の兆しがあったことが想定される。しかし、北九州地方とは異なり、近畿地方ではその後少数の出土例はあるものの、着柄穴は円形の資料が圧倒的に多い。

広鋤は、恩智遺跡・池上遺跡・瓜生堂遺跡例にみられる平面台形のものや、深草遺跡・池上遺跡に例のある台形で両側縁着柄穴付近に段のつくもの、大中の湖南遺跡・恩智遺跡そのほかから発見されている両肩を斜めに切り落とした形のもの、そして上部が小さく段を持ったあと、下位に広がり刃部がやや狭くなる亀井・城山遺跡（第III様式期）・大中の湖南遺跡例など変化に富んだ多様な形態を見せるようになる。また、この時期の広鋤の側面観は鋤裏の側に段が設けられる作りになっており、これは着柄の際にその厚みで固定の強度を高めたものと考えられる。着柄鋤にも固定の方法の多様化が現れる。それは、柄の端部を鋤身にどのような繋ぐかという方法を考えた結果のものと考えられる。さらに、鋤身の平面形の変化も確認されている。

中期後半になると鋤鋤類は、消滅するものと新たに出現するものが見られる。横に木取る鋤として、円鋤とは別にえぶりが近畿地方でも使用され始め、円鋤もしだいに形状を変化させていく。さらに、又鋤・諸手鋤・狭鋤のある形態のものがほとんど検出されなくなる。こうした変化は、弥生時代中期後半の時期に木製農耕具自体が技術的に改良されたことのみでなく、稲作社会の大きな展開期となっていたことも反映していると受け取れる。ここでは十分に説明する紙幅は許されないが、田下駄の定着する時期ともこの現象は一致しており、検出水田遺構の低地大型区画・低地小型区画の出現期とも重なり合うこの変化は、稲作技術史上の画期と位置付けられそうである。またこの移り変わりは、近畿地方のなかで各機種の形態が大枠で共通していることも指摘できる。この事実から、土器の様式と同様に木製農耕具も、地域的に共有されあるいは規制されたと考えられる。

近畿地方においては、前期段階から北九州地方と異なる形の木製農耕具があったことを先に見て来たが、この弥生時代中期を通しての技術的・形態的な大幅な木製農耕具の変化こそ、弥生社会の地域構造の変革を物語るひとつの証しとしてより注目すべき地域性と考えられよう。

III-c 弥生時代中期の東海地方の鋤鋤類

東海地方ではこの時期から鋤鋤類の出土例が報告されている。愛知県瓜郷遺跡・篠塚遺跡・朝日遺跡出土の資料がその例である。広鋤・狭鋤・長柄鋤・着柄鋤が確認されている。広鋤は、平面台形のものや、長方形に近いが肩をやや切り落としたものがあり、近畿地方とかなり似た形態をとっているらしい。また、狭鋤は角頭のもの、より細身のピッケル状のものが報告されている。

着柄穴は、円形のものと同方形のものが見られるが、狭鋤に方形の例が多い。狭鋤は振り下ろすさいに横振れの力を鋤身の下位の重量で抑えることが難しく、柄の固定部がずれないようにする必要から、方形着柄が採られることが多かったのかも知れない。

篠塚遺跡の又鋤は、頭部円形の3本歯の例で、これも近畿地方の例と通じる所のある資料である。現在ではより古く位置付けられる可能性もあるが、いづれにせよ、中期前半以前のものであり、やはり近畿地方の資料のなかに共通性を求められるものである。

朝日遺跡からは、長柄鋤柄頭部の握り穴部分の資料や、着柄鋤の固定用突出部と柄先の差込み部がある遺物も報告されている。鋤の形態もやはり近畿地方の中期前半のそれと極めて類似していることが分かる。

中期後半の資料が入手出来なかったため、事実関係をつかめなかったが、この地方では、少なくとも確認できた中期前葉例では近畿地方と同一の特徴が示されているとすることが許されよう。

IV-a 北九州地方の弥生時代後期の鋤鋤類

弥生時代後期に属する木製農耕具の資料は、北九州の地では先行する時期のものと比較して発見例が少ない。この時期の遺物を出土した遺跡は、福岡県湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡・田村遺跡・辻田遺跡・板付遺跡・比恵遺跡、佐賀県川寄吉原遺跡・尾崎土生遺跡・詫田西分貝塚、大分県安国寺遺跡などがあるが、纏まった量を示す遺跡が少ないことにその原因がある。

判明している鋤鋤類の種類は、広鋤・横鋤（えぶり）・長柄鋤・フォーク状鋤があり、着柄鋤としては拾六町ツイジ遺跡にはっきりと時期決定の出来ない例がある。こうした事実を見ると、着柄鋤の存在はむしろ例外的なものと同ここでは考えておきたい。広鋤は、後期前半の田村遺跡例では、鋤身の上部から斜めに切る形の中期例と似たものがあるが、鋤身の下半部にまで、切込みが入っている。後期後半の湯納遺跡・辻田遺跡では、やや細身になり着柄部がはっきりと区別された広鋤が検出されている。

又鋤は着柄部の幅が細く、鋤身の上にやはり明確に分けて作られている。3本歯の鋤は歯が細く仕上げられ、従って歯と歯の間隔があいている。この形態の又鋤は、中期後半の比恵遺跡例にも先駆的に存在しているが、歯の作出にあたり、中央の歯が分れる部分に切込みの最深部を持ち、湾曲しながら左右の歯の内側縁部へと移行する特徴を示す。歯の部分はほぼ並行して作られる。安国寺遺跡からは「ナスビ形木製品」が報告されているが、この手の資料は北九州の地では後期には他に類例がなく、古墳時代に入ってから普及するものと考えておきたい。

北九州地方の鋤の着柄が方形穴でなされることが指摘されているが、III-cで少し触れたように、細い着柄部により生ずるであろう鋤の横振れを考慮したという機能的な面も、地域差を産んだ要因として捉えておきたい。フォーク状鋤は北九州地方に独自に発達したこの時期最も多く見られる木製農耕具である。そして、この機種の出現時期が中期後半からという事実は、弥生時代の鋤鋤類変化の画期とも重なる点で興味深い資料といえる。

IV-b 近畿地方の弥生時代後期の鋤鋤類

近畿地方のこの時期の資料もすくないが、前半期のものとして、大阪府亀井遺跡・池上遺跡・山賀遺跡からの報告例がある。終末期の資料は、兵庫県長越遺跡・権現遺跡、大阪府巨摩廃寺遺跡、京都府古殿遺跡、滋賀県服部遺跡・妙楽寺遺跡などから出土している。

鋤鋤類の組成は、後期前半のものと殆ど変らないが、又鋤の出土量が減少すること、横長のえぶりが出現することが指摘できる。後期後半には、横長のえぶりに鋸歯状の刃部加工が見られるようになる。これは古墳時代に続く形態である。

第V様式期から、広鋏に新しい形態がみられるようになる点も、重要な変化である。中期段階から柄穴の脇に添え木組穴を持つ鋏が出現していたが、後期に入ると鋏裏に「蟻じゃくり」の溝を持つものが見られるようになる。この鋏は、角のとれた円味のある身の上部に、着柄部が角形・半円形の頭部を張出して作出した作りで、中期段階では着柄部の両側に切り込みを入れて鋏頭部とした例と同様に、近畿地方で発達したものとすることができる。後述するように、この形態の鋏は、滋賀県域から北陸地方へとその分布の広がりを見せている。

円鋏は確認例が稀で服部遺跡に例があり、後期段階でも独特な側面観と木取りを保っていることが分かっている。しかし、新しい形のえぶりの出現や、「蟻じゃくり」の鋏に類似の側面観を持つものがあるなどの所見から、円鋏が次第に別の器種に置き換わっていった様相がうかがえるのである。

もうひとつ、後期終末期には、長越遺跡や服部遺跡などに例のある「ナスビ形木製品」の出現という鋏鋤類の変遷史上の大きな変化が見られる。着柄部と鋏身の境に突起を持つという形は古墳時代の鋏の先駆的な姿を示している。また、着柄突起部は中期段階の鋤に既に類似したものが誕生していたものの、これに膝柄を付けて鋏としていく手法も、鋏の着柄法として定着していく。

VI-c 弥生時代後期の東海地方の鋏鋤類

この時期の資料を出土した遺跡としては、静岡県登呂遺跡・山木遺跡が古くから有名である。近年、宮塚遺跡・上藪田川の丁遺跡・二之宮遺跡・下野遺跡・四ッ島遺跡・土橋遺跡など、この時期から古墳時代初頭にかけての遺跡が相次いで調査され、漸く木製農具の組成が分かり始めてきたが、まだまだ不明な点が多い。

東海地方の後期の資料は後半期のものが多い。下野遺跡の広鋏は、中期に見られたものと平面形が類似しており、その系譜を引くものと思われるが、着柄隆起が鋏身の上半部にのみ形作られている。着柄隆起が年代が下るに従って小さくなっていくという原則は、どうやらこの地でも通用するらしい。登呂遺跡出土の平面長方形に復元されている鋏は、横木取りのもので、報告時から鋏として疑問視されるむきもあった資料だが、現在の眼で見ると、「打ち鋏」ではなく、円鋏・横鋏の系譜と繋がる「引き鋏」の仲間に加えるべきものといえる。登呂遺跡の広鋏のなかに、着柄部を細長くつくり、そこに柄穴を開けた例がある。この形態は、非常に珍しいもので、弥生時代後期の段階に東海地方と後述の関東地方に主として分布するものと想定される。

又鋏は宮塚遺跡から上部に延びる着柄部に膝柄の付いた例が検出され、鋤か鋏か決めかねていた資料が、少なくとも鋏として用いたことがあったことが明らかになった。土橋遺跡・山木遺跡に類例のある、近畿地方以東のこの形態の又鋏は、弥生時代中期に近畿地方に出現し、後期段階では近畿から東海地方そして、関東地方で多用されたものらしい。北九州や、北陸地方には、棒状柄を着ける鋏がかなり存在し、この形態の鋏が地域さを示すことが分かっている。さらに、この着柄法は、弥生時代後期後半の「ナスビ形木製品」に受け継がれ、古墳時代には日本列島全域にわたって使用されることとなるようである。

長柄鋤は、登呂遺跡・下野遺跡から出土しているが、スコップ様の形態で、一面から加工して鋤先を薄くしてある。この形状は、古墳時代以降の鋤とかかわるもので、極めて重要なものであるが、それは、別稿「木製農具の変遷の意義と弥生／古墳社会の動向」に譲り、新保遺跡への道筋が主題の本稿では詳しく説明しない。

IV-d 弥生時代後期の北陸地方の鋤鋏類

富山県江上A遺跡から多量の木製農具が出土し、北陸地方の様相が示せるようになったことは、幸いな

ことである。これまでは、新潟県千種遺跡の少ない資料のみでしか語れなかった鍬鋤類の組成として、広鍬・狭鍬・又鍬・えぶり・長柄鋤・着柄鋤が明らかになった。広鍬は、平面長方形のもの、着柄部両側に切込みをもつもの、肩部を斜に切ったものがあり、着柄隆起が小さいことは各地の様子と一致している。また、着柄補強のあて木を組む組み穴を持つ例が多いことも注目される。

他に、「蟻じゃくり」のある近畿地方の後期例と同じ平面形をもった鍬がみられる。しかし、この鍬には、鍬裏に「蟻じゃくり」が付くものと付かないものの、ふたつの形があるらしい。そして、後者の側面形が「く」の字状となる点は、近畿地方に見られた円鍬のそれと類似しており、この鍬がそうした「引き鍬」の系譜に属することを物語っているのかも知れない。この手の鍬が、主として近畿から北陸地方にかけて、しかも限られた時期に分布していることは、鍬鋤類の流れと広がりをつかむ手がかりになるものと思われる。

本題からは少し逸れるが、ここで、石川県の近岡遺跡・二口六丁遺跡・西念・南新保遺跡といった、月影式期の諸遺跡に見られる鍬の問題に触れておきたい。「蟻じゃくり」のある鍬は、近畿地方でも奈良県纏向遺跡などで見ることができ、古墳時代初頭例が確認されている。しかし、平面形は似ていても側面形が「く」の字の江上A遺跡の様な鍬は、形態変化の流れからまたその共伴土器に明らかかなように、後期でもそれほど新しくない時期から現れるものと想定されるのである。月影式土器を伴う鍬鋤類のうち、近岡遺跡の鍬はその古い様相を示している。この事実のみから、月影式土器として認識されている土器群のなかに、弥生時代後期に遡るものを求めることは性急かも知れないが、筆者は北陸地方の弥生時代後期の土器群に不分明さを感じており、そのなかに月影式土器を収めることにやぶさかでないと考えている。

弥生時代後期には、近畿地方から北陸地方にかけての地域に、石庖丁と同じ形態をとる木製穂積具が知られている。さきの特徴的な鍬や江上A遺跡の着柄鋤組み手法の近畿地方のそれとの同一性など、同じ分布域をもつ数種の農具の存在は、この木製穂積具とともに、弥生時代後期の近畿から北陸への新しい農耕技術の流れを示すものと想定される。

IV-e 弥生時代後期の関東地方の鍬鋤類

関東地方の弥生時代後期資料として、神奈川県曾我遺跡の資料が一部公表されているが、これまで見てきた鍬鋤類と比較すると、確実に時期決定しかねる部分もある。そして、群馬県日高遺跡の調査により弥生時代の水田址と木製品が確認され、北関東の地でも稲作技術を考える手がかりが得られた。今回報告した新保遺跡の豊富な資料は、それに加えて弥生時代後期の関東地方の鍬鋤類の組成を明らかにしてくれた点で、重要なものとする事ができる。その組成として、広鍬・狭鍬・又鍬・円鍬・横鍬・えぶりそして長柄鋤があげられる。

広鍬のなかにもさまざまな形態があり、長方形のもの、鍬身頭部を斜めにきり落としたもの、着柄部が鍬身の上に突出して柄穴があげられたもの、その突出部に膝柄を付けるもの、などが識別できる。この広鍬のなかの最も多い例は、鍬身の上に着柄用の突起部を作ったもので、直柄を差込む穴を開けたものと、膝柄を固定する段や溝を有するものとの別が見られる。他の広鍬に、「蟻じゃくり」やあて木をとめる組み穴が見られないことも、この地の資料の特長といえよう。

又鍬の着柄も膝柄を付ける仕組みになっており、三本歯のものは、後期の前半例・後半例共にふたつの形態（鍬先が開くものと開かないもの）がある。二本歯のものは、前半例は歯が並行して作られるが、後半例は開きぎみになり、着柄部と鍬身部との境に突起が現れて、ナスビ状木製品を思わせるものも発見されている。

えぶり・円鍬といった横鍬の仲間は後期をとおして存在することがわかった。えぶりには、着柄隆起を持

つものど着柄部も薄いままのものがあり、両者ともに別木を添える仕組みは見られない。円鋏が後期終末までのこることも、関東地方の特長と考えられる。しかし、その側面形は直線的であり、「く」の字形をとらない。

鋏は、長柄鋏のみが確認されている。着柄鋏が出土していない理由としては、関東地方の個性的な姿として、膝柄を付ける鋏と考えたものの中に、棒状柄（直柄）を付けた資料があった可能性も考えてみなければならないかも知れない。古墳時代の鋏類に触れることは本論の趣旨から離れるが、千葉県菅生遺跡からは、フォーク状木製品に類似した資料が検出されている。関東地方のみでなく、北九州以外の地方では全くと言っていい程見ることのできないこの形態の鋏が、古墳時代に千葉県域に出現するという事実は、多数の歯を有する「又鋏」の中に直柄を付けたものが在ったことを物語っているであろう。

V 新保遺跡の鋏類の系譜

以上のように、弥生時代の鋏類を簡単ではあるが時期別・地域別に見てきた。その結果、弥生時代のなかでも時期や地域によって、鋏類はその形態を変えていたことが明らかとなってきた。こうした雑な作業からでも、新保遺跡の多量な木製農耕具を整理し始めたときにたてた、この資料の系譜をたどり、群馬県域に稲作技術が伝えられた姿を求めようという目標の手がかりが掴めそうである。

北九州の地に稲作技術が導入された「弥生時代草創期」の段階から、前期段階への移行は、北九州の地では漸移的なものとして捉えることができる。もちろん、大陸側からの人や物の移入は、けっして一度限りのものではなく、木製農耕具も稲作の労働手段として、いくたびとなく実物や形状のモデルが持込まれたものと考えられる。しかし、組成の増加が認められることの他は、この時期の鋏類の形態は、基本的には変化しないものと考えてよい。

一方、近畿地方の鋏類には、北九州地方の資料と異なるものが見うけられ、農耕技術の定着過程に差があることが予想される。今回、瀬戸内沿岸域の資料を示せなかったが、この時期の資料が分かり始めていると聞く。別な機会に検討したい。

今回明らかになった事実で注目すべきは、近畿地方と東海（伊勢湾沿岸）地方に鋏類の日本列島内部で、ふたつの展開拠点があったと想定されることであろう。弥生時代前期の遠賀川式土器が、近畿地方を越えて伊勢湾沿岸地方にもその分布圏を広げていたことは周知の事実である。現在、木製農耕具の発見例からでは、この時期の様相そのものは十分に説明できない。しかし、本論で見てきたような弥生時代中期後半以降の鋏類の変遷の動向は、(a)近畿—北陸の繋がりと(b)東海—(中部)—北関東の連絡との、ふたつの大きな流れを示しているらしい。どうやら、ここに新保遺跡への「くわとすきのきた道」を求めるとがかりがあると思われる。

遠賀川式土器と条痕文土器の分布圏は、伊勢湾以西と伊勢湾から東海・中部・北関東の地域とに分れており、土器のネットワークからは、ふたつの（北九州を分けて考えれば3つ）地域圏が想定される。弥生集落に限らず、人間の社会はさまざまなレベルのネットワークの積み重なりの上に成立するものであるから、土器の分布圏がそのまま稲作技術の共有圏とは速断できない。しかし、現段階の資料から伺える木製農耕具の動態は、弥生時代の開始期のこの地域圏に大きく左右されていると考えざるを得ない状況を示している。

近畿地方で大きく発展した稲作技術と、伊勢湾沿岸域にとりついてその後独自に受容され、展開した稲作技術のちがいは、稲作を持込んだ集団と受入れた集団のバランスの違いが反映されていると考えられる。近畿地方の木製農耕具の特長が北陸地方に伝わっていないながら、東海地方には見ることができないという事実は、最初に伊勢湾域にとりついた集団が、それ以東の地にべつの農耕技術を展開させるきっかけをすでに作ってしまっていて、ひとつの地域圏をつくってしまっていたことにその要因が求められる。北陸地方のみならず、

日本海沿岸や津軽をこえて馬淵川流域にも遠賀川式土器が分布することが分かり始めた現状ではあるが、これが点を線で結ぶ形での現象か、大きな広がりとしておさえられるものかは、木製農耕具の発見がない以上多くは語れない。しかし今のところは、条痕文土器が主体となったような地域圏を作らなかった北陸地方西部は、前期後半以降に独自の稲作技術を展開させるのではなく、近畿地方で展開した稲作技術を受入れていく地域であったとして理解しておきたい。

さて、この様に考えてくると、群馬県域は山間地に条痕文の分布圏を有する訳で、新保遺跡の鋤鋤類は、東海地方のそれと共通点をもっていることから、伊勢湾域に最初に入った農耕技術の流れのなかにその源流を位置付けられよう。着柄法や形態は、北陸地方に伝わった鋤鋤類の中には基本的に類似性を求められないのである。

後期段階の鋤鋤類は、東海地方西部で多く発見されているが、長野県域には残念ながら発見例がない。しかし、櫛描き文土器の共有という現実には、東海地方東部に拠点を建てて独自に展開した稲作技術が海沿いに伝えられたなかの、山沿いのルートにその道を求められると予測させるのである。

報告書のまとめということで、引用または参考とした多数の文献を省略させていただくことにした。別稿「木製農耕具変遷の意義と弥生／古墳社会の動向」で総て明示することで、この失礼のお詫びとしたい。

15 ま と め

- 1 弥生時代から古墳時代前期の住居群の南部を北東～西南に貫く幅約20mの旧河道の発掘調査により、多種に及ぶ遺物が多量に出土した。400点に及ぶ木製品を始め、加工材1700点以上、鳥獣骨類1100点以上、膨大な量に及ぶ土器類、磨製打製石器、不定形石刃及び剥片370点以上、ガラス製、石製、土製玉類24点、紡錘車等の土製品25点、栽培種の他樹木、草類の種子は50種以上等々である。これ等の遺物は弥生中期後半から古墳前期にかけて不断に流路の変遷を続けた小流路の覆土中に検出された。これ等多様な遺物群は、農耕、採集、狩猟、技術工芸等多岐に及ぶ当時の日常生活、諸活動に供した用具、用材、廃棄物であり、当時の生活を解明する上に数多くの新たな手がかりを提供するところとなった。特にこの調査により得られた木製遺物、鳥獣骨、種子等はまれなまでの好条件に恵まれなければ今日まで千数百年間良好な遺存状態を保つことはできない。弥生、古墳前期のこの種の遺物は本県はもとより関東以北⁽¹⁾にあつてはその出土例は極めて少ない。本県における出土木製品の例としては、高崎市日高遺跡で弥生後期の農具類、梯子、杭等の出土がある他は、群馬町三ツ寺遺跡⁽²⁾、渋川市中村遺跡で古墳時代後期の農具類、その他の例があるのみである。こうした状況下で新保遺跡出土のこれら一群の遺物はこれまで手がかりの乏しかった文化内容の解明に大きな意味を持つことになるとと思われる。
- 2 集落内における「場」という視点より大溝を見たとき多様な生活廃棄物の投棄場である一方では、木製品の原材や未製品、完形の玉類、銅製品の出土など投棄に限らず集落内における諸活動に多様に関わったであろうことが伺われる。さらに群馬県地域にあつても高崎市浜尻遺跡⁽³⁾や前橋市清里庚申塚遺跡⁽⁴⁾等弥生中期後半期の集落遺跡では環濠を巡らす例が一般的である。新保遺跡における弥生中期の集落構造を考える上に大溝はこの視点からも考慮する必要があるだろう。本遺跡における集落構造、景観を理解する上に大溝は少なからず重要な内容を備えていると思われる。
- 3 出土木製遺物の有り方は多様である。丸木材や板材、割材等製品製作前段階の原材（原木はない）やいくつかの段階の未製品及び完成品、損耗あるいは欠損品、半ば焼失したもの等、製作前段階のものから、使用、廃棄段階のものまで、木製品に関わる活動のサイクルを終始たどることができる。その製作状況については、完成品に比べ製作途上のものが圧倒的に多く見られることから、新保遺跡では木材加工が盛んに行なわれ、その状況は木製品供給の拠点集落であつたことを予想させる。本遺跡は弥生中期後半期を草わけとし、古墳前期まで継続するという、本県では例の少ない「継続型」大規模集落である。このような地域における中核的性格をもつたともいえる新保遺跡が継続的に木製品供給センターの役割を担っていたのであるならば、当時の物資流通、管理の一例として興味深い。

木製農耕具は弥生後期の段階において広域的斉一性を見せるとともに多器種に及んでいる。鍬・鋤類に限ってもそれぞれ個有の機能に応じた形態のものが使われていることは、鉄器の供給がまだ農具にまで及ばなかったこと等、限られた条件下にありながらも大陸からの渡来以後相当に整備され、定着した農業技術大系が存在していたことが考えられる。本遺跡より出土した弥生後期から古墳前期にかかる木製農具の製作手法、樹種選定や、多様な形態、器種組成等の動向は農業技術大系の系譜、伝播系路を鮮明にし、弥生文化の推移をより構造的に解明するところとなるだろう。

又、弥生後期から古墳前期にかけ集落分布が湿潤低平地への拡大へと急激で大きな変化を見せるが、この要因として新たに萌芽した政治的背景に基づく水田志向の高場や農業技術大系の向上が考えられる。後

者に関しては農具の改良、発達がどの様であったかということも重要な検討課題である。新保遺跡の木製農具類はこのための格好な資料を提供することにもなるだろう。

- 4 大溝内より鳥獣骨や種子類等、動植物の食物残渣が多種にわたって出土している。これ等は当時の有用植物の栽培、狩猟、採集活動における獲得物の実体を明らかにするための情報を多く含んだ資料である。総量1100点にのぼる獣骨類には鹿、猪が98%以上の多くを占める一方、他の鳥獣類はガン、イヌ、オオカミ、キツネ、ツキノワグマ等、量的には少ないながら多種に及んでいる。又、これ等獣骨類の雌雄、老若、残存部位、加工品等により、狩猟活動の状況、食習慣、生活諸分野における骨角類利用状況等を伺うことができる。

栽培植物については米粒、うり類やメロン類、豆類、モモ、ひょうたん等の出土があり、水稻、畑作、果実栽培、採集等、有用植物の獲得をめぐる多様な活動が行なわれたことが認められる。弥生時代から古墳時代前期における生業についてこれまで水稻農耕に関わる遺構、遺物は古くから注意されてきたところであり、水田跡、農耕具等、その関係資料はここ数年間全国各地で報告例が相次いでいる。本県においても高崎市日高遺跡を始め10例近くに達している。しかしその一方水稻耕作以外の生業については関係資料が乏しいこともあって不明瞭なまま等閑視されてきたといえる。しかし本県にあっては4世紀前半期に降下したと考えられる浅間C軽層下より検出された畑跡は5遺跡以上を数え、渋川市有馬条里遺跡からは弥生後期の焼失家屋より炭化米とともに大量の豆類の出土もある。さらに弥生時代の集落占拠が広域な低平地に侵出を見せないこと等、この時期の生業は水稻に片寄らず狩猟、採集を含めた多様な活動が広く及んでいたと思われる。このことは古墳時代における水稻に基づく収取機構の未成立段階の生業の有り方として、この時期の文化内容を理解する上に軽視できない。本遺跡出土の多種に及ぶ動植物遺存体はこのような問題に関わる内容を備えた意義深い資料である。なお今後さらに同種の資料の増加が望まれるところでもある。

- 5 大溝内を流路変遷する小流路覆土中より完形、半完形土器235点、土器破片は口縁部破片だけで10,000点以上に及ぶ多量の土器が出土した。これ等の土器は弥生中期後半から古墳前期の間に属し、形式的には竜見町式、樽式、石田川式に該当する。この間の推移においてはほぼ空白はなく一連に型式組列をたどることができる。そして各小流路における出土傾向は木製品その他の供伴遺物の所属時期を表現している。一方本遺跡においては約200箇所に及ぶ住居跡を始めとする遺構より同時期の一括出土土器が見られ、これによる層位的検討を合わせ進めるなら、器形、文様の系列、様式的展開をより精緻、あるいは鮮明になし得る内容を備えている。このことについては本遺跡の発掘調査報告書第2分冊、弥生・古墳前期集落編にて紹介する予定である。

(佐藤)

(1) 平野進一・大江正行「群馬県高崎市日高遺跡の調査」考古学ジャーナル 8 1978

(2) 「三ツ寺Ⅰ遺跡」年報 2 1984、年報 3 1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(3) 「高崎市文化財調査報告書第20集一浜尻遺跡」1981 高崎市教育委員会

(4) 「清里・庚申塚遺跡」1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(5) 「有馬条里遺跡」年報 3 1985 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、巾隆之、小林裕二 地下からのメッセージ―災害と人々のくらし―有馬条里遺跡の場合 1984 上州路124

16 大溝出土木製品・加工木観察表 (第18表)

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着柄 径・角度	特 作 ・ 形 状 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
1	広 鍬 未製品	D・E溝 E-8	26.2+×25.2×5.0	板 目 ネムノキ		隆起部は木表側に作られる。手斧痕は全面に残され、 頭部は山形に作られ、側面は丁寧に面どりされる。	G S F -19
2	広 鍬	D溝 E-8	20.8+×16.5×3.2	柾 目 クスギ類	121∥113.5	舟形隆起のうち頭部に近い方は欠けている。隆起は 外側に作出される。鍬身は側、刃面がしだいに薄く なる作り。着柄楕円、柄は芯持材、頭部は山形。	G S F -104
3	狭 鍬	D溝 P-10	27.4+×12.1×2.9	柾 目 クスギ類	118∥120	横断面三角形を呈する。細身のため隆起部の輪郭は、 はっきりつかめない。着柄円形、外側の隆起部周辺 に手斧痕。	G S F -91
4	広 鍬 未製品	D溝 O-10	46.0×27.2×6.0	柾 目 カシ類		手斧痕は大きく全面に残される。内側は木目に沿っ て手斧痕が並び、上下は切断されたままである。隆 起は上端から下端までである。	G S F -269
5	広 鍬 未製品	D溝 O-10	42.6×27.3×6.3	柾 目 カシ類		手斧痕は全面に残され、内側は木目に沿って手斧痕 が並ぶ。端部は切断されている。隆起は上端から下 端まであり、4と同一材である。	G S F -277
6	広 鍬 未製品	D溝 P-11	44.7×25.0×6.2	柾 目 クスギ類		隆起部は段をもたない作りで、横断面は三角形をな す。手斧痕は全面に残り、上端は切断したままの状 態。切断は両面からある。	G S F -273
7	広 鍬	D・E溝 N-11	32.7×20.9×1.3 隆17.5×7.6×3.1	柾 目 カシ類	111∥106	舟形隆起は上半部の山形の部分のみにある。鍬身は 薄い作りで、内外面に加工痕が見られる。着柄楕 円。鍬身に擦痕がある。	G S F -73
8	広 鍬	C溝 L-9	37.7×16.7×1.8	柾 目 クスギ類	3.4 128∥130	舟形隆起は高さがなく、上半部の幅狭のところの み作出。内側には手斧痕あり、上端近くに段がある。 下端は円味の刃で摩滅している。	G S F -82
9	広 鍬	C溝 N-9	27.0+×14.0×2.7	柾 目 カシ類	2.9 2.7 113∥113	着柄部はやや厚くなるが、舟形隆起部は不明瞭。着 柄円形上端を尖らせた作り。柄が部分的に残る。器 面は擦痕が残る。	G S F -112
10	広 鍬	C溝 P-12	16.1+×(13.8)+ ×1.8	柾 目 カシ類	3.5 122∥121	鍬身の下半は欠けている。上端は山形に尖らせる。 柄穴は正円でその周辺外面がゆるやかに高まりをも つ着柄円形。	G S F -153
11	広 鍬	C溝 O-11	35.0+×15.8×3.5	柾 目 カシ類	3.5 3.2 123∥123	両面とも平端に仕上げられ現状は面はなめらか。着 柄は楕円。加工痕は明瞭ではない。柄穴付近は厚味 を増すが境界は不明確。	G S F -140
12	狭 鍬	C溝 M-8	(34.0)+×9.4×1.0	柾 目 クスギ類	3.4 114∥123	柄穴付近は厚味をもつが、段は見られない。上下端 は欠損、両側縁は薄く仕上げられる。削り痕は不明瞭。	G S F -111
13	広 鍬	C溝 N-11	36.0+×15.0+×1.8	柾 目 カシ類	3.0 2.8 101∥111.5	柄穴付近はほんの少し厚味をもつが、鍬身は平板と いってよい状況、両側縁は薄く仕上げられる。内面 には削り痕を残すが、他は平滑。	G S F -132
14	広 鍬	C溝 N-11	28.7+×7.5+×2.2	柾 目 クスギ類	2.9 120∥117	柄穴を境に縦に半欠、一側縁は薄く仕上げられる。 加工痕は明瞭でない。刃部は角ばっている。	G S F -256

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着柄 径・角度	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
15	広 鉄 未製品	C溝 N-8	37.8+×(18.8)+ ×6.4	板 目 ケヤキ		鉄身の外側の面の方に樹芯がくる。両面および、側面に手斧痕が残る。平面形は中位にくびれ部を持つ。上端は幅狭になっている。舟形隆起は平面三角である。	G S F -103
16	広 鉄 未製品	C溝 M-8	49.4×28.3+×7.6	柾 目 クヌギ類		板材を分断し一側の厚味を取り去る。鉄身の厚さは整えられておらず、上半分を両側から削り、大まかな形づくりをする。	G S F -283
17	広 鉄	2 B溝 M-9	(21.5)+×12.0+ ×1.5 隆15.0×7.0×3.8	柾 目 カシ類	112 Ⅱ 112	加工痕は明確でない。舟形隆起は下端まではとどかない。上端は山形に作出。着柄正円。一側は細く剥がれる。	G S F -133
18	広 鉄	2 B溝 N-10	20.2×9.1×1.1	柾 目 カシ類		着柄孔を中心に上側と一側を欠く。刃部は円く、上半がすばまる形態を取るらしい。舟形隆起は下半には及ばない。隆起部は剥離欠損。	G S F -72
19	広 鉄	2 B溝 L-7	18.2+×(17.0)×2.7	柾 目 カシ類	113 Ⅱ 110	着柄部付近は両面ともやや盛り上がる。刃部は厚さ5mmで円刃、加工痕は不明瞭。着柄正円。頭部は山形をなす。	G S F -1
20	広 鉄	2 B溝 J-6	37.0+(18.0)×2.7	柾 目 カシ類	120 Ⅱ 120	柄穴付近は厚味をもつが、他は極めて薄い作りである。手斧痕が残る。着柄正円。平面形は刃部がやや広がる長方形。縁辺は角ばっている。	G S F -9
21	広 鉄	2 B溝 M-10	34.7×16.8+×1.2 隆18.4×6.8×3.4	柾 目 カシ類	72 Ⅱ 65	着柄部と鉄身の部分がはっきりと分かれる。着柄部は厚く作られ、両側から削られ細身である。刃部は欠損している。	G S F -101
22	広 鉄	B溝 G-6	21.0+×15.7×0.8 隆15.5×9.0×2.8	柾 目 クヌギ類	119 Ⅱ 122	平面形は刃部がやや広くなる長方形。舟形隆起は上半部に作られる。表面平滑、着柄円形で柄が中に残る。刃部は欠損している。	G S F -7
23	広 鉄	2 B溝 M-9	22.9×12.8×1.2	カシ類	127 Ⅱ	鉄身頭部は山形。刃部は平縁。着柄部から欠損。器面はあれて、加工痕は明らかでない。	G S F -659
26	広 鉄 未製品	2 B溝	28.2+×14.1×3.3	柾 目 クヌギ類		着柄部分にあたる場所は、ゆるく隆起。円味をもった側縁は裏面より剥がされ、薄く作られる。加工痕は明瞭ではない。	G S F -279
27	広 鉄	2 B溝 J-6	8.7+×13.0×2.0	柾 目 カシ類		平鉄刃部の未製品。器面に擦痕が見られる。側面形にはわずかに湾曲が示される。	G S F -49
28	広 鉄 未製品	2 B溝 N-8	39.2×14.9×3.4	柾 目 クヌギ類		鉄身は長方形で長鉄の未製品であろう。隆起部はゆるく作出される。器面は摩滅しており、加工痕は明らかでない。	G S F -666
29	広 鉄	B溝 O-12	39.0×16.6×1.2 隆14.6×7.2×3.0	柾 目 クヌギ類	125 Ⅱ 118	鉄身頭部は山形で、さらに円柱状の突起が作出される。長鉄で刃部はやや円味をもつ。両側はしだいに薄くなる作り。着柄円形で鉄身は直行しない。舟形隆起は上半部に低く作出される。上端の突起は使用時に何かをつけたものか。	G S F -85
30	広 鉄	B溝 O-12	27.2×14.7×1.4	柾 目 クヌギ類	117 Ⅱ 119	刃部は円形で薄く尖らせた作り。鉄身頭部は細く作られ、円頭となる。舟形隆起は、上半部に作られているが欠損している。	G S F -83
31	広 鉄	B溝 M-10	27.6+×11.0×1.4 隆13.7×5.6×4.2	柾 目 カシ類	120 Ⅱ 124	刃部は欠損している。鉄身頭部は細く作られ円頭となる。平面形は右側に円味がかたよって作られる。舟形隆起は上半部のみである。	G S F -102

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着柄 径・角度	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
32	広 鉄 未製品	B溝 N-11	36.8×18.5×1.0 隆12.7×9.2×3.1	榎目 クスギ類		中位のくびれた長鉄で、舟形隆起は上半部に作られる。上端には突起が作出される。削り痕は内面に残される。部分的に焼欠している。	G S F -77
33	広 鉄	B溝 G-6	15.2+×(16.0)×2.0	榎目 カシ類	118Ⅱ	着柄部から欠損。刃部は直刃であろうが、右側が使用によるためか欠けている。上半は細身で、舟形隆起もその部分に作出される。	G S F -8
34	広 鉄	B・2B溝? V-11	9.0×(4.8)×2.1	榎目 クスギ類		鉄頭頂部片。着柄部より上が細く作出され、尖った部分に、何か重量物を取りつけるようにしたものか。	G S F -658
35	狭 鉄	B溝 L-9	37.2+×14.3×1.9	榎目 カシ類	116Ⅱ 98	鉄身は両端が少々かける。頭部がやや広くなる長鉄。着柄のための隆起部は明瞭でなく、やや厚味を増す作り。側面形はやや湾曲している。	G S F -109
36	狭 鉄	B・2B溝? V-11	34.0×9.8×1.4 隆14.0×8.1×3.4	榎目 クスギ類	127Ⅱ 122	平面長方形の長鉄。舟形隆起が上半部外面に作出される。着柄穴方形。	G S F -304
37	広 鉄 未製品	A溝 J-6	18.9+×11.7+×3.7	榎目 カシ類		鉄身上半の舟形隆起部のみが残存している。長鉄の上半部であろう。手斧痕が内外面に残る。	G S F -45
38	広 鉄	A溝 J-6	30.2+×7.9+×3.5	榎目 クスギ類	119Ⅱ 116	上半を細身にし、舟形隆起の幅と同じにしたものである。下端を欠き、また一側を年輪にそって割っている。器面があられている。	G S F -47
39	広 鉄	C-8	31.6+×17.5×2.1 隆24.8×5.0×3.0	榎目 カシ類	116Ⅱ 116	38と同一の形態、刃部は摩滅して円味をもつ。着柄部は厚くつくられるが、刃端まで直線的に厚味を減じていく。着柄円形で、器面はなめらか、上端部は削り痕が残る。	G S F -20
40	広 鉄	B-7	14.5+×9.7+×2.5	榎目 カシ類	Ⅱ 58	着柄部より上が残存。頭部は尖がる。着柄円形。柄が残存。器面はなめらかである。	G S F -58
41	広 鉄	C-7	14.3×13.5×2.2	榎目 カシ類		鉄身下半部の断欠品で、舟形隆起の下半部があることがわかる。器面は平滑である。刃部は欠失。	G S F -36
42	広 鉄	F-6 下層	11.5+×10.3+×2.9	榎目 カシ類		着柄孔の半分より下の部分から鉄の身の途中までの断欠品である。舟形隆起が明瞭な段をもって作出されている。	G S F -458
43	広 鉄	C-8 上層	10.7+×14.9×1.8	榎目 カシ類		鉄身の刃先部分。器面は平滑で、手斧痕等は見られない。	G S F -418
44	広 鉄	B-7	30.5+×17.4×2.0	榎目 カシ類	108Ⅱ 105	全面に手斧痕が残る。刃部は平縁で頭部は山形となる。着柄円形で、着柄部付近では、なだらかに盛り上がっている。中に小穴がある。	G S F -26
45	広 鉄	B-7	23.3+×7.0+×3.4	榎目 カシ類	107Ⅱ	全面に手斧による削り痕が残る。頭部は両側から削りが入り山形となっている。隆起はほとんど見られない。	G S F -60
46	広 鉄		36.6×16.2×4.0	榎目 ケヤキ	118Ⅱ 127	着柄部が鉄身の上部に細くのびる。舟形の隆起が着柄部と同じ幅で設けられており、身の中央部まででおわるつくり。身の部分はレンズ状の断面形を示す。着柄円形で、器面はなめらかである。	G S F -74
47	広 鉄 未製品	B-7	45.7×21.0×3.6	榎目 カシ類		鉄身の中央部からの半欠品。また刃部を欠く。上半部が細くなり、そこに隆起がつくタイプ。中央が厚く、側縁が薄い。	G S F -172

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着柄 径・角度	特 製 作 ・ 形 状	樹種同 定番号
48	広 鉄 未製品	C-7	41.2×18.0×3.9	榎 目 カシ類		榎目材を切断し、大まかに形を作ったのみのもの。材を放射状に分割し、一側に薄く、一側は厚くなっている。	G S F -61

番号	器種	出土地点	寸 法 (mm)	木取り 樹種	特 製 作 ・ 形 状	樹種同 定番号
49	又 鉄	D溝 E-8	42.5+×15.0×1.1	榎 目 クヌギ類	器面は削ったままである。縁辺は平滑に磨かれている。とくに刃先の部分は稜をもち、鋭く尖る。左右の歯の作りは同形であるが、一方がやや小さめである。着柄部は欠損。	G S F -18
50	又 鉄	E-6 下層	57.5×15.1×1.0 着14.8×3.2×1.8	榎 目 カシ類	器面は平坦で、着柄部だけに削り痕が見られる。刃部の外縁は角ばり、内縁は円味をもっている。左右の歯の作りは同形であるが、一方がやや小さめになる。摩耗のためか、着柄部上端に段と平坦面を有する。	G S F -215
51	又 鉄	C溝 K-7	50.0+×13.0+×4.4 着7.0+×7.4×3.5	榎 目 カシ類	大まかな形づくりの終わった段階の未製品。下半は半分に割った様に見えるが、上下に割れたあとに年輪に沿って割れたものであろう。加工は着柄部に集中している。	G S F -285
52	又 鉄	2 B溝 M-10	29.1×7.0×0.9	榎 目 クヌギ類	又鉄刃部片。両側は、円味をもたせて整えられ、面は平滑に整えられている。刃部端は欠損している。	G S F -486
53	又 鉄	2 B溝 H-6	30.5+×5.0+×2.3	榎 目 クヌギ類	又鉄刃部片。内縁は円味をもたせて整えられ、外縁は角ばる。着柄部は、厚味を増す。両面ともに平滑に作られる。	G S F -280
54	又 鉄	B溝 O-12	64.0+×(21.0)+ ×1.4 着15.0×(4.0)+×3.0	榎 目 クヌギ類	縦にほぼ半欠している。削り痕は着柄部から、鉄身上部から欠けて見られるが、刃部は平滑になっている。刃先を少々欠く。	G S F -144
55	又 鉄	B・2B溝? V-11	36.5+×8.0×1.3	榎 目 クヌギ類	縦に半欠し、さらに着柄部と刃部端を欠く。刃部の縁辺は円味をもつて仕上げ、肩部の縁辺は角がつく。両面共に平滑な仕上げ。	G S F -524
56	又 鉄	B溝 Q-13	33.5+×5.9+×1.6	榎 目 クヌギ類	縦に半割り。さらに着柄部と刃部端を欠く。刃部両側は円味をもつ仕上げ。肩部には削り痕があり厚味も増す。刃部端は薄くなる。	G S F -152
57	又 鉄	B溝 P-13	35.8+×5.4+×2.4	榎 目 クヌギ類	縦に半割り。着柄部と刃部端を欠く。肩部は焼け焦げている。刃部も焦げており端部は薄くなるが生きてはいない。刃部両側は部分的にしか残っていない。	G S F -143
58	又 鉄	B溝 M-10	73.5+×(20.0)×0.9 着15.0+×3.3×2.7	榎 目 クヌギ類	一方の刃欠損。着柄部の作りは、着柄面の反対側に緊縛溝が設けられる。この部分は厚く2.7cmをはかる。肩の部分にも段が作られ、固定に役割を果たしたものと考えられる。刃部は平滑で薄い仕上がりであり、刃端は3mmに満たない。刃縁は円味をもつが、端近くは尖った縁となる。	G S F -108
59	又 鉄	B溝 G-6	47.3+×5.9+×1.3	榎 目 カシ類	縦にほぼ半欠。着柄部も欠けている。刃部内縁の方が薄い仕上がり。先端部を少し欠く。着柄部付近にはくびれがあり、いわゆるナスビ状となる。	G S F -31
60	又 鉄	B溝 N-11	43.0+×5.5+×1.4	榎 目 クヌギ類	縦にほぼ半欠。着柄部刃先も欠けている。刃部側縁は内側の方が薄手に仕上がる。着柄部付近にはくびれがあり、いわゆるナスビ状となる。	G S F -141
61	又 鉄 (窓鉄)	A溝 J-6	63.5×(18.3)×1.2 着15.0×4.0×2.8	榎 目 クヌギ類	刃部の片側を欠く。着柄面は平坦に作られ、反対側に段が設けられている。この部分は丁寧な加工痕が残る。刃部先端は丸く、身の中央に細長い穴を作出する。	G S F -29

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 状 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
62	又 鋏	A溝 K-8	45.0+×(12.8)×1.4	榎 目 カシ類	着柄部欠損。又の部分から一刃を欠く。刃部は両側とも薄くなる作り。先端は尖りぎみになるが、摩滅も見られる。器面は平滑である。	G S F -17
63	又 鋏	B-7	22.6+×4.5+×0.7	榎 目 カシ類	又鋏刃部片。刃部外線は円味をもち、先端は尖る。器面は平滑である。	G S F -188
64	又 鋏	A溝 L-9	着(49.2)×(13.8)×2.1 6.0×2.0	榎 目 クスギ類	着柄部の大きさ、そして柄穴による着柄の穴が長方形をなすといった特徴的なもの。刃長は短い。手斧痕が残る。	G S F -39
65	三又鋏	A溝 I-6	50.8×4.3+×0.8 着14.6×2.1+×2.8	榎 目 カシ類	着柄部から裂けたように割れる。着柄部の最大厚は2.8cmと厚いが、刃部はきわめて薄い作り。刃部は角ばって作られる。肩部に段ができる。	G S F -48
66	三又鋏	2 B溝 N-9	37.5+×15.1×1.9 着16.7×3.4×1.4	榎 目 カシ類	上半部のみ残存。着柄部上端にゆるいくびれがあり紐かけに便を果したのであろう。着柄部断面は△形で、表裏の区別がはっきりしていたらしい。	G S F -69
67	三又鋏	2 B溝 E-8	37.6+×(14.1)×1.6 着15.6×3.9×2.7	榎 目 カシ類	上半部のみ残存。着柄部上端に、ゆるいくびれあり。着柄部断面は△形で厚く、表裏の区別がはっきりしている。歯は左右に広がるか？	G S F -34
68	三又鋏	B・2B溝? V-11	84.0×(22.0)×2.0 着16.5×5.0×3.5	榎 目 クスギ類	歯のひとつが欠ける。着柄部から歯にかけての、なだらかな肩部をもつ。着柄部断面は△形。左右の歯は幅広でうすく、中央の歯は幅狭で厚い作りである。歯は開かず真直ぐにのびる。	G S F -294

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着 柄 径・角度	特 徴 状 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
69	横 鋏 a 未製品	D・E溝 D-9	27.5×21.6×7.0	榎 目 クスギ類		手斧による大まかな形づくりのおわった段階のもの。着柄部の盛り上がり想定して、厚味のある部分を中央付近にもつ。みかん割材の外側の部分を一面から削っての作りである。	G S F -282
70	横 鋏 a 未製品	D溝 P-11	30.8×25.6×8.5	榎 目 クスギ類		みかん割りのあと、かんたんに手斧による形づくりをしたもの。手斧削りは隆起部を作るように、中央部に向かってされる。	G S F -300
71	横 鋏 a	C溝 N-9	19.8+×16.8+×3.3	榎 目 カシ類	116 Ⅱ 127	一側が欠けている。上端を中心として焦痕あり。中央部が厚くなっているが、明確な稜線はない。着柄円形。刃部、側縁部は薄く仕上げられる。	G S F -110
72	横 鋏 a	2 B溝 L-7	17.6×20.5×2.2	榎 目 カシ類	107 Ⅱ 113	着柄部付近に、かすかに隆起が見られる。それは刃部まで続く。器面は平滑で、刃部、両側縁は薄く仕上げられる。着柄円形。柄の一部が残存する。	G S F -4
73	横 鋏 a	2 B溝? Q-12T	20.0×15.0×3.1	カシ類		器面全体が平滑な仕上がり。刃部は摩滅して円味をもち厚くなっている。柄穴は中央より右側にかたよっている。隆起部は内側である。	G S F -1150

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	着柄 径・角度	特 (製作・形状)	樹種同 定番号
74	横 鍬 a	2 B溝? Q-12T	21.0+×8.1+×2.0	柾目 ケヤキ	120 Ⅱ	着柄部より年輪に沿って割れている。器面はあれており、加工痕は見ることができない。着柄円形である。	G S F -1157
75	横 鍬 a	A溝 L-8	17.3+×(19.0)×1.6	柾目 カシ類	111 Ⅱ 101	年輪が縦方向なのは、円鍬とは異なる木取である。刃部は刃がつけられておらず、尖がっていない。着柄円形。着柄部に盛り上がりはない。	G S F -28
76	横 鍬 a	B溝 G-6	24.5×16.0×2.4	柾目 カシ類	111 Ⅱ 107	器面にかすかに加工痕が残る。着柄部は両面からゆるやかに厚味を増す。刃部、側縁は薄く尖らせてある。着柄円形である。	G S F -3
77	横 鍬 b	C溝 N-9	18.3×32.5×2.8	柾目 カシ類	113 Ⅱ 106	横に長い身をもつ刃部は平縁。着柄穴の部分は厚くなるが、特別に隆起帯はもたない。穴はやや右にかたよって設定される。着柄円形である。	G S F -120
78	横 鍬 b	C溝 O-12	15.0+×38.0+×2.0	柾目 カシ類		着柄穴から割れた下半部が残存。着柄円形。着柄部に近い部分は隆起帯がめぐらされる。刃部は直線的である。	G S F -150
79	横 鍬 b 未製品	C溝 M-8	17.4×33.0×5.3	柾目 カシ類		みかん割材の一面を削り、着柄のための隆起部を作り出したもの。樹芯に近い方が刃部となる。	G S F -260
80	横 鍬 b 未製品	C溝 H-7	46.0+×11.2+×3.5	柾目 ナラ類		みかん割材の一面を加工し隆起部を作り出している。樹芯に近い方を刃部とする。他の面は打ち割ったままである。	G S F -299
81	横 鍬 b	2 B溝 J-6	14.0×32.2×3.2	柾目 クスギ類	122 Ⅱ 117	柾目板を横に用いる。刃部は0.6cmと薄く仕上げられ、やや内湾する。隆起部が外面に明瞭に作られる。着柄円形で柄が残る。	G S F -15
82	横 鍬 b	2 B溝 G-7	11.7×29.0+×(0.6)	柾目 カシ類	132 Ⅱ	柾目材を横に使う。全面に手斧痕が残る。中央部の隆起は明確に段をもって作出され、刃部までつづく。器面外側に作られる。刃部は直線的であるが角頭状になっており、削るための刃はない。	G S F -5
83	横 鍬 b	2 B溝 J-6	11.8×30.0+3.8	柾目 カシ類	113 Ⅱ 107	柾目板を横に用いる。上方が厚く、着柄のための盛り上がりは、刃部近くまで見られる。着柄円形。刃部及び両側は薄い作りとなる。	G S F -164
84	横 鍬 b	C-9	15.8×35.7×1.6	柾目 カシ類	84 Ⅱ 102	柾目材を横に使う。柄穴を中心としてわずかに厚味を増す。着柄円形。器面は平滑で、加工痕は見えない。	G S F -175
85	横 鍬 b		13.6×11.9+×1.4	カシ類	132 Ⅱ 132	柾目材を横に使う。中央部のみの断欠品。柄穴付近に隆起があるが、刃部にまではとどかない。着柄円形。加工痕不明瞭。	G S F -457
86	横 鍬 b	B・2B溝 E-7	11.0×46.6×2.7	柾目 カシ類	97 Ⅱ 104	柾目。柄穴近くの隆起が内側につく。全体に湾曲しており刃部中央にわたくりがある。着柄円形。器面は全面にわたくり磨かれている。刃部端にくの字の扶れがある。	G S F -16
87	着柄鋤鍬	C・D溝 O-10	31.5+×9.5×1.6 着18.0×3.5×1.7	柾目 カシ類		着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。着柄部には両側からくびれが入り、柄との緊縛にあてる。身の肩部は斜に切られて、その後幅9.5cmとやや狭身のものとなる。刃部欠損。直柄にするか膝柄にするかで鋤、鍬の別も変化する。	G S F -71

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特徴 (製作・形状)	樹種同 定番号
88	着柄鋤	D溝 E-8	37.2+×(15.2)×0.7 着17.2×(3.6)×2.0	榎目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出する。着柄部は両側からくびれが入り、柄との緊縛にあてる。身の肩部は斜めに切られ(やや内湾ぎみ)その後は直に下がる作り。刃部欠損。身は薄く作られる。直柄をつけて鋤とするが、膝柄の可能性も。	G S F -86
89	鋤 未製品	D溝 L-7	61.5×18.0×6.2	榎目 カシ類	榎目板の一端を両側から削り、鋤上部の突出部を大まかに作る。柄穴を作る部分には、低い隆起が手斧削りによって設けられるが、柄穴の位置は定められているものの、未通である。表面全体に手斧痕が残る。	G S F -272
90	着柄鋤	C溝 M-9	43.5×11.9×2.0 着10.1×2.8×1.2	榎目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出する。着柄部は一侧にくびれが入るが、87・88のように明確ではない。身の肩部は斜めに切られ、そのうち直にさがる作り。身の厚さは刃部へ向かうにつれて薄くなり、端は0.4cm。刃部近くに削り痕が斜走。	G S F -100
91	着柄鋤	C溝 L-7	42.2+×14.5×1.3 着18.7+×4.4×2.6	榎目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出する。着柄部は一面に凹部を段をもって作る。反対側の着柄面は平滑に仕上げられている。身は左右の肩のほり具合に差があり、斜肩の長さが異なる。刃部は外面から見て左に傾斜し、右利き用である。	G S F -119
92	着柄鋤 未製品	C溝 L-7	56.2×14.5×4.6	榎目 カシ類	器面を手斧削りで整えるのみでなく、一端は着柄に適するように細く形づくられている。他端は山形に両側から切りこまれる。厚味は一定であり、隆起部をもたない。広鋤の未製品2個体分とも考えられるが、両端の形はの場合同一の様だ。	G S F -262
93	着柄鋤	B溝 K-8	31.8+×12.0+×1.0	榎目	身の部分のみが残るもの。刃部から一側にかけてが残っている。側縁はやや円味をもつ仕上がり。刃部の平面形は円味がかったよっているらしい。刃部は非常に薄く仕上げられている。炭化部がある。	G S F -114
94	着柄鋤 未製品	C溝 L-9	59.3+×18.4×2.2 着19.2×8.2×3.4	榎目 カシ類	榎目板に、着柄部と身の部分を分けるように粗い加工を施しただけのもの。すでにこの段階で肩の斜めに切られている着柄部と身部分への移行の形が明確に作られていることと、厚味についての着柄部から刃部への直線的な減少が見られる。	G S F -415
95	着柄鋤	C溝 G-7	29.3+×(14.0)×1.6	榎目 カシ類	肩部以下の部分の半欠品である。斜めに直線的な姿を示す肩部とそれにつづく真直に下がる一側縁、そして刃部の円味を有する点など着柄鋤の特徴を見せる。また厚味は上厚下薄である。加工痕は明瞭ではない。	G S F -171
96	着柄鋤 未製品	C溝 N-9	29.5+×8.3×3.4	榎目 クヌギ類	榎目板に粗い加工が施されている。94と同様に未製品であるが、肩の斜めに切られる点、そして身部の側縁が直に下がるなど、着柄鋤の特徴を示している。厚味は上厚下薄の傾向である。面調整は木理に従がう。	G S F -203
97	着柄鋤 未製品	C溝 G-7	69.8+×11.3×5.3 着14.8+×7.6×3.4	榎目 カシ類	榎目板に粗い加工が施されている。本例も他の未製品と同様で、肩の斜めに切られた様な部分、身部の両側が直に下がるなど、着柄鋤の特徴を有している。厚味は、そう変化ないが刃部になる所付近は、やや薄いようである。	G S F -276
98	着柄鋤 未製品	C溝 N-8	78.0+×14.2×2.9 着21.4+×8.4×3.4	榎目 クヌギ類	榎目板に着柄部と身の部分を分けて粗い削りを行ったもの。刃の部分は山形に尖らせた作り。肩の部分は傾斜しているというよりも横になった形である。手斧痕は側縁にのみ残されている。厚味を整える加工はまだ施されていない。	G S F -298
99	着柄鋤 未製品	C溝 K-7	55.5+×18.8×1.8 着12.0×5.8×3.6	榎目 カシ類	榎目板に着柄部と身の部分を分けるように粗い加工を施したものの。すでにこの時点で肩の傾斜する特徴が形づくられており、身も真直に作られている。縦断面形も着柄部が厚く刃先部が薄い作りで、基本形は整っている。	G S F -115

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
100	着柄鋤鎌	2 B溝 O-11	47.3×14.5×1.2 着8.1+×3.7×2.4	榎目 カシ類	着柄部分はやや短かめで、緊縛のための段や溝は作出されていない。肩部は円味をもってなだらかにつくられ、刃部も円味をもっている。刃先は著しく摩滅している。厚味についても着柄部が厚く刃部が薄くなる仕上げである。	G S F -99
101	着柄鋤鎌	2 B溝? Q-12T	43.2+×13.2×1.5 着11.0+×4.0×1.6	榎目 カシ類	着柄部分を身の上部に作出したもの。緊縛のための段や溝は作出されていない。肩部は傾斜して、着柄部と身の部分は区別される。加工痕はほとんど残されない。縦断面形も着柄部が厚く刃部が薄くなる基本形である。	G S F -1154
102	着柄鋤鎌 未製品	2 B溝 H-7	70.8+×18.4×2.5 着15.2+×6.3×2.6	榎目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。肩部は傾斜してその下に真直な身がつづく基本形はほぼ完成している。手斧痕は側縁にくっきりと残されている。縦断面形はほとんど厚味の変化はなく、刃部も板材から切断したままの状態である。	G S F -274
103	着柄鋤鎌	2 B溝 J-6	16.3+×6.0+×1.9	榎目 クヌギ類	着柄部から肩部にかけての断欠品。肩の部分はほぼ直角に出て段を作ったのち傾斜し、さらに身の部分も先にゆくに従って広がる作りである。図の下縁に生きた面があると見られ、もしかすると、三又鎌の歯先が広がる類となるか。	G S F -54
104	着柄鋤鎌	2 B溝 J-6	41.1×13.2×1.4 着15.2×4.1×2.4	榎目 クヌギ類	着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。着柄部は一面にくびれが入り、柄との緊縛の際に役を果たしたものと考えられる。肩は一度ほぼ直角に出て段を作ったのに傾斜して肩部へと向かう作り。刃先は左上がり、右利き用とされる。	G S F -87
105	着柄鋤鎌 未製品	2 B溝 L-7	68.7+×11.5×2.5 着19.2+×6.3×3.9	榎目 カシ類	器面を手斧削りで整えるのみでなく、一端は着柄に適するように細く形づくりがされる。他端は山形に両側から加工される。厚味は着柄部が3.9cm刃先部が0.8cmと、上厚下薄の傾向がすでにうかがえる。	G S F -270
106	着柄鋤鎌 未製品	2 B溝? Q-12T	57.0+×10.0×3.0	カバノキ類	器面はあれていて加工痕は全く見ることができない。着柄部分は棒状ではなく、ゆるやかにその幅を減少させた作りとなっており、他の未製品とは異なっている。刃先にあたるどころの削りは不明であるが、円味をもたせてあるようだ。	G S F -1155
107	鎌 未製品	2 B溝 M-9	85.2×16.7×4.4	榎目 カシ類	当初着柄鋤鎌の未製品とされていたが、中央に刻み様に斧入れがあり、二分して広鎌となるようである。刻みは両面から入り、7.5mmほど厚みを残してある。側縁には手斧痕が入り、とくに肩部には入念な加工が認められる。	G S F -275
108	着柄鋤鎌 未製品	2 B溝 M-8	70.4×14.8×4.2	榎目 カシ類	着柄部分は他の例に比して幅広である。刃部は山形に両側から加工される。加工は側縁部のみに見られ、両面は割り取ったままの状態である。厚味はほとんど均一で、着柄部と刃部に差が見られない。	G S F -267
109	着柄鋤鎌 未製品	2 B溝? Q-12T	77.0+×18.4×6.0 着16.0+×7.4×6.0	クヌギ類	打ち割ったままで面調整をしていない榎目板を素材とする。着柄部と肩部が大まかに形づくられている。しかし器面はあれており、削りの様子はうかがうことはできない。形づくりは大まかでどの形態の鋤鎌になるかは判断できない。	G S F -1151
110	長柄鋤 a 未製品	2 B溝 M-8	79.0+×15.3×2.7	榎目 カシ類	着柄のための細身の部分と、刃先の部分の山形の作りは大ざっぱに形づくられている。両面は打ち割ったままで、面調整はなく、側縁のみを加工して、平面形を仕上げたもの。厚味については均一で上下の区別は見られない。	G S F -271
111	着柄鋤鎌	B溝 N-11	16.4+×12.8×1.2	榎目 カシ類	着柄部、刃部を欠く。肩部から身にかけての断欠品。身は薄い作りで着柄部から折れており使用による欠損であろう。肩は傾斜して着柄鋤鎌の形態をよく示している。	G S F -75

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
112	着柄鋤鎌	B溝 H-6	15.0×4.7×2.0	榎目 カシ類	着柄部、刃部を欠く。肩部から身にかけての断欠品。肩が傾斜する点と縦断面形が、上厚下薄になる点など、着柄鋤鎌の特徴をよく示している。器面は平滑で、横断面形に中央部分が厚くなる様子が見られ、表裏が区別される。	G S F -352
113	着柄鋤鎌	B溝 E-7	42.0×(11.0)×1.2 着14.7×3.7×2.5	榎目 クヌギ類	着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。着柄部は表面に段が作られて、緊縛にあたっての効果をたかめる。裏面=内側は平坦。肩は直角に段をもって張り、そこからややふくらみ気味の身部となる。刃部は尖がり、左右は対象ではない。	G S F -6
114	着柄鋤鎌	B溝 N-11	52.5×9.3×1.4 着16.3×3.7×1.9	榎目 ナラ類	着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。着柄部は表面に段が作られて、緊縛にあたっての効果をたかめる。肩は途中で傾きを変えるが、張り出し具合は左右対象ではない。刃部は残存状態不良。	G S F -78
115	鋤 未製品	A・B溝 K-8	44.8+×14.3×3.8	榎目 カシ類	打ち割ったままで面調整をしていない榎目板を素材としている。着柄部と肩部が大まかに形づくられている。削りの痕跡は不明瞭でありよくわからない。形づくりは大まかである。	G S F -296
116	着柄鋤鎌	A溝 K,L-8,9	16.1+×8.0×1.9	榎目 クヌギ類	上にのびる着柄部分は欠損している。刃部も同様である。傾斜する肩部から身にかけての断欠品であり加工痕は不明である。縦断面形は上厚下薄で、着柄鋤鎌の特徴を示している。左右の肩の張りに差がある。	G S F -348
117	着柄鋤鎌	A溝 K,L-8,9	14.6+×3.2×1.7	榎目 キハダ	着柄鋤鎌の上部=着柄部分の断欠品。一面に浅い段と窪みをつけて、緊縛の際の助けとしている。反対側の面は平坦に仕上げられている。	G S F -173
118	着柄鋤鎌	A溝 J-6	60.3×11.3×1.0 着15.0×3.9×1.5	榎目 カシ類	着柄のため細くした部分を身の上部に作出している。着柄部は一面から浅く段を設けて、緊縛の際の糸かけにしている。肩部は傾斜して身にそのまま続く形。刃部は極めて薄いつくりで平面は円形である。	G S F -94
119	着柄鋤鎌	A溝 K-9	28.9×10.9×2.0 着16.8×3.6×2.6	榎目 クヌギ類	着柄部分を細長く身の上部に作出するもの。着柄部は三面から段が作られ、平滑な一面に柄を固定して緊縛するようになっている。肩部は一度直角近くに段をなしてそのうち傾斜して身の部分へ移行する。縦断面形は、上厚下薄となる。	G S F -41
120	着柄鋤鎌	O-11	14.7+×5.4×1.5	榎目 カシ類	着柄鋤鎌の肩から身の部分にかけての断欠品。ちょうど着柄部から欠けており、肩が傾斜し、身の一侧が直にさがる様子が観察される。	G S F -383
121	着柄鋤鎌	D-8 上層	12.3+×2.4×1.8	榎目 ナラ類	着柄鋤鎌の着柄部から肩部、そして身にかけての断欠品。肩部は傾斜し身の部分は直に下がる形態を示している。断面形は上厚下薄の特徴が示される。着柄面は平坦に仕上げられている。	G S F -657
122	着柄鋤鎌	A溝 I-6	46.4+×13.5×1.2 14.8×4.0×2.5	榎目 クヌギ類	着柄のための細くした部分を身の上部に作出している。しかし着柄面は平坦であるが、緊縛のための段や溝は設けられてはいない。肩部は直角に段をもち、さらに強く傾斜して身の部分となる。断面形は上厚下薄で、刃部を欠く。	G S F -51
123	着柄鋤鎌	C-6	59.2×11.7+×0.8 17.0×4.0×1.7	榎目 カシ類	着柄のための細長い部分を身の上部に作出している。一面に段を設け緊縛を助けている。着柄面は平坦である。肩部は直角に段をもちさらに身の部分へ直に下がる平面形をしている。刃部は円味をもつ。縦断面形は上厚下薄となる。	G S F -168

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特徴 (製作・形状)	樹種同 定番号
124	着柄鋤 未製品	C-7	47.7×9.3×1.6 着10.5×4.2×1.7	柁目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出している。素材は割ったままで面調整を施していない柁目材。肩部は傾斜して開き、身の部分は真直に落ちる形。平面形を整える作業の他は、調整仕上げ等は施されていない。	G S F -30
125	着柄鋤	C-7	25.0+×9.8×1.5 着14.8×4.4×2.8	柁目 ナラ類	着柄部分を細長く身の上部に作出する。着柄部上部が欠損しているが、現状では段や溝は見られない。肩部の位置は左右で少しずれるが直角に段をもって張り出している。身の側縁は広がり気味になっているが、下半を欠く。上厚下薄。	G S F -477
126	着柄鋤		32.3+×8.5×1.3 着18.0×2.0×2.0	柁目 カシ類	着柄部分を細長く身の上部に作出する。着柄部は表面に段が作られている。肩部は斜めに切られているが張り出しは弱い。身の下半は欠損している。縦断面形は上厚下薄で、一方の面は平坦そして他の面が傾斜するもの。	G S F -37
127	着柄鋤 未製品	B-7	96.0×21.3×2.8 着17.0+×4.7×3.6	柁目 カシ類	着柄部分を両側からの削り出したもの。打ち割ったまま面調整をほとんど加えていない柁目板の両端を切断したもの。両端には切断痕を残す。両側から削りでは、肩部の形も作出しているらしい。縦断面形では、厚味の変化は示されない。	G S F -251
128	着柄鋤		14.0+×5.8+×0.8	柁目 カシ類	肩部のみの断欠品。着柄部分から傾斜して肩へと移行する部分から木理に沿って割れてしまったもの。身の下半も欠けている。柁目板の樹芯に近い部分の材である。肩部の加工以外には両面の加工などのあとは見られない。	G S F -460
129	着柄鋤		16.0+×6.4+×1.9	柁目 カシ類	着柄部から肩部そして身上半部へかけての断欠品。128と逆に柁目板の樹皮に近い部分の材が残っている。肩部は斜めに切られ、身は真直にのびる。厚味の変化は残存部分が短いため明らかでないが、上厚下薄になるらしい。	G S F -466
130	長柄鋤 b	2 B溝 M-9	63.2×6.7×3.3	柁目 クスギ類	鋤身の部分のせまい類で、オール様の形状である。両側縁の断面形は円味をもって、側縁に刃を作るものではない。先端部を欠いているが、刃を先端につける鋤であろう。柄の長さは40cmくらい。削り痕等は器面には残っていない。	G S F -507
131	長柄鋤 b	B溝 O-12	73.2+×7.8+×2.7	柁目 クスギ類	鋤身の部分のせまい類で、オール様の平面形である。両側縁は薄く仕上げられており、刃部とも考えられる。先端部は片減りしており、この鋤も主として先端の刃を利用したものと考えられる。柄の長さは40cmくらい。	G S F -182
132	長柄鋤 b	A溝 I-6	94.9+×5.7×1.7	柁目 クスギ類	鋤身の部分のせまい類で、オール様の平面形である。側面形でわかるように、先端部に刃がつけられているが、写真図版では刃部が入っていない。柄のつくりは粗く、長さは50cmくらい。	G S F -128
133	長柄鋤 a 未製品	C-7	140.0×22.0×3.5 柄60.5×11.2×4.5	柁目 カシ類	柄の部分と鋤身の部分に肩ができて両者を明確に区別するもの。柄の部分の端はやや幅広に作られ、グリップエンドとなっている。鋤身の部分は端部の厚味を変えていないが、両側から尖らせている。先端部は潰れている。	G S F -211
134	長柄鋤 c	H-7	142.7×11.2×4.3	板目 ムクロジ	長い柄と、一面から偏った加工で身作出するもの。刃部をはっきりと作出していない。長柄鋤 c は傾斜して柄と身を分ける肩部の存在と、長柄鋤 b とは異なり幅狭の身、そして端部が尖らせてないといった特徴をもっている。	G S F -79
135	長柄鋤 a 未製品	C-7 下層	161.3×21.8×5.7	柁目 カシ類	柄の部分と鋤身の部分に肩ができて区別されるが、本例は一方は肩が傾斜、もう一方が段を持つ作りとなる。柄の端にはグリップエンドが作られる。鋤身の端は両側から削り、尖らせてある。側面形からは厚味を変えていないことがわかる。	G S F -180

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 作 ・ 形 状 徴	樹種同 定番号
136	長柄鋤c	G-7	84.5+×17.0×4.3	柾目 カシ類	柄の部分をはとんど欠いている。また身の下端も失われているものらしい。肩部は傾斜して柄と身を分けている。身は両側ともに真直に作出されており、刃は作られていないようだ。一面には削り痕が明らかに残される。	G S F —598
137	有柄J字 形木製品	D溝 F-8	53.0+×11.8×2.5	芯持材 クヌギ類	枝を利用した柄の様にのびる部分と、幹を利用して樹皮に近い部分を手斧で削り込んで窪ませ、端に段をもたせて厚味のある端部を作り出したもの。枝の部分はほとんど欠損し幅広の部分は木裏も手斧で形を整えられている。	G S F —27
138	有柄J字 形木製品	O-11	85.2+×φ6.5 31.5×10.0×4.2	芯持材	137と同種の製品。枝の部分は太く、全面が削られたままであるが器面はあれている。幹の部分は扁平幅広で端部へ行くほど幅を増すといった他例と類似の特徴を示すが、端部には段が見られない。	G S F —293
139	有柄J字 形木製品	B溝 K-8	19.4+×(10.8)+ ×4.7	芯持材 クヌギ類	枝の部分をほとんど欠き、幅広の幹の部分もほとんど損ねた状態のもの。器面のあれや割れも著しく、現状からは製品の想定復元はむずかしいが、枝と幹との関係と幅広部両面の加工・形状から本製品とした。	G S F —121
140	有柄J字 形木製品	C-7	48.0+14.8×5.3	芯持材 クヌギ類	枝の部分を欠く。柄の様にのびる枝は、あらく削られるという特徴はあるが、細身である点、他の資料とは異なる。幹を用いた幅広の部分は、木表面の削りは少なく浅い。木裏面は反りをもたせて削りが十分に施されている。	G S F —218
141	へら状木 製品	C溝 M-9	21.3+×7.6×2.5 3.2×2.5	柾目 カシ類	柄の部分から身の一部にかけての残存品。器面は平滑で、削り痕は見られない。柾目材を用い、柄から直にのびる一側と着柄鋤のよう斜めに幅を広げ肩をもつてから身の一側となる二側縁からなる。	G S F —255
142	へら状木 製品	C溝 K-7	44.0+×6.7×1.8 —×3.0×2.3	柾目 カシ類	やや長目の柄と、扁平で一方にのみ広がってのびる作用部とからなる。柄は円棒状に削り出され直にのびる。作用部は大きく欠損しているが、残存部の縁辺は円味をもつ断面形となっており刃をつけた様子はない。	G S F —232
143	へら状木 製品	2 B溝 I-6	45.7+×8.7+×1.9	柾目 クヌギ類	大形の片刃の身の部分のみが残り、柄は欠けている。片鋤もしくはふぐしといわれる土掘具と考えられる。器面は平滑で、加工痕は見られない。背の部分は角頭状の断面形を示すが、柄に近い部分が欠けている。	G S F —174
144	へら状木 製品	2 B溝 G-7	54.0×8.0×2.4	柾目 カシ類	柾目板の一端を一側から削り、握りの部分としている。両端は直線的に切断されており、その他の加工は見られない。側縁は柄から直にのびる側は断面形が角頭状となる。棟となり関をもつ側は薄く仕上げられ刃となる。ふぐしであろうか。	G S F —146
145	へら状木 製品	2 B溝 J-7	52.0+×5.0×2.6	柾目	柄の部分は直に長くのび、断面形は円に近い。作業部は中央部分を欠いているが、片方に幅広になる片刃のもののようなものである。器面はあれている。	G S F —127
146	へら状木 製品	B溝 Q-13	17.0+×4.9×1.4	柾目 クヌギ類	柄への移行部から先が欠損している。身の部分は両側とも厚手に作られており、刃をつけたようなあとは見られないようだ。端部も同様に厚味は変っていない。	G S F —139
147	へら状木 製品	A溝 K,L-8,9	21.5+×5.8×1.6	柾目 カシ類	又鋤の刃部とも考えられるが、両側縁の仕上がりや、やや異なるようである。側縁部・端部ともに薄くなっている。柄の部分は欠失している。	G S F —416
148	へら状木 製品	B-6 下層	29.2+×(15.7)×0.7	柾目 カシ類	薄い作りで、柄の部分から身にかけての一部分が残っている。両端を欠損したもの。柄は扁平で、身の方は一側は角頭状の断面形、一側は刃となる。	G S F —62

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径(cm)	木取り 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
149	農具膝柄	B溝 O-12	43.3+×4.8×3.5	股 木 ニガキ	枝分かれの部分を利用し、枝を握りにあて、幹の部分を着装部としている。着装面は欠損しており、ほとんど残っていない。膝柄の側の緊縛部は作出されていない。	G S F -148
150	農具膝柄	D溝 N-10	58.5×φ2.8 台20.7×4.6×2.3	股 木 クリ	枝分かれの部分を利用。枝を握りにあて、幹の部分を着装部とする。着装部は、平坦な着装面が用意される。着装部は端がやや細くなるように仕上げられる。緊縛部は特別になし。	G S F -123
151	農具膝柄	D溝 O-10	20.4×4.8×3.3 11.5+×φ3.0	股 木 ハンノキ 類	枝分かれの部分を利用し、枝を握りにあて、幹の部分を着装部とする。枝→握り部はほとんどを欠損している。平坦な着装面の基部反対側には、緊縛部を作出してある。	G S F -125
152	農具膝柄	D-8	28.7×φ2.6	トネリコ 類	枝分かれの部分を利用。枝は握り部にあてられ、幹は着装部とする。着柄部は149と同じく短めである。平坦な着装面と緊縛部を背面に作出してある。	G S F -56
153	農具膝柄	D-7 下層	18.1+×φ2.2	股 木 グミ類	枝分かれの部分を利用するが、小形である。枝は握り部にあてられ、幹は着装部となるのであろうが、平坦な着装面は作られておらず、確実な農具柄とはいえない。	G S F -67
154	農具膝柄	2B・C ・D溝	17.5+×φ3.0 17.2×4.0×2.3	股 木 サカキ	枝分かれの部分を利用する。枝を握り、幹を着装部とする。着装部には、平坦な着装面を用意してあるが、緊縛のための部分は特別に作出されてはいない。	G S F -596
155	農具膝柄	C溝 P-10	台51.0×6.6×7.6 79.0+×φ3.3	股 木 クスギ類	枝分かれ部を利用。大形品で握り部となる枝の部分には樹皮がついている。幹の部分は大きく、むしろ農具柄というよりもさらに加工して斧の台部を作るものかも知れない。	G S F -286
156	農具直柄	2B溝 H-6	10.1+×7.0+×2.4	柾 目 カシ類	鋤の柄頭の部分の断欠品。ちょうど今のスコップの柄のように逆三角形で中に窓をあけてある。柾目材で、柄の棒状の部分は欠けている。側縁部には削り痕が残る。	G S F -254
157	農具直柄	2B・C溝 E-8	握15.5+×14.0×4.3 柄34.0+×5.3×4.2	柾 目 カシ類	長柄鋤の柄頭の部分か。扁平な方形の頭部は周縁部に明瞭な削り痕が残るが、二つの面は打ち割ったままの面であろう。柄の下半部以下は残っていない。断面形は方形である。	G S F -268
158	農具直柄	2B溝? Q-12T	握15.0×12.4+×2.6 柄52.8×7.0×3.1	柾 目	長柄鋤の柄頭の部分か。扁平な頭部は一侧は柄の線が直にのび、他側は段をもって幅広となる。側縁部は削りが加わって整形してあるが、両面はともに打ち割ったままである。	G S F -634
159	農具直柄	2B溝? Q-12T	柄42.0+×2.8×1.8 握10.5×11.0×3.0 (組穴) 4.0×7.6	柾 目 カシ類	鋤の柄頭から柄にかけての断欠品。柄頭は方形に作られ窓があげられて、手を入れて握るようになっている。柄は細身で円棒状に削り出されている。	G S F -1149
160	農具直柄	C溝 Q-12	18.7+×5.0×3.0	割 材 クスギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。直棒の太さは一方が太く、しだいに細くなってゆく。両端ともに新しく折れた面であり、全体の形状は想定できない。	G S F -532
161	農具直柄	C溝 Q-12	30.2+×3.4×2.5	ニワトコ	枝材を利用し、器面の加工はほとんど見ることができない。柄の太さは一定である。鋤の柄であろうと考えられるが、両端を欠く。	G S F -423
162	農具直柄	2B溝 F-8	102.0+×2.5×1.6	芯持材 ムラサキ シキブ	真直な枝材を用いた長い丸木棒。両端ともに残るが、一端は断ち切られたままであり、一端はまるくなっているが、一部を欠く。直柄としてはやや細身かも知れない。	G S F -130
163	削り出し 棒	2B・C溝 F-7	51.7+×3.2×3.0	割 材 モミ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。一端はねじれ折れているが、他端は乾燥後に折れたようす。断面は正円形に近く、太さも鋤の柄として丁度適切なものであろう。	G S F -126

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径(cm)	木取り 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
164	農具直柄	C溝 F-7	47.0+×2.3×1.8	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。両端を欠く。断面は楕円形で、農具直柄としてはやや細身である。	G S F -556
165	農具直柄	2 B溝 E-8	53.5+×2.2×1.8	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定であるが、一端がやや細くなる。断面は正円形に近い。	G S F -131
166	農具直柄	2 B溝 L-8	48.6+×φ3.1	芯持材 ムラサキシキブ	枝材を利用し、器面はほとんど加工していない。両端を欠損している。太さはほぼ一定。	G S F -248
167	農具直柄	2 B溝 M-9	39.5+×2.7×2.2	割材 ムクロジ	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定である。断面は円に近いが器面はあれている。	G S F -557
168	農具直柄	2 B溝 L-7	17.9+×φ3.0	割材 カシ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定で、一端は生きている。	G S F -427
169	農具直柄	2 B溝 E-7,8	16.3+×2.2×1.2	割材 イヌガヤ	割材を削り出して円棒を作ったもの。現状ではさらに半割されており、断面は半円形である。	G S F -434
170	農具直柄	B・2B溝 E-7,8	7.6+×2.7×2.6	芯持材 クヌギ類	枝材を利用し、器面はほとんど加工していない。両端ともに欠くもの。太さはほぼ一定である。	G S F -445
171	農具直柄	B・2B溝 E-7	20.8+×φ3.0	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定である。断面は楕円形である。	G S F -424
172	農具直柄	B溝 F-7	22.0+×3.0×2.4	割材 トネリコ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定で、断面は楕円形である。	G S F -439
173	農具直柄	B溝 P-13	42.0+×2.6×2.4	割材 ムクロジ	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはやや細味であるが一定。断面は正円に近い。	G S F -546
174	農具直柄	B溝 P-13	22.8+×2.6×1.9	割材 ムクロジ	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さは残っている一端にかけて、しだいに減少する。断面円形。	G S F -436
175	農具直柄	B溝 G-6	10.6+×2.5×2.2	割材 ムクロジ	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定で、断面は楕円形となる。両端を欠いている。	G S F -444
176	農具直柄	A溝 K,L-8,9	17.2+×3.0×2.3	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さはほぼ一定で、断面は円形となる。両端を欠いている。	G S F -433
177	農具直柄	A溝 K,L-8,9	9.9+×3.2×3.2	割材 ムクロジ	割材を削り出して円棒を作ったもの。器面はあれている。太さは一定で、断面はほぼ円形である。両端を欠いている。	G S F -443
178	農具直柄	A溝 J-7	11.7+×2.4×2.6	割材 カシ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。器面はあれている。太さは一定でなく、断面はほぼ円形。両端を欠いている。	G S F -437
179	農具直柄	A溝 J-7	18.0+×2.7×2.3	割材 カシ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さは一定で、断面はほぼ円形である。両端を欠いている。	G S F -435
180	農具直柄	A溝 I-6	29.1+×φ2.9	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さは一定で、断面は正円をなす。両端を欠いている。	G S F -547
181	農具直柄	A溝 K,L-8,9	19.5+×φ3.1	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さは一定で、断面は円形である。両端を欠いている。	G S F -422
182	農具直柄	A溝 L-8,9	15.1+×2.9×1.8	割材 クヌギ類	割材を削り出したのち半割したもの。断面は半円形となる。両端を欠いている。	G S F -430
183	農具直柄	A溝 K,L-8,9	45.6×2.4×1.8	割材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。太さは一定で、断面は楕円形である。	G S F -554

番号	器 種	出土地点	寸 法 長・径 (cm)	木 取 り 樹 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
184	農具直柄	D-7 下層	25.1×3.5×3.1	丸 木	枝材を利用したもの。一端は切断してある。樹皮は見られないが、取りたてでの加工はないようである。	G S F -67
185	農具直柄	C-8 上層	8.4+×φ3.4	割 材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。一端は切断してある。太さは一定で断面は円形。	G S F -107
186	農具直柄	D-7 上層	20.3+×2.9×1.7	芯持材 クヌギ類	枝材を利用したもの。縦方向に半欠している。両端を欠いている。	G S F -425
187	削り出し 棒	C-6 下層	31.5+×φ2.5	芯持材 モミ類	枝材を利用したもの。一端に細かな切断痕がある。太さは一定で、断面形は円に近い。	G S F -59
188	農具直柄	L-7	43.0+×2.7×2.8	芯持材 クヌギ類	枝材を利用したもの。両端を欠く。器面は取りたてで削ってはいない。断面は円に近い。	G S F -560
189	農具直柄		43.3+×φ2.7	割 材 クヌギ類	割材を削り出して円棒を作ったもの。両端を欠く。断面は円形に近い。	G S F -652
190	杵	B溝 K-8	83.4+×φ7.0 (握部) 4.2×6.0	芯持材 カシ類	搦部中央にそろばん玉状のふくらみが作出される。端部は使用による摩滅の結果、丸頭状になっている。一端は欠損。握部は器面があらわれている。断面は円形に近い。	G S F -124
191	杵	2 B溝 L-7	49.7+×7.8×5.0	芯持材 カシ類	搦部中央部にそろばん玉状のふくらみが作出される。握部は一方が欠損しているが、一方は完全に残る。握部と搦部の境に2条の沈線がめぐらされる。断面は楕円形である。端部は使用により摩滅している。	G S F -43
192	横 づ ち	D溝 H-7	37.3×5.9×4.8 柄11.1×3.8×3.0	割 材 カバノキ 類	握部をあらく削り、槌部との太さを変えてある。境は段をなす。割材を利用している。側面形に示されるように、ゆるやかに反りがつけられており、打撃面が一定に決められているようである。	G S F -326
193	横 づ ち	D溝 E-8	85.5×10.0×6.8	割 材 クヌギ類	握部をあらく削り、槌身の部分との太さを変えてある。境はしだいに細くなる様である。割材を利用している。やはりゆるやかな反りがあり、打撃面が一定に決められていたことがわかる。槌身端部は斧痕が残り、この部分は未使用。	G S F -575
194	横 づ ち	D溝 O-11	50.0×7.8×7.2	割 材 クヌギ類	握部に細長い削り痕が明瞭に残されていて、槌身の部分との太さを変えている。境はしだいに細くなるためはっきりしない。ゆるやかな反りをもたせ、打撃面が定められていたようである。槌身端は斧痕が残り、切断したままである。	G S F -249
195	横 づ ち	2 B溝 J-7	35.3×7.5×6.3	芯持材 カシ類	握部が細く加工され、槌身の部分と太さが変わっている。境は段はなく、しだいに身が細くなってゆく。反りは見られない。端部には斧痕がかすかに見えるが、摩滅しておりこの部分も使用されたと考えられる。	G S F -243
196	横 づ ち	2 B溝 L-7	29.1×5.5×3.4 柄9.5×3.4×2.4	芯持材 カシ類	握部と槌身の部分との境は段がつけられている。段の部分は削りが明らかに残っている。断面形は楕円である。反りをもたせてあり、打撃面が定められていたことがわかる。	G S F -46
197	横 づ ち	2 B溝 K、L-7	34.5+×4.2×2.9	割 材 カシ類	握部と槌身の部分との区別はほとんどつけられない。	G S F -515
198	横 づ ち	2 B溝 L-7	37.9+×3.3×1.9	割 材 モミ類	握部と槌身の部分との区別はほとんどつけられない。	G S F -551
199	横 づ ち	2 B溝? Q-12T	77.0×11.2×10.6 43.0×8.3	芯持材 クヌギ類	握りの部分を粗く削り出して、槌身との区別をつけてある。段をつけずにしだいに細くなるタイプ。反りが見られ、打撃面は定められていたようである。	G S F -1153

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特 徴 状 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
200	横づち	2 B溝 J-6	17.8+×7.1×3.8	割材 クヌギ類	握りの部分を粗く削り出して、槌身との区別をつける。境には段をつけることなく、しだいに細くなるタイプ。反りが見られ、打撃面は定められていたようである。	G S F -225
201	横づち	O-12	25.5+×5.8×3.5 柄10.0+×2.9×2.5	割材 クヌギ類	握りの部分を細くして、槌身との区別をつける。半截材であり、木表の面が、打撃面となっている。両端を欠いている。	G S F -138
202	横づち	B溝 F-7	39.0×8.6×4.5 16.8×3.2×2.0	割材 クヌギ類	握りの部分を粗く削り出して、槌身との区別をつけてある。段をつけずにしだいに細くなる例。反りが見られ、打撃のさいに面が定められていたようである。	G S F -40
203	横づち	B溝 H-6	45.7×8.0×6.6	割材 クヌギ類	握りの部分は簡単な作りで、槌身は大きく作られている。槌身は四面がつけられて断面は長方形に近い。四面ともに打撃による窪みがつけられている。	G S F -502
204	横づち	B溝 O-12	67.5×8.2×6.8	割材 クヌギ類	握りの部分を削り出して、槌身とは段を作らずにしだいに細くしてあるもの。反りがあり、打面が定められている。端部も摩滅している。また器面に刃痕が見られる。	G S F -382
205	横づち	A溝 I-6	37.5×7.4×5.4	芯持材 ナラ類	握りの部分を削り出して、槌身とは段を作らずにしだいに細くなるもの。反りがあり、打撃の際の面は一定されていたことがわかる。槌身は扁平に作出される。	G S F -527
206	横づち	A溝 K,L-8,9	(18.2)+×6.1×2.6	芯持材 クヌギ類	半割材を用いてある。細長い削りにより握部を作るらしいが、移行の途中で欠損している。円味を持っている面の方に打痕が残される。	G S F -332
207	横づち	A溝 I-6	45.7×8.3×7.8	割材 ナラ類	握部と槌身にしっかりとした稜をもった段がある例。段には削りが明瞭に残る。半割材であるが使用により折れたためと思われる。	G S F -217
208	横づち	B溝 G-6	53.0×14.8×9.2 柄22.3×4.2×4.0	芯持材 エノキ	握部と槌身の部分にはしっかりとした段はなく、ゆるやかに太さを変えるもの。打撃による窪みが見られ、作業は一面に定めて行っているらしい。	G S F -53
209	横づち	C-6	45.4+×9.9×7.8	割材 クヌギ類	握りの部分を削り出して、槌身とは段を作って区別される例。反りは見られ、打撃面は定められていたことがわかる。槌身の部分の断面は三角形で、変形は少ない。	G S F -220
210	横づち	B-9	75.8×13.2×7.0	割材 ナラ類	握りの部分を削り出して、槌身とは段を作らずになだらかに移行する例。反りが見られ、打撃面は定められていたことがわかる。槌身の部分の断面は三角形で、変形は少ない。	G S F -375
211	横づち		31.6×4.2×4.2	割材 クヌギ類	握りの部分を削り出して、槌身とは段を作らずになだらかに移行する例。槌身は扁平で両面に打痕が見られる。	G S F -432
212	石斧膝柄	F溝 H-8	28.0+×7.1×3.0 29.4+×φ3.0	股木 カヤ	枝分かかれ部を利用する。柄は途中で折れている。斧台の部分は扁平に作られる。頭部は尖がり気味に削り込まれる。斧身の着装は段をつけて平坦面を作り、扁平片刃石斧が板状鉄斧を固定して用いたもの。	G S F -70
213	石斧直柄	D溝 O-11	73.2+×8.6×6.3 (装着孔) 7.0×3.0	割材 クヌギ類	分割材の年輪に直交する形で装着孔があげられている。装着孔近くの部分は太くなっており、握り部は細く、断面円形に作られる。装着孔は刃部側がやや下に傾くようにあげられ、またねじれをもつ。振りおろす際の角度が用意されている。	G S F -122

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
214	石斧直柄	F溝 G-8	24.0+×7.1×6.5 (装着孔) 5.4×4.7	割材 クヌギ類	分割材の年輪と平行する形で装着孔があげられている。柄頭は幅広になり、斧頭が出る側へと厚味も増す。石斧は柄と直交する形で装着される。213同様にねじれをもつ。握り部は断面円形に整えられる。削りが全面に見られる。	G S F -22
215	石斧直柄	D・E溝 L-8	50.0+×5.4×6.0 (装着孔) 6.2×4.0	割材 クヌギ類	柄頭から装着孔までの部分が残存し、握り部は欠損。分割材の年輪と直交する形で装着孔があげられる。石斧は柄と直交する形で装着される。厚手の太形蛤刃石斧用のもの。やはり石斧はねじれをもって装着されるが、他例とは逆のもの。	G S F -137
216	石斧直柄	C溝 Q-12	31.8+×8.2×5.7 (装着孔) 5.8×4.2	割材 クヌギ類	分割材の年輪と直交する形で装着孔があげられている。柄頭は幅広になり、斧頭が出る側へと厚味を増す形態である。石斧はやや鋭角に装着され、ややねじれをもたせてある。握り部はほとんど欠失している。	G S F -142
217	石斧直柄?	2 B溝 H-6	24.5+×6.7×4.0 (装着孔) 2.5×2.7	割材 クヌギ類	分割材の年輪に平行する形で円孔があげられたもの。石斧柄として取り上げられてあったが、他の例とは異なり、別の用途を考えた方がよい。孔は両面から作出されており、中央部分が最も狭くなっている。握りの部分は断面円形となる。	G S F -158
218	組み合わせ式斧柄	C溝 F-7	24.2+×5.5×3.7 (組穴) 3.9×1.2	割材 クヌギ類	棒状の握部と斧台を別の木で作ったもの=雇い柄の握り部分。頭部近くの断欠形で、器面は削り痕が明瞭に残る。斧台は鋭角になるように組まれるらしく、組み合わせの穴は斜行している。穴は断面長方形で年輪に直交して設けられる。	G S F -12
219	組み合わせ式斧柄	2 B溝 O-12	30.7+×6.2×3.4	割材 クヌギ類	棒状の握部と斧台部を別木で作り、組み合わせて使用する雇い柄の斧柄である。組み穴の部分から欠損しており、上端近くの形は不明。穴は年輪と直交する形でつけられる。握部は断面円形に作出される。	G S F -134
220	組み合わせ式斧柄	C-8	74.5×5.1×3.5	割材 クヌギ類	棒状の握部と斧台部を別々に作って組み合わせる雇い柄である。組み穴は年輪に直交する形で作出され、しかも握りとは直角に組まれるようである。組み穴の断面形は長方形を呈する。穴の中に斧台の柄が残されている。	G S F -467
221	組み合わせ式斧柄	O-12	59.0×3.4×3.6	割材 クヌギ類	棒状の握り部の組み合わせ部以下の残ったもの。組み穴が一部残るが、角度は不明。握りは長く、断面円形に削りが入っている。端部は断ち切ったままで、グリップエンドは作られないのが一般的であり、本例もその作りである。	G S F -537
222	組み合わせ式斧柄	B-7 上層	31.6+×5.4×3.3	割材 クヌギ類	棒状の握部の頭と握りの部分が二つに分かれているもの。柄穴は、断面長方形で、台部が鋭角きみになるように作られている。穴は年輪に直交してあげられる。握りは断面円形に削り出される。	G S F -65
223	容器	C溝 L-8	83.6×25.8×8.0 ×2.3	横木 クリ	両端を円味をもたせて仕上げた、平面長円形の浅い大皿。底はやや厚手になる。立ち上がりは明確な屈曲の線をもたずにゆるやかに湾曲しながら口縁となる。削り痕は両端の円味をもたせた部分に明瞭に残される。両端の口縁端部は平坦。	G S F -162
224	容器	C・D溝 O-11	15.4+×23.8×5.1	横木 ケヤキ	平面は正円形に近い。底部は直径8.2cmの円形平底で、明瞭な稜線をもつ。底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は円味をもっている。削り痕は外面の方によく残されており、削りの長さが長いことが注目される。浅い作業鉢。	G S F -95
225	容器	C溝 O-12	13.0+×8.0+×1.5	横木 ケヤキ	平面は正円形に近い。焼失部あり。底部はゆるい丸底であろう。内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は円味をもった断面形をなす。削り痕は外面の方によく残されている。	G S F -136

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
226	容器 ?	2 B溝 M-9	31.0×9.8×8.7	芯持材 クリ	丸木の両端を切断し、側面からくりぬきを加えたもの。窪みの部分の平面形は長方形で削りのあとが残る。角の部分は、明らかな稜をもつ。容器というより何かの部材かも知れない。	G S F -506
227	容 器	2 B溝 L-8	60.8×13.7×6.9	横 木 クリ	平面長円形の浅い大皿。一端は残るが、角円の作りであり、223とは異なる作りである。底部は平坦な面をもたずに、年輪にそった円味をもつ。端部は円頭状である。削りはほとんど残らず、器面はあれている。	G S F -662
228	容 器	B溝 H-6	35.3×20.0×3.7	横 木 エノキ	平面長方形の四脚付きの大皿底部断片と考えられる。底部の厚味は一定で内面は平滑である。外面の側の残存部中央に極めて不明瞭な境界線をもつ脚部のもり上がりが認められる。加工痕は不明瞭。	G S F -330
229	容 器	B溝 O-12	70.3×45.4×14.7	横 木 トチノキ	平面長方形の四脚付き大皿。口縁部は平頭で幅のある縁帯をもつ。縁帯は狭い方の辺側が厚くなっている。明瞭な稜線で内外面ともに整形されている。脚部はそう高くはない作りであり長軸上で二列に二対作出される。器面は平坦。	G S F -609
230	容 器	B溝 H-6	67.3×13.2+×5.5	横 木 ケヤキ	平面長方形の四脚付きの大皿。口縁部は平頭で幅のある縁帯をもつ。木理にそって割れる。また立ち上がりの部分はほとんどが欠損している。脚は二つ残っているが、四角柱状になっており下面はあれている。	G S F -97
231	容 器	B溝 N-11	62.0+×7.5+×3.2	横 木 カヤ	本例も229・230同様に四脚付きの長方形大皿の側縁部断欠品であろう。口縁部は平頭で幅のある縁帯をもつ。短縁の方が縁帯の幅が広い。立ち上がりも他例も同じで、斜めに外方へひろきながら直にのびる特徴をもっている。脚部はない。	G S F -116
232	容 器	B溝 H-6	34.6+×10.2×4.2	横 木 クスギ類	226と類似の長方形の深いくりぬきを加えたもの。角はあきらかな稜をもたせて作られる。器面は摩滅しており加工のあとは認められない。	G S F -156
238	容 器	C-6 下層	66.0×10.4+×7.0 ×1.0	横 木 クリ	両端を円味をもたせて仕上げた、平面長円形の浅い大皿。底部は薄手で口縁近くが厚手になる点は、223例と逆になっている。底部は平底で、稜線をもっており、そこから内湾して立ち上がる。	G S F -38
239	容 器	B溝 P-13	31.5+×11.3+×3.9	横 木 キハダ	両端に円味をもたせて仕上げた、平面長円形の浅い大皿。底部付近の断欠品で、ゆるやかに湾曲して立ち上がる境の部分であろう。器面は平滑で削り痕などは見られない。	G S F -149
240	容 器	G-7	43.7+×10.6+×3.9	横 木 ハコヤナギ類	平面が隅円方形になるタイプのもので、口縁部は厚手で平頭の縁帯状になる。器面は全体に摩滅しており、削りの跡は残らない。	G S F -649
241	容 器 未製品	B-10	24.3×22.5×10.8	横 木 ケヤキ	半割した材を削り、平面円形で浅い窪みをもたせたもの。浅鉢形を呈する。特筆すべきは、木表の面からえぐりが入り、他の容器のそれとは反対側からの内面削りとなることである。	G S F -234
242	容 器 未製品	B-9	20.3×19.2×7.0	割 材 ケヤキ	半割材の木裏の部分を山形に削り出し、木表側を平坦に仕上げた平面円形のもの。木椀の未製品か。削りは全面に残されている。	G S F -64
243	作 業 台	C-6	43.3×13.0×6.6	割 材 クリ	半割材の両端を切断したもの。切断面に窪みが二つ残される。一方は円形で深く、他方は長円形でやや浅いものである。敲く、潰ぶすといった作業の台として用いられたらしい。	G S F -663

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
244	作業台	C-7	38.6×12.1+×3.7	柾目 カシ類	厚味が均一で、両端を丁寧に整えた柾目板。両面ともに手斧痕による整形が残る。さらに刃痕が線状につけられており切断作業の台として用いられたことがわかる。	G S F -607
245	作業台	D溝 I-7	28.3×12.6×6.8	割材 クスギ類	半割した材の両端を切断し、木肌の面をさらに削り厚手の板をつくる。打ち割った面の中央部に浅い窪みがあり、これは割る、潰ぶすといった作業の結果と考えられる。	G S F -384
246	作業台	2 B溝 J-6	27.5+×16.2×3.3	柾目 ヤブツバ キ	平面台形の厚味が均一な柾目板を使用。片面には打撃の連続によりできた窪みや、刃痕が線状に残されている。作業台として使用されたもの。	G S F -179
247	作業台	2 B溝 J-6	31.4+×12.8×2.4	割材 クスギ類	半割した材の両端を切断する。木肌の面がさらに平坦に削られ、厚手の板を作る。器面には使用痕等は見られないが、製作の類似から本類に含めた。	G S F -163
248	作業台	B溝 G-6	20.3×9.1×6.0	柾目 クスギ類	平面が長方形で厚味がほぼ均一な柾目板を使用。周縁部は斜めに切られるような形で断面は台形となる。台として用いる際に裏表が決められていたようである。使用痕は不明瞭。	G S F -201
249	作業台	B溝 O-12	36.6×17.0×11.7	割材 クスギ類	半割した材の両端をやや尖がり気味に整形し、木肌の面も平坦に削られる。一面は平坦で刃痕が線状に多数つけられている。他面は打ちつぶし作業に用いられたのか、中央が窪む。	G S F -253
250	作業台?	C-8 下層	25.6×12.3×10.9	芯持材 ナラ類	丸木の両端を切断した材の、木肌部分が全周にわたり敲かれたあとが残る。年輪から見ると、作業による摩滅は均一ではなく、かたよった使用がうかがえる。	G S F -496
251	作業台?	C-6	18.2×9.5×7.7	芯持材 クスギ類	丸木の両端を切断した材の、木肌部分が全周にわたり敲かれたあとが残る。年輪から見ると、作業による摩滅は均一ではなくかたよりが見られる。	G S F -475
252	木 筥	C溝 Q-12	11.0+×2.6×0.8	柾目 ムラサキ シキブ	細身で小形の筥である。握りの部分から身の半分くらいにかけての部分が欠けている。残存部の両側から端部にかけての縁辺は薄く作られ、断面は両凸レンズ状となる。	G S F -257
253	木 筥	C溝 H-7	37.4+×8.6×2.6	板目 サカキ	板目材の両面を削り、握りの部分と両側にゆるやかに広がって作出される身の部分とからなる。身の部分は断面が両凸レンズ状となり、側面形も直で表裏の区別がない作り。	G S F -160
254	木 筥	B溝 G-7	27.8×5.0+×1.3 柄12.3×1.8+×2.0	板目 クスギ類	板目材の側縁部を削り、一側のみ幅を広げて身の部分を作る。細身で小形の筥である。縁辺部を薄く仕上げることなく、厚手の身の部分となる。	G S F -13
255	木 筥	A溝 J-6	36.9×6.8×2.0	柾目 クスギ類	柾目材を面調整をして平坦に整え、周縁も直に切り落したような作り。幅は一端が狭く一端がやや広い。筥に類似した形態。幅狭の方を握り部としたものか。	G S F -44
256	木 筥	B-9	26.6×2.3×0.8 8.0×1.5×1.1	板目 ナラ類	細身で小形の筥である。握りの部分と両側にやや広がって作られた身の部分とからなる。身の部分は薄手になり、両端がさらに削られて、断面は、片凸レンズ状をなす。	G S F -52
257	緯 打 具	C溝 L-7	60.4×10.7×1.8	柾目 カシ類	刃部は薄く直線的であり、背の部分は断面形に示されるように円味をもった方形である。線条痕は見ることができないが刃部が細かく凹凸をもっていることから使用の痕跡が見える。	G S F -117
258	緯 打 具	C-7 下層	72.0×16.0×3.2	柾目 カシ類	刃部は薄く直線的であり、背の部分は断面形に示されるように円味をもった方形である。線条痕は見ることができない。背のつくりは太く、両端近くにカーブをもたせて幅狭にする。	G S F -223

番号	器 種	出土地点	寸 法 長・幅・厚・径 (cm)	木 取 り 樹 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
259	糸 巻	C溝 M-7	6.9+×10.2×6.6	割 材 ヤマザク ラ	割材を円筒状に削り出し、さらに中央を両端から削り込んでくびれを作出する。中央部から折れている。残った一端の端面中央には削りによる窪みが作られる。	G S F -386
260	糸 巻	B溝 O-12	19.6×6.5×4.0	芯持材 クヌギ類	丸木材の両端を切断し、さらに中位に全周から刻みを入れて糸巻とする。	G S F -135
261	糸 巻	B-10	14.7×φ10.3×φ4.9	縦木取り ケヤキ	木を縦に取って、両端の径が大きく、中位に最少径がくる形で、上下面に窪みがある。全面に削り痕が残っており、端から縦方向に連続して加工し、端部に縁どりをしている。	G S F -68
262	木製円盤	2 B溝 G-7	12.2×11.8×1.4	柾 目 ヤナギ類	ほぼ正円に作出した板で、片面は平坦、片面はやや中央部が高まるようになっている。周縁部は丁寧に削られている。蓋もしくは敷板などの用途が考えられる。	G S F -14
263	木 鈎	A溝 J-7	22.5+×13.8×3.1	又 木 モミ類	枝分れの部分を利用したもので、表面を平滑に仕上げ、断面は楕円形のつくりになる。両端ともに欠失しているが、元の形状とそれ程変らないものと思われる。	G S F -167
264	飾り弓	D溝 O-11	119.0+×φ1.4	割 材 ニシキギ 類	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。張長は2.5cm。丁寧に円棒状に削り出して弓幹とし、樋が刻まれている。樹皮による所々巻きは、樋の部分で結ばれている。	G S F -113
265	丸木弓	D溝 O-11	27.0+×1.7×1.1	丸 木 イヌガヤ	弦は端から2cmのところ両側から刻み状に作出される。弦近くは一面から削りを入れ、扁平に作出している。弦付近は紐痕等は見られない。	G S F -176
266	丸木弓	E溝 O-11	29.5+×1.3×1.1	丸 木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。1.2cmの弦長。丸木を枝払いして作った弓幹の弦近くを、一面から削り、弓の表裏を作出している。	G S F -183
267	丸木弓?	E溝 H-8	45.9+×1.3×0.7	丸 木 イヌガヤ	一端は生木の段階で折り取ったものか、裂けている。樹皮は残らず、枝も残っていないが、弓として使用されたものとは断定できない。枝の太さは他の丸木弓と同一規格である。	G S F -374
268	丸木弓	E溝 J-8	39.0+×2.0×1.7	丸 木 イヌガヤ	弦近くの断欠品。弦は残っていないが、一端の裂け具合は斜めに15cmほど入り、弦にかかった力での欠損であるらしい。弦近くは一面から削られ扁平になっている。	G S F -370
269	丸木弓	D・E溝 O-11	24.6+×1.2×0.7	丸 木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。1.4cmの弦長。弓幹は丸木を用いているが、一面から削りを加え、扁平にし、弓の表裏を作出している。	G S F -200
270	丸木弓	D・E溝 K-9	26.7+×2.1×1.9	丸 木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦近くの削りは一面とり出している。弦長は2.1cm。弓幹は丸木を用いているが、一面から削りを加え、弦近くを扁平にしている。	G S F -189
272	丸木弓	D溝 E-8	47.4+×φ1.2	丸 木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は1.2cmで薄く作られる。弦近くの弓幹は、一面から削りが集中した扁平な作りでやや反りをもっている。	G S F -90
273	丸木弓	D溝 F-7	47.0+×φ2.0	丸 木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。しかし突出部は小さく、明らかな段はない。削痕が見られ、実際に弦かけされた証拠が見られる。一面からの削りあり。	G S F -84

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特徴 (製作・形状)	樹種同 定番号
274	丸木弓	C-7 下層	26.0+×2.1×1.3	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出す。両面から削りが入り扁平になっているが、一面に強くかたよったものである。弦の長さは1.6cmである。	G S F -32
275	丸木弓	C溝 O-12	29.4+×1.4×0.7	割木 ケヤキ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は1.5cm。割材を用いて断面長方形の弓幹となる。厚さは0.7cmで均一な仕上げである。加工痕は見えない。	G S F -184
276	丸木弓	C・D溝 P-11	71.8+×2.6×1.9	丸木 イヌガヤ	両端欠く。枝は払われており、樹皮は残らない。器面は縦方向に割れており、剥れたようになっている部分もある。細い溝が入るが、樋として作られたものではない。	G S F -393
277	丸木弓	C溝 M-8	72.8+×φ1.9	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけを作る。弓幹は弦から25cmのところで曲っており、真直ではない。弦長は1.8cm。弓裏に削りが集中し、厚味を調整してある。	G S F -80
278	丸木弓	C溝 O-12	37.3+×1.4×1.0	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけを作る。現状では反りの外側の部分に削りが集中しており、断面は蒲鋒形となる。弦長は2.2cmとやや長い。	G S F -196
279	丸木弓	C溝 P-12	23.3+×1.3×0.7	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作っている。弦長は1.5cm。一面から集中して削りが入り、弓幹部の厚さは均一で、0.7cmをはかる。	G S F -178
280	飾り弓	C溝 M-9	61.8+×φ1.7	割木 ニシキギ 類	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作っている。弦長は2.2cm。弓幹は樹芯よりも深く削り出される。下弦を欠くがその付近まで残っていることが、湾曲具合から分かる。片面漆塗。	G S F -89
281	丸木弓	2B・C溝 O-11	80.0+×φ2.3	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作っている。弦長は1.8cm。弓幹は弦に近い部分では削りが見られ、断面は蒲鋒形となっている。削りの部分は弱く湾曲する。	G S F -190
282	丸木弓	2B溝 N-11	32.0+×1.7×1.4	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作っている。弦長は0.4cm。一面から削りが入り、断面は蒲鋒形をなす。削りは弦近くに集中し、弓裏側に施される。湾曲が強くと下弦であろう。	G S F -191
283	丸木弓	2B溝 N-11	41.7+×1.0×0.9	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んでいるが、ややねじれた弦かけ部となっている。弦長は1.7cm。弓幹部は削りなどはなく、枝払いも粗雑である。	G S F -365
284	丸木弓	2B溝 K-8	55.9+×φ1.1	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作っている。弦長は1.5cm。弦近くの弓幹には一面から削りが入り、断面は半円形をなす。反りの外側に削りが集中する。	G S F -88
285	丸木弓	2B溝 M-10	46.7+×1.9×1.2	丸木 イヌガヤ	弦は三面から削り出しているが、段をもたず、ゆるやかにすぼまる。弦かけ作業には不適と思われる。弓幹の削りは一面に集中し断面形は強弱凸レンズ形となる。	G S F -357
286	丸木弓	2B溝 N-11	30.1+×1.2×1.0	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んでいるが、ややねじれた状態で弦かけ部となる。弦長1.4cm。弓幹の枝払いは丁寧であるが、厚味を整える削りは見られない。	G S F -363
287	丸木弓	2B溝 M-10	43.5+×1.8×1.4	丸木 イヌガヤ	両弦を欠く弓幹部品。削りは一面から丁寧に施されて、断面は蒲鋒形となる。	G S F -372
288	丸木弓	B溝 N-11	48.3+×φ1.8	丸木 イヌガヤ	両弦を欠く弓幹部品。一端は裂けたようになっていて、15cmほどの範囲で黒変しており、弦近くの部分と思われる。削りは見られない。	G S F -368

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
289	丸木弓 (榎入り弓)	B溝 P-13	29.9+×2.3×1.8	割材 ケヤキ	割材を削り出して円棒状にしたもの。樋が刻みこまれているので、飾り弓の芯として用いられたものであろう。表面はあれており、加工痕は不明瞭である。	G S F -548
290	丸木弓	B溝 O-12	83.1+×2.4×1.7	丸木 イヌガヤ	両端ともに欠損しており、確実に弓幹部分とすることは無理があるかも知れないが、節の部分に削りが入っており、他の丸木弓と類似の加工である。	G S F -392
291	丸木弓	2 B溝 M-10	65.6+×2.0×1.4	丸木 イヌガヤ	両端ともに欠損している。この資料も確実に弓幹部分とすることはむずかしいが、削りの入る部分もあり、その断面形は蒲鉾形となる。	G S F -390
292	丸木弓	A溝 J-7	65.2+×φ1.6	丸木 イヌガヤ	両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は1.7cm。丸木を枝払いして弓幹とし、弦に近い部分は一面から削り、断面蒲鉾形に仕上げる。弦に近い程扁平になる。	G S F -81
293	丸木弓	A溝 J-7	16.8+×1.2×0.8	丸木 イヌガヤ	両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は2.1cmとやや長い。弓幹部弦付近は削って断面蒲鉾形となるように仕上げている。	G S F -92
294	丸木弓	C-8	42.5+×φ1.5	丸木 イヌガヤ	両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は1.5cm。弓幹部の枝払いはあらく、弦近くの削りも見られない。弦近くは炭化している。	G S F -57
295	丸木弓	C-7	62.3+×φ1.4	丸木 イヌガヤ	両端部欠損品。弓幹部は丁寧な枝払いの他は、削りが残存部両端近くに見られ、弦近くの薄い削り出しに対応する部分であろう。	G S F -222
296	丸木弓	C-7	48.2+×1.4×1.0	丸木 イヌガヤ	両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦長は1.0cmと短い。弓幹部は一面から削られて、断面は蒲鉾形を呈する。弦近くになればなる程薄く仕上げられる。	G S F -35
297	丸木弓	C-7	41.3+×φ1.6	丸木 イヌガヤ	両端部を欠損している。枝は払ってあるが、他に削りは見えず、断面は円形である。表面はあれていて、縦方向にひび割れが入っている。	G S F -371
298	丸木弓	C-7	26.6+×1.6×1.2	丸木 イヌガヤ	両側から削りが入り、弦かけ部を作り出す。弦長は1.7cmであり、明確な段を有する。一端は焦げて欠失している。弓幹部は一面から削りが集中し、弦付近の断面は蒲鉾形となる。	G S F -25
299	丸木弓		10.9+×0.9×0.5	割材 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。樹芯をもたない半分以上の削りによって、弓幹は作られる。側面形は0.5cmと極めて薄手の作りであり、湾曲している。	G S F -355
300	丸木弓		23.2+×1.6×1.4	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り込んで、弦かけ部を作り出している。弦の削りはややねじれている。弦長は2.1cm。弓幹部は削り痕は見られず、枝払いをしたのみで、断面は円形となる。	G S F -356
301	丸木弓		29.8+×1.7×1.6	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。一方に削りがかすかに見られ、弦に近い部分であったと考えられる。他はほとんど加工はされず、断面は円形となる。	G S F -406
302	丸木弓		27.3+×φ1.7	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。削りが一端に見られるが、明確ではなく、枝の突出も大きく残される。断面は円形となる。	G S F -619
303	丸木弓		27.2+×φ1.9	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。特に一端は裂けたようになっており使用によって折れたものと考えられる。断面は円形となる。	G S F -618
304	丸木弓		23.4+×φ2.0	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。部分的に削りも見られるが、断面はほぼ円形である。	G S F -620

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特 作 ・ 形 状	樹種同 定番号
305	丸木弓	B-8 下層	21.3+×1.7×1.2	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。部分的に削りも見られるが、断面はほぼ円形である。所々に焦痕もある。	G S F -622
306	丸木弓?		15.5+×φ1.4	丸木 イヌガヤ	両端を欠損している。加工は別に見ることはできない。断面は円形である。	G S F -621
307	丸木弓?		9.0+×1.0×1.1	丸木 イヌガヤ	両端を欠いている。加工は枝払いの他には別に見ることはできない。断面は円形で、弓として仕上げられたものかは確かではない。	G S F -361
308	丸木弓	E-7	67.9+×1.1×1.0	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り出されて、弦かけ部を作出している。弦長は1.1cm。弓幹は枝払いの他は削りは見られない。全体のカーブから、弓の上部が残っているものと考えられる。	G S F -366
309	丸木弓		44.9+×1.7×1.3	丸木 イヌガヤ	弦は両側から削り出されているが、ややねじれを有する弦かけ部となる。弦長は1.5cm。弓幹は一面から削り、断面は薄針形となる。弦近くは焦げている。	G S F -358
310	用途不明 品	D溝 G-7	36.7+×3.0×1.5	柾目 カシ類	一端が残存するが、柾目取りの板を細長く取り、扁平に薄く削り出したもの。先端部は斜めに切られた形で、角は円味をもつ。両側縁は同じように円くなった仕上がり。	G S F -23
311	用途不明 品	D溝 E-8	29.0+×φ2.9	割材 クスギ類	円棒状に削り出した材の一端を、扁平に加工し、しだいに薄く削り出した作り。先端部は直線的に切られた形で、角は円味をもつ。	G S F -442
312	用途不明 品	D溝 E-8	24.0+×7.0×5.8	割材 クスギ類	断面形は隅円方形の分割材である。両端は欠損している。長柄鋤の握り部となるか。	G S F -504
313	用途不明 品	C溝 F-7	14.0+×3.6×1.7	割材 クスギ類	真直な棒状の材の両端が欠けており、さらに半割された状態となっている。	G S F -429
314	用途不明 品(糸巻)	2 B溝 H-7	16.0×φ4.5	丸木材 クスギ類	丸木の両端が切られたもので、その面が磨り減らされた状態になっている。側縁部に切り込みが入る。	G S F -426
315	用途不明 品(糸巻)	2 B溝 M-9	21.5+×5.8×4.4	割材 クスギ類	丸木の一端が残る。314と同じで残存面が磨り減っている。側縁部に切り込みが入る。	G S F -509
316	用途不明 品	2 B溝 M-10	13.0+×2.3×1.6	割材 カシ類	一端が残っている。削り出し棒の端部近くを扁平に磨り減らしたものの。	G S F -428
317	用途不明 品	2 B溝 I、J-6	40.1+×1.2×1.3	板目材 スギ	細長い薄板の一側縁に段をつけたもの。削り面ははっきりしていない。両側縁ともに割り取ったままになっている。	G S F -553
318	用途不明 品	2 B溝 M-10	61.0+×1.8×1.6 (組穴) 1.9×0.6	割材 モミ類	丁寧に面どりされた角材である。一端は段をもち、他端は直に切られている。四角い組み穴があり、直交する止め穴。	G S F -250
319	用途不明 品	2 B溝 L-7	21.3+×4.0×0.6	柾目 カヤ	薄い柾目の板で、片面は平坦に、そして他面は円味をもった作りとなっている。器面は平滑。	G S F -170
320	用途不明 品	2 B溝 M-9	27.2+×3.9×1.4	柾目 カヤ	薄い斜取りの板で、加工は端部周辺に細かな削り痕が残るのみ。器面全体は割り取ったまま。	G S F -118
321	用途不明 品	2 B溝? Q-12T	26.5×11.7+×3.6		器面が平滑に仕上げられた製品であることはまちがいないが、一側縁が欠損していて、原形は想定できない。	G S F -623
322	用途不明 品	2 B溝? Q-12T	19.3×5.3×4.2	板目 クスギ類	器面は平滑に仕上げた製品であるが、欠損部が多く、原形は想定できない。	G S F -1156

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
323	用途不明 品	2 B溝 C-7	20.0+×(13.0)×1.6	柾目 カシ類	器面は平滑。低い段をもつ薄板状の製品である。斜めに切られたような部分は生きており、鋸鋤の肩の部分か。	G S F -2
324	用途不明 品	2 B溝 M-9	20.3+×15.4×2.1	柾目 カシ類	器面は平滑。低い段をもつ薄板状の製品。斜めに切られた部分は生きており、鋸鋤の肩の部分と考えられるか。	G S F -284
325	用途不明 品	B・2B溝 E-8	13.4+×2.8×1.4	板目 クヌギ類	細長い角材の先端部近くの断片で、柄穴がひとつ残される。大足の部材とも考えられるが、断定できない。	G S F -159
326	用途不明 品	B溝 H-6	31.5+×14.0×2.9 (組穴) 2.7×2.3	柾目 クヌギ類	幅広の板で、一端は欠損している。平面正方形の柄穴がひとつ一側縁に片寄って設けられている。	G S F -264
327	用途不明 品	B溝 N-11	39.0+×18.3×1.8	柾目 カシ類	幅広の板で、円味をもった一端部は生きている。器面は摩滅しており、なめらかである。	G S F -238
328	用途不明 品	B溝 F-7	39.0×φ1.9	丸木	枝を利用し、一端は切断した面、一端は扁平に削り尖がらせている。	G S F -129
329	用途不明 品	B溝 N-11	22.8+×2.0×1.8	割材 モミ類	割材を削り出して丸棒状に仕上げたもの。一端はさきくれだてであっている。他端は細い穴があけられた所から折れる。	G S F -448
330	用途不明 品	B・2B溝? V-11	16.8×5.2×3.2	割材 クヌギ類	割材の一端に加工を施し、丸味をもたせ半球状に仕上げる。一端は欠損している。	G S F -481
331	用途不明 品(糸巻)	B溝 H-6	13.0×3.8×3.3 2.0×2.3	丸木 クヌギ類	全面に磨き加えられる。一端は窪みが設けられコブ状になっている。ツチノコの類であろうか。	G S F -157
332	用途不明 品	B溝 Q-13	50.0×φ4.3 17.6×5.0×4.0	丸木 クヌギ類	幹と枝を利用して、柄と身の部分に分けられる製品となる。たつき具として用いられたものか。	G S F -147
334	用途不明 品	A・B溝 I-6	19.4+×2.4×2.3	丸木 ウコギ類	一端は一面で削り込み扁平にして尖られたもの。器面は平滑で、樹芯部は抜けておちて管状となっている。	G S F -438
335	用途不明 品	A溝 I-6	158.6×5.4×3.8	柾目 クヌギ類	細長い角材を用いる。一端に切り込みを入れて、固定部としたもの。組材の部分となるかも知れない。	G S F -545
336	用途不明 品	A溝 L-9	31.5+×2.0×1.5	割材 クヌギ類	削り込んで円棒にしたもの。一端に年輪に直交するような形での深い刻みが入る。	G S F -21
337	用途不明 品	N-11	35.0×2.8×2.0	割材 クヌギ類	断面長方形の割材の一端を尖らせたもの。尖端は直にのびずに反っている。	G S F -327
338	用途不明 品	D-8	28.5+×2.8×2.0	柾目 ナラ類	幅狭の柾目板。両端ともに直角に切り取られている。	G S F -682
339	用途不明 品	A溝 J-7	9.6+×5.9×2.6	柾目 クヌギ類	断面長方形の割材を素材とする。尖った先端部だけの断欠品である。	G S F -412
340	用途不明 品	O-10	43.0×2.8×1.4	割材 モミ類	細長い棒状のもので、半欠している。	G S F -541
341	用途不明 品	C-6	52.8+×3.6×1.9	柾目 モミ類	柾目の細長い角棒で、一側面を丁寧に削り、表裏面とも断面U字状の溝が平行する。	G S F -324
342	用途不明 品	2 B溝 J-7	34.6+×2.4×1.6	丸木 ムラサキシキブ	なめらかな器面をもつ。削り痕は残らない。	G S F -407
343	用途不明 品	D-8	26.5×13.0×2.7	板目 モミ類	厚手、幅広の柾目板。全周に面どりが行われ、一側縁には凹凸が見られ、組材の一部と考えられる。	G S F -245

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特 作 ・ 形 状	樹種同 定番号
344	用途不明 品	C-6	24.5×4.0×0.7	柁目 スギ	柁目の細板片。薄手で両端を尖らせて、木札のような形態となる。	G S F -169
345	用途不明 品	C-7	22.4+×4.7×0.6	柁目 カヤ	薄手の柁目板で、片面は平坦、もう一面は円味をもって作られている。両端は直に切られ、一端近くにくびれがある。	G S F -63
346	用途不明 品(鋤柄頭)	C-7 下層	11.8×φ3.0 2.7×1.0	割材 クスギ類	円棒の両端を切り、中央近くに長方形の穴をあけたもの。農具柄の端部“にぎり”の部分であろう。	G S F -50
347	用途不明 品	H-6	29.5×4.6×2.4	割材 クスギ類	角材の端部に段を作り、組み合わせの際の助けとしたものであろう。	G S F -563
348	用途不明 品	B-9 下層	37.7×6.0×3.8	割材 クスギ類	角材の両端に切断痕があり、他の面は割り取ったまま。	G S F -66
349	用途不明 品		94.0×φ3.2	丸木 カヤ	一端を細く尖らせたもの。損傷がはげしく加工面は見られない。	G S F -373
350	用途不明 品	D溝 O-10	31.4+×12.3×2.5	柁目 ケンボナ シ類	柁目板を素材とする。器面は丁寧に磨かれる。縁辺部は円味をもった作り。三角の窓が2つ確認される。片面には年輪に直交するように刻線が4～6本単位で残されている。一側縁は欠損。	G S F -96
351	用途不明 品(建築材)	C溝 K-7	76.0+×10.5×1.2	柁目 モミ類	柁目取りの板で原形は想定できないほど縁辺部は欠損している。所々に小穴があるが、これは埋蔵時の根穴である。注目する点は、ひび割れの補修のために細穴をあけ、樹皮で縛りつけた部分が残ることである。	G S F -105
352	用途不明 品(建築材)	B溝 G-6	141.5+×17.6+×5.0	板目 クスギ類	板目でやや厚手の板を素材としている。一端を欠く。残存する端部は両側から切り込まれ、幅狭となる。一側縁に沿って組み穴が設けられる。また、端部近くには組み穴が3つ斜めにずれながらあけられる。建築物の部材か。	G S F -535
353	梯子	B・2B溝? V-11	120.0+×17.0×2.1 ×7.8	半截 クスギ類	半截材の木表側から手斧削りをして段をつけたもの。一端は欠損しており、現状では上位3段が残っている。欠損端の付近では、両側縁がやや細くなるように切られており、こちら側が下になるものであろう。直角に曲がる面が踏面。	G S F -261
354	梯子	2B溝 M-10	78.6+×11.3×10.7 ×0.3	割材 クリ	下端部から2段目までが残っている。1/2分割の材で、幅狭となっている。下端は削って尖らせてあり、土中に埋けたものであろう。直角に作出した面が、踏面となっているらしい。湾曲させてつくる面はカーブがややきつい。	G S F -379
355	梯子	A・B溝 L-10	66.1+×10.3×9.5× 3.0	割材 クリ	上・下端部を欠く。2段分の残欠品。1/2分割の材で、幅狭な例である。直角に段がつくように削り出された面とゆるやかに湾曲する面とで足かけ部を作る。踏面がどちらかは不明。352と法量は似るが、湾曲面のカーブが異なる。	G S F -377
356	梯子	A溝 L-9	62.5×12.6×10.0 ×4.8	半截 ヤマグワ	2段分が残っている。1/2分割材を用いているが、幅狭な例である。直角に段を作りゆるやかな削面とで足かけ部を作るが、やや低くなっている。器面は全体的に摩滅していて、加工痕は見られない。	G S F -376
357	梯子	A溝 L-9	131.0+×13.8×6.7 ×1.8	割材 ナラ類	ほぼ完形の梯子。足かけの段が3つ設定される。1～2段間の2倍の長さで2～3段が作られる。2～3段の間には細長いすかしが見られる。この部分に支柱の上端が取りその部分が足かけの1段分の役割を果たしたものらしい。器面平滑。	G S F -192

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特徴 (製作・形状)	樹種同 定番号
358	杭	B溝 G-7	19.2+×φ5.2	丸木 クヌギ類	主として三方向から細長い削りを加え、先端を尖らせたもの。	G S F -207
359	杭	2 B溝 E-8	24.1×10.0+4.4	割材 クリ	分割材の一端に簡単な加工を施し、先端部としたもの。	G S F -216
360	杭	B溝 Q-13	32.2+×6.0×1.8	割材 クヌギ類	分割材の一端に加工を施し、先端部としたもの。	G S F -206
361	建築材	2 B溝 L-9	70.3+×11.8×7.1	半截 ナラ類	半割材の一端に切断面が見られる。他端は欠失している。側縁部に浅くわたくりが設けられている。材を組むさいに固定の役を果たしたものか、組む時にズレを調整したものか。	G S F -591
362	建築材	2 B溝 F-7	113.5+×16.0×15.5	丸木	途中から割った面が大きく見られる。枝払いがすべての枝になされている。図下半部分は炭化している。一端は切断されており、端部付近はくびれを作り出している。下端は欠失している。	G S F -573
363	建築材	B溝 G-6	170.0×13.8×9.4	丸木 エノキ	丸木の枝払いをし、一端に又部を作出したもの。又の部分は扁平になり、枝分れの部分を利用している。凹の中は平坦になっている。住居の柱等に用いられ、梁を受けるものか。	G S F -581
364	建築材	B溝 H-6	203.0×14.8×12.0	丸木 クヌギ類	丸木を加工し、端部は断面四角形に仕上げる。残っている一端には、四角い大きな組み穴があげられる。建築材の一部であるが、組みの部分だけ材を加工し平面を作ったもの。	G S F -586
365	建築材	B溝 N-11	196.0+×18.8×8.0	割材 ナラ類	割材の一端を平に整え、その少し手前に二面から切り込みを入れたもの。切り込みは板目面から加えられている。凹部と組み合わせり、固定されたものであろう。	G S F -539
366	建築材	B溝 O-12	147.5+×11.3×8.8	丸木 クヌギ類	丸木を枝払いし、一端に又を作って受け部を作る。又の部分は扁平になり、凹の内側は直線的に作られる。組木の着装の面が整えてあるのに対応する。突部の一方を欠く。	G S F -543
367	建築材	B溝 G-6	148.0+×15.2×13.8	丸木 クヌギ類	丸木の端部を半分取り去って仕口の差し込み部とし、その手前には別に四角い大きな組み穴があげられている。組み穴の部分は欠けている。他端はしだいに細くなって欠ける。	G S F -550
368	建築材	B溝 N-11	86.3+×13.6×10.5 (組穴) 7.3×7.0	丸木 クヌギ類	丸木的一端を平坦に仕上げ、その手前に四角い大きな穴をあけて組み穴としたもの。穴はほぼ直交してあげられている。下半部を欠く。	G S F -536
369	建築材	B溝 O-12	101.0+×4.9+×7.0 (組穴) 4.5×3.0	割材 クヌギ類	細長い角材の端部近くに切り込んで仕口を作ったもの。切り込みは板目面の木表側から作られている。建築材としたが、大足などの組み木製品の部分かも知れない。	G S F -288
370	建築材	B溝 H-6	80.8×13.0×1.6	柁目 モミ類	薄手で周縁部をしっかりと形づくった柁目板である。面調整は全く見られずに、割り取ったままの状態である。	G S F -648
371	建築材	N-9	178.0×9.4×6.5	割材 カシ類	割材を用い、一定した太さの長材である。両端ともに折れた様子はなく、完全な形を示している。器面はなめらかで角のない材。	G S F -577
372	建築材	H-7	83.0+×12.4×3.8 (組穴) 6.0×6.4	柁目 クヌギ類	柁目の板で、一側縁は厚く、他は薄い割り取ったままの面をもつもの。残っている端部は斜めに切った形。端部近くに四角い組み穴があげられている。	G S F -593
373	建築材		76.5+×φ7.0	丸木 クヌギ類	丸木的一端に切断面が残る。枝払いは粗雑で、他に加工は見られない。	G S F -639

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径 (cm)	木取り 樹種	特徴・形状 (製作・形状)	樹種同 定番号
374	建築材	B・2B溝 E-8	20.9+×9.7×5.4	丸木 クスギ類	丸木の枝払いをし、一端に凹部を作出したもの。又の部分は扁平になり、内側は角をもって直線的に作り出している。横木を受け固定するもの。一方の突部は欠失。下半欠損。	G S F -469
375	建築材	B・2B溝 E-8	28.0+×6.5×3.6	丸木 クスギ類	丸木の枝払いをし、一端に凹部を作出したもの。又の部分は一方の突部を欠く。やや細い作り。又部内側は角をもつ直線的な作り。下半部を欠く。	G S F -478
376	建築材	2B溝 K、L-7	25.5+×14.0×7.7	丸木 クスギ類	幹と枝の又を利用し凹部を一端に作ったもの。又の部分は内側は角をもつ直線的な作り。突起は6cm前後で長くはなく横に組む木の太さも限定される。下半部を欠く。	G S F -474
377	建築材		22.0+×16.6×5.9	丸木 クスギ類	幹と枝の又を利用し凹部を一端に作ったもの。断面の木取り図でわかるように、この部分は扁平に仕上げられている。下半部を欠く。	G S F -650
378	杭	D溝 G-7	21.0+×φ5.4	丸木 ヤマグワ	全周からの加工。削り面は幅広で、先端は平坦になる。	G S F -219
379	杭	2B・C溝 G-7	62.3×8.0×5.2	割材 クリ	分割材の一端に、簡単な加工を施し先端部としたもの。	G S F -595
380	杭	2B・C溝 G-7	21.1+×5.0×4.0	割材 エノキ	分割材の一端に両面から削りを加えて先端部としている。割面にも形づくりが見られ、別の用途を考えてもよい。	G S F -512
381	杭	C溝 G-7	36.6×φ6.1	丸木 クスギ類	全周からの加工。削り面は幅広で、先端尖がる。樹皮が残る。	G S F -641
382	杭	2B溝 F-8	28.5+×5.2×4.0	割材 クスギ類	分割材の一端に、簡単な加工を施し先端部としたもの。	G S F -198
383	杭	2B溝 F-7	23.5+×φ7.6	丸木 ケンボナ シ類	一つの大きな加工集中面と小さな全周する加工面からなる。尖り度は低く、端部はほとんど平坦になっている。	G S F -210
384	杭	2B溝 K、L-7	27.8+×φ10.0	丸木 エノキ	加工は一つの面に集中している。丸木を斜めに切った形。加工面は幅広で、5cmの幅の加工痕がみられる。	G S F -204
385	杭	2B溝 F-8	54.0+×φ9.3	丸木 ニレ類	全周からの加工。大きく4つの面に分けることができる。削り面は幅広で、先端は潰れている。	G S F -213
386	杭	2B溝 J-7	34.2+×φ4.5	丸木 モモ	全周からの加工。削り面は幅狭で細長い加工痕を見せる。	G S F -199
387	杭	B溝 O-12	13.9+×3.6×3.2	割材 クスギ類	全面が腐り減っていて、削り痕は見えない。尖らせてあることは判断がつく。	G S F -181
388	杭	2B溝 K、L-7	24.3+×φ4.0	丸木 ウコギ類	大きな削り面が一面、斜めに入って先端部を作る。	G S F -209
389	杭	2B溝 J-7	39.6+×φ6.0	丸木 クスギ類	両端ともに摩滅していて加工は不明。樹皮が残る。	G S F -645
390	杭	2B溝 E-8	43.2×4.9×2.7	丸木 クスギ類	一端に斜めに入った大きな切断面が残る。樹皮が残る。	G S F -514
391	杭	B溝 F-7	23.5+×5.1×2.2	割材 クスギ類	分割材の一端に簡単な加工を施し、先端部としたもの。	G S F -513

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り種	特 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
392	杭	B溝 I-6	19.7×5.8×3.0	割材 クヌギ類	分割材の一端に簡単な加工を両側から施し、先端部としたもの。	G S F -339
393	杭	B溝 G-7	24.8+×φ4.5	クヌギ類	全周からの加工。削り面は細長く、先端は潰れている。	G S F -197
394	杭	B溝 Q-13	35.0+×φ4.9	カエデ類	三方からの加工。削り面は幅広で、先端は潰れている。	G S F -194
395	杭	B溝 I-6	48.3×4.5×2.2	モミ類	全周からの加工。削り面は幅広で短い。先端は潰れている。樹皮が残っている。	G S F -399
396	杭	B溝 O-12	75.5+×6.2×3.0	クヌギ類	割材で特別な加工は見られない。加工は端部にもないようである。	G S F -186
397	杭	B溝 G-6	63.0+×φ5.7	クヌギ類	割材の面に削りが少し残されている。端部にも加工は見られない。	G S F -195
398	杭	B溝 P-13	37.8+×7.0×7.6	分割材 クヌギ類	一端は切断面がある。木表の面から削りが入るが、尖がり具合は少ない。	G S F -240
399	杭	B溝 F-7	45.3+×8.7×5.2	分割材 クリ	断面三角形の割材の両側から削りを入れて尖らせたもの。	G S F -233
400	杭	B溝 F-7	49.5+×7.2×5.5	分割材 クリ	断面三角形の割材の両側から削りを入れて尖らせたもの。	G S F -615
401	杭	B溝 N-11	45.2×5.0×3.5	分割材 クヌギ類	断面三角形の割材の周縁に浅い削りを加え、端部を切断したもの。炭化面あり。	G S F -241
402	杭	B溝 H-6	46.0×4.0×1.5	分割材 カヤ	厚手の柾目材の両側縁から加工を施し、鋭い先端部を作ったもの。	G S F -542
403	杭	B溝 H-6	30.5+×φ5.2	丸木 ヤマグワ	丸木の一端に大きな2つの加工面で先端部を作ったもの。	G S F -229
404	杭	A溝 K,L-8,9	29.4×4.8×3.8	分割材 クヌギ類	断面三角形の割材の一端に、全周から加工を施して、先端部を作ったもの。	G S F -511
405	杭	D-7 下層	23.7×4.7×3.7	分割材 エノキ	割材の一端に、主として一面から加工を集中させて、先端部を作ったもの。	G S F -306
406	杭	D-8	23.0+×5.5×3.4	分割材 スギ	分割材に加工を施し、しだいに細くして先端部を尖らせて作ったもの。	G S F -683
407	杭	B溝 F-7	47.4×7.9×5.5	丸木 カン類	丸木の全周から幅広の加工を施して端部としたもの。尖り度は低く、平坦な面が大きく残る。	G S F -643
408	杭	C-7	79.5×7.2×4.2	割材 ヤブツバキ	分割材の両側を整え、さらに削り込んで先端部を作ったもの。	G S F -574
409	杭	C-8 下層	59.7×φ7.6	丸木 イヌシデ類	丸木の一端に、大きく三方向から加工を集中させて、先端部を作ったもの。	G S F -493
410	杭	B-7	55.4+×φ6.6	丸木 クリ	丸木の一端を削り尖らせたものであろうが、摩滅によって加工面は明確でない。	G S F -476
411	杭	B-9	43.1×3.6×2.4	割材 アカマツ	細い分割材の尖った先をそのまま利用したものか。	G S F -498

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
412	杭		38.0+×7.4×2.3	割材 クリ	分割材の一端に簡単な加工を施したものの。幅はほぼ変わらないが、厚味が減少している。	G S F -263
413	杭		32.4+×5.6×2.8	割材 クヌギ類	分割材の一端を細く加工したもの。加工痕は不明瞭。	G S F -647
414	加工材	D溝 E-8	14.3×8.1×3.8	柵目 ナラ類	平坦でなめらかな面からなる。梯子の足かけ部分が折れたものか。	G S F -325
415	用途不明 品	2 B溝 I-6	26.0+×5.0×3.6	柵目 クヌギ類	器面を平滑に仕上げた細い角材。端部に両側からえぐりが入り、一方は深くなっている。鎌の柄頭の部分に類似。	G S F -161
416	加工材 (建築材)	2 B溝 I、J-7	58.4×7.5×5.2	割材 クヌギ類	分割材の一端に段を設け、組み木の仕口を作出したもの。仕口部分の断面形は不正方形で、加工痕は不明瞭。	G S F -597
417	加工材	B・2B溝? V-11	30.0+×10.4×1.4 9.5×4.6	柵目 クヌギ類	厚手の柵目板を素材とし、段をつけたもの。器面は平滑で、削り痕は明らかではない。段のない方の端部は炭化。	G S F -558
418	用途不明 品	B・2B溝 E-8	19.0×4.5×1.5	板目 カシ類	板目の薄板の両端が大きく打ち削られたもの。	G S F -247
419	板	B溝 N-11	40.0+×7.2×1.7	柵目 クヌギ類	器面全体が平滑になっているもの。一端は尖がり気味となりもう一端は欠損している。二又鉞の刃先の部分か。	G S F -228
420	加工材	A溝 K、L-8,9	41.6×4.6×3.4	割材 クヌギ類	細長い材の一端に段、一端は丸味をもった仕上がり。段の部分はほぼ直角に作られている。	G S F -503
421	広 鉞	2 B溝 L-7	45.0×16.2×2.4 (組穴) 4.0×3.1	柵目 カシ類	126 1136 一端を山形に、一端は平坦に加工し、中央部上より着柄孔をあける。孔はねじれが強い。	G S F -295
422	広 鉞	B溝 L-9	39.2×9.4+×3.4	柵目 カシ類	両端は平坦に切つてある。上位に円孔があげられているが、その部分から半分に分れている。厚味は上下変化なし。	G S F -278
423	用途不明 品	A溝 K、L-8,9	14.2+×φ6.8	丸 木	径10cm前後の丸木の一端に加工を施したもの。大きな打削り面と、浅い段ができています。	G S F -212
424	板	A溝 I-6	17.1+×8.8×2.8	柵目 エノキ	厚手の柵目板で、面は割ったままの状態が残っている。	G S F -347
425	板	A溝 J-7	8.0×9.0×3.5	板目 クリ	板目の厚手の板。削り痕はほとんど見えない。梯子の足かけ部分の断欠品であろうか。	G S F -345
426	板		8.7×4.2×2.9	柵目 ナラ類	細身の柵目材で、縦断面形は三角形状となっている。円形の小穴があげられている。	G S F -470
427	板	C・D溝 M-9	22.3×13.5×3.8	柵目 クヌギ類	厚手、幅広の柵目板。削り痕は見られない。割り取ったままのもの。	G S F -491
428	板	2B・C溝 G-7	15.6×6.3×2.4	板目 クヌギ類	厚手の板目板。器面は摩滅しており削り痕は不明。両端を削り平らにしているらしい。	G S F -340
429	板	2 B溝 L-8	26.0×7.3×1.2	柵目 モミ類	中厚手の柵目板で、割り取ったままの面をもつ。両端は切断されているが、雑な仕上げ。	G S F -538
430	板	2 B溝 L-8	34.5×9.9×1.2	柵目 クリ	中厚手の柵目板で、割り取ったままの面をもつ。縁辺部は欠けている部分が多い。	G S F -521
431	板	2 B溝 M-9	32.4×9.6×2.1	柵目 カシ類	中厚手の柵目板で、割り取ったままの面をもつ。一端は幅狭になっている。	G S F -485

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 種	特徴 (製作・形状)	樹種同 定番号
432	板	2 B溝 F-7	23.2×7.5×0.9	柾目 モミ類	薄手の柾目板で、周縁部は面どりされている。厚味も一定で製品として仕上げられたものらしい。	G S F -328
433	板	2 B溝 M-9	21.3+×6.7×2.3	柾目	みかん割りによって割り取られた柾目板で、断面は三角形に近い。両端は欠損。	G S F -291
434	板	B・2B溝 E-8	38.2×9.0×0.6	柾目 クスギ類	幅広・薄手の柾目板で、両側縁は丁寧に面どりされている。両面ともに削り痕等はないが、平坦な仕上がり。	G S F -487
435	板	B・2B溝 E-7	40.7×10.2×3.0	柾目 クスギ類	一端は直線的に切れ、もう一端は幅を狭めた作り。みかん割りで取られた厚手の板。	G S F -490
436	板	B・2B溝 E-7,8	13.7+×6.7×2.2	柾目 クリ	一端を円味をもって面取りして作ったもの。器面は摩滅してなめらかになっている。	G S F -353
437	板	B溝 G-6	16.9×19.5×2.7	柾目 ケヤキ	厚手、幅広の板で、両端を切断したもの。平面形は長方形で長板を分割した際の残り、あるいは製品として完成されたものかも。	G S F -489
438	板	B溝 H-6	18.5+×11.9×3.1	柾目 クスギ類	幅広・厚手の柾目板で、斜めに切られた段ができています。一端は薄く仕上げられるが欠損している。	G S F -344
439	板	A溝 J-6	40.0×15.5×2.0	柾目 クスギ類	幅広で、両側縁が丁寧に削られて曲線的に仕上げられているもの。端部を欠くが、円味をもたせた作りがわかる。	G S F -165
440	板	A溝 K、L-8,9	24.6×7.8×4.0	柾目 クスギ類	みかん割材で、一端は平らになっている。もう一端は欠けている。打ち割ったままで、削り痕は見られない。	G S F -338
441	板	B-10	10.6×11.8×4.0	柾目 ケンボナ シ類	全周を斧で切断したもので、一面には手斧削りが見られる厚手の板で、長板を分割した際の残りの部分か？	G S F -42
442	板	D-7 下層	38.9×8.6×2.4	柾目 クスギ類	ほぼ幅の一定した長板で、厚手のもの。割り取ったままの板で、削り痕は見られない。	G S F -320
443	板	D-8	19.8×12.9×1.9	柾目 クスギ類	厚味が一定で幅も一定に形づくられたもの。両端に切断痕がある。板の両面からさらに斧入れが加わり溝状になる。	G S F -98
444	板	C-8 下層	24.8+×20.0×2.3	柾目 クスギ類	幅広で、一側から4 cmくらいのところで段が両面にでき厚味を増した作りとなる。器面は摩滅しており、加工痕不明。	G S F -456
445	板	C-8 上層	12.6+×10.2×2.1	柾目 カシ類	一端に切断痕が残る材で、厚手で一定の厚味を持つ板。板面は割り取られたままの面である。	G S F -421
446	板	D・E溝 D-9	31.7×13.4×2.7	柾目 クスギ類	幅広で、両側を直にした一定の幅の柾目板である。割り取ったままの面で、削り痕はない。	G S F -484
447	板	D溝 G-7	70.3+×11.4×2.7	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目板で両端を切断したもの。一側縁は途中でゆるやかな段をもつもの。他縁は割れて欠損。	G S F -568
448	板	D溝 I-7	46.9+×17.6×4.3	柾目 クスギ類	幅広なみかん割材で、両端は切断されている。両面は打ち割られたままである。	G S F -608
449	板	D溝 I-7	37.9×9.0×2.4	柾目 クスギ類	打ち割られたままの柾目板。一端は薄くなり、他端は生きているが、加工痕は不明瞭。	G S F -488
450	板	C溝 F-7	57.9×16.0×4.5	柾目 クスギ類	幅広で厚手の柾目板である。両端に切断面がある。割り取ったままの板で、面調整はなし。	G S F -612
451	板	C溝 I-7	53.6×19.5×3.7	柾目 クスギ類	幅広で厚手の柾目板である。両端に切断面がある。割り取ったままの板で、面調整はなし。	G S F -603

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
452	板	C溝 K-7	37.5×16.6×4.2	柾目 カシ類	幅広く厚手の柾目板。一端に切断面がある。みかん割りで得たままの板で、面調整はなし。	G S F -518
453	板	C溝 O-11	26.5×17.0×6.2	柾目 エノキ	幅広く厚手の柾目板。一端に切断面がある。みかん割りで得たままの板で、両側縁の厚みに差がある。面調整はなし。	G S F -520
454	板	C溝 N-9	22.4+28.9×5.0	柾目 エノキ	幅広く厚手の柾目板。一端に切断面がある。みかん割りで得たままの板で、面調整はなし。	G S F -411
455	板	2 B溝 K-6,7	44.5×11.5×3.5	柾目 クリ	みかん割りで得たままの柾目板。両端を欠く。	G S F -569
456	板	2 B溝? Q-12T	52.5+×17.8×2.2	柾目	幅広く厚手の柾目板。一端に切断面が残る。そして他端は大きく欠損しているが、部分的に切断面は見られる。	G S F -636
457	板	2 B溝 J-7	45.1×18.0+3.9	柾目 クヌギ類	幅広く厚手の柾目板。みかん割りで得られたままの板で面調整は見られない。両端は切断面。	G S F -606
458	板	2 B溝 N-8	38.5+×20.5×3.4	柾目 エノキ	幅広く厚手の柾目板。みかん割りで得たままの板で面調整は見られない。	G S F -410
459	板	2 B溝 N-10	38.0×17.2×3.3	柾目 クヌギ類	幅広く厚手の柾目板。みかん割りで得たままの板で、面調整は見られない。両端は切断面。	G S F -616
460	板	2 B溝 K-6,7	49.3×13.5×3.6	柾目 クリ	みかん割りにより得た柾目板。両端を欠く。面調整は見られない。	G S F -510
461	板	B・2B溝 E-8	50.6×14.5×5.4	柾目 カシ類	幅広く厚手の柾目板。みかん割りで得たままの板で面調整は見られない。両端は切断面。	G S F -604
462	板	B溝 F-7	35.8+×11.6×4.9	柾目 クヌギ類	みかん割りで取られた板で、面調整は見られない。一端を直に切断している。	G S F -508
463	板	B溝 O-12	40.2×15.6×2.4	柾目 クヌギ類	みかん割りによって得た幅広い柾目板。一側は斜めに切られており鋸の断欠品の可能性もある。	G S F -523
464	板	B溝 H-6	37.9+×10.5×4.9	柾目 クヌギ類	打ち割ったままの柾目板。両端を欠く。面調整は行われていない。	G S F -473
465	板	B溝 G-6	62.3+×13.8×3.7	柾目 クヌギ類	幅広く厚手の柾目板。樹芯に近い方の縁を取り、両側の厚さをほぼ同じにしてある。面調整は行われていない。	G S F -599
466	板	B溝 G-7	24.0×9.8×3.3	柾目 クヌギ類	樹芯に近い方の縁を取り、両側の厚さをほぼ同じにしてある。面調整は行われていない。	G S F -492
467	板	A溝 J-7	33.7+×13.3×4.8	柾目 クリ	樹芯に近い方の縁を取り、両側の厚さをほぼ同じにした柾目板。両端を欠く。面調整は欠く。	G S F -343
468	板	B-6 下層	34.5+×12.4×3.0	柾目 カシ類	打ち割ったままで、面調整もされていない板。みかん割りによる柾目取り。	G S F -525
469	板	C-8	32.6+×8.5×3.0	柾目 クヌギ類	みかん割りによる柾目板。面調整は見られない。一側が厚く他は薄い仕上がり。	G S F -420
470	板	C-9	71.8×14.5×7.5	柾目 クヌギ類	みかん割りによる柾目板。幅広く、一側は厚く、一側は薄いつくり。面調整は見られない。	G S F -644
471	板	C-7	40.6×23.5×3.5	柾目 カシ類	幅広い柾目板。両端は斧によって切断されている。面調整はされていない。	G S F -482

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種 同定番号
472	板		65.3×20.1×6.4	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目板。厚手で幅広。面調整はされていない。両端は切断。	G S F —549
473	板		38.9×16.6×6.2	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目板。一側は厚く他は薄い作り。両端は切断されている。面調整はされていない。	G S F —387
474	板	B溝 G-6	89.3+×4.2×3.6	板目 クスギ類	幅狭の板目材で、角材という方が適切かも知れない。一端は切断されている。	G S F —589
475	板	B溝 Q-13	72.2+×7.4×3.0	柾目 クリ	幅狭の柾目材で、両側の厚さはほぼ等しい。一端は斜めに、一端は直交するように真直に切断されている。	G S F —590
476	板	C溝 O-9	109.5×11.3×3.5	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目の長板。両端は切断されている。面調整はされていない。	G S F —584
477	板	2 B溝 J-8	99.3+×11.7×2.7	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目の長板。両側の厚さはほぼ同一。面調整はなされていない。中央部に組みのための切り込み。	G S F —571
478	板	A溝 I-6	122.0×10.2×6.2	柾目 カヤ	みかん割りによる柾目の長板。両側の厚さは同一で厚い。両端部は切断されている。	G S F —578
479	板	F-7	127.0+×11.8×3.5	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目の長板。一端は切断痕が残り、もう一端は欠損。面調整はなし。	G S F —640
480	板	C-8	104.0×7.4×3.5	柾目 ナラ類	みかん割りによる柾目の長板。一端は切断痕が残る。面調整は見られない。	G S F —555
481	板	C-6	112.4+×6.3×2.0	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目の長板。両端を欠く、薄手のもので、面調整はない。	G S F —221
482	板	C-8	120.0+×11.8×3.5	柾目 ナラ類	みかん割りによる柾目の長板。両端を欠く。	G S F —566
483	板	C-8	71.3+×11.0×3.8	柾目 クスギ類	みかん割りによる柾目板。両端を欠く。両側の厚さは異なるが、幅は一定。	G S F —565
484	板	B・2B溝? V-11	91.5×25.3×3.8	板材 クスギ類	樹芯から離れて分割された板の木表側も取り去ったもの。両端は切断されている。面調整はない。	G S F —570
485	板	B溝 J-7	84.7×19.4×5.6	柾目 クスギ類	柾目の厚手板。一側に斜めの切断部があり、鋸の未製品の可能性もある。両面は未調整。	G S F —588
486	板	B溝 E-7	84.0×21.6×5.5	柾目 カシ類	みかん割りによる柾目の厚板。	G S F —544
487	板	A溝 K,L-8,9	88.5+×16.0×4.5	板目 クスギ類	樹芯から離れた分割材の、木表側の部分も割り取ってあるもの。面調整はなし。	G S F —576
488	分割材	B・2B溝? V-11	52.3+×6.7×3.8	割材 クスギ類	みかん割りによる分割。一端は欠失し他端は炭化している。断面三角形。	G S F —303
489	分割材	B・2B溝? V-11	33.0+×8.4×4.4	割材 クスギ類	みかん割りによる分割。一端は欠失し他端は炭化している。断面三角形。	G S F —409
490	分割材	B・2B溝? V-11	23.6+×12.0+×5.6	割材 オニグルミ	みかん割りによる分割。一端に切断痕あり。両面とも割り取ったままで面調整はなし。	G S F —259
491	分割材	A溝 K,L-8,9	37.6×4.5×2.2	割材 クスギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F —540

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
492	分割材	A溝 K,L-8,9	44.5+×7.8×4.8	割材 ナラ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -289
493	分割材	D-7 下層	14.6×8.6×7.8	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。斧痕が一端に残る。面調整は見られない。	G S F -655
494	分割材	B溝 G-6	17.3+×11.8×5.3	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -230
495	分割材	C-8 下層	31.6×9.4×4.1	割材 モモ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -451
496	分割材	D-7	34.8×3.9×2.2	割材 カヤ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。炭化部あり。	G S F -93
497	分割材	D・E溝 D-9	64.8×12.5×6.5	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。一端に切断痕があり他端は摩滅している。	G S F -594
498	分割材	C溝 F-7	89.2×6.9×5.7	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -610
499	分割材	2B・C溝 F-7	59.0×9.0×7.5	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。切断痕が両端に残る。	G S F -602
500	分割材	2 B溝 K, L-7	80.5+×8.8×6.0	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。切断痕が両端に残る。	G S F -592
501	分割材	2 B溝 N-9	75.0×8.8×7.3	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。切断痕が両端に残る。	G S F -585
502	分割材	2 B溝 F-7	103.5×8.2×3.5	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。一端に切断痕。	G S F -646
503	分割材	2 B溝 F-8	96.0×11.8×9.2	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。切断痕が両端に残る。	G S F -579
504	分割材	2 B溝 E-8	114.5×9.8×6.8	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。切断痕が両端に残る。	G S F -580
505	分割材	2 B溝 F-7	128.5+×10.0×5.8	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。一端は割り取りの際に薄くなっている。	G S F -611
506	分割材	2 B溝 F-7	106.0×10.4×6.3	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -587
507	分割材	2 B溝 E-8	94.5×13.8×10.8	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -559
508	分割材	B溝 O-13	89.7+×5.8×2.5	割材 クヌギ類	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -185
509	分割材	A溝 K,L-8,9	77.5×12.3×6.6	割材 ニガキ	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -583
510	分割材	C-8	85.5×8.5×2.4	割材	みかん割りによる分割の後、年輪に沿って剥ぎとった材。面調整はなし。	G S F -613
511	分割材	C-6	180.2+×9.2×6.0	割材 クリ	みかん割りによる分割。面調整はなし。	G S F -601

16 大溝出土木製品・加工木観察表

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚・径(cm)	木取り 樹種	特 徴 (製 作 ・ 形 状)	樹種同 定番号
512	加工材	C溝 G-7	15.8+×φ8.0	丸木 クヌギ類	丸木の一端に切断痕が残る。全周よりの加工。	GSF -208
513	加工材	2B溝 H-6	15.0×9.8×8.2	丸木 クヌギ類	丸木の側面から切り込みが入ったもの。	GSF -226
514	加工材	2B溝 I-7	14.7+×8.9×5.8	半割 クヌギ類	一端に斧による加工痕あり。切断痕か。	GSF -227
515	加工材	B溝 G-6	15.0×9.8×8.5	半割	両端に切断痕あり。	GSF -244
516	加工材	B溝 H-6	34.1×14.0×8.9	割材 クヌギ類	両端に切断痕あり。面調整なし。	GSF -483
517	加工材	B溝 G-6	14.8×9.8×7.1	丸木 クヌギ類	両端に切断痕あり。	GSF -468
518	加工材	B溝 F-7	16.7+×φ7.6	丸木 クヌギ類	一端に全周からの切断のための斧痕が見られる。	GSF -205
519	加工材	A溝 J-7	9.3×5.4×4.6	丸木 クヌギ類	両端に切断痕あり。全周からの加工。	GSF -246
520	加工材	D-7 下層	25.3×9.8+×5.1	半割 ヤマグワ	一端に切断痕あり。割面は調整されていない。	GSF -651
521	加工材	C-9 下層	29.7+×10.5×7.8	丸木 ニレ類	一端に石斧による加工が残る。全周よりの加撃。	GSF -193
522	加工材	D-7 下層	55.8×5.8×4.8	丸木 クリ	側縁部に挟りが入る。組み材か？	GSF -311
523	加工材		16.1+×10.5×9.9	丸木	残存している一端に、全周からの加工による切断痕がある。	GSF -471
524	分割材	C-7	85.4×14.0×7.8	半割 クヌギ類	半割した材の樹皮面を削り、厚手の板目材としたもの。両端に切断痕が残っている。	GSF -653
525	角材	D溝 E-8	68.8+×2.2×1.5	割材 モミ類	みかん割りした材を年輪に沿って割った細い角材で、面調整はない。	GSF -562
526	角材	D溝 E-8	62.4×3.0×2.7	割材 モミ類	みかん割りした材を年輪に沿って割った細い角材で、面調整はない。	GSF -398
527	角材	2B溝 M-10	57.2×2.0×0.9	割材 モミ類	みかん割りした材を年輪に沿って割った細い角材で、面調整はない。	GSF -396
528	板	2B溝 I、J-6	33.5×7.6×3.2	榎目 モミ類	厚手の榎目板で一定の厚味である。割ったままで、面調整はない。	GSF -333
529	板	2B溝 E-8	11.5+×2.8×0.7	榎目 モミ類	薄手の榎目材で両端を欠く。厚味は一定。	GSF -567
530	板	M-10	12.4×5.7×1.1	板目 スギ	薄手の榎目材で両端を欠く。厚味は一定。	GSF -350
531	板	D-7 下層	29.5+×8.4×2.7	板目 モミ類	年輪に沿って剥がされた板目材で、厚味は一定。面調整はない。	GSF -534

番号	器種	出土地点	寸法 長・幅・厚(cm)	木取り 樹種	特 (製作・形状)	樹種同 定番号
532	用途不明 品	B溝 G-9	40.5+×4.6+×2.9	征目 ニガキ	丁寧に調整した製品で、上部はカマボコ形の断面で膝柄を装着したと思われる。下端は一部欠損するが凸形のホゾを作っている。	G S F -24
533	削り出し 棒	E-7	46.7×2.3×1.9	割材 モミ類	割材を削り、磨き上げて作った棒状品。	G S F -552
534	削り出し 棒	G-6	41.5+×2.1×0.7	割材 モミ類	割材を削り、磨き上げて作った棒状品。	G S F -564
535	削り出し 棒		24.2×2.5×0.7	割材 モミ類	割材を削り、磨き上げて作った細板。	G S F -464

17 大溝出土土器観察表 (第19表)

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
601 J-8 E溝	壺	口 8.2	接合痕が明瞭である。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部はヘラミガキ。ヘラあて痕あり。 内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ、頸上部は横方向のナデ。胴中部はナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸中位 $\frac{1}{2}$ 周
602 E-9 E溝	壺	口 8.5	口端部に平坦面を持つ頸部に、指ナデにより浮き出させたとと思われる微隆起線。	外面 口縁部、頸部微隆起線上に棒状具による刺突を巡らす。口辺部の地文はLR縄文、この後2本1単位の棒状具による沈線重連弧文。内面 口辺部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸中位 $\frac{1}{2}$ 周
603 O-11 E溝床	壺	口 13.5	口縁部はわずかに内湾する。	外面 全体にハケメ後、頸部に2条の沈線間にヘラ刻み。口縁部はヨコナデ。胴上部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。頸部はヘラミガキ。胴上部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
604 E-8 E溝床	壺	胴 16.3	胴部は下膨れ。	外面 全体をハケメ後、ヘラミガキ後、頸部に2条の沈線。 内面 全体にハケメ後、口辺部はヘラミガキ。胴部に指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	口辺中位～胴下位
605 O-11 E溝	壺	胴 11.4	頸部はなだらか。内面、胴中位に接合痕明瞭。	外面 全面ハケメ後、頸部は7本単位の2段の一簾状文後、胴部はヘラミガキ。 内面 胴中位より上は指ナデ。胴中位より下はハケメ。	2～3mmの小石混入 堅緻 淡黄色	頸～胴下位 外面部分的に煤付着。
606 O-11 E溝	壺	口 16.8	口縁部はやや内湾する。頸部は長細く直立する。	外面 頸部はハケメ後、6本単位櫛描直線3段横成と、ヘラ描沈線によるT字文。口辺部はヨコナデ。 内面 口辺部はハケメ。ヨコナデ後、ヘラミガキ。頸部はハケメ後、ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
607 P-11 E溝	壺		口辺部は長く外反気味に伸び、大きく開く。	外面 ハケメ後、頸部に3本の沈線をひき、その間に羽状ヘラ描沈線、その下にヘラ描沈線による鋸歯文を巡らす。 内面 口辺部はハケメ。頸上部はヘラミガキ。下部は指ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口辺上位～頸部 $\frac{1}{2}$ 周強
608 N-10 E溝	壺	胴 23.8		外面 胴上部はハケメ後、6本単位の上→下櫛描波状文4段、胴中部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 胴上部はナデ、指オサエ痕あり。胴中部はハケメ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい褐色	胴上位～胴中位
609 M-10 E溝	壺	口 12.8	口縁部は短く外反する。胴下位に最大径を持つ。	外面 口縁部LR縄文、口辺部ヨコナデ後胴部に5本単位の櫛描直線文、頸部に5本単位の波状文。 内面 胴部はハケメ後、全面ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周 外面部分的に炭化物付着。
610 J-8 E溝	壺	口 19.8 胴 22.0	口辺部は短く外反し、頸部のくびれ弱くなだらかに胴部に移る。	外面 口縁部LR縄文、全体にハケメ後、口辺部にヨコナデ。頸部に7本単位の櫛描直線文、胴部に上→下6段の←波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 オリーブ黒色	胴下位～上 $\frac{1}{2}$ 周 外面部分的に炭化物付着。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
611 J-8 E溝	甕	口 14.0	口辺部はわずかに外反気味に伸びる。頸部での屈曲は弱い。	外面 頸部は12本単位の3連止め一簾状文後、口辺部に下→上3段、胴部に上→下へ2段の波状文。胴中部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、一部ハケメあり。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴上位 1/2周弱
612 L-9 D・E溝	壺	口 6.1 胴 10.1 高 16.2	口縁端部は角ばる。頸部は強く屈曲し、口辺部はほぼ直状。	外面 口端部LR縄文、口辺部はヨコナデ。頸部は沈線2条、胴部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 頸部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁一部欠損
613 I-11 H-7 D・2B 溝	壺	口 18.0	口辺部は内湾する。器壁は比較的薄い。	外面 粘土紐貼付による隆起線を円形、楕円形区画し、ヘラ状具による刻目を施し、区画内はヘラ描沈線を4条施す。耳状突起を付す。	砂粒混入 堅緻 灰赤色	口縁部のみ
614 M-8 D溝	壺	口 11.5	内面頸部に指オサエ痕が巡る。器壁は厚い。	外面 ハケメ後、口辺部はナデ、頸部は7本の櫛描直線によるT字文。胴上部はヘラミガキ。 内面 口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴上位1/3周
615 J-7 D溝	壺	口 17.1	口辺部は長く外反気味に伸び、口縁部はやや内湾する。頸部は細長い。	外面 口辺部は縦方向のナデ後、口縁部はヨコナデ、頸部は6本単位の等間隔止め簾状文2段、肩部6本単位の波状文2段。 内面 ハケメ後、口辺部上位はヨコナデ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位 全周
616 I-7 D溝	壺	口 16.7	口縁部はやや内湾する。器壁厚い。	外面 頸部はハケメ後、口辺部はヨコナデ。頸部は7本以上の等間隔止め簾状文。 内面 頸部ハケメ後、口辺部はヨコナデ、頸部下位は指ナデ。	砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～頸部1/2周
617 I-7 D溝	壺	口 17.2	口辺部は長く外反気味、口縁部はやや内湾する。	外面 ハケメ後、口辺部はヨコナデ、頸部は8本単位の等間隔止め簾状文の後、波状文。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はナデ、ハケメ。	1～2mmの小石混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部1/3周 外面に煤付着 内面剥離激しい。
618 E-8、9 D溝中層	壺	胴 9.5 底 6.0	長円形の胴で安定した底部を持つ。底部の器壁は厚い。	外面 胴上部は波状文、胴部はヘラミガキ、丹塗り。 内面 ヘラナデ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴上位～底部
619 L-8、7 D溝上層	壺	胴 13.4 底 7.4	下膨れの胴と安定した底部を持つ。	外面 頸部はナデ後、9本単位の波状文。胴部はヘラミガキ、底部はナデ。 内面 丁寧なナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	頸～底部 外面胴部は丹塗り。
620 E-8 D溝	壺			外面 頸部はハケメ後、6本以上の等間隔止め簾状文。胴部はヘラミガキ。 内面 頸部はナデ、胴上部はヘラナデと指オサエ痕。胴中部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 灰白色	頸～胴中位
621 M-9 D溝	壺			外面 全体にハケメ後、頸部は等間隔止め簾状文2本1単位に施す。胴部はヘラミガキ。 内面 頸部はヘラミガキと指ナデ、胴部はハケメ。	2～3mmの小石混入 堅緻 灰白色	頸～胴上位
622 M-9 D溝	甕	口 16.9	口辺部は長くやや外反気味に伸び、口縁部はわずかに内湾する。	外面 全体にハケメ後、口辺部はナデ。口縁部はヨコナデ。頸部は11本単位の2連止め簾状文。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 暗灰黄色	口縁～頸部1/2周 強
623 G-8 D溝床	甕	口 18.9 底 7.9 高 28.6	胴部は膨らみ、頸部のくびれ共に弱い。口縁部はわずかに外反する。	外面 口辺部に横ハケメ後、頸部に9本単位の等間隔止め一簾状文2段、胴部はヘラミガキ。 底面はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	1/2周 外面胴中位より上に煤付着。

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
624 E-8 D溝床	甕	口 18.4 胴 22.0	口辺部は外反気味に伸びる。頸部で強く屈曲し、胴部は中位よりやや下で膨らむ。器壁は比較的厚い。	外面 頸部は8本単位の等間隔止め簾状文下→上3段、胴部は粗いヘラミガキ、口辺部は横方向のナデ。 内面 口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。頸部にハケメ痕顕著、胴部は粗いヘラミガキ。上位に指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周 全体的に煤付着
625 M-9、10 D溝	甕	口 13.1	口辺部は長く直状に伸びる。	外面 口辺中部～胴上部にハケメ後、頸部は9本単位の等間隔止め一簾状文。胴上部は7本単位の一波状文を2段以上。口辺上部はヨコナデ。 内面 ヘラミガキ、胴上部に指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周 外面に煤付着。
626 M-9 D溝	甕	口 15.6	口辺部は長くゆるやかに外反しながら伸びる。	外面 口辺部はハケメ後、9本単位の3段の波状文。頸部は10本単位の等間隔止め一簾状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	頸部より上 $\frac{1}{2}$ 周 外面に煤付着。
627 N-10 D・E溝	甕	口 14.4	口縁部で小さく内湾する。口辺部と頸部以下の器壁の厚さが異なる。	外面 口縁部にヨコナデ、頸部に7本単位の2連止め簾状文後、口辺部は7本単位の波状文を上→下へ3段、胴上部は波状文2段以上。 内面 横ハケメ後、粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 暗灰黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
628 M-9 D溝	甕	口 10.4	口辺部はやや外反する。	外面 頸部は8本単位の2連止め一簾状文。胴上位は重なり合う2段の波状文。口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ。 内面 口縁部ヨコナデ後、全体にヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい黄色	口縁～胴上位全周
629 L-7 D溝 上層	甕	口 16.2	口辺部は長く外反しながら伸び、折り返し口縁を持つ。頸部の屈曲弱い。	外面 口縁～頸部はハケメ後、8本単位の2連止め一簾状文後、上下に波状文後、口辺部と胴部にヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周 外面部分的に炭化物付着。
630 K-7 D溝	甕	口 14.4	口辺部は長く直状に伸びめだたない。折り返し口縁を持つ。	外面 頸部7本単位の2連止め一簾状文の後、口辺～頸部には7本単位の4段の波状文を、胴上部に波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 褐灰色	頸部より上ほぼ全周
631 N-10 D・E溝	甕	胴 9.7 底 6.7	胴上位で膨らみ底部は安定している。器壁は厚い。	外面 頸部に10本単位の2連止め一簾状文後、胴上部に7本単位の波状文。胴中部以下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 暗褐色	頸部～底部
632 N-9 D溝	台付甕	口 7.2 胴 8.0	口辺部は直立し、端部でやや内湾する。胴は上位で膨らむ。	外面 頸部に12本単位の2連止め一簾状文後、口辺部と胴上部に波状文。胴中部以下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	口縁～胴下位全周 歪みが目立つ。
633 E-7 D溝床	台付甕	口 9.4 胴 9.2	口辺部は外反する。頸部の屈曲は弱く胴下位に最大径を持つ。	外面 口辺部はナデの後、10本単位の一波状文の後、8個の刺突を持つ円形貼付文。頸部から胴部は2連止め一簾状文の後、波状文。8個の刺突を持つ円形文を貼付している。 内面 指ナデ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周 外面に煤付着。
634 L-7 D溝 上層	台付甕	口 13.2 胴 15.0	口辺部は外反気味に伸び口縁でやや内湾する。頸部でやや強くくびれ、胴は強く張る。器壁は厚い。	外面 口辺部は2段の波状文、頸部は12本単位の2連止め簾状文、胴上部に2段の波状文、胴中部と口辺部に所々ハケメあり。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
635 F-7 D溝床	高坏	口 16.0	口縁部は小さく内湾する。	外面 ヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 赤褐色	坏部 内外面共に丹塗り。
636 L-8 C・D溝	壺	口 25.6	口辺部は緩く外反し、折返し口縁を持つ。	外面 口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。口縁部は波状文後、先端が極く細かい鋸歯状のヘラによる刻み。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周
637 N-9 C・D溝	甕	口 17.6	口辺部は長く直状に伸び、頸部で強く屈曲する。	外面 口縁端部は不均一の刻み目、口辺～胴上部はハケメ後、頸部は7本単位の等間隔止め一簾状文。刺突が深い箇所では櫛状具の先が管状であることが明瞭。 内面 口縁部はヨコナデ、以下ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黄灰色	口縁～胴上位 $\frac{1}{3}$ 周 外面に煤付着。
638 L-9 C・D溝	甕	口 20.2	口辺部は短かく外反する。頸部でやや強くくびれるが胴部は張り出さない。	外面 口辺部はヨコナデ後、口縁端部に無節縄文、頸部は6本単位の横線文後、6本単位の櫛描羽状文上→下へ3段以上。 内面 ヘラミガキで所々に指オサエ痕あり。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴中位 $\frac{1}{3}$ 周 外面に煤付着。
639 O-11 C・D溝	甕	口 18.2	口辺部は外反気味に伸び、口縁部は短かく内湾する。器壁の厚さが不均一で凹凸が目立つ。	外面 頸部付近はハケメ後、9本単位の2連止め一簾状文後、下に8本単位の上→下へ2段の波状文、口辺部はヨコナデ後、端部に波状文。胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、以下はヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 やや堅緻 黄灰色	口縁～胴中位 $\frac{1}{3}$ 周強 内外面部分的に煤付着。
640 N-9 C・D溝	甕	口 14.3	口辺部はわずかに外反しながら伸び、口縁部は短かく内湾する。	外面 口辺～頸部は浅いハケメ後、口縁部に波状文1段、頸部は等間隔止め一簾状文。 内面 ヨコナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周
641 N-11 C・D溝	台付甕	胴 7.4	口辺部は短かく外反する。頸部のくびれは弱い。胴部は上位が膨れる。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 体部はハケメ後、ヘラミガキ。脚部ヘラアテ痕あり。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁部と脚部欠損
642 L-8 C・D溝	片口	底高 6.8 7.5	体部は内湾し、平底。	外面 ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、体中部はハケメ、底部付近は指ナデ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	片口部欠損 $\frac{1}{3}$ 周
643 Q-12 C溝 O-12 B溝	壺	胴 27.4	頸部で強くくびれ肩が張らず除々に膨らみ、最大径を胴下位に持つ。	外面 頸部付近に、ハケメ、ナデ後、4本の沈線に画された3段のヘラ描の細い沈線羽状文後、胴部に丹念なヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、頸部～胴上部はナデ、胴中部は8本単位のハケメ。下位はナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	口辺～胴下位 胴下部に煤付着。
644 Q-12 C溝	壺	口 19.0	口辺部は長く外反し、口は受け口状となる。	外面 頸部はハケメ後、5本単位の等間隔止め一簾状文、口縁部はハケメ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒を多量に混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周 内面剥離激しい。
645 N-10 C溝	壺	口 11.0	頸部で強く屈曲し、口辺部は直状に伸び、口縁部は短かく内湾する。	外面 全体にハケメ後、口辺部はヨコナデ。口縁部は波状文、頸部は10本単位の2連止め一簾状文後、胴上部波状文。 内面 口縁部はヨコナデ、口辺～胴上部はヘラナデ、胴上部に指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 浅黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周弱 内外面に煤付着。

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
646 Q-12 C溝	壺	口 15.0	口辺部はやや外反しながら伸びる。器壁はやや厚い。	外面 口辺部はヨコナデ、頸部は8本単位の横線のT字文。胴部ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ。胴部はナデでハケメ痕あり。	砂粒混入 極めて堅緻 灰白色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
647 N-10 C溝	壺	胴 33.0	胴部やや下位で強く屈曲している。この箇所接合がある。	外面 頸部は10本単位の等間隔止め簾状文。胴上部は9本単位の一波状文を2段、その下に一条の沈線を巡らす。胴部はハケメ。 内面 ハケメ。	砂粒を多量に混入 堅緻 にぶい黄橙色	頸部～胴下位
648 O-11 C溝	壺			外面 胴下部はハケメ。 内面 胴下部はハケメ。最下部はナデ。	砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄褐色	胴中位～下位 内面剝離激しい。
649 H-7 C溝	壺	胴 14.8	下膨れの胴を持つやや細長い器形。接合痕が明瞭。	外面 頸部は等間隔止め簾状文、その下に波状文。胴部はヘラナデ、所々にハケメ痕あり。 内面 上部は指ナデ、中位より下はヘラナデ、整形が雑で凹凸が目立つ。	細砂粒混入 やや堅緻 明褐色	頸部～胴下位 外面の荒れ激しい。
650 Q-12 C溝	罎	胴 12.3 底 3.5	胴部は扁球形。底部は上げ底。胴上位の接合痕明瞭。	外面 胴部はハケメ後、ナデ。底部はナデ。 内面 ハケメ後、ナデ。胴上位に指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口辺部欠損
651 M-8 C溝	壺	口 16.4	口辺部は直状に伸び、口縁部で内湾する。頸部は強くくびれる。	外面 口辺部はハケメ後、ナデ。頸部に7本単位の等間隔止め一簾状文後、胴上部に7本単位の一波状文を2段、下にヘラミガキ。 内面 口辺部は赤色丹彩。胴部はハケメ後、ヘラミガキと指オサエ痕。	砂粒混入 堅緻 灰黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
652 K-7 C溝下層	壺		頸部は緩くくびれる。	外面 5本単位の等間隔止め簾状文の上に、波状文一段、下に2段の波状文、懸垂波状文。 内面 ヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 灰白色	胴上位～頸部
653 N-10 C溝	壺	胴 19.4	口辺～頸部は長く外反気味に伸びる。頸部で強く屈曲し、胴部は球状。	外面 頸部は9本単位の2連止め一簾状文、胴上部は4段の波状文、口辺～頸部はヘラミガキで部分的にハケメあり。胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 褐色	口辺～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周強 外面に黒斑あり。
654 N-11 C溝	壺		頸部径は比較的大きく、器体は壺に近い形になる。	外面 頸部付近はハケメ後、2連止め一簾状文。8本単位の上→下へ3段の波状文の後、丹塗り、ヘラミガキ。 内面 頸部はハケメ後、丹塗り、ナデ。胴部は指ナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい橙色	頸部～胴中位 内面の整形粗い
655 G-7 C溝	壺			外面 頸部付近は、ハケメ、ヘラナデ後、10本単位の2連止め一簾状文の後、波状文。 内面 口辺部はヘラミガキ。頸部より下は、ヘラナデで指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	頸部付近
656 N-10 2B溝 L-8 C溝	壺	口 20.6	口辺部は長く緩く外反し、折り返し口縁は強い稜線を作って角ばる。	外面 ハケメ後、2連止め一簾状文の後、丹塗り、ヘラミガキ。口縁部は2段のヘラ状具による刻み、ヘラ先は極く細かい刻目状。 内面 丹塗り後、ヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 やや堅緻 灰褐色	口縁～頸部全周
657 P-12 C溝	甕	口 15.0	頸部は緩くくびれる。器壁は厚い。	外面 口辺部はヨコナデ。頸部は6本単位の等間隔止め簾状文の下に波状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 外面に煤付着。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
658 M-8 C溝	甕	口 19.6	口辺部は直状に伸び、口縁部でわずかに内湾する。頸部はやや強く屈曲する。	外面 全面にハケメ後、口縁部はヨコナデ。胴部は9本単位の波状文上→下へ5段。 内面 口縁～胴上部はハケメ。胴中部はナデ。	小石混入 やや堅緻 黒褐色	口縁～胴中位 $\frac{3}{4}$ 周 外面部分的に炭化物付着。
659 H-7 C溝	甕	口 17.8 胴 19.6	口辺部はやや外反気味に伸び、口縁部は鋭く内折する。頸部はやや強くくびれる。	外面 口辺部はハケメ。頸部以下はハケメ後、口辺部は横方向のナデ。口縁部は波状文。頸部に8本単位の2連止め←簾状文後、胴上位に波状文。胴中部はヘラミガキ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～胴中位全周 内外面、及び口縁部に煤付着。
660 P-11 C溝	甕	口 15.1 胴 16.8 底 7.2 高 20.2	口辺部は直状に伸び、口縁部は小さく内湾し、端部は尖る。	外面 口辺部はハケメ後、ヨコナデ。口縁部に波状文。頸～胴中部にハケメ後、頸部に12本単位の2連止め←簾状文後、胴上部に←波状文を3段後、胴中部～下部にヘラミガキ。底部はヘラケズリ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部は全体にハケメ後、胴中部～下部にヘラミガキ。底面はナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 周
661 O-11 C溝	甕	口 19.4	口辺部は長く直状に伸び、口縁部は短かく強く内湾し、端部は尖る。	外面 頸部に9本単位の2連止め←簾状文の後、口縁部に波状文、口辺～頸部に9本単位の上→下へ3段の波状文。胴上位は9本単位の上→下へ3段の波状文後、胴中部にハケメ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 暗赤灰色	口縁～胴中位 $\frac{3}{4}$ 周 外面に炭化物付着。
662 N-10 C溝	甕	口 18.4	口辺部は外反気味に伸び、口縁部はやや内湾する。	外面 口辺部はハケメ後、口縁部付近はヨコナデ。頸部には簾状文あり。 内面 粗いヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～頸部 $\frac{3}{4}$ 周 外面に煤付着。
663 N-10 C溝	甕	口 14.4	口辺部はやや外反気味、頸部のくびれは緩く胴は張らない。	外面 頸部に10本単位、5又は6連止め←簾状文の後、口辺部は9本単位の波状文を下→上へ3段、胴部は2段以上の波状文。 内面 ヘラミガキ。	1～2mmの小石混入 やや堅緻 灰褐色	口縁～胴上位 $\frac{3}{4}$ 周
664 M-10 C溝	甕	胴 25.4	長い胴は中位に最大径を持つ。	外面 頸部に12本単位の3連止め←簾状文後口辺～頸部は波状文を下→上へ2段以上、胴上部は波状文を上→下へ4段後、胴中部～下部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒色	頸部～胴下位 内外面に煤付着。
665 N-10 C溝	甕	口 14.4	口辺部は長く外反する。頸部は緩く括れる。頸部付近の器壁は薄い。	外面 全体にハケメ後、頸部に12本単位の2～4連止め←簾状文。口辺部は12本単位の波状文を下→上へ3段、胴上部は2段。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
666 K-7 下層	甕	口 20.8	頸部は強くくびれ口辺部は外反気味に伸びる。口縁部は三角形の折り返し口縁。	外面 口縁折り返し部はヨコナデ、口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。頸部は2連止め←簾状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～頸部 $\frac{3}{4}$ 周
667 C溝	甕	口 20.6	口辺部は外反気味に伸び、口縁部は幅広い折り返し状となる。	外面 口縁折り返し部はヨコナデ後、ヘラ刻み、口辺～頸部は4段の波状文。	細砂粒混入 堅緻 灰黒色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 周強
668 F-7 C溝 下層	甕	口 20.6	口辺部は長く外反しながら伸び、口縁部で折り返される。	外面 頸部に9本単位の3連止め←簾状文後口辺～頸部は波状文を下→上へ4段。折り返し部は1段。胴上部は上→下へ2段以上。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒色	口縁～胴上位 $\frac{3}{4}$ 周

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
669 N-10 C溝	甕	胴 19.8	胴部は球状に膨らむ。	外面 頸部2連止め←簾状文、以下に波状文2段、頸部～胴部は全体的にハケメ後、ヘラミガキ。 内面 全体的にヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒色	頸部～底部
670 P-12 C溝	小型甕	口 9.0 胴 9.7 底 6.2 高 9.1	口縁部は場所により外反あるいは内湾する。器体は歪み、器壁は厚い。	外面 口辺端部に刻み、頸部は3本単位の等間隔止め簾状文、肩部は3本単位の波状文。肩部より下は指ナデ、口辺部に指オサエ痕あり。 内面 指ナデ、丹が附着。	細砂粒混入 やや軟弱 褐灰色	完形 口縁部に穿孔あり。
671 O-10 C溝	小型甕	口 8.3 底 5.5 胴 8.9 高 11.9	頸部は屈曲が弱く、胴部は緩く膨らんでなだらかに底部に移る。接合痕が明瞭でやや雑な作り。	外面 折り返し部から胴上部は重なり合う不規則な波状文。胴部はヘラミガキ。底部は不定方向のヘラミガキ。 内面 口縁～胴上部はヘラミガキ。胴上部～胴下部はハケメ、底面はナデ。	1～2mmの小石混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	完形
672 M-6、9 C溝	台付甕	口 11.8 胴 12.0	頸部強くくびれ、胴部は中位で強く膨らむ。	外面 口辺～胴上部はハケメ、胴下部はハケメ。口縁部はヨコナデ。頸部に12本単位の多連止め←簾状文後、口辺部と胴上部に12本単位の波状文。胴中部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 極めて堅緻 にぶい黄褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周
673 L-8 C溝	甕	口 15.6	口辺部はやや外反する。頸部でやや強くくびれる。口辺部の器壁は薄い。	外面 頸部に9本単位の3連止め←簾状文の後、胴上部は波状文を上→下へ2段、口辺部はハケメ後ナデ、口縁部はヨコナデ後、口縁部と胴上部に円形貼付文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{3}$ 周強 内外面部分的に煤附着。
674 O-11 C溝	台付甕	口 10.8	口縁部は短く鋭く内湾し、端部は尖る。	外面 口縁～頸部にヨコナデ後、頸部に8本単位の等間隔止め←簾状文後、口縁部と胴上位に8本単位の波状文後、胴中部はヘラミガキ。下部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	脚部欠損 内外面部分的に丹附着
675 G-7 C溝	小型甕	口 8.6 胴 9.0 底 5.5 高 8.0	口辺部は短く外反する。器壁は厚い。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ後、ヘラミガキ。胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄褐色	ほぼ完形
676 N-11 C溝	鉢	口 13.0 底 4.0 高 7.1	体部は直状に伸びる。底部は上げ底。	外面 口辺部は、ヘラミガキ。体部はヘラミガキ。底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 不定方向のヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄褐色	$\frac{3}{4}$ 周 外面に黒斑あり。
677 H-7 C溝	高坏	口 17.1 高 14.7	口縁部は小さく内湾する。脚部は弱く外反する。	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はハケメ後、ナデ。	砂粒混入 堅緻 赤色	完形 脚部内面以外は丹彩。
678 F-7 C溝	小型鉢	口 7.0 底 3.9 高 3.5	口辺部はわずかに内湾する。	外面 体部はヘラミガキ。底部は一定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	$\frac{3}{4}$ 周 内面底部に赤色丹彩あり。
679 M-8 C溝	小型鉢	口 5.9 底 3.0 高 4.4	歪んだ器形である。輪積み成形。	外面 ヘラミガキ、底面はヘラケズリ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	完形 底部を除き赤色丹彩。
680 L-8 2B溝	壺	口 19.6	口辺部は長く外反気味に伸び、口縁部で受け口状を呈す。	外面 口辺部は、ハケメ後、口縁部は横方向のナデとヨコナデの後、波状文。頸部はハケメ後、10本単位の等間隔止め←簾状文の下に波状文。 内面 口縁部はヨコナデ。口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。頸部はナデ後、ヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
681 CP直下 2B溝	壺	口 14.0	頸部は強くくびれる。器壁は厚い。	外面 ハケメ後、口縁部はヨコナデ。頸部はヘラナデ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	口縁～頸部全周
682 N-10 2B溝	壺		頸部はやや強く屈曲し、胴上部は直状に広がる。	外面 ハケメ後、頸部は9本単位の2連止め←簾状文が上→下へ2段。胴部は波状文が4段。 内面 口辺～頸部はナデで、一部ヘラミガキ。頸部はヘラミガキ。胴部はハケメで指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	頸～胴上位
683 M-9 2B溝 M-8 C溝	壺	口 24.8	口辺部は長く外反気味に伸び、2段の折り返し口縁を持つ。	外面 折り返し口縁は、先端が刻み状のヘラによる2段の刻み目。口辺～頸部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
684 M-9 2B溝	壺	胴 44.2	器体は大きく、胴中位に最大径を持つ。	外面 胴上部に10本単位の←波状文を2段以上、円形貼付文を付した後、胴下部までヘラミガキ。 内面 横方向のヘラナデで、ヘラアテ痕、指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 浅黄色	胴部
685 M-10 2B溝	壺	底 14.8		外面 胴下部はヘラミガキ。底部は不定方向のヘラミガキ。 内面 胴下部は幅の狭いハケメ。底部はナデ。	2～3mmの小石 混入 堅緻 淡赤橙色	胴下位～底部 $\frac{1}{2}$ 周
686 N-8 2B溝	甕	口 17.0	口辺部は外反気味に立ち上がる。	外面 口縁端部は櫛描直線文、口辺部はヨコナデ。頸部は8本以上の多連止め→簾状文。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石 混入 堅緻 褐灰色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 内外面に煤付着 内面やや剥離している。
687 K-7 2B溝 中層	小型甕	口 7.8 胴 10.8 底 4.8	口辺部はやや外反気味で短かい。頸部でやや強く屈曲し、最大径を胴中位やや下に持つ。器壁は薄い。	外面 頸部はハケメ後、10本単位の2連止め簾状文。口縁部はヨコナデ。胴部はヘラミガキ。底部は一定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ、ハケメ痕あり。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	$\frac{1}{2}$ 周弱
688 M-9 2B溝	甕	口 12.4 胴 12.4	口辺部は直状に伸び、口縁部でわずかに内湾する。頸部はやや強く屈曲し、胴部はやや長い。	外面 口辺部はハケメ後、頸部に7本単位の等間隔止め←簾状文後、口辺部には波状文2段。胴部には波状文3段後、ヘラミガキ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 黒褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周 外面部分的に 炭化物付着。
689 H-7 2B溝 下層	甕	口 16.4	口辺部は直状に伸び、口縁部はやや内湾する。	外面 ハケメ後、口縁部は波状文。頸部は10本単位の2連止め←簾状文と、不規則な波状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄褐色	口縁～肩部 $\frac{1}{2}$ 周 外面に煤付着。
690 L-9 2B溝 下層	甕	口 10.8	口辺部は直状に伸び、口縁部はわずかに内湾する。	外面 口辺部にハケメ。口縁部にヨコナデ後、頸部は止めが1つの5本単位以上の簾状文。口辺部は5本単位の波状文を下→上へ3段。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石 混入 やや堅緻 黄灰色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周
691 M-9 2B溝	甕	口 19.6	口辺部は長く外反しながら伸び、口縁部で厚く折り返される。	外面 折り返し部はヨコナデ後、重なり合う波状文。頸部に12本単位の3連止め←簾状文後、口辺～頸部は10本単位の重なり合う波状文。 内面 ヘラミガキ。	3～4mmの小石 混入 堅緻 黒褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周 強 外面に煤付着。

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
692 L-8 2 B溝	甕	口 14.8		外面 口辺～頸部はハケメ後、頸部に8本単位の2連止め←簾状文後、胴上部は4本単位の波状文3段以上。口辺部はヘラミガキ。折り返し部はヨコナデ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	5mm程の小石混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周 外面部分的に煤付着。
693 M-13 2 B溝	甕	口 13.6	口辺部は長く外反気味に伸び、折り返し口縁を持つ器壁は薄く、均一。	外面 全体にハケメ後、頸部に11本単位の2連止め←簾状文後、折り返し部と胴部に波状文。口辺上部は横ヘラミガキで、上部より下は縦ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周弱
694 M-9 2 B溝	台付甕	口 12.8	口辺部は直状に伸びる。頸部で弱くくびれ、胴部は中位が膨らむ。	外面 口辺～頸部にハケメ後、口縁部はヨコナデ後、波状文。頸部に11本単位の2連止め←簾状文後、胴上部に波状文。胴中部と口辺部にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 極めて堅緻 にぶい黄褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{3}$ 周
695 H-6 2 B溝	台付甕	口 10.9 胴 11.2	口辺部は短かく直状に伸びる。頸部でやや強く屈曲し、肩部は強く張る。	外面 口縁～頸部にヨコナデ後、頸部に9本単位の多連止め←簾状文後、胴上部に波状文。以下はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ後、粗いヘラミガキ。胴上部～底部、脚部内面はヘラミガキ。胴上位に指オサエ痕あり。	2mm程の小石混入 堅緻 暗灰黄色	口縁～脚中位
696 C-7 2 B溝	台付甕		頸部のくびれは特に弱く、胴部は膨らまない。	外面 7本単位の重なり合う波状文。胴下部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	頸部～脚上位 外面はやや荒れている。
697 L-7 2 B溝 中層	台付甕	口 12.3 胴 14.0	口辺部は直状に伸びる。頸部で強く屈曲し、胴部は中位で強く膨れる。	外面 全体にハケメ後、頸部は10本単位の2連止め←簾状文後、胴上部に波状文。口辺部はナデ。 内面 ヘラミガキで指オサエ痕あり。	2～3mmの小石を少量混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周弱
698 M-8 C溝 N-9 2 B溝 上層	甕	口 13.2 胴 13.7	口辺部は外反しながら伸び、頸部は緩くくびれる。	外面 頸部に9本単位の3連止め←簾状文後、口辺部は5本単位の波状文2段。胴上部は波状文を上→下へ2段の後、胴中部にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや堅緻 暗赤褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{3}$ 周強
699 N-9 2 B溝	台付甕	口 7.4 胴 7.9 高 10.2	口辺部はやや外反する。頸部の屈曲は弱い。成形が粗雑。	外面 ナデの後、10本単位の2連止め←簾状文と、口縁部と胴部に円形貼付文を推定8個付けた後、ヘラミガキ。 内面 胴部はナデの後、ヘラミガキ。脚部は指ナデの後、脚端部を面取り、ヘラミガキを施している。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	$\frac{1}{3}$ 周強
700 O-10 2 B溝	高 坏	口 15.6 胴 15.6	口辺部は著しく外反する。肩部は強く張る。	外面 ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	坏部 $\frac{1}{3}$ 周 外面と内面の口辺部に赤色丹彩。
701 N-11 2 B溝	鉢	口 12.8 底 4.4 高 5.3	体部は直状に伸びる。底部はわずかに上げ底気味。	外面 体部はヘラミガキ。底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰色	$\frac{1}{3}$ 周 内外面部分的に煤付着。
702 E-8 B・2 B溝	鉢	口 14.3 底 4.8 高 5.4	体部は緩く内湾する。	外面 体部はヘラミガキ。底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 体部はヘラミガキ。底面付近は縦ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	$\frac{1}{3}$ 周 外面に黒斑あり。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
703 E-8 B・2B 溝 上層	鉢	口 12.6 底 4.2 高 6.1	体部はわずかに内湾する。器形はやや歪んでいる。	外面 やや粗雑は不定方向のヘラミガキ。 内面 やや粗雑な不定方向のヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 堅緻 にぶい黄褐色	3/4周 内外面に黒斑あり。
704 L-8、9 H-7 2B溝	鉢	口 14.0 底 3.4 高 6.5	体部はわずかに内湾する。体部に隆起帯を巡らす。底部は上げ底。	外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 丁寧なヘラミガキ。	細砂粒混入 極めて堅緻 浅黄色	1/2周強 内外面赤色丹彩。
705 I-7 2B溝 上層	鉢	口 8.3 底 2.9 高 5.3	体部はほぼ直状に伸びる。	外面 ヘラミガキ。底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 不定方向のヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	1/2周
706 I-8 2B溝 下層	鉢	口 14.6 底 5.4 高 7.2	体部はやや内湾する。	外面 ハケメ後、不定方向のヘラミガキ。底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	1/4周弱 外面口辺部に煤付着。
707 N-9 2B溝	鉢	口 10.5 底 5.2 高 5.2	体部はわずかに外反しながら伸びる。	外面 体部はヘラミガキ、底面は不定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 極めて堅緻 にぶい黄褐色	3/4周
708 P-12、13 B・2B 溝	埴	口 7.6 胴 9.0	口縁部は小さく強く外反し、端部は尖る。体部は丸く膨らむ。	外面 胴部はハケメ、口辺部はヨコナデ後ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部はナデ、胴部はナデ後、幅の狭いヘラミガキ後、ヘラアテ擦痕あり。	細砂粒混入 極めて堅緻 赤褐色	口縁～胴下位1/4周
709 F-7 2B溝 上層	甕	口 16.7 胴 19.5 底 5.9 高 19.1	頸部はくの字状を呈す。胴中に最大径を持つ。	外面 口辺部はヨコナデ、胴部はヘラミガキだが、雑で粘土溜り残る。底面はヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ、胴上部はナデ。胴中部はヘラミガキで指オサエ痕あり。胴下部はヘラミガキ。	砂粒混入 やや堅緻 にぶい橙色	ほぼ完形 外面胴中部に煤付着。
710 E-8 B・2B 溝 上層	高坏	口 20.0	坏部は下位に稜を持つ。口縁端部は角ばり、面を作っている。脚中に3孔あり。	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ、脚部はしほり目痕とハケメ後、ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 黒褐色	口縁～脚中位1/4周
711 L-7 B溝 上層	甕	口 21.0	口辺部は長く外反気味に伸びる。頸部はやや強く屈曲する。	外面 口辺部は4本単位の重なり合う波状文。頸部は9本単位の2連止め簾状文。胴部は4本単位の重なり合う波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黄褐色	口縁～胴上位1/2周弱
712 K-8 B溝	甕	口 18.4 胴 20.4	口辺部はやや内湾し肩部が張り出している。	外面 頸部に9本単位の等間隔止め→簾状文後、肩部に波状文後、胴部にヘラミガキ。口辺部はヨコナデ。 内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ。胴部はヘラミガキ。	1～2mmの小石を多量に混入 堅緻 灰黄色	口縁～胴下位1/4周 内外面部分的に煤付着。
713 K-8 B溝	台付甕	口 14.2 胴 15.9	頸部～口辺部緩く外反し胴部は上位で膨らむ。	外面 口縁折返し部波状文。頸部にかけて波状文を各1段、頸部に2連止め←簾状文。肩部に波状文1段、胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒色	口縁～胴中位1/2周
714 K-8 B溝	埴	底 3.6 胴 12.3	扁平な球形胴を持つ。底部は平底。	外面 体上部はハケメ後、ヘラミガキ。体下部～底部はヘラミガキ後、ヘラミガキ。 内面 体上部はナデで指オサエ痕あり。体下部～底部はハケメ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい赤褐色	頸部以上欠損

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
715 H-6 B溝 中層	甕	口 12.2 胴 17.4 高 17.1	口辺部はくの字状を呈す。胴部は中位が膨らみ底部は丸底。胴部下位、内面の接合痕明瞭。	外面 口辺部はヨコナデ、頸～胴中部はハケメ。胴中部～底部はヘラケズリ、一部ハケメ。 内面 口辺部はヨコナデでハケメ痕あり。胴上部～中部は指ナデで、上位に指オサエ痕あり。胴下部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 淡黄色	完形 外面口辺部と胴中部に煤付着。
716 H-6 B溝 中層	壺	口 15.6 胴 28.0	口辺部はやや外反気味に広がる。頸部は強く屈曲し球形の胴を持つ。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 淡赤橙色	3/4周 底部欠損
717 B溝 下層	埴	胴 14.5 底 3.3	頸部でくの字状に屈曲し、胴部は下膨れで、下位接合部に弱い段を作る。	外面 全体にヘラミガキ。頸部に先端が丸い工具による刺突あり。 内面 頸部はヘラミガキ。胴上部は指ナデ、下部はヘラナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい橙色	頸～底部
718 B溝	壺	口 13.2 胴 27.1 底 6.9 高 30.2	口辺部は外反気味に伸び、口縁部で折り返される。頸部は強く屈曲し球形の胴部を持つ。頸部屈曲部に、断面三角形に貼り付突帯を巡らす。胴下部に接合痕目立つ。	外面 口辺部にハケメ後、口縁部を折り返し。頸部に凸帯を巡らし、折返し部はハケメ後、ヘラミガキ。頸部はハケメ。胴上部はハケメ後ヘラミガキ。下部はヘラケズリ後、ヘラミガキ。胴下部はハケメ。底部はナデ。 内面 口辺部はハケメ。胴上部はヘラミガキ。胴下部～底部はハケメ。底部付近はハケメ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	1/4周
719 H-6 B溝 上層	壺	口 14.0	口縁部は鋭い稜を作って角ばり、端部に平坦面を作る。	外面 口辺部はハケメ後、ヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ後、ヘラミガキ。胴上部はハケメと指ナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～胴上位1/4周
720 O-12 B溝	甕	口 14.2	頸部はくの字状に屈曲し、胴部は丸く膨らむ。	外面 口縁～頸部、胴中部にハケメ後、口辺部にヨコナデ。 内面 口辺部はハケメ後、ヨコナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～胴中位1/4周
721 O-12 B溝 下層	甕	口 14.0	頸部はくの字状に屈曲し、胴部は丸く膨らむ。	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデ。 内面 口縁部はヨコナデ。胴部はナデで上位に指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 明黄褐色	口縁～胴中位1/4周 外面に煤付着。
722 O-12 B溝	甕	口 19.2	頸部はくの字状に屈曲する。頸部内側の接合痕明瞭。	外面 口辺～胴部は粗いハケメ。 内面 口辺部は粗いハケメ。胴部は細かいハケメ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴上位1/4周
723 O-12 B溝	甕	口 13.6	頸部はくの字状に屈曲する。	外面 口辺～胴上部はハケメ。口辺部はヨコナデ。 内面 口辺部はハケメ、肩部はヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 黒色	口縁～胴上位1/4周弱 表面剥離著しい。
724 H-6 B溝 中層	S字状 口縁甕	口 9.5	口縁部の屈曲は比較的ゆるい。	外面 口辺部はヨコナデ。肩部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ、肩部はヘラナデ、指オサエ痕が巡る。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴上位1/4周
725 I-6 B溝	台付甕	胴 14.5 脚 9.0	胴下位接合部は弱い段を作り、内面接合痕明瞭。	外面 ヘラナデ。 内面 胴中部は外面同様のヘラナデ。胴下部は幅の狭いヘラナデ。脚部は指ナデ。	砂粒混入 やや堅緻 浅黄褐色	胴上部欠損

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
726 E-7 B溝 中層	S字状 口縁 台付甕	口 12.0 胴 14.5	S字状口縁部は上半が直立気味。頸部屈曲は比較的緩い。胴部は最大径がやや上に位置し、大きく膨らむ。	外面 胴上部は幅広のハケメ。胴中部～胴下部はハケメ後、肩部に横ハケメ後、口縁～頸部はヨコナデ。 内面 ハケメ後、口辺部はヨコナデ、頸部はハケメ。胴上部はナデと指オサエ。底部はナデ。脚部はナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～脚上位 外面に煤付着。
727 K-8 A・B溝	埴	口 7.2 胴 6.1 底 2.0 高 7.0	口辺部はやや内湾気味。底部はやや上げ底。	外面 口縁部と頸部、胴部はヘラミガキ。 内面 口辺部は縦ヘラミガキ。胴部は横ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	1/4周
728 G-6 B溝	鉢	口 11.0 底 6.0 高 3.8	口辺部はやや内湾気味。底部は上げ底。	外面 体部はハケメ後、口辺部にヨコナデ。底部はナデ。 内面 口縁～体部はヨコナデ。底面はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	完形
729 D-6 B溝	鉢	口 13.8 底 4.5 高 6.0	体部はわずかに内湾する。平底。	外面 体部はヘラミガキ。底面はヘラケズリ後、ナデ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 淡白色	1/4周 内外面はやや荒れている。赤色丹彩あり。
730 P-12 B溝	高 坏	口 16.2 胴 15.5	口辺部は強く外反する。頸部で強く括れ、上位のやや下で胴は膨れる。	外面 口縁端部にヘラ刻み。口縁部より下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 赤色	口縁～胴下位1/4周 内外面に赤色丹彩 内面は荒れている。
731 O-12 B溝	高 坏	口 13.4	坏部は内湾する。脚部は中膨れ状を呈す。脚下位に4孔あり。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 堅緻 明赤灰色	口縁～脚下位1/4周
732 G-6 B溝	高 坏	口 21.0	坏下部に稜を持つ。脚部に円孔3個。	外面 坏上部はヘラミガキ。坏下部は棒状具によるミガキ。脚部はヘラミガキ。 内面 坏部は棒状具によるミガキ。脚部はナデ。	1～2mmの小石混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	口縁～脚上位1/4周
733 O-12 B溝	器 台	口 8.1	器受部は直状。上下貫通孔あり。脚中位に推定3孔あり。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 器受部はヘラミガキ。脚上部はヘラケズリ。脚中部より下はハケメ後、ナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～脚中位
734 O-12 B溝	器 台	口 8.2	器受部は内湾する。脚中位に3孔あり。	外面 ヘラミガキ。 内面 器受部はヘラミガキ。脚上部はヘラケズリ。脚中部はヘラケズリ後、ナデ。	3～4mmの小石混入 堅緻 橙色	口縁～脚中位
735 K,L-8,9 A溝 中下層	甕	口 21.0	口縁～頸部は長く外反し、やや歪んでいる。2段口縁部を作る。	外面 口縁部はヘラ刻みを持つ2段の折り返し。頸部付近は11本単位の3連止め+簾状文後、波状文の後、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部
736 K,L-8,9 A溝	甕	口 14.5	幅広の折り返し口縁部を持つ。接合痕明瞭。	外面 緻密なヘラミガキ。器面は滑沢。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 オリーブ黒色	口縁～胴上位1/4周
737 K-9 A溝 下層	甕	口 20.4	口辺部は外反気味に伸び、折り返し口縁部を持つ。頸部は強く屈曲する。	外面 頸部に10本単位の5～7連止め+簾状文後、口縁～頸部に6本単位の下→上へ5段の波状文。胴上部は6本単位の2段の波状文後、その下にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黄灰色	口縁～胴上位1/4周 周強

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
738 K,L-8,9 A溝 中下層 M-10 B溝	壺	口 13.5	口辺部は外反気味に伸びる。頸部接合痕明瞭。	外面 口辺～頸部はハケメ後、口辺部はヨコナデ。胴上部はハケメ後、ナデ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周
739 K,L-8,9 A溝下層	壺	口 11.8 胴 13.4	口辺部中位に2孔を穿つ。焼成前に穿孔。	外面 丁寧なヘラミガキ。器面滑沢。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 極めて堅緻 にぶい黄橙色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周弱 内面口辺部と外面に赤色丹彩。
740 A溝	片口	底 6.0	体部上位に最大径を持つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 口縁～胴上部はナデ。体下部～底部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁部、片口部欠損 $\frac{1}{2}$ 周
741 I-6 A溝 上層	甕	口 17.3	口縁部は鋭い稜線を作って角ばり、端部に平坦面を持つ。	外面 ヘラナデ。粗く塗りつけた感じ。 内面 ヘラナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 明褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$ 周強
742 K-9 A溝 中層	甕	口 19.0 胴 30.8	口辺部は短かく直状に伸びる。胴部は大きく膨れる。	外面 胴上部はハケメ。胴下部はハケメ。 口辺上部はヨコナデ。下部はナデ。 内面 口辺部はハケメ。胴部はヘラナデ。	2～3mmの小石混入 やや堅緻 灰褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{2}$ 周弱
743 K,L-8,9 A溝 下層	S字状 口縁甕	口 14.8	頸部の屈曲は強く、口縁部上位が長く外反する。	外面 頸部屈曲部はヘラ状具による沈線を巡らす。 内面 頸部内側はヘラナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周強
744 J-7 A溝	器台	脚 10.6	脚部には8孔あり。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。器受部～脚部に貫通孔。 内面 脚上位にハケメ。脚中部にヘラアテ痕とハケメ。下部にヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	脚部貫通孔径8mm
745 H-5 A溝 中層	埴	口 9.5 胴 8.8 底 1.8 高 7.4	口辺部は短かくわずかに内湾する。頸部は強く屈曲し、胴上部が膨らむ。	外面 口辺部は横方向のナデ。胴部はヘラケズリ後、ヘラミガキ。底部は丁寧なヘラミガキ。 内面 口辺部は横方向のナデ後、粗いヘラミガキ。胴部は指ナデ。	1～2mm程の小石混入 やや堅緻 にぶい橙色	ほぼ完形
746 K,L-8,9 A溝 中層	鉢	口 7.8 底 4.2 高 4.8	成形は粗雑で歪んでいる。粘土積み上げ痕明瞭。	外面 ナデ。 内面 ナデ。	2～3mmの小石混入 堅緻 褐色	ほぼ完形 内面に丹付着。
747 I-6 A溝 上層	高坏	口 9.0 脚 5.8 高 6.8	成形が粗く、歪んでいる。粘土積み上げ痕明瞭。	外面 坏部はヘラケズリ後、口縁部はヨコナデ。以下はナデ。脚部はヘラケズリ後、ナデ。裾端部にヘラアテ痕あり。 内面 坏部は口縁部ヨコナデ、以下は指ナデ。指オサエ痕あり。脚部はヘラケズリ。	砂粒混入 やや軟弱 にぶい橙色	ほぼ完形
748 C-9 大溝北辺 土器群	壺	口 8.8 胴 11.5 高 11.8	口縁部は内湾する。胴部上位と下位の接合痕は明瞭。下位で緩い稜を作る。上げ底。	外面 口辺部はハケメ、ヨコナデ、ヘラミガキ。頸部は指オサエ痕が巡る。胴部はハケメ、ヘラミガキ。 内面 口辺部はヨコナデ、ヘラミガキ。底部は指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 灰白色	完形
749 大溝北辺 土器群	小型甕	口 13.5 胴 13.5	頸部はくの字状に屈曲する。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ。胴部はヘラナデ。	砂粒混入 やや堅緻 褐色	口縁部 $\frac{1}{2}$ 周 底部欠損

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
750 C-9 大溝北辺 土器群	甕	口 23.3	頸部は鋭くくの字状に屈曲する。頸部内側に鋭い稜を作る。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ。胴部はヘラナデ。	粗砂粒混入 やや堅緻 浅黄橙色	口縁～胴上部 $\frac{1}{3}$ 周 器面は荒れている。
751 大溝北辺 土器群	甕	口 25.0 胴 27.0	頸部内側に強い稜を作る。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ。胴部はヘラナデ。	2～3mmの小石混入 やや軟弱 にぶい橙色	口縁～胴上位
752 大溝北辺 土器群	高 坏	口 22.3 脚 15.4 高 14.8	坏部下位に段を見ない。脚部下部は内湾する。脚部4孔を穿つ。	外面 口辺部はヨコナデ。坏～脚部はヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ。脚部はハケメ、下部はヨコナデ。	砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～脚部 $\frac{1}{4}$ 周
753 大溝北辺 土器群	器 台	脚 11.2	上下貫通孔は著しく大きい。	外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラナデ。下部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	器受部欠損
754 C-9 大溝北辺 土器群	器 台	脚 4.1	脚下部はわずかに内湾する。脚上位に3孔、及び細長い貫通口を穿つ。	外面 ヘラミガキ。 内面 孔以上は指オサエ。中部はヘラナデ。下部はヨコナデ。	細砂粒小石混入 堅緻 浅黄橙色	器受部欠損
755 大溝北辺 土器群	器 台	器受10.6 脚 11.8 高 9.2	器受部端部には、やや丸味のある面を作る。脚部に4孔を穿つ。	外面 丁寧なヘラミガキ。ハケメ痕が、わずか見える。 内面 器受部は丁寧なヘラミガキ。脚部上部はハケメ。下部はヨコナデ。	砂粒混入 堅緻 淡褐色	完形
756 B-9 下層	壺	口 16.2	口縁部はやや内湾する。頸部は強く屈曲し、肩部は直状に大きく広がる。	外面 頸部は6条の横沈線が巡り、その間に3本単位の櫛描波状文。口縁部はヨコナデ、口辺部と胴上部は強くで付けた様子のヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴上部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 浅黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{3}$ 周
757 E-10	壺	口 14.2	口辺部は強く外反する。口縁部でわずかに内湾する。	外面 口縁～胴上部はハケメ後、頸部に3条の沈線を巡らす。 内面 ナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡黄色	口縁～胴上位 $\frac{1}{3}$ 周 器面は荒れが著しい。
758 Q-12 トレンチ	壺	口 10.7	頸部から口縁部は細長い。内面接合痕明瞭。	外面 ヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。頸部はヘラナデ。ハケメ痕わずかに見える。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
759	壺	口 20.3	口辺部はわずかに内湾する。	外面 口辺～頸部はハケメ後、ヨコナデ。頸部は2段の等間隔止め簾状文。 内面 口辺～頸部はハケメ。頸部はヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{2}$
760 C-8 下層	壺			外面 胴部にハケメとヘラナデ。頸部にヘラナデ後、10本単位の横線文上→下へ3段後、縦沈線を巡らした後、胴部にヘラミガキ。 内面 指ナデ、指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 浅黄橙色	頸部～胴上位 内面部分的に炭化物付着。
761 Q-12 トレンチ	壺	口 16.0	口辺部は長く、やや外反気味。口縁部は角ばる。	外面 口縁端部はヘラ刻み。口辺部はハケメ後、指ナデ。頸部は等間隔止め→簾状文。 内面 口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。頸部は指ナデで指オサエ痕あり。	砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～頸部 $\frac{1}{3}$ 周弱
762 D-8	壺	口 14.2	口辺部は外反しながら伸び、口縁部はわずかに内湾する。	外面 全体にナデ後、口縁部はヨコナデ、口辺中部～胴上部はヘラミガキ。 内面 全体にナデ後、口縁部はヨコナデ。頸部はヘラナデ。	3～4mmの小石混入 堅緻 橙色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
763 D-9 4 C層	壺		口辺部は長く外反する。	外面 口辺～頸部はヘラナデ。頸部は12本単位の等間隔止め←簾状文後、波状文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	頸部
764 B-7 上層 C-7 下層	壺			外面 全体にハケメ後、胴上部に7本単位以上の等間隔止め←簾状文。10本単位の←波状文を上→下へ2段後、ヘラ描鋸歯文後、ヘラミガキ。 内面 ハケメ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	胴上部 外面に赤色丹彩あり。 内面剝離激しい。
765 C-7 下層	壺	口 28.6	折り返し口縁はやや先端部が薄い。	外面 折り返し口縁部は6本単位の波状文後、端部にヘラ刻み。口辺部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口辺部 $\frac{1}{2}$ 周
766 C-7	壺		頸部内側に稜を作り、接合痕明瞭。	外面 ハケメの後、10本単位の3連止め→簾状文の後、上→下へ重なり合う波状文。口辺～頸部はヘラミガキ。 内面 ナデの後、口辺～頸部はヘラミガキ。	3～4mmの小石混入 堅緻 淡赤橙色	口辺～胴上位
767 C-7 下部砂層	壺	胴 22.1	最大径を胴下位に持つ。	外面 胴上部に10本単位の3段の波状文後、その下に5個の楕円形貼付文を付し、貼付文の上を通し、1本の沈線を巡らす。貼付文の周りはナデ、胴中部はヘラミガキ。 内面 胴上部はナデ、中部はハケメ。	1～2mmの小石混入 堅緻 灰褐色	胴部
768 C-6 上層	壺	胴 19.4	口辺部は強く外反する。頸部で強く屈曲し、なで肩の胴部を持つ。胴中位は屈曲部の接合痕は明瞭。	外面 全体にハケメ後、頸部に11本単位の3連止め←簾状文後、胴上部は9本単位の←波状文を下→上へ4段後、刺突のある円形貼付文を推定6個巡らす。口辺部と胴中部はヘラミガキ。 内面 口辺～頸部はヘラミガキ。胴上部はヘラナデ、接合痕より下はハケメ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	口縁部、胴下半部欠損
769 O-12	小型甕	口 6.2 胴 6.0 底 3.0 高 5.7	積み上げ成形。	外面 体部は粗いヘラミガキ。底面はナデ。 内面 粗いヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 黒色	ほぼ完形
770 L-9	壺	底 11.6		外面 胴下部はハケメ後、ヘラミガキ。底面はナデ。 内面 胴下部はハケメ。底面はナデ。	砂粒混入 極めて堅緻 淡橙色	胴下位～底部
771 D-7	壺	底 14.6		外面 胴下部はハケメ後、ナデ。底面はナデ。 内面 胴下部はハケメ後、底部付近は指ナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	胴下位～底部 内外面に炭化物付着。
772 B-7	壺	底 9.0		外面 胴下部はヘラミガキ。底面はナデ。 内面 胴下部はハケメ。底面はナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄橙色	胴下位～底部 外面に煤と丹付着。
773 C-7	壺	底 10.9		外面 胴下部はヘラナデ。底面はナデ。 内面 胴下部はハケメ後、ナデ。底面はナデ。	砂粒混入 堅緻 褐色	胴下位～底部 内面は剝離している。
774	壺	底 9.0		外面 胴下部はヘラミガキ。底面はナデ。 内面 胴下部はハケメ。底部は指ナデ。	砂粒混入 堅緻 褐色	胴下位～底部
775 C-8 下層	甕	口 13.5	頸部のくびれは緩く、口辺部は大きく外反する。	外面 口辺部はヨコナデ。頸部は等間隔止め←簾状文。胴部はハケメ後、斜行櫛描文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 やや軟弱 赤黒色	口縁～胴上部 $\frac{1}{4}$ 周

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
776 Q-12 トレンチ	甕	口 15.0	口辺部は外反気味に伸びる。頸部の屈曲は弱い。	外面 頸部は7本単位の波状文。口縁端部に2個一組の刻み目が巡る。口辺部はヨコナデ。 内面 口辺～胴部はハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周強 外面に煤付着。
777 Q-12 トレンチ	甕	口 16.0	口辺部は受け口状を呈す。	外面 口辺部は6本単位の不規則な波状文。頸部は6本単位の等間隔止め簾状文。胴上部は6本単位の2段の波状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周 内外面に煤付着。
778 B-9 下層	甕	口 16.0	口縁部はやや内湾する。頸部接合痕明瞭。	外面 口縁部はヨコナデ後、波状文。口辺～頸部はハケメ後、7本単位の等間隔止め←簾状文と波状文。口縁端部は刻み目。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。指オサエ痕あり。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
779	甕	口 18.6	口縁部で内湾する。頸部はやや強く屈曲する。	外面 頸部付近はハケメ後、口辺部はヨコナデ後、口縁部は波状文。口縁端部に細かい刻み目。頸部に13本単位の等間隔止め←簾状文を上→下へ2段後、胴上部に3段以上の波状文を上→下へ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 周 外面に煤付着。
780 O-7 下層	甕	口 15.4 胴 16.0	口縁部でやや内湾する。頸部でやや強くくびれ、中位に最大径を持つ。	外面 全体にハケメ後、口縁部に波状文。頸部に10本単位の等間隔止め←簾状文後、胴部に10本単位の波状文を上→下へ4段。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒色	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 周 内外面に煤付着。
781 J-7、8	甕	口 18.0	口縁部は内側へ短く屈曲し、端部は尖り気味。	外面 口辺部はハケメ後ヨコナデ。頸部は等間隔止め←簾状文。胴上部は波状文。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	微砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周
782 D-9 4C層	甕	口 21.2 胴 20.8 底 8.1 高 23.8	口辺部はやや内湾する。頸部は強く屈曲する。	外面 全体にハケメ後、頸部に9本単位の2連止め←簾状文。口辺部はヨコナデ。口縁端部にヘラ具による刻み目。胴上部、胴中部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。底部はハケメ後ナデ。	3～5mm程の小石を少量含む。 やや堅緻 にぶい橙色	$\frac{1}{4}$ 周 外面はやや荒れている。
783 E-9 4C層	甕	口 14.8 胴 14.4	口辺部は外反する。	外面 口辺部はヨコナデ。頸部は7本単位の等間隔止め簾状文後、胴上部に波状文。胴中部はヘラミガキ。以下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{4}$ 周
784 G-9 4C層	甕	口 11.9	口辺部は内湾する。頸部のくびれ弱い。	外面 全体にハケメ後、頸部に9本単位の等間隔止め→簾状文。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 灰白色	口縁～胴上位 $\frac{1}{4}$ 周弱
785 G-14 4C層	甕	底 5.5	底部は安定している。	外面 胴上位は2連止め←簾状文。胴下部はヘラミガキ。底面はナデ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	胴上位～底部
786 O-13 上層	甕	胴 8.0 底 5.3		外面 肩部は波状文。胴部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 胴部はヘラミガキ。底部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 淡黄色	胴上位～底部 外面一部に丹彩。
787 B-7	甕	胴 10.8 底 6.7	胴部は中位で膨れ、安定した底部を持つ。	外面 全体にハケメ後、頸部に7本単位の2連止め←簾状文。胴上部に5本単位の波状文後、頸上部と胴中部以下にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	頸～底部 内外面部分的に煤付着。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
788 D-9 4 C層	甕	胴 10.2 底 6.6	やや歪んだ器形。	外面 頸部は2連止め←簾状文。胴上部は指ナデ。胴下部はヘラケズリ後、指ナデ。底部ナデ。 内面 ナデで、胴部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 橙色	頸部～底部
789 C-6 下層	甕	口 18.9 胴 26.6	口辺部は長く外反しながら伸びる。	外面 頸～胴部にハケメ後、頸部に11本単位の2連止め←簾状文後、胴上部に11本単位の波状文を上→下へ3段、胴部はヘラミガキ。口縁部はヨコナデ。 内面 全体にハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴下位 $\frac{3}{4}$ 周 外面胴上位付近を除いて煤付着。 内面部分的に炭化物付着。
790 M-7 C層	甕	口 8.6 胴 10.0 高 11.7	口辺部はやや外反気味に立ち上がる。頸部で弱くくびれ、肩部で張る。内面肩部の接合痕明瞭。	外面 頸部に9本単位の2連止め簾状文後、口辺部と胴上部に波状文後、胴中部より下にヘラミガキ。底面はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	2～3mmの小石混入 やや堅緻 淡黄色	$\frac{3}{4}$ 周
791 M-11	甕	口 19.0	口辺部は長く外反しながら伸び、口縁部で折り返される。	外面 折り返し部はヨコナデ後、波状文、頸部に10本単位の2連止め←簾状文の後、8本単位の波状文を上へ3段、下に2段。 内面 ヘラミガキ。	3～4mmの小石を多量に混入 堅緻 淡赤橙色	口縁～頸部 $\frac{3}{4}$ 周強
792 B-7	甕	口 13.6	口縁部はわずかに内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ。口辺～胴上部はヘラミガキ。 内面 口縁部にハケメを残し、口辺～胴上部はヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴上位 外面に煤付着。
793 D-7 下層	台付甕	口 16.6 頸 13.6	口辺部は比較的強く内湾する。頸部の屈曲は比較的強い。	外面 口辺部の貼付文は推定7個、頸部は2連止め←簾状文2段、胴上部は波状文。口辺～頸部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	中～粗砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴上位 $\frac{3}{4}$ 周 全体に煤付着。
794 B-6 下層	台付甕	口 16.2	口縁部は先端が尖って、脇に面を作る。	外面 口縁部脇の面に波状文。貼付文が推定6個。貼付文は肩部にも推定6個付されている。頸部は等間隔止め←簾状文。肩部は波状文。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 明褐色	口縁～頸部 $\frac{3}{4}$ 周 外面に煤付着。
795 O-7 上層	台付甕	口 12.4	口辺部は内湾する。肩部は比較的張らない。口辺部中位に2孔あり。	外面 口辺部はヨコナデ後、口縁部に←波状文。頸部は7本単位の等間隔止め←簾状文後、胴上部に鋸歯文。胴上部～胴中部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 全体に横方向のナデ後、口縁～頸部はヘラミガキ。胴上部～胴下部はヘラミガキ。	2～3mmの小石を混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴中位 $\frac{3}{4}$ 周 外面胴部と内面口辺部、胴一部に赤色丹彩。
796 B-7	台付甕	口 9.8 胴 10.0	口縁部はやや内湾する。頸部の屈曲は弱い。	外面 口辺部はヨコナデ後、波状文。頸～胴上位は8本単位の2連止め←簾状文後、7本単位の←波状文。胴部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ナデ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 暗灰黄色	体部 外面に黒斑あり。
797 Q-12 トレンチ	台付甕	口 13.2 胴 14.2	頸部でのくびれは弱く、胴部は下膨れ。	外面 頸部に10本単位の3連止め←簾状文後、口辺部は6本単位の重なり合う波状文。胴上位は8本単位の2段の波状文後、胴中部にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 黄灰色	口縁～胴中位 $\frac{3}{4}$ 周
798 O-10 4 C層	台付甕	口 13.0 胴 15.1	口辺部は外反する。頸部でやや強く屈曲し、胴は球状に膨れる。	外面 頸部付近はハケメ後、8本単位の←等間隔止め簾状文。胴上部は6本単位の3段の波状文。胴中部は斜行櫛描文。口縁部はヨコナデ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒多量に混入 やや堅緻 にぶい赤褐色	口縁～胴中位 $\frac{3}{4}$ 周 器面は荒れている。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
799 M-7	台付甕	口 13.8 胴 12.6	口辺部は直状に伸び、頸部はやや強く屈曲し、胴上位は膨れ、胴下位は細まる。	外面 全体にハケメ後、頸部は4本単位の2連止め←簾状文後、口辺部は4本単位の下→上へ3段の←波状文。胴上部は重なり合う波状文。胴中部より下はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	胴下位より上残存。
800 C-7 下層	台付甕	口 17.0 胴 18.5	胴部は比較的下膨れであり、器壁は薄い。	外面 口辺部と胴部に貼付文を付す。両部ともに推定6個、頸部は2連止め又は、等間隔止め簾状文。波状文は重なり合って、比較的一単位が短い。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	粗砂粒混入 堅緻 赤灰色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周 外面に煤付着。
801 F-7	台付甕	口 15.9 胴 16.7	折り返し口縁は先端が比較的尖る。	外面 折り返し部、頸部に波状文2段、頸部に3連止め簾状文。胴部2段の波状文。胴下部ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴下位 $\frac{1}{4}$ 周
802 B-6	台付甕	口 14.0	口辺部はわずかに外反、肩部は強く張る。	外面 頸部に11本単位の2連止め←簾状文後、口辺部に10本単位の波状文上→下へ2段、胴部に10本単位の波状文、上→下へ2段後、口縁部と胴上位に推定各7個の円形貼付文。口縁部ヨコナデ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁～胴中位 $\frac{1}{4}$ 周
803 K-6、7 中層	台付甕	口 15.8 胴 19.7	口辺部は短かく直状。胴部は著しく膨れる。頸部に接合痕明瞭。	外面 頸部は2連止め←簾状文。口辺部、胴部は波状文後、推定6個の貼付文。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～胴上位 $\frac{1}{2}$ 周弱
804 C-7	甕の脚 台部	脚 3.3		外面 ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい褐色	煤付着
805	鉢	口 11.6 底 4.2 高 4.7	体部はやや内湾する。底部はわずかに上げ底。	外面 体部は不定方向のヘラミガキ。底部はナデで部分的にヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄褐色	$\frac{1}{4}$ 周 外面 $\frac{1}{2}$ 周
806 C-7 上層	鉢	口 11.5	口縁部は短かく、内湾する。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	微砂粒混入 堅緻 浅黄色	底部欠損 $\frac{1}{4}$ 周
807 M-7	片口	口 9.4 底 3.5 高 8.3	体部は著しく内湾する。底部は平底。	外面 口縁～体中部はヘラミガキ。体下部はヘラナデ。底部はヘラケズリ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	片口部欠損 $\frac{1}{4}$ 周
808 M-7 4C層	鉢	口 15.4	体部はほぼ直状。	外面 体部はヘラミガキ。底部は一定方向のヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	底部中央欠損 $\frac{1}{4}$ 周
809 I・N- 7、8	鉢	口 12.6 底 4.8 高 7.0	器面はやや波状に凹凸が目立つ。器壁は厚い。体部はやや内湾する。	外面 口縁部はヨコナデ。体部はヘラミガキ。底部はナデ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	$\frac{1}{4}$ 周 内面底部は剝離している。
810 M-7	鉢	口 13.0 底 4.2 高 6.7	底部から直状に伸びる。底部は上げ底。やや凹凸が目立つ。	外面 体部～底面はヘラミガキ。 内面 体部～底面はヘラミガキ。	砂粒混入 やや軟弱 にぶい黄褐色	$\frac{1}{4}$ 周弱

17 大溝出土土器観察表

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
811 Q-12 トレンチ	片口	口 12.6 底 5.4 高 7.6	体部はわずかに外反する。	外面 体部はヘラミガキ。底面はナデ。 内面 体部はヘラミガキ。底面はナデ。	砂粒混入 堅緻 橙色	1/2周
812 C-9	鉢	口 5.6 底 2.8 高 2.8	積み上げ成形。	外面 体部は粗いヘラミガキ。底面はナデ。 内面 粗いヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 オリーブ黄色	ほぼ完形
813	甌	底 5.5	底部中央に円孔径1.5cm。周囲に内側から丸棒により径4mmの孔を7個穿つ。	外面 ヘラミガキ。底面は円孔を穿った際の盛り上がり粘土のままで、平坦に調整していない。 内面 ヘラミガキ。	微砂粒混入 堅緻 灰褐色	底部のみ。
814 C-7	片口	口 9.3 底 8.6 高 13.4	器壁は全体に厚い。底部は薄い。	外面 口縁部はヨコナデ。胴部はヘラミガキ。 内面 ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	完形
815 Q-12 トレンチ	高坏	口 12.1 脚 7.5 高 10.7	坏部はわずかに内湾する。脚部はやや中膨らみの八の字状を呈す。	外面 坏部はヘラミガキ。脚部はハケメ後、ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ。脚上部は指ナデ。下部はヘラケズリ。	砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	3/4周 器面は荒れている。
816 M-7	高坏	口 9.8	坏部は直状に伸び、口縁部で強く外反する。脚部は八の字状を呈す。	外面 坏部はヘラミガキ。坏と脚部の接合部はヘラケズリ。脚裾部はハケメ。 内面 坏部はヘラミガキ。脚部はヘラケズリ後、ナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	1/2周強
817 D-8	高坏	脚 10.0	脚部は八の字状を呈す。	外面 ヘラミガキ。 内面 坏部はヘラミガキ。脚部はナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	坏下位～脚部 脚内面を除いて 赤色丹彩あり。
818 C-8 上層	高坏	口 14.4 脚 6.8 高 10.0	坏部は口縁部で強く外反する。脚部は八の字状を呈す。	外面 口縁端部にヘラ刻み。全体にハケメ後、口縁部はヨコナデ。脚部はナデ。 内面 坏部はナデ後、粗いヘラミガキ。脚部はナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	3/4周 坏部と内面に赤色丹彩し、外面所々に丹付着。
819 B-6 下層 241住	不明 壺?	口 28.5	口辺部は著しく外反する。口辺部はやや下に鐮状突帯を巡らす。	外面 口縁部は鐮状突帯の間に2連止め←簾状文。口縁端部と、突帯にはヘラ状具による刻みを巡らす。口辺部はヨコナデ。器面は荒れている。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	1/4周 欠損部の形状不明 外面の器面は荒れている。
820 B-9 上層	壺	口 16.4	口辺部は外側から幅広い粘土帯を付し、複合口縁としている。	外面 複合部はヨコナデ。頸部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ。頸部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 明赤色	口縁～頸部3/4周
821 E-7 4C層	罎	胴 13.2	胴部は接合部が屈曲し、全体にソロバン玉状を呈す。	外面 棒状具によるミガキ。 内面 口辺～頸部はヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 にぶい赤褐色	口辺～胴下位
822 M-9 2B溝	壺	口 17.5 胴 26.7 底 10.7 高 29.4	口辺部は強く外反する。頸部屈曲は強く、胴は球形を呈し、接合部には段や稜を作らない。	外面 口縁部に4箇所、各箇所4本の付文を付す。口縁～頸部はハケメ、ヨコナデ後粗いヘラミガキ。肩部はR無節縄文を4段巡らす。胴部はハケメ後ヘラミガキ。 内面 口辺部は2段の無節縄文。頸部はハケメ後ヘラミガキ。胴部はハケメ。	細砂粒混入 堅緻 淡褐色	ほぼ完形。口縁部の一部に欠損がある。 底部に木葉痕あり。

番号・地点	器種	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	胎土・焼成・色	遺存状態・備考
823 2 B溝	壺	口 10.8 胴 21.3	頸部は比較的細身で頸部屈曲は強い。胴部は球形を呈す。内面肩部に指オサエ痕が巡る。	外面 口辺部はヨコナデ。口辺～胴部は縦ヘラナデ後、棒状具による疎なヘラミガキ。 内面 口辺部はヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	胴下位以下欠損
824 G-7	甕	口 14.5 胴 20.8	胴部に接合痕が目立つ。	外面 口縁部はヨコナデ。頸～胴部はハケメ。 内面 口辺部はハケメ。頸～胴部はヘラナデ。	粗砂粒混入 堅緻 橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
825 G-7	甕	口 16.4 胴 20.5	口辺部は外反する。胴部は中位で膨れる。胴下位の接合痕明瞭。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部は間隔の狭いハケメ。 内面 ハケメ後、ヘラミガキ。	砂粒混入 堅緻 赤灰色	口縁～胴下位 $\frac{1}{2}$ 周強 外面に煤付着。
826 D-9	甕	口 25.7 胴 29.0	口辺部はわずかに内湾気味。頸部は強く屈曲する。	外面 口辺～頸部はヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺～頸部はハケメ。胴部はヘラナデ。	粗砂粒、2～3mmの小石混入 堅緻 浅黄橙色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
827 F-8	甕	口 16.4 胴 21.4	口辺部は比較的強く外反する。頸部、胴部の内面接合痕は明瞭。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部はハケメ後、ナデ。 内面 口縁～胴上部は横方向のナデ。胴中部～胴下部はハケメ。	砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～胴下位 $\frac{1}{4}$ 周 外面胴中部に煤付着。
828 O-13	S字状 口縁甕	口 15.8	肩部内側に接合痕が目立ち、指オサエ痕が巡る。	外面 口辺部はヨコナデ。頸部に一旦短かくハケを当ててから、胴部にハケを引きおろしている。 内面 口辺部はヨコナデ、頸部屈曲部はヘラナデ。胴部は指ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 灰白色	口縁～胴部 $\frac{1}{4}$ 周
829 N-10	S字状 口縁甕	口 23.5	S字状口縁甕の先端部が著しく長く伸びた形状。	外面 口辺部はヨコナデ。頸部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周 一部に煤付着。
830 F-7	S字状 口縁甕	口 12.4	口縁部内側にわずかに平坦な面を作る。頸部はハケ状具により鋭く屈曲。	外面 口辺部はヨコナデ。胴部はハケメ。 内面 口辺部はヨコナデ。頸部はヘラナデ。肩部に指オサエ痕巡る。	細砂粒混入 堅緻 褐灰色	口縁～肩部 $\frac{1}{4}$ 周
831 B-9 下層	罎	口 7.8	口辺部は器壁が先端へしだいに薄くなる。	外面 口辺部はヘラ状具による極めて細い3条の沈線と、連弧を7段巡らす。口辺～頸部は棒状具によるミガキ。 内面 棒状具によるミガキ。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	口縁～頸部 $\frac{1}{4}$ 周
832	罎	口 10.8 高 6.0	口辺部はやや内湾気味。底部は丸底。	外面 口辺部はハケメ後、ヘラミガキ。底部はヘラケズリ。 内面 口辺部はハケメ後、胴上部はヨコナデ。底部はヘラケズリ。	砂粒混入 堅緻 にぶい橙色	$\frac{3}{4}$ 周強
833 C-8 上層	高 罎		罎底部は強く屈曲する。脚部に4孔を穿つ。	外面 ハケメ後、ヘラミガキ。 内面 罎部はヘラミガキ。脚部はヘラナデ。	砂粒混入 堅緻 浅黄色	罎下位～脚上位
834 F-9	器台	口 9.0	器受部は深く口縁部で外反する。脚中位に4孔あり。	外面 ヘラミガキ。器受部～脚部に貫通孔。 内面 器受部はヘラミガキ。脚部はヘラケズリ。	細砂粒混入 堅緻 赤橙色	口縁～脚中位 $\frac{3}{4}$ 周 器面は荒れている。

18 大溝出土ミニチュア土器、土製品観察表 (第20表)

番号・地点	名称	計測値 (cm)	形状・成形	整形	胎土	遺存状態・備考
835 M-9 D溝	ミニチュ ア	胴 3.1 高 4.5	口縁部は片口状、 器面は指頭成形、 歪み著しい。	外面 指オサエ痕のみ。 内面 整形粗い。	微砂粒混入 堅緻 黒褐色	口縁部 $\frac{2}{3}$ 欠損
836 J-7 A溝	ミニチュ ア	口 2.5 高 3.4	口縁部の接合痕は 折り返し状を呈 す。	外面 胴下半部はケズリ痕又は粗いヘラミガ キ。 内面 ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰黄褐色	完形
837 O-11 D・E溝	ミニチュ ア	口 5.5	頸部下に積み上げ 接合箇所あり。歪 み目立つ。	外面 口縁部整形なし。頸部ヘラミガキ。胴部 ハケメ後粗いヘラミガキ。 内面 ハケメ、ナデ。	粗砂粒混入 堅緻 黒褐色	底部欠損、 $\frac{2}{3}$ 周
838 H-7 2 B溝	ミニチュ ア	底 3.5	胴下部、鋭い稜線 を作る。	外面 体部はナデ。底部ケズリ。 内面 ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 黒灰色	底部破片
839 L-7 B溝	ミニチュ ア	底 3.5	底部に指頭痕が巡 る。	外面 指オサエ痕のみ。 内面 指ナデ。	微砂粒混入 やや軟弱 にぶい橙色	底部破片
840 L-10 C溝	ミニチュ ア	口 1.2 高 1.5	指でつまみ成形、 棒状具で中空にす る。	外面 指オサエ痕のみ。 内面 棒状具によるナデ。	微砂粒混入 堅緻 灰色	完形
841 O-11 D・E溝	ミニチュ ア	底 3.3		外面 ハケメ後ヘラミガキ。 内面 ナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 オリーブ黒色	体部上半部欠損
842 M-10 B溝	ミニチュ ア	口 3.1 高 3.3		外面 指ナデ。 内面 ハケメ後一部にミガキ、脚部は指オサエ 痕。	細砂粒混入 堅緻 にぶい黄橙色	器受部 $\frac{1}{2}$ 強欠損
843 E-9 E溝(床)	ミニチュ ア			外面 指ナデ。 内面 脚上部指ナデ、下部ヘラナデ。	細砂粒混入 やや堅緻 にぶい黄色	脚部
844 L-8 2 B溝	ミニチュ ア 高坏	口 5.0 脚 3.9 高 6.4	粘土積み上げ痕明 瞭。	外面 ヘラナデ。 内面 ヘラミガキ、脚部内面ナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰オリーブ色	完形
845 M-10 2 B溝	ミニチュ ア 高坏	口 6.2 脚 4.9 高 6.5	器壁はやや凹凸が 目立つ。粘土積み 上げ成形。	外面 口縁部はヨコナデ。坏部、脚部はハケメ 後丁寧なヘラミガキ。器面は滑沢。 内面 坏部は丁寧なヘラミガキ。脚部はヘラナ デ。	砂粒目立たず 堅緻 明黄褐色	坏部 $\frac{1}{2}$ 周強欠損
846 J-7 A溝	ミニチュ ア	脚 3.7		外面 丁寧なヘラミガキ。 内面 指ナデ。	細砂粒多量混入 堅緻 黄灰色	脚部

番号・地点	名 称	計 測 値 (cm)	形 状 ・ 成 形	整 形	胎 土	遺存状態・備考
847 O-12 B溝	ミニチュ ア	脚 4.8		外面 ハケメ後ヘラミガキ。 内面 ヘラナデ。	細砂粒混入 堅緻 灰褐色	脚部
848 Q-12 トレンチ	さじ	長さ 8.2 (推定)	先端部はややくび れる。基部に2孔 焼成前に穿つ。	外面 丹彩研磨、滑沢。 内面 丹彩研磨、滑沢。	微砂粒混入 堅緻 赤灰色	先端から側部に かけてほぼ片半 部欠損
849 M-9 2 B溝	さじ	幅 4.9	先端部は深くくび れる。	外面 粗いヘラミガキ。 内面 丁寧なナデ。	微砂粒混入 堅緻 灰色	柄部欠損
850 N-10 E溝	さじ		体部接合痕明瞭。 粗雑な作り。	外面 指オサエ痕のみ。 内面 指オサエ痕のみ。	微砂粒混入 堅緻 明黄褐色	身部 $\frac{1}{3}$ 周
851 M-9 C溝	さじ?	底(円) 6.3 幅 3.2	底面は楕円形。粘 土積み上げ痕明 瞭。	外面 比較的丁寧なヘラミガキ。 内面 比較的丁寧なヘラミガキ。	微砂粒混入	口縁部は一部分 遺存する。
852 K-7 2 B溝	柄	径 2.0	柄は二段以上にく びれを作り、端部 は円盤状となる。	ナデ。	粗砂粒多量に混 入 やや軟弱 にぶい橙色	身部欠損
853 E-6 D溝	柄	径 1.7	断面円形。	ナデ。一部にヘラミガキ。	砂粒混入少ない 堅緻 灰褐色	身部欠損

19 大溝出土土製品観察表 (第21表)

遺物 番号	出土地点	名 称	計 測 値 (cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色調	備 考
854	M-10 C溝	紡 錘 車	外径 4.6 孔径 0.7	側辺部は比較的平坦で 縁は角ばる。	器面は丁寧に研かれて 滑沢。	砂粒目立たず 堅緻	灰褐色	$\frac{1}{2}$ 周遺存
855	L-7 B溝	紡 錘 車	外径 5.0	側辺部は比較的平坦で 縁は角ばる。	器面は丁寧に研かれて 滑沢。	砂粒目立たず 堅緻	灰白色	$\frac{1}{2}$ 周弱遺存 中央孔の壁に黒 色付着物あり。
856	J-7 A溝 中層	紡 錘 車	外径 5.0	側辺部は丸い。	器面は丁寧に研かれて 滑沢。	微砂粒混入 堅緻	にぶい 橙色	$\frac{1}{2}$ 周弱遺存
857	G-6 上層	紡 錘 車	外径 5.2	側辺部は比較的平坦で 縁は角ばる。	器面は丁寧に研かれて 滑沢。	砂粒は目立たず 堅緻	にぶい 橙色	$\frac{1}{2}$ 周弱遺存 中央孔の壁に黒 色付着物あり。
858		紡 錘 車	外径 5.2 孔径 0.7	側辺部は比較的平坦。	器面は丁寧に研かれて いる。	砂粒は目立たず 堅緻	褐灰色	$\frac{1}{2}$ 周強
859	M-8 C溝	紡 錘 車	外径 5.8	側辺部はわずかに窪 む。	器面は丁寧に研かれて いる。	砂粒は目立たず やや軟弱	灰黄色	$\frac{1}{2}$ 周遺存 中央孔は擦痕目 立つ。

遺物番号	出土地点	名称	計測値 (cm)	成 形	整 形	胎土・焼成	色調	備 考
860	L-8 2 B溝	紡 錘 車	外径 6.0	側辺部は丸い。	片面に放射状沈線を乱雑に施す。	砂粒は目立たず 堅緻	にぶい 橙色	1/2周遺存
861	F-7 C溝	紡 錘 車	外径 4.5 孔径 0.7	側辺部は平坦で縁は角ばる。	器面は丁寧なナデ。	砂粒は目立たず 堅緻	黄褐色	1/2周強遺存
862	E-7 下層	紡 錘 車	外径 5.0	片平面はやや窪み、他方は膨れている。文様は膨れた方に施される。	側辺部に一列、片平面に二列竹管状具による刺突をめぐらす。	砂粒は目立たず やや軟弱	明灰褐色	1/2周遺存
863	H-6 B溝	紡 錘 車	外径 5.5	両平面とも中央がやや膨らむ。	側辺にヘラ状具による刻み目、片平面には円形刺突を施す。	砂粒目立たず 堅緻	褐灰色	1/2周遺存
864	P-11 E溝	紡 錘 車	外径 4.0 孔径 0.7	縁は角ばる。特に厚い。	器面は全体にナデ。	砂粒目立たず 堅緻	浅黄色	完形
865	M-8 C溝	紡 錘 車	外径 4.8 孔径 0.8	縁は角ばる。	ヘラ状具により全体に磨かれる。	砂粒目立たず 堅緻	にぶい 黄橙色	完形
866	N-11 C溝	紡 錘 車	外径 5.0 孔径 0.7	縁は角ばり、両平面とも中央がやや膨れる。	ヘラ状具により全体に磨かれている。	細砂粒混入 堅緻	黒色	完形 全体に煤付着。
867	K-6 2 B溝 中層	紡 錘 車	外径 5.0 孔径 0.6	径に比べ薄い。縁は丸い。	両平面とも指オサエ痕が全体に目立つ。	砂粒目立たず 堅緻	灰黄褐色	完形
868	L-8 C溝	土 錘	外径(大) 3.5 (小) 2.0 長さ 4.3	中央孔は正円、直状。	器面は全体に丁寧なヘラミガキで滑沢。	砂粒目立たず 堅緻	暗赤灰色	完形 中央孔壁には軸棒状具の焼成後擦痕らしきものあり。
869	N-9 D溝	土 錘	長さ 5.2	弥生土器破片を両加工、両側辺をV字状に抉る。	外面 ハケメ。 内面 ヘラミガキ。	細砂粒混入 堅緻	灰黄色	完形
870	M-7	不 明	長径 4.7	弥生土器破片を楕円形に磨り減らす。	両面とも丁寧なヘラミガキ。	細砂混入 堅緻	黒灰色	完形
871	L-8 C・D溝	紡 錘 車	径 4.1	弥生土器破片を再加工。	外面 ハケメ後ヘラミガキ。 内面 ハケメ。	砂粒の混入目立つ 堅緻	灰黄色	完形

20 大溝出土玉類観察表 (第22表)

遺物番号	出土地点	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材 質	遺存状態 備 考
872	M-8、9	勾玉	2.6	0.9	1.3	0.2	孔は細棒を刺して穿つ。	指オサエ痕による凹凸目立つ。	土	完形
873	F-7 B溝	勾玉	3.4	1.3	1.5	0.3	腹部断面はほぼ円型、頭、尾部は丸い。	丁寧なヘラミガキ。	土	完形
874	D-7 上層	勾玉	3.6	1.2	1.3	0.2	腹部断面は円形、頭、尾部は丸い。	ナデ。	土	完形
875	K-7 C溝	勾玉	3.4	1.3	1.5	0.25	尾部は丸くやや尖り気味。	ヘラナデ。	土	完形

遺物番号	出土地点	名称	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	成 形	整 形	材 質	遺存状態 備 考
876	L-8 C溝	勾玉	4.1	1.1	1.2	0.25	体部断面は丸く、頭、尾部は丸く細まる。	丁寧なナデ。	土	完形
877	K-7 B溝	勾玉	4.1	1.3	1.6	0.5	断面はややカマボコ状。頭、尾部はやや角ばる。	ヘラミガキ。	土	完形
878	M-8 2 B溝	勾玉	3.3	1.5	1.8	0.4	断面はややカマボコ状。	粗いヘラミガキ。	土	完形
879	N-11 B溝	勾玉		1.3	1.9	0.4	頭部はやや平たく角ばる。	粗いナデ。	土	尾部欠損
880	B-7 下層	勾玉		1.2	1.3		尾部は丸く尖る。	指オサエ痕による凹凸目立つ。	土	頭部欠損
881	K-9 A溝	勾玉		1.5	1.8		断面はややカマボコ状。	ナデ。	土	頭部欠損
882		勾玉		1.25	1.3		作りは粗い。	指オサエ痕による凹凸目立つ。	土	頭部欠損
883	N-9 2 B溝	勾玉		1.7	2.1		断面は腹部が平らな扁平。	粗いヘラナデ。	土	頭、尾部欠損
884	M-8 D溝	勾玉	2.45	1.0	0.9	0.3	形状はやや整わない。	面は滑沢。		完形
885	P-12 C溝	勾玉	3.4	1.4	0.7	0.2	孔は両側ともV字状。全体に薄く、両面とも平坦。	面は滑沢でない。		完形
886	O-12 C溝	勾玉	3.4	1.1	0.5	0.2	全体に薄く、頭、尾端の平面形は比較的直状。	表面は石の節理による凹凸が目立つ。		完形
887	N-9 D溝	勾玉	4.3	0.9	1.1	0.4	石材の形により、頭部の厚味は一定でない。研磨成形面が良く残っている。	全体に丁寧に研磨されている。面は滑沢。		完形
888	M-11 E溝	勾玉	3.8	1.6	1.4	0.2	頭端部は強い稜を持ち、面を作る。孔は両側よりV字状に穿孔。	全体に磨かれる。頭、腹部に成形時の擦痕が残る。		完形
889	E-7 B溝	小玉		0.6		0.15	形は整わないが、孔は正円直状に整っている。	石の自然目を若干磨いた状態。		完形
890	I-7 2 B溝	小玉		0.8		0.2	両面の孔の周囲には整った平面を作る。円周部に研磨成形面を作る。	全体に丁寧に研磨されて滑沢。	ガラス	完形 コバルト青色
891	N-9 2 B溝	小玉		1.4		0.4	穿孔後の歪み(つぶれ)がある。	整形痕は面が荒れて不明。	土	完形 一部に丹彩残る。
892	H-8 F溝	小玉		1.5		0.3	孔は方形状。	面は滑らかに調整される。	土	完形
893	L-9 B溝	小玉		1.8		0.25		面は滑らかに調整される。	土	完形
894	H-6 A溝	管玉	2.0	0.5		0.2	正円柱形。	面は丁寧に磨かれ滑沢。		完形
895	H-6 A溝	管玉	2.1	0.6		0.2	研磨成形面が縦方向に強い稜線を伴って見られる。	比較的粗い擦痕が縦又は横方向に走っている。		完形

21 大溝出土銅製品観察表 (第23表)

遺物番号	出土地点	名称	環径 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状	材質	遺存状態・備考
896	J-6 2B溝 中層	銅 釧		0.4	0.1	環の断面形は、内側中央部がやや膨らむ。片側辺に面を作る。端部は一方はほぼ直状に切れ、他方は粗くささくれている。	銅	全体に錆びている。約 $\frac{1}{6}$ 周遺存
897	F-7 D溝 下層	銅 釧	4.5	0.45	0.1	環の形状はやや歪んでいる。環の断面形は片凸刃状をなす。片側辺は面を作る。両端部は切断痕が明瞭でないが一方は直状、他方は粗くささくれている。	銅	全体に錆びている。約 $\frac{1}{6}$ 周

22 大溝出土石器観察表 (第24表)

番号	器種	溝・グリッド	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
901	打製石鏃	B-7	(21.0)×13.0×4.0	頁岩	0.8	両面調整の有茎鏃。二等辺三角形の鏃身をもつ。基部は途中でおれる。
902	打製石鏃	B-8	(26.0)×14.0×5.5	チャート	1.8	両面調整の無茎鏃。二等辺三角形の鏃身をもつ。先端部を欠く。
903	打製石鏃	D-8	28.0×14.0×5.0	頁岩	1.5	両面調整の有茎鏃。二等辺三角形の鏃身をもつ。先端は尖らせず一方より細かな調整を入れ、円味をもったつくりとなる。
904	打製石鏃	C-8	(25.5)×17.0×4.3	頁岩	1.8	両面調整の無茎鏃。二等辺三角形の鏃身をもつ。基部はややわたくりが入る。
905	打製石鏃	2 B溝 M-10	(31.0)×(10.0)×4.0	頁岩?	1.1	先端近くで肩をもつ両面調整の石鏃。基部を欠く。
906	打製石鏃	2 B溝 O-10	21.0×15.0×4.0	チャート	1.0	鋭い先端をもち両側縁は円味をもって作出される。基部は尖った脚をもつわたくりのあるもの。両面調整。
907	打製石鏃	C溝 I-7	(24.5)×15.5×4.5	珩質頁岩	1.2	鋭い先端をもつ。円味をもった基部から茎部へとつづく両面調整のもの。
908	打製石鏃	D溝 G-7	(19.0)×(9.0)×3.0	チャート	0.5	細身の両面調整石鏃の先端部分。基部を欠く。鏃身の両側縁は直線的につくられる。
909	打製石鏃	C溝 O-11	(22.0)×(12.0)×5.0	頁岩	0.9	鋭い先端をもち角をもつ基部から直線的に茎部へとつづくダイヤ形のもの。両面調整。
910	打製石鏃	D・E溝 K-8	(28.0)×22.0×4.5	チャート	2.3	両面調整でわたくりの深い鏃。側縁は直線的であり、先端を欠く。
911	打製石鏃	2 B溝 I-6	30.2×14.6×4.6	チャート	2.0	先端近くで肩をもつ両面調整の無茎鏃。肩から下の両側は平行して垂下するつくり。基部はわたくりが入る。
912	打製石鏃	E溝 O-11	(27.0)×13.0×3.5	頁岩	1.0	先端近くで肩をもつ両面調整の石鏃。片面には大きな剝離面がのこる。基部を欠く。
913	打製石鏃	D-44	18.8×17.8×3.7	チャート	1.1	両面調整の無茎鏃。正三角形にちかい平面形の鏃身。基部はゆるく内湾する。先端から両側に微調整。
914	打製石鏃		(19.5)×16.1×4.4	珩質頁岩	1.3	両面調整の無茎鏃。先端部を欠く。基部にわたくりがはいる。
915	石槍	D・E溝 O-11	58.0×15.0×6.5	チャート	4.7	両面調整の柳葉形石槍。全体に摩滅しており部分的に剝離が明確に見えないところあり。厚手のつくり。
916	石槍	E溝 床	42.5×18.0×7.0	頁岩	5.8	両面調整の石槍。基部は厚手につくられる。また一端くびれ気味になったあとやや広がり、平基となるつくり。
917	磨製石鏃	B-7	27.3×18.6×1.8	珩質準片岩	1.0	無茎で扁平に磨きあげたもの。先端部は中央付近に、途中から両脚にかけ稜をもったつくり。平面形は丸い肩をもつ細身のつくりでわたくりが深くはいる。中央部下よりに円孔が両側からあけられる。
918	磨製石鏃	2 B溝 H-6	40.4×19.7×2.0	珩質準片岩	2.1	無茎で扁平に磨きあげたもの。周縁に平行して稜がみられる。平面形は肩をもった五角形に近いもので、基部にはわたくりがはいる。
919	磨製石鏃	2 B溝 O-10	48.9×15.0×1.7	珩質準片岩	1.3	無茎で扁平に磨きあげたもの。周縁に平行して稜がみられる。平面形は肩をもった五角形の細身のもので、基部にわたくりがはいる。中央部下位に両面から円孔があけられる。

22 大溝出土石器観察表

番号	器種	溝・グリップ	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
921	磨製石鏃	D・E溝 M-10	28.6×19.6×1.8	頁岩	1.3	無茎で扁平に磨かれたもの。周縁に平行して稜がみられる。平面形は三角形に近い形で、両側縁は円味をもたせてある。基部にはわたくりがある。中央部に両面から円孔がけられる。
922	磨製石鏃	2 B溝 N-11	23.9×16.0×2.5	珩質準片岩	1.3	無茎で扁平に磨かれたもの。稜ははっきりとはみることができない。平面形は肩をもった五角形である。基部は平坦なつくり。中央部下位に両面から円孔がけられる。
923	磨製石鏃	F溝 N-9	26.9×19.2×1.6	珩質準片岩	1.1	無茎で扁平に磨かれたもの。周縁に平行して稜がつく。平面形は三角形に近い形で、やや肩をもつ。基部にはわたくりがある。
924	磨製石鏃	大溝C P 下砂層	24.4×13.0×2.0	珩質準片岩	0.9	無茎で扁平なもの。あまり明瞭ではないが、周縁にそって稜がみられる。平面形は先端がとがり、肩のはるつくりで五角形に近い。基部にわたくりがある。
925	磨製石鏃	C溝 J-7	37.7×22.0×2.7	珩質準片岩	3.4	無茎で扁平なもの。周縁に沿って稜がみられる。平面形は両側縁が円味をもった三角形に近いつくり。わたくりが深く入り、一脚が欠けている。
926	磨製石鏃	D-8	(27.7)×(24.0)×2.3	頁岩	1.3	無茎で扁平な仕上がりに。周縁に沿って稜がみられる。平面形は三角形に近いものであろうが、先端部と基部の半分を欠いている。中央部下位に両面から円孔がけられている。
927	磨製石鏃	F溝 N-9	(14.6)×21.4×2.0	珩質準片岩	0.9	無茎で扁平なつくり。周縁に沿って稜をもつもの。平面形は三角形に近いものであろうが、先端から上半部を欠いている。基部にはわたくりが入る。中央部下位に両面から円孔がけられる。
928	磨製石鏃	C溝 I-9	(27.6)×20.7×2.1	珩質準片岩	2.0	扁平なつくりで、周縁に沿って稜をもつもの。下半部を欠いている。平面形は先端から円味をもって肩部へと移行し、垂直に下がる両側縁をもつもの。中央部下位に両面から円孔がけられる。
929	磨製石鏃	C溝 I-7	(21.2)×13.4×2.1	珩質準片岩	0.8	無茎で扁平なつくり。稜は基部近くは明瞭であるが、他ははっきりしない。平面形は三角形に近いもので両側縁は円味もっている。基部にわたくりあり。中央部下位に両面から円孔がけられる。
930	磨製石鏃	D溝 M-8	36.8×22.4×2.6	珩質準片岩	3.4	無茎で扁平なつくり。稜はほとんどみられない。平面形は三角形に近いものであるが、一側縁は肩がやや張るようなつくり。基部にはわたくりがある。中央部下位に一面からかたよって円孔がけられる。
931	刃器	C溝 C-11	75.8×70.7×11.1	頁岩(黒色頁岩)	67.8	剝離面が切り合っている剝片を素材とする。下縁に両面から大きな剝離によって刃部を作出したもの。
932	刃器	C溝 N-11	55.0×33.9×11.2 44.6(刃)	珩質頁岩	22.9	縦長剝片。背面は自然面。一側縁に大きく調整が入る。一側縁は下半に使用による細かな剝離が見られる。
933	刃器	C溝 O-12	46.9×47.8×14.2 49.5(刃)	頁岩	31.0	縦長剝片。背面は自然面。一側縁に細かな剝離がみられる。打面の一縁にも剝離がある。
934	刃器	C溝 O-12	45.0×57.7×12.0 41.8(刃)	珩質頁岩	31.8	横長剝片。自然面打面の剝片で端部はヒンジをおこしている。その部分に細かな剝離がみられる。
935	刃器	D溝 M-9	75.0×48.0×22.4 41.5(刃)	珩質頁岩	68.1	縦長剝片。バルブの高まりが大きく一側縁に細かな剝離が認められる。

番号	器種	溝・グリッド	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
936	刃器	E溝 O-11	69.3×52.4×7.2 47.8(刃)	黒色頁岩	33.3	縦長剥片。自然面打面。両側に細かな剥離がみられる。
937	刃器	C溝 P-12	76.6×75.9×16.7 40.4(刃)	頁岩	86.8	背面に自然面を残す。使用によると思われる細かな剥離が端部に残る。
938	刃器	E溝 G-8	59.8×28.8×8.8 50.5(刃)	頁岩	15.8	縦長剥片。自然面打面。一側縁に腹面側からの細かな剥離がみられる。
939	刃器	D溝 N-9	47.2×78.7×15.8 71.3+20.4(刃)	珪質頁岩	54.4	横長剥片。剥離面打面。端部に細かな剥離が残される。
940	刃器	D溝 K-7	34.1×49.6×9.1 43.5+25.0(刃)	珪質頁岩	13.5	横長剥片。頂部及び端部に剥離が施され、二つの刃部が作出される。
941	刃器	D・E溝 L-9	42.8×69.6×13.0 42.4+18.7+26.7(刃)	黒色安山岩?	36.5	横長剥片。複数剥離面打面。端部、頂部、一側縁に刃部をつくる。刃部はノッチ状になっており、ポリッシュもみられる。
942	刃器		63.1×39.4×10.6	頁岩	30.7	縦長剥片。剥離面打面。背面に自然面を残す。一側縁に細かな剥離が残されており刃部となっている。
943	刃器	C溝 N-10	45.6×50.7×12.4 45.6(刃)	珪質頁岩	26.4	横長剥片。一側縁に調整が入り、端部はヒンジをおこしており、それを利用した傷が残っている。
944	打製土掘具	C溝 P-12	(56.9)×47.2×14.0	緑色準片岩	59.7	上下端を欠く。横剥ぎの大形剥片を素材としている。両側に丁寧な調整が施される。
945	刃器	D・E溝 N-11	48.6×56.0×8.9 68.9(刃)	珪質頁岩	28.3	横長剥片。端部から一側縁にかけてのフェザーカットの縁辺に細かな剥離が入る。
947	刃器	C溝 N-11	60.7×61.9×15.5	頁岩 (黒色頁岩)	73.8	磨製石斧の転用品、片面から側縁の部分に磨面が残る。割れ面に細かな加工を施し刃部を作出。
948	刃器	2 B溝 M-9	45.2×52.1×20.4 42.0(刃)	頁岩	43.3	横長剥片。端部に使用による細かな剥離が見られる。稜上加撃による剥片を素材としている。
949	刃器	C溝 N-9	59.0×55.2×11.2 49.0(刃)	珪質頁岩	41.5	縦長剥片の端部に、使用による剥離がある。更に、その部分にはポリッシュも見られる。
950	刃器	C溝	46.7×51.3×8.1 24.5(刃)	珪質頁岩	18.1	横長剥片の一側縁にノッチ状加工が入る。剥離面打面。剥片端部はステップである。
951	刃器	B溝 O-12	66.7×91.0×15.8 49.0(刃)	頁岩	90.4	横長剥片。端部および側縁部に細かな剥離がある。端部に自然面を残す。
952	刃器	E溝 G-8	26.1×47.8×10.1 37.4(刃)	頁岩	10.4	横長剥片。自然面打面。端部に細かな剥離が残される。
953	刃器	D溝 N-11	46.8×32.4×9.6 43.5(刃)	珪質頁岩	15.5	縦長剥片。打面は自然面打面。一側縁に調整が入る。
954	刃器	D溝 M-9	74.8×59.8×15.2 57.9(刃)	黒色安山岩	73.5	縦長剥片。打面は自然面打面。一側縁と端縁に細かな剥離がみられる。
955	刃器	E溝 O-11	58.3×57.1×12.3 49.4(刃)	頁岩	38.6	縦長剥片。背面に自然面を残す。一側縁に細かな剥離がみられる。

番号	器種	溝・グリッド	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
956	刃器	D・E溝 K-8	41.3×32.7×1.1	ガラス?	15.0	縦長剥片。剥離面打面。一側縁に微細な剥離がみられ、刃部を作出している。
957	刃器	C・D溝 N-11	35.3×59.8×15.6 40.4(刃)	頁岩	30.6	横長剥片。背面に自然面が残る。刃部は端縁に見られ、細かな剥離が自然面から入っている。
958	刃器	C溝 O-10	31.3×49.9×10.6 46.8(刃)	珪質頁岩	16.5	横長剥片。背面には自然面がある。端部に自然面の方から細かな剥離がみられる。
959	刃器	B-6	37.5×55.0×15.5 35.2(刃)	珪質頁岩	18.3	横長剥片の端部の細かな剥離が見られるもの。自然面打面を大きく残す。
960	刃器	C・D溝 O-11	30.0×55.0×5.0 36.0(刃)	頁岩	64.3	横長剥片の頂部、端部に調整が加えられている。
961	刃器	C-6	83.6×45.6×25.4 75.0(刃)	黒色頁岩	9.7	縦長剥片、複数剥離面打面。一側縁に細かな剥離が長くみられる。この縁辺にはポリッシュも見られる。
962	刃器	C溝 B-9	34.0×49.8×7.0 28.0(刃)	頁岩	9.9	横長剥片。端部にはポリッシュ。平面三角形の両斜辺に調整が入る。端辺一端にノッチ。
963	刃器	C溝 C-8	72.8×53.3×15.2 46.4(刃)	珪質頁岩	47.9	縦長剥片。背面には大きく自然面が残る。調整はほとんどみられないが、端部には細かな剥離がある。
964	刃器	C溝 P-12	41.6×60.6×11.2 46.8(刃)	頁岩	24.9	横長剥片。打面は複数の剥離面から成る稜線上を打点とする。背面の端部近くに自然面を残す。端縁に剥離が入る。
965	刃器	C・D溝 K-8	41.5×62.2×11.5 43.0+37.6(刃)	頁岩	38.8	横長剥片の頂部、端部に調整が見られる。自然面打面を大きく残す。
966	刃器	A溝 K,L-8,9	80.0×39.9×15.6 78.9(刃)	頁岩	26.6	縦長剥片。自然面打面。一側縁に刃部を作出。刃部は5つのノッチを有する。一側縁下部にも細かな剥離がみえる。
967	刃器	C溝 O-12	36.7×68.6×12.0 27.4(刃)	珪質頁岩	34.1	横長剥片。背面は自然面が大きく残される。端部は折断され一側縁に刃部が作出されるが、短く幅狭となっている。
968	刃器	2B溝 M-9	39.5×40.8×8.5 31.5+30.0(刃)	頁岩	12.3	縦長剥片の端部を取り平面三角形にして、全周に調整を施したものの。
969	刃器	D・E溝 O-10	62.5×80.0×22.3	頁岩	99.6	横長剥片。自然面打面。背面は礫面のみであり、母岩からの最初の剥離によるもの。端部に微細な剥離。
970	刃器		33.8×27.8×8.1	黒色頁岩	8.6	縦長剥片。剥離面打面。両側縁ともに微細な剥離がみられる。剥離は側縁下半に集中する。
971	刃器		21.6×48.6×6.8	珪質頁岩	6.4	横長剥片。剥片端部に剥離がみられる。加工は両面から施される。
972	礫器		62.9×58.4×23.1	頁岩	106.5	扁平な円礫の周縁に打ちかきを加え、刃部を作出したもの。加工は片面に集中する傾向がある。
973	打製土掘具	D・E溝 O-10	55.9×40.5×10.7	頁岩	26.2	横長の大型の剥片を素材としたもの。幅狭な一側縁を刃部としている。石器の両側縁に加工が集中するが、刃部を作出するような加工は少ない。上半部を欠いている。
974	粘板岩片素材	C溝 H-7	49.6×59.9×3.8	珪質準片岩	15.6	磨製石鏃の素材となるものか、薄くはがした剥片である。厚味は一定で、大きさも石鏃にするのにわいている。
975	粘板岩片素材	C溝 N-9	27.4×36.7×4.2	頁岩	7.4	磨製石鏃の素材となるものが薄くはがしたものの。厚味は一定で、大きさも石鏃とほぼ同じもの。

番号	器種	溝・グリッド	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
976	小形磨製石斧	D-8	32.8×20.2×8.1 17.4(刃)	蛇紋岩	9.0	ノミ状の扁平な石斧。刃部は強弱両凸形で、平面形は円味をもち下面形は湾曲する。両側縁は直線的なつくりである。斧頂部を欠く。
977	棒状砥石	B溝 K-8	(34.3)×26.4×19.3	砂岩	15.7	棒状の砥石で、身の部分に所々稜線がみられる。一端は欠損しているが、残っている端部は環状に平坦な部分をもたせ、その中央に突起部を作出してある。
978	砥石		62.3×48.6×9.1	砂岩	44.8	扁平で平面方形をなす。縁辺部は平坦な稜をもたせたつくりである。擦痕は一つの方向性をもって器面両面に残されている。
979	凹石砥石	B-6	(44.0)×53.3×12.6	緑色片岩	53.5	両面にくぼみあり。中央部からの半欠品でくぼみのところが折れている。くぼみは打撃によるもの。砥石になる。
980	打製土掘具	E溝 G-8	22.9×10.2×2.2 9.6(刃)	角閃岩 安山岩	619.3	大形礫より横打ちして剥出した半載礫片を素材としている。片面は礫面。両側縁の調整は丁寧で頭部は簡単である。
981	打製土掘具	B-6	8.5×4.9×1.4 3.9(刃)	黒色頁岩	77.4	片面は礫面が残る。一側縁と端部に調整が入り、頂部には大きく打面が残されている。
982	打製土掘具	D-7	(10.0)×4.8×2.1	頁岩	124.7	両側を丁寧に調整した両面加工品。側面形はゆるやかに湾曲している。刃部を欠く。
983	打製土掘具	F溝 H-7	22.9×10.2×2.2 9.6(刃)	輝石安山岩 (粗粒)	718.5	大型礫より横打して剥出した礫片を素材とする。片面は礫面である。両側は丁寧な加工が施されるが、刃部には簡単な加工がみられるのみである。
984	打製土掘具	C溝 L-8	115.1×59.1×18.1	頁岩	141.4	片面は礫面が残る。両側縁には調整が入り、撥形となる。刃部は打ち割った面そのまま、刃を作出する加工はみられない。素材は大型礫を横打して得たもの。
985	刃器	C溝 G-7	99.8×45.8×13.3	珪質頁岩	91.0	扁平な礫の長軸に平行する形で両側に刃部を作出したもの。加撃は一面にのみ集中する。
986	砥石	D溝 L-7	59.2×66.6×13.1	砂岩	62.9	扁平な砥石で、角の部分をも利用したものか、幅狭な磨石が二面みられる。
987	砥石	O-7	66.3×(48.4)×11.8	砂岩	39.9	扁平な礫の両面が磨滅している。周縁には打痕が残り、両端が欠けている。
988	石核	B溝 K-7	47.2×88.6×10.4	珪質頁岩	67.4	磨製石鏃の素材を薄く剥ぎ取った石核と思われる。薄い剥離のあとが見られる。縁辺は磨かれたようになる。
989	砥石	CD溝 N-11	85.7×47.2×11.6	砂岩	65.8	扁平で平面長方形の砥石。縁辺部も面どりされており、全面がりに用いられたものである。磨痕の方向は一定せず。
990	砥石	D溝 B-8	56.7×46.8×12.6	砂岩	42.0	扁平で平面長方形の砥石。縁辺部は一側縁に磨面がみられるが、他は打ちかかれたままである。
991	砥石	C-8	66.3×(48.4)×11.8	安山岩 質凝灰岩	9.5	軟質の石を扁平に磨き上げ、平面長方形に仕上げたもの。横位に削痕が入る。
992	打ち欠き石錘	E-7	(9.5)×(7.5)×(4.6)	砂岩	58.8	1/3ほどの断欠品。扁平な礫に打ち欠きを入れたもの。打ち欠きは両面にみられる。
994	磨製石斧	B-10	(9.5)×(7.5)×4.6	輝緑岩	502.2	大形蛤刃石斧の断欠品。縁辺部には製作時以外の敲打痕が見られる。頭部、刃部を欠く。斧柄に納まっていた部分。

22 大溝出土石器観察表

番号	器種	溝・グリッド	計測値(mm)	石質	重量(g)	特徴
995	凹石	C・D溝 N-10	128.5×89.0×28.1	流紋岩 質変質岩	509.6	扁平な円礫の両面にくぼみを有するもの。側縁部には打痕が残される。炭化物が付着している。
996	敲石	E-8	91.1×67.9×48.0	輝石安山岩 (粗粒)	491.1	円礫の一端に打痕が残される。側縁部には打痕は残らず端部のみが用いられたもの。他の端部は欠けている。
997	凹石		(63.8)×53.5×39.4	輝石安山岩 (粗粒)	217.6	円礫の一面に打痕がみられる。半欠品であるが、端部には敲いたあとも残り、敲石としても使われたもの。
998	凹石	C溝 O-11	(10.9)×13.8×6.1	砂岩	88.8	両面に凹みがひとつづつみられる。中央部からの半欠品なので、凹の位置にかたよがりがあるところから、本来のくぼみは2～3個づつあったと考えられる。周縁部に打痕あり、断面部分に炭化物が付着している。
999	砥石	B-9	88.7×36.8×28.8	輝石安山岩 (粗粒)	383.0	断面蒲鉾形の礫で、平坦な面が作業面となっている。中央にはさらに砥溝が残される。
1000	敲石	B-6	123.0×49.7×36.0	輝石安山岩 (粗粒)	1142.7	長円礫の両端及び幅狭の縁辺部に打痕がみられる。
1001	凹石	A溝	14.6×12.2×3.5	変質安山岩	970.3	両面に浅い凹があるが、一面には別に凹がある。周縁には打痕が大きく残される。赤色顔料が付着する部分、炭化物が付着する部分がある。
1002	礫器	C-7	88.2×140.0×37.3	頁岩	433.0	片面は自然面。横長にとられた半礫の端部に加工が施される。その部分が刃部となったもの。
1003	礫器	D溝 N-9	94.9×80.0×32.7 94.9(刃)	緑色片岩	250.0	片面は自然面。横長分割。粗い打ち割り面が残される剥片で、端部に調整が入る。
1004	石核	B溝 L-11	69.5×87.8×19.1	頁岩	145.9	半割礫の剥離面を打面とし、浅い角度で短かい剥片を取っていった石核の残核。剥離は全周から施される。
1005	刃器	E溝 M-10	76.0×95.3×35.3 95.3(刃)	輝石安山岩 (粗粒)	207.9	大形の礫から横長の剥片を取ったもので、片面に自然面を残している。端部に加工を施し刃部としたもの。
1006	打製 土掘具	C-8	(71.8)×80.6×26.0	ひん岩	192.8	片面に自然面を残す。横割ぎの半礫を素材とし、頂縁部に加工を施し、端部には刃部を作出したもの。半欠品。
1007	石核	F溝 I-9	91.2×95.1×26.9	珩質頁岩	280.8	円盤状の形で全周より浅い角度で剥離作業が行なわれたことを示している。
1008	凹石	C-9	(89.9)×52.1×24.8	雲母石英 片岩	198.1	扁平な礫の縁辺部に打痕がみられる。一端は欠損して、5/4程の残欠品。一面に凹が3つ浅くみられる。
1009	凹石	D-8	84.8×57.9×28.2	輝石安山岩 (粗粒)	220.4	扁平な礫の一面に凹がみられる。両端は加撃による剥離が残り、敲石としても用いられたものらしい。

新保遺跡Ⅰ

弥生・古墳時代大溝編

《本文編》

一関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第10集一

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

発行／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

電話(0272)23-1111

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社